

一般国道  
210号線 浮羽バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

第 1 集

つかんどう  
塚 堂 遺 跡 I

福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査

1 9 8 3

福岡県教育委員会

# 塚 堂 遺 跡 I

福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査

## 序

『浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集が刊行の運びとなりました。

この報告書は、福岡県教育委員会が建設省から委託を受けて、一般国道210号線浮羽地区バイパス建設に伴い、1978年度から実施をしている文化財の調査記録であります。

今回の報告は、このなかで79・81年度に塚堂古墳・塚堂遺跡の課査成果の一部を「塚堂遺跡Ⅰ」としてまとめたものであります。

本書が、文化財への親しみと活用に御利用いただければ幸甚に存じます。

発刊にあたり、調査に御協力いただいた地元の方々、吉井町教育委員会、建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所に心からお礼申し上げます。

1983年 3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友野 隆

## 例 言

1. 本書は、1979年度から1981年度にかけて、福岡県教育委員会が建設省から委託を受けて、一般国道210号線浮羽バイパス建設に伴い破壊される埋蔵文化財の発掘調査を実施した第1冊目の報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、福岡県浮羽郡吉井町所在の塚堂遺跡で、バイパス建設地内の塚堂古墳とB・C地区と共に、近接するB北地区・塚堂古墳東地区を含め、『塚堂遺跡 I』として報告するものである。
3. 本書の報第分担は下記のとおりである。

第1章	馬田 弘稔
第2章	〃
第3章	金子 文夫 石山 勲
第4章	馬田 弘稔
第5章	〃 (一部)小池 史哲
第6章	〃
第7章	新原 正典
第8章	(分担)馬田 弘稔 (〃)小池 史哲

4. 遺物の整理は、各担当者の外に県立九州歴史資料館で、県教育委員会文化課嘱託 岩瀬正信の指導のもとに、整理作業塚堂班員の有馬信子・高橋アイ子・竹田スミ子・平石史子があたった。また、図面作成においては、各担当者の外に、平田晴美・豊福弥生・須山富子・手柴淳子があたり、遺物写真の撮影においては、県立九州歴史資料館、石丸洋主任技師・平島美代子があたった。

なお、遺物の撮影は各担当者によるもので、実測図の作成および製図・表作成については、挿図目次・表目次に示すとおりである。

5. B（溝状遺構を除く）・C地区出土で縄文土器を除く土器については、実測番号を3桁の001番から順次使用し、出土状態実測図中の出土番号・出土位置を共に土器・実測原図中に註記して、遺物台帳を作成した。

実測番号は、遺構別に連続することを原則としたが、復原作業の進行上これが徹底しなかったために、台帳では、各遺構別に新たに地区名・遺構名と共に01番から2桁の土器番号を、前記3桁の実測番号の前に付して、各遺構内で何個体の実測をしたかを明らかにし、都合5桁の番号とした。

6. 遺構・遺物の実測図・写真および遺物の保管は、現在『県立九州歴史資料館』であたっている。

なお、遺物の収納については、実測済みの土器では前記台帳にしたがって、例えばB地区1号住居跡では12番目・今回報告のB・B北・C地区全体では131番目に実測した、体部高13.0cm以上を測る、本文中第57図-26の甑は、『B1住-26131』と記入した7.0×10.0cm大のカードを付して、プラスチック製青色パンコンテナ（横×縦×深：39.5×58.6×28.4cm）に収納している。この際、コンテナ前（横）面には、ビニール製粘着テープ（5.0×15.0cm）を貼り、『塚堂B地区1号住・測済・写済』と標記している〔大形の土器〕。

また、体高13.0cm以下を測る、本文中第106図-23の杯は、同様に記入してプラスチック製黄色パンコンテナ（同39.7×60.9×14.9cm）に収納し、『塚堂C地区1号住・測済・写済』と標記した粘着テープを貼っている〔中形・小形の土器〕。

7. 溝状遺構を除くB・C地区出土遺物の色調の本文中説明にあたっては、『Today's COLOR/300』 日本色彩社（編著） 香取千尋（発行者）の色名帳を使用し、色名帳記載の連続番号1～300色中の何番目の番号であるかを当初に記し、一般色名の和名・（マンセル記号）の順で、色調は器内59明るい茶色（3.0YR 5.5/4.0）・器外63明るい茶色（3.5YR 5.5/4.0）・器肉73黄茶色（5.0YR 5.0/5.0）等と記した。

上記例では、一般色名は59・63共に同一色名に属するが、通例報告書流に記せば、59は淡茶褐色・63は橙褐色・73は茶褐色となるようである。

なお、蛇足ではあるが、(マンセル記号) 標記では、59では3.0YRは色相を示し、YはYellow(黄)・Rはred(赤)の略、5.5は明度・4.0は彩度を示す。PはPurple(紫)・BはBlue(青)・GはGreen(緑)・NはNeutral(無彩色白～黒まで)。

8. 本書の編集は、馬田が担当した。

# 本文目次

序

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまで	1
第2節 調査の経過と組織	2
1. 調査の経過	2
2. 調査の組織・関係者	2
第2章 遺跡の位置と環境	5
第3章 塚堂古墳の調査	9
第1節 調査の経過	9
第2節 古墳の構造	11
1. 立地	11
2. 周溝	11
3. 埴輪列	13
4. 葺石	13
5. 墳丘	16
6. 前方部石室の構造	19
7. 前方部石室での埋葬状態と遺物出土状況	20
8. 前方部石室閉塞石前面の構造	21
9. 後円部石室前面での遺物出土状態	21
10. 後円部石室の構造	23
11. 後円部石室での遺物出土状態	24
第3節 出土遺物	26
1. 埴輪	26
(1) 円筒埴輪	27
(2) 朝顔形円筒埴輪	36
(3) 人物埴輪	38
(4) 盾持人形埴輪	41
(5) 家形埴輪	43
(6) 衣蓋形埴輪	44
(7) 盾形埴輪	47
(8) 冑形埴輪	51

(9) 馬形埴輪	51
(10) 動物形埴輪	52
(11) その他の形象埴輪	52
2. 土器	54
3. 各石室出土品	57
第4節 結語	61
1. 墳丘	61
2. 周溝	62
3. 葺石	64
4. 埴輪	65
5. 石室構造	66
6. 副葬品	68
7. 年代と被葬者の性格	68
第4章 B地区の調査	73
第1節 はじめに	73
第2節 遺構と遺物	73
1. 住居跡	73
(1) 1号住居跡	74
(2) 2号住居跡	83
(3) 3号住居跡	86
(4) 4号住居跡	89
2. 掘立柱建物跡	92
(1) 1号掘立柱建物跡	92
(2) 2号掘立柱建物跡	92
(3) 3号掘立柱建物跡	92
3. 溝状遺構	93
(1) 大溝	93
(2) 小溝1	109
(3) 小溝2	110
(4) 小溝3	110
4. その他の遺構	112
(1) 塚堂古墳前方部周濠前縁	112
(2) 縄文土器	114

(3) 縄文時代の石器	118
第3節 小結	122
第5章 B北地区の調査	123
第1節 はじめに	123
第2節 遺構と遺物	123
1. B北溝	123
(1) 1トレンチ出土土器	124
(2) 2トレンチ出土土器	126
(3) 3トレンチ出土土器	137
(4) 表採資料	142
(5) 鉄器	143
(6) 石器	143
(7) 玉類	144
第3節 小結	144
第6章 C地区の調査	145
第1節 はじめに	145
第2節 遺構と遺物	145
1. 住居跡	145
(1) 1号住居跡	145
(2) 2号住居跡	152
(3) 3号住居跡	155
(4) 4号住居跡	158
(5) 5号住居跡	162
(6) 6号住居跡	163
(7) 7号住居跡	169
(8) 8号住居跡	170
2. 溝状遺構と溝	172
(1) 1号溝状遺構	172
(2) 2号溝	175
(3) 3号溝状遺構	175
(4) 4号溝状遺構	175
(5) 5号溝	175
(6) 6号溝状遺構	175

3. その他の遺構と遺物	177
(1) 塚堂古墳前方部南縁外濠南肩部	177
(2) C地区出土土器	183
第3節 小結	185
第7章 塚堂古墳東地区の調査	
第1節 はじめに	187
第2節 遺構と遺物	187
1. 住居跡	187
(1) 1号住居跡	187
(2) 2号住居跡	196
(3) 3号住居跡	198
2. 溝	200
3. その他の遺物	201
(1) 第6トレンチ出土土器	201
(2) 排土出土土器	202
(3) ヘラ描き文土器	204
第3節 小結	206
第8章 おわりに	209
第1節 塚堂遺跡（A～E地区）出土の遺構と遺物	209
第2節 B・C地区出土の遺構と遺物	211
1. 土器	211
2. 住居跡の柱穴・土壇・カマドの位置と面積	217
3. ガラス小玉	232
第3節 B・B北地区出土の溝状遺構と遺物	243
1. 土師器について	243
2. その他の遺物について	249

## 図版目次

- 図版1 南東側上空から見た塚堂古墳（1）とバイパス建設予定地（2．日の岡古墳，  
3．月の岡古墳，4．筑後川）
- 図版2 1．西側上空から見た若宮・宮田古墳群（1．塚堂古墳，2．日の岡古墳，3．日  
の岡古墳）  
2．北側上空から見た塚堂古墳（第5次）
- 図版3 1．南側上空から見た塚堂遺跡群（第5次）  
2．南西上空から見た塚堂古墳（第5次）
- 図版4 1．後円部上空から見た塚堂古墳周濠南西隅角部（第5次）  
2．南西側上空から見た塚堂古墳（第5次）
- 図版5 1．北側から見た塚堂古墳（右側が前方部，背景は耳納山，第4次）  
2．北側から見た第1トレンチ（第4次）
- 図版6 1．北側から見た第2トレンチ（第4次）  
2．東側から見た第2トレンチ北端の礫群（第4次）
- 図版7 1．北側から見た第4トレンチ（第4次）  
2．北東側から見た第5トレンチ（内濠，中央は衣蓋形埴輪2）
- 図版8 1．東側から見た第6トレンチ（第4次）  
2．南側から見た第5トレンチ東端と第8トレンチ（第4次）
- 図版9 1．西側から見た北西側周濠隅角部（第6次）  
2．東側から見た周濠北西側隅角部（第6次，左上方の森は月の岡・日の岡古墳）
- 図版10 1．北側から見た北西側内濠隅角部（第6次）  
2．南東側から見た北西側内濠角部（第6次）
- 図版11 1．前方部内濠内縁（第5次）  
2．同上外縁（第5次）
- 図版12 1．前方部外濠内縁（第5次）  
2．前方部外濠内縁中央部葺石細部（第5次）
- 図版13 1．東側から見た前方部外濠外縁（第5次）  
2．南側から見た前部外濠西方の礫群
- 図版14 前方部内濠南西側隅角部と南側外縁部（第5次）
- 図版15 1．北側から見た前方部内濠南西隅角部（第5次）  
2．東側から見た前方部内濠南西隅角部（第5次）

- 図版16 1. 南側から見た前方部内濠南西側外縁 (第5次)
- 2. 南側から見た前方部内濠南西側外縁での作業工程 (仕上り直前, 第5次)
- 図版17 1. 前方部南側縁内濠外縁に見られる葺石間の段差 (第5次)
- 2. 東側から見た前方部南側縁の内濠外縁細部 (第5次)
- 図版18 1. 前方部南側縁内濠外縁 (第5次)
- 2. 前方部南側縁内濠外縁 (上図の東側, 第5次)
- 図版19 1. 北東側から見た前方部南西側の内堤隅角部 (第5次)
- 2. 西側から見た前方部南西側外濠内縁 (第5次)
- 図版20 1. 南側から見た前方部南西側隅角部の周濠 (第5次)
- 2. 前方部南側縁外濠内縁の構築状態 (第5次)
- 図版21 1. 南側から見た前方部南側縁外濠 (第5次)
- 2. 南側から見た前方部南側縁外濠東端 (第5次)
- 図版22 1. 北側から見た前方部南側縁外濠の外縁 (第5次)
- 2. 東側から見た同上構築状態 (第5次)
- 図版23 1. 北側から見た南側外濠外縁 (第5次)
- 2. 北側から見た第10トレンチ (第5次)
- 図版24 1. 西側から見た前方部南側縁内堤の土壌 (●印は土器5, 第5次)
- 2. 前方部石室横口部前面 (第3次)(撮影金子文夫)
- 図版25 1. 前方部石室の前壁
- 2. 前方部石室奥壁の石床
- 図版26 1. 後円部石室の現状
- 2. 西側から見た後円部石室 (第2次, 森貞次郎氏撮影)
- 図版27 円筒埴輪①
- 図版28 円筒埴輪②
- 図版29 朝顔形埴輪・人物埴輪①
- 図版30 人物埴輪②
- 図版31 衣蓋形埴輪①
- 図版32 衣蓋形埴輪②・盾形埴輪①
- 図版33 循形埴輪②・盾持人形埴輪 (復元)
- 図版34 馬形・家形埴輪 (復元)
- 図版35 動物埴輪と円筒埴輪内面
- 図版36 円筒埴輪の成形法と出土土器
- 図版37 1. B地区全景 (西から)

- 2. B地区全景（東から）
- 図版38 1. 1号住居跡遺物出土状態（東から）  
2. 1号住居跡カマド出土状態（東から）
- 図版39 1. 1号住居跡遺物（第54図9）出土状態  
2. 1号住居跡遺物（第55図10）出土状態  
3. 1号住居跡遺物（第57図26）出土状態
- 図版40 1. 1号住居跡，4号住居跡遺物出土状態（東から）  
2. 1号住居跡張床下状態，4号住居跡（東から）
- 図版41 1. 2号住居跡（南から）  
2. 3号住居跡（東から）
- 図版42 1. 1号住居跡カマド検出状態（東から）  
2. 同発掘後状態（東から）
- 図版43 1号住居跡カマド発掘状態①
- 図版44 1号住居跡カマド発掘状態②
- 図版45 1号カマド断面状態①
- 図版46 1号カマド断面状態②
- 図版47 1号カマド断面状態③
- 図版48 1. 3号住居跡カマド検出状態（東から）  
2. 3号住居跡カマド検出状態（南から）
- 図版49 1. 3号住居跡カマド（東から）  
2. 3号住居跡カマド（南から）
- 図版50 1. 3号掘立柱建物跡（南から）  
2. D地区住居跡出土状態（東から）
- 図版51 1. B地区発掘作業寸景（降雨対策）  
2. B地区情景（大雨水没状態）
- 図版52 1号住居跡出土土器①
- 図版53 1号住居跡出土土器②
- 図版54 1. 2号住居跡出土土器（上）  
2. 3号住居跡出土土器（中）  
3. 4号住居跡出土土器（下）
- 図版55 1. 溝状遺構全景（東から）  
2. 溝状遺構全景（西から）
- 図版56 1. 大溝全景（北から）

- 2. 大溝と大溝支流1の南部（北から）
- 図版57 大溝出土土器
- 図版58 1. 大溝支流1と大溝支流2（北から）  
2. 大溝支流1南部の遺物出土状態（北から）
- 図版59 1. Aトレンチ大溝支流1遺物出土状態（北から）  
2. Aトレンチ大溝支流1遺物出土状態細部
- 図版60 1. Bトレンチ大溝支流1遺物出土状態（西から）  
2. Bトレンチ大溝支流1遺物出土状態細部
- 図版61 1. Cトレンチ大溝支流1遺物出土状態（西から）  
2. Cトレンチ大溝支流1遺物出土状態細部
- 図版62 1. 大溝支流1を埋める整地層  
2. 大溝支流1の北部
- 図版63 1. 大溝と大溝支流（南から）  
2. 大溝支流2（北から）
- 図版64 1. 大溝支流2遺物出土状態（西から）  
2. 大溝支流2遺物出土状態細部
- 図版65 大溝支流1出土土器①
- 図版66 大溝支流1出土土器②
- 図版67 大溝支流1・2出土土器
- 図版68 1. 塚堂古墳前方部西縁外縁（西から）  
2. 塚堂古墳外濠外縁2段に現われた葺石
- 図版69 1. Cトレンチ東端での塚堂古墳前方部西縁外濠外縁  
2. Dトレンチ東端での外濠外縁
- 図版70 1. 鉄器・石器・玉類・石製品  
2. 縄文土器
- 図版71 1. 縄文時代の石器①  
2. 縄文時代の石器②
- 図版72 1. B北地区と塚堂古墳前方部（東から）  
2. B北地区溝と塚堂古墳前方部西縁外濠（南から）
- 図版73 1. 溝とトレンチ  
2. 2トレンチ2層での遺物出土状態（南から）
- 図版74 2トレンチ出土土器①

- 図版75 2トレンチ出土土器②
- 図版76 2トレンチ出土土器③
- 図版77 3トレンチ出土・表採土器
- 図版78 1. C地区全景（東から）  
2. C地区塚堂古墳前方部南縁外濠南肩部検出状態（北から）
- 図版79 1. 1号住居跡（北から）  
2. 2号住居跡（西から）
- 図版80 1. 3号住居跡（西から）  
2. 4号住居跡（北から）
- 図版81 1. 6号住居跡（北から）  
2. 8号住居跡，1・4号溝状遺構石組状態（東から）
- 図版82 1号住居跡出土土器①
- 図版83 1号住居跡出土土器②
- 図版84 2～4号住居跡出土土器
- 図版85 4号住居跡出土土器
- 図版86 5・6号住居跡出土土器
- 図版87 1. 発掘作業風景（水没前）  
2. 畦畔切断寸景（入梅期）  
3. 降雨流入状態（放流時）  
4. 重機救出寸景（水没後）
- 図版88 1. 塚堂古墳東地区1号住居跡  
2. 2号・3号住居跡，溝1
- 図版89 1. 1号住居跡遺物出土状態  
2. 同細部
- 図版90 1号住居跡出土土器①
- 図版91 1号住居跡出土土器②
- 図版92 1号住居跡出土土器③
- 図版93 1号住居跡出土土器④
- 図版94 1号住居跡出土土器⑤
- 図版95 1号住居跡出土土器⑥
- 図版96 溝1，第6トレンチ出土土器
- 図版97 排土出土土器
- 図版98 1. 排土出土ヘラ描き文土器

2. 同拡大
- 図版 99 1. 塚堂古墳墳頂部の月光
2. D地区20号住居跡出土カマドから塚堂古墳を望む
- 図版100 塚堂古墳出土衣蓋形埴輪スケッチ(豊福 画)

## 挿 図 目 次

第 1 図	塚堂遺跡の位置と周辺周要遺跡 (1/255,000)[馬田弘稔作成, 豊福弥生製図]	7
第 2 図	塚堂古墳全体図 (1/800)[石山勲・新原正典・日高正幸実測, 手柴淳子製図]	折込み
第 3 図	第 1 ~ 6 トレンチ平面および土層実測図 (1/120)[石山・新原・日高・川述昭人・小御門明宏実測, 豊福製図]	折込み
第 4 図	第 5・8・9 トレンチ平面および土層実測図 (1/50)[川述・日高実測, 豊福製図]	折込み
第 5 図	前方部北西隅角部周濠全体図 (1/300)[石山・児玉真一・日高実測, 豊福製図]	12
第 6 図	前方部北西隅角部内濠外縁葺石実測図 (1/50)[児玉実測, 豊福製図]	折込み
第 7 図	前方部前縁内濠葺石実測図 (1/50)[石山・浜田信也・橋口達也実測, 豊福製図]	折込み
第 8 図	前方部前縁外濠葺石実測図 (1/50)[石山・浜田・橋口実測, 豊福製図]	折込み
第 9 図	前方部南西隅角部内濠外縁および外縁葺石と前方部南側縁内濠内縁葺石実測図 (1/50)[浜田・佐々木隆彦・片岡宏二実測, 豊福製図]	折込み
第 10 図	前方部南側縁外濠葺石実測図 1 (西半, 1/50)[新原・片岡実測, 豊福製図]	折込み
第 11 図	前方部南側縁外濠葺石実測図 2 (東半, 1/50)[浜田・新原・児玉・片岡実測, 豊福製図]	折込み
第 12 図	第 10 トレンチ実測図 (1/50)[新原実測, 豊福製図]	14
第 13 図	墳丘測量図 (1954年測, 1/500)[金子文夫実測, 手柴製図]	17
第 14 図	塚堂古墳周濠復元図 (1/1,200)[石山作成]	18
第 15 図	前方部石室内見取図 (転載, 約1/30)	21
第 16 図	前方部石室面(A)・前壁(B)実測図(1/30)[金子実測, 石山製図]	22
第 17 図	後円部石室実測図 (1/50)[金子実測, 石山製図]	折込み

第 18 図	後円部石室内遺物出土状態実測図 (1/30)[金子実測, 石山製図] ……………	24
第 19 図	後円部石室内石棺棺材実測図 (1/20)[金子実測, 石山製図] ……………	25
第 20 図	円筒埴輪実測図① (1/6)[石山実測, 製図]……………	29
第 21 図	円筒埴輪実測図② (1/6)[高山恵子実測, 石山製図]……………	30
第 22 図	円筒埴輪実測図③ (1/6)[石山実測, 製図] ……………	31
第 23 図	円筒埴輪実測図④ (1/6)[石山実測, 製図]……………	32
第 24 図	円筒埴輪実測図⑤ (1/6)[石山実測, 製図]……………	33
第 25 図	円筒埴輪実測図⑥ (1/6)[石山実測, 製図]……………	34
第 26 図	へう記号を付す円筒埴輪集成 (1/4)[石山実測, 製図]……………	35
第 27 図	朝顔形円筒埴輪実測図① (1/6)[平田春美・石山実測, 石山製図]……………	37
第 28 図	朝顔形円筒埴輪実測図② (1/6)[石山実測, 製図]……………	38
第 29 図	人物埴輪実測図① (1/4)[平田・石山実測, 石山製図]……………	39
第 30 図	人物埴輪実測図② (1/4)[石山実測, 製図]……………	40
第 31 図	盾持人形埴輪復元図 (1/6)[平田実測, 石山製図]……………	42
第 32 図	家形埴輪実測図① (1/6)[石山実測, 製図]……………	43
第 33 図	家形埴輪実測図② (1/6)[石山実測, 製図]……………	44
第 34 図	衣蓋形埴輪実測図① (1/6)[平田・石山実測, 石山製図]……………	45
第 35 図	衣蓋形埴輪実測図② (1/6)[石山実測, 製図]……………	46
第 36 図	盾形埴輪盾部集成① (1/6)[石山実測, 製図]……………	47
第 37 図	盾形埴輪盾部集成② (1/6)[石山実測, 製図]……………	48
第 38 図	盾形埴輪盾部集成③ (1/6)[石山実測, 製図]……………	折込み
第 39 図	盾形埴輪盾部集成④ (1/6)[石山実測, 製図]……………	50
第 40 図	盾形埴輪盾部集成⑤ (1/6)[石山実測, 製図]……………	51
第 41 図	盾形埴輪盾部集成⑥ (1/6)[石山実測, 製図]……………	52
第 42 図	盾形埴輪盾部集成⑦ (1/6)[石山実測, 製図]……………	53
第 43 図	盾形埴輪直弧文集成図 (1/4)[石山実測, 製図]……………	54
第 44 図	冑形埴輪復元図 (1/4)[石山実測, 製図]……………	55
第 45 図	馬形埴輪実測図 (1/6)[高山実測, 石山製図]……………	56
第 46 図	形象埴輪実測図① (1/2)[石山実測, 製図]……………	57
第 47 図	形象埴輪実測図② (1/4)[石山実測, 製図]……………	58
第 48 図	出土土器実測図① (1/3)[石山実測, 製図]……………	59
第 49 図	出土土器実測図② (1/3)[石山実測, 製図]……………	60
第 50 図	周濠模式図 (1/1,200)[石山作成, 製図]……………	63

第 51 図	B 地区遺構配置図 (1/200)[馬田・小池史哲実測, 豊福製図]……………	折込み
第 52 図	1・4 号住居跡実測図 (1/40)[馬田・小池実測, 豊福製図]……………	折込み
第 53 図	1 号居居跡カマド実測図 (1/20)[馬田実測, 豊福製図]……………	折込み
第 54 図	1 号住居跡出土土器実測図① (1/3)[平田・馬田実測, 馬田製図]……………	76
第 55 図	1 号住居跡出土土器実測図② (1/3)[平田実測, 馬田製図]……………	78
第 56 図	1 号住居跡出土土器実測図③ (1/3)[平田・馬田実測, 馬田製図]……………	79
第 57 図	1 号住居跡出土土器実測図④ (1/3)[平田・馬田実測, 馬田製図]……………	80
第 58 図	1・4 号住居跡出土石製品実測図 (1/2, 1/4)[馬田実測, 製図]……………	82
第 59 図	2 号住居跡実測図 (1/60)[馬田実測, 製図]……………	83
第 60 図	2 号住居跡出土土器実測図 (1/3)[平田・馬田実測, 馬田製図]……………	84
第 61 図	3 号住居跡実測図 (1/60)[小池実測, 豊福製図]……………	86
第 62 図	3 号住居跡カマド実測図 (1/20)[小池実測, 豊福製図]……………	87
第 63 図	3 号住居跡出土土器実測図 (1/3)[平田実測, 小池製図]……………	88
第 64 図	4 号住居跡出土土器実測図 (1/4)[平田実測, 馬田製図]……………	90
第 65 図	1 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)[馬田実測, 井上裕子製図]……………	91
第 66 図	2 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)[小池実測, 井上製図]……………	91
第 67 図	3 号掘立柱建物実測図 (1/60)[馬田実測, 井上製図]……………	92
第 68 図	溝状遺構実測図 (1/300)[小池実測, 豊福製図]……………	折込み
第 69 図	溝北遺構断面土層図 (1/50)[小池実測, 豊福製図]……………	折込み
第 70 図	大溝出土土器実測図① (1/3)[平田実測, 小池製図]……………	94
第 71 図	大溝出土土器実測図② (1/3)[平田実測, 小池製図]……………	96
第 72 図	大溝出土土器実測図③ (1/3)[平田実測, 小池製図]……………	97
第 73 図	大溝支流 1 出土土器実測図① (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	99
第 74 図	大溝支流 1 出土土器実測図② (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	折込み
第 75 図	大溝支流 1 出土土器実測図③ (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	101
第 76 図	大溝支流 1 出土土器実測図④ (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	103
第 77 図	大溝支流 1 出土土器実測図⑤ (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	105
第 78 図	大溝支流 1 出土土器実測図⑥ (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	106
第 79 図	大溝支流 2 出土土器実測図 (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	折込み
第 80 図	大溝支流 2 深層出土土器実測図 (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	109
第 81 図	溝 1 出土土器実測図 (1/3)[平田実測, 小池製図]……………	109
第 82 図	B・B 北地区溝状遺構出土鉄器実測図 (1/2)[小池実測, 製図]……………	110
第 83 図	玉類・石製品実測図 (1/1)[小池実測, 製図]……………	111

第 84 図	B 地区検出の塚堂古墳前方部周溝前縁 (1/50)[小池実測, 豊福製図] ……………	112
第 85 図	B 地区他出土縄文土器拓影① (1/3)[小池手拓, 製図]……………	115
第 86 図	B 地区他出土縄文土器拓影② (1/3)[小池手拓, 製図]……………	116
第 87 図	縄文時代の石器実測図① (1/2)[小池実測, 製図]……………	118
第 88 図	縄文時代の石器実測図② (1/3)[小池実測, 製図]……………	119
第 89 図	縄文時代の石器実測図③ (1/3)[小池実測, 製図]……………	120
第 90 図	溝出土土器実測図① 1 トレンチ (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	125
第 91 図	溝出土土器実測図② 2 トレンチ 1・2 層 (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	127
第 92 図	溝出土土器実測図③ 2 トレンチ 2 層 (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	129
第 93 図	溝出土土器実測図④ 2 トレンチ 3 層 (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	131
第 94 図	溝出土土器実測図⑤ 2 トレンチ 4 層 (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	133
第 95 図	溝出土土器実測図⑥ 2 トレンチ 4 層 (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	134
第 96 図	溝出土土器実測図⑦ 2 トレンチ 4 層 (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	135
第 97 図	溝出土土器実測図⑧ 2 トレンチ 4 層 (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	136
第 98 図	溝出土土器実測図⑨ 3 トレンチ 2 層 (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	138
第 99 図	溝出土土器実測図⑩ 3 トレンチ 3 層 (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	139
第 100 図	溝出土土器実測図⑪ 3 トレンチ 3 層 (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	140
第 101 図	溝表採土器実測図 (1/3)[平田・小池実測, 小池製図]……………	142
第 102 図	溝状遺構出土土器実測図 (1/2)[小池実測, 製図]……………	143
第 103 図	C 地区遺構配置図 (1/200)[馬田・石山実測, 豊福製図]……………	折込み
第 104 図	1 号住居跡実測図 (1/40)[馬田実測, 豊福製図]……………	146
第 105 図	1 号住居跡出土土器実測図① (1/3)[平田・馬田実測, 馬田製図]……………	149
第 106 図	1 号住居跡出土土器実測図② (1/3)[平田・馬田実測, 馬田製図]……………	150
第 107 図	1 号住居跡出土土器実測図③ (1/3)[平田実測, 馬田製図]……………	151
第 108 図	1 号住居跡出土土器実測図④ (1/4)[馬田実測, 製図]……………	152
第 109 図	2 号住居跡実測図 (1/60)[馬田実測, 豊福製図]……………	153
第 110 図	2 号住居跡出土土器実測図 (1/3)[馬田・平田実測, 馬田製図]……………	153
第 111 図	2・4・6・8 号出土石庖丁, 石製品 (1/2・1/4)[馬田・小池実測, 馬田 製図]……………	154
第 112 図	3 号住居跡実測図 (1/60)[馬田実測, 豊福製図]……………	155
第 113 図	3 号住居跡出土土器実測図① (1/3)[平田・馬田実測, 製図]……………	156
第 114 図	3 号住居跡出土土器実測図② (1/3)[平田実測, 馬田製図]……………	157
第 115 図	4 号住居跡実測図 (1/60)[馬田・石山実測, 豊福製図]……………	158

第 116 図	4号住居跡出土土器実測図① (1/3)[平田・馬田実測, 馬田製図]……………	160
第 117 図	4号住居跡出土土器実測図② (1/4)[平田実測, 馬田製図]……………	折込み
第 118 図	4号住居跡出土土器実測図③ (1/3)[平田実測, 馬田製図]……………	折込み
第 119 図	4号住居跡出土土器実測図④ (1/4)[平田実測, 馬田製図]……………	161
第 120 図	5号住居跡実測図 (1/60)[馬田実測, 豊福製図]……………	163
第 121 図	5号住居跡出土土器実測図 (1/3)[平田・馬田実測, 馬田製図]……………	164
第 122 図	6号住居跡実測図 (1/60)[馬田・石山実測, 豊福製図]……………	165
第 123 図	6号住居跡出土土器実測図① (1/3)[平田・馬田実測, 馬田製図]……………	167
第 124 図	6号住居跡出土土器実測図② (1/3)[平田・馬田実測, 馬田製図]……………	168
第 125 図	6号住居跡出土土器実測図③ (1/4)[平田実測, 馬田製図]……………	169
第 126 図	8号住跡実測図 (1/60)[馬田実測, 豊福製図]……………	170
第 127 図	8号住居跡出土土器実測図 (1/3)[平田実測, 馬田製図]……………	171
第 128 図	8号住居跡出土土製勾玉実測図 (1/2)[馬田実測, 製図]……………	172
第 129 図	溝状遺構断面図 (1/100)[馬田実測, 井上製図]……………	172
第 130 図	1号溝状遺構出土土器実測図 [平田・馬田実測, 馬田製図]……………	174
第 131 図	6号溝状遺構出土土器実測図 (1/3)[平田・馬田実測, 馬田製図]……………	176
第 132 図	C地区出土陶質土器・須恵器実測図 (1/3)[馬田実測, 手拓, 製図]……………	178
第 133 図	C地区出土須恵器実測図① (1/3)[馬田実測, 手拓, 製図]……………	179
第 134 図	C地区出土須恵器実測図② (1/3)[馬田実測, 手拓, 製図]……………	180
第 135 図	C地区出土須恵器実測図③ (1/3)[馬田実測, 手拓, 製図]……………	181
第 136 図	塚堂古墳前方部南縁外濠出土鉄鑑実測図 (1/2)[馬田実測, 製図]……………	183
第 137 図	C地区出土土器実測図 (1/3)[平田・馬田実測, 馬田製図]……………	184
第 138 図	塚堂古墳東地区遺構配置図 (1/200)[新原実測, 新原製図]……………	折込み
第 139 図	1号住居跡実測図 (1/60)[新原実測, 製図]……………	188
第 140 図	1号住居跡出土土器実測図① (1/4)[新原実測, 製図]……………	189
第 141 図	1号住居跡出土土器実測図② (1/4)[新原実測, 製図]……………	折込み
第 142 図	1号住居跡出土土器実測図③排土出土へラ描き文土器実測図 (1/2)[新原実測, 手拓, 製図]……………	191
第 143 図	1号住居跡出土土器実測図④ (1/4)[新原実測, 製図]……………	193
第 144 図	1号住居跡出土土器実測図⑤ (1/4)[新原実測, 製図]……………	折込み
第 145 図	1号住居跡出土土器実測図⑥ (1/8)[新原実測, 製図]……………	195
第 146 図	1号住居跡出土土器実測図⑦ (1/4)[新原実測, 製図]……………	197
第 147 図	1号住居跡出土土器実測図⑧ (1/4)[新原実測, 製図]……………	198

第 148 図	2号(上)・3号(下)住居跡実測図 (1/60)[新原実測, 製図]……………	199
第 149 図	溝 1 出土土器実測図 (1/3)[新原実測, 製図]……………	200
第 150 図	6 トレンチ出土土器実測図 (1/3)[新原実測, 製図]……………	201
第 151 図	排土出土土器実測図 (1/3)[新原実測, 製図]……………	203
第 152 図	住居跡模式図〔馬田作成, 製図〕……………	217
第 153 図	B 地区 1 号住居跡東西主軸模式図 (1/100)[馬田作成, 豊福製図]……………	218
第 154 図	B 地区 1 号住居跡南北主軸模式図 (1/100)[馬田作成, 豊福製図]……………	219
第 155 図	B 地区 2 号住居跡南北主軸模式図 (1/100)[馬田作成, 豊福製図]……………	220
第 156 図	B 地区 3 号住居跡東西主軸模式図 (1/100)[馬田作成, 豊福製図]……………	221
第 157 図	C 地区 1 号住居跡東西主軸模式図 (1/100)[馬田作成, 豊福製図]……………	222
第 158 図	C 地区 2 号住居跡東西主軸模式図 (1/100)[馬田作成, 豊福製図]……………	222
第 159 図	C 地区 3 号・5 号住居跡東西主軸模式図 (1/100)[馬田作成, 豊福製図]……………	224
第 160 図	C 地区 4 号住居跡東西・南北主軸模式図 (1/100)[馬田作成, 豊福製図]……………	227
第 161 図	C 地区 6 号住居跡面積計測図 (1/40)[豊福作成, 製図]……………	228
第 162 図	面積計測方眼図)(1/100)[豊福作成, 製図]……………	228
第 163 図	C 地区 6 号住居跡東西・南北主軸模式図 (1/100)[馬田作成, 豊福製図]……………	230
第 164 図	C 地区 8 号住居跡東西主軸模式図 (1/100)[馬田作成, 豊福製図]……………	231
第 165 図	C 地区 3 号住居跡出土ガラス小玉実測図 (2 倍)[馬田実測, 製図]……………	234
第 166 図	B・B 北地区溝状遺構出土の古式土師器① (1/8)[小池作成, 製図]……………	折込み
第 167 図	B・B 北地区溝状遺構出土の古式土師器② (1/8)[小池作成, 製図]……………	折込み
第 168 図	B・B 北地区溝状遺構出土の古式土師器③ (1/8)[小池作成, 製図]……………	折込み

## 表 目 次

表 1	塚堂遺跡調査地区一覧表〔馬田作成〕……………	4
表 2	塚堂古墳葺石界石間の幅一覧表〔石山作成〕……………	15
表 3	B・B北地区出土の縄文時代石器計測表〔小池作成〕……………	121
表 4	B地区1号住居跡出土土器一覧表……………	212
表 5	B地区4号住居跡出土土器一覧表……………	212
表 6	C地区1号住居跡出土土器一覧表……………	212
表 7	C地区3号住居跡出土土器一覧表……………	212
表 8	C地区4号住居跡出土土器一覧表……………	213
表 9	C地区6号住居跡出土土器一覧表……………	213
表 10	C地区6号住居跡出土須恵器一覧表……………	214
表 11	C地区1号溝状遺構出土陶質土器・須恵器一覧表……………	214
表 12	C地区6号溝状遺構出土陶質土器・須恵器一覧表……………	214
表 13	C地区塚堂古墳前方部南縁外濠南肩出土陶質土器・須恵器一覧表……………	215
表 14	C地区出土須恵器一覧表(東西主軸)……………	216
表 15	住居跡模式計測表(東西主軸)……………	217
表 16	B地区1号住居跡(東西主軸)計測表……………	218
表 17	1号住居跡(東西主軸)面積計算表……………	218
表 18	1号住居跡(東西主軸)換置図形算出表……………	218
表 19	B地区1号住居(南北主軸)計測表……………	219
表 20	1号住居跡(南北主軸)面積計算表……………	219
表 21	1号住居跡(南北主軸)換置図形算出表……………	219
表 22	B地区2号住居跡(南北主軸)計測表……………	220
表 23	2号住居跡(南北主軸)面積計算表……………	220
表 24	2号住居跡(南北主軸)換置図形算出表……………	220
表 25	B地区3号住居跡(南北主軸)計測表……………	221
表 26	3号住居跡(南北主軸)面積計算表……………	221
表 27	3号住居跡(南北主軸)換置図形算出表……………	221
表 28	C地区1号住居跡(東西主軸)計測表……………	223
表 29	1号住居跡(東西主軸)面積計算表……………	223
表 30	1号住居跡(東西主軸)換置図形算出表……………	223

表 31	C地区2号住居跡(東西主軸)計測表	223
表 32	2号住居住居跡(東西主軸)面積計算表	223
表 33	2号住居跡(東西主軸)換置図形算出表	223
表 34	C地区3号住居跡(東西主軸)計測表	225
表 35	3号住居跡(東西主軸)面積計算表	225
表 36	3号住居跡(東西主軸)換置図形算出表	225
表 37	C地区5号住居跡(東西主軸)計測表	225
表 38	5号住居跡(東西主軸)西積計算表	225
表 39	5号住居跡(東西主軸)換置図形算出表	225
表 40	C地区4号住居跡(東西主軸)計測表	226
表 41	4号住居跡(東西主軸)面積計算表	226
表 42	4号住居跡(東西主軸)換置図形算出表	226
表 43	C地区4号住居跡(南北主軸)計測表	226
表 44	4号住居跡(南北主軸)面積計算表	226
表 45	4号住居跡(南北主軸)換置図形算出表	227
表 46	C地区6号住居跡(東西主軸)計測表	229
表 47	6号住居跡(東西主軸)面積計算表	228
表 48	6号住居跡(東西主軸)換置図形算出表	229
表 49	C地区6号住居跡(南北主軸)計測表	229
表 50	6号住居跡(南北主軸)面積計算表	229
表 51	6号住居跡(南北主軸)換置図形算出表	230
表 52	C地区8号住居跡(東西主軸)計測表	231
表 53	8号住居跡(東西主軸)面積計算表	231
表 54	8号住居跡(東西主軸)換置図形算出表	231
表 55	玉類表記凡例表	233
表 56	C地区3号住居跡出土ガラス小玉一覧表①	236
表 57	3号住居跡出土ガラス小玉一覧表②	237
表 58	3号住居跡出土ガラス小玉一覧表③	237
表 59	C地区4号住居跡出土ガラス小玉一覧表	238
表 60	C地区8号住居跡出土ガラス小玉一覧表	238
表 61	C地区6号住居跡出土玉類一覧表	239
表 62	3号住居出土ガラス小玉特徴一覧表	239
表 63	4号住居跡出土ガラス小玉特徴一覧表	240

表 64	8号住居跡出土ガラス小玉特徴一覧表 .....	241
表 65	3号・4号・8号住居跡出土ガラス小玉特徴比較表 .....	242
表 66	溝出土土器の器種分類 .....	246

## 付 図

一般国道210号線浮羽バイパス路線図と各調査地区の位置 (1/1,000)

〔石山・新原・馬田・小池・豊福作成, 豊福製図〕

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至るまで

## 第2節 調査の経過と調査組織

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至るまで

調査の端緒は、1972年2月3日付けで、建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所（以下九地建と略）から、福岡県教育庁管理部文化課（以下文化課と略）に対し、「一般国道 210号線 浮羽～田主丸間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」とする依頼にある。

その後、同様に「一般国道 210号線久留米～浮羽間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」とする依頼もあった。文化課では、これを受けて、当初は1/50,000地図に示された予定路線周辺の分布調査を実施し、最終的には 1/5,000地図に示された計画路線内の分布調査を実施して文化財が所在することを九地建に対し、74年に回答した。

九地建ではこれに対し、文化財の所在することも考慮して、文化課に対し、1/5,000 地図上に一部変更後の決定路線を示し、「文化財の有無について」の依頼をした。これに対し、文化課では浮羽～吉井地区に関しては11ヶ所の所在地を示し、事前の調査が必要であることを回答した。このとき、吉井地区の路線は装飾古墳で著名な横穴式石室の「日の岡古墳」と、これに近接する竪穴式石室の「月の岡古墳」（共に前方後円墳）の二者を大きく避け、古式の横穴式石室で前方後円墳である「塚堂古墳」も一応避けていた。しかし、「塚堂古墳」については、現在の前方部南縁裾を示された 1/5,000地図上で30m程避けたものであったが、これに対し文化課では、墳丘周辺の水田下に所在が予見される周溝をも避け得たものとの判断に至った。

やがて、吉井地区で県営圃場整備事業が計画され、79年度に県農地計画課から文化課に対し、当年度に塚堂古墳墳丘を除く東部に事業を実施する旨の通知と文化財の有無の調査依頼を受けた。しかし、当時は圃場整備事業に伴う文化財の有無の調査を事前に実施する体制は整っておらず、緊急に県農政部と協議し、文化課が79年度夏に周溝部のトレンチ調査を実施した。

上記のトレンチ調査時に、担当者が現況の前方部南東部墳裾に建設省所管の用地杭の所在を確認し、文化課の前述 1/5,000地図上での判断が甘かったことを知り、急拠九地建と協議することとなった。

協議の結果、既に用地は売却され、圃場整備事業もバイパス建設予定地を考慮して実施するところがあり、急速“一般国道 210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財の調査”を実施することになったものである。

## 第2節 調査の経過と調査組織

### 1 調査の経過

1979年9月から、塚堂古墳前方部周溝の調査を実施したが、このとき、周溝部以外での遺構の所在確認調査を、東側と西側で水田の床土までをコンボでトレンチ状に一部除去し、遺構の所在確認を行なった。東側トレンチ（後述D地区）で弥生後期の一括土器群、西側トレンチ（同A地区）で若干の柱穴様小ピットが出土したことで、周溝外にも遺構が多く所在することが予想されたため、79年度は周溝部調査のみで発掘を12月に終了し、調査地区をA～E地区に分けて80年度以降も塚堂遺跡調査を継続することになったが、82年度に至っても終了していない。

このように、塚堂遺跡の調査は、79年開始以来82年までに、A～Eの5地区について行ってきたが、今回報告するのはB・C地区・塚堂古墳についてである。未報告の地区のなかには同一地区が隔年次にわたる例があり、調査担当者・地番等に異動がある。また、遺跡の内実を知るうえで重要と考えられる、B北地区・塚堂古墳東地区の調査成果を、今回の報告に加えた。以上のことを、まとめて表1に示す。

### 2 調査の組織・関係者

調査の組織は下記のとおりである。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

所長	山本茂樹(前)	川井 優		
副所長	長村昭倉(前)	峯崎広典	西田雅則(前)	田辺一美
工務課課長	甲斐 武(前)	藤原栄吉郎(前)	江崎茂明	
第1係長	佐土原修			
第2係長	七字康暢			
第3係長	緒方良一			
調査課課長	田中康順(前)	森 将彦(前)	稲寺 隆	
調査係長	池沢卓巳			
建設専門官	藤原栄三郎			

建設監督官	久原義宣 九谷秀明	後藤博義	末安一善	久良木裕
-------	--------------	------	------	------

福岡県教育委員会

**総括**

教育長	浦山太郎(前)	友野 隆		
教育次長	友野 隆(前)	守屋 尚(前)	森 英俊	
管理部長	岩下光弘(前)	森 英俊(前)	安部 徹	
管理部文化課課長	藤井 功			
課長補佐	武久耕作(前)	蓮尾謙吉(前)	中村一世	
参事補佐	大淵幸夫(前)	内山孝之		

**庶務**

管理部文化課庶務係長	大淵幸夫(前)	内山孝之(兼)		
主任主事	入江智徳(前)	三瓶寧夫		

**調査**

管理部文化課技術補佐	松岡 史(前)			
調査第2係長	栗原和彦			
技術主査	柳田康雄			
主任技師	石山 勲	橋口達也	浜田信也	副島邦弘
同	川述昭人	児玉真一	新原正典	馬田弘稔
同	佐々木隆彦	小池史哲	池辺元明	伊崎俊秋

また、下記の方々から多大な協力を得た。

福岡県文化財保護指導委員 上野美元(前)・同金子文夫、吉井町教育委員会 次長中村益良(前)・同社会教育課 係長荻野弘幸(前)・係員林三夫・小河誠嗣、吉井第2土地改良区事務局 長林啓一、九州大学工学部建築学科 助手山本輝夫、県立浮羽高校考古学部 池田和博(O・B)野上宏・中野佐枝子・今村百合子・大山聖子他、県立朝倉高校史学部 鬼木幹夫他。(敬称略)

なお、実際の調査の進行についての協議は、前記の関係者の中の、九地建 池沢、文化課 入江(79年度)・三瓶(80・81・82年度)・石山(79・81年度)・橋口(79年度)・馬田(80・81・82年度)が主としてあたった。(馬田)

表1 塚堂遺跡調査地区一覽表

調査地区	調査期間	大字	小字	地番	文化課調査係	補助員	報告	主な遺構・時代(概略)
A地区	1981年7～12月	宮田	四太郎	574-2 575-1	兒玉 馬田 小池	日高正幸		袋状竖穴(縄文後期)凹形周溝 住居跡(弥生後期～古墳前期)方形土壇・掘立柱建物跡(古墳前期)
	576-1			副島 馬田 佐々木	日高			
B地区	1981年8～12月	徳丸	西	159-1 160-1	浜田 馬田 小池	日高	<b>第1集</b> (第4章)	
				161-1	伊崎	日高		
C地区	1980年5～11月	宮田	四太郎	552-1・2 552	栗原 石山 馬田	日高	<b>第1集</b> (第6章)	
				556-1 2014	池辺	日高		
				557・1・2		日高		
				558-1・2		日高		
D地区	1980年5月	徳丸	西	456	栗原 柳田 浜田	日高		住居跡・凹形周溝・溝状遺構(弥生後期)住居跡(古墳前期)掘立柱建物跡・土壇・溝状遺構
	1981年3月			川述 新原 馬田 池辺	日高			
E地区	1982年7～10月	宮田	曲金		副島 馬田 佐々木	日高		住居跡(古墳前期・奈良～平安期)掘立柱建物跡 大溝(近世)
	1983年度以降							
塚堂古墳	1979年7～8月	徳丸	西	160-1・3 158-1 159-1	石山 川述 新原	日高	<b>第1集</b> (第3章)	
	1989年9～12月			石山 橋口 浜田	高田一弘			
	1981年7～8月			川述 兒玉 新原 馬田 池辺	日高 片岡宏二			
B北地区	1982年9月	徳丸	西	158-1 159-1	馬田 小池		<b>第1集</b> (第5章)	
				1979年7～8月	石山 川述 新原	日高		
塚堂古墳東地区	1979年7～8月	徳丸	西		石山 川述 新原	日高		

## 第2章 遺跡の位置と環境

## 第2章 遺跡の位置と環境

所在 <sup>つかんどう</sup>塚堂遺跡は、主に古墳時代を中心とする集落・墓地遺跡で、福岡県浮羽郡吉井町大字徳丸と大字宮田にわたって所在する。その所在地番の詳細は既に表1に示したとおりであるが、「塚堂古墳」(註1)は、戦前に田中幸夫氏によって学会に報告されたとき、「筑後千年村徳丸古墳前方部石室に於ける埋葬の状と遺物の一二」の題で「徳丸古墳」と紹介されている(『考古学雑誌』25-1 1933年)。徳丸古墳の名称は、上記文中に『周囲には環隍が千古の夢を囁き』と述べられてはいるが、当時の前方部墳裾は既に大字宮田の地にはなく、浮羽郡千年村(現吉井町)大字徳丸の地に望まれたためであろうと思われる。

遺跡の立地と環境にふれる前に、1979年度以来、年中行事的に調査に参加した者の、個人的ではあるが現場での四季の折り折りの追憶からふれたい。

寒梅の折り、住居埋土、往往にして凍結す。薪も新たな缶下とて、表層泥土となるに、以下掘るは能わず。ただ、地を恨みつ小石蹴る。不動。

入梅の折り、鋤を左手に馳せし人、畦畔を切る。植えし田苗、没すと云う。やがてその水、遺構を没す。ただ、天を恨みつ小石投ず。波動。(図版87)

鮎釣りの折り、作業員、『耳納の山まわり』とて、袖を引く。南の山、陰りつやがて雨。遺構プラン明瞭。作業再開。また、『夜明の山まわり』とて騒ぐ。東の山、既に暗く直ぐに雨、作業続行。またまた、『朝倉の山まわり!』北の山、望む間なく雨。作業中止。整理事務所への帰途、雨脚止む。(第1図参照)

木犀の折り、全景写真準備完了。快諾後、休耕田内、撮影台を立つ。台上にて曇るを待つ。好機。瞬前、キャタピラ付稲刈機、眼中に入る。辺り、稲穂、稲穂。暫し、黄金を渡る風を待つ。風来たり、雲来ず。

このように、遺跡周辺の景観は変化に富み、遺跡の所在する故の多くを語る。

**立地・環境** 遺跡は、西流する筑後川南岸1kmの微高地上に立地し、前述の鮎釣りはこの付近で盛んで、兩岸の原鶴温泉では鶴飼舟を浮かべてくれる。この筑後川は、遺跡東方15kmの大分県日田盆地(盆地床標高85m、回峰標高300~500m)を過ぎ、同6kmの谷部の「夜明ダム」に流入し、ダム下で福岡県域となる。県域後から更に西流して、遺跡西方25kmで久留米市域に至る。この間の平野部を、広大な筑後平野の中で「両筑平野」と呼んで区別し、この間の筑後川本流を「千年(千歳)川」とも呼称する。両筑平野とは、主に浮羽郡と朝倉郡部での呼称名で、前者は筑後川以南・後者は同以北を指す。前者は旧筑後国領久留米藩領・後者は旧筑前国秋月藩領に属したことに由来する。また、前述の田中氏報文標題に示された「筑後千年村」は、

この千年川の名に由来したもので、今は遺跡から学舎の見える吉井町立千年小学校にその名を残している。

つぎに、先述の各“山まわり”にふれつつ、今少し地勢を補足する。(第1図)

南の山まわりは、筑後川の西流を導くように東西に連なる急峻な耳納山脈(水縄山地、標高300~700m)からのもので、遺跡~山稜間は約7kmである。山麓部は、後期の古墳が群集し、装飾古墳も数多いが、同時に植木・巨峰の特産地として知られ、その造園の際に人知れず破壊された例が大半で、著名な装飾古墳の一部を除いて記録されたものは少ない。なお、縄文~弥生時代の遺物は少なからず採集されているので、今後多くの遺跡の所在が明らかになるものと思われる。(註2)。また、塚堂古墳に近接し、同様に筑後川の沖積微高地にある『国指定史跡 日の岡古墳』・月の岡古墳の紹介は、次章の詳細に譲る。

北の山まわりは、筑後川の西流からやがて離れつつ北西方向に連なるやや緩やかな朝倉山塊(標高300~500m)からのもので、遺跡~山稜間は約15kmである。山麓部は、後期の古墳が群集するが、装飾古墳は遺跡から北西方向約7kmの朝倉郡朝倉町大字宮野字落合に所在する6世紀の宮地獄1号墳(註3)の同心円文を認める例のみである。他に千年川以北では、更に遺跡から北西方向16kmの朝倉郡三輪町大字久光に所在する『国指定史跡 仙道古墳』および同方向22kmの朝倉郡夜須町大字砥上所在の観音塚古墳(註4)の2例を加えるだけである。しかし、以上の装飾古墳3例はほぼ6km等間に所在し、前者はやや立地を異にして直接に両筑平野の眺望はできないが、他の2例は明らかに眺望を立地の前提としている。また、縄文時代の遺物採集例が多く、弥生時代の遺構の調査は若干ではあるがなされている。なお、前述宮地獄1号墳と同所に所在し、その山頂に立地する石棺を内部主体とする宮地獄9号墳(註5)、遺跡北方2kmで千年川右岸に近接する朝倉町大字志波所在の5世紀の宝満宮古墳(註6)、遺跡北東方3kmで千年川河岸段丘上に立地する、剣塚古墳(註7)の3前方後円墳が存在する。

東の山まわりは、前述の夜明ダム方向からのもので、遺跡北東方5kmの朝倉郡杷木町大字林田所在の、千年川右岸にせまる山頂標高130mの山腹に『国指定史跡 杷木神籠石』が立地する(註8)。

以上、やや薄利多売の説明に終始したが、最後に再度例の“山まわり”にふれて、1983年度刊の第2集での位置と環境に続けたい。

南・北の山まわりにて、今にこそその鋭気を残す装飾古墳の千年川以南の多と同以北の少。また、「月の岡」「塚堂」「日の岡」と「宮地獄」「宝満宮」「鳥集院」のそれぞれ三者が、両筑平野を二分して対峙するかのとき分布のありかたを解く錠。調査者にとってこの錠こそ、83年度も必ずや訪れるであろう、東の山まわりにあるやに思えてならない。塚堂遺跡出土の弥生時代後期・古墳時代前期の土器の特徴を知るにつれ。

(馬田)



- 註1 宮崎勇三「筑後国浮羽郡千年村徳丸塚堂古墳」（『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書』第十輯，1933）
- 註2 金子文夫「第1章 考古遺跡」（『古井町誌』第1巻，1977）
- 註3 福岡県教育委員会編『福岡県遺跡等分布地図（甘木市・朝倉郡編）』（1978）
- 註4 玉泉大梁「朝倉郡砥上山観音塚古墳の調査」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第七輯，1932）
- 註5 註2に同じ。なお、柳田康雄「第二編 原始」（『甘木市史』上巻，1982）で、「宮地嶽古墳」としたものと同一の古墳である。
- 註6 高山明編『埋もれていた朝倉文化』（福岡県立朝倉高等学校史学部，1969）
- 註7 宮小路賀宏他編「杷木神籠石」（『杷木町文化財調査報告書』第1集，1970）
- 註8 島田寅次郎「箱式石棺内に於ける合葬遺跡の調査」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第七輯，1932）

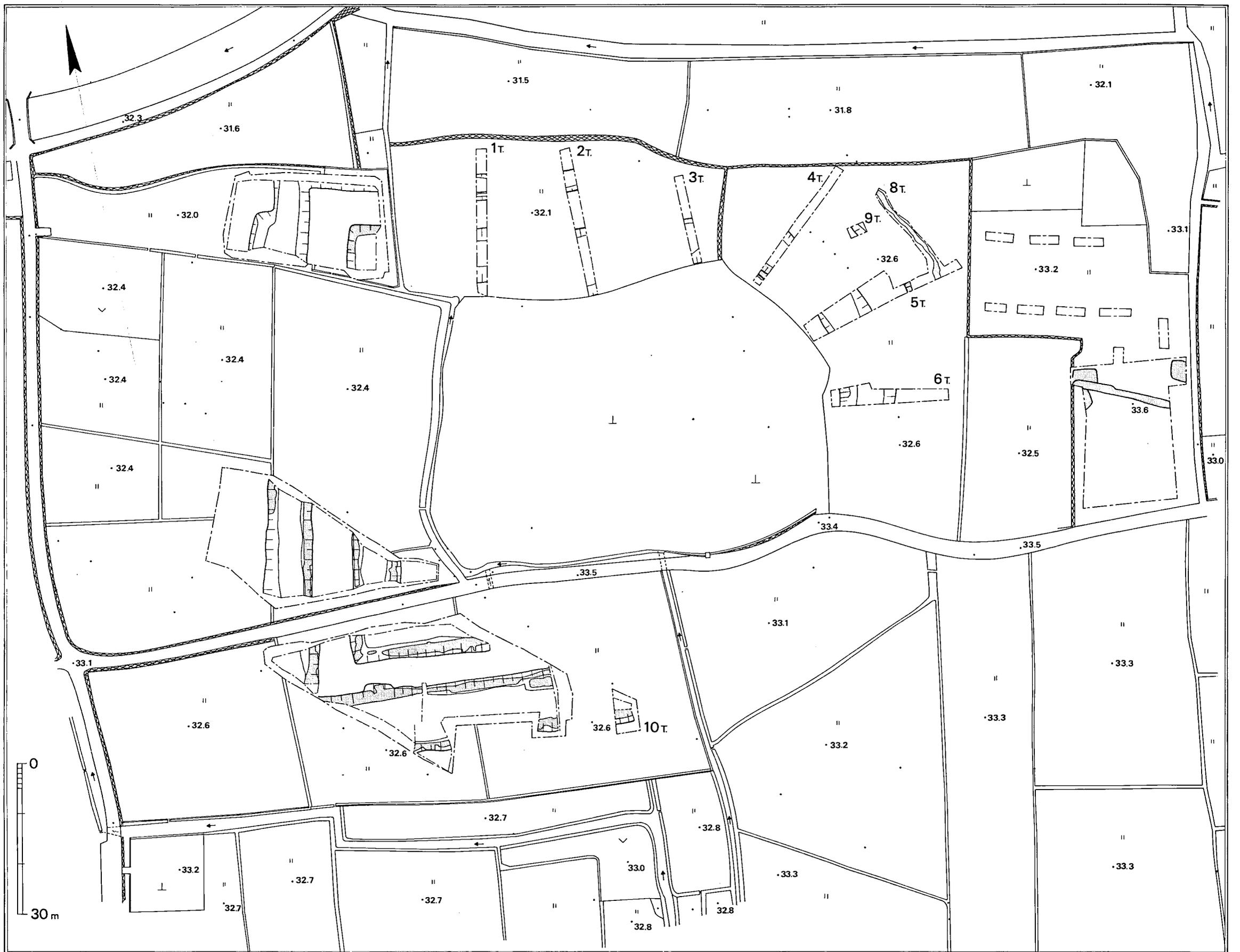
## 第3章 塚堂古墳の調査

第1節 調査の経過

第2節 古墳の構造

第3節 出土遺物

第4節 結語



第 2 図 塚堂古墳全体図 (1/800)

## 第3章 塚堂古墳の調査

### 第1節 調査の経過

#### 第1次 1934年（昭和9年）8月

当時前方部南側に居住していた国武金次郎氏の家屋新築に際して前方部石室が発見されたことにより、県史蹟調査委員宮崎勇蔵氏らが調査。調査範囲は石室内に限られたが、人骨1体と短甲3領をはじめとする豊富な副葬品が埋葬当初の状態のまま発見され、本墳の意義と後円部石室に対する期待とを高めた。調査結果は田中幸夫・宮崎勇三各氏の報告(註1・2)に詳しいが、本報告にあたり、**宮崎氏報文(註3)中の「二. 古墳の構造」、「三. 前方部墳」、「四. 埋葬状態」**の3項を再録している。

#### 第2次 1955年（昭和30）8月1日～8月13日

昭和28年の大水害で被災した水田の復旧工事用土取場として手近かな本墳が選ばれ、後円部の北から東側にかけての盛土が徐々に削り取られるにいたった。このため、県立浮羽高校教諭金子文氏が、菊池昌孝・上野由美両氏ならびに浮羽高校考古学部生徒諸君の協力を得て、露出した後円部石室の応急調査を行ったもので、調査指導には森貞次郎県文化財専門委員があたりられている。

その内容については、従来は金子氏文献(註4)に出土品のリストと写真が掲載されているのみであった。今回、金子・森両氏の御高配によって、調査時の記録を収録することができたのは幸である。後述するように、大破してはいたものの石棺を納めた特色ある石室の構造と、前方部石室を上回る豊富な副葬品の一端とが明らかにされた。なお、墳丘測量図(第13図)は前年に作成されている。

#### 第3次 1956年（昭和31）7月22日～8月10日

前方部石室の室内および閉塞石前面とが、浮羽高校金子・菊池両教諭と同校考古学部生徒諸君によって調査された。室内にはなかった馬具がセットとして閉塞石前面から出土したのは大きな成果であった。(註5)本書には、金子氏のメモを基にした概要報告を収録している。

#### 第4次 1979年（昭和54）7月26日～8月31日

県営圃場整備事業吉井地区工事に伴う県単独事業の一環として、県教委文化課が調査を実施した(県教委第I次調査)。現存する墳丘本体は計画から除外されており、事業範囲内の北から東側にかけての墳丘外周を対象とした。周濠の形態・規模の確認を目的としたが、整備事業工程との関係もあって、重機を使用してのトレンチ調査とせざるを得なかった。調査の結果、

予測していなかった二重の濠がめぐらされていることが判明した。これは、調査の後半に第5トレンチを延長した結果によるが、外濠を確認したのが急遽設定した第8・9トレンチにとどまったのが心残りである。最南端の第7トレンチは、湧水による壁面の崩落が激しく直ちに埋め戻したため図示していない。

なお、第5節にて後述するように、後田部東側の低台地についても部分的に調査を行い、住居跡などを確認した。

以上の調査結果については、既に概略を報告している(註6)。

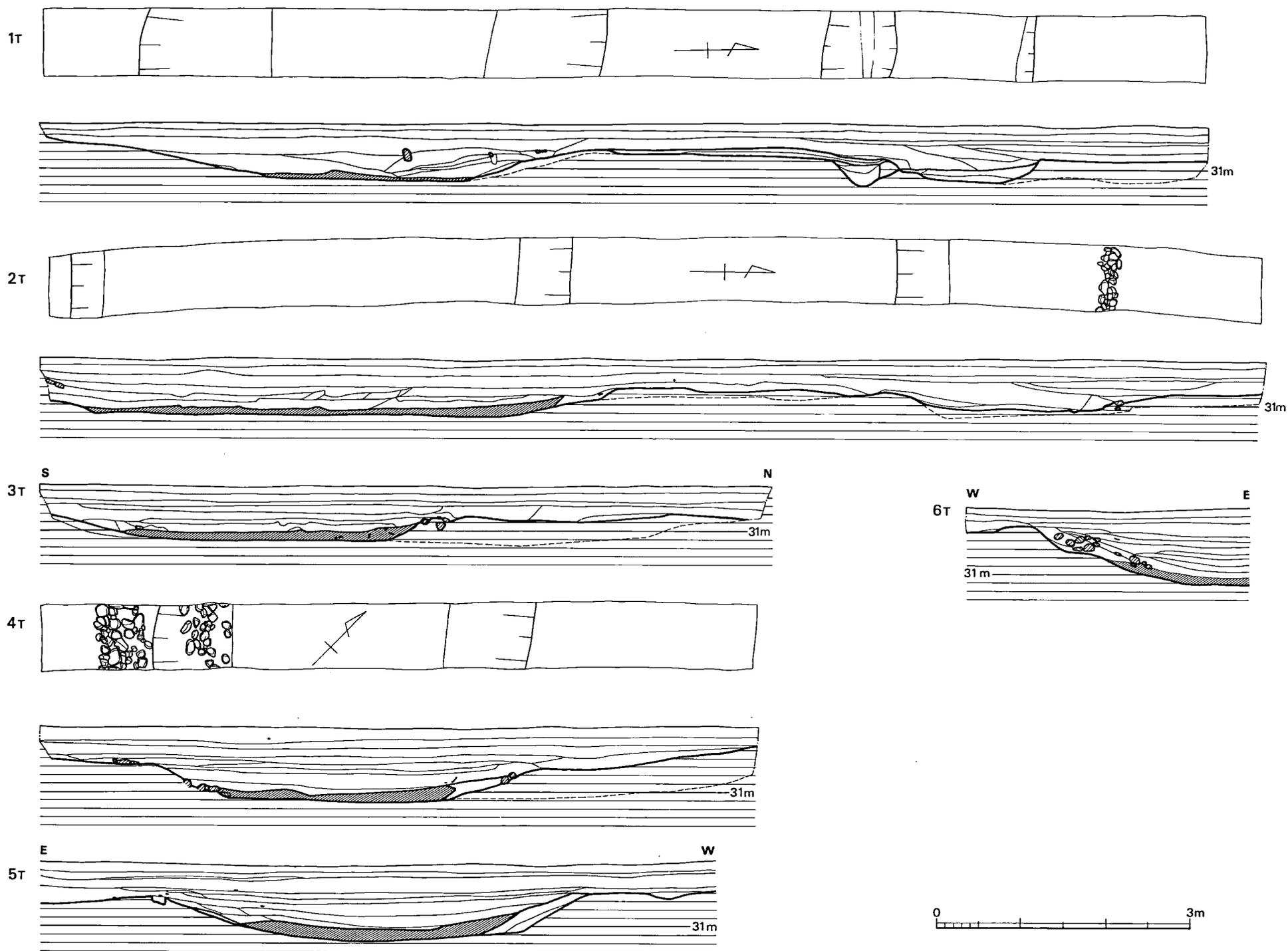
#### 第5次 1979年(昭和54)9月19日～12月12日

国道201号線浮羽バイパス建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査事業の一環として、建設省九州地方建設局からの委託事業として県教委文化課が実施した(県教委第II次調査)。前回の調査により、二重の周濠の他に住居跡などの遺構が存在することが判明したので、路線内を便宜的に地区割して逐次調査することにした。今回は、これらのうち西から南側にかけてのB・C区の周濠部分を対象とした。土置き場などの関係もあって、南側外濠外縁などC区の一部は翌年に調査を行った(県教委第III次調査)。なお、調査終了後周濠部分は真砂土で埋め戻して現状保存を図るとともに、施工時に土砂入れ替えのための掘削を行わないよう福岡国道工事事務所に申し入れ、了解を得ている。この間、御尽力いただいた同所竹内幸生監督官(当時)に対して心から御礼申し上げます。

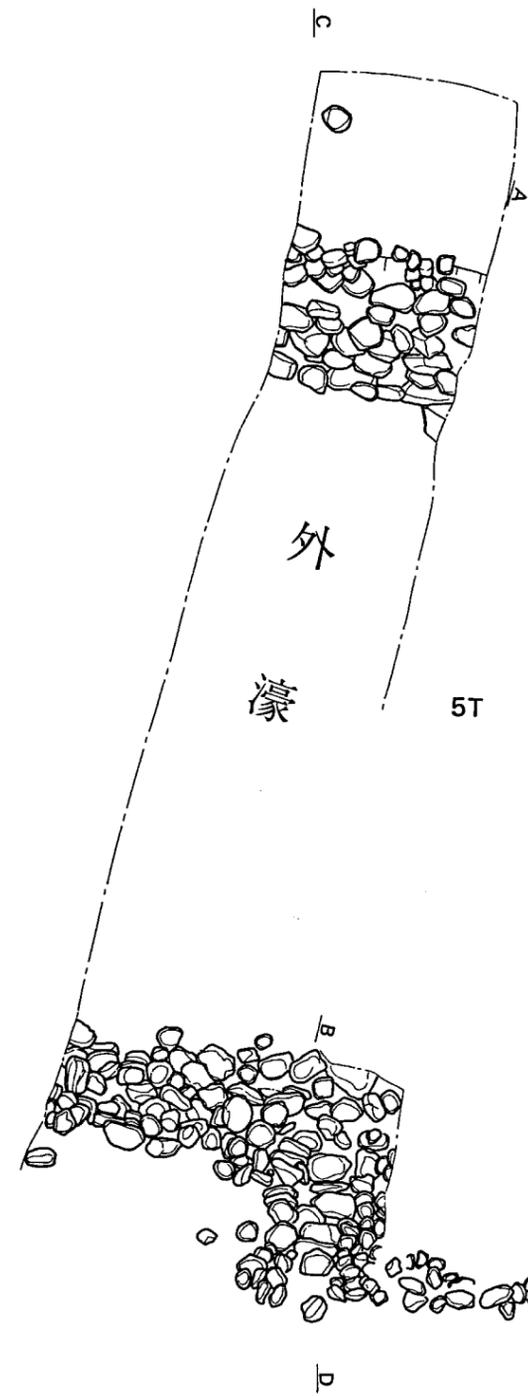
#### 第6次 1981年(昭和56)7月22日～8月20日

81年度圃場整備事業予定地に墳丘西側外周が含まれたため、昭和56年度国庫補助事業の一環として吉井町が事業主体となり、県教委文化課が現地調査を担当した(県教委第IV次調査)。前方部前面(西側)の削平深度が浅く設計されていたため、北西隅角部の確認に対象を絞った(註7)。

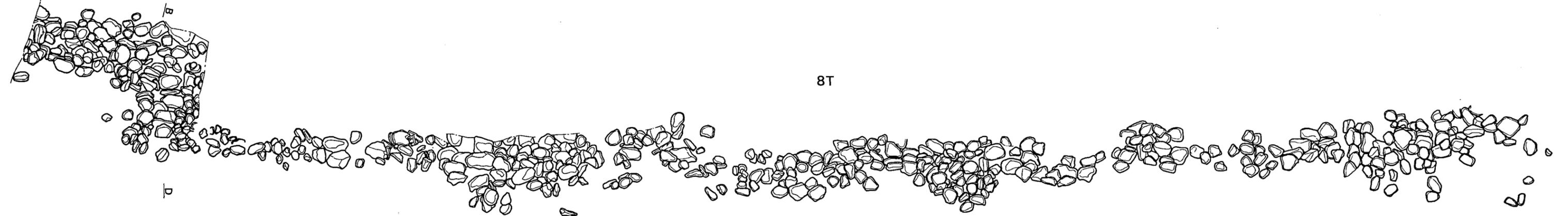
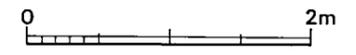
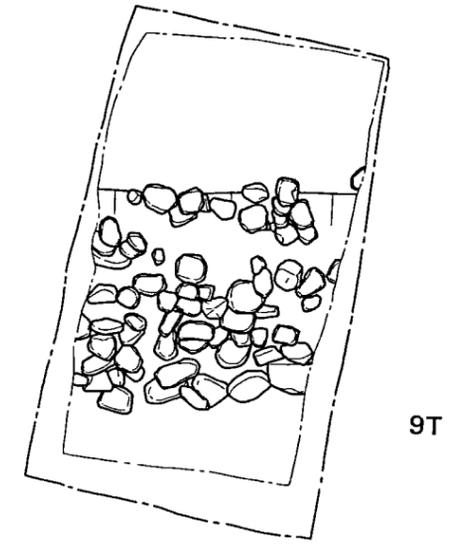
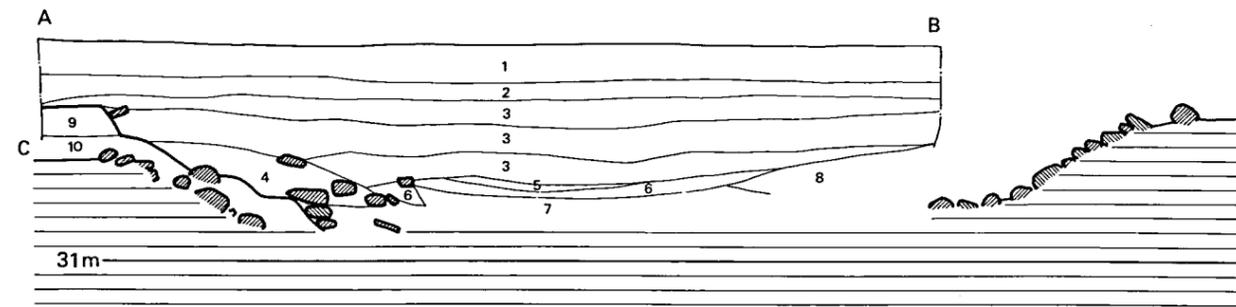
なお、第2次および第3次調査の記録と所見については、当初は調査を担当された金子文夫氏に御執筆いただく計画を立て氏の快諾をいただいていた。しかし、筆者の不手際と時間的制約とが重なったため、一部を除いては金子氏から寄せられたメモを基に筆者が記録の概要を作成せざるを得ない事態となり、慙慙に耐えない。着手後30年近いという気の遠くなるような年月が経過しようとしており、この間の金子氏の御労苦と今回の報告書作成への期待の大きさは図り知れないものがあつたと推察される。しかも、遺物編を欠く構成であるだけに、御落胆と御不満の大きさもいかばかりかと思われる。諸般の事情がこうした結果をもたらしたのであるが、ここにその責は筆者が負うべきものであることを明らかにすると共に、氏に対して心からお詫び申し上げます。



第 3 図 第 1 ~ 6 トレンチ平面および土層実測図 (1/120)



- |                  |            |
|------------------|------------|
| 1. 耕作土           | 6. 黒灰色粘土   |
| 2. 床土            | 7. 茶灰色粘土   |
| 3. 茶褐色土(茶斑混)弱粘質土 | 8. 茶灰色弱砂質土 |
| 4. 暗茶褐色土弱粘質土(H混) | 9. 暗褐色弱粘質  |
| 5. 暗褐色粘土         | 10. 褐色弱粘質土 |



第4図 第5・8・9トレンチ平面および土層実測図 (1/50)

## 第2節 古墳の構造

### 1 立地

幾多の装飾古墳をも含む一大古墳密集地帯でもある耳納山北麓から北に向って緩かに広がる扇端、筑後川中流域左岸微高地上に営まれている。西向きの前方後円墳で水田中に聳え立ち、遠くから見てもひととき目立つ存在である。こうした立地から（図版1）、墳丘はほとんどが盛土からなり、かつ、周囲に濠をめぐるしているであろうことが容易に察せられる。なお、本墳の西方僅か600mの若宮神社社地にはやはり西向きの前方後円墳2基がある（図版2-1）。金銅装眉庇付冑をはじめとする豪華な副葬品（『国指定重要文化財』）と長持形石棺を納めた堅穴式石室をもち極めて畿内色の強い月の岡古墳、巨大な同心円文などが壁面に描かれていることで著名な『国指定史跡 日岡古墳』がそれである。

### 2 周濠

圃場整備着工前までは、四周の水田畦畔をつなぐと断続はしているものの大略盾形となり、立地からの推測を裏づけていた。けれども、北側では約18mに狭まっているといえ、これ以外の3面では現墳丘裾部と畦畔との間は27~40m前後にも達していた。外堤があるとしても広すぎるのではないかと、現地を訪れる際常々不審に思っていた。無意識のうちに一周する濠を想定し続けていたわけだが、第4次調査によって周濠が二重にめぐらされていることが判明し、疑問は氷解したのである。なお、二重濠の存在は作物の生育度にも反映されていたが、気づいたのは後日である（図版2-2、3）。

周濠・内堤各部のうち、計3次におよぶ調査によって、内濠外縁と外濠内縁の南西および北西両隅角部、つまり前方部前縁の内堤の四隅角部を確認できた。外濠外縁の南西隅角部、後円部南側から同部背面（東側）にかけては、圃場整備ならびにバイパス建設予定地外となるため調査対象域から外している。このため、北から南にかけて——前方部北側縁から後円部・南側くびれ部にかけては不確定要素が多くならざるを得なかった。

周濠は、断面がほぼ逆台形になるように地山を掘削している。現存する深さは0.5~1.4mで、概して北から北西側にかけてが浅いのは地形上当然といえよう。一方、濠底の海拔高は内濠が30.6~30.9m、外濠が30.7~31mとほぼ一致しており、かつ、各々での水平差もまた30cm内外に納まっているのはまさに驚異的である。

なお、内濠の全面と外濠の前方部前縁南半から南側くびれ部にかけての濠底には、多数の埴輪片を含んだ厚い灰白色粘土層（第3図にて斜線を付す層）が堆積しており、帯水期間が永か

ったことを物語っている。

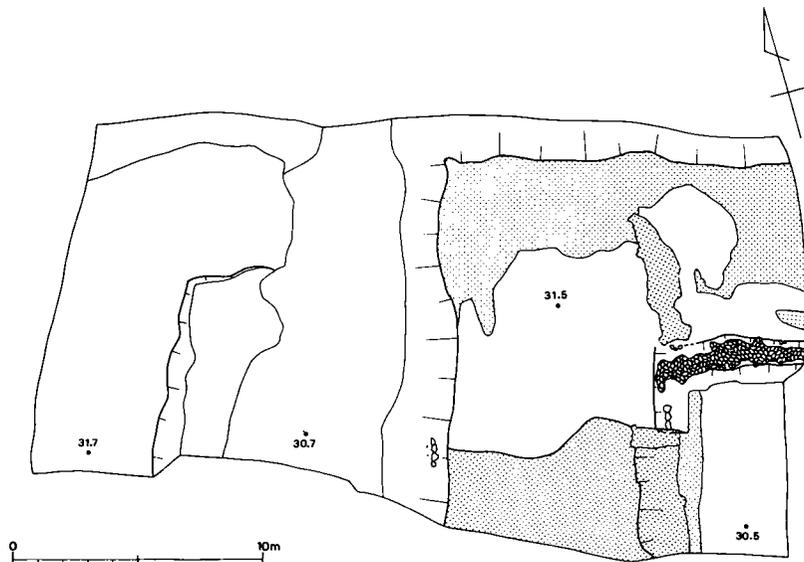
さて、周濠の全形と規模の復元は、調査によって前方部（西側）内堤の4隅角部を確認できたので比較的容易と考えられた。墳丘と周濠のプランは中軸線に対して左右対象となると予測したからだ。ところが、周濠および内堤と中軸線とは直交するとの前提に立って図上で復元を試みると、全形はほぼ盾形といえるプランとはなるものの、シンメトリカルとはならない可能性が強まった（第13図）。幅が一定せず歪みを生じており、この傾向は特に北半部に強い。

これは、著しい段差があるなど北側に下傾する地形上の制約を受けたものと推測される。この段差を解消し一枚田とするのが、昨今の圃場整備である（図版3）。当初計画どおりの築造が不可能と気づいた時点で、急遽北側が圧迫・縮小されたのであろう。とすれば、北辺部では外濠がめぐらされなかった可能性は極めて高いといえよう。少なくとも、外濠の立ち上り（外縁）が、内堤と同じ高さに盛土してまで維持されたとは考えにくい。

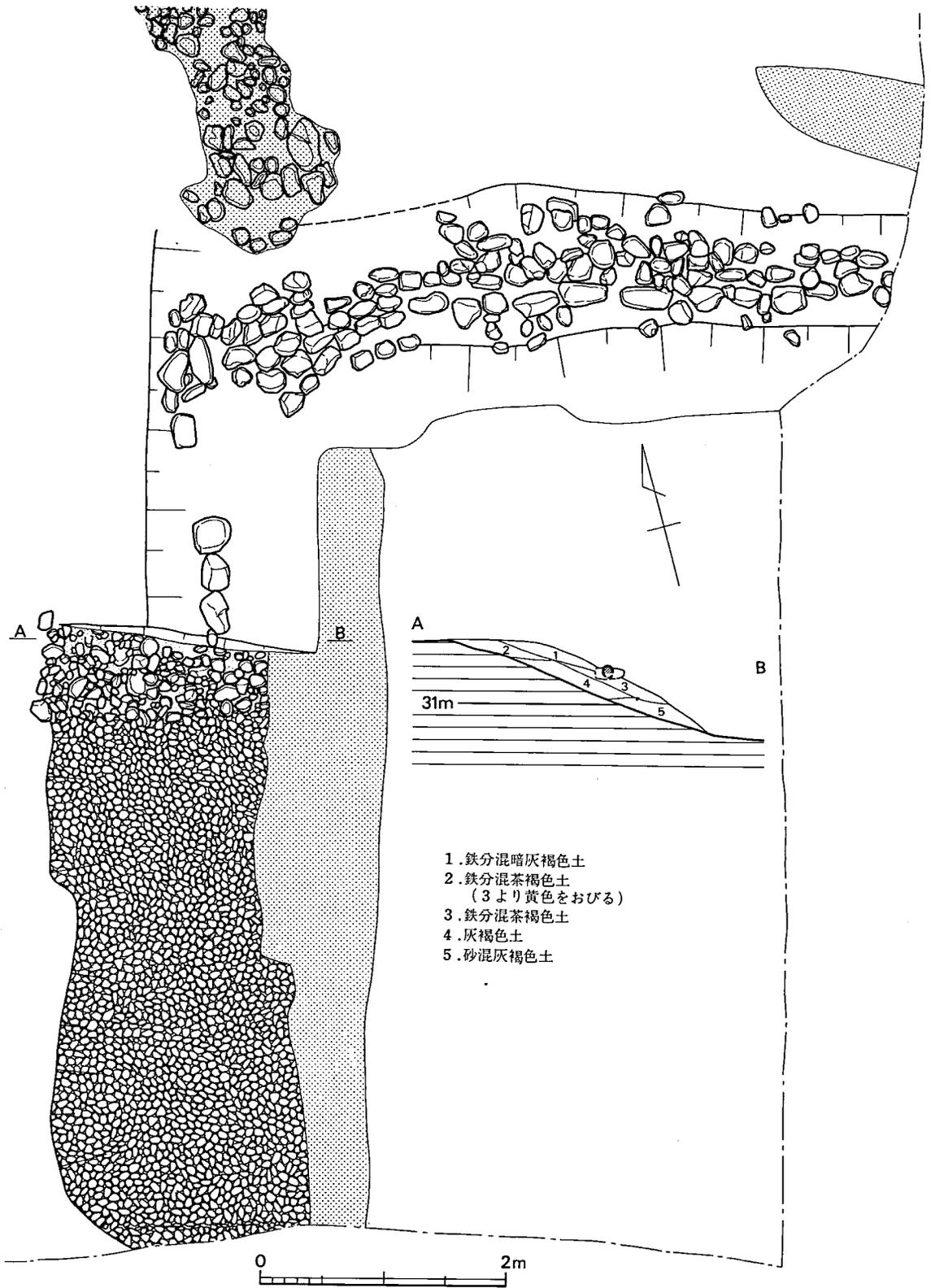
北辺部の外濠は、恐らく内堤の肩部（外濠内縁）を削り出す程度とし、地形の下傾につれて自然消滅するような形であったのではなかろうか。なお、北西側では古墳に先行する溝と重複したため不整形なプランとなっているが、もともとは北端に向うにつれて狭まるように掘り割られたものと考えられる。周濠各部のうち、

前方部前縁（西側）	内濠 幅約9m	同内堤 幅約8m	同外濠 幅約8m
後円部背面（東側）	内濠 幅約8m	同内堤 幅約10m	同外濠 幅約8m

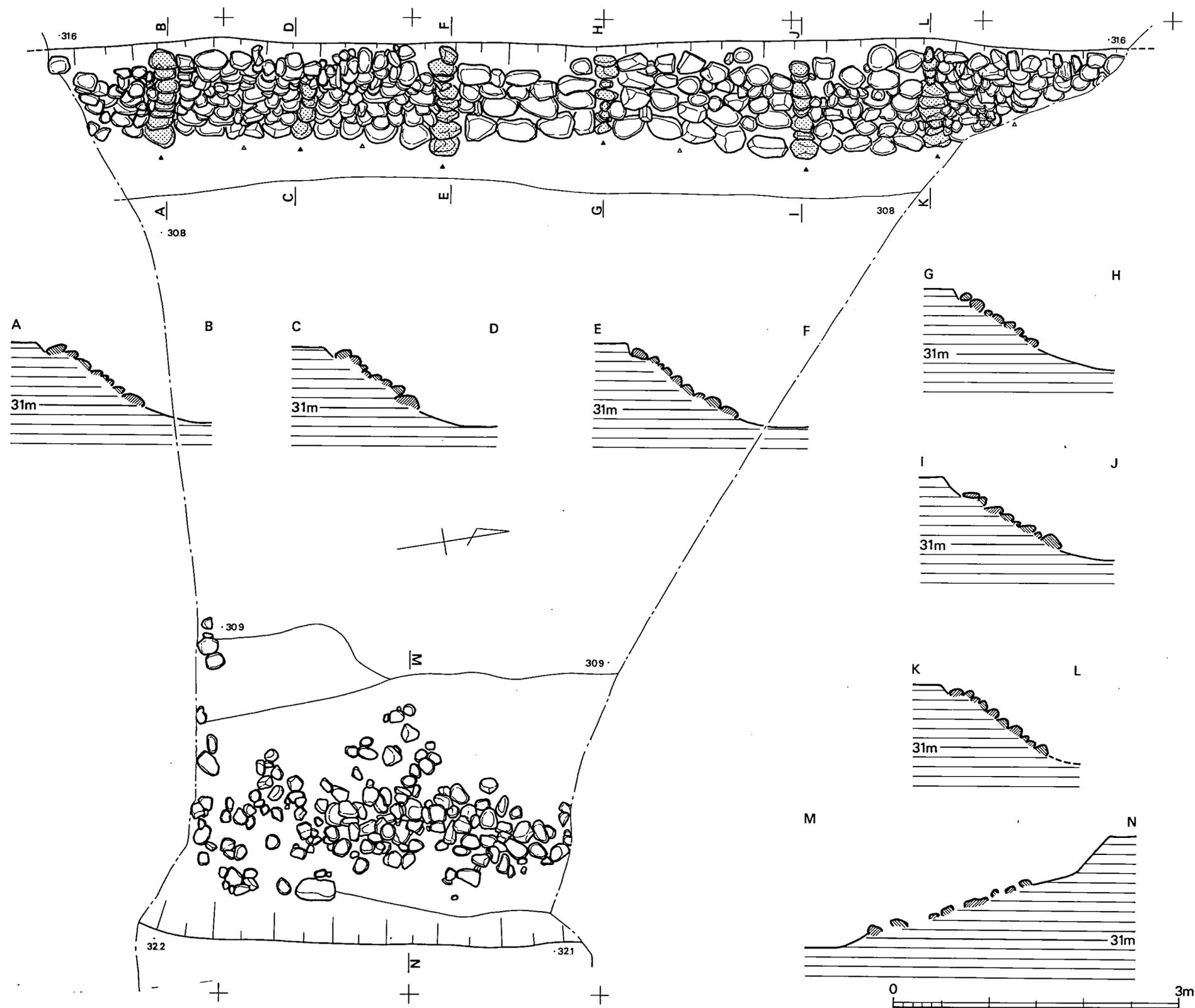
が各々現存している（いずれも上端値）。前方部南側縁の外濠の幅は14mにも達する部分があ



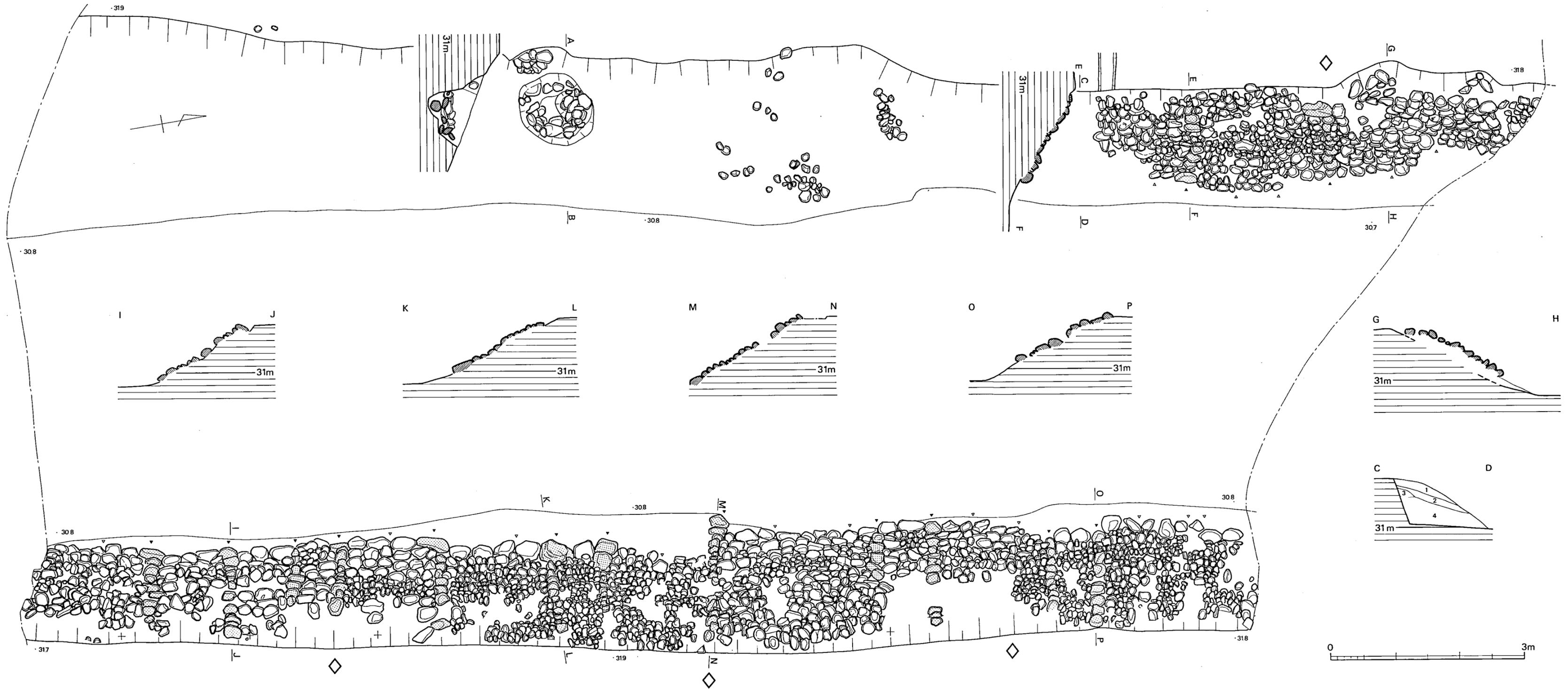
第5図 前方部北西隅角部周濠全体図（1/300）



第 6 図 前方部北西隅角部内濠外縁葺石実測図 (1/50)



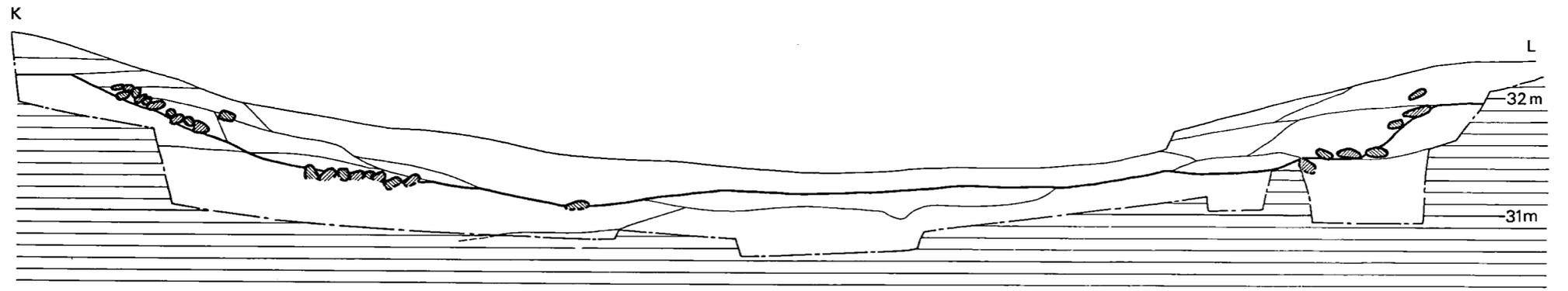
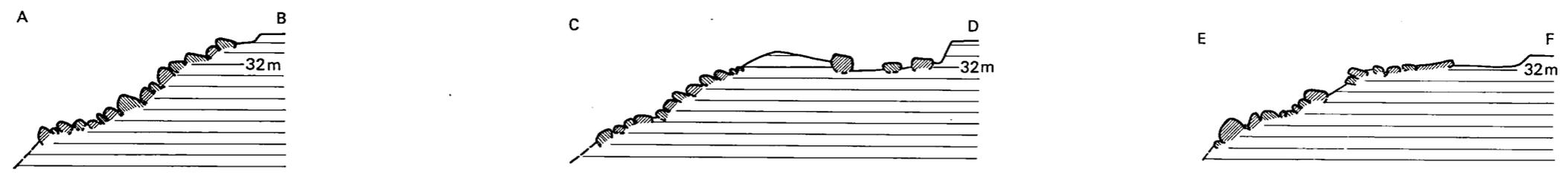
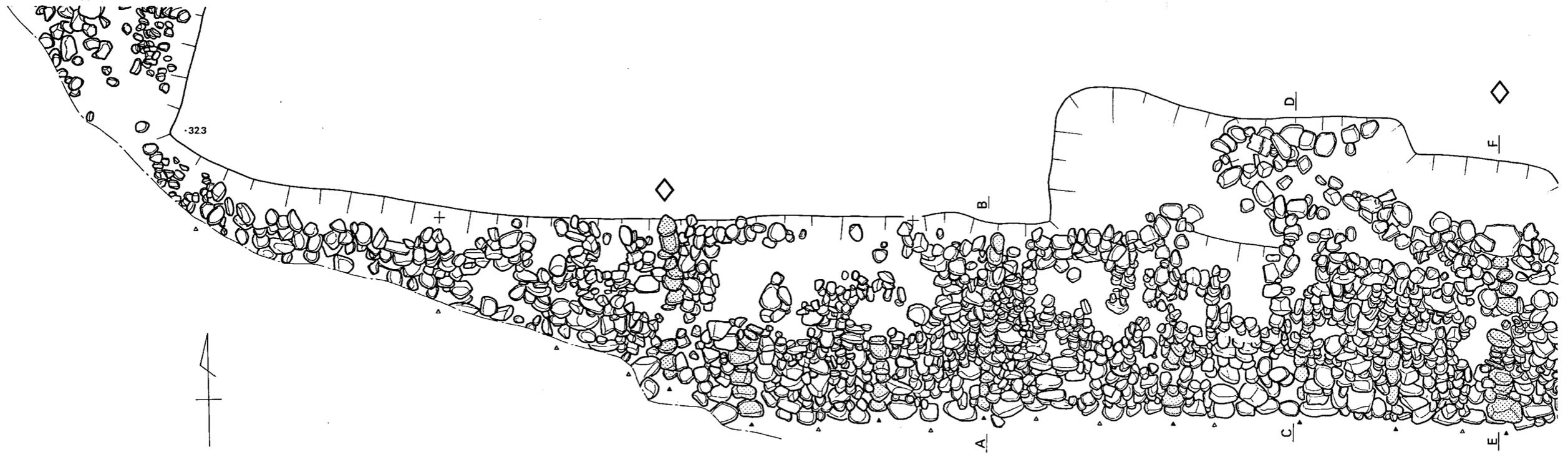
第 7 圖 前方部前縁内濠葺石実測図 (1/50)



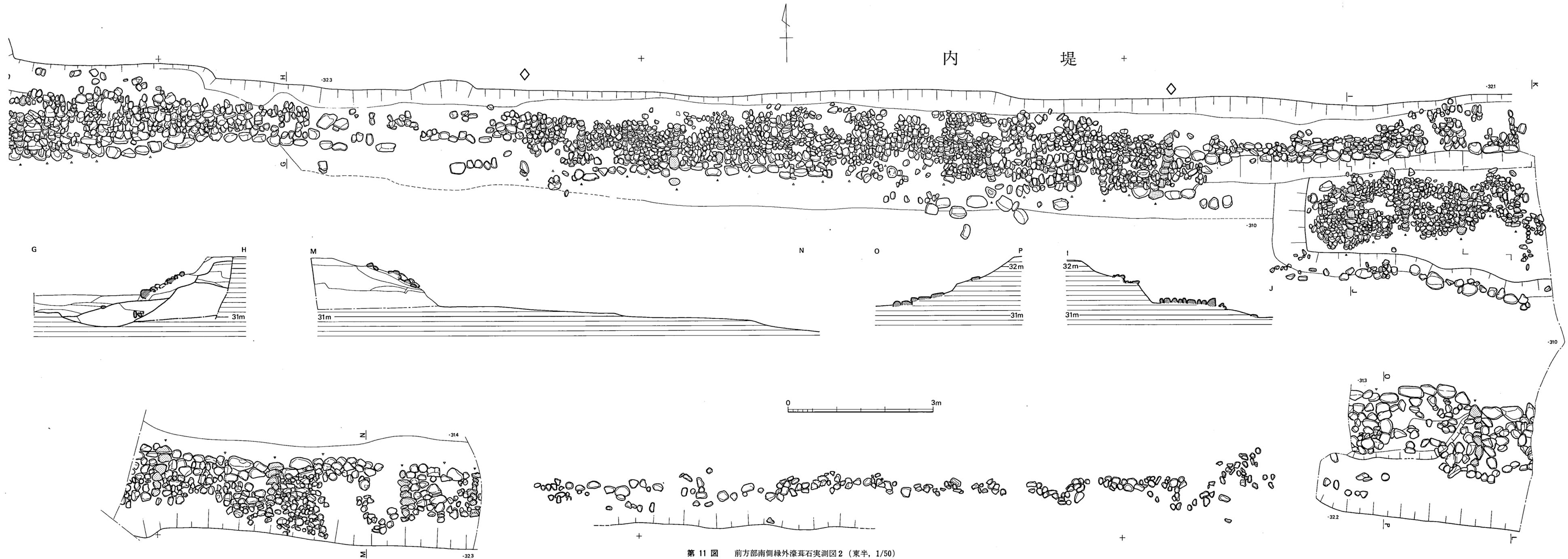
第 8 図 前方部前縁外濠葺石実測図 (1/50)



第 9 図 前方部南西隅角部内濠外縁および外濠内縁葺石と前方部南側縁内濠外縁葺石実測図 (1/50)



第 10 図 前方部南侧縁外濠葺石実測図 1 (西半, 1/50)



第 11 图 前方部南侧縁外濠葺石実測図 2 (東半, 1/50)

り、一様ではない。けれども、東西つまり前方部と後円部、正面と背面の整備がかなり意識されて行われたことが窺える。

なお、上面は削平を受けているので、当初の内堤の幅は現状よりも若干狭まり、また内外の濠のそれは逆に少しく広がっていたであろうことは無論のことである。

また、前方部南側縁にあたる内堤には、不整形な土塊状の落ちこみがあり（図版24-1）、この西側に設けた浅い試掘用トレンチから鉢形土器（第48図5）が出土した。次節以降で述べるように、周辺部特に西から東側にかけての一带からは、本墳に先行する住居跡などの各種遺構が確認されている。いわば古墳築造時の削り残しでもある内堤部分には、他にもこうした遺構が現存すると思われるが未確認。

### 3 埴輪列

墳丘の外周では、原位置を保つ埴輪の出土例は皆無である。内堤および外堤相当部には、樹立するために掘ったであろう列あるいは溝の痕跡すら残っていない。出土した円筒埴輪の基底部高が11～26cmであることから、内堤は少なくとも20～30cmは削平されているとみてよい。従って埴輪の樹立法の詳細は不明である。ただし、円筒埴輪25（第20図）の破片が前方部前縁の内外両方の濠から採取されているので、これが内堤上に樹立されたことは疑いなかろう。なお、後述するように、人物・盾形埴輪が外濠から出土する例が多いことが注意される。

### 4 葺石

内外の周濠各斜面に現存する。概ね旧状を良くとどめているが、前方部前縁の内濠内縁、同外濠外縁での残り具合は芳しくなかった。北西隅角部から東側にかけての大部分と、墳丘および外濠外縁の南西隅角部についての調査を、断念せざるを得なかったことは既述のとおりである。以下推定される施工時の手順を追って説明を加えたい。

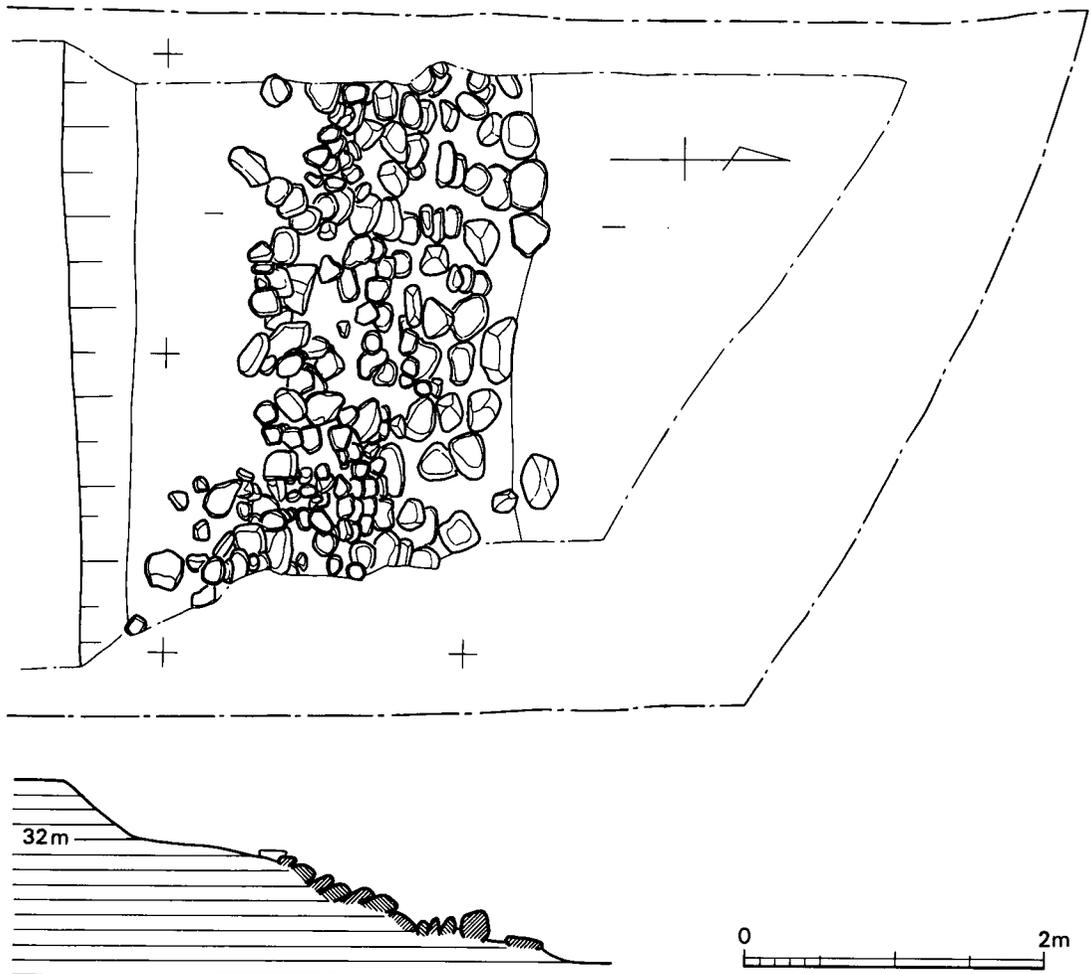
**地均し** 周濠は、後章にて詳述するように墳丘築成用土砂の土取場でもある。従って、土取時の荒削りによって生じた地形の凹凸を調整し、かつ、全体の形状と規模とを当初の計画（設計）に合わせるための盛土・整形作業がまず行われた。掘削された法面は、そのまま地山が露出している箇所は少なく、大部分は程度の差こそあれ土砂によって覆われている。この覆土は、その上に葺かれる石の安定にも役立つのである。北西隅角部の内堤から外濠にかけては円礫層が表層となっており、一時はこれらを葺石群と誤認した程で、特に念入に覆土されている（図版9-2）。

**石材** ほぼ全てが、丸い河原石である。大きさは、千差万別で小は丸餅程度から、大は一抱

え程もあるものまでを含み、老若男女を問わない動員がかけられたことが窺われる。

**石の葺き方** 基底部の高さも不揃いで（図版12）、当然場所による仕上がりの精粗の差が著しい。多様ではあるが、一応、基底部により大き目の石を使い、以上は水平にはではなく濠側の端が若干高くなるように裏ごめしつつ石を重ねる（図版17-2）という手法を基本としている。石の重ねは概して深く、調査時にも我々が踏みつけたせいで移動した箇所は極めて少なかった。

仕事ぶりの差は、従事者の性格だけではなく、性別・年齢をもある程度反映しているようだ。前方部前縁内濠の外縁は、各作業範囲も1.4~2.2mと幅広く、全体としては最も整然とした仕上がりとなっている。しかし、基底部の高さや石の大きさは一定せず、中央部（第7図のE-



第 12 図 第10トレンチ実測図 (1/50)

F, G-H間)のように大き目の石を貼りつけるかのようにして空間を埋めている箇所もある。手間を省こうとした屈強な壮年男子の所業か。

一方では、幅0.7~0.8と狭いながらも、小石を丹念に面を揃えて重ねている箇所もあり(図版15)、高年の女性像を偲ばせる。

なお、葺石の基底部は濠底と斜面との接点—屈接点にはなく、これよりも幾分か上方にある箇所が大部分だ。一方、基底部の高さは一様・水平ではない。つまり、濠の水を水盛りに活かしたとは考えにくい。

**分担範囲の表示** 石を葺く作業が分担作業であったことは充分考えられる。本墳でも各々の受持範囲の標示として、まず縦一列に石を葺いている(各葺石実測図の▲印)。これを界石列と仮称しておきたい。もっとも、前方部南側縁の外濠内縁東半部などのように縦の石列として特には標示していない箇所もある(第11図)。ただし、その場合でも、積み方、石材の大小などで作業範囲の識別は可能なことが多い。

これらの界石列は、予め基底部から最上端までほぼ一直線に据え置かれたものが多いが、数回に分けたと思われる箇所もある。

さて、これらの界石列間の幅は表2に示すとおりである。0.6~2.5mと広狭多様で、最多列の1mでも54例中の8例を占めるに過ぎない。0.7~1.1m例が計30例と6割近くに達するが、数値が一定していないのが注意される。

一方、幅が1.5m以上に達する例が15ヶ所で確認されている。前方部前縁の外濠内縁では特にその傾向が強い(第8図)。けれども、それらの内部は石の大きさ、積み方などでさらに2ないし3に分割される(各葺石実測図の△印)。換言すれば、狭い例の2ないし3倍の広がりをもつと考えてよいことになる。

これらの界石列で区切られた空間よりもさらに大きなまとまり——作業区(工区)の存在を想定させる広がりがある(各実測図の◇印)。その広がり、前方部南側縁では10~14m前後、前方部前縁の外濠内外両縁ではその半分程度の5~6mと狭く、一定していないのが注意される。

工区の存在は、石を葺いた斜面に不整合面が散見されることから傍証される。内濠外縁の

**表2** 塚堂古墳葺石界石間の幅一覧表

幅m	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.2	2.3	2.5
内濠外縁	1	4	1	3	2	2		1	1	3		1		1		1		
外濠内縁	1	1	4	3	5	4	2	1	2		1		3		1			1
外濠外縁					1					1						1	1	
計	2	5	5	6	8	6	2	2	3	4	1	1	3	1	1	2	1	1

南西隅角部から前方部南側縁にかけてでは、2ヶ所に段差が確認されている（第9図）。南側縁のそれは修正されていないが（図版17-1）、南西隅角部では覆土して葺き直されておりさほど目立たない（図版16, 第9図E-F, G-H）。隣接工区との調整・整合よりも受持工区の作業消化を優先させた結果であろう。

なお、前方部南側縁の外濠内縁東端の濠底には、張り出したような広がりをもつ礫群が存在する。界石列も4条が確認されているが、傾きは僅かで水平に近い（第11図）。これらの南側は、基底部材に相当するとみられる大き目の河原石が散在する。一方、斜面には葺石群がこれらとは別に存在する。ただし、その基底部は斜面の中腹近くに置かれており、これら以西の基底部線とは大きなズレを生じている。

## 5 墳丘（第2・13・14図）

墓地ならびに家屋（現在は無い）による封土の変改が、特に南半部において著しい。2段築成の墳丘の傍は、前方部前縁北半から同北側縁、北側くびれ部付近にかけて辛じて残っている程度である。裾部もまた、水田、道路によって蚕食されている。

後円部は、再三述べたように大きく抉られている。現存最高部の標高は、前方部が約39.8m、後円部では約40.5mであるが、繁茂した樹木の関係でみかけは前方部の方がより高く見える（図版5-1）。現在の後円部墳頂と水田との比高は約8m。

墳丘本体の発掘調査・測量図の作成は、既往の調査の契機からして未着手のままである。従って、より旧状をとどめていた第1次調査時（昭和9年）の報文を以下に再録し参考に供したい。

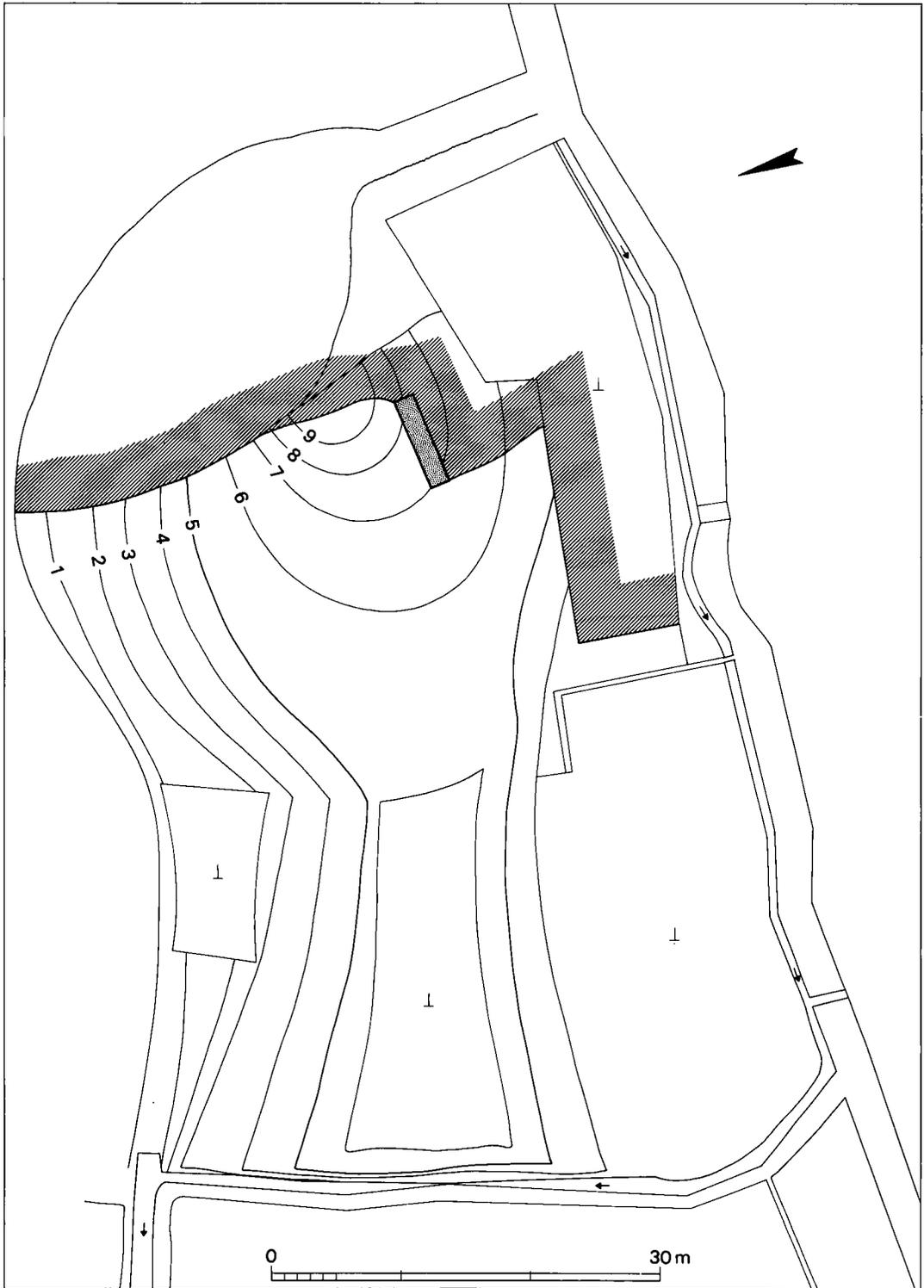
なお、局所的には確認された墳丘裾部から推定される当初の墳丘規模は、

全長 約91m      前方部幅 約68m      後円部径 約64m

に復元される（第13図）。

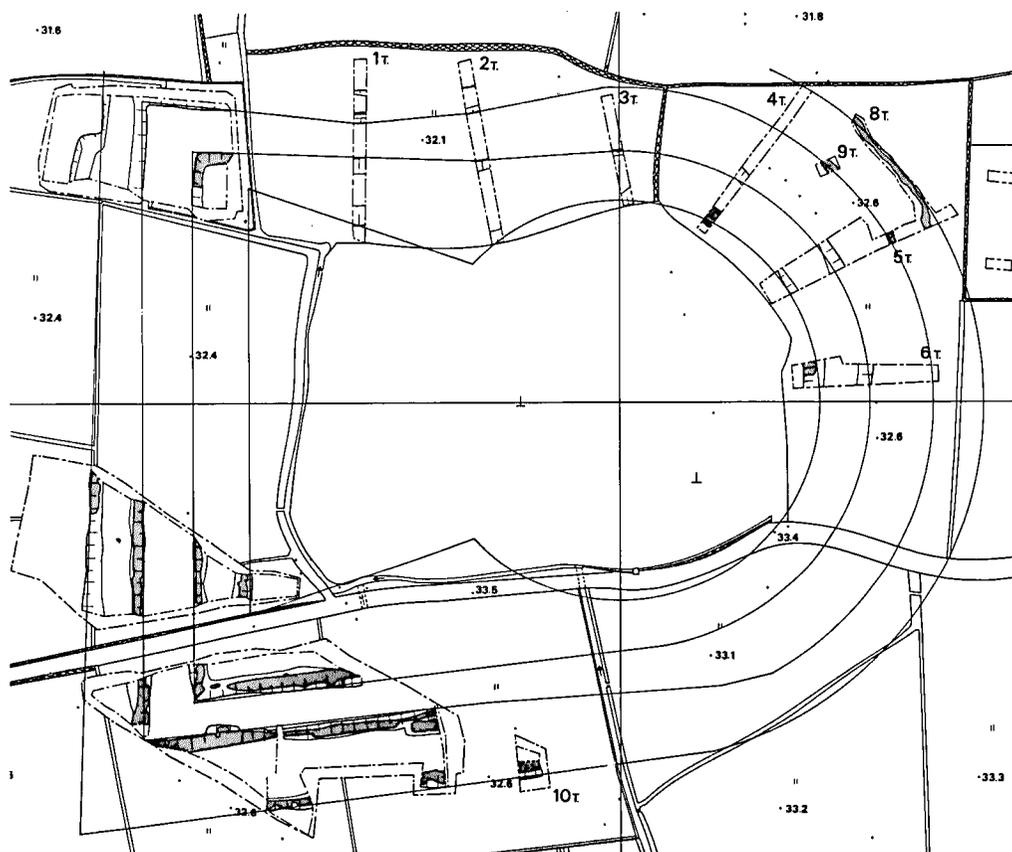
## 二. 古墳の構造

塚堂古墳は日岡古墳の東方約五町の地点に営れた整美なる原型の大部分を留むる前方後円墳である。前方部を北々西にして日岡古墳の後円部に向って相對し、北方筑後川を距てて、朝倉郡志波村寶満宮の箱式古墳と相對している。古墳全体の敷地は早くより地目山林の民有地となつて、墳上後円部中央より南に面した一帯及び前方と後円との接合するクビレ目及び前方部の北端等には地均して後世の墳墓が営れ所謂重葬の形をなしている。或は墓地の一隅には地藏尊の祀れるあり、前方部の南側には家屋あり、前方部中央両端の地点には今般新築建設され又南側の古墳封土と水田との間には村道通じ、形の各所に於いて損ぜる部分はあるが、古墳の中軸



第 13 図 墳丘測量図 (1954年測, 1/500)

より北側一帯は大体に於いて本来の面影を留めて、樹木鬱蒼たる封土田圃の間に存し、一見其の古墳たることを認めしめるものがある。後円部頂上の幾分低下せるは筑後川長野井堰構築の際主墳の石材を採れりという伝説があつて、其の一個は現に徳丸部落の一隅に存する石であると言うが必ずしも其の為に生じた痕跡とも定め難き程度である。又後円部頂上の中央部には明治初年官選戸長松下其の妻女を埋葬し、昭和六年他へ廻葬したる由であるが、後円部中央封土内の石室の存否については何等の伝説も無い。筑後川井堰に使用せる石材は多く古墳石材で、それを使用せりとの伝説は浮羽郡朝倉郡方面の古墳にはいづれもつきものである。従つて本古墳後円部内の石室に就いては未だ確定的の認定を下し難く今後の発掘調査に俟たなければならぬ。本古墳の周囲に環濠在りしや否やに就いても全く伝説は残っていないが、其の跡と思われる溝は前方部の西辺に存し、南側辺には細流と化して太古の俤を伝うる如く思わしめる。封土の葺石ならんと思考せしむる石は点々として樹木の間に存し、所々に埴輪円筒破片の遺存する



第 14 図 塚堂古墳周濠復元図 (1/1,200)

ものあり現に前方部古墳南側辺より約四米の内側一帯には古墳の主軸に併行して東西に羅列された埴輪円筒が封土内に存している。此の埴輪円筒列は地表下一米余の土中に在り、二條の帯状隆起帯を有する高さ四〇糎径三〇糎の赤褐色の見事なる円筒いづれも相接触して古墳の外方に向って傾斜して並んでいる。今後埴輪円筒列の発掘を行えば或は装飾埴輪等を得可きも家屋樹木等に妨げられて今直に発掘は困難である。

## 6 前方部石室の構造

本墳の特色の一つは、前方部と後円部とに各1基、計2基もの内部主体が営まれている点にある。前方部石室は既述のように2回にわたり調査されており、このうち昭和9年時の調査結果については前項と同様に宮崎氏報文を再録することとする。

なお、前方部石室の閉塞石は完存しており、室内へは前壁北西隅から出入りしている。この開口部から流入した土砂が室内の前半に厚く堆積している（図版25-1）。また、後述する壁面の突起は全て失われた。

### 三、前方部墳（第15図）

前方部中央西辺より約三米、封土の地表下約三米、古墳周囲の水田の線より約二米の高さの墳丘内に方形に石室が営れている。羨道の構築無く直に石室の入口に達する竪穴式石室と外形の似ている横穴式石室である。両側壁及び奥壁は長さ三〇糎余の幅狭い割石を積み上げて上に四個の天井石を横へ、石室の入口は西側にあり幅四九糎の羨門は各々一枚の巨石を両側面に立て其の間敷石の上に又一枚石を立てて羨門を塞いでいる。石室は奥行三米一二糎、横幅一米五九糎、高さ一米九四糎の立方形の空間を保っている。石室内東側の奥壁下には長さ一米五一糎、高さ二三糎、幅三六糎の石床を横へこれには二個の短甲及び数十個の鉄鏃をのせた儘発見された。此の石床と両側壁との間に間隙を有するのは恐らく石室の構造成った後に石床を羨門入口より搬入したものである。奥壁面の右方に片よって石室底より一米一八糎の部分に一個、北側壁面の右方これは底部より一米二〇糎の高さ、南側壁面には二個底部よりの高さ一米二〇糎の位置にいづれも径一五糎余の扁平なる石棚を造り出している。奥壁面左方の石棚一個は脱落したものであると思われ、其の一片は石床上に発見され他の一片は石床の方に頭を向けて石室内に横る人骨粉の顔面上に発見され、北側壁左方の一個も脱落して地上に存し欠損した痕跡は壁面の割石中に認めしめる。此等はいづれも石室内の装飾とは考えられず、現に奥壁の一個には直刀を載せた儘発見され、北側の二個は其の下の地上に発見された鉄鏃二本をのせたものとも推測され、鉄鏃の重量に耐えずして一個は脱落したものであろうか。副葬品を置く為に設けたと考えられるものは以上の石床と石棚との二種である。石室内底面には砂礫を敷き詰めて居り、

石室が地平線より上部の封土内に存すること等に依って、石室内の湿気は充分除去せられたものと思われる。石室の構造が堅牢で一石一土と雖も石室内に侵入すること無く、加うるに湿気の除去に就いても考慮せられているため有機質の遺物さえ現今に至るまで伝え得たのであろう。

## 7 前方部石室での埋葬状態と遺物出土状況

前節同様、宮崎氏報文を再録する。

### 四、埋葬状態（第15図）

石室内中央部石床の方を頭として人骨粉は其の体貌の儘に白色の姿を描き出していた。石床基より三三糶を距つる部分に歯牙整然として並び、中には二三齶歯らしきものも見受けられたが何れも一種の光沢をさえ認め得る頑健のものであった。身長五尺四五寸余の壮年期の男子と思われ、陪葬墳であり副葬品の武具の豊富なること等に勘え合すれば首肯し得る点がある。此の東枕の灰化した骸骨の周囲には棺槨の遺れるもの無く、されど死骸は勿論木棺に納めてあったものの如く、鉄釘らしきものは発見し得なかつたが骨粉と共に木粉は夥しく発見された。次に副葬品の配置に就いて述べれば直刀は全部で九口、其の一は奥壁面の石棚に載せてあり、一は奥壁面左方に立てかけ刃尖を石床下に置ける短甲の中に突き込んで居る。他の二口は奥壁面の右方に立てかけ、五口は人骨の周囲に在り、一は頭の上方に置き、二口宛其の左右に置いている。これは屍体を木棺に納める時に同時に五口の直刀を体側に納めたか否かは不明である。刃部の向け方には一定の方式は無くまちまちである。次に短甲は三個で二個を石床上に安置し一個は石床下の左側に置かれている。石床上右側に置ける短甲は小札威の腰鎧を帯したままの姿を留めて居る。鉄鏃は百数十本あって全部石床上に置かれ、奥壁面に立てかけてあったとも想像され、奥壁面の右方には三個の鉄鏃の壁面高き処に固着した儘で発見され、石床下の左右に発見されたものは石床上より落下したものであろう。次に屍体と南側壁との中間の石床に近き部分に一個の肩鎧の鉄片の多数があり、其の上に兜二個一は完全品他は形貌破損のものが発見された。更に石室底部西北隅には二個の鉄鏃身と柄部を巻きたる鉄針金と思われる羅線状の金属が発見された。其の他には石室西南隅の地上に砥石一個を壁面に立てかけて置かれている。それより東に接して鏡一個、滑石製品四個、滑石臼玉七百余个が散乱して発見された。又人骨頭部よりガラス製管玉六個、右腕節の上部の辺に縦切の口を上に向けて貝釧一個が発見された。主要なる副葬品は上述の如くであるが遺物整理中に刀子一個、鉸具の金具三個、小札を威した革具残欠多数等を発見した。副葬品の各項に就いては次項に詳述しそれに対する考案をも附記し度い。

## 8 前方部石室閉塞石前面の構造

室内の清掃・実測後、7月25日から発掘を開始した。「上部小石、下部葺石とその下粘土層被覆」（金子氏メモ原文）からなる閉塞石裏ごめ部分を「粘土層下部」まで掘り下げて、大きな平石（閉塞石）を露呈させた。発掘範囲は原状をなるべく損わないよう「1.5m四角」（第16図で一点鎖線にて示す）に限定された。

不明点が多いものの、横口部前面には天井石が架けられたされない袖積みが付設されているようだ。金子氏によれば「3列」だけ積まれており（図版24-2の左端）、これと横口部袖石との間は石積みでつながらずに土だけであったという。なお、石と石の間には粘土が詰められていた。

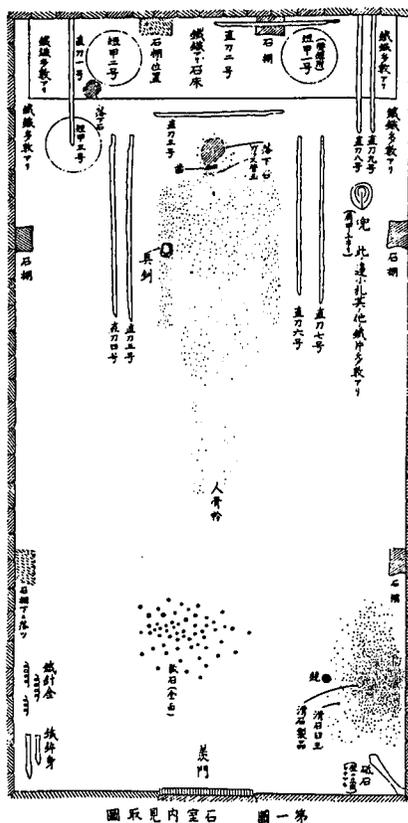
なお、第3次調査時に玄室内の清掃・実測が行われているので、その結果を参考例として掲げる。それによると

玄室長	3.35m
玄室床面長（除石床）	3.3m
幅（奥・前壁とも）	1.7m

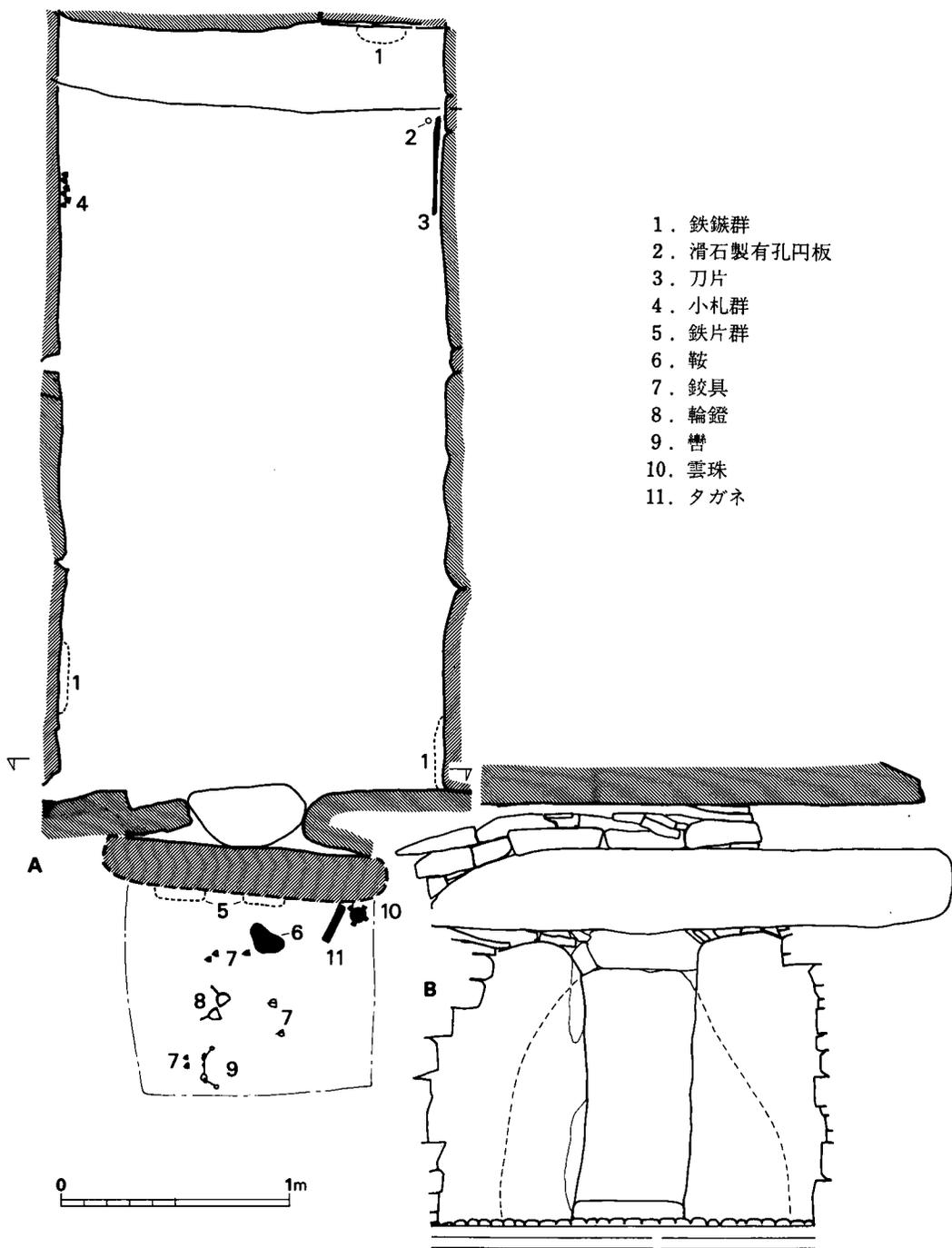
で、宮崎氏報文の数値とは若干異なる。横口部の高さは1.18m。また、室内からは若干の副葬品が採取された（第16図参照）。

## 9 前方部石室閉塞前面での遺物出土状態（第7図）

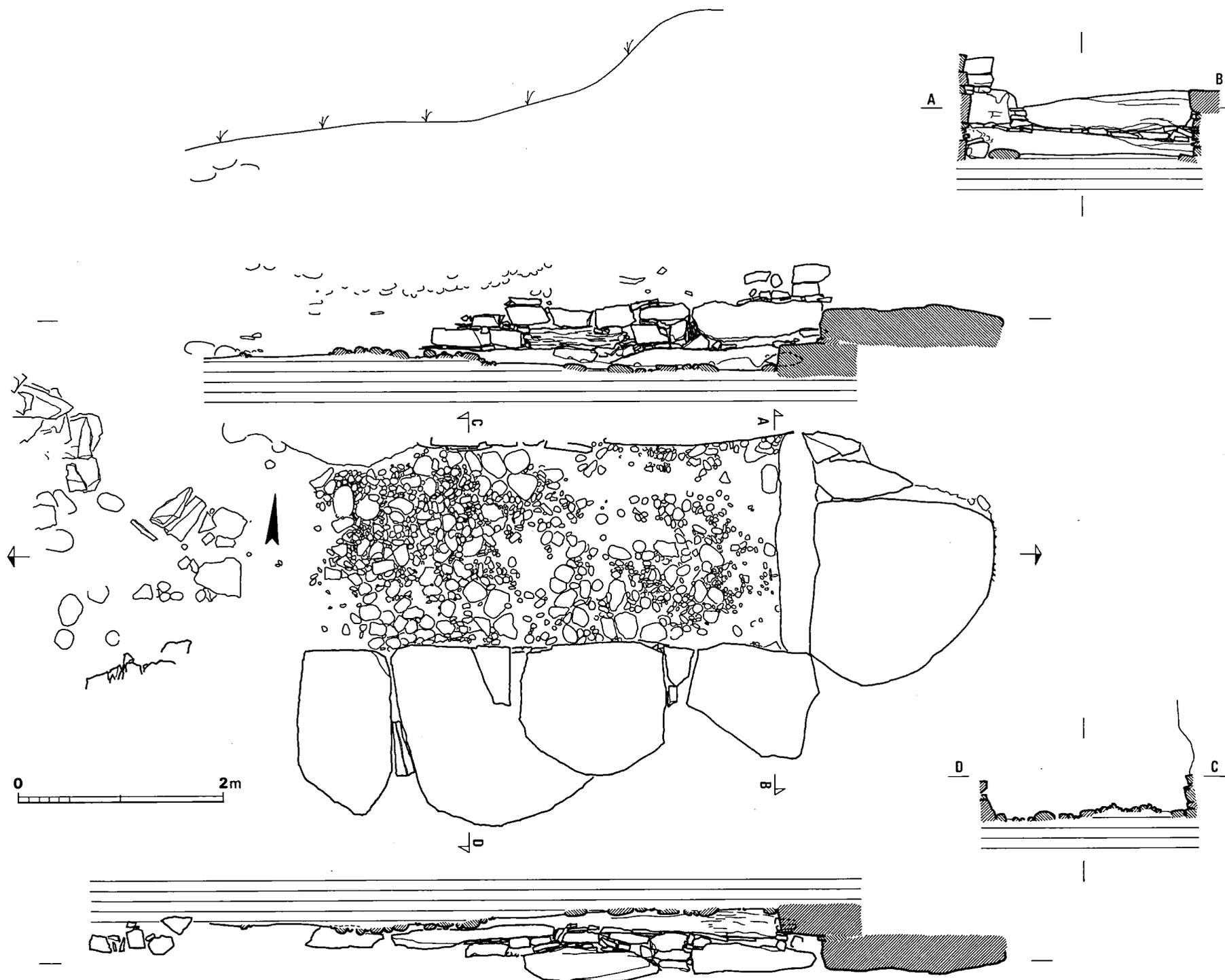
閉塞石前面、玄室とほぼ同じ高さの床面から「不定置」に馬具類が出土した。銚・轡が北側に偏在するとの印象を受けるので、これらの南側に皮バンドなどが並置されていたのかもしれない。また、閉塞石には鉄片が錆着し、その前面から雲珠・タガネが出土したという。鞍は鉄製で、杏葉を含まないセットであることが注意される。（石山）



第15図 前方部石室内見取図  
(転載, 約1/30)



第 16 図 前方部石室面(A)・前壁(B)実測図 (1/30)



第 17 図 後円部石室実測図 (1/50)

## 10 後円部石室の構造（第8図）

石室上面の封土は昭和28年水害復旧のため後円部の約東半分は削り取られた折に発見し県に連絡、工事差止めを行い30年の調査となった。

石室は古く寛文3年（1663）の長野堰水門工事の際、大石を水門工事に持去られた地元の所伝と一致し下部一段東・南・北面の大横積式の石のみを残し、西部は石室の形を残す大石を取去った小石積（後に加工した）の部のみ跡を止め、石室内崩土中より安山質加工の石棺片（内側を朱で塗ったもの）を二片出土。（金子）

現墳頂下約3.5mの標高37m前後を床面とする石室である。基部の2ないし3段しか壁体が現存せず、しかも西壁を全く失っているなど大破してはいるが、西側に開口する単室の横穴式石室とみてよかろう。現状では後円部の中心から南に偏在するかに見えるが（第14図）、既述の墳丘の復元がほぼ正しいとすれば、石室はほぼ中央部にあって南側くびれ部に向かっている可能性が高い。石室の主軸方向は、第2次調査時に作成された各実測図の方位が一定していないので確言できないが、墳丘の中軸線と斜交するものとみられるからだ。

壁体構築に際しては、基部から扁平石材を平積みしている。まず目立つのは、20～30cm内外とさして厚くはないが、東壁の1.7×1.8mに達する例をはじめとする大型材の多用である。ただし、北壁材はさほど大きくはない。なお、東壁材と形状・大きさの良く似た石材が崖下に放置されているので、今では東壁は失われているものと見られる。周壁は僅かに内傾気味で、小割石を適宜用いて丹念に積み上げられており、特に北壁の壁面は美事に整えられている（図版26）。なお、壁面に赤色顔料は塗られていないという。

次に注意されるのは、前方部石室と同様の石床が東壁基部に設けられていることである。出は35cm内外、高さ14～30cmと上面は水平ではなく南側が低い。

この石床の前面、長さ4.5m強の範囲には大小の円礫が2層に敷かれているが、仕切などの施設はない。

西壁の石材は全く現存していないが、南壁と礫床の西端、さらに後述する遺物出土範囲とがほぼ一致しており、ここに横口部が設けられたとみてよい。このさらに南側に、若干外開き気味の袖積みの名残を思わせる石材が見受けられ、奥壁からここまでの長さは約7.2mである。詳細は不明だが、前方部石室のそれと相似た構造であったものと推測される。

玄室各部の内法は

各長 約5m 礫床長 4.5m強 奥壁部幅 約2.1m 北壁現存高 約1m  
と前方部石室よりもひとまわり大型である。なお、横口部の幅は若干狭まっているようである。

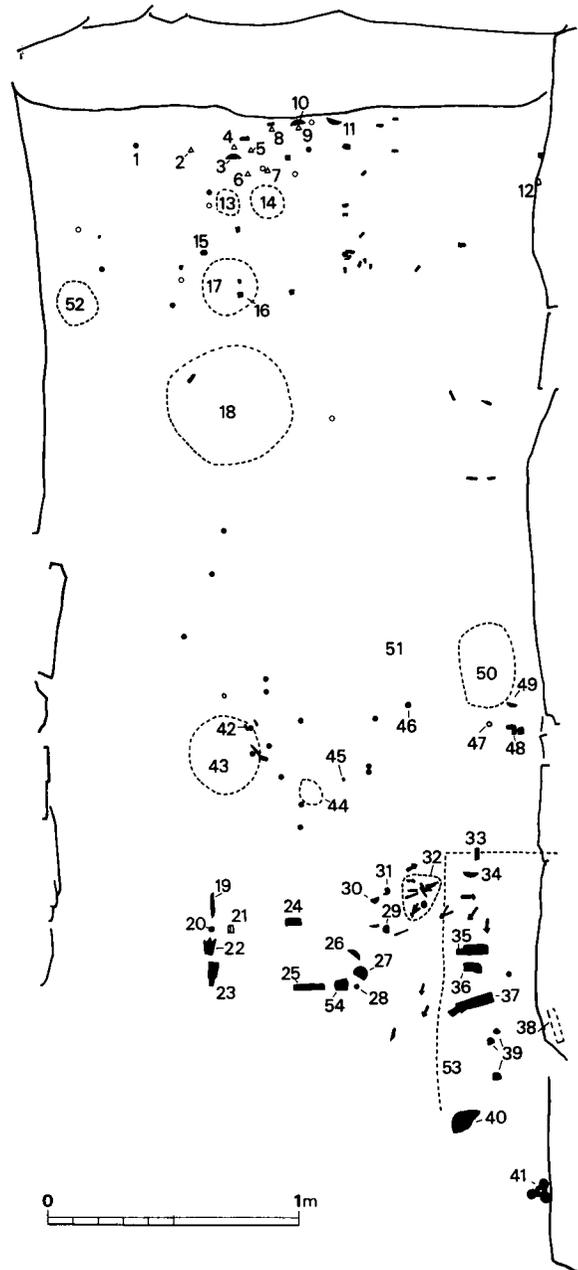
本石室の特色にはさらに石棺の使用が挙げられる。室内から破片しか採取されていないが、組み合わせの便を図るための溝が切りこまれている（第19図）。2・3は共に厚さ10cm強で、

溝幅もほぼ同じ。1は厚さ13cmとひとまわり大きい。3辺とも内面を赤く塗っており、3は側面的一方(▲印)にも塗る。なお、2・3の切りこみからみて、石棺は矩形とはならない。また、現存断片では横口の有無はわからない。

### 11 後円部石室での遺物出土状態(第9図)

崩土を排土し石室床面(小石敷上の)と思われる所から散乱した形で多数の遺物を見出す事が出来た。薄片の物・るい弱の銅製品は殆どが環鈴を除いては破損残片の物ばかり出土したが、散乱した形や、貴重品の出土状況から見ると以前の石取りの場合貴重品として埋葬品を取上げた形は考えられず、そのまま踏み荒されて破壊し取除かれた物であろう。唯、土器の完形品・破片と大型鏡が出土してないのは当時取去られたものであろう。

貴重な物として環鈴・鍍金の鈴鏡の鈴・着飾りの夥しい玉類(大・小・白玉・管玉・勾玉・土製勾玉等)の石・ガラス製の物が封土の崩壊した中にも混入して沢山出土した。又石室東北床面より二塊の硫化銀朱が獣骨片と共出し、小型銅鏡片6面種が残片となって出土、又銅碗片の口片部も一片出土、エビラ鍍金縁金具・鉄剣・鉄刀・鉄鏃類



第18図 後円部石室内遺物出土状態実測図(1/30)

(柳葉型の物が多く)は床面各所に散在した。

滑石製小玉・勾玉形・有孔小円板等も石室内外から出土した。外小玉(粟・小玉)・中玉・白玉はガラス製, 管玉(出雲石と硅岩大・小)勾玉(土製・青石・ヒスイ)の類が出土。

馬具は少く鞍金具・止金具・尾錠等が出土。尚金張の杏葉片も数個分出土。(金子)

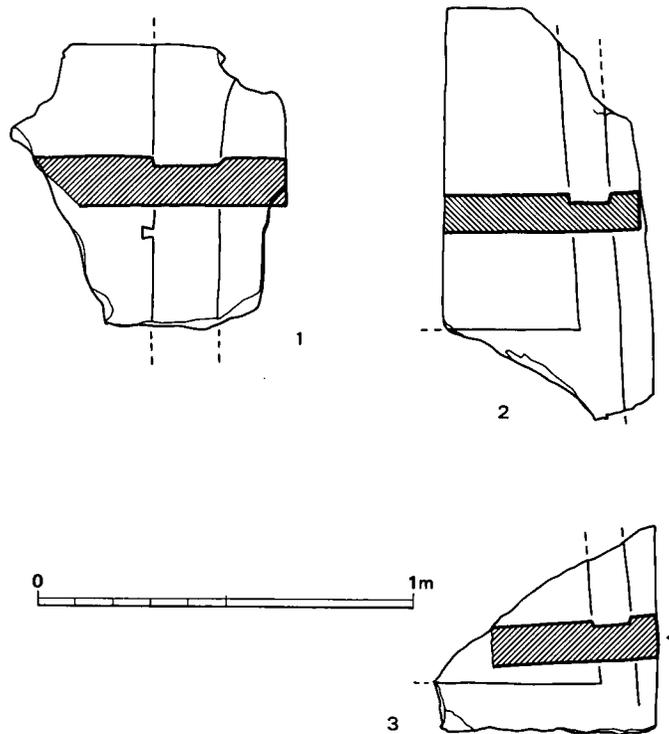
既述のように, 室内は盗掘を受けており, 石棺・石室ともに大破している。

従って, 各遺物の採取位

置にさほどの意味があるとは考えられないが,

1. 石床上面からは採取されていない。
2. 中央部は空白
3. 滑石製品の出土は東端の石床前面に多い。
4. 馬具類の出土は西端に集中する。

のが注目される。



第19図 後円部石室内石棺材実測図 (1/20)

第18図 後円部石室内遺物出土状態実測図

- |             |                      |              |              |           |
|-------------|----------------------|--------------|--------------|-----------|
| 1. 硅岩製玉 (赤) | 13. 鉄片群              | 20. 鈴        | 33. 刀        | 46. 鈴     |
| 2. 滑石製剣形品   | 14. 滑石玉25            | 21. 鈴具       | 34. 鏡片       | 47. 鉄環    |
| 3. 鏡片       | ガラス玉(青2, 緑2)         | 22. 杏葉       | 35. 鉄器片      | 48. 止金具   |
| 4. 滑石製剣形品   | 15. 赤色顔料             | 23. 剣        | 36. 銅椀?      | 49. 鏡鈕頭   |
| 5. "        | 16. 青銅片              | 24. "        | 37. 刀        | 50. 鉄鏃群   |
| 6. 滑石製有孔円板  | 17. 滑石玉4             | 25. "        | 38. 銅器       | 51. 玉群    |
| 7. "        | ガラス玉(青・大5, 青・小2, 緑4) | 26. 鏡片       | 39. 鋌留金具 (銅) | 52. 青銅片   |
| 骨           |                      | 27. " (鋸歯文)  | 40. 鞍金具      | 鉄片        |
| 8. 滑石製有孔円板  | 18. 滑石玉2             | 28. 鈴片       | 41. 環鈴       | 獣骨        |
| 9. "        | 管玉1                  | 29. 銅片       | 42. 管玉       | 滑石玉2      |
| 10. 鏡片      | ガラス玉(緑7青9)           | 30. 鋌留金具 (銅) | 43. 挂甲片      | ガラス玉 (青2) |
| 11. "       | 鉄鏃群                  | 31. ヒスイ勾玉    | 44. 鉄鏃群      | 53. ガラス玉群 |
| 12. 土師器片    | 19. 鉾                | 32. 胡籛金具     | 45. 鏡片       | 54. 剣片    |

## 第3節 出土遺物

### 1 埴輪

内・外の濠底堆積土中から採取されたものが殆どで、一部表採品を含む。

各地点から出土した埴輪の内訳は

#### 第1トレンチ

円筒 10, 57, 58

#### 第2トレンチ

円筒 12

朝顔 2

盾 25, 26 (33と接合) 27, 28  
32, 33

家 2

#### 第3トレンチ

円筒 14

盾 55

#### 第4トレンチ

円筒 16

盾 31, 38, 39

#### 前方部北西隅角部内濠

円筒 18, 19, 20, 21, 22

衣蓋 5, 6, 17

#### 前方部前縁内濠

円筒 7, 8, 25, 46, 56

朝顔 5

盾 17

衣蓋 3

動物 4

#### 前方部南側縁内濠

円筒 5, 13, 28, 33, 42, 43, 47

#### 第5トレンチ

朝顔 1

衣蓋 2, 12

#### 第6トレンチ

円筒 3

人 10

盾 37

衣蓋 7, 8

動物 1, 2, 3

#### 第8トレンチ

盾 12, 34, 35, 54

動物 6

#### 前方部北西隅角部外濠

盾 13

#### 前方部前縁外濠

円筒 1, 4, 15, 25, 29, 30, 49

朝顔 3, 4, 10

人 2, 6, 8

盾 1, 3, 7, 9, 16, 18, 41

家 1

#### 前方部南側縁外濠

円筒 6, 9, 11, 17, 24, 31, 32, 55

朝顔	7, 8, 9	人	5, 7, 9
盾	6, 19, 22	盾	2, 4, 5, 8, 10, 14, 15
衣蓋	9, 10, 11, 13, 14		20, 23, 29, 36, 45, 46, 47
動物	5		48, 50, 51, 52
表採		動物	7
円筒	26, 34, 35, 44		
朝顔	6		
盾	11, 21, 24, 30, 40, 43, 44		
衣蓋	15		

となる。

なお、上記の番号は種別ごとに一連とし、図版および挿図に使用したそれと一致するが、図示していないものもある。

#### (1) 円筒埴輪

本墳出土の円筒埴輪は、

1. 胎土は細粒を含むものの極めて精良
2. 焼成良好
3. 色調は赤褐色、赤茶褐色、茶褐色
4. 突帯は4ないし5条
5. 透孔は、円形で、調整後1段目と3段目（突帯4条）あるいは2段目と4段目（突帯5条）に、段毎に90°ずらして各段相対する2孔計4孔を穿つ

点でほぼ共通する。従って、以下の各個体の記述に際しては、特にふれない限りは上記の通用性を備えているものと解していただきたい。なお、上記の1～3は朝顔形円筒埴輪および各種の形象埴輪の項にも準用する。

口縁部の形状でこれらを分類すると、

##### I類 口縁部に穿帯がつく

- a. 扁平幅広——22, 25, 28, 34
- b. 丸くふくらむ——30, 31, 49
- c. L字形に折れ曲がる——15

##### II類 口縁部上面がくぼむ

- a. 口縁部の外反度が目立つ——1, 3, 57, 58
- b. 口縁部の外反度がさほど目立たない——13, 20, 26, 32, 56

##### III類 口縁部内側に段がつく——9, 17, 18, 24

##### IV類 口縁部が内傾する——29

V類 口縁端部が丸くおさまられる——42

VI類 口縁部外側に斜めに下がる段がつく——43

となる。なお、35は須恵質である。

#### I a類

形状、成形、調整法いずれも一様ではない。口縁部突帯の形状は、22ではさほど突出しないが、28、34のそれは目立つ。口縁部以下の突帯も、22、28のそれが高くしてシャープであるのに対し、25は低くて鈍い。

22は、口径32.5cmで、器表最上段も斜刷毛目の後にB種横刷毛目(註8)をかける。成形・調整は稍雑だが、内側の刷手目調整の範囲は広い。前方部前縁の内堤上に樹立されたとみられる25は、口径32.3×34.5cmと厚手・大型で、胎土に細粒を多く含み器肌がざらつくのが特色。桃灰色を呈する28は、口縁部突帯にも衣蓋笠部のそれを思わせる横刷毛目をかけているのが特徴的。34は、内外に斜刷毛目をかける。

#### I b類

30、31はともに桃灰色で焼成甘く、復元口径も32.7cm、30、3cmとほぼ同大。ただし、最上段器表の調整は、30が斜刷毛目、31が縦刷毛目と異なる。49の上部2段の器表はいずれも縦刷毛目。突出度が目立つ突帯は、器表未加工のまま貼付けているようだ。細粒が目立つ。

#### I c類

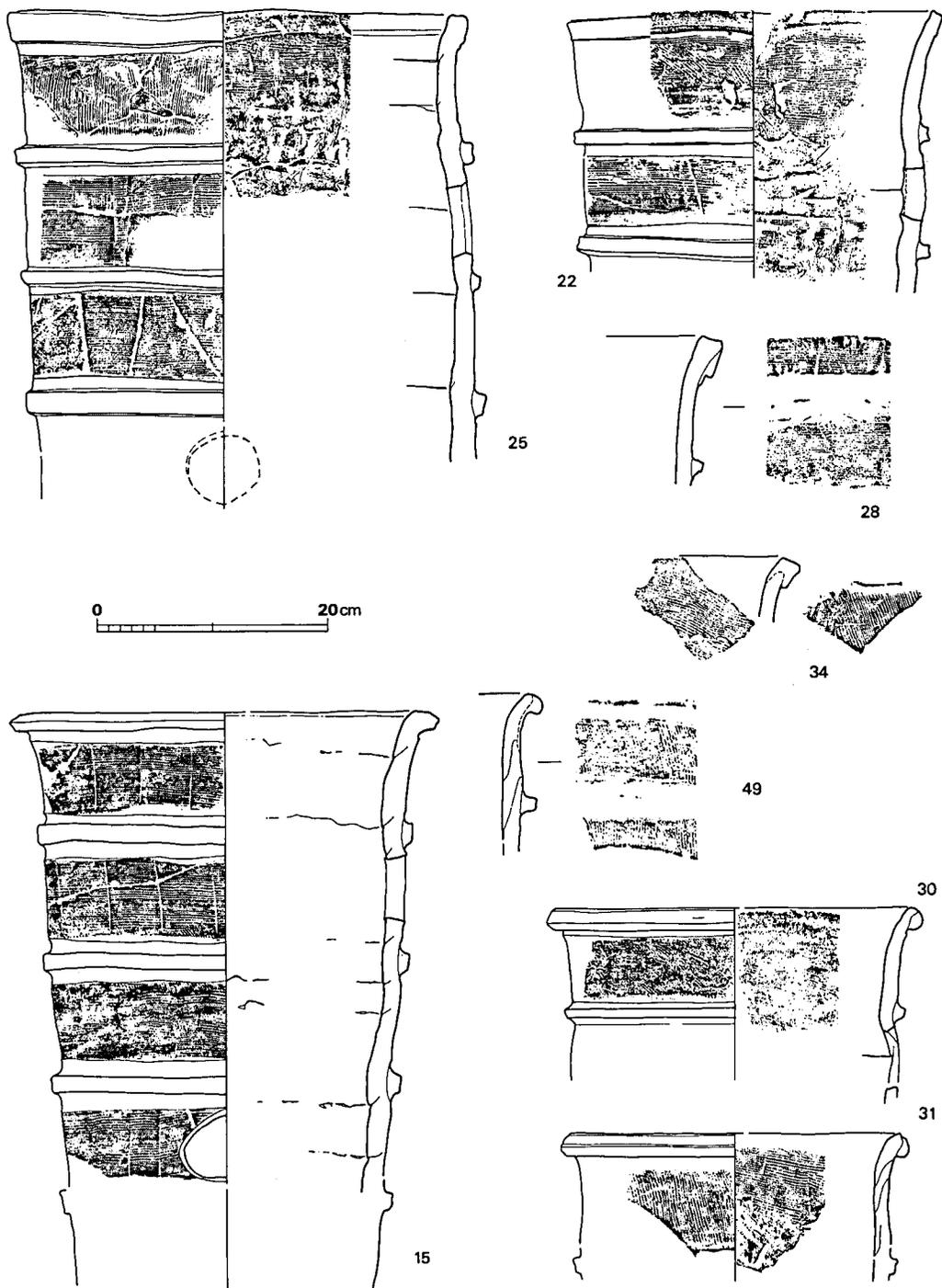
15は復元口径33cm。胎土に細粒を多く含み、器肌はざらつく。突帯数は4条か。2次調整は最上段からB種横刷毛目。内面前面をナデ調整しているのが特徴的。透孔は楕円形に近い。

#### II a類

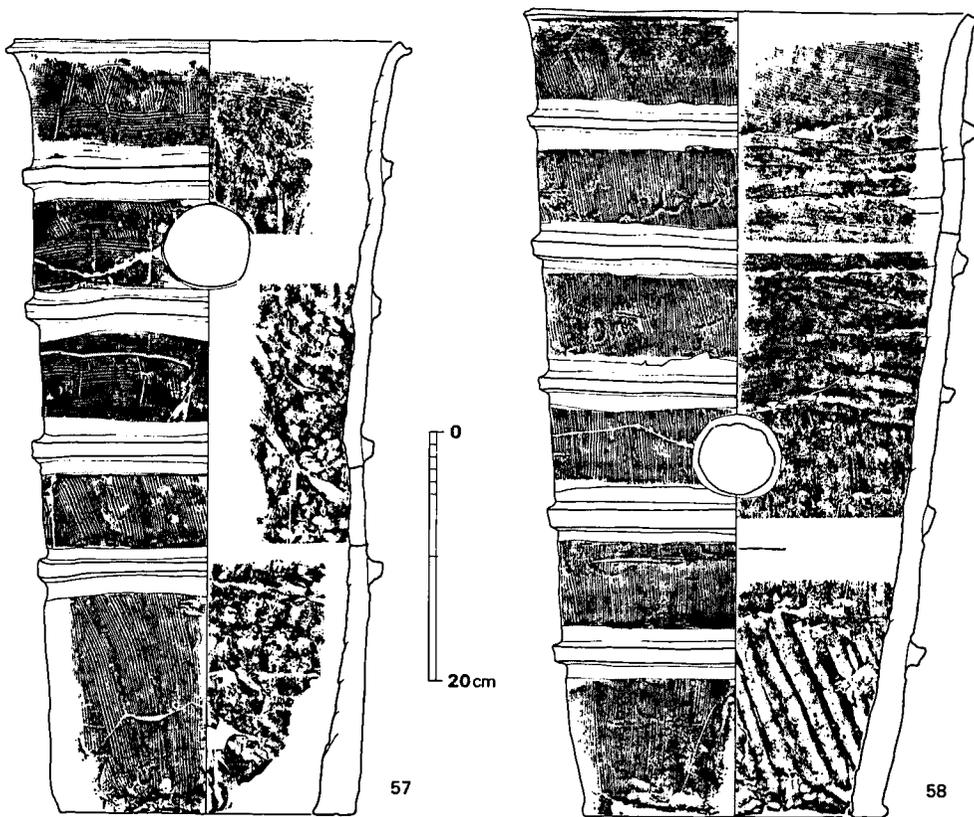
57、58の両例は、全形を復元できる点で貴重。57は、器高62cm、口径32.1×33cm、底径23.3cm。4条の突帯をめぐらし、1段目と4段目とに綺麗な円形透孔を穿つ。5段にわけて成形されており、この継ぎ目が突帯の位置とほぼ一致する。器表は、3～5段にB種横刷毛目を2次調整としてかけている。内面は、口縁部近くに横刷毛目をかけた後以下をナデ調整しており、58も同様。底部の厚さは3cm以上もあり、全体にズングリとしている。

58は、器高64.7cm、口径36×36.5cm、底径24.3cmと57よりもひとまわり大きい。突帯は5条で、この2段目以上(41cm)と57の1段目以上(43cm)とがほぼ同高。つまり、ともに基底部を埋めたとすると両者の上端の高さは揃わない。基底部部以上は高さ約5cmを単位として積み上げている。器表は全面縦刷毛目調整とし、この3段目以上と内側最上段突帯の位置までには赤色顔料が塗られている。ただし、反対側では視認されない。

1と3とは、共に2次調整は最上段からB種横刷毛目をかけており、長円形気味の透孔の形もまた良く似ている。1の口径は32.8×35.2cm、3のそれは30.7×32.5cm。上段透孔の脇に、「の」字を逆にしたような篋記号を付す。



第 20 图 円筒埴輪実測図① (1/6)



第 21 図 円筒埴輪実測図② (1/6)

### II b類

13は口径32cm強、桃灰色を呈して焼成は甘く、風化が進行している。最上段の器表の調整は横刷毛目か。20も桃灰色を呈し、最上段の横刷毛目はナデ調整されている。口径35.2×38.2cm。26は、復元口径35cm、同底径26cm。器高は61cm前後とみられ突帯4条が現存するが、基底部分には縦刷毛目を施すのが通例であることから5条をめぐるしていたものと推定される。最上段からB種横刷毛目をかけており、工具移動幅が3cm前後と狭いのが特徴である。口径39.8cm。32は、口縁部が直線的となるのが特色で、かなり大型とみられる。内外ともに横刷毛目調整。篋記号を付す。56は桃灰色を呈し、口縁部に底辺を上とした三角形文?を付す。

### III類

9は、器表現存部は全て斜刷手目調整と異色。口径35×37.7cmと大型だがイビツ。17も38.8×42.6cmと大型だが、その割には薄手。最上段から2次調整はB種刷毛目。最上段とその下の透孔の右脇に篋記号を付す。18の上から2段目以下には、B種横刷毛目の2次調整後、綾杉文・平行線などの盾部文様とも共通する文様を施している。なお、上段の透孔は上半が隅丸の方

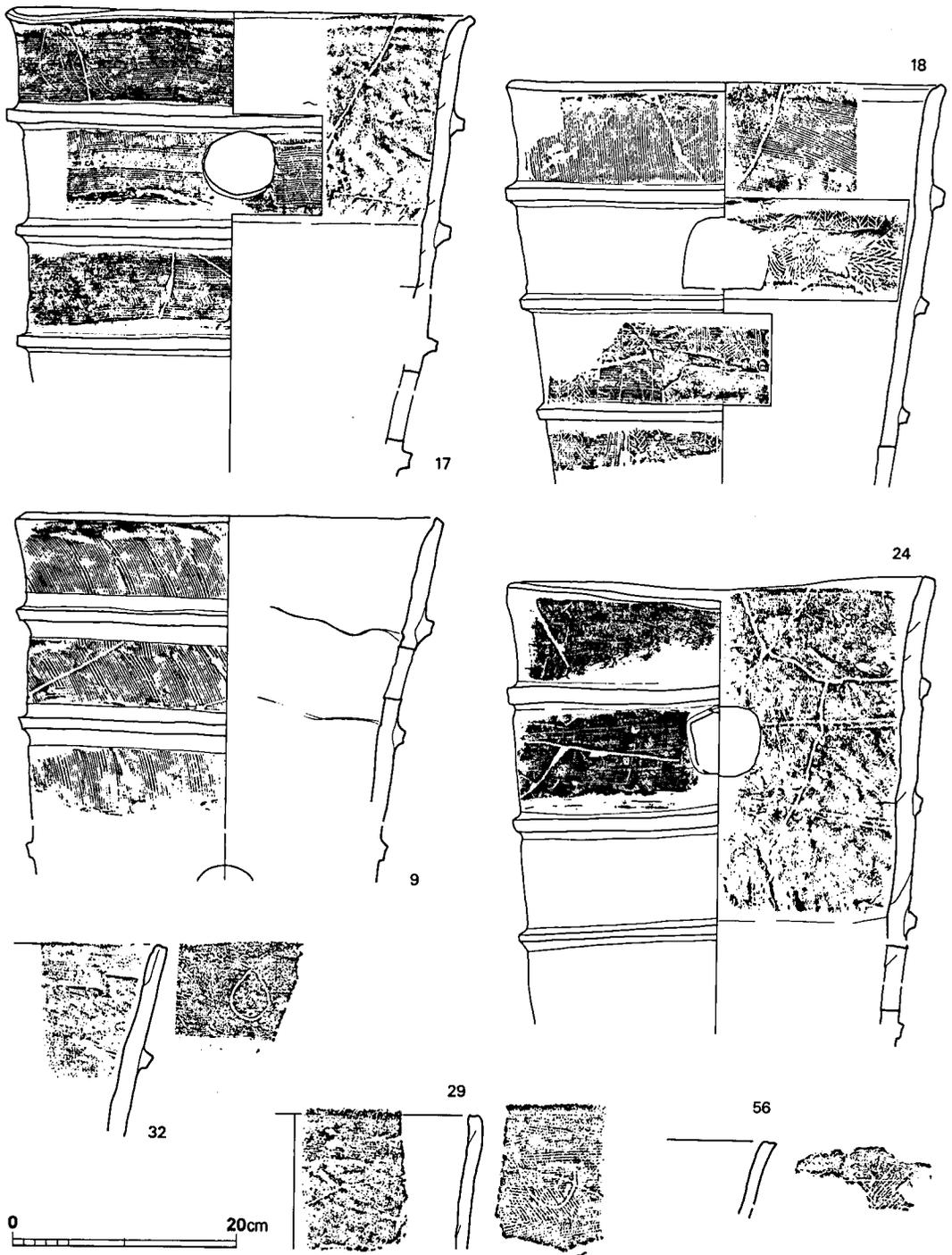


第 22 図 円筒埴輪実測図③ (1/6)

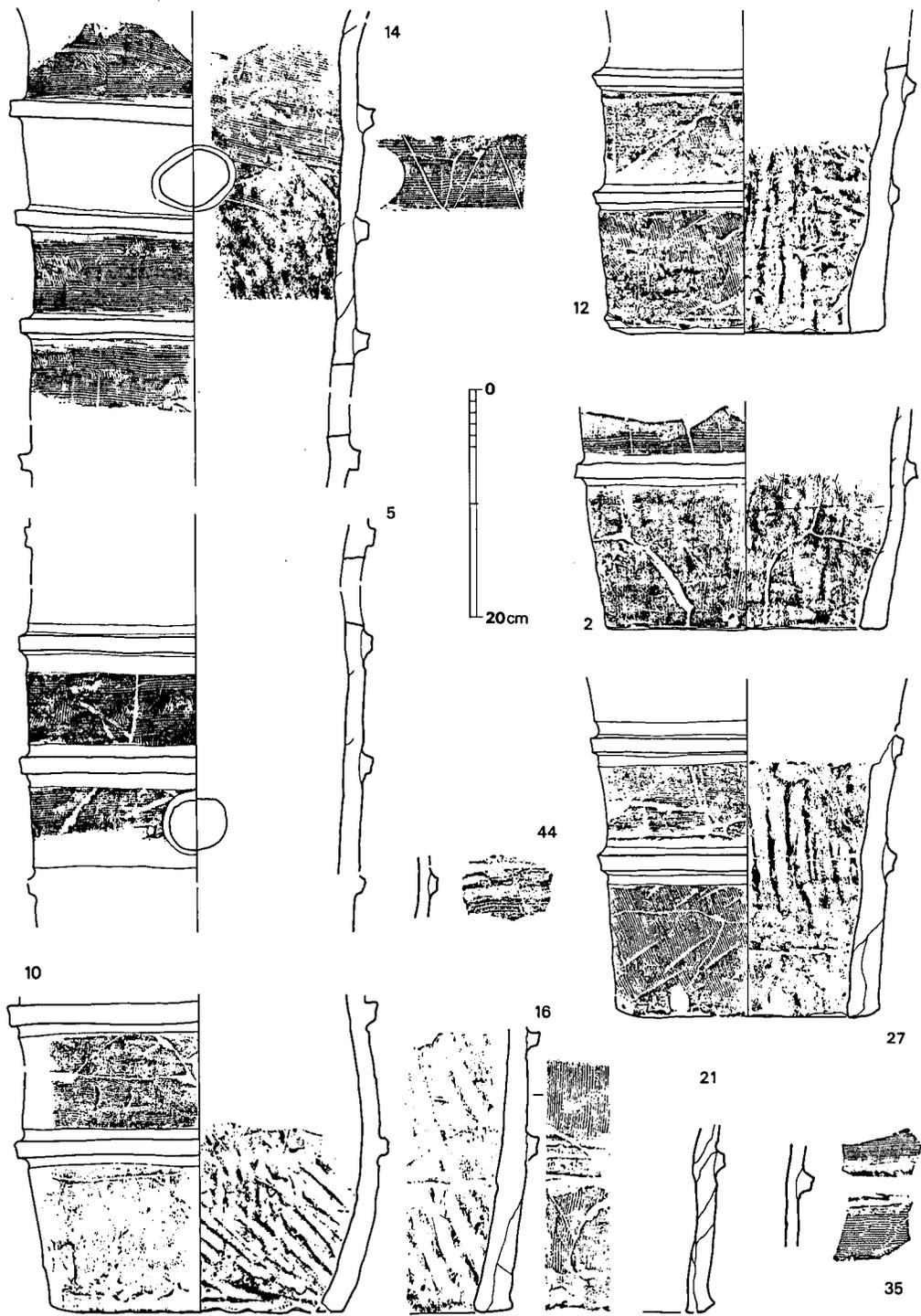
形に近い。24の口縁部内側の段は僅かにつく。口径37.7×43.1cmと大型だが歪む。器表2次調整は最上段からB種横刷毛目。突帯内側の盛り上りが目立ち（9～11cmおき），成形時の区切りを示す。

IV類

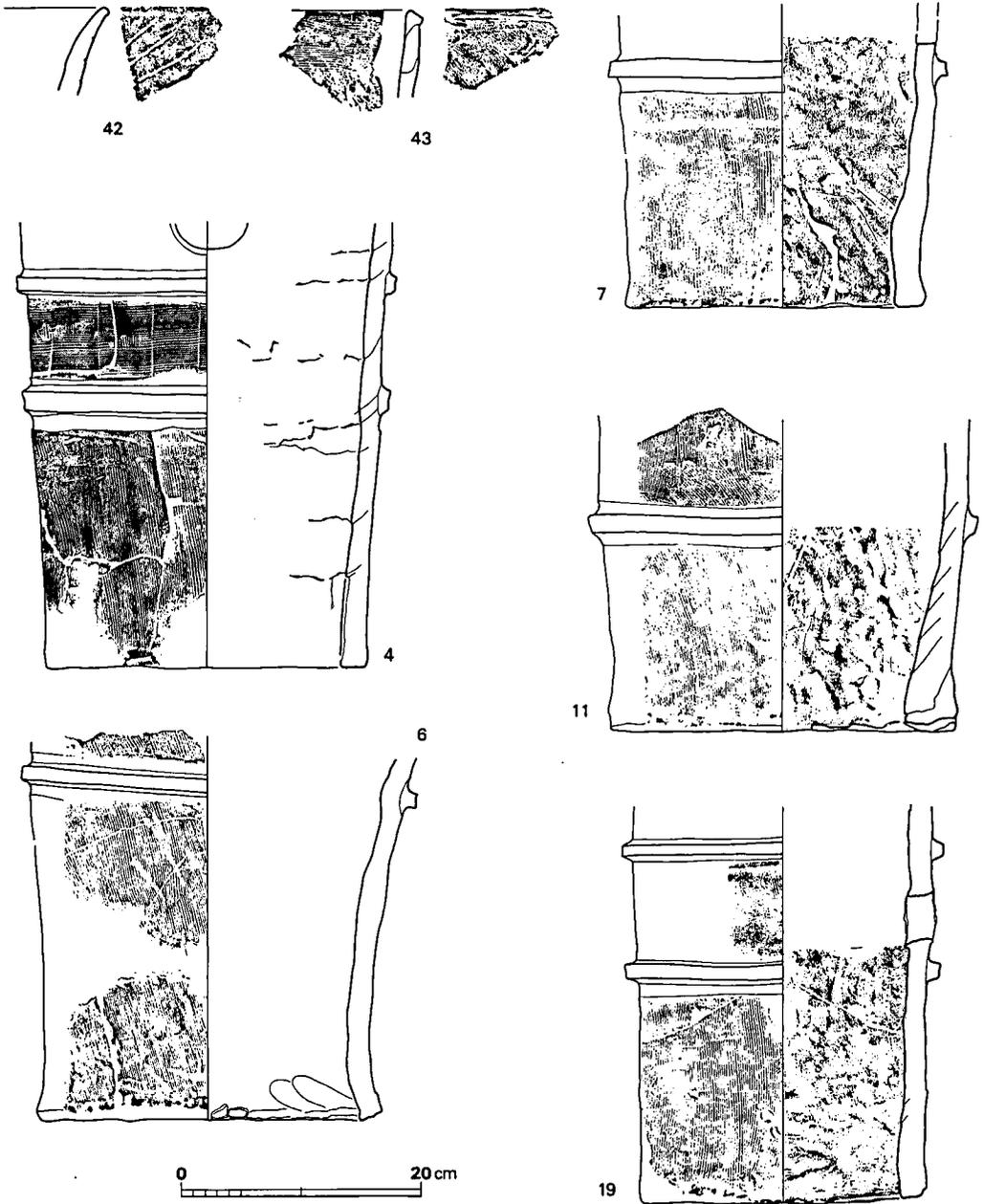
29の口縁上面は僅かにくぼむ。復元口径34cm弱，胎土には細粒が多く，ザラつく。器表最上段は斜刷毛目をかけた後に横刷毛目調整。篋記号を付す。



第 23 図 円筒埴輪実測図④ (1/6)



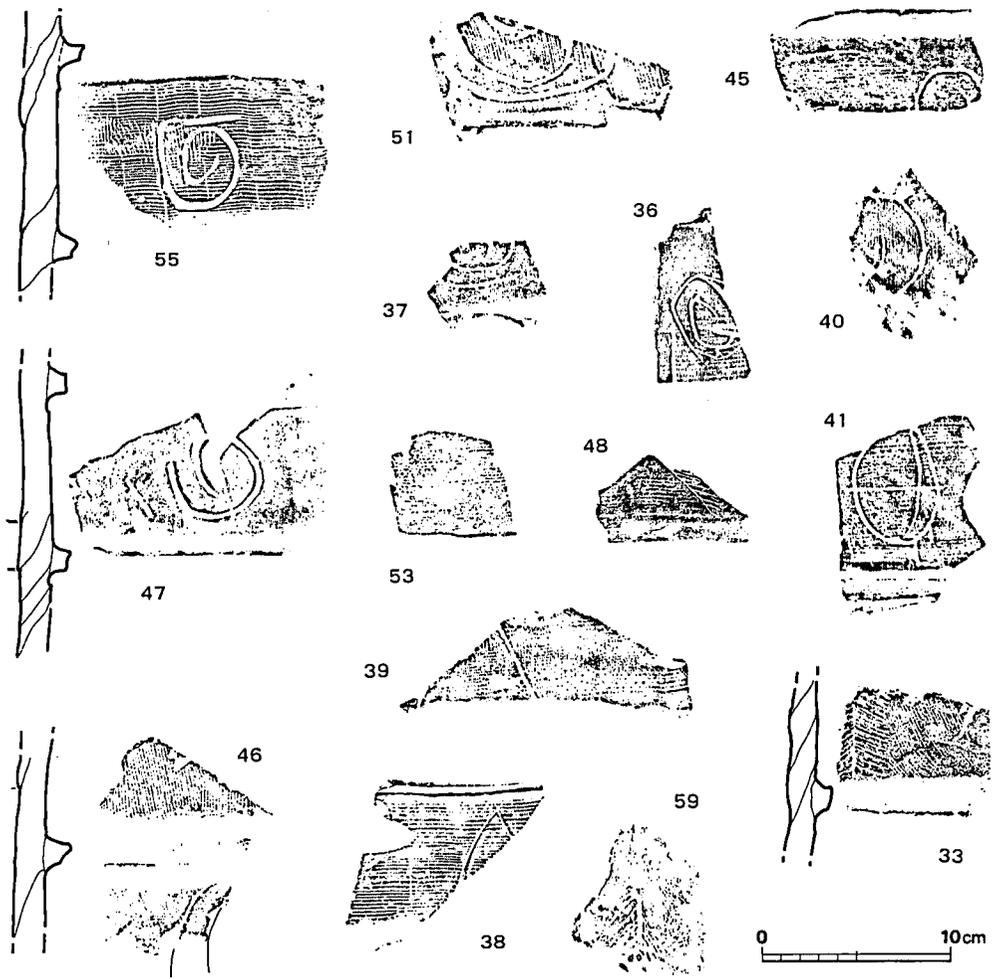
第 24 图 凹筒植輪実測图⑤ (1/6)



第 25 図 円筒埴輪実測図⑥ (1/6)

V～VI類

いずれも 1 片づつと少数派。29 の口縁上面は僅かにくぼむ。復元口径 34cm 弱。胎土に細粒が多くてザラつく。口縁部器表は斜刷毛目調整後に横刷毛目をかけ、篋記号を付す。内面は上端



第 26 図 へラ記号を付す円筒埴輪集成 (1/4)

部に刷毛目をかけた後、以下をナデ調整する。42の器表の斜刷毛目は上端部を除いてナデ消されており、3条の斜線を刻む。桃灰色を呈し、胎土の細粒が目立つ。43も42と同様に軟質。器表には斜刷毛目、内面上端には横刷毛目をかける。

その他

5・14は、2次調整法、突帯・透孔の形態上の共通性から見て、II a 類の1・3と同一グループとなる可能性がある。ただし、14の上段透孔右脇に付された鋸歯文状の刻線は、38・39のそれとよく似るが3とは異なる。

上半部を欠く一群(第24・25図)のうち、2・10・12・16・21・27は、基底部の高さが11.2~12.8cmと低いので、突帯は5条が付されたものと推定される。2は、復元底径24.5cmで、1

段目はB種横刷毛目の上に縦刷毛目がかけられている。10の成形は拙劣で歪みが著しい。復元底径は25.7×27.5cm。12の底部は自重で歪む。底面にはワラシベ痕が残り、底径は22.2×25.7cm。厚手。16の底面には篠竹痕が残る。第1段の器表は1次調整のみ、21は、桃灰褐色。27の基底部表面には、幅7cm前後の木口痕が明瞭に残る。

4・6・7・11・19は、基底部の高さが15.4～26cmにも達している。突帯は、透孔の位置からみて、7と19は4条、4は5条が各々付されたと考えられる。4の復元底径は27cm弱で、第1段以上の2次調整をB種横刷毛目としている。6の基底部は26cmと最高。底径は27.5×28.8cmで、底面にはワラシベ等の痕跡が残る。7は、厚手で、復元底径は25cm。11は、桃褐色を呈して厚手。復元底径は29cm。19も厚手で、桃灰褐色。

2次調整をB種横刷毛目とする例には、以上の他に36・38・39・41・48・53・55がある。

筧記号も多様で(第26図)、同一と思われるのは14・38・39のみで、33と53ともよく似ている。「の」字形の渦状となるものが10例を占めるが、小異がある。47では刷毛目(B種横刷毛目か)を全てナデ調整で消去しており、本墳出土品では極めて異例である。

須恵質の35(第24図、図版27)は、表採品。胎土は精良で、青色を呈して硬質。16mmピッチのB種横刷毛目をかけ、全体にシャープな感を受ける。

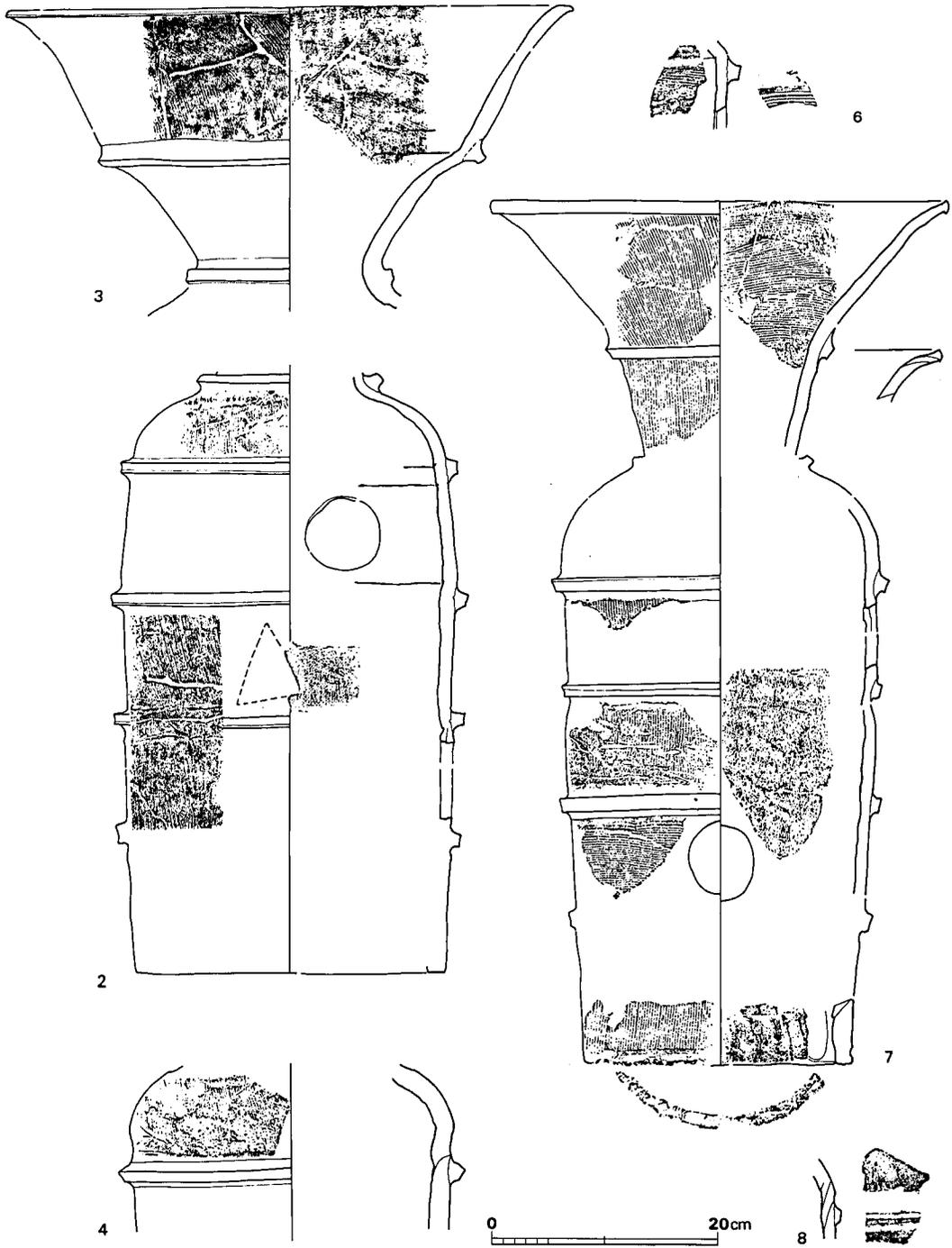
## (2) 朝顔形円筒埴輪(第27・28図)

確認し得たのは10個体である。形態、成形・調整、胎土、焼成などに小異があって一様ではない。うち、6と7とは須恵質である。

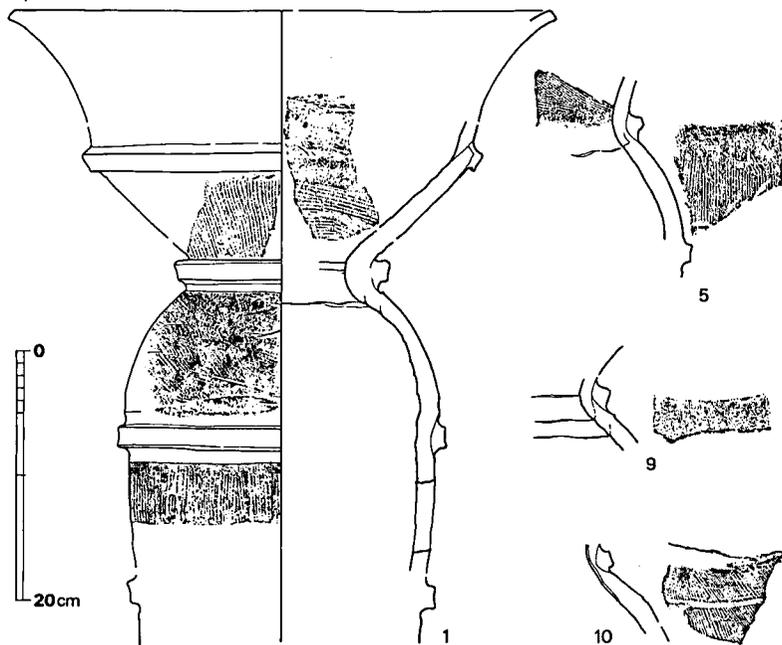
7は、全形を推定できる唯一例。赤茶褐色を呈する口縁の一部以外は暗灰青色を呈する。胎土には細粒を多く含み、他個体との識別は容易である。図は各部片を合成したもので、復元総高は約77cm、同円筒部高54cm、同円筒部最大径28cm、同底径24cm。口縁部復元径41cmと大きく外反しており、復元頸部径は14cm。口縁部は、刷毛目調整後に折り返して仕上げている。器表全体に縦刷毛目をかけ、第1段のみ2次調整(B種横刷毛目)している。口縁部上半の内側は横刷毛目調整、以下はナデ。2段目に二重丸の筧記号を付し、底部には布目痕をとどめている(図版28)。全体に薄手。なお、口縁部器表の一部に赤色顔料が残存している。

2は円筒部のみで歪みが著しい。突帯4条をめぐらして7とほぼ同高とみられるが、最大径は60cm弱でずん胴となるようだ。全体に薄手で、胎土の細粒は器表はさほどではないが、内側は目立つ。外側は赤褐色だが、内側は灰褐色。突帯の割付・接着強化のための沈線は、蛇行する箇所もあるが間隔は11cmと一定している。器表は2次調整も縦刷毛をかけているが、4段目には細い木目の板を、以下には粗い木目の板を使用している。透孔は、段毎にほぼ90°ずらして2孔、計6孔を穿っており、出土品中では他に例がない。なお、2段目の透孔は三角形となる可能性がある。

3は口縁部のみで、復元口径47.8cm、高さ26.5cmと7よりもひとまわり大型。赤橙色を呈し



第 27 図 朝顔形円筒埴輪実測図① (1/6)



第 28 図 朝顔形円筒埴輪実測図② (1/6)

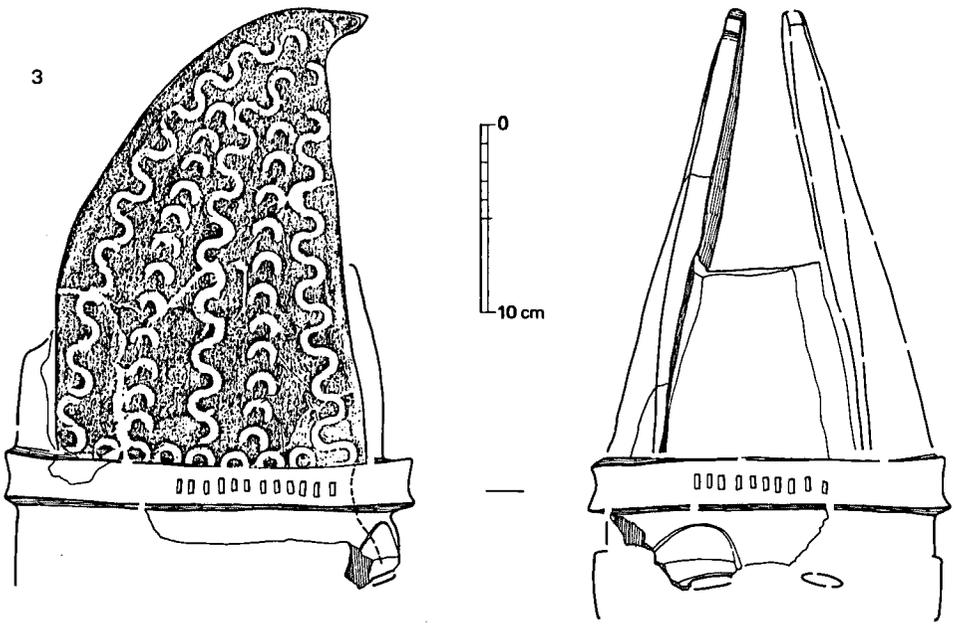
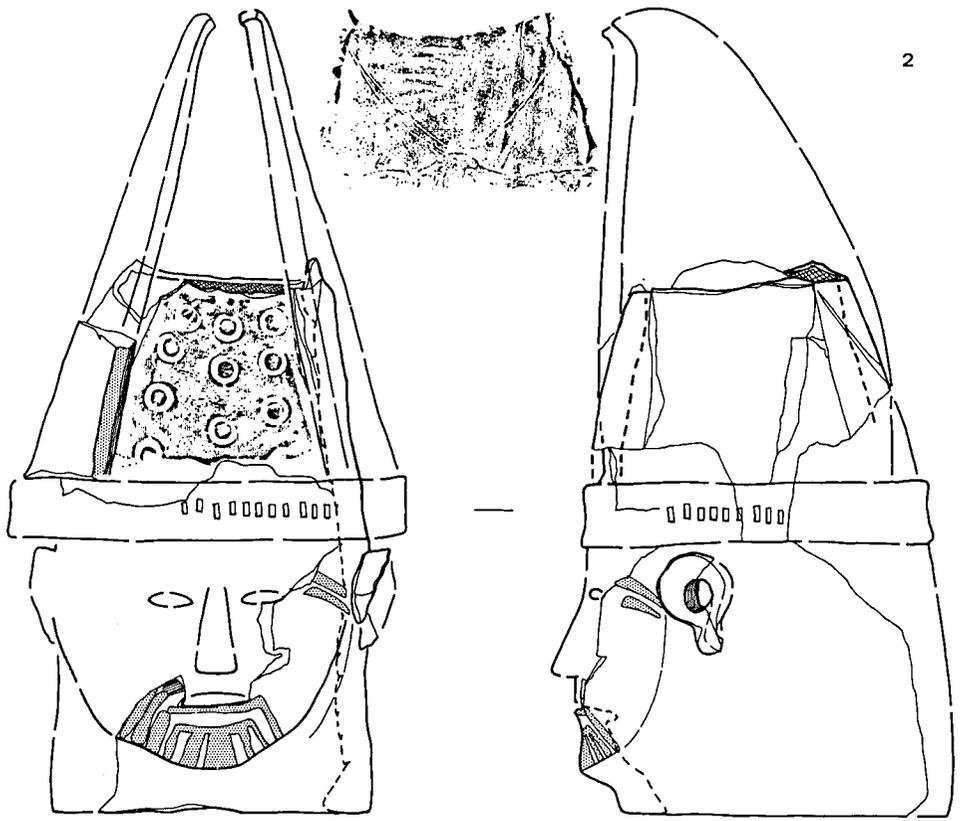
て磨滅している。1は、口縁部上半を欠く(図版28は合成前)。器表全面に縦刷毛目をかけ、赤色顔料を塗っている。円筒部復元最大径は25cmと稍小型。4は桃灰色を呈し、円筒部復元最大径は約28cm。胎土に細粒を多く含む。8は、9と似て硬質。肩部は細い縦刷毛目、以下は細い横刷毛目調整。9の刷毛目も極めて細かい。10の器表は斜刷毛目調整。

須恵質の6は表探品。灰色で薄手・硬質。胎土も精良。内外ともに調整は横刷毛目で、他の9例とは一味ちがう。

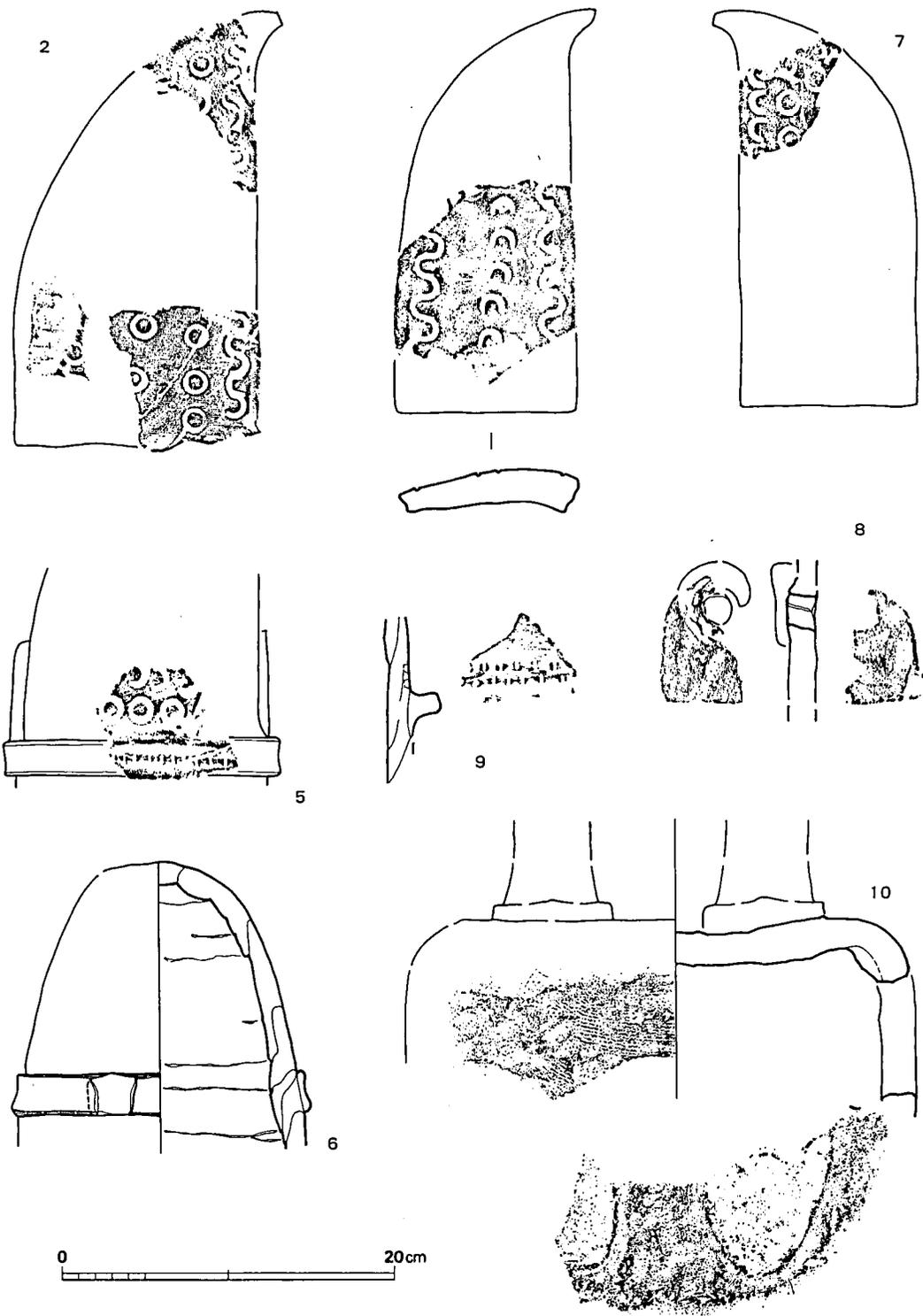
### (3) 人物埴輪 (第20・21図)

9体分の破片が採取されている。頭部あるいは顔の部分が8体を占める。2～5、7の計5体は、鉢巻をして側頭部に一對の翼状の立飾りを挿しこんでいる。全て同工品ではあるが、竹管・半截竹管を押捺した立飾り表面の文様構成に小異がある。2の首の形状から、これらはいずれも盾持人形埴輪の頭部と判断される。9は、これらと同様に剣先の筧による刺突文をめぐるしているが、上下で位置をずらした2段構成である点と、突帯の直上という加飾位置が異なる。

2は、顔面の過半を欠くが、目・耳・口の位置と大体の形は辛じて知られる。目は杏仁形とはならず、高さの変化の少ない扁平な丸餅形とでもいうべきもので、3もまたこれに近い。耳の位置は少し顔面に寄りすぎているきらいがある。顎から口許にかけては妙に生々しく、後述する馬形埴輪の表現と一脈通ずるものがある。頭頂部は吹き抜けとなっており、ここまでの高さは約28cm。立飾りに挟まれた正面には径14mmの竹管文を3列に付し、後頭部には×印状に交



第 29 图 人物埴輪実測图① (1/4)



第 30 图 人物埴輪実測図② (1/4)

差する沈線を引いている。立飾りは、高さ26cm、最大幅14.5cm前後とみられ、この先端までの通高は43cm弱と推定される。鉢巻の径は21×18cmと推定される。左目と耳との間および口許から顎にかけて赤色顔料で条線をひく。また、立飾り側縁も赤く塗られている。表面の成形・調整は丹念に行われているが、内面には巻き上げ痕が明瞭に残る。

3は、眼以下を欠く。2と同様に頭頂部は若干すぼめるだけの吹き抜けだが、正面は無文で後頭部の縁を一段挟って低くする点で異なる。右側立飾りはほぼ完存しており、最大幅16cm、高さ24cmで、赤色顔料が部分的に残る。眼は2よりもさらに扁平で、直上と鉢巻との間の2ヶ所に篋で沈線を刻む。しかも、上脛にあたる部分が若干くぼめられており、局所的に写実的表現をとるのも2と通ずる。鉢巻の計は19.5×22cm前後に復元され、2とは逆に顔面側の幅が狭い可能性がある。

立飾りの断片5は、2・3とほぼ同大とみられるが、4は最大幅11cmと若干小型である。7は桃灰色を呈して焼成不良。

6は、山高帽を思わせる頭部のみ。幅2.5cmで中くぼみの無文の帯を鉢巻状に一周させ、これとほぼ同じ厚さで長さ3cmの粘土塊を一ヶ所貼りつけている。この部分から14cm弱離れ、帯から1.8cmほど下った位置に小孔が穿たれた形跡がある。表面全体は丹念にナデ調整しているが、内面のは巻き上げ痕は未調整。

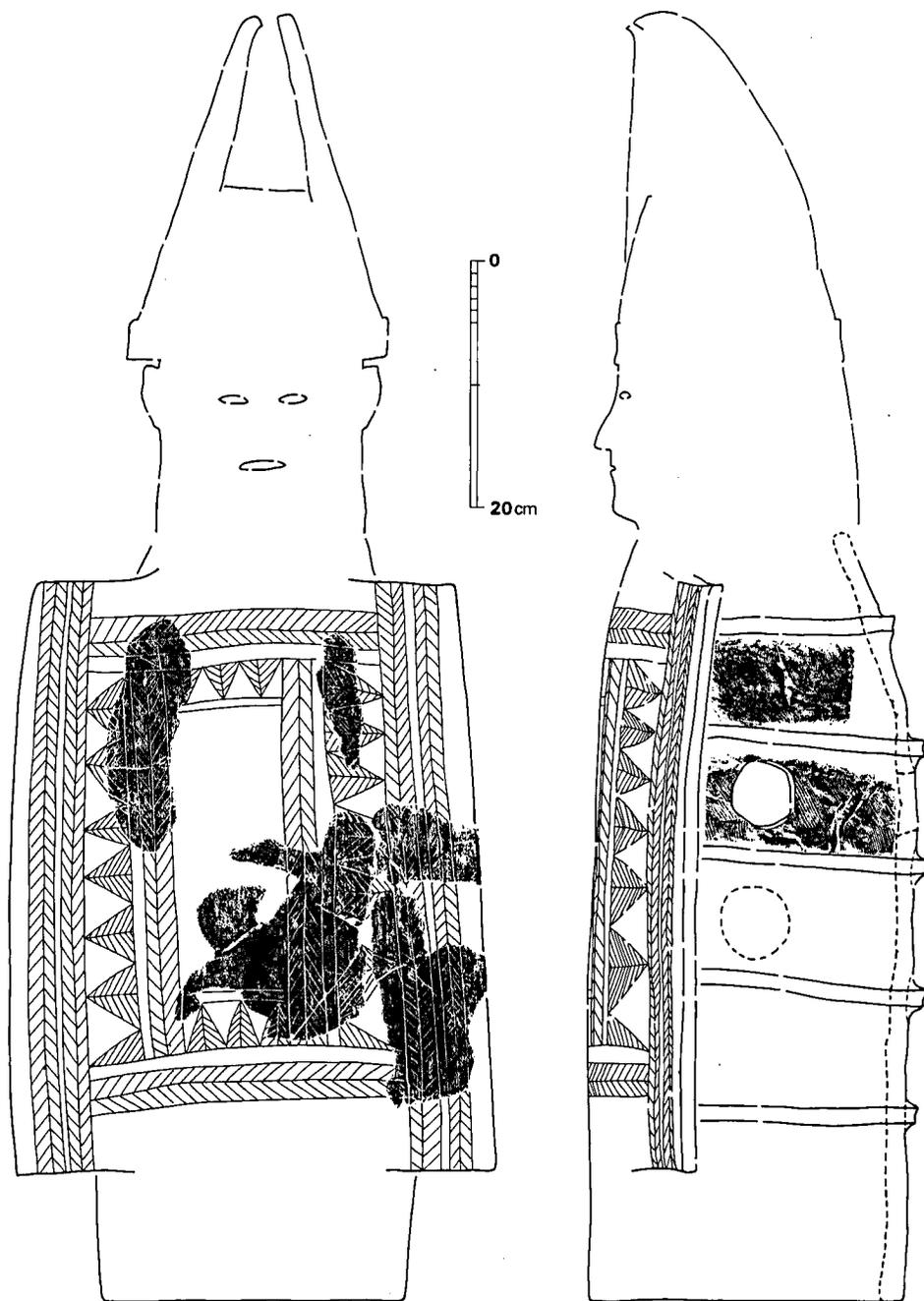
孔の周囲に剝離痕があゆ8は、石耳の断片。10は、復元径31cmの台部片。沓の痕跡を残しており、盾持人とはならない。黄褐色を呈し、胎土に細粒を多く含んで肌がザラつくのも異色。側面には横刷毛目をかける。

#### (4) 盾持人形埴輪 (第22図)

盾部のみ。頭部以下は約62cmに復元され、これに人物2(第29図)の頭部を仮にのせてみると総高は約105cmとなる。盾部は34~39cmと下辺の幅が広く、高さ48cm前後とみられ、三角形文と綾杉文とで加飾する。各単位は小さいながらも密度は濃く、方向を変えるなどくり返しから生ずる単調さを克服しようとしている。内区は珍しく無文。文様構成は全体として盾形埴輪26・37(第41図)と酷似しており、同一工人の作とみられるが個体は別である。

骨格は5条の突帯をめぐらす円筒埴輪であるが、3段目まではズン胴、以上は頭部をのせるためにすぼめられている。盾部の中央部分はこの円筒の突帯を削り取って調整した曲面を使い、両端に粘土板を貼り足すという形成手法は、後述する盾形埴輪のそれと全く同一である。器表の調整は斜刷毛目のみ。透孔は歪んだ円形で、2・3段目に穿たれているが、3段目での位は異例である。この段では向って右側とこれと90°ずれる背面の2ヶ所で、左側にはないからだ。2段目は向って左側のみ現存するが、相対する右側にも穿たれたとみてよからう。

なお、盾部には円筒の脹らみをとどめており、後述する盾形埴輪盾部の横断面がほぼ緩やかな弧を描くのと対照的である。



第 31 图 盾持人形埴輪復元図 (1/6)

(5) 家形埴輪 (第23・24図)

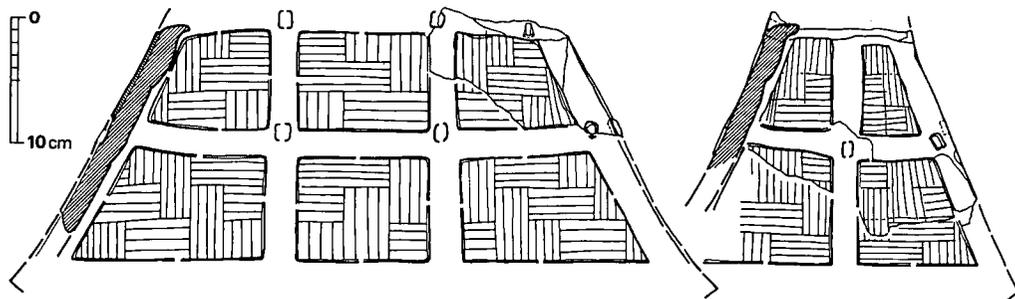
寄棟造屋根の妻側の一方のみが現存する。上部は剥離しているが、原始入母屋造とはならないだろう。上辺に障泥板の表現とみられる横帯があり、以下に網代が置かれているからだ。棟の形態・構造は不明だが、現存最上部の現存幅は11.6cmで、堅魚木が置かれていた可能性が高い。通例とは異り網代を流れの全面に置く表現をとり、これに幅2~2.5cmの薄い粘土帯を貼って縦・横の押縁としている。屋根の勾配は、平側が約67°、妻側は若干緩い62°で、棟近くになると立上りがさらにきつくなる。隅棟部は角ばった表現をとる。

押縁同士あるいはこれと障泥板とが交差する箇所には、11×8mm前後の歪んだ長方形の押捺痕がある。深さは4~14mmと区々で、高さも妻と平とでは一定していない。網代文は、まず基盤目状に割付線を引き、その後この2区画を1単位とする長方形を深く刻んでいる。胎土に含まれた細粒が若干目立つが、焼成は良好。内面の接着痕は完全には消去されていない。

網代文を付す破片が、他に2片ある(第24図)。1は17×17cm大、2は12×12cm大で、ともに黄褐色を呈して軟質だが、胎土は清良。同一個体かとも思われるが、網代文の構図に小異がある。屋根部分とすると、両者とも当然あるべき押縁の表現を欠く。2は、直方体の一角とみられ、形としては壁体により近い。けれども、上すばまりの袴腰形とはならず直立するようだし、網代文の存在もまた否定的である。全く同様に冪形埴輪とするのもためらわれる。不明とせざるを得ない。

1の上辺には剥離痕があり、最上段網代文の幅が狭いのもこれで肯ける。左側もまた配列が乱れており、やはり網代文帯の端に近いとみなされる。厚さ22mm前後で、図示した左右方向に粘土棒を並置して板状に成形しており、これは2とも共通する。

2の右側はコーナー部となっており、下側も同様と思われる。つまり、全形は直方体——箱形と推定される。右下の隅角部は削りこまれている。上面右側端は幅6.5cm内外の幅に薄く粘土を貼って一段高くしており、その両端に梯子形文を付し、その間は弧線と直線とを組み合わ



第 32 図 家形埴輪実測図① (1/6)

せた文様帯としている。底辺のそれは剥離しているが、右側面にも同構成の文様帯がある。ただし、後者のそれは弧線が短い。厚さ27~30mmと1よりも若干厚い。

(6) 衣蓋形埴輪 (第25・26図)

17個体分の破片が採取されているが、全形を復元できるものはない。また、かなりの重量を支えたであろう円筒部もそれと特定できていない。十字形の鱗飾りを伴うI類(7・8・14・15)と、これを欠くII類(5・6・10)とがある。いずれも笠への加飾は縁に沿って幅広の一段高い突帯をめぐるのみである。

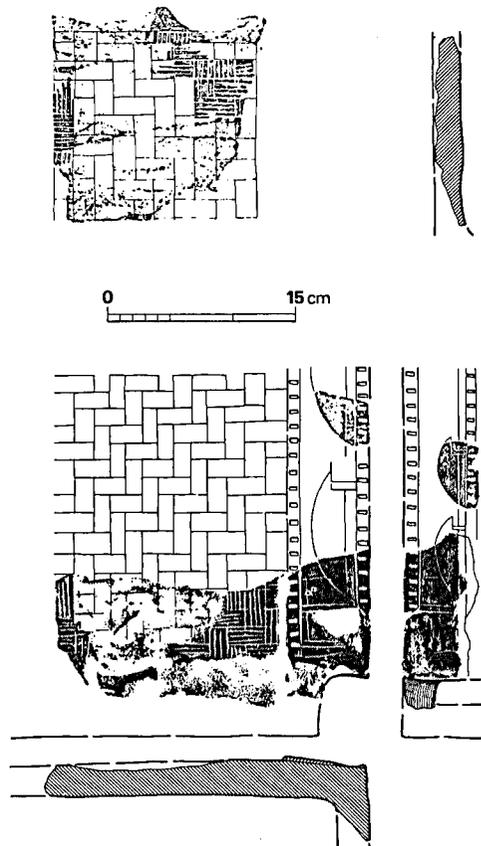
I類の8・14・15は、各々鱗飾り1片のみ。14は、最大厚3.5cmで、鱗飾り全体は最大幅50cm弱、高さ31cm前後に復元される。両面とも手慣れた感じで粗い刷毛目をかけ、一部には面取りをも施す。透しをいれ、縁辺をかなり複雑に屈曲させているが、無文。15は、厚さ2.5cm前後と14よりも薄手で小型。横断面は僅かに彎曲し、両面をナデ調整。7はさらにひとまわり小型。8は、笠

の受部に挿入する高さ14cmの筒状部のみ現存。一部に赤色顔料が付着。胎土・焼成ともに良好。

2の笠は受部を欠くが、安定感に富み鱗飾りを伴う可能性が強い。笠の径は51cmと出土例中の最大で、受部を除く高さは27.5cm。笠の上面全体を刷毛目をかけたままとするのは他例と共通。円筒に納まるべき基底部は、上端径(円筒口縁部との内接部)34cm、底径22.2cmで、相対する2ヶ所に透孔を穿つ。これと14とを仮に組合せると、通高約73cm、笠の縁から鱗飾り上端までは約60cmと推定され、円筒の高さをも加えると総高1m内外に復元される。

3と4は、笠の基底部のみ。形状はI類に近い。3は、上端径36cm、底径22cmで、現存高24cm。成形・調整ともに入念。4は上半部のみ。復元上端径は35cm。

II類の5は、笠の上半のみ現存。基底部との接合部の形状・成形法(図版30)は1と類似しており、両者の形態は相似たものであったとみなされる。1の笠は、径48cmと先述のI類の2よりもひとまわり小さいだけだが、基底部が上端径27cm弱、底径20cm弱と、腰高な感を受ける

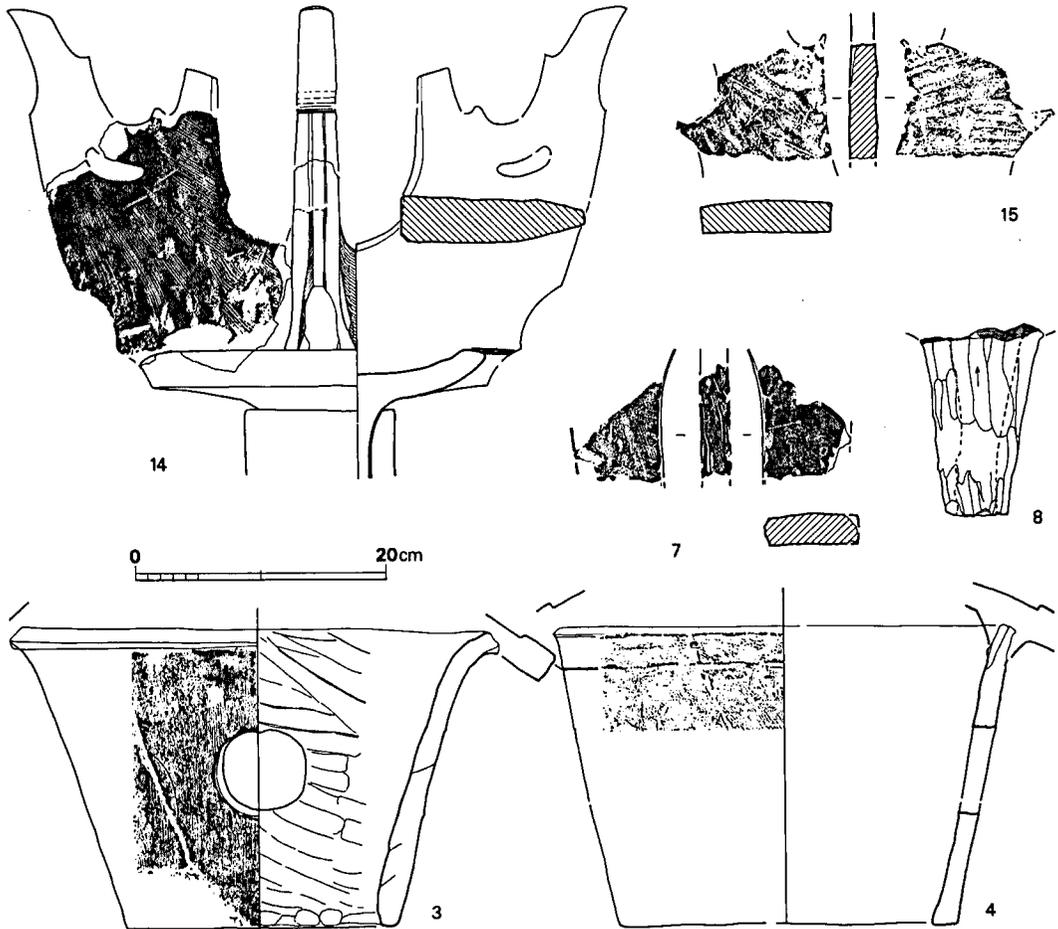


第33図 家形埴輪実測図②(1/6)

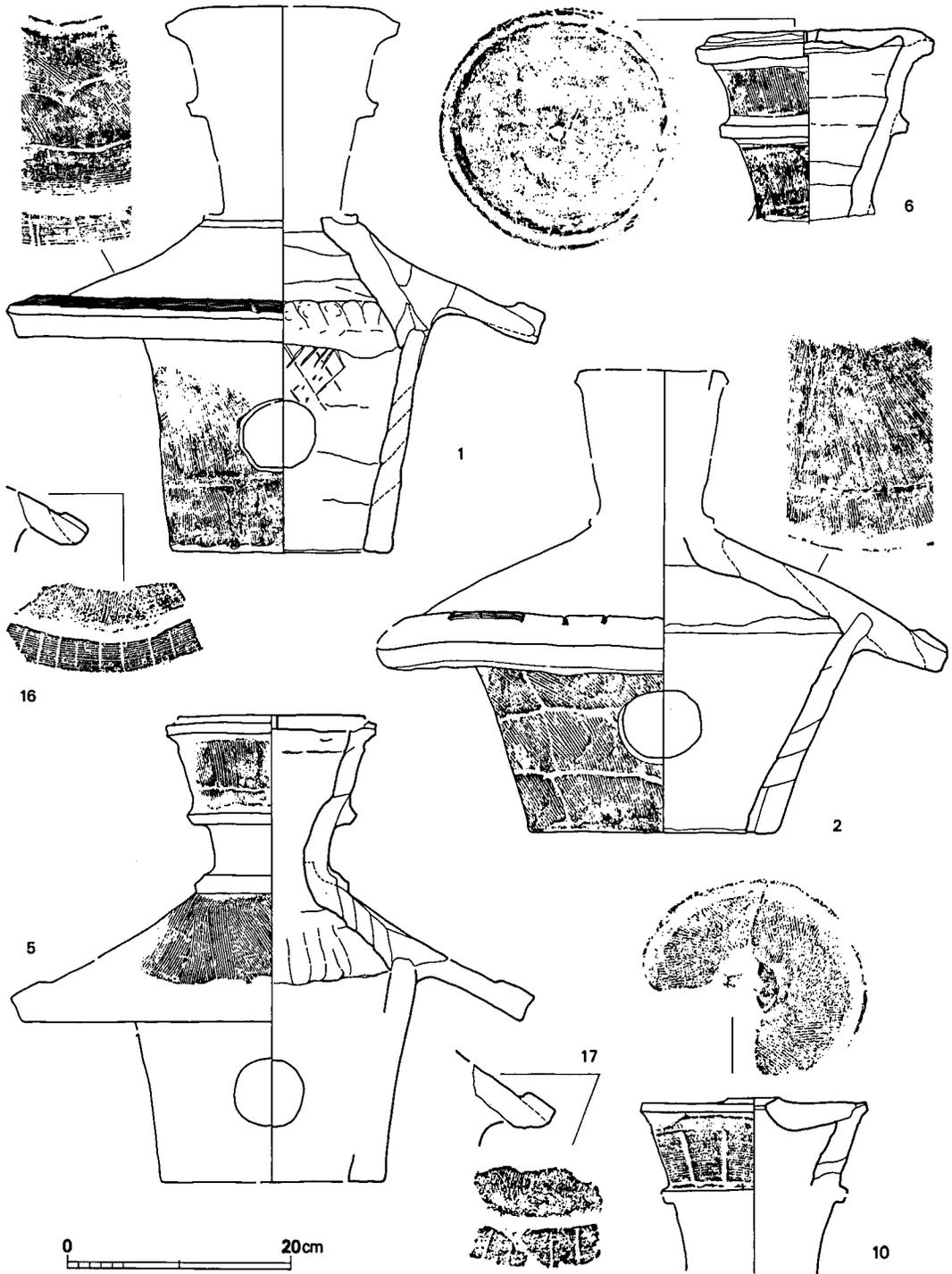
点が異なる。乾燥が進んでいたせいか、工夫を凝らした割には接合部が補強されていないのは5と同様である。

笠上部の筒状の受部には、10と5・6とのa・b2種がある。10は、上面の復元径20cm強で、側面にB種横刷毛目をかけ、上面の放射状にかけた刷毛目もナデ消さない。一方、5・6の側面には縦刷毛目をかけ、受部のみ完存する6の上面はナデ調整されている。焼成も異り、10は桃灰色を呈して軟質で、他に同工品が4個体分ある。6は、上面径21cm、基部径10.5cm、現存高17cm。

なお、両者とも上面のほぼ中央に一孔を穿っている。この孔は、広目の10でも径20mm、6では9~11mmに過ぎず、焼成時の熱効率をあげるための穿孔とは考えにくい。10のグループは孔の縁辺部を一段盛り上げて整えており、鱗飾りもどきに有機物を挿しこんだものであろうか。



第34図 衣蓋形埴輪実測図①(1/6)



第 35 図 衣蓋形埴輪実測図② (1/6)

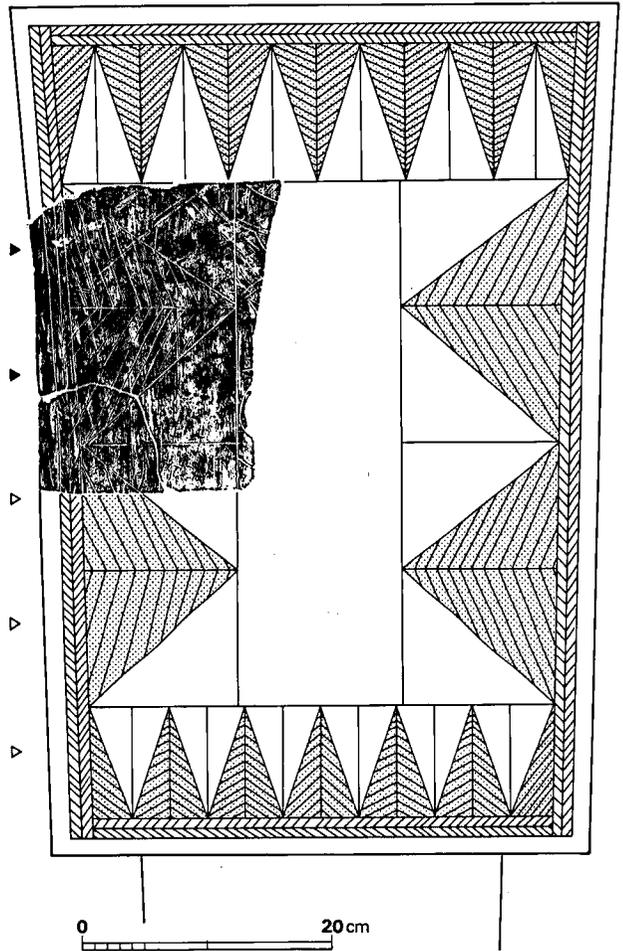
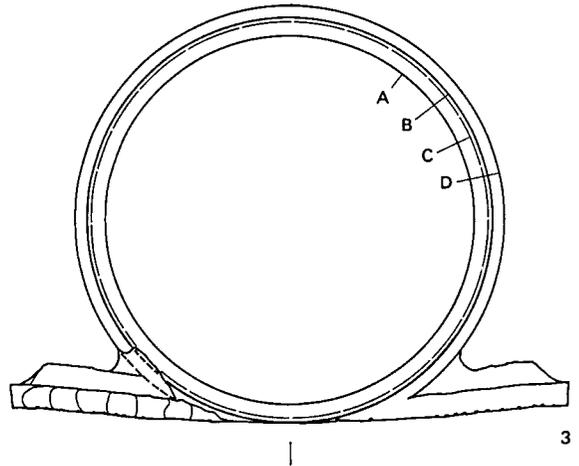
16・17はともに狭いピッチの  
B種横刷毛目の特徴とする。た  
だし、いずれのタイプに属する  
かは不明。

58個体以上の砂片が採取され  
ており1・3・4・30などは盾  
持人となる可能性もある。い  
ず

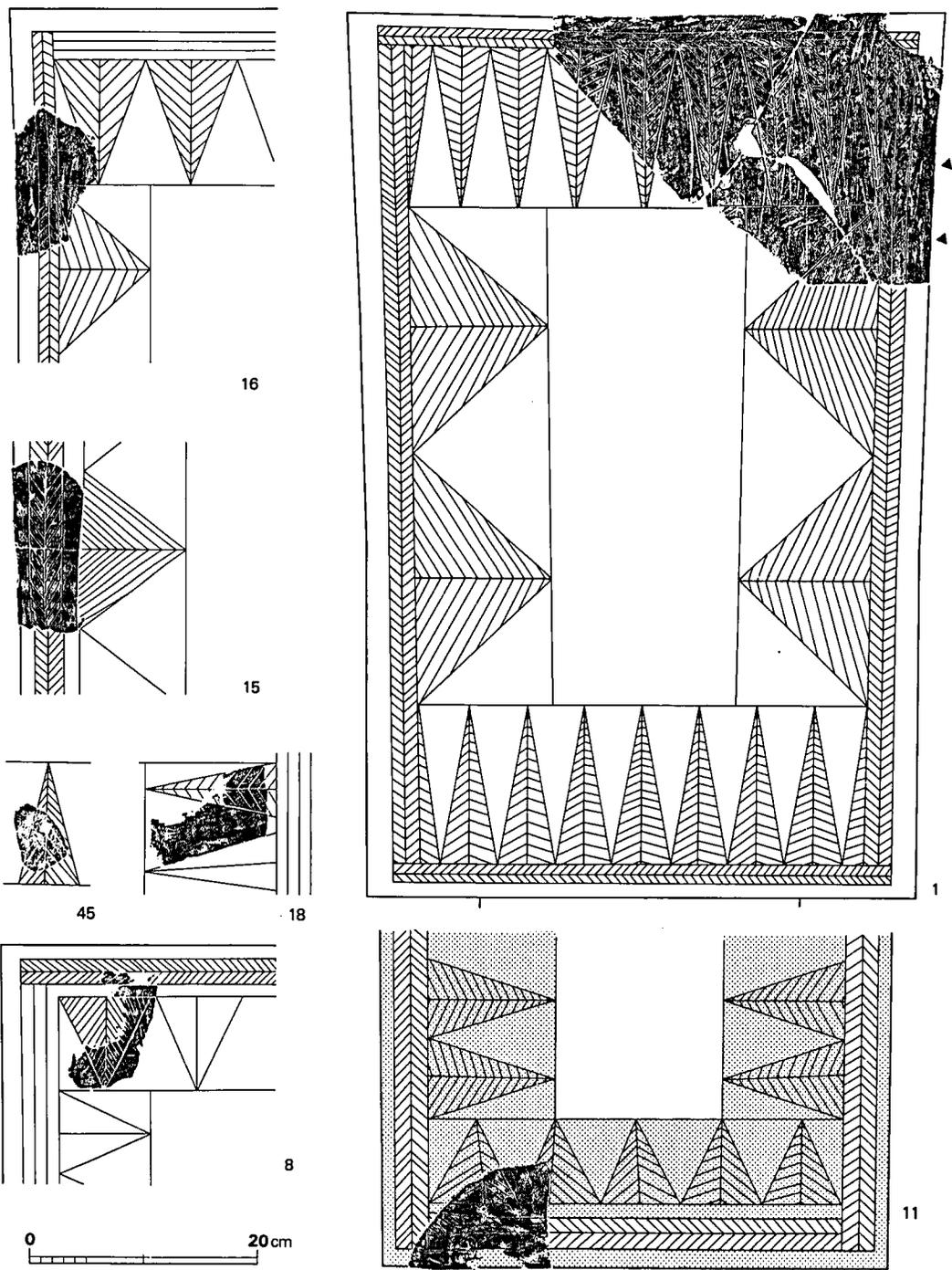
(7) 盾形埴輪 (第27~34図)  
ずれも上辺は直線的で矩形ない  
しは逆台形となり、山形に中央  
部が高くなる例は全くない。中  
央の区画——内区に直弧文をそ  
の周囲——外区に篋で刻んだ三  
角形文・綾杉文帯をめぐらすの  
を基本とするが、その形態はま  
さに千差万別で同一人の作とみ  
られるのは僅かに1と3、26・  
37と盾持人形埴輪の両例がある  
に過ぎない。なお、いずれも胎  
土、成形・調整、焼成は極めて  
良好である。また、加飾のため  
の刻線も決して区画外に篋先が  
喰み出すことはなく、実に丹念  
な仕事ぶりで、感嘆おく能わざ  
るものがある。

盾部の文様構成は

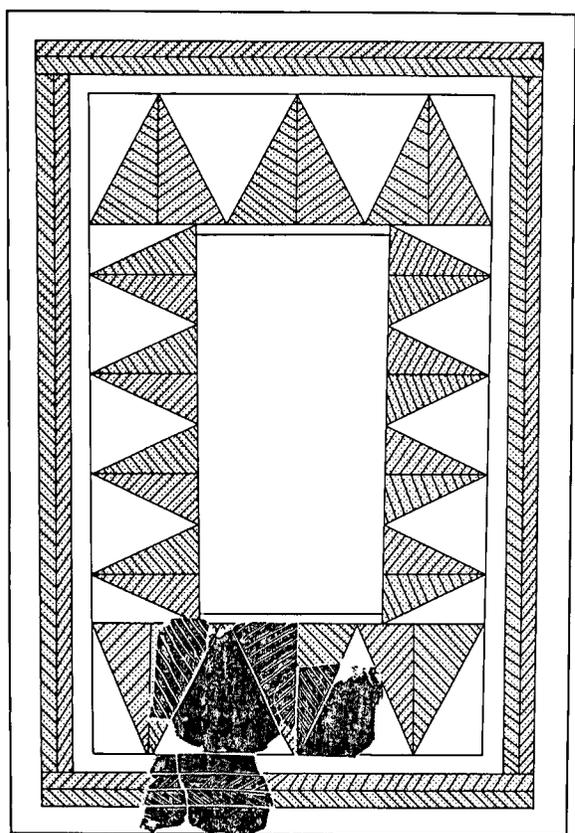
- I類——1, 3
- II類——2, 8, 10, 32
- 7
- 34
- 11, 13, 16, 18, 45
- III類——36
- 44



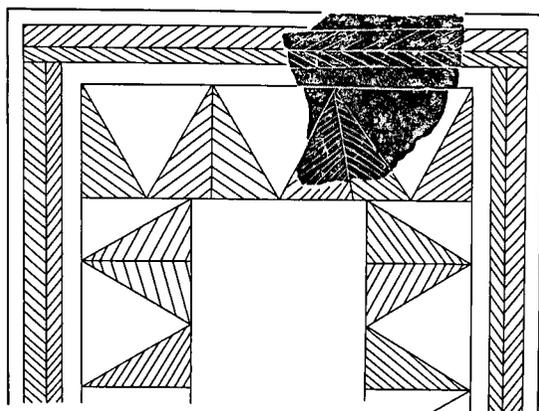
第36図 盾形埴輪盾部集成①(1/6)



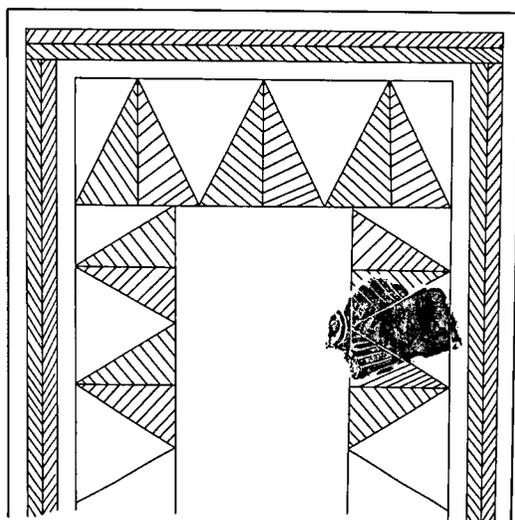
第 37 图 盾形埴輪盾部集成② (1/6)



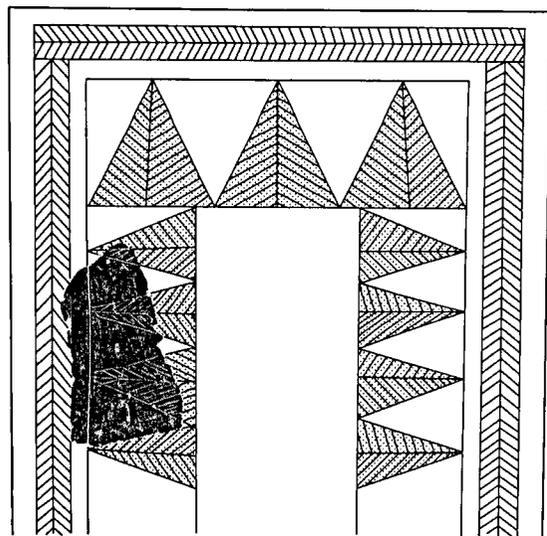
2



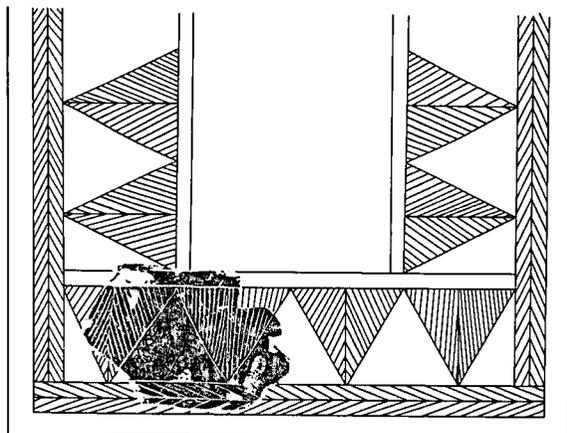
7



10



34



32

0 20cm

第 38 图 盾形埴輪盾部集成③ (1/6)

IV類——38

A 円筒部内側

V類——26, 27

B 円筒部外表

47

C 突帯底面

48, 49

D 突帯上面

VI類——4, 19, 20, 24, 25

に大別される。

### I 類

1と3とは、直弧文を刻した内区の両側に内向する大型三角形文各2個を配しており、似通う。僅かに、並置された三角形文間の直線の有無が異なるのみだ。3は10cm間隔に5条の突帯をめぐらし、B種横刷毛目で2次調整した円筒埴輪を骨格とする。予め製作しておいた円筒の前面側の突帯をまずハツリ、次にこの両脇に粘土板を貼りつけている。粘土板は長手に粘土棒6本程度を並べて芯としたもので、裏面には円筒の突帯の位置に合わせて補強用の横筋(▲印)をつけている。さらに、円筒部との接合部には、横筋間に縦筋を押し込む(図版31)。中央部は、薄く粘土を貼って調整されている。盾部の横断面は僅かに彎曲するもののほぼ平滑で、これは既述のように本墳出土の盾形埴輪の大部分に共通する。盾部は、上辺幅49cm、下辺幅43cm、高さ68cmに復元される。なお、三角形文内部は赤く塗られている。

1は、上辺幅53cm、下辺幅48.5cm、高さ77cmに復元され、3よりも少しく大型。右肩から約20cm下方の裏面端部には斜め下方から棒などで支持した痕跡がある(図版31参照)。

### II 類

I類よりも小型の三角形文を内向させる2・8・10・32と、同じく内向させながらも三角形文内部に入れた平行線の向きが異なる11・13・16・18・45、外向させる7、外向三角形文内側の平行線の向きを交互に変える34に細分される。

2は、上辺幅46cm、下辺幅44.5cm、高さ66cmに復元される。彫りが深いのが特徴で、綾杉文帯と三角形文の内部とを赤く塗る。突帯は5条か。10の上辺幅は41cmか。32の左下裏面には、交差した縦・横筋各1条が残る。下辺推定幅は45cm。11は外周と三角形文帯とを赤く塗る。下辺の推定幅は44cm。

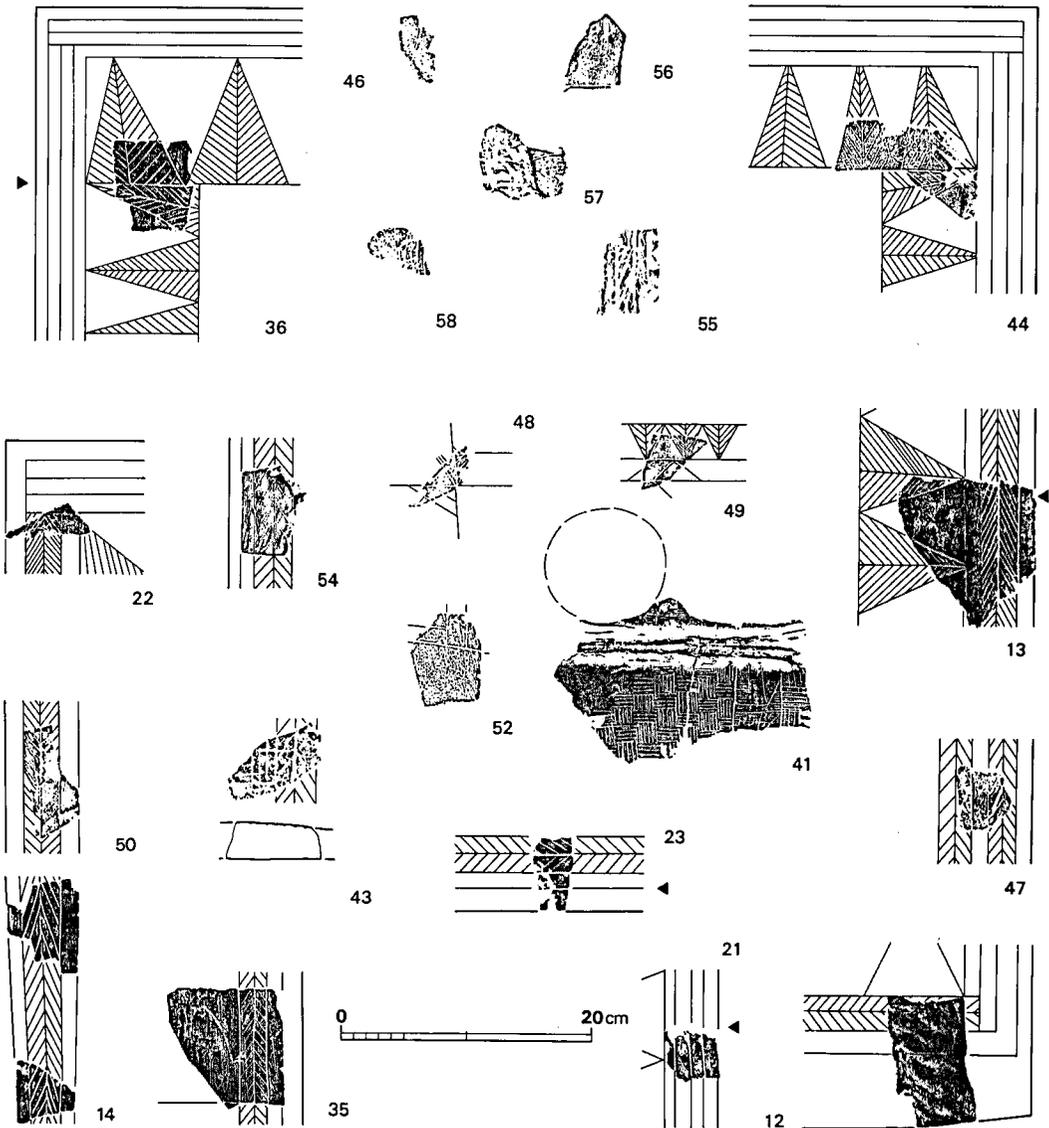
7の推定上辺幅は43cm。上辺の裏面右肩近く、掲載した拓本の右肩部にあたる位置に、1と同様に二つ割りにした竹を斜めに刺したような痕跡がある。34も三角形文内部を赤く塗る。復元上辺幅は43cm。

### III 類

36と44は三角形文を外向させ、両側の両端の三角形が寸詰まりとなって二等辺とまらない点で共通するが、三角形文内側の平行線の向きに小異がある。

### IV 類

38は出土例中ではもっとも文様構成が複雑。上辺幅42cm，下辺幅40cmに対して高さは70cm弱に復元され，かなり縦長となる。



第 39 図 盾形埴輪盾部集成④ (1/6)

## V 類

26は2トレから、37は6トレから採取された。盾持人形埴輪の文様構成と似通うが内区に沿う無文帯の有無など小異がある。内区が無文であるのも珍しく一致する。両側の綾杉文帯は図上では方向を変えてみたが、47のように同一方向となるかもしれない。幅42cm前後、高さ52cm前後に復元してみた。

48・49は、極めて小型の三角形文を並置している。

## VI 類

素文の三角形文をめぐらすグループ。4は、外向三角形文内部と中央区を囲む無文帯とを赤く塗る。復元上辺幅は46.5cm。25の下辺は、43cm前後か。

35は、綾杉文帯の内側が無文で異例。41は網代文と鍵手文を思わせる直線群を刻んでいる。網代文の割付は、乱れている。

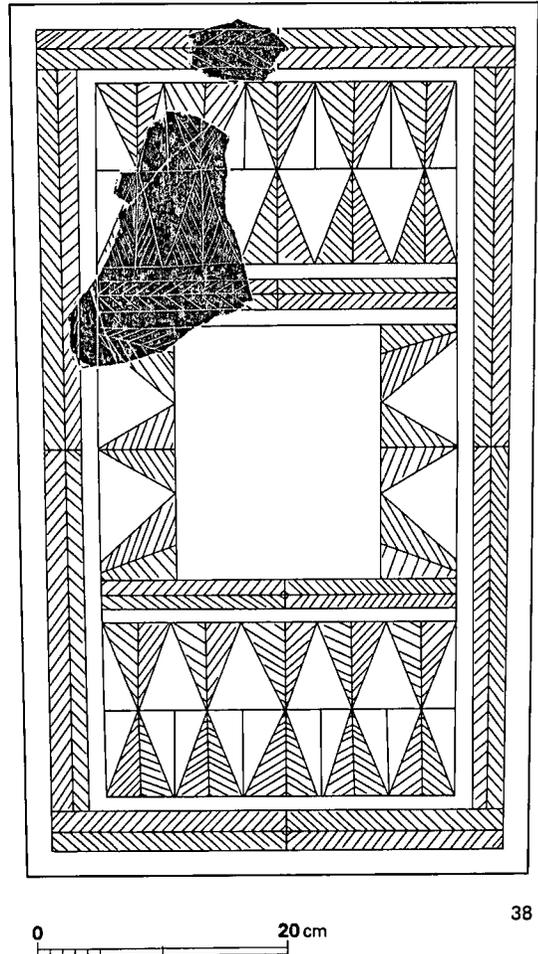
出土例中で、内区に直弧文を刻まない確実な例は、既述のように26・

37と盾持人形埴輪の2例のみである。いずれも断片となっており、全体を復元するには至っていない。5と6は、彫りが深く同一個体である可能性が高い。51は、綾杉文帯と接するという特殊な構成をとる。

### (8) 冑形埴輪 (第35図)

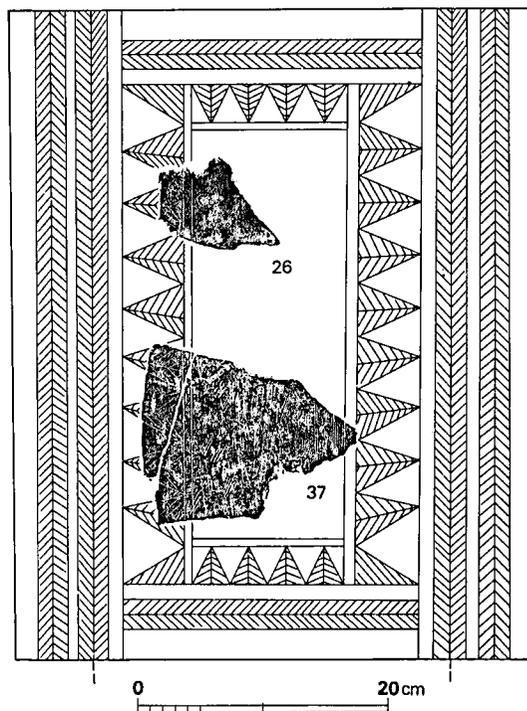
衝角部のみで、50×67×40mmと小片。鉢部の径は26×22cm前後に復元され、幅広となるようだ。推定鉢部高は11cm強と浅く、鋳を含めた復元総高も15cm強に過ぎない。衝角部は嘴のように尖り、形態は本来の姿からかなりかけ離れている。外周と衝角・伏板相当部に梯子形文を、地板相当部には弧線をいれる。16mmと厚く、黄褐色を呈する。

### (9) 馬形埴輪



第40図 盾形埴輪盾部集成⑤(1/6)

耳から鼻にかけての部分（網目で囲む部分）が僅かに現存する。顔面は最大幅19cmと広いが、鼻はさほど長くはならないようで、ロバに近い。しかし、骨格とした筒状部からさらに2cm程粘土板を貼り足して頬骨を強く張らしており、特徴を表現しようとする意図が窺われる。また、両眼周辺の表面は薄く剥離しており、上脛相当部が少しく盛り上げられていた可能性がある。革帯・辻金具も、粘土板を重ねて各々を表現するという念の入ったものであるが、手綱は表現されていない。胎土に含まれた細粒が稍目立つが、成形・調整は目えない部分も含めて極めて丁寧。なお、復元に際しては熊本県船山古墳出土例を参考に鏡板を装着（着脱は自在）させてみた。



第41図 盾形埴輪盾部集成⑥(1/6)

#### (10) 動物埴輪（第37図）

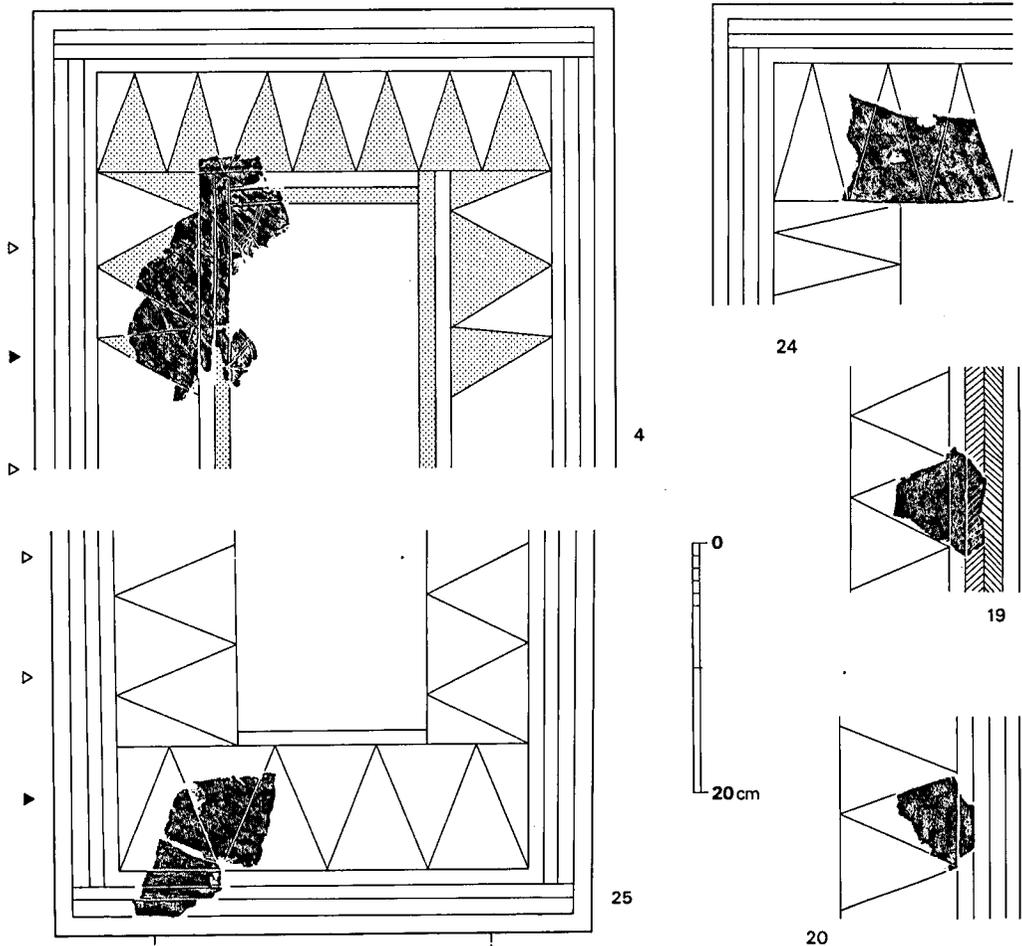
A 1は、台部から剥離した筒状の獣脚（図版34）。上部にも剥離痕があり、現存高約24cm。最大径は11.5cm、下部では7.5cmと細くなる。黄褐色を呈して焼成は甘い。これとは別個体の脚端部片があり、これまた桃灰色と焼成不良。

A 6は、眼あるいは口を思わせる切りこみが幽かに残る。起伏にとみ、人物埴輪3を思わせる数条の沈線が印されているが、眉・入墨を表現したものと速断はできない。

A 7は、鳥を表現したもので完形（図版34）。下部を指先でつまみ出して台部としており、もともとは人物の肩などにとまっていたものが剥離している。全長68mm、高さ37mmと小型で一見愛らしいが、小鳥を模したとは限らない。細部の表現はないが、尾羽の特徴をだそうとした意識が、指頭痕から察せられる。

A 3～A 5は、曲面部分が多いことから一応動物の可能性もありと考えてみた。A 4の左上には耳とも考えられる孔が穿たれており、下方には剥離痕がある。3例とも胎土に含まれた細粒が目立つ。

#### (11) その他の形象埴輪（第35図）



第 42 図 盾形埴輪盾部集成⑦(1/6)

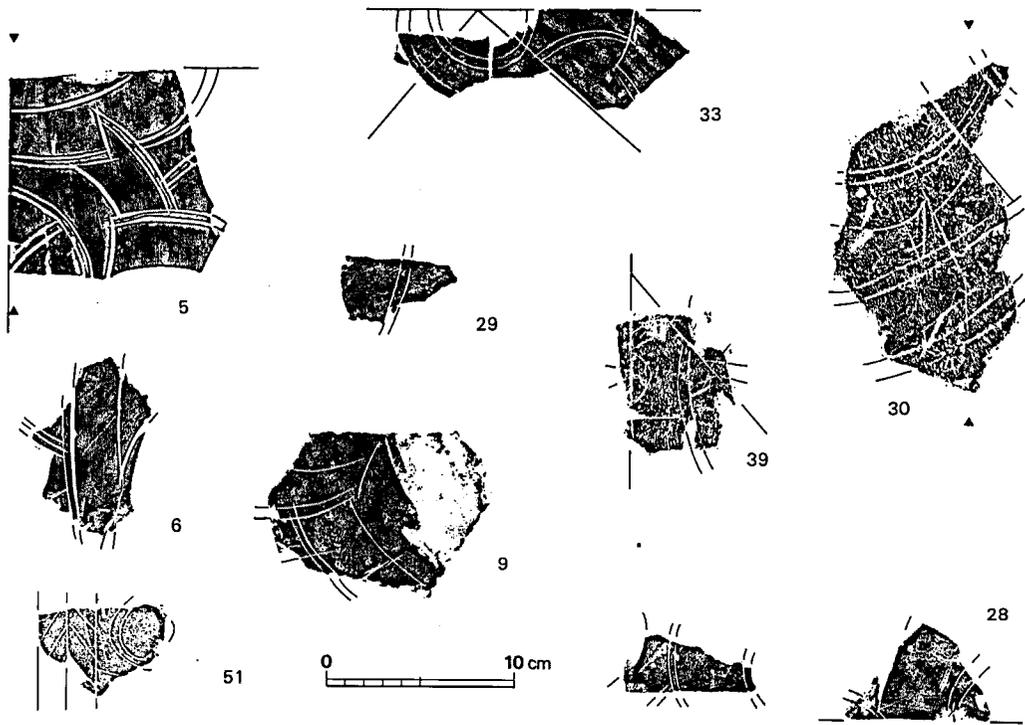
1は、鋸形で1端のごく一部が残る。粘土棒を並べて芯としている。無文。2は、径5mm弱、現存長22mm（図版34）。3の現存部上面は平たいが、裏面横方向は彎曲する。7mmの間隔で平行する沈線がめぐり、この線上に刺突文が加えられている。靱？。

4の右端上面には接合を強化するための数条の切りこみがあり、形態的にも衣蓋形埴輪の笠縁辺部に似ている。ただし、全体に薄手・小ブリであり、何を表現したものであるかは不明。

半円筒状の5は、曲面とは直角方向に6～7mm間隔の平行線をほぼ2cmおきに引く。不明。

6は、径7cm前後の円形透孔の外周に一条の圈線をめぐらす。黄赤褐色で軟質。不明。

7の部厚い底面には径4cm前後の棒？の圧痕があり、この部分のみが内側に張り出している。傾きからみても、円筒埴輪の基底部とは異なるようだ。



第 43 図 盾形埴輪直弧文集成図 (1/4)

弧状の複線を刻む 8 も不明。9 は、鰭を思わせる幅 5.5cm の板状を呈するが、採取された円筒埴輪で鰭の剥離痕をとどめるものはない。基部は 4 cm 弱と厚いが、先端は 1.7cm に狭まる。一面は縦刷毛目を残すが、裏面のそれは消去されている。

10 は、復元最大径約 14cm の筒形品。衣蓋形埴輪の笠の受部に似ているが、基部が突帯状に膨らみ、かつ、ほぼ直立して径が変わらない点でこれとは異なる。32mm と厚手で、器表はナデ調整されている。11 は、径 41×37mm の棒状品で、現存長 47mm。堅魚木の一端か。12 は、厚さ 3 cm 弱で、一側端が僅かにカーブする板状品で、衣蓋形埴輪の鰭飾りに似る。粘土棒を並置して芯としており、上面側に粘土を貼り足している。

## 2 土器

周濠堆積土中からあるいは周辺から採取された土器が若干ある。いずれも、本墳に先行あるいは後出する各種遺構に伴うもので、弥生土器から青・白磁、瓦器椀までを含む。

### 弥生土器 (第39図)

16は、前方部南側縁外濠からの出土品。口縁部は復元径22cm弱の逆「く」文形で、赤褐色を呈し、胎土には細粒を夥しく含んでいる。

### 手捏土器 (第39図)

1～4は、第5次調査時の採取品。1は、黄褐色を呈して細粒が目立つ。口縁部は内すぼまりで、最大径・器高ともに5cm強。2は4例中で最も胎土が良い。口縁部はひねり出され、若干波打つ。口径3.5cm、器高3cm弱。部厚くて下すぼまりの底部をもつ3は、安定が悪い。最大径5.4cm、器高5cm強。4は、口径5.9cm、器高3.3cm。底が尖る鉢形で、口縁部は若干波打ち、器表に指先で押えた痕跡を残す。

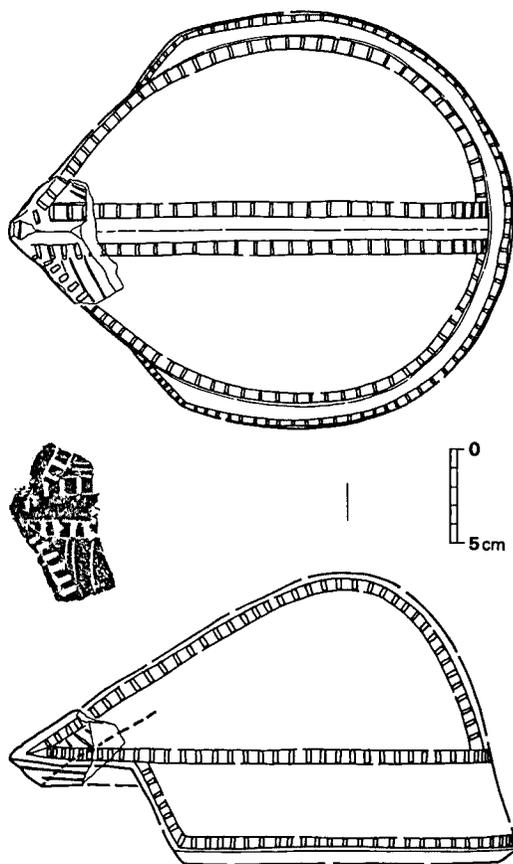
### 土師器 (第48図)

5～15は高杯。9と13とは前方部北西隅角部の外濠から、8・15は前方部前縁の内濠から、11・12は同外濠から、6は前方部南側の内濠から、5は同内堤から(図版24-1)、7は同外濠から、10・14は表採品。

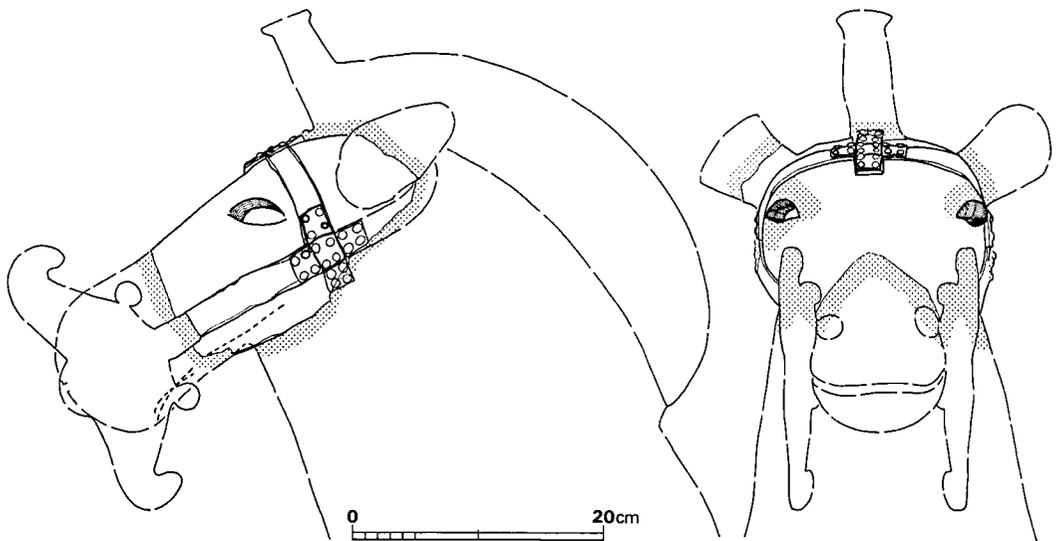
5は、脚部を欠く。杯部は、口径10.3cmに対して深さは5.2～5.7cmと深めで、尖り底の鉢形。口縁部は波打つものの薄手に仕上げられ、若干内彎する。器表には刷毛目をかける。黄褐色を呈し、胎土の細粒が目立つ。

6は、復元口径18.9cmで、暗茶褐色を呈して胎土は精良。杯部の底部近くを斜め方向に篋でおさえている。7は茶褐色を呈し、胎土は精良。杯部は深くて大きい。8は黄灰白色を呈して軟質。脚柱上部の脹らみはない。9の脚端は若干反り上がり、内側の屈折部はシャープ。底径13.2cm。胎土は精良だが焼成は甘い。

13の胎土は精良だが、軟質で器表の磨滅が著しく進行。杯部の屈折箇所は明瞭で、浅めの底は部厚い。杯部内外には刷毛目をかけている。脚の柱状部はほぼ直線的に裾広りとなり、内側



第44図 青形埴輪復元図(1/4)



第 45 図 馬形埴輪実測図 (1/6)

の屈折部も鋭い。器高14.8cm，杯部径19.5cm，脚高9cm，同底径13.1cm。形のよく似た15も，胎土は精良だが軟質。

12は体部下半が部厚く，他よりも後出する。

14は赤橙色を呈し，筥磨きされた杯の底部は光沢がある。杯部との接合部が沈線状にくぼむ脚部には，刷毛目調整後4孔が穿たれている。胎土に含まれた細粒が稍目立つが，薄手に仕上げられている。脚部高5.5cm，同底径10.6cm。

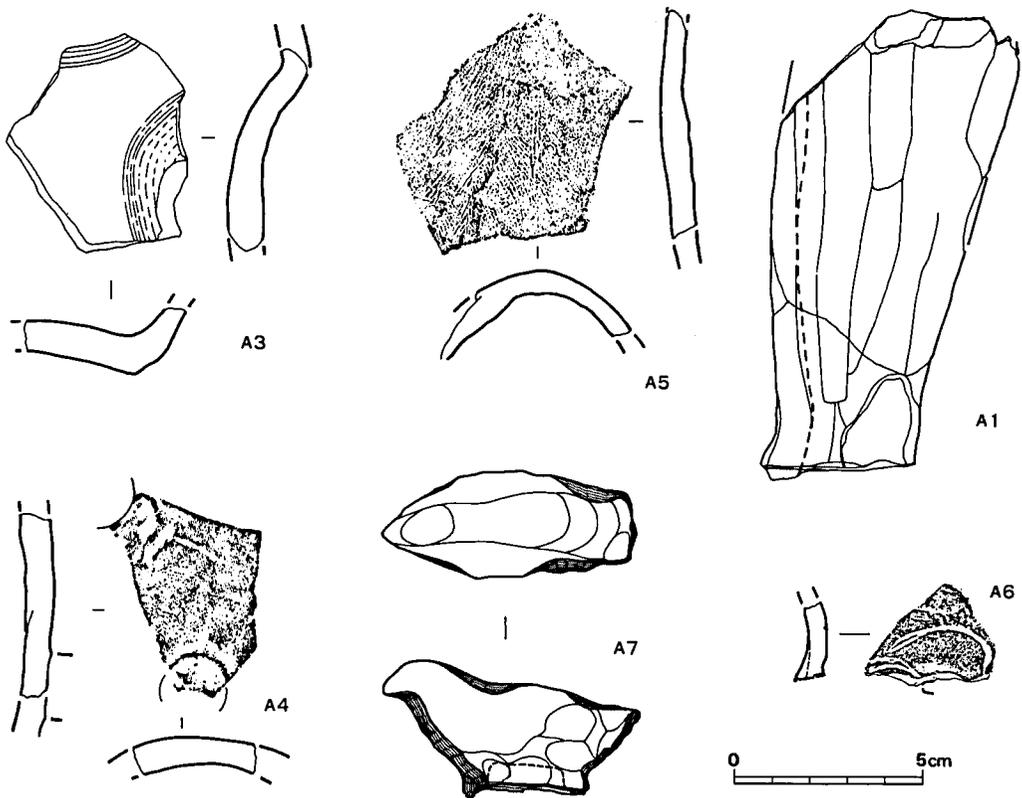
#### 陶質土器 (第40図)

1は，前方部南側縁の内溝から出土した小片。胎土は精良で，表裏とも暗灰青色を呈して硬質。断面は暗い小豆色。体部下半に2条の低い突帯をめぐらした深めの壺形となる陶質土器であろう。

#### 須恵器 (第39図)

4は前方部前縁内濠，6・9・11は前方部南側縁内濠から，7・10は同外濠から各々出土しており，これら以外は表採品。

9以外は，壺あるいは甕の破片で，2・3・6は断面の胎土は暗い小豆色。いずれも胎土は精良で，焼成も堅緻。4の口縁部内面と8の肩部表面には自然釉がかかっている。4と11とは無文。9は高杯片であるが，古墳よりも後出型式。灰青色を呈し，胎土も精良。



第 46 図 形象埴輪実測図① (1/2)

白磁 (第49図)

復原径16.8cmの玉縁。口縁から3cm以下は露胎。第2トレンチ出土。この他に、表磁片若干も採取されている。

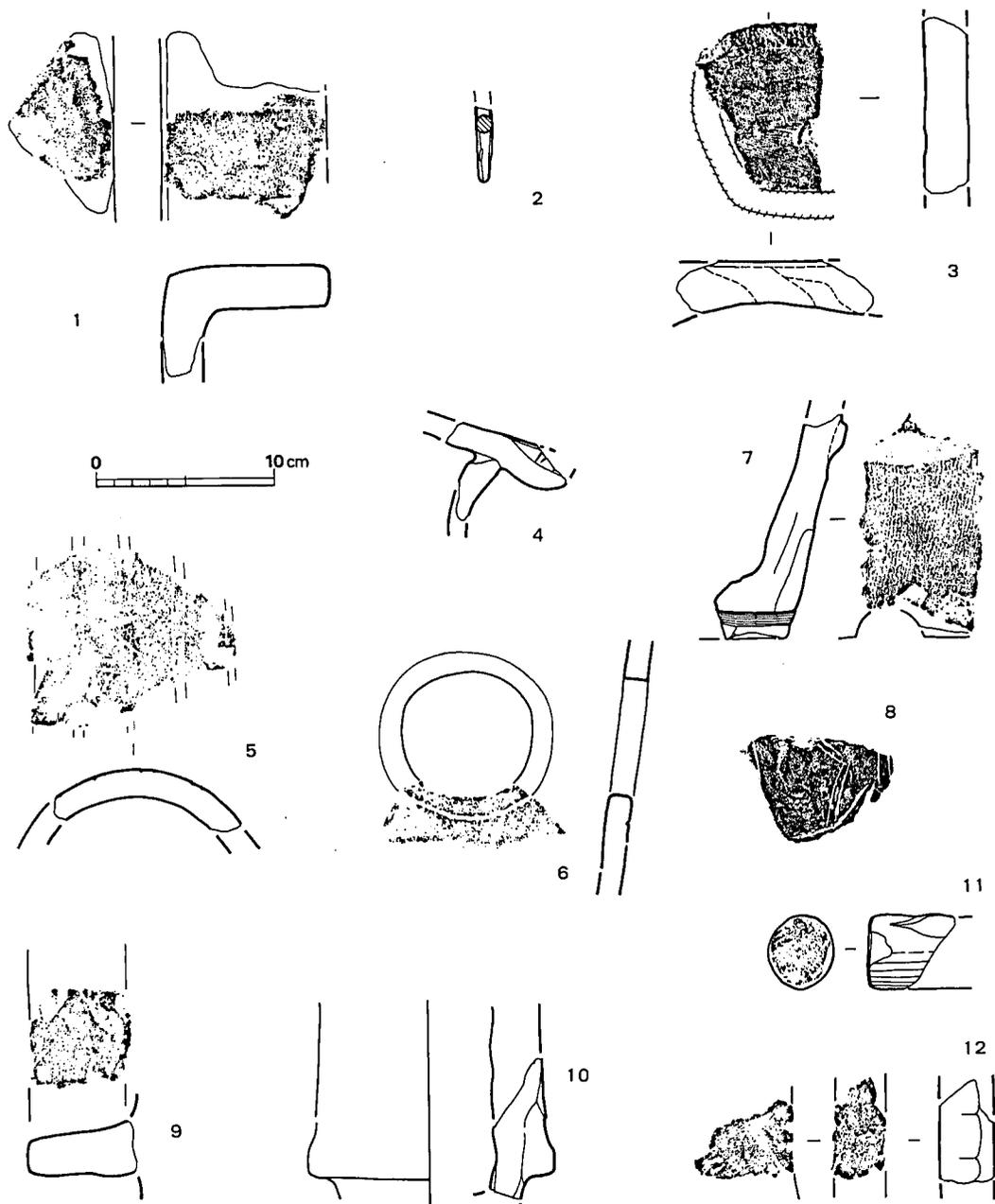
この他、前方部南側縁内濠からは瓦器椀片が採取されている。

3 各石室出土品

第1～第3次調査での出土品の大半は、各種の埴輪片とともに県立浮羽高校に保管されている。若干の混乱を生じており、これらの出土品の整理を早急に行う必要性が痛感される。本書へは、諸般の事情により、精査を経ないまま簡単なリストを掲載するにとどめざるを得ない。将来の訂正を要することは無論である。

A. 前方部前室内

装身具 仿製神獸鏡 1, ガラス製管玉 6個(註9), 貝釧 1

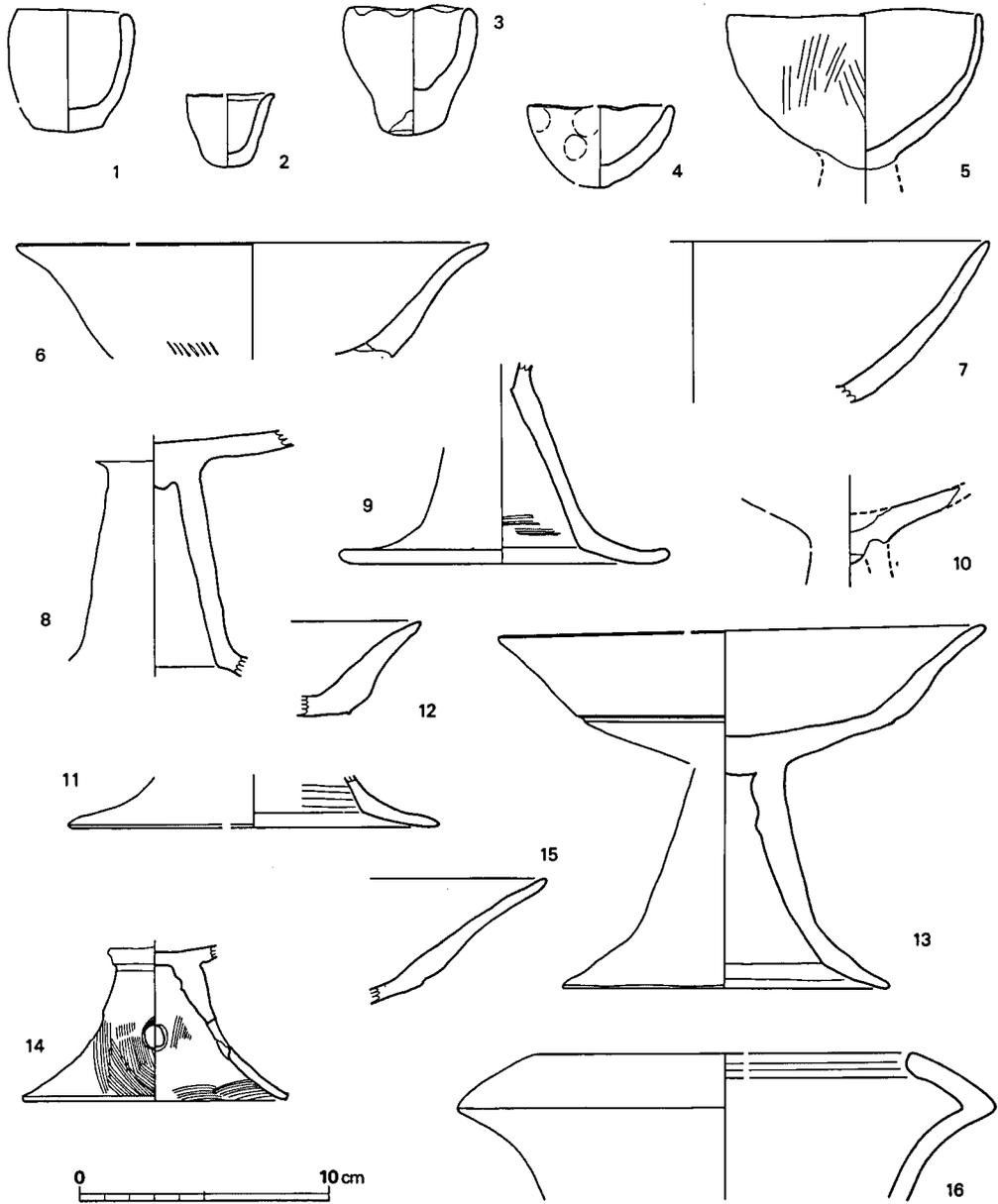


第 47 图 形象埴輪実測图② (1/4)

滑石製品 白玉 720余，有孔円板 4 + 1

武器 直刀 9（鹿角装），鉞 2，鉄鏃 多数

武具 横矧板革綴式短甲 1（小札草摺付），横矧板鋸留式短甲 1，三角板鋸留式短



第 48 图 出土土器实测图 ① (1/3)

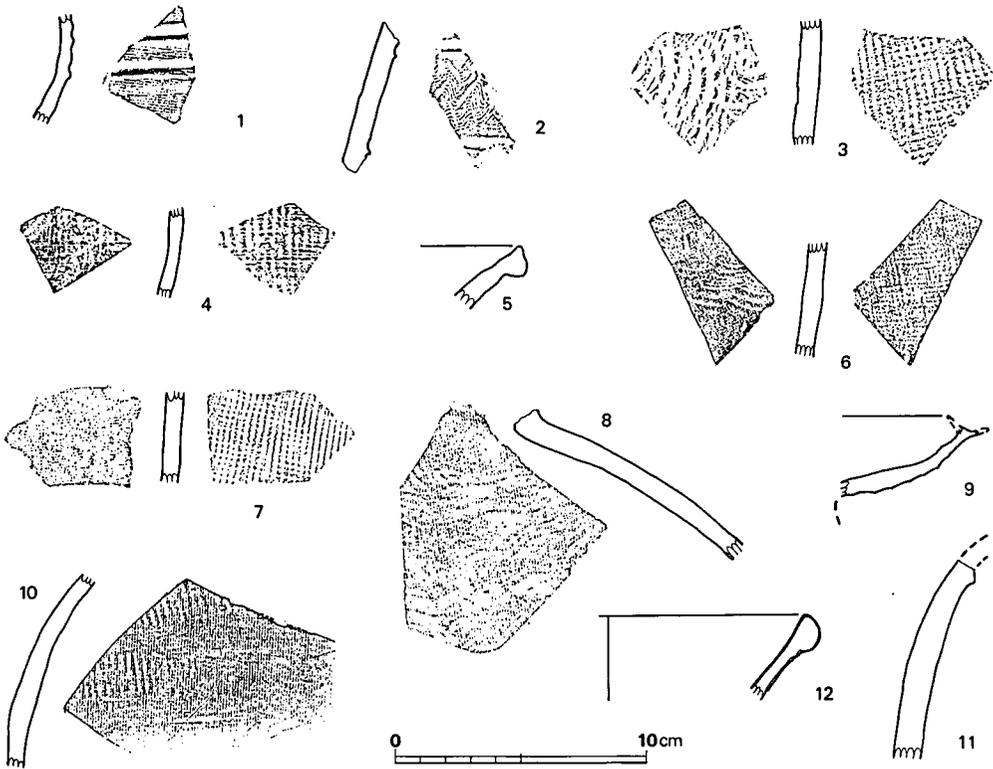
- 甲 1, 挂甲 1, 小札, 横矧板鋌留式衝角付冑 1 + ?, 頸甲 1, 肩甲 1  
 馬具 鉸具 3  
 農工具 刀子 1  
 その他 砥石 1

B. 前方部石室閉塞石前面

- 武器 鉄鏃  
 馬具 轡 1, 鉄製鞍 1, 木心鉄板張輪鏝 1 双, 雲珠 2, 鉸具 5 (大2, 小3)  
 農工具 タガネ? 1

C. 後円部石室

- 装身具 仿製鏡 7 (鈴鏡・鈕のみ各1を含む), 硬玉製勾玉 3 (1は丁字頭), ガラス製勾玉 2, ガラス製管玉, ガラス製小玉, ガラス製白玉, ガラス製栗玉 (黄・緑) 硅岩製玉 1, 金銅鈴 1



第 49 図 出土土器実測図② (1/3)

滑石製品 扁平勾玉（剣形品？） 3，有孔円板 5，白玉 多数

武器 鉄鏃 多数，刀，剣，鉾 1

武器 挂甲，胡籥金具

馬具 鞍金具，木心鉄板張輪鐙，鉄地金銅張剣菱形杏葉，三鈴付環鈴 1，鉸具

その他 朱？塊，金銅鋳留金具，鉄製端止金具，金銅有孔円板，銅椀？，獣骨片，土師器片

#### 4 その他

以上の他，第5次調査の際前方部南西隅角部付近の内濠堆積土中から1個の管玉が採集されている。濃緑色の碧玉製。径 9.5mm，長さ 22.45mm。側面に稜を残し，両小口のカットも若干斜めとなるなど，成形・調整は若干粗い。両側からの穿孔で，一端は4.75mm，他端は1.75mmと孔径は異なる。

## 4 結 語

本墳の特色としては，

1. 葺石と各種埴輪をめぐらした大型の前方後円墳である。
2. 2重のほぼ盾形となる濠をめぐらしている。
3. 前方部および後円部の墳丘上位に，各々1基の古式横穴式石室を作っている。
4. 前方部の石室は，奥壁前面に石床と，壁面の6ヶ所に刀・鉾を置くための突起とを合わせもつ。
5. やはり石床を置く後円部の石室には，組み合わせ式の石棺を納めている。

の5点に集約されよう。以下では，上記諸点について若干補足しておくこととする。

### 1 墳丘

土を盛り石を葺いて作った墳丘の規模は，南東側部分の調査を経てはいないが，一応全長約91m（A），前方部幅約68m（B），後円部径約64m（C）と復元される。復元中軸線上での現存墳丘長は約75mであるから，この部分の現存率は82%となる。ところで，本墳のすぐ西方にある月の岡・日の岡両前方後円墳の現存墳丘長は，前者が約95m，後者は約86m（註10）である。これら3基のうちでは月の岡古墳が最大とも思えるが，月の岡・日の岡両墳の周濠および墳丘の調査が行われていない現段階では断定は控えたい。

くびれ部が不明であるが、前方部幅が後円部径を若干上回まわり ( $B/C=1.06$ )、全体としてズングリとした ( $A/C=1.42$ )プロポーションとなるようだ。調査で規模が確認された例が乏しいので比較検討し難いが、熊本県船山古墳を参考例として示せば、同墳の墳丘長は61m、前方部幅40m強、後円部40mで(註11)、 $B/C=1$ 、 $A/C=1.53$ である。

## 2 周濠

北側で外濠が完周しないものの盾形の二重の濠で、非相称とみられる点が特色である。濠底各部絶対高が驚くほど一致していることは既述のとおりである。

県下で二重の周濠をめぐらす例としては、

1. 権現塚古墳(国指定史跡)——久留米市大善寺町宮本字彼岸田  
円墳、墳丘径50m、全径150m以上(註12)
2. 銚子(長子)塚古墳(消滅)——久留米市大善寺町宮本字北烏  
前方後円墳(註13)
3. 彦徳甲塚古墳(県指定史跡)——京都郡豊津町  
円墳、墳丘径29m、全径55m
4. 天仲寺古墳(註14)——築上郡吉富町  
円墳

が挙げられる。また、前出権現塚に隣接する御塚ではなんと三重の周濠をめぐらしている。

御塚古墳(国指定史跡)——久留米市大善寺町宮本字一本松

帆立貝式前方後円墳、墳丘長70~71m、全長123m以上(註15)

御塚・権現塚の主体構造は不明であるが、濠内から円筒埴輪、各種の形象埴輪、土師器・須恵器が採取されており(註16)、須恵器のうちには皮袋形須恵器を含むという(註17)。5世紀中葉まで遡るとは考えられず、「御塚古墳の円筒埴輪を見ると、八女郡広川町の石人山古墳の円筒埴輪よりも古く位置づけることができる。とすれば御塚古墳の時期を五世紀末から六世紀初頭のころと考えることができよう」とされている(註18)。彦徳甲塚もまたこれら両墳に近い年代が想定される。墳頂近くから南側裾部にかけて巨大な盗掘孔があるが、未だに石室らしき石材に当てはまらないとの所伝があるからだ。埴輪はない。以上の例からは二重濠をめぐらす時期を限定できるかにみえるが、天仲寺石墳の主体構造は複室の横穴式石室で6世紀中葉を遡るとは到底考えられない。また、銚子塚も、主体構造は不明だが円筒埴輪の型式から「御塚より新しい」とされている(註19)。

一方、周濠は土取場——土砂を取った跡地でもある。採土範囲——周濠を模式図どおりとし(第50図でドットを付す範囲)、平均深度を1mと仮定した時、得られる土量は日高正幸氏の

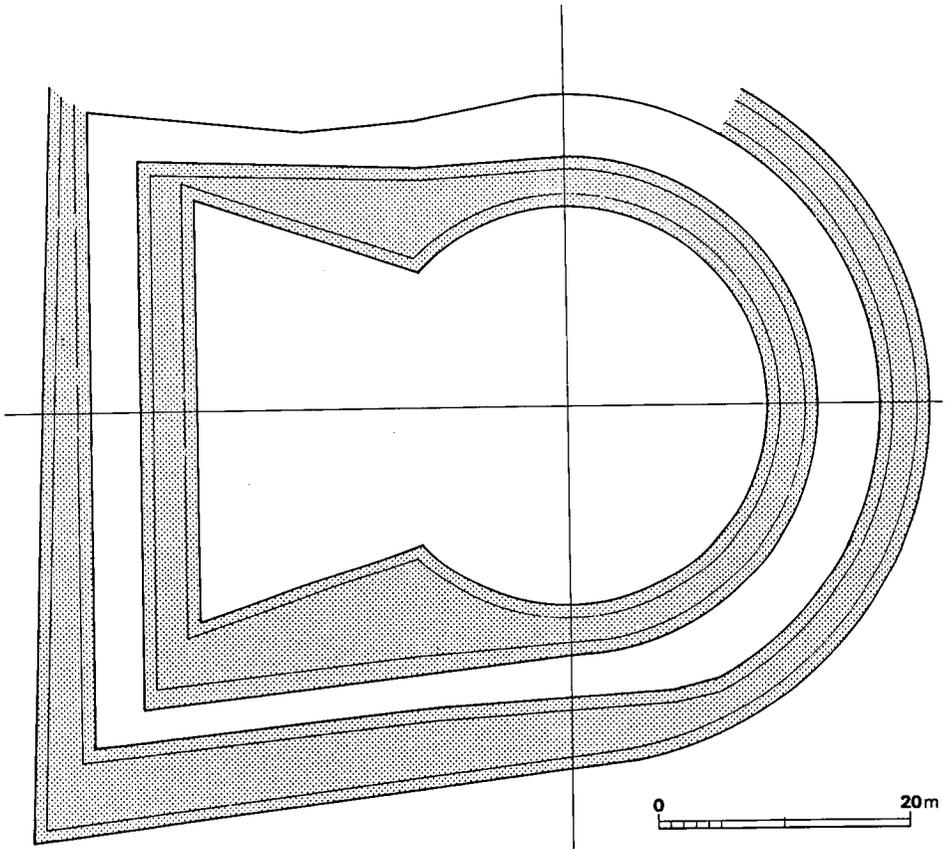
試算によれば、

内濠	2,564m <sup>3</sup>
外濠	2,459m <sup>3</sup>
計	5,023m <sup>3</sup>

になるという。内堤上面の削平状態から推して、周濠の掘削によって得られた土量は 6,000m<sup>3</sup> 前後とみなされよう。因に、底面半径32m（後円部半径）、上面半径7m（墳頂部半径）、高さ8mの円錐台の体積は

$$V = \frac{\pi h}{3} (R^2 + Rr + r^2) = \frac{\pi \times 8}{3} (32^2 + 32 \times 7 + 7^2) \approx 10,866\text{m}^3$$

となり、高さを9mと仮定すると12,218m<sup>3</sup>となる。段築成であることを考慮すれば、後円部円



第 50 図 周濠模式図 (1/1,200)

錐台の総土量は約11,000m<sup>3</sup>と推定される。つまり、周濠の掘削によって、後円部総土量の5割ないし6割近くが賄われた計算になる。

### 3 葺石

古墳築造に費された労働量がいかにほどであったかは、その分析が文化の母胎となった当時の社会構造の実相解明にもつながるものと思われるだけに興味が尽きない(註20)。小稿では、不確定要素が多いこともあって、出発点となる土量の一部算定(前出)と葺石作業の最小単位に限定して言及することとした。

既述のように、分担範囲は

A. 縦一列に石を置く界石列で区分された最小単位

B. Aが集合した広がり——工区

とに二分され、前者はほぼ個人の、後者は集団の受持範囲と考えてよい。作業は、最小単位の単なる集積としてではなく。複数の集団が各々作業グループ(班)として工区を分担する形態をとって行われたのである。確認されている工区の幅は5~14m、界石列のそれは0.6~2.5mと広狭多様で、かつ倍数関係を認めにくい。

作業分担範囲の広狭は、作業従事者にとっては労働量に直接影響する大事であり、その決定(割当)原理が気になるが、既述の状況からは完数尺を用いて厳密に区分けしたものは考えにくい。0.7~1.1mの間に界石列の幅が集中する傾向は、中腰のままで手の届く範囲が目安とされたことを示唆するのではあるまいか。また、人頭による割当を基本とし、性別・年齢などが加味されたものと推定するのは常識的に過ぎようか。つまり、各集団が分担すべき工区幅は、構成員数とその性別・年齢とが勘案されて決定されたものと考えたい。

作業内容は石材の採取・運搬と葺く作業とに2分されるが、作業従事者が運び手と葺き手に2分されたとも思える班(図版17-2, 図版18)と最小単位毎に一貫して行っているグループ(図版11-2, 図版12)もあるようだ。また、仕上りに見られる精粗の差は、施行法は各班に事実上任されノルマ消化を第一とした作業ぶりを物語る。

次に、作業の最小単位数を試算してみよう。各周濠の下端長を(前項同様第50図に基く計算を日高正幸氏に依頼)を、界石列間の平均的な幅で除する方法が簡便にして有効と考えられる。日高氏の計算によれば

内濠内縁下端長	約	309m	
"    外縁    "	約	334m	
外濠内縁    "	約	340m	
"    外縁    "	約	350m	計 1,333m

となる。幅の平均値を1mと仮定すると、計算上ではこれがそのまま最小単位数となる。一応の目安として提示した次第である。なお、最小単位の作業が割当を受けた本人の独力で行われたとは限らないのは当然である。

#### 4 埴輪

本墳出土の各種埴輪は、再述したように胎土が精良で大型の優品が大部分を占めるのが特徴である。器高が60cmをこえる円筒埴輪は、突帯を4条めぐらす例と5条のものに大別でき、前者は1段目と三段目、後者では2段目と4段目とに各々2箇所づつ計4個の透孔を穿っている。器表の2次調整はB種横刷毛目をかける例が多く、工具の静止痕がさほど明瞭ではない月の岡古墳出土例よりも後出するとみてよい。なお、円筒と朝顔とに若干の須恵質例を含むが、黒斑を有する破片はない。

顔面に赤色の条線を引く人物埴輪例は、九州では極めて類例が少ない(註21)。金子文夫氏の御教示によれば、本墳の周辺ではかって浮羽郡田主丸町麦生から出土したが現存しないとのことである。

次に、本墳に使用された円筒埴輪の本数について推量することにした。

宮崎氏報文によれば「前方部古墳南側辺より約4mの内側一帯には……高さ40㎝径30㎝の赤褐色の見事なる円筒はいずれも相接触して……」おり、これらは前方部南側縁裾部に樹立された埴輪列だと考えてよい。従って、少くとも墳丘裾部と内堤上とに埴輪列がめぐらされたのは疑いない。

前出第50図に基く日高氏の計算によれば、

墳丘裾まわり	297m
円堤内縁長	350m
〃 外縁長	431m
外濠外縁長	360m

となる。埴輪列が口縁部径35cm内外の円筒埴輪を隙間なく並べる構成をとったと仮定すると、これに要した埴輪数は計算上では、

墳丘裾まわり	848本	(297÷0.35)	
内堤(外縁寄)	1,231本	(431÷0.35)	計 2,079本

にも達することになる。

本墳から直線距離で最短2kmは離れた耳納山北麓部の何処かでこれらの埴輪は焼成されたのであろうが、目下の所窺跡は発見されていない。埴輪の製作と運搬もまた古墳築造工程上の重要な要素である。そこで、栃木県佐野市唐沢山ゴルフ場埴輪窺跡の調査結果を分析した大川清

氏の考察「窯詰数量」（註22）を聊長きに失するが以下に引用して参考に供したい。

「…… 1,000本の円筒ハニワを焼成する場合は、成形乾燥のおわったものを約1,200~1,300本用意して焼成にとりかかるわけで、前述の如き大きさの窯（長さ5m、幅1m、高さ1m位—編集者註）で焼成するとすれば、1窯に50~70本程を窯詰めし得るわけである。もし1窯50本として計算してみれば、1,300本を焼成するには実に26回の火入れを必要とする。また窯詰めの火入れ、窯出しの時間を4日間として連続操業したとすれば、104日となる。そして1週間に1日雨の日があったとしてその為に窯を乾燥させねばならない。そのような時間を1週間に2日とすれば104日では約15週、各1週に2日を加えると134日という計算になる。しかし、以上のように計算通りに操業が出来たとは考えられないし、まして1窯で26回という操業は窯跡を観察した場合、首肯し難いものがある。

窯域の観察からすれば、多く見積っても10回程度の火入れを限度とするようで、もし1窯10回程度の火入れとすれば、26回の火入れを必要とする場合には、3窯の同時操業を考えることもできるし、順次3回の築窯操業をも考え得る。」

一方、九州の埴輪窯跡としては唯一の調査例である福岡県八女市立山山埴輪窯跡では、真野和夫氏は「いま第1号窯跡によって1回の操業で焼成される円筒埴輪の数量を試算してみると、幅1.4m・長さ4mが焼成可能の床面積とすれば、直径40cmの大形品ばかりを並べたとして最大30本、23cm前後の小形のものを場合約100本という数が機械的には考えられる」（註23）とされている。

窯詰数量に限れば、大川・真野両氏の試算の結果にさほどの差はない。つまり、2,000本の円筒埴輪を調達するためには、延52回もの火入れが必要であったという計算になる。

なお、唐沢山ゴルフ場埴輪窯跡は「6世紀末から7世紀初頭における操業」、立山山埴輪窯跡は「6世紀中葉」と、各々本墳よりも後出する。窯体規模の時期的変化もあろうが、目安を得るといふ小稿の目的からして上記2窯の援用は差し支えなからう。

## 5 石室構造

前方部石室は、羨道部こそ未発達ながらも前壁構造をもち、古式とはいえ定型化しつつあるのは明らかだ。後円部石室は、竪穴式石室として紹介されたこともあるが、前項で述べたように南側くびれ部方向（南西）に開口する横穴式石室とする方が実態に合うようだ。

一般に5世紀代——古式の横穴式石室の構造は、千差万別で未だ定型化していないものが多く、葬法もまた同様である。

5世紀初頭に比定される福岡市老司古墳の4基の石室は、いずれもが一方の小口壁に棚状の階段状構造をもち、横口部を設けた最古例と目されている（註24・25）。うち3石室では追葬が確

認されている。けれども、いずれの遺体も長軸に沿って安置されており、この点竪穴式石室と変りはない。

老司古墳よりも後出する八女郡広川町石人山古墳(註26)は、長方形プランの横穴式石室に横口を設けた石棺を納める点で新しい要素をもつ。筑紫君磐井の数世代前の首長がその被葬者とみられ、その影響力は極めて強く、八女丘陵の北方地域—久留米市浦山古墳(註27)、同石櫃山古墳(註24)のみならず、西方は筑後川を距てた佐賀市西隈古墳(註29)、同西原古墳(註30)に、南は、菊池川中流域の熊本県玉名郡菊水町船山古墳(註31)などにも及び、一時期を画している。けれども、いずれも横口部は妻側に穿たれており、やはり竪穴式石室の倣をとどめているといえよう。

他方では、奥壁と平行に屍床を設ける一群がある。玄海灘沿岸の宗像郡津屋崎町勝浦第14号墳(旧17号墳, 註32)、同奴山第8号墳(旧41号墳, 註32)、内陸部の甘木市茶臼塚古墳(註34)などがそれで、プランも横口部の幅が若干狭い羽子板状と異なる。室内区分法だけに限れば、前2者は唐津湾岸の佐賀県東松浦郡浜玉町横田下古墳(註35)に通ずるものがある。ところが、同じく玄界灘に面した糸島郡前原町狐塚古墳の第1主体では、室内を奥壁と並行に1区、その手前を長軸と平行に3区、計4分割している(註36)。海路でつながる横田下古墳よりは肥後タイプの室内区分法を強く連想させられ、同タイプの系譜を考えるうえで見逃せない。ともあれ、これらの一群は、もともと追葬に適した横穴式石室の構造的特色をより発揮させるために室内を機能的に分割したものといえよう。

細長い石室に石棺を納めた塚堂古墳後円部石室が、これらのうち、八女丘陵およびその周辺の影響下にあったことは明らかだ。前方部石室も、石棺がないだけとみてよい。ただし、後円部石室に納められた石棺は底石を伴っており、この点で本墳のすぐ西方にあって先行する月の岡古墳の長持形石棺(註37)と共通し、これを伴わない前出の横口式石棺群(註38)とは異なるのが注意を引く。この石棺の横口の有無が不明なのは、それが八女丘陵—筑紫君の影響力の強弱を反映するとみられるだけに惜まれる。

両石室に見られる床の間状の石床の用途は、前方部石室での遺物出土状態からみて、副葬品を置くためのスペースと考えられる。前出老司古墳第2号石室の「棚部」には短甲1領が置かれていたらしい。けれども、この「棚部」は本来は横口部に相当する階段であり、これに直接的系譜を求めることは無理だろう。出自は不明で、以降普及することもなく消滅する。

前方部石室壁面の突起には、刀・鉾が置かれていた。九州では計22基の石室・石棺に知られているが、うち10例は熊本県下、8例が福岡県に集中する。県内の最古例は、前出老司古墳第4号石室のそれである幅79cmの奥壁1か所のみで、位置と数は糸島郡前原町釜塚も同様である(註39)。本墳の周辺では、他に前出日の岡古墳と、久留米市木塚古墳(註40)、同日輪寺古墳(註41)の3例があって集中している。けれども、時期・石室構造は一様でない。日輪寺・日の岡両

古墳は本墳よりも後出するし、前者は在地系の長方形プランの石室に肥後タイプの石障をめぐらした異色の存在であるし、後者は胴張りプランと各々系譜が異なる。ほぼ同時期とみられる木塚古墳は、正方形に近い矩形プランとこれまた少数派で、出自とその後の消長は不明である。突起には「刀架」であるものとそれには明らかに不適當なものがあり、三島格氏の先駆的業績(註42)以来四半世紀を経たが機能は未だ完全には解明されていない。

## 6 副葬品

出土品個々についての整理作業を経ていないので軽々しく論ずることはでないが、前方部石室出土品と後円部石室からのそれとを、その組み合わせに限りて簡単に比較しておきたい。

まず、両者の共通点としては、数種の滑石製品を含むことが挙げられよう。前方部石室での出土位置は前壁南西隅と北壁北東隅とで、特に前者では鏡と共に足許からも遠く離れた片隅であることが注意される。室内に須恵器を納めないのも共通するようだ。前方部石室内からは全く土器は発見されていないし、後円部石室からも須恵器片は全く採取されていないからだ。次に相違点を述べると、

**装身具** 前方部石室の被葬者は耳環を着用していないが、後円部石室被葬者については不明である。ゴホウラ貝製貝輪(註43)を伴った前方部被葬者の頸飾は管玉のみで構成されており、玉類は後円部石室に比べて質量ともに著しく見劣りがする。

**武器・武具** 前方部石室では、鹿角装刀が目立つが剣を含まない点と、短甲3・挂甲1・頸甲1・肩甲1・衝角付冑1など、県内では甲冑各8領を納めた前出月の岡古墳(註44)に次ぐ甲冑類の集中副葬が注意される。一方、剣を含む後円部石室では、月の岡古墳と同様金銅胡録金具を伴ってきらびやかである。

**馬具** 両者の差は際立っている。前方部石室の馬具は実用一点張りの鉄製品であるのに対し後円部石室からのそれには金銅製鞍金具・同杏葉が含まれて飾馬的色彩を強くもつからだ。

## 7 年代と被葬者の性格

本墳の営造期は、前述の理由で月の岡古墳よりは新しく、既に直弧文が姿を消した日の岡古墳よりも古いことは明らかだ。前方部と後円部石室との間に大きな時間差があるとは思わず、両者とも大略5世紀後半に比定される。敢えて両石室の先後関係を求めれば、武器に剣を含むなど副葬品の構成において後円部石室の方がより古い様相をとどめているかに思われ、従って、前方部石室の方が若干遅れて作られたものと推測される。

両石室の構造上の相違点は、つまるところ石棺の有無と石材の大小の2点に集約できる。前項で述べた出土品の構成に認められる両者の差異は、時期差に起因するというよりは各々の被葬者の生前の地位や保持した性格の差に由来するとみるべきであろう(註45)。とすれば、構造上の相違もまた各々執り行われたであろう葬礼の相対的な厚薄度を反映したものとみなされよう。

石棺と木棺、金色燦然たる馬具と実用本位のそれ。これらの差は、後円部石室と前方部石室の各々の被葬者の生前の地位を象徴して余りある。墳丘における位置自体が既に示唆しているように、前者が主たる地位にあることは歴然としている。

ところで、前出月の岡古墳の被葬者については、これを的臣と想定する見解が佐田茂氏によって提示されており(註 )、福尾正彦氏はその畿内の色彩の濃さからさらに一步進めて土着化を図ろうとする的臣を充てている(註47)。この月の岡古墳と本墳後円部石室被葬者との間には胡籙金具の他に、型式こそ異なるが環鈴という共通する遺物がある。

九州出土環鈴の意義については、かつてふれたことがある(註48)。その際に、

- 出土古墳の営造期が限られた期間に集中し、石室構造上でも共通性が認められる。
- 出土古墳の大半が甲冑を伴出する。
- 出土古墳の下限は、磐井の乱(527~528)直前とほぼ一致する。
- 筑紫君一族の兆域である八女丘陵周辺からは出土していない。

ことを指摘した。そして、環鈴は各被葬者が恣意的に入手したのではなく、九州出土例に限れば、渡海軍の一隊を率いる将に対して、その地位の証・象徴として中央政権から与えられたものと推定した。環鈴や胡籙は、地域的盟主としての存在と力量とを中央政権によって認知された証として有効であったと思われる。

これまでに度々指摘されているように(註49)、塚堂古墳を介して、畿内のな月の岡古墳から、それが薄れて在地色を強く示す日の岡古墳へと時期的変遷をたどる。一体に、古墳の性格は畿内色あるいは在地色のいずれか一方を示すのではなく、両者を合わせもつのが通例とみる方が妥当だろう。時期あるいは地域によって、両者の比重が異なるだけなのだ。中央の動向に無関心あるいはこれに全く影響されない地域的盟主など盟主たり得ないし、あり得ない。

一方、畿内のみならず、八女丘陵——筑紫君による規制の存在も無視できない。規制は二重に存在したのである。長方形プランの石室を八女丘陵周辺から導入しながらも、前方部石室はもとより後円部の石棺もまた加飾されていない公算が大であるのもその1例であろう。ただし、二重の規制下にあったとはいえ、完全に制圧されていたわけではない。奥壁前面に設けた石床、底石をもつ石棺など、この地域の独自性もまた発揮されているからである。

以上を要するに、畿内色と在地色との併存、これが、塚堂古墳の性格そのものといえよう。つまり、本墳は、畿内政権と筑紫君双方の動静を窺いながら、地域的盟主としての自立性をも保持しようと腐心した被葬者の活動の軌跡の一斑を具現したものに他ならない。(石山)

- 註1 田中幸夫「筑後千年村徳丸古墳前方部石室における埋葬の状と遺物の一二」（『考古学雑誌』第25巻・第1号，1935）
- 註2 宮崎勇蔵「筑後国浮羽郡千年村徳丸塚堂古墳」（『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十輯 史蹟之部，1935）
- 註3 註2に同じ
- 註4 金子文夫「第1章 考古遺跡」（『吉井町誌』第1巻，1977）
- 註5 註4に同じ
- 註6 石山 勲「塚堂古墳」（『吉井町文化財調査報告書』第1集，1982）
- 註7 註6に同じ
- 註8 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻・第2号，1978）。川西氏の「B種 ヨコハケ」と同じ
- 註9 註1に同じ。田中幸夫氏報文では、「五六個の瑠璃玉片」，図中では「小玉」となっている。
- 註10 島田寅次郎「日ノ岡，月ノ岡古墳」（『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯，1925）。同書報文中の「長さ52間2尺」，「全長47間1尺」を換算。
- 註11 「船山」（『菊水町教育委員会文化財調査報告』1，菊水町教育委員会，1976）。なお，同墳の現存墳長は46mで，現存率は75%である。
- 註12 数値は『久留米の文化財』による。
- 註13 『福岡県三潯郡誌』に拠る。
- 註14 1982年5月発掘調査。県教委文化課酒井仁夫・伊崎俊秋両氏の御教示に拠る。
- 註15 註12に同じ
- 註16 島田寅次郎「権現塚と御塚」（『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯，1925）
- 註17 佐田 茂「御塚・権現塚古墳と水沼君」（『久留米市史』第1巻，1981）。同書第117図。なお，註16文献では皮袋形須恵器は銚子塚出土とされている。佐田氏の御教示によれば，大善寺小学校蔵の同資料は福尾正彦氏の追跡調査により権現塚から出土したものであることが判明したとのことである。
- 註18 註17に同じ
- 註19 註17に同じ
- 註20 近作に，石川 昇氏の「大阪に築かれた古墳の総体積と労働力」（『考古学研究』第115号，1982）がある。
- 註21 市毛 勲「人物埴輪顔面の赤彩色」（『朱の考古学』，1975）。同書の「顔面の赤い人物埴輪集成」には，出土地不詳として1例が挙げられている。
- 註22 大川 清『安蘇山麓古代窯業遺跡』（1963）

- 註23 真野和夫「埴輪窯の構造」（『立山山窯遺跡群』Ⅳ，八女古窯跡群調査団編，1972）
- 註24 九州大学考古学研究室編『考司古墳調査概報』（福岡市教育委員会，1969）
- 註25 小田富士雄「横穴式石室における複室構造の形成」（『史淵』第100号，1968）
- 註26 武藤直治・鏡山 猛「筑後一条石人山古墳」（『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第12輯 史蹟の部，1937）
- 註27 浜田耕作「筑後国三井郡上津荒木村二軒茶屋の古墳」（『九州に於ける装飾ある古墳』『京都帝国大学文学部考古学研究報告』3）
- 註28 渡辺正気・宮小路賀宏「石櫃山古墳」（福岡県文化財調査報告書』第41集，1969）
- 註29 佐賀市教育委員会編『西隈古墳』（1975）
- 註30 佐賀県教育委員会編「佐賀県の遺跡」（『佐賀県文化財調査報告書』第13集，1964）
- 註31 梅原末治「玉名郡江田村船山古墳調査報告」（『熊本県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第1集，1922）
- 註32 福岡県教育委員会編「新原・奴山古墳群」（『福岡県文化財調査報告書』第54集）。同書の石山 勲「第17号墳」。
- 註33 註32・川辺昭人「第41号墳」
- 註34 柳田康雄編「小田茶臼塚古墳」（『甘木市文化財調査報告書』第4集，1979）
- 註35 松尾禎作「横田下古墳」（『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十輯，1951）
- 註36 林 覚編「曾根遺跡群」（『前原町文化財調査報告書』第7集，1982）
- 註37 矢野一貞「若宮古塚并古物冢」（『筑後将士軍談』卷之五十）。同書の覆刻本の挿絵。
- 註38 註27では、浦山古墳石棺の底石が復元されている。
- 註39 石山 勲「釜塚」（『前原町文化財調査報告書』第4集，1981）
- 註40 横尾義明・萩原裕房「木塚遺跡」（『久留米市文化財調査報告書』第14集，1977）。同書の「古墳時代」
- 註41 梅原末治「肥後に於ける装飾ある古墳及横穴」（『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』1）。同書中の「筑後国久留米市日輪寺古墳」
- 註42 三島 格「九州における突起ある横穴式石室古墳」（『熊本史学』第19号，1957）
- 註43 木村幾太郎「所謂広田型貝輪の細分について」（『史淵』第117号，1980）。木村氏はこの貝輪は「着装されていた可能性があるといった程度」とされ，古墳時代の「貝輪の性格としては，着装埋葬されていたとするよりも，主に宝器的又は呪術的性格を持った副葬品として埋納された」とする。
- 註44 註37と同じ
- 註45 先稿（註6文献）では，後円部石室が「前方部石室よりも若干遅れて作られたとも考えられる」としたが，訂正する。

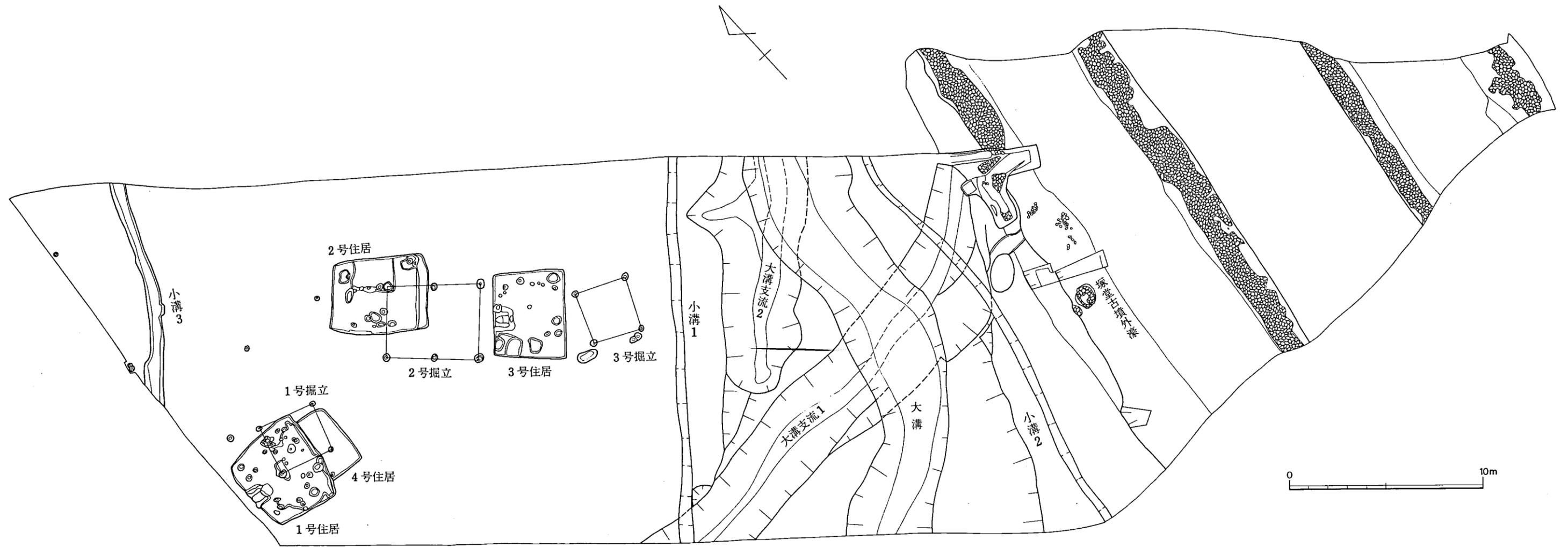
- 註46 同氏「筑後地方における古墳の動向」(『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980) 所収
- 註47 同氏「筑後月の岡古墳とその周辺」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982) 所収
- 註48 拙稿「九州出土の環鈴について」(『古代探叢——滝口宏先生古稀記念考古学論集』1980) 所収
- 註49 森貞次郎「北九州古墳の編年的考察(予報)」(『西日本史学』創刊号1949) 所収

## 第4章 B地区の調査

第1節 はじめに

第2節 遺構と遺物

第3節 小 結



第 51 图 B地区遺構配置図 (1/200)

## 第4章 B地区の調査

### 第1節 はじめに

ここに報告するのは、B地区内で1979年度に調査した塚堂古墳前方部（内濠・外濠）を除く、1981年度調査によって出土した遺構と遺物である。1979年度の調査では、B地区全体の東半部を調査対象とし、東側の内・外濠を発掘すると共に西側の水田床土を除去して溝状遺構の一部を試掘している。

81年度調査では、外濠南肩部以東に表土を移動し、住居跡6・掘立柱建物跡3・大溝・小溝3、その他柱穴様小ピットと共に、前述した溝状遺構の試掘墳を再発掘して大溝・大溝支流1および2を検出して調査した。このとき、大溝支流1の東端は外濠と切り合い関係にあり、外濠造作時に一部整地されていることが明らかとなったので、前回調査された外濠西肩の一部も発掘した。以下では、1979年度調査時の溝状遺構を、改めて大溝、大溝支流1、大溝支流2に分けて報告に加える。

### 第2節 遺構と遺物

#### 1. 住居跡

住居跡は、調査区の西部で4軒が検出された。このなかで、4号住居を切る1号住居に新・旧が認められ、2号住居にも新・旧が認められたので、合計6軒を調査したことになった。なお、各住居については、第152図模式図に示した柱穴・土壇名で仮称し、番号を付けて説明する。

**主柱穴** P11から付す。4個の主柱穴を有すと考えられるが、P12の位置で柱穴が検出されなかった例でも、P11～P14を使用し、P12を欠番と明記する。なお、P11～P14の位置で柱穴が検出されず、P21・P22の位置で2個出土する例は、P21・P22の番号は使用せずにP11・P12を付して主柱穴2個とする。

**主軸柱穴** P21から付す。

**主軸間柱穴** P31から付す。主柱穴からやや離れ、P11～P14・P12～P13間距離よりも、P31～P32間距離が小さい柱穴。主柱穴から大きく離れ、P11～P14・P12～P13間距離よりも柱間距離が大きく、他の機能が考えられる例はP61から付す。

**対角柱穴** P41から付す。主柱穴から離れ、主柱穴あるいは壁コーナーを対角状に結び線上

に位置する柱穴。P41・P43の位置で検出されなかった例でも、P41～P44を使用し、P41・P43を欠番とする。

**壁柱穴** P51からも付す。住居壁に近い内外の柱穴も含める。

**施設柱穴** P61から付す。

**その他の柱穴** P81から付す。

また、主軸を決めるにあたって、主柱穴内の柱根・柱痕の遺存例がなかったので、第152図模式図に示した方法で得たものを柱穴の中心として、それぞれの中心間を結んで柱穴間距離とした。(表15)。そして、P11-P14・P12-P13を結ぶそれぞれの線上の2等分線を主軸としたものである。また、床や土壌等の面積については、各住居実測図(1/50)上で、1㎡の大方眼・0.04㎡の中方眼・0.0025㎡の小方眼を使用し、カマドの面積は1/50縮尺の実測図上で、0.01㎡の中方眼・0.0001㎡の小方眼を使用し、それぞれの方眼コマ数を計測した。(第161図参照)

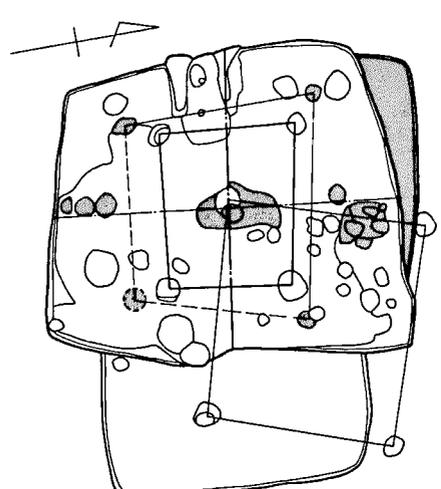
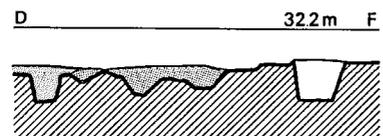
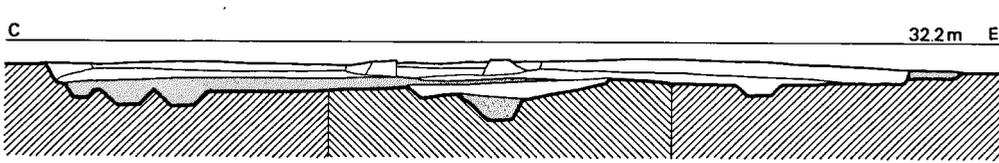
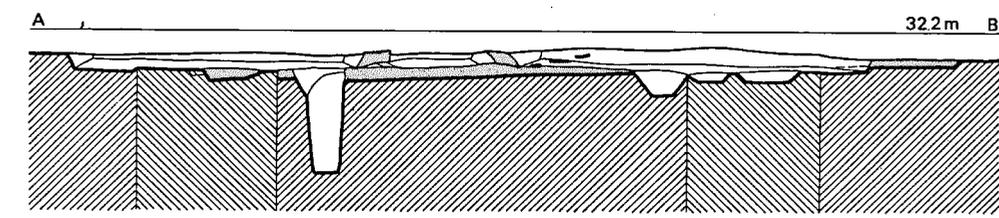
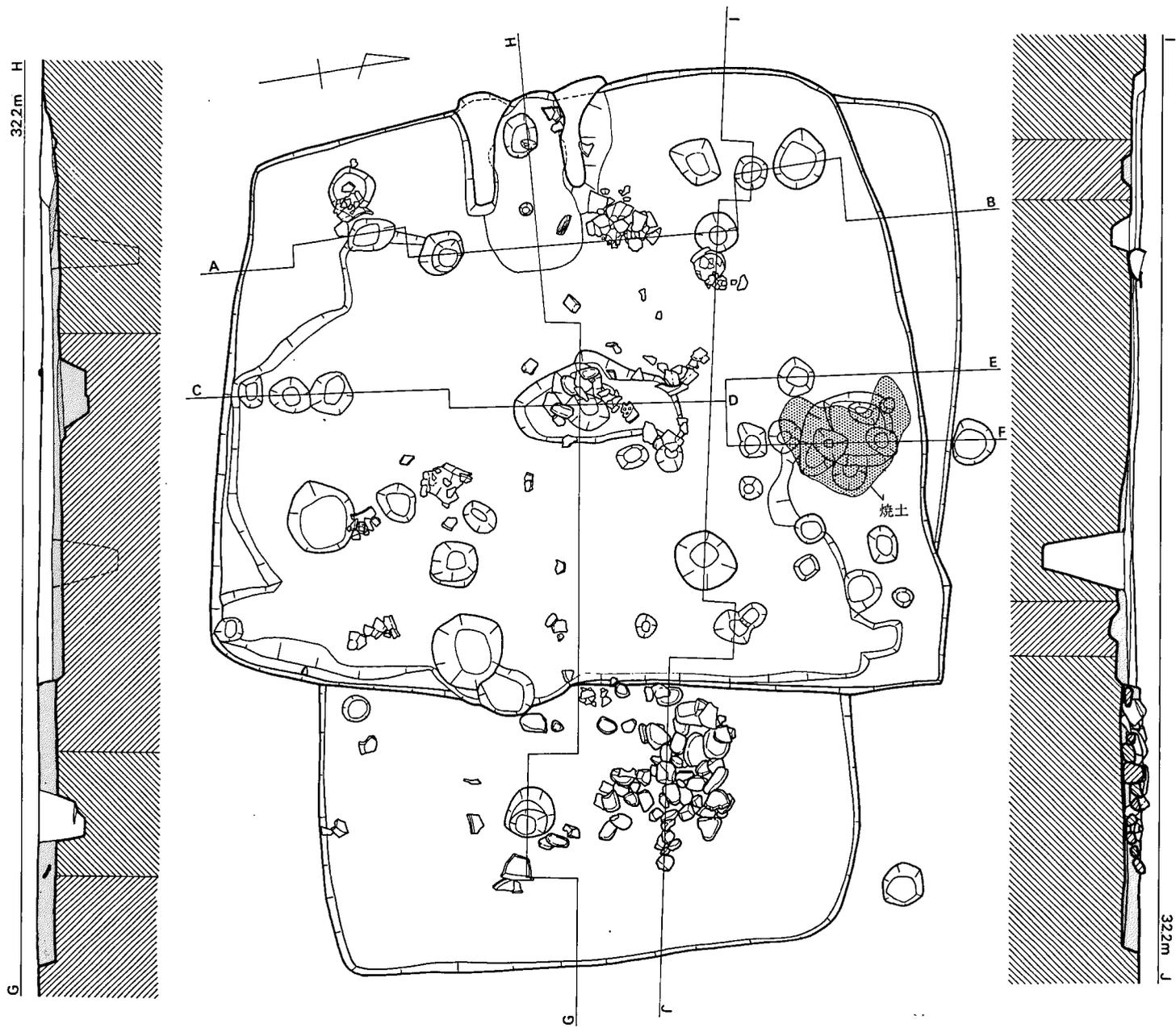
ところで、第153図等で示した換置図形は、以上の方法で得た各柱穴等の距離と床・土壌等の面積から、これを同一面積を有する図形に換置することで、住居プランの特徴を示したものであって、この換置図形が各住居の復原プランそのものではない。

#### 1号住居跡 (図版38～40, 第52・153・154図, 表16～21)

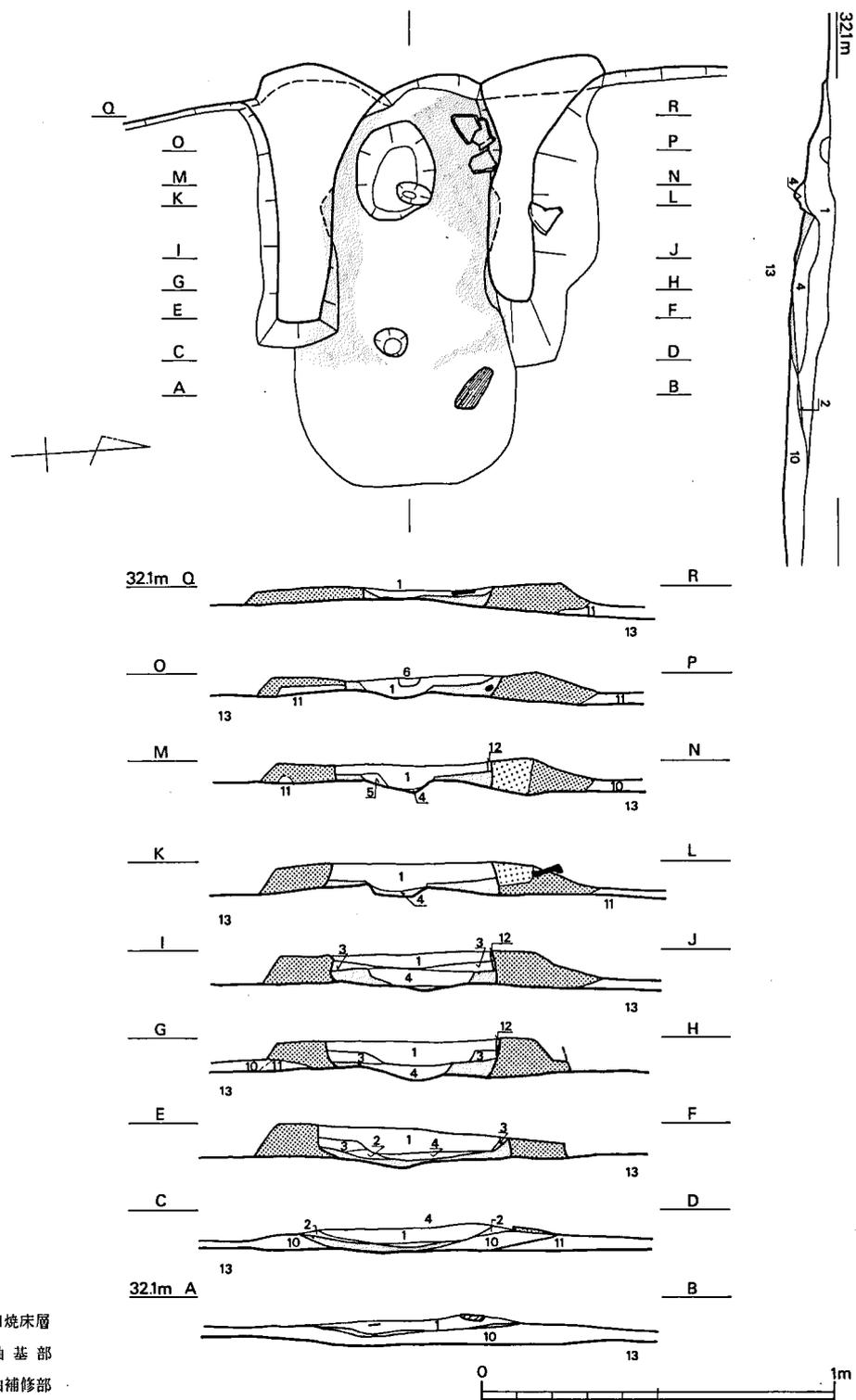
調査区の西端で検出した。東壁は4号住居を切っている。住居プラン検出時、北壁部埋土は黄褐色粘質土ブロックを含む暗褐色粘質土で、他は暗褐色砂質土であった。後者の埋土を除去すると、西壁中央部のカマドプランが良好に出土し、甑等の完形に近い遺物が同一レベルで出土すると共に、前者の埋土が床面として検出された。このことによって、西壁中央部にカマドを設け、東西方向に主軸を有する住居が新しく、南北方向に主軸を有する住居が古いことが確認された。古い南北主軸の住居のカマドは、北側でその一部のみが遺存し、焼土の一部が新出住居床面レベル以下に認められた。また、新出の床面を掘り下げると、古い南北主軸の住居に伴う中央土壌D11が検出され、埋土は、黒色粘質灰層で、その床面から検出された暗褐色粘質土の柱穴は、1号掘立柱建物跡に属するものであった。このことにより4号住居→1号掘立柱建物→1号住居(南北主軸)→1号住居(東西主軸)の順に新しくなることが明らかとなった。また、住居の西半部の地山は黄褐色細砂質土であるが、東半部は、5cm大の河原石を含を暗褐色粘質土であった。このことから、新出の東西主軸の住居跡では、南北主軸の住居の北側を埋めると同時に、東半部を4～5cm程掘り下げて、新たに張床を設けたものと考えられる。このとき、新出住居にあっても、D11は継続して使用されたものと考えられ、壁外突出部は埋められていない。カマドの説明は、第8章で行う。

遺物の出土状態は、新出の東西主軸の住居では良好で、西壁中央カマドK11近くで第57図26の甑がつぶれた状態で、第56図15の高杯の脚部が立脚した状態でいずれも張り床上に接して出土した。

なお、新出の東西主軸住居の床面積は16.7775㎡と計測されたが、D21の面積は壁外突出部の



第 52 图 1·4号住居跡実測图 (1/40)



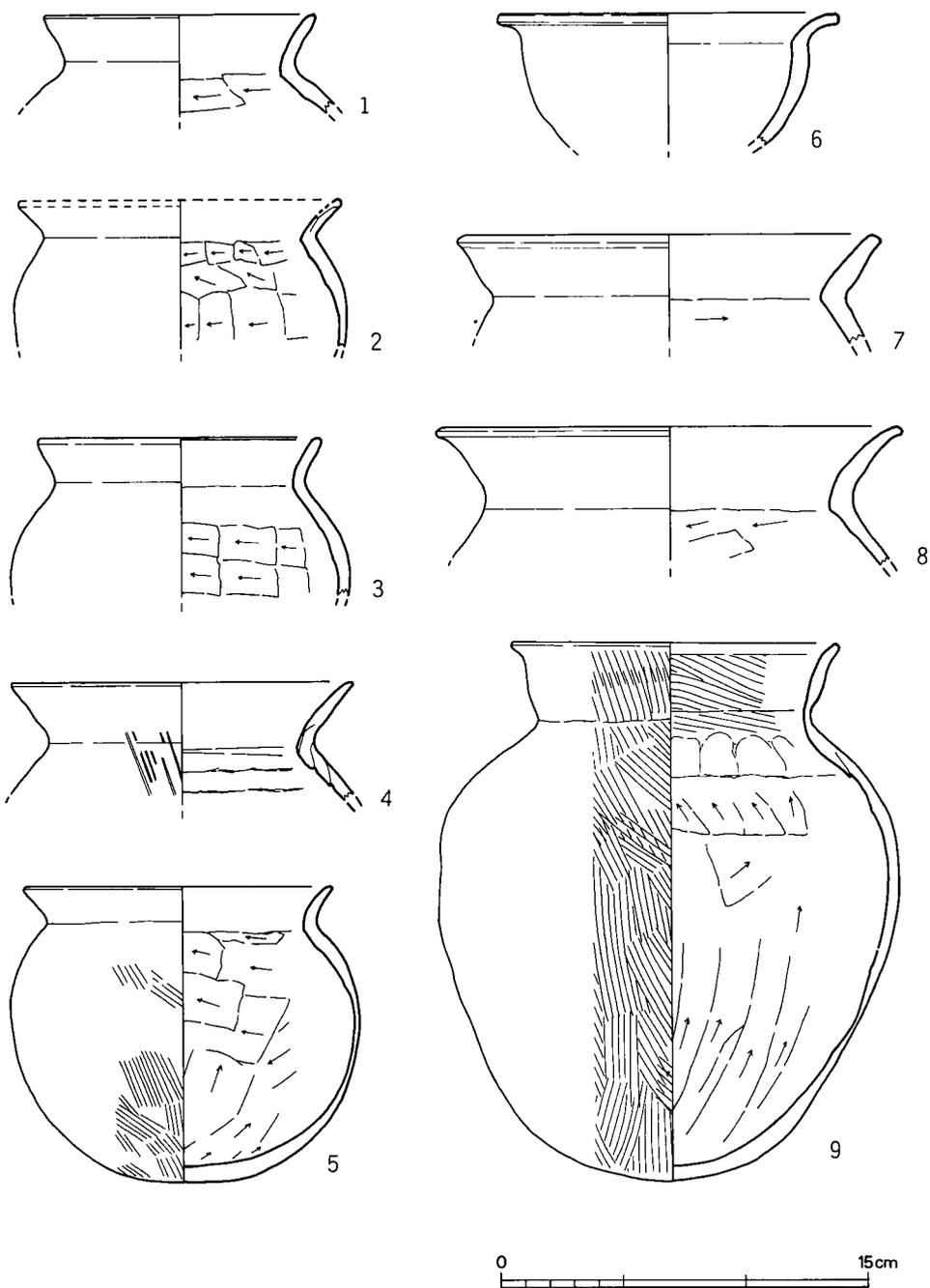
番号	状態	特長	番号	状態	特長
1層	新灰残滓	赤褐色焼土・炭小ブロック(1×1cm大) 混粘質灰土層	8層	両袖基層	暗褐色袖砂層
2層	焼床層	暗褐色細砂層(焼土粒を含む)	9層	北袖補修層	黄褐色粘質土(焼土粒を含む)
3層	天井・袖壁落下層	赤褐色焼土ブロック(1.5×2.0cm大) 混粘質褐色土層	10層	張床層	暗褐色粘質土
4層	新焼床層	赤褐色砂質焼土	11層	張床層	黄褐色粘質土ブロックを含む暗褐色粘質土
5層	古灰残滓	灰色粘質灰土	12層	袖焼成層	赤褐色砂質焼土
6層	天井落下層	赤褐色焼土ブロック	13層	地山層	黄褐色砂質焼土
7層	古焼床層	赤褐色焼土ブロック(0.5×1.0cm大)を含む 砂質土			

みを計測すると、 $0.07\text{m}^2$ である。西壁カマドK21の面積は、住居床内が $0.8857\text{m}^2$ で、床外突出部が $0.0743\text{m}^2$ である。床内面積は現存両袖までの計測ではなく、住居床面積に占めるカマド施設占有面積ということで、両袖前面の灰が堆積した凹みの面積を加算したものである。

ところで、新・旧住居の主軸は以下の方法によった。新出の東西主軸住居としたものは、P11-P14・P12-P13間距離の平坪は $1.71\text{m}$ で、P11-P12・P14-P13間距離の平均は $2.10\text{m}$ で前者が $0.39\text{m}$ 短い。また、P11-P14に平行した位置にP61-P62が検出され、他にP21・P22等の主軸間柱穴が張り床面で検出されていない。また、P11~P14・P61・P62はそれぞれの壁から等位置で検出されている。これらのことから、P11-P14・P12-P13の中軸を主軸として、主軸N- $80^\circ$ -Wを得た。旧出の南北主軸住居としたものは、主柱穴をP15~P16・主軸間柱穴をP21と考えた。P11-P12とP16-P17は平行で、P14-P13・P11-P12・P16-P17の2等分線は直線で結ばれる。このことから、P11-P14に平行で、この2等分線に対峙する位置をP18と考えた。このとき、P15-P16・P18-P17の2等分線は、P11-P14・P12-P13の2等分線と平行関係にある。このことよって、南北主軸N- $8^\circ$ -Eを得た。主軸柱穴は、P21~P24が考えられるが、P22は北壁カマドK22に近接した位置にあり、D11内埋土は黒色粘質灰であるので、K22設営前の主軸柱をこのP22とし、設営時の主柱穴をP21と考えた。

土器（図版52・53、第54~57図、表4）

壺（1~5） 1~5はいずれも小型の広口短頸壺である。1は器周残 $\frac{1}{8}$ 強で復原口径 $11.2\text{cm}$ を測り、器内頸部直下からヘラケズリを施すが方向は不明である。胎土に金雲母粒・細砂粒を多く含み、焼成は普通である。色調は器内36茶色（9.5R 4.5/7.0）・器外39にぶ赤味橙色（10.0R 4.5/4.5）を呈す。2は器周残 $\frac{1}{8}$ 強で口縁端部を欠失するが、復原口径 $13.2\text{cm}$ を測り、器内頸部直下から左廻りのヘラケズリを施し、1回のヘラの移動距離は約 $3.8\text{cm}$ であるが、1回の移動軌跡間で2~3の段を呈していることから、器体の胎土の乾藻がやや進んだ状態で強く手持ちヘラケズリをしたものと思われる。細砂質の胎土に金雲母粒を多く含み、焼成は悪く、色調は器内58暗い茶色（2.5YR 3.5/2.0）・器外63明るい茶色（3.5YR 5.5/7.0）を呈す。3は器周残 $\frac{3}{8}$ 強で復原口径 $11.6\text{cm}$ を測り、器内は肩部を横方向にナデ、以下を左廻りのヘラケズリで仕上げ、器外は肩部以下に細い斜方向ハケ目痕を認める。胎土に $2\text{mm}$ 大の赤褐色粒・ $0.5\text{mm}$ 大の砂粒を多く含み、 $8\text{mm}$ 大の石英も認められ、焼成は良い。色調は器内67茶色（4.0YR 5.0/4.0）・器外82にぶ黄橙色（8.0YR 6.0/2.5）を呈す。4は器周残 $\frac{1}{8}$ 強で復原口径 $14.0\text{cm}$ を測り、器内は頸部下~口縁部にかけてヨコナデを施すが、肩部は雑なナデのまま明瞭な胎土接合痕を残したままである。器外は肩部に斜方向ハケ目を残す。胎土に金雲母を含まず、 $1.0\sim 2.0\text{mm}$ 大の砂粒を多く含み、焼成は普通で、色調は器内外共に78にぶ黄橙色（7.5YR 7.0/5.5）を呈す。5は器周残 $\frac{1}{2}$ 弱で復原口径 $12.6\text{cm}$ 、胴部最大径 $14.3\text{cm}$ 、器高 $12.3\text{cm}$ を測る。器内胴中位下は縦~斜方向、頸部直下~中位までは横方向の左廻りのヘラケズリを



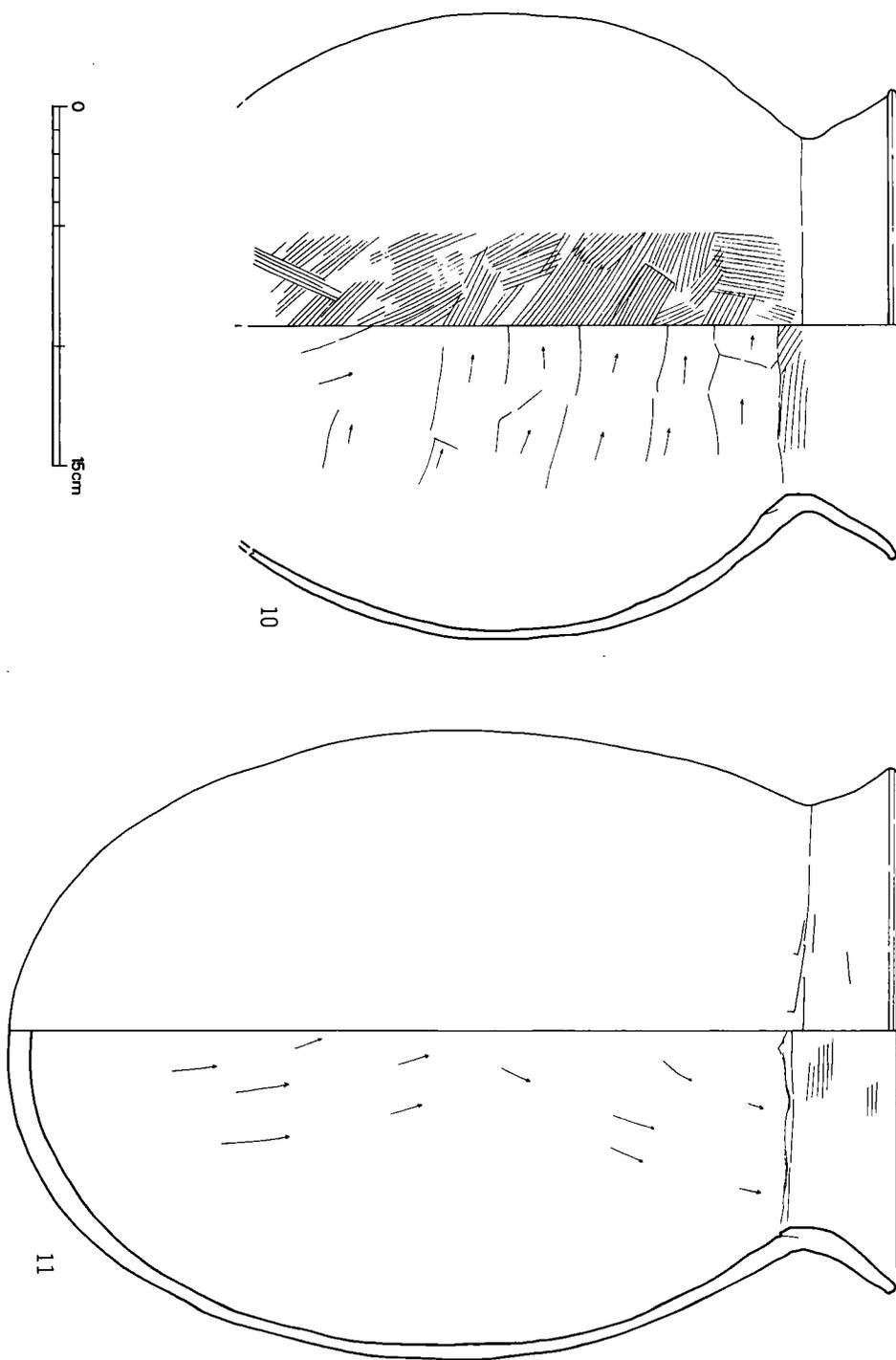
第 54 图 1 号住居跡出土土器実測図① (1/3)

施す。器外は肩部以下底部までをハケ目で仕上げる。胎土に金雲母粒を多く含むが赤褐色粒は少なく、0.5mm以下の砂粒を多く認め、焼成は普通である。色調は器内80暗い黄茶色（7.5YR 3.0/1.0）、器外39にぶ赤味橙色（10.0R 4.5/4.5）を呈す。

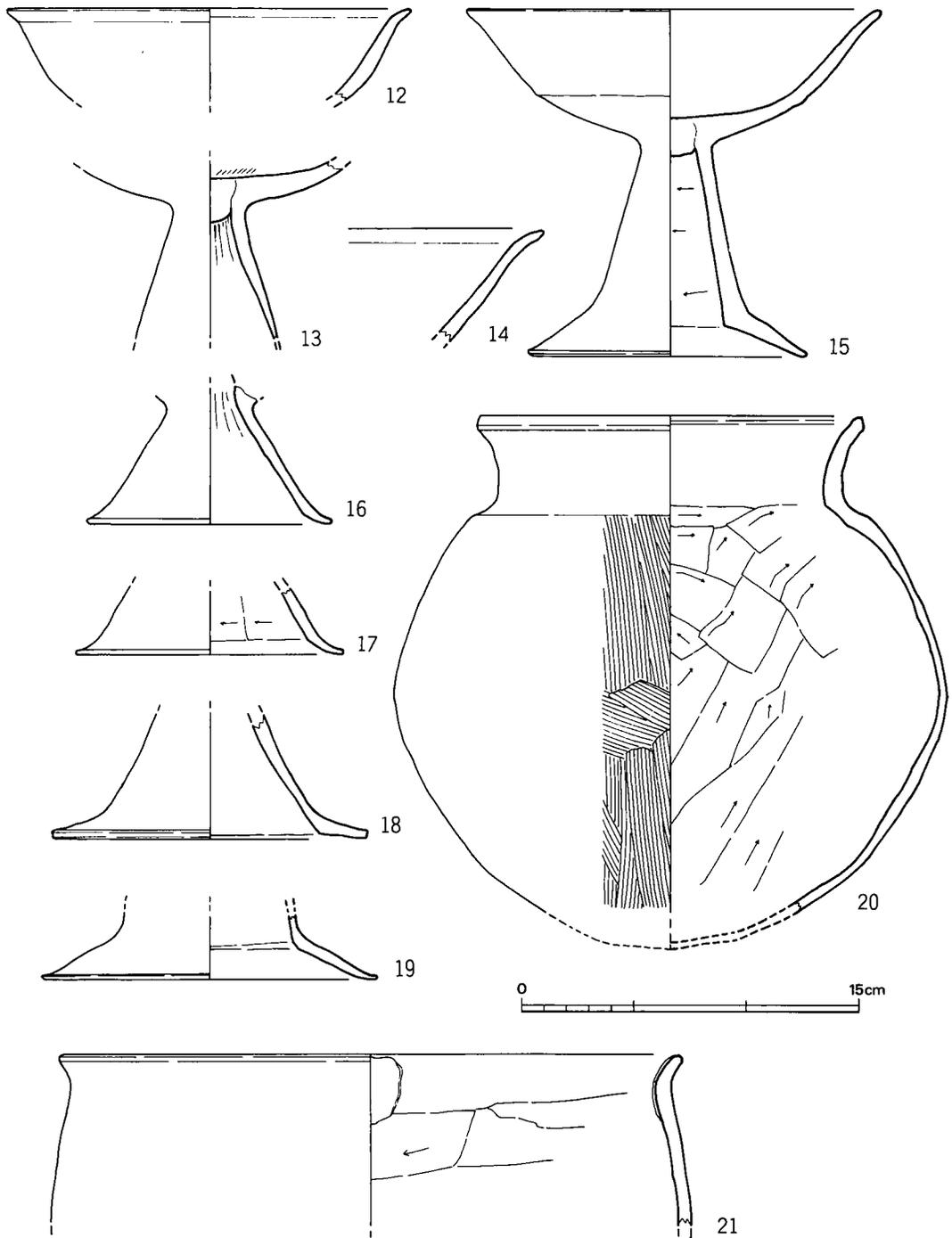
以上のなかで、4は他に比べてやや長い口縁部が直線的に外反するなど、むしろ7・8の器形と同様のものである。

甕（7～11・20） 7～9・20は中型の短頸広口甕である。7は器周残 $\frac{1}{4}$ で復原口径17.3cmを測り、器内は頸部直下から右廻りのへラケズリを施し、口縁部は直線的に外反し、端部は丸味を呈さず平坦に仕上げる。8は器周残 $\frac{1}{4}$ で復原口径19.0cmを測り、器内頸部直下から左廻りのへラケズリを施し、やや外湾気味に外反する口縁端部は丸味を呈し若干垂れ下がる。胎土に金雲母粒・角閃石・赤褐色粒を含み0.5～2.0mm大の砂粒を認め、焼成は良い。色調は器内外共に83にぶ橙色（8.0YR 5.5/6.0）を呈す。9は口径13.4cm、胴部最大径18.8cm、器高22.1cmを測る。器内は底部～肩部までを縦方向にへラケズリし、肩部は頸部直下から下向に向けて指先でナデるが、口縁部は斜方向ハケ目後に雑にヨコナデする。口縁部は直線的に外反し、先端は外湾し丸味を呈する。器外も口縁部のみをヨコナデし、口縁部は縦方向・肩部は斜方向・胴部以下は縦方向のハケ目仕上げである。なお、ハケ目は口縁部が肩部よりも新しい。胎土に金雲母片・赤褐色粒・角閃石を含み、0.5mm大の砂粒を多く認め、焼成は普通で、器外肩部以下に煤の付着を見る。色調は器内外共に73黄茶色（5.0YR 5.0/5.0）を呈す。20は器周残 $\frac{1}{4}$ 強で復原口径17.2cm・胴部最大径24.6cm・器高23.8cmを測る。器内胴中位下は縦方向・頸肩部は斜～横方向の右廻りのへラケズリを施す。器外は胴上半部は縦方向・中位は斜方向・下半部は縦方向に整然としたハケをこの順序で施して仕上げる。口縁部はヨコナデを施すが、器内上位が若干凹み、側端面はやや内傾気味に立ち上がる。胴部の強い整然としたハケ目を上・下縦方向に施したために、やや直線的に胴部最大径位で屈折する器形を呈している。

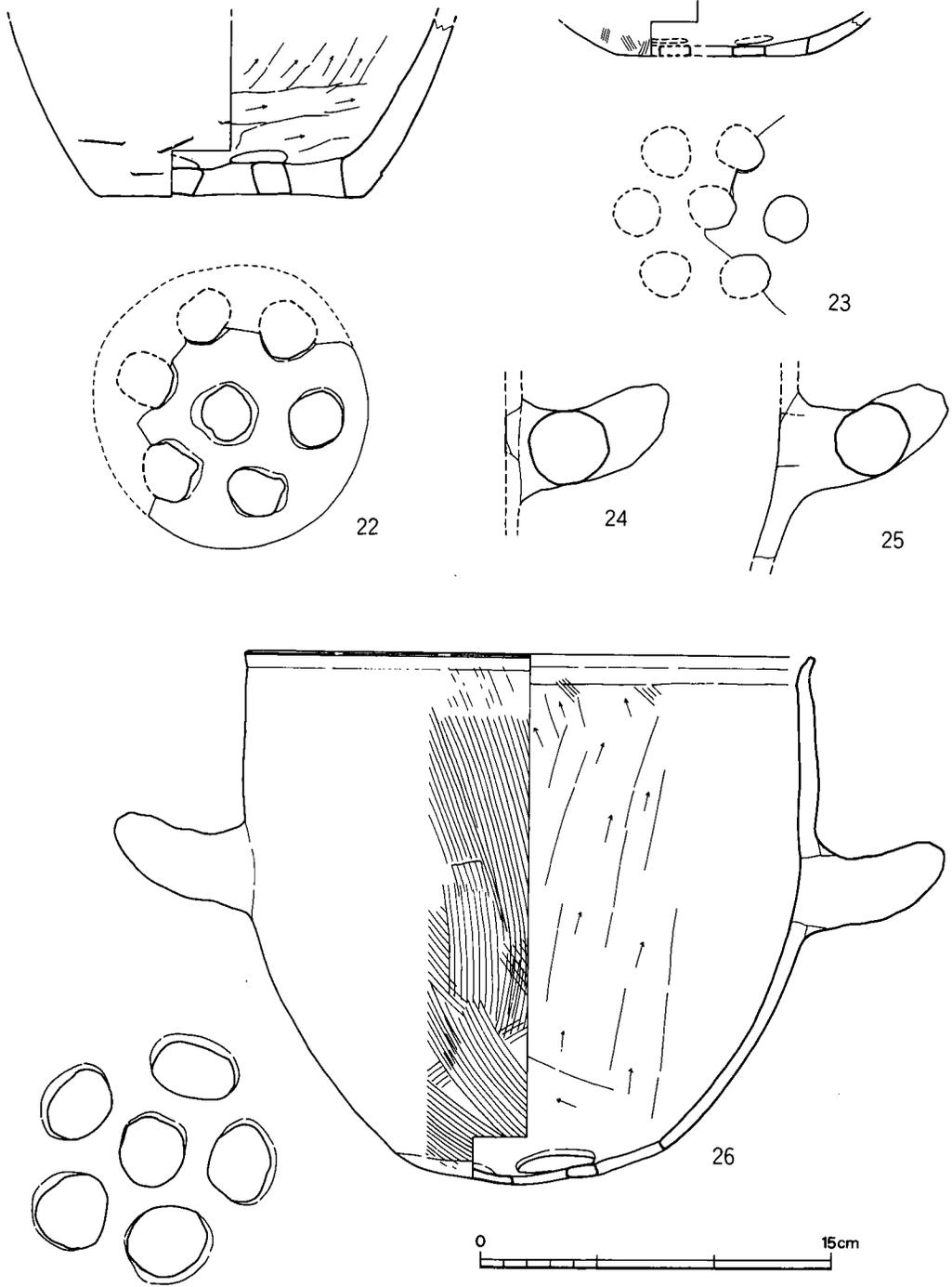
10・11は長胴形の甕で、7～9に比べるとやや口頸部が長い。10は器周残 $\frac{3}{8}$ で復原口径19.6cm・胴部最大径26.1cmを測り、器高は33.0cm前後である。器内は頸部直下から胴下位まで横方向に左廻りのへラケズリを施すが、頸部のへラケズリのみ砂粒の移動が少なく、頸部の面取りを行った程度である。口縁部は横方向ハケ目後にヨコナデを施し、内湾気味に外反し、上位は外湾気味となり、端部が垂れ下がる。器外胴部はハケ目仕上げのままであるが、頸部のヨコナデは強い。胎土に赤褐色粒・0.5～2.0mm大の砂粒を多く含む、焼成は良く、器内外共に83にぶ橙色（8.0YR 5.5/6.0）を呈す。11は器周残 $\frac{1}{2}$ 弱で復原口径21.8cm・胴部最大径25.2cm・器高37.0cmを測る。器内は胴下半部は底部から左斜方向に、上半部は右斜方向に長くへラケズリを施し、口縁部は横方向ハケ目を残す。頸部は直立気味で、口縁部は内湾気味に外反し、端部は丸味を呈する。器外は磨滅する。胎土に赤褐色粒・1.0mm大の角閃石・金雲母片を多く含む、0.5mm以下の砂粒が多いが、3.0～4.0mm大の石英も多く、焼成はやや悪い。色調は器内54明るい茶



第 55 图 1 号住居跡出土土器実測図② (1/3)



第 56 图 1号住居跡出土土器実測図③ (1/3)



第 57 图 1 号住居跡出土土器実測図④ (1/3)

(2.5YR 5.0/8.0)・器外76暗い黄茶色(7.0YR 4.0/2.0)を呈す。

**高杯(12~19)** 15は口径13.5cm・脚裾径12.4cm・杯部高6.1cm・脚部高9.4cm・器高15.5cmを測る。杯部は器内外共に下半はナデ、上半はヨコナデを施す。脚部は器内右廻りのヘラケズリであるが、器外は磨滅で不明である。裾部内面は磨滅し、器外はヨコナデにより端部上面が若干凹む。精製胎土に金雲母片・赤褐色粒を含み、焼成はやや悪く、色調は杯部86灰味黄茶色(8.5YR 4.5/2.0)・脚部77にぶ橙色(7.5YR 7.0/7.0)を呈す。他のものも技法は15と同様である。15は杯部は上・下位共に若干内湾気味であるがほぼ直線的に外反し、中位の屈折部は器外にわずかな突出部を有す。また、脚部・裾部共に直線的に外反するが、その屈折が著しく、脚は高い。これに対して16は、裾部径11.6cm・脚高5.2cmと低く、大きく内傾する脚部と裾部との屈折が緩慢である。19は前者に、17は後者に類似し、18は両者の特徴を併有している。

**鉢 6**は口径14.0cmで、器内は体部をヘラナデ・口縁部は器外と共にヨコナデし、器外は体部中位までナデ、以下は強いヘラナデを施す。胎土に金雲母片他多様な0.5~1.5mm大の砂粒を含み、焼成は普通である。色調は器内73黄茶色(5.0YR 5.0/5.0)・器外59明るい茶(3.0YR 5.5/4.0)を呈す。

**甗(21~26)** 26は口径は短径×長径で22.9×24.5cm・胴部最大径同23.9×25.0cm・器高22.8cmを測る。器内は口縁部のみヨコナデし、他はいずれも縦方向ハケ目で仕上げる。把手は体部を穿孔し挿入する方法で器表は丁寧にナデる。底部は1孔を中心に5孔が配され、孔形は長円形を呈し、短径×長径は図上位の孔で2.5cm×3.7cmを測り、シャープに丁寧に切り込まれている。胎土は赤褐色粒を含む細砂質土で、1.5mm大の砂粒も認められ、焼成は良い。色調は54明るい茶色(2.5YR 5.0/8.0)・器外83にぶ橙色(8.0YR 5.5/6.0)を呈す。22は底部外径11.4cmを測り、器内は胴下位は右廻りヘラケズリ・他は縦方向ヘラケズリを施し、器外はヘラナデ痕を残す。底部には1孔を中心に6孔が配され、孔形は隅丸方形を呈し、短径×長径は図下位の孔で2.1×2.6cmを測り、やや雑に切り込まれている。胎土に金雲母・赤褐色粒を含み、1.0~3.0mm大の砂粒が多い。23は器周残 $\frac{1}{2}$ 強で復原底径8.0cmを測り、器内はヘラケズリ、器外は細かいハケ目が残る。底部は1孔を中心に6孔が配され、孔形は円形を呈し、孔径は図右部で1.9cmを測り、シャープに丁寧に切り込まれている。胎土は金雲母・赤褐色粒を含み、細砂質で1.0mm以下の砂粒を認める。

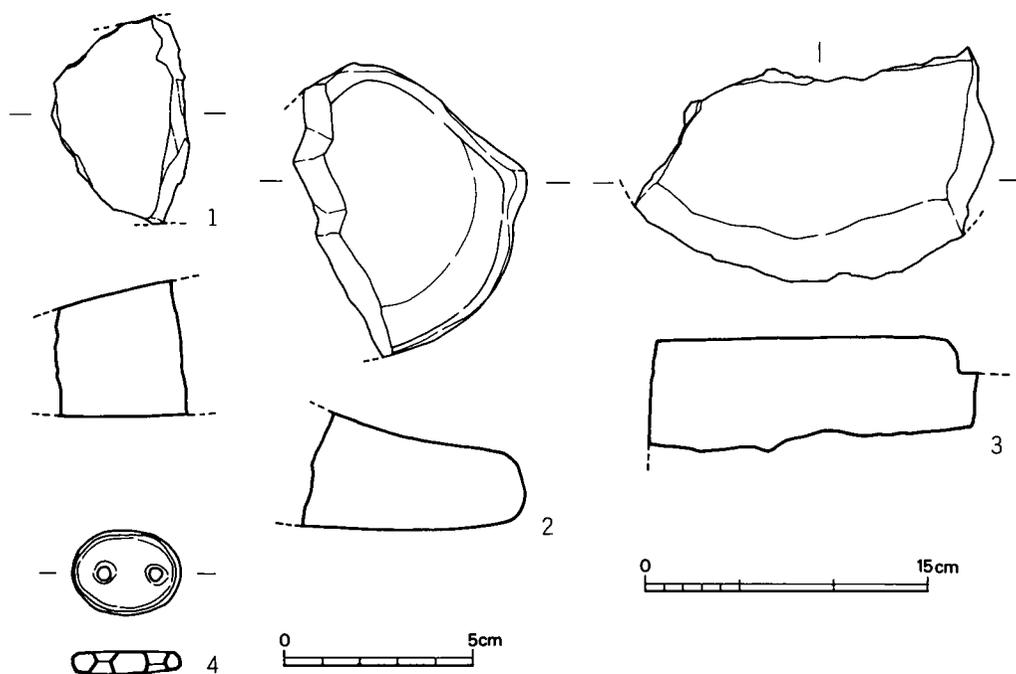
24・25は共に把手で、共に体部に穿孔を穿孔する方法である。

21は器周残 $\frac{1}{2}$ で復原口径は15.0cm前後を測る。器内は左廻りのヘラケズリを施し、器外は磨滅して不明である。器内口縁部には、器体の胎土とは別な胎土で修復が施されている。器体の胎土は微細な金雲母・赤褐色粒を含み、細砂質で、焼成は良い。色調は器内67茶色(4.0YR 5.0/4.0)・器外83にぶ黄橙色(8.0YR 5.5/6.0)を呈す。

以上のなかで、全様の明らかなものは26のみであるが、底部の明らかな22・23・26の三者には若干の差位が認められる。器壁では、23が厚手で1.4cm、23・26が薄手で4.0~5.0mmをそれぞれ測る。孔形は多様であるが、穿孔の仕方が棒状工具を挿入するものではなく、鋭利な工具により切り取るものであるために、いずれも1.9~3.7cmと大きい。底部形状も多数で、22は体部との屈折が稜を有し平坦に仕上げるが、23では屈折部が丸味を呈する平底で、26は丸底に仕上げている。

石製品 (第58図1・4)

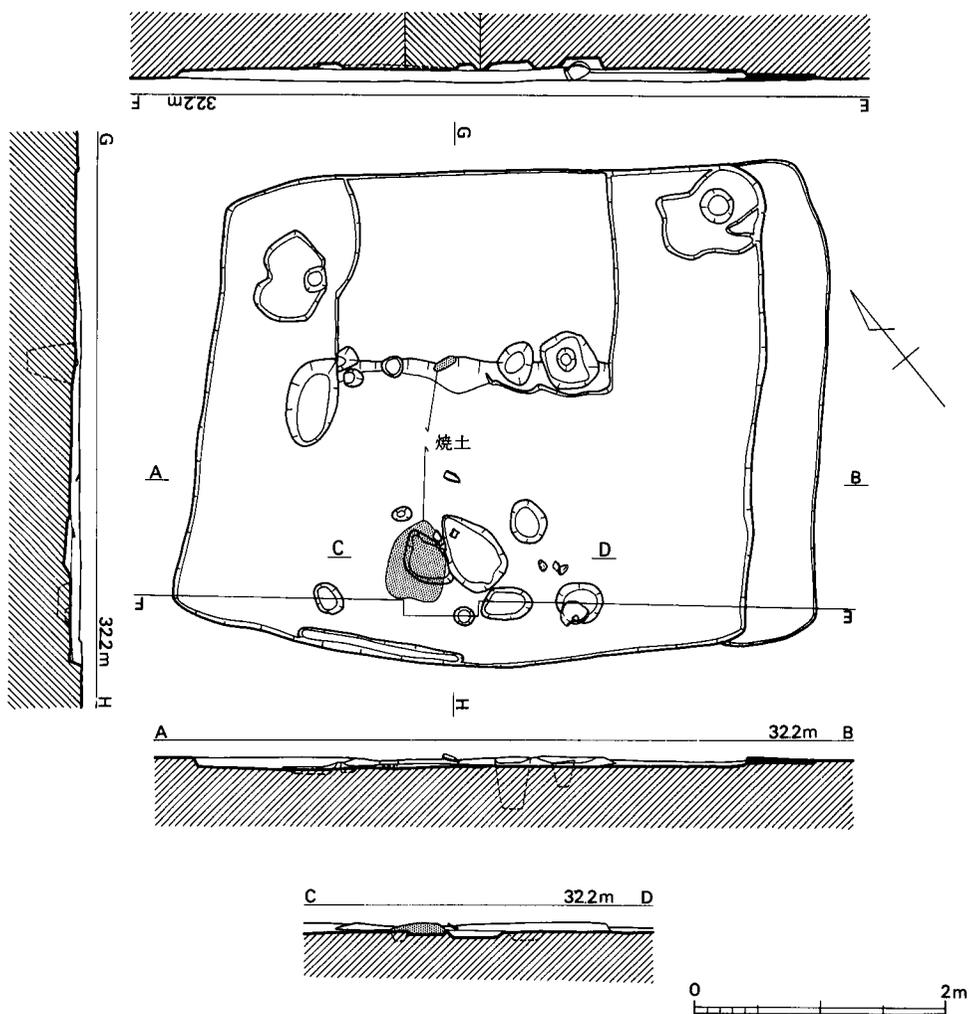
1は張床面から3.0cm上位で、カマドK12東側で出土した。断面図上・下面が使用による磨減面で、周囲が欠損する。硬い安山岩質の石材で、作業台等に使用したものか。色調は239暗い青味灰色(10.0PB 4.0/1.0)を呈する。4は張床面出土で、厚さ5.0~6.0mmで端部が丸味を呈する扁平な長円形に丁寧に研磨し、中央に2孔(孔径5.5~6.0mm)を弥生時代の石包丁と同様の技法で穿った石製品である。砥石の中砥に似た微粒状のやや硬質の砂岩で、色調は78にぶ黄橙色(7.5YR 7.0/5.5)を呈する。



第58図 1・4号住居跡出土石製品実測図(1/2, 1/4)

2号住居跡 (図版41—1, 第59・155図, 表22~24)

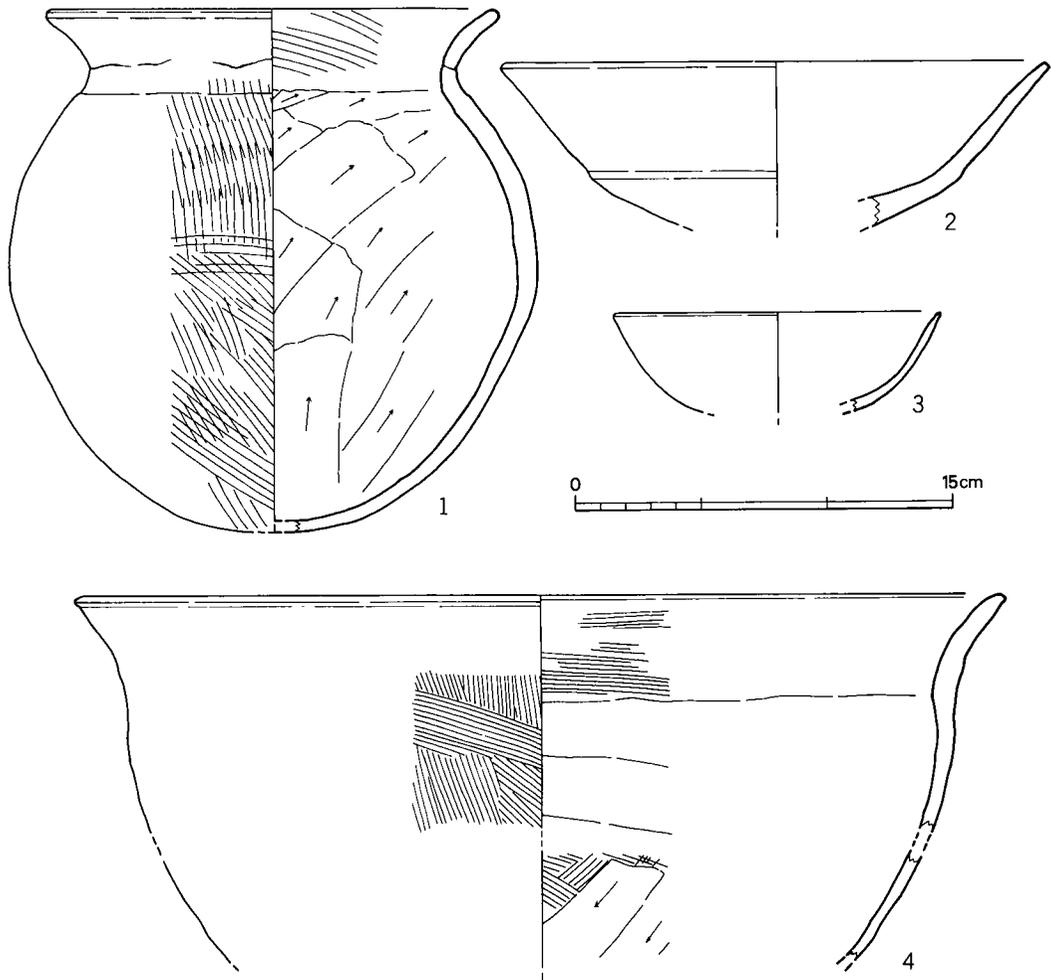
調査区の西部で検出した。東壁に切り合いが認められ、旧出の住居の一部が遺存した。旧出住居内埋土は、1号旧出南北主軸住居と同様で、黄褐色粘質土ブロックを含む暗褐色粘質土であった。新出住居北壁中央部には、 $2.24 \times 1.60\text{m}$ の長方形屋内高床張り出し部が検出され、床面からの高さは $3 \sim 5\text{cm}$ で、地山をほぼ平坦に削り残したものであった。この張り出し部と、旧出住居床面のレベルは同じで、旧出住居から新出住居を西へ $50\text{m}$ 移動させ、このとき高床張り出し部外を新出住居床面まで掘り下げ、東側の旧出住居残存部を埋めもどして、東壁を設けたことが考えられる。新出住居中央部の南壁寄り、土壌D11が出土したが、この土壌内には



第 59 図 2号住居跡実測図 (1/60)

焼土が遺存し、46×62cmの範囲で床面から5cmの高さで広がっていた。南壁に沿って、中央部から西側には、深さ4cmの小溝が検出されたが、他の壁側には認められなかった。新出住居の床面からの残存壁高は、9cmで、明らかな張り床は検出されなかった。

なお、新出の住居床面積は、16.0313㎡と計測されたが、壁に接する土壌は出土していない。壁中央に接する土壌は出土しなかったが、北壁中央部で検出された長方形高床張り出し部の面積は、地山が白黄色細砂質土で、西側が若干損壊しているが、現状での面積は3.57㎡で、床面積の $\frac{1}{6}$ 強の広さを占めている。



第 60 図 2号住居跡出土土器実測図 (1/3)

ところで、旧出住居の主軸は以下の方法によった。南壁寄りのP11・P14は西・東壁から等距離に位置している。高床張り出し部南縁にはP31・P32が検出されているが、同様にP12も南西隅部で検出されている。南東隅部では、住居埋土に掘られたSB1号掘立柱建物の柱穴が存在するため、P14は遺存しなかったものと考えられる。P11-P14・P31-P32を結ぶ線はほぼ平行することからそれぞれの2等分線を主軸と考えた。そして、P11-P14と平行するP12からの主軸を介して等位置に、SB1号建物で消失したP13の位置を求めた。このように考えるとき、南北主軸N-40°-Eを得る。南壁沿いの小溝およびD11は共に主軸に接して西側に位置し、主軸柱穴P21は東側に接して位置している。

土器 (図版54, 第60図)

**甕** 1は器周残 $\frac{1}{4}$ 弱で復原口径18.0cm・胴部最大径21.0cm・器高20.9cmを測る。器内は頸部直下までヘラケズリが及ぶ部分と指押えのままの部分とが認められるが、頸部下から胴上半部にかけては斜方向・胴下半部から底部にかけては縦方向のヘラケズリを施す。口縁部は器内は斜方向ハケ目を残し、器外はヨコナデを施す。器外は上位は縦方向・胴下半は斜方向のハケ目仕上げのままである。胎土は多くの角閃石・0.5mm大の砂粒を含み、5.0mm大の石英を認め、焼成は良い。色調は器内63明るい茶色(3.5YR 5.5/7.0)・器外74茶色(5.0YR 4.5/5.5)を呈す。

**高杯** 2は器周残 $\frac{1}{4}$ 弱で復原口径21.8cmを測る大型の杯部で、器内外共に磨滅し、焼成はやや悪い。

**杯** 3は器周残 $\frac{1}{4}$ 弱で復原口径13.1cmを測り、器内外共に磨滅を受けているが、薄手に仕上げられ端部外側は若干肥厚し、その直下は凹む。精製胎土に赤褐色粒を含み、焼成は良い。色調は器内外共に97黄味白色(2.5Y 9.0/2.0)・器内207青味白色(2.5PB 8.0/1.0)を呈す。ここでは脚部を検出していないために杯としたが、外来の強い影響を受けた高杯の可能性も強い。

**鉢** 4は器周残 $\frac{1}{4}$ 弱で復原口径37.0cmを測る大型のもので、器内は口頸部は横方向ハケ目後にヨコナデし、肩部は横方向ヘラケズリを施す。器外は口縁上端面は平坦で斜傾し、直下は若干凹み、肩部はハケ目仕上げのままである。体部中位では接合できないが、壁厚は3.0mmと薄手となる。器内外共に密ないハケ目で、胎土に微細な金雲母片・赤褐色粒・0.5mm大の砂粒を含むが、角閃石を認めず、焼成は悪い。色調は器内54明るい茶色(2.5YR 5.0/8.0)・器外83にぶ橙色(8.0YR 5.5/6.0)を呈す。なお、口縁部に片口を有すものとなることも考えられる。

以上の土器の①出土番号・②実測番号・③出土位置・④床面高は順次次のとおりである。1 (No.1 ②04130 ③P14), 2 (②01169 ③埋土), 3 (①No.2 ②02148 ③P14北 ④5cm), 4 (①No.3 ②03152 ③D11直下・焼土塊中)。(馬田)

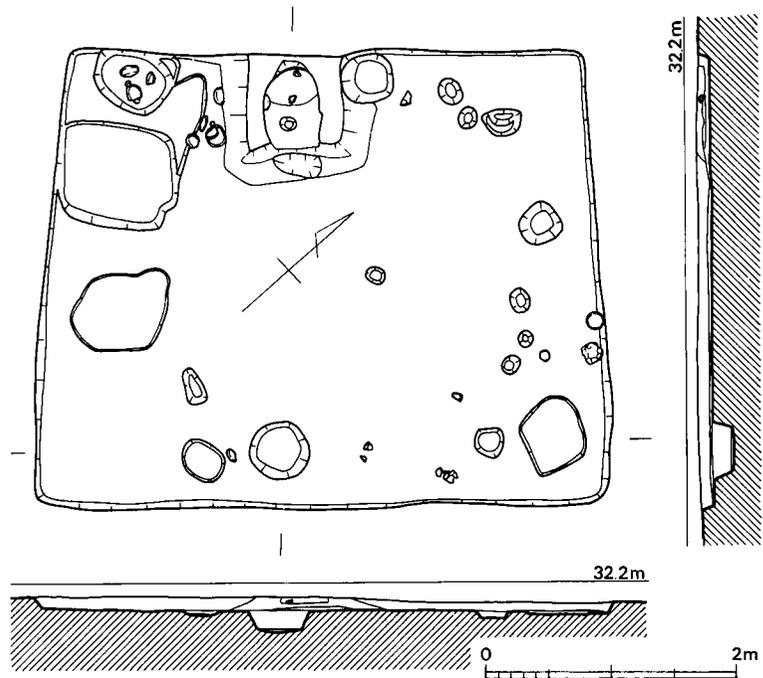
### 3号住居跡（図版41-2，第61・62・156図，表25～27）

2号住居の南東に位置する住居跡で，西に1号掘立柱建物，東に3号掘立柱建物の柱穴群が接するものの，掘り方での切り合い関係はない。不整形プランを呈し，住居の長軸方向は真北に対して約35°東偏しており，この際の西北側の壁面を西壁とすれば，西壁が東壁より短い梯形を呈す平面プランとするのが妥当であろう。規模は西壁4.1m，東壁4.6m，北壁・南壁共に3.6mで床面までの深さは約10～12cmと浅い。

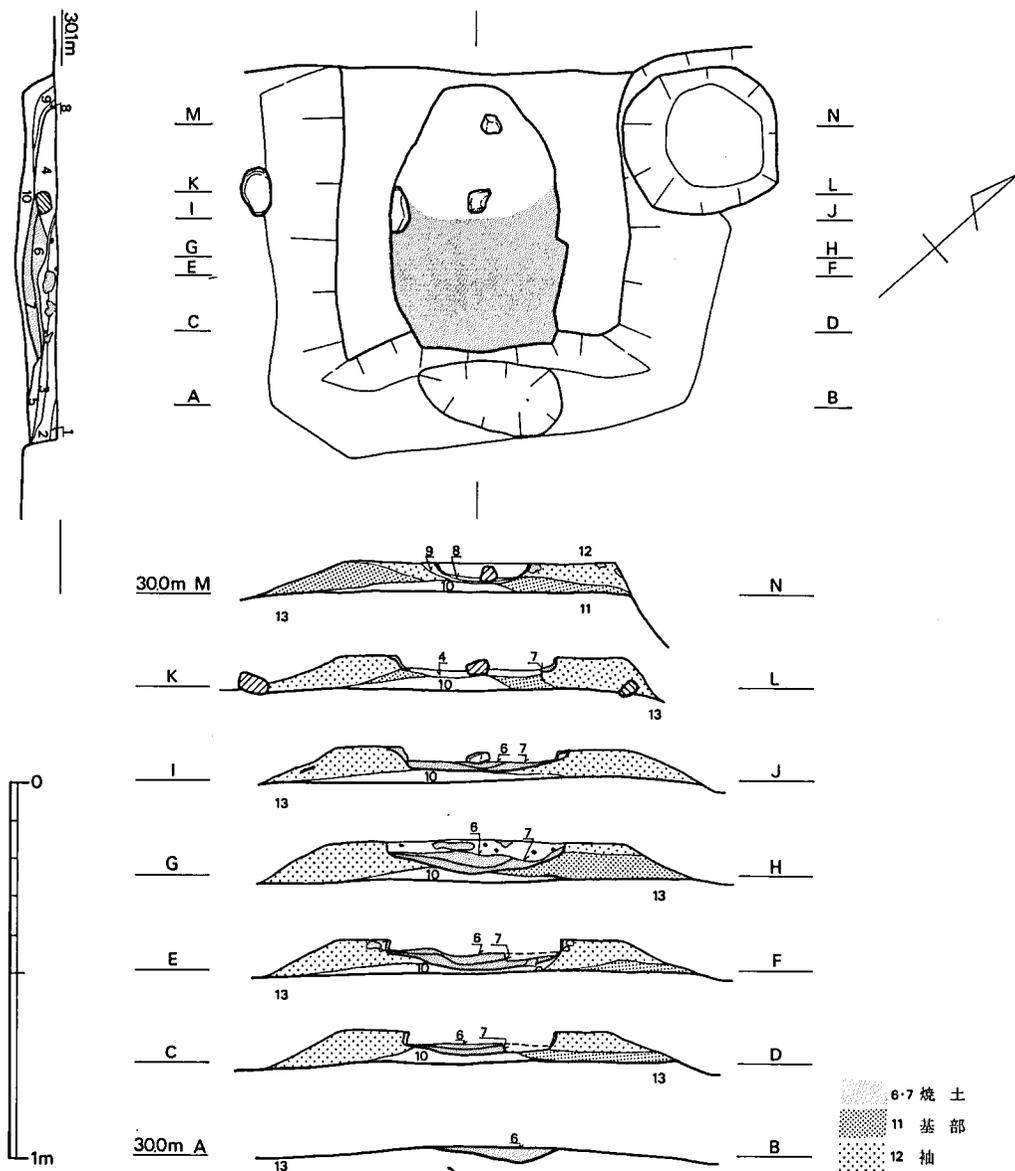
住居跡掘り方の中には，西壁の中央よりやや南寄りの内側にカマドが設けられ，床面を掘り込んだピットは19個ある。このうちカマドの右袖を切り込むピットは住居に直接伴わないとしても，柱穴に相当するしっかりとしたピットはなく，いずれも小さなものや浅く広い例がほとんどである。住居内からは数点の土器片が出土したが，いずれも床面密着でなく数cm浮いた状態で出土している。なお東壁に近くカマドの正面に相当する広目のピットから手捏土器が出土した。

カマドは黄灰色粘質砂の地山の上に淡い暗茶色粘質砂の薄い堆積土を挟んで構築されており

両裾を構成する堆積土はやや暗めの灰褐色粘性土で上部には焼土粒が混ざっている。おそらく袖を修理する折に混入したものと思われる。カマドの上部は長さ・幅共に70～80cm，裾部の長さ90～100cm・幅110～130cmを有し，燃烧部は幅36～45cm・長さ約35cmで，両袖の内壁は赤く焼けている。熱焼部床面は堅緻な焼土塊となっているが，上部にブロック状に



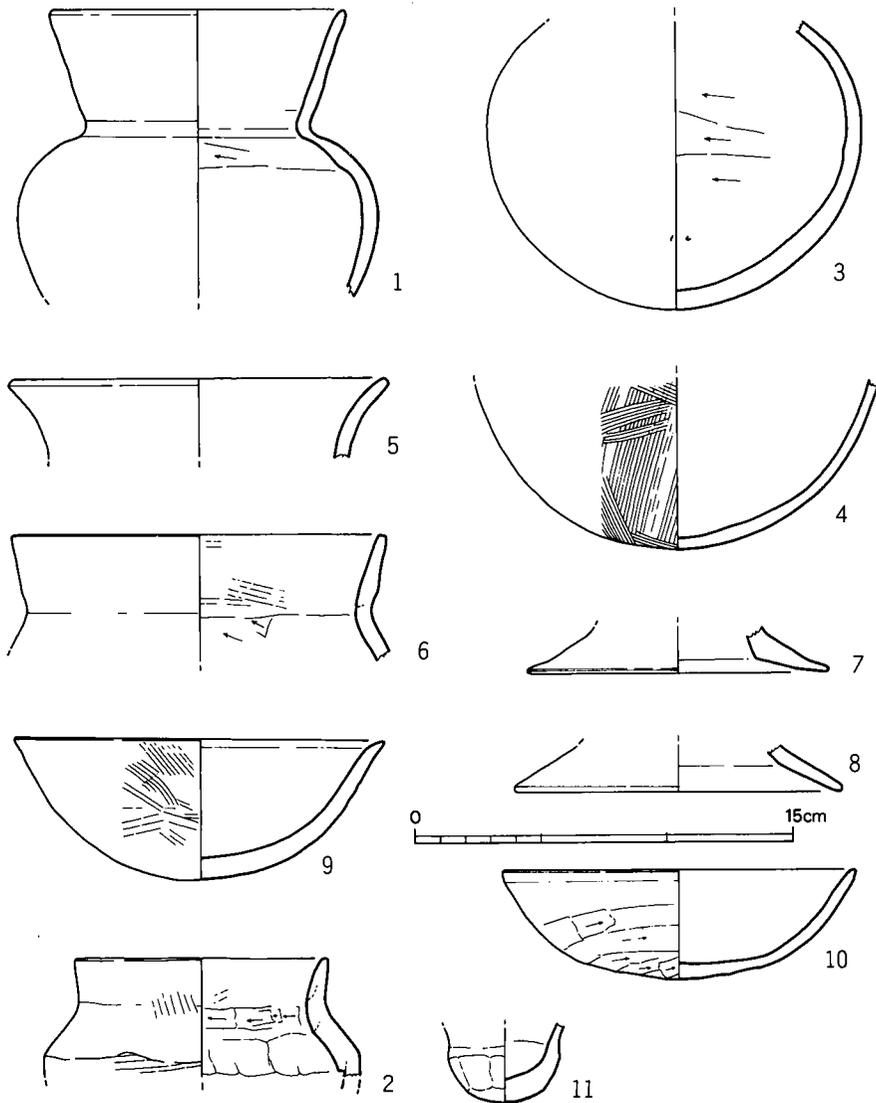
第 61 図 3号住居跡実測図（1/60）



第 62 図 3号住居跡カマド実測図 (1/20)

- |                     |                 |                   |
|---------------------|-----------------|-------------------|
| 1層 暗茶灰色砂質粘性土        | 6層 よく焼けた焼土      | 11層 暗灰褐色粘性土       |
| 2層 暗灰色粘性土(暗茶褐色粒を含む) | 7層 焼土           | 12層 暗灰褐色粘性土(焼土混り) |
| 3層 灰色粘性土            | 8層 灰色粘土         | 13層 地山            |
| 4層 暗灰色粘性土(こげ茶粒混り)   | 9層 暗灰色粘性土(焼土混り) |                   |
| 5層 淡茶褐色粘性土(暗茶灰色粒混り) | 10層 淡灰褐色土       |                   |

点在する焼土塊は天井部の陥没によるものと思われる。焼土塊の部分の先には5cm立方程度の石塊が中央に据えられており、いわゆる支脚の役割を果たしていたものであろう。石質は結晶片岩で風化が進んでいる。燃焼部から先に約30cmの空間があり、埋没した堆積土中には焼土を含んでいないが、先端部で灰色の粘土が層をなしている。この粘土部分を奥壁とすれば焚口からの距離は65cmを有することになる。焚口の前面には焼土・木炭を含む淡灰褐色の粘質砂が広がり、



第 63 図 3号住居跡出土土器実測図 (1/3)

これを取り除くと浅い皿状の凹みとなる。また熱焼部焼土塊を取り除くと下面は中凹みの床で軟質の焼土に変わる。熱焼部の掻き出しによるものと思われる。

土器 (図版 , 第63図)

破片資料が多く、器種は壺・甕・高杯・椀・手捏土器と少ない。

壺 (1～4) いずれも中形の部類で、体部内面はヘラケズリされている。1はやや扁球形体部を有し長めの口縁部が直線的に開く。2は器壁の厚い短頸壺で、口縁部及び外面はハケを施したあとナデ消している。3・4は北壁に沿って並んで出土したが球形体部で4の器壁は薄い。

甕 (5・6) いずれも口縁部破片で中形品。5の口縁部は外湾する。6は鈍く屈折するくの字口縁だが、内面の頸部以下にヘラケズリがみられ、口唇部上面は面取りされる。

高杯 (7・8) 2点共に脚裾部のみの破片で、内面の状態からみて、7は脚筒部が細く伸びて裾で広がるもの、8はラッパ状に開くものであろう。

椀 (9・10) 9はカマド内埋土から出土した破片とカマドの北側床面より3cm程度浮いて出土した破片が接合した。口径14.7cm・器高5.7cmの半球形体部で口縁端部が外側に摘まれて内上方に面をもつ。

10は、1の壺と共に東側壁から20～30cm離れて出土したが、復原口径14cm・器高4.4cmで外面の下半をヘラケズリされている。

手捏土器 (11) 口縁部を欠くが、丸底の体部をもち僅かに頸部がくびれる。

これらの土器からは、明確な時期を決しえないが、典型布留期以降を考えたい。

(小池)

#### 4号住居跡 (図版40, 第52図)

調査区の西端で検出した。西半部を1号住居に切られて失っており、またSB1号掘立柱建物の柱穴が住居埋土上面から掘られている。床面からの残存壁高は6～9cmである。中央部で床面に接して多数の河原石、第58図2に示した砥石と共に出土した。遺物は、床面から5cm程度上位で出土した。

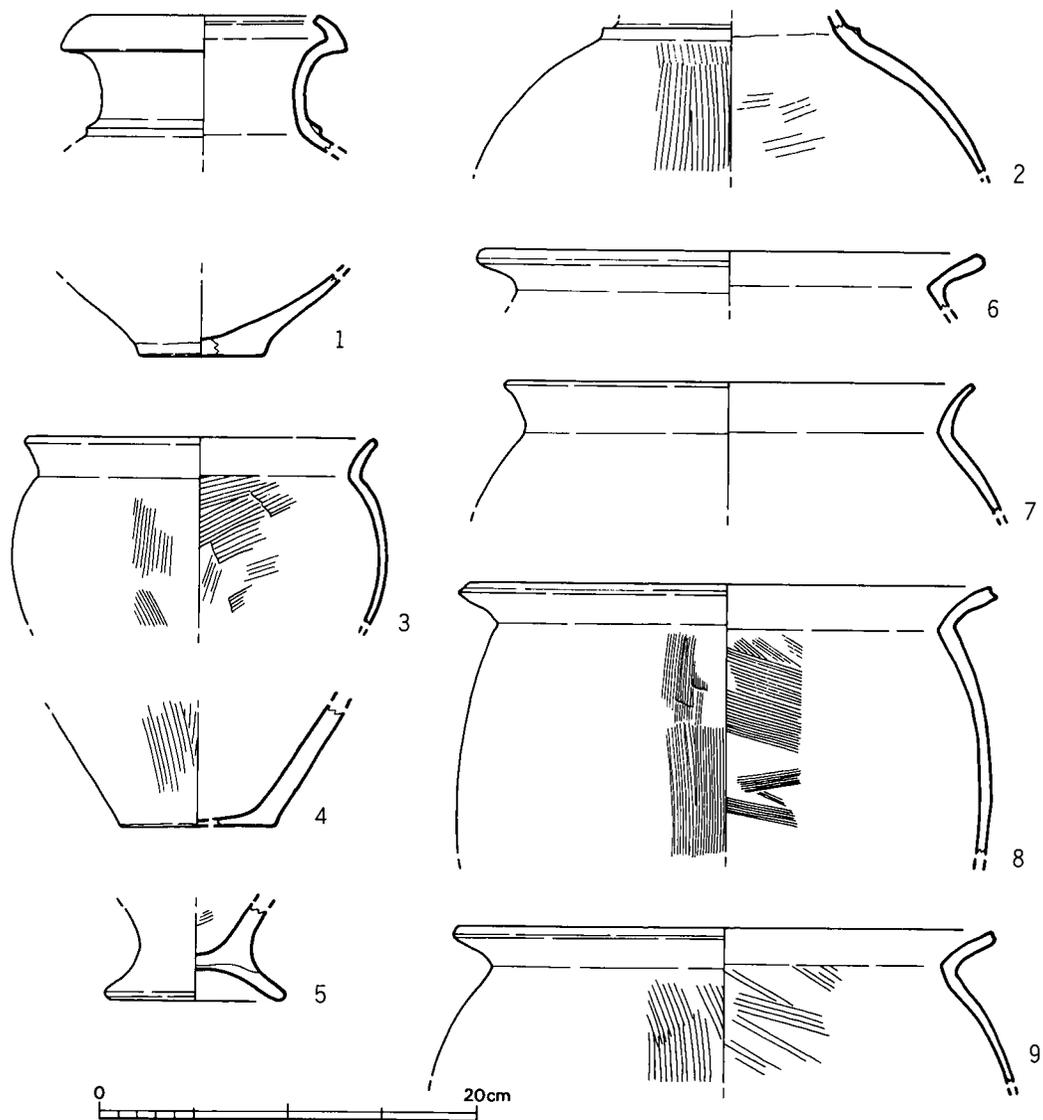
なお、柱穴は南壁寄り、径18cm・深さ5cmのP51が検出されたのみである。主軸は不明であるが、D地区出土の16号住居例では、南北主軸・中央土壇D11・東壁土壇D21・主軸柱穴P21で、正方形に近い床面プランを呈している。

土器 (図版54, 第64図, 表5)

壺 (1・2) 共に袋状口縁となるもので、1は器周残 $\frac{1}{2}$ 弱で復原口径12.0cm・器高約25.0cm前後を測り、器内外共に磨滅が著しい。内傾気味にほぼ直立する頸部は上位で大きく外反し、口縁屈折部の稜は明瞭で、内湾する口縁部の端面は丸味がなく、底部は強く平坦である。胎土に金雲母を少し含み、0.5～5.0mm大の砂を認め、焼成はやや悪い。色調は器内54明るい茶(2.5YR 5.0/8.0)・器外34赤味橙色(9.0R 5.5/11.0)・器内81茶灰色(7.5YR 2.5/0.5)

を呈す。2は器内は一部ハケ目を残すが丁寧にナデを施す。

甕 (3~9) 5は脚台部であるが、4は平坦な底部である。3・6~9の口縁部はいずれもくの字状に外反するが、端部の仕上げは多様である。3は端側面が直立気味に内傾し、7は大きく内傾し、6は丸味を呈して肥厚し、9は以上の特徴をいずれも有している。3~9はいず



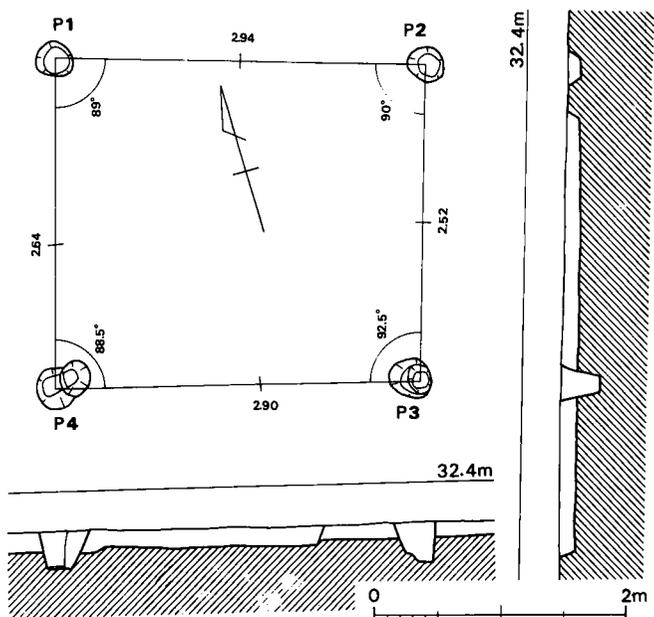
第 64 図 4号住居跡出土土器実測図 (1/4)

れもヘラケズリ・タタキ痕を認めない。

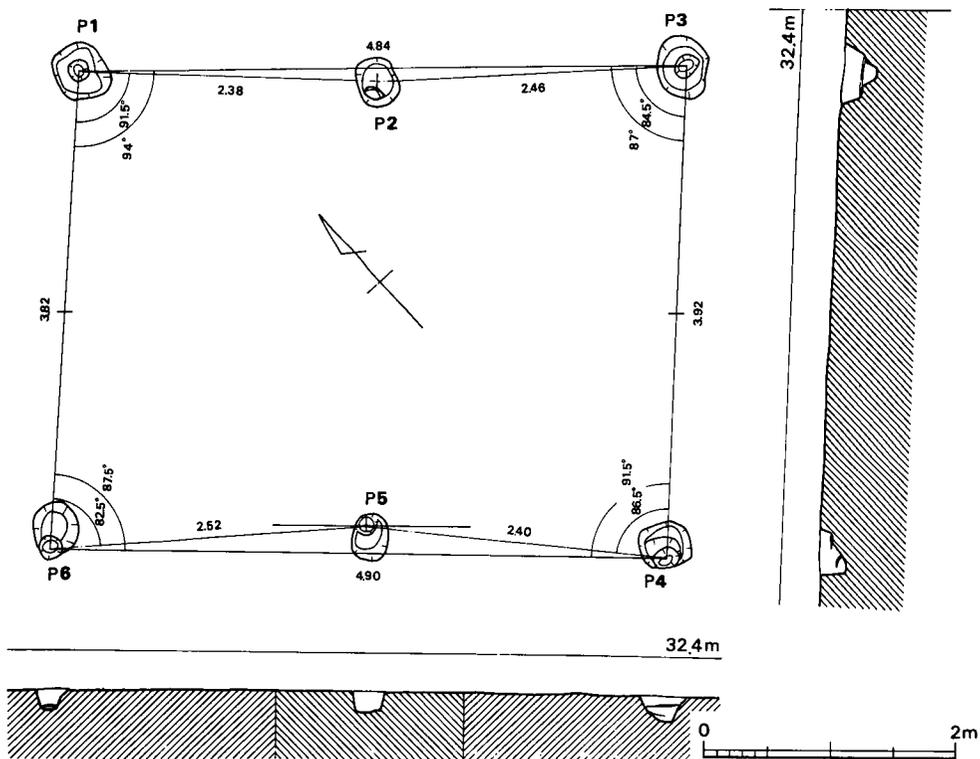
石製品 (第58図-2・3)

砥石 2・3は共に集石中から出土した。3はやや硬い安山岩質凝灰岩製で、この石材は塚堂古墳墓石中にも若干認められ、作業台とも考えられる。

## 2. 掘立柱建物跡



第 65 図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第 66 図 2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

### 1号掘立柱建物跡

(第65図)

2号住居をP1が切っており、2号掘立柱建物が新出である。P1・P3・P4は2段に掘り込まれ、掘り方床面からの深さは8~10cmである。P5・P6は掘り方床面が1cm程凹んでいた。南北柱間距離は、P1-P6・P3-P4に比べてP2-P5が28・38cmとそれぞれ小さい。P1-P6とP3-P4の中心を結んで得た計測値は、東西主軸N-48°-Wである。

なお、出土した土器はいずれも細片であるが、このなかにも細片であるが、このなかにもタタキ・ヘラケズリ痕を認める破片や須恵器片はなかった。

### 2号掘立柱建物跡 (第66図)

P3は4号住居を切り、P4は南北主軸の1号住居中央土壇D11によって切られている。P3は、掘り方床面から更に6cm深く二段に掘られ、P4は柱穴に東接して1.5cm深いピットが検出された。柱材を抜いたものか。各柱穴の位置は、88.5°~92.5°とほぼ90°に近い計測値で、東西柱穴間距離よりも南北柱穴間距離の方が34cm大きい。P1-P4・P2-P3の中心を結んで得た計測値は、東西主軸N-73°-Wである。

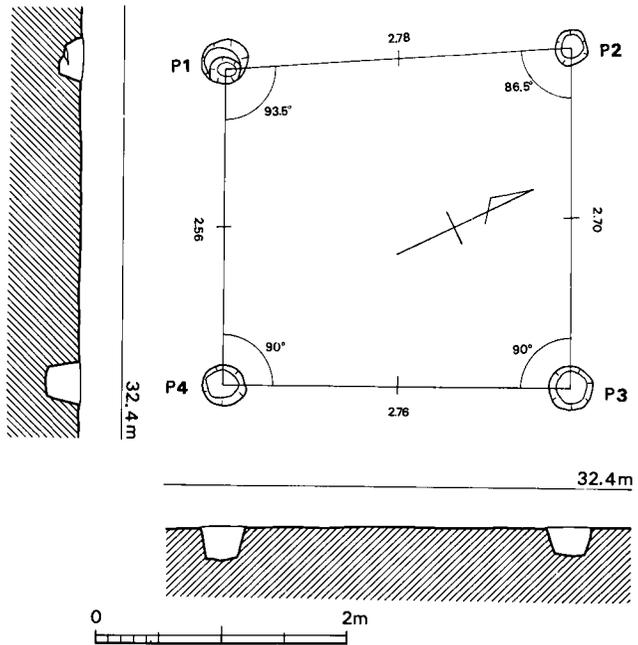
なお、出土した土器はいずれも細片であるが、このなかにもタタキ・ヘラケズリ痕を認める破片や須恵器片はなかった。

### 3号掘立柱建物跡 (図版50, 第67図)

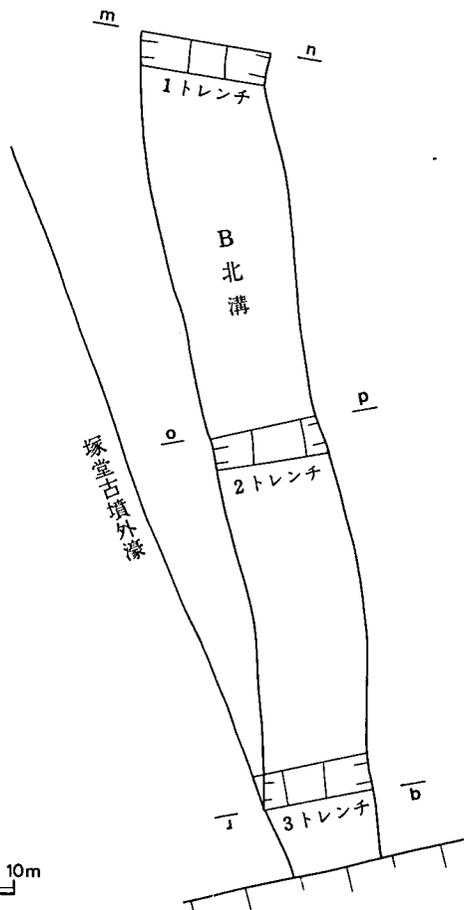
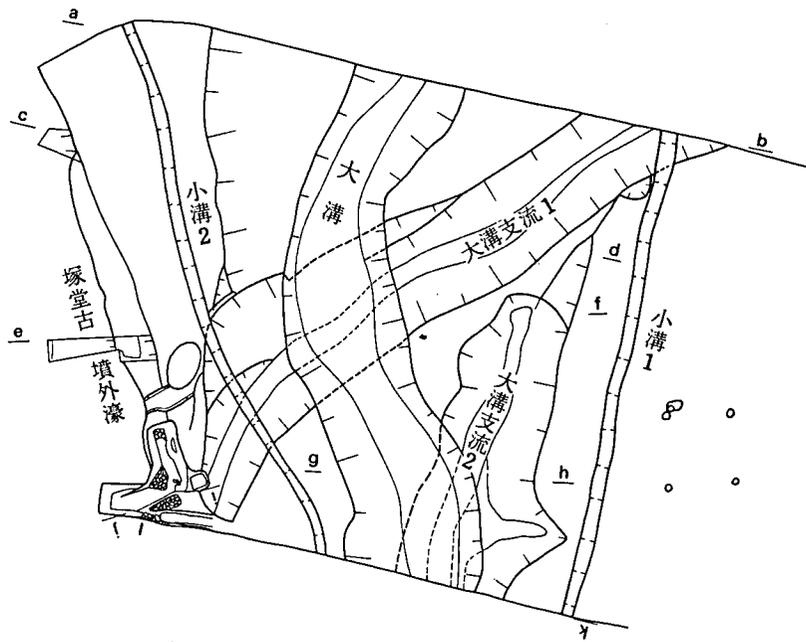
3号住居の東側で検出した。P1は、掘り方床面から更に7cm深く2段に掘られている。各柱穴の位置は、P3・P4が90°で、P1・P2は93.5°・86.5°とほぼ90°に近い計測値で、南北柱穴間距離よりも南北柱穴間距離の方が14cm大きい。P1-P4・P2-P3の中心を結んで得た計測値は、南北主軸N-24°-Eである。

なお、出土した土器はいずれも細片であるが、このなかにもタタキ・ヘラケズリ痕を認める破片や須恵器片はなかった。

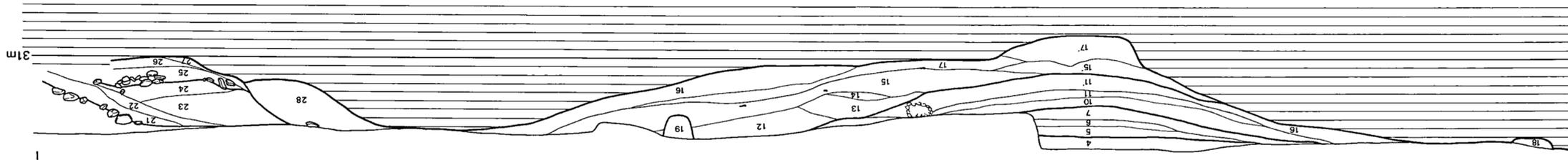
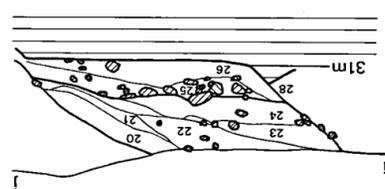
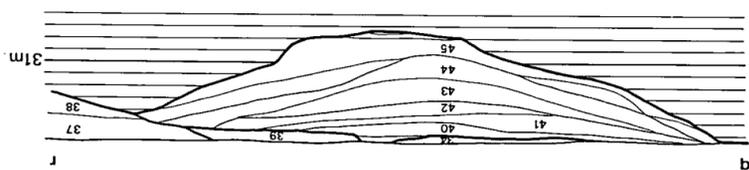
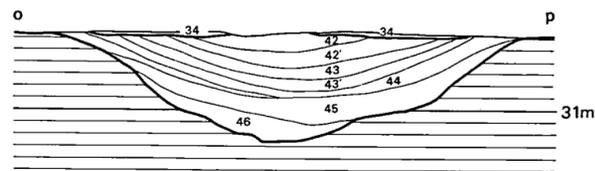
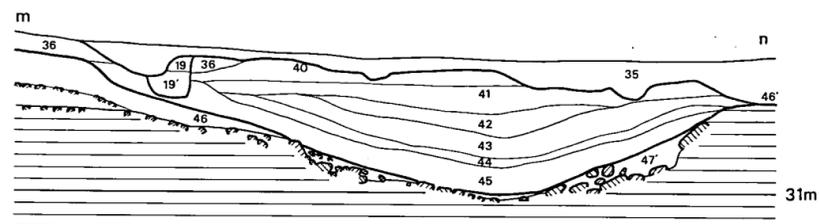
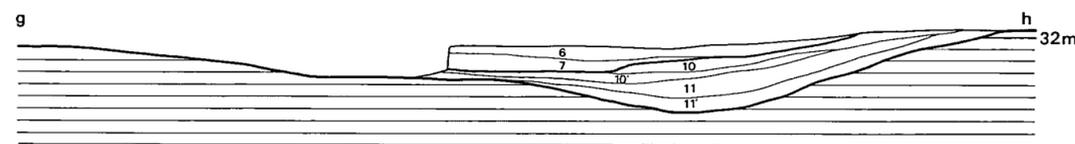
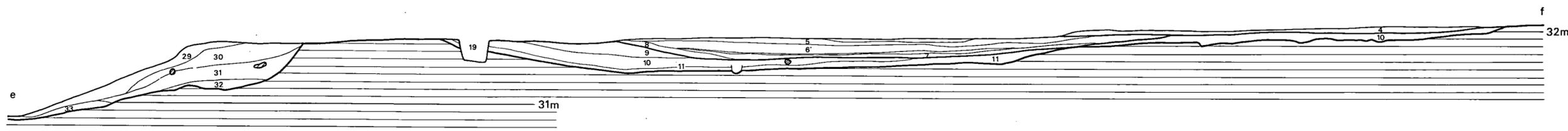
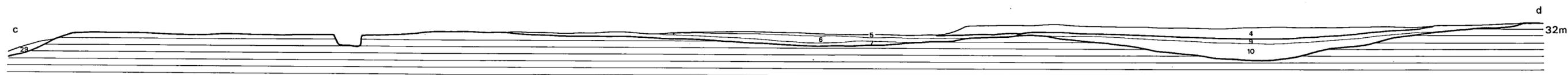
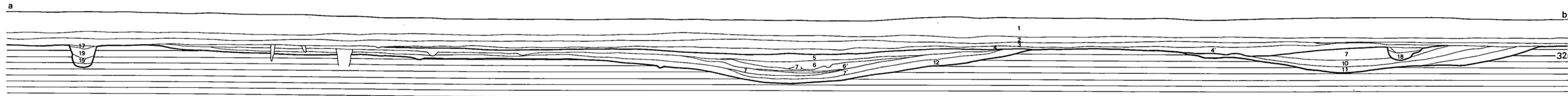
(馬田)



第67図 3号掘立柱建物実測図(1/60)



第 68 図 B・B 北地区溝状遺構実測図 (1/300)



- |                     |                           |                     |                                |
|---------------------|---------------------------|---------------------|--------------------------------|
| 1. 耕作土              | 11'. 暗黄灰色粘質砂 支流4層下部       | 22. 暗黄褐色砂質粘性土       | 36. 黄褐色土を若干混じえる暗茶褐色砂質粘性土       |
| 2. 耕作土(うぐいす色)       | 12. 暗灰色粘性土                | 23. 淡めの茶褐色粘性土       | 37. 黄灰色粘性土                     |
| 3. 水用床土             | 13. 暗灰色粘性土(礫がつまる)         | 24. 暗茶褐色土・黄色粘土混り粘性土 | 38. 暗黄灰色粘性土                    |
| 4. 砂礫混り黄褐色粘土 上層     | 14. 灰黄色粘土                 | 25. 茶褐色粘性土          | 39. 黄灰色粘性土(若干茶褐色土)             |
| 5. 暗茶褐色 大溝1層        | 15. 暗黄灰色粘質砂——11'より暗い色調    | 26. 黄灰色粘土           | 40. ねずみ色味を帯びた黒色粘性土             |
| 6. 暗床褐色(砂質粘性土) 大溝2層 | 15'. 15より砂っぽくやや暗くなる       | 27. 黒色粘土            | 41. ややねずみ色味を帯びた黒色粘性土           |
| 6'. 6より暗い 大溝2層下部    | 16. 黄灰色粘質砂                | 28. 暗灰色粘性土          | 42. 黒色粘性土                      |
| 7. 黒色粘性土 大溝3層       | 17. 黄色粘質砂                 | 29. 粘土混り, 淡茶褐色質土    | 43. 暗茶褐色粘性土                    |
| 7'. 7よりやや薄い         | 17'. 暗黄色粘質砂(礫多い)          | 30. 黄色粘土混り, 暗茶褐色粘性土 | 44. 暗茶褐色砂質粘性土                  |
| 8. 砂粒・礫混り茶褐色粘性土     | 18. 暗灰褐色砂質粘性土             | 31. 黄色粘土の割合が少なく暗い   | 45. 灰茶褐色・暗黄褐色砂質砂               |
| 9. 礫混り黄色粘土          | 19. 暗茶褐色砂質粘性土(黄褐色土を若干混える) | 32. 若干茶褐色土混り, 黄色粘土  | 46. 黄灰褐色粘質砂                    |
| 10. 黒色粘性土 支流3層      | 19'. 淡黒褐色砂質粘性土(ごくわずかに混える) | 33. 褐色土             | 47. 黄灰褐色粘質砂(礫を多く含み, 若干暗い色調となる) |
| 10'. よりやや淡い色調       | 20. 黒色土・黄色粘土混り, 暗黄褐色砂質粘性土 | 34. 茶褐色黒色土混り, 粘性土   | 47'. 暗黄褐色弱粘性砂(礫を多く含む)          |
| 11. 暗灰色砂質粘性土 支流4層   | 21'. 暗茶褐色砂質粘性土            | 35. 黒色茶褐色混り, 黄褐色粘性土 |                                |



第 69 図 B・B 北地区 溝状遺構断面土層図 (1/50)

### 3. 溝状遺構(図版55, 第68・69図)

B地区の大溝, 大溝支流1・大溝支流2, 小溝1・小溝2・小溝3を一括してこの項で報告する。

これらの溝は小溝3を除いてB地区東半部に集中する。

B地区東半部の一部は塚堂古墳周溝部調査(第3章第1節に報告)の範囲と重複している。

前回の調査範囲に埋め戻されていた再堆積土を除去することから調査を始めたが, 旧トレンチの断面などを清掃すると, 土器片がかなり目立ち, 幾つかの層序に分けることが出来たので, 土層観察用の畦を残して掘り下げることにした。すなわち南側からA・B・C・D・E南・E北・Fトレンチと細長い発掘区に区分けすることになり, Dトレンチは旧トレンチを若干調査区主軸に平行するように修正して延長したトレンチである。

#### 大溝 (図版56, 第68・69図)

B地区東半部にあり, A・Bトレンチでは8~10mの幅を有している。しかし東側肩部は緩傾斜で西側半分が深く約40cmを有す。Dトレンチの断面の観察によると, 幅は5.5mと狭まり, E・Fトレンチでもほぼこの幅におさまっている。Cトレンチより北側では既に削平していることもあり深さは充分ではないが大略30cmの深さである。大溝内の堆積土については, A・Bトレンチの断面土層図に示す如く, 下層に黒色粘性土(第3層), その上に暗灰褐色粘性土(第2層)があり処々で黄褐色粘質砂や暗灰褐色粘性土をうすく夾む, 第1層は暗茶褐色の砂礫質粘性土で更にこの上に砂礫まじりの黄褐色粘土(上層)と水田床土を乗せている。上層は旧調査区以外のほぼ全面にみられ, 溝埋没後の整地層と考えられる。

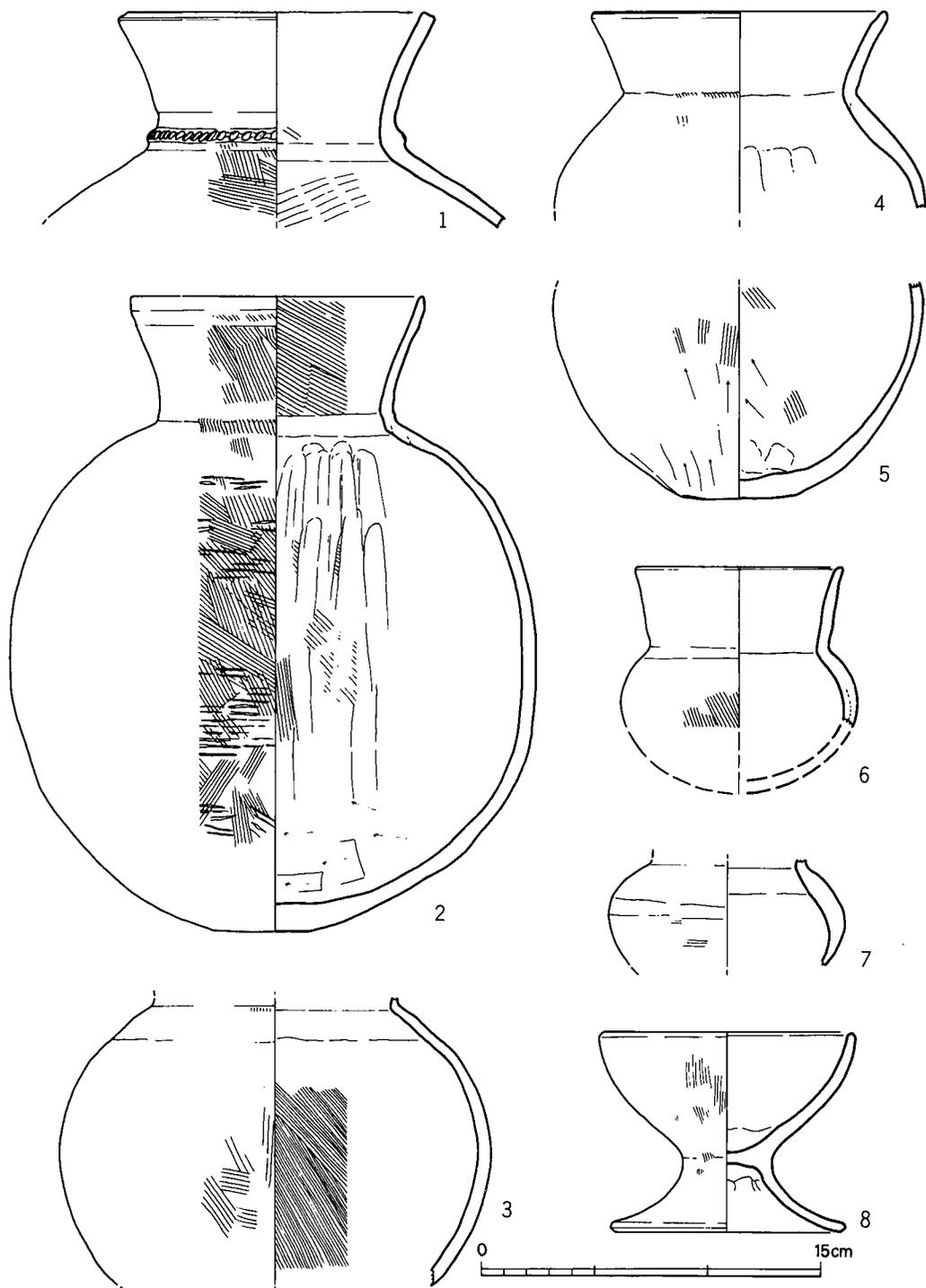
溝底面の傾斜は, B地区内ではほとんどないが, 緩やかに北流する。

#### 大溝出土土器 (図版57, 第70~72図)

22点を図示する。器種として, 壺・甕・高杯・台付椀・小形丸底壺がある。

壺(1~7)1は直線的に外方に広がる口縁部をもち頸部にキザミ目凸帯を有す壺形土器で, 肩部以下を欠失する。Fトレンチ第3層から出土した。復原口径13cm・現存高9.5cmを測る。磨滅しているが, 口唇部内面と上面がわずかに凹み, 口縁部はヨコナデ調整であろう。肩部内外面共にハケ調整で, 砂粒・赤褐色粒を胎土に含み, 明橙色に焼成される。

2は, 若干外方に伸びる球形の体部口縁部とをもつ壺で完形品。Cトレンチの第3層から出土した。口径12.8cm・胴最大径24.1cm・器高28.2cmを測る。胴外面は平行タタキのあと斜めの方向のハケを施し, タタキ痕が残る。胴下半・外底面はナデ仕上げ, 口縁部は斜め上がりのハケメで頸部は若干ナデられる。口縁端部は丸味をもっておさまる。口縁部内面はハケ調整されるが, 胴部内面はハケを施したあと下から上への縦方向ナデで, ナデの間にハケメが残る。胴下半はハケ原体によるケズリで, 内底面はナデ仕上げされている。胎土に砂粒・金雲母を含み黄茶



第 70 图 大溝出土土器実測図① (1/3)

色を呈す。

3は胴部破片でFトレンチ第3層から出土した。内外面共にハケ調整される。4・5はEトレンチの第3層から出土した。4は直線的に広がる口縁部をもちナデ肩を呈す中形壺だが胴下半を欠失する。口唇部内面が若干凹み端部が丸味をもっておさまる。器面は風化しているが胴部外面ハケメ、内面にケズリと思われる痕跡がある。5は中形壺の底部で2の底部同様平らで直径4cm程度の小さな底がある。胴外面に若干のハケメが残るが、ハケ原体によるケズリであろうか、胴下半・外底面はケズリである。内面も底面に指圧痕が残る他ハケ原体によるケズリ手法と思える痕跡を残す。花崗岩・片岩の砂粒を多めに含み黄土色に焼成される。

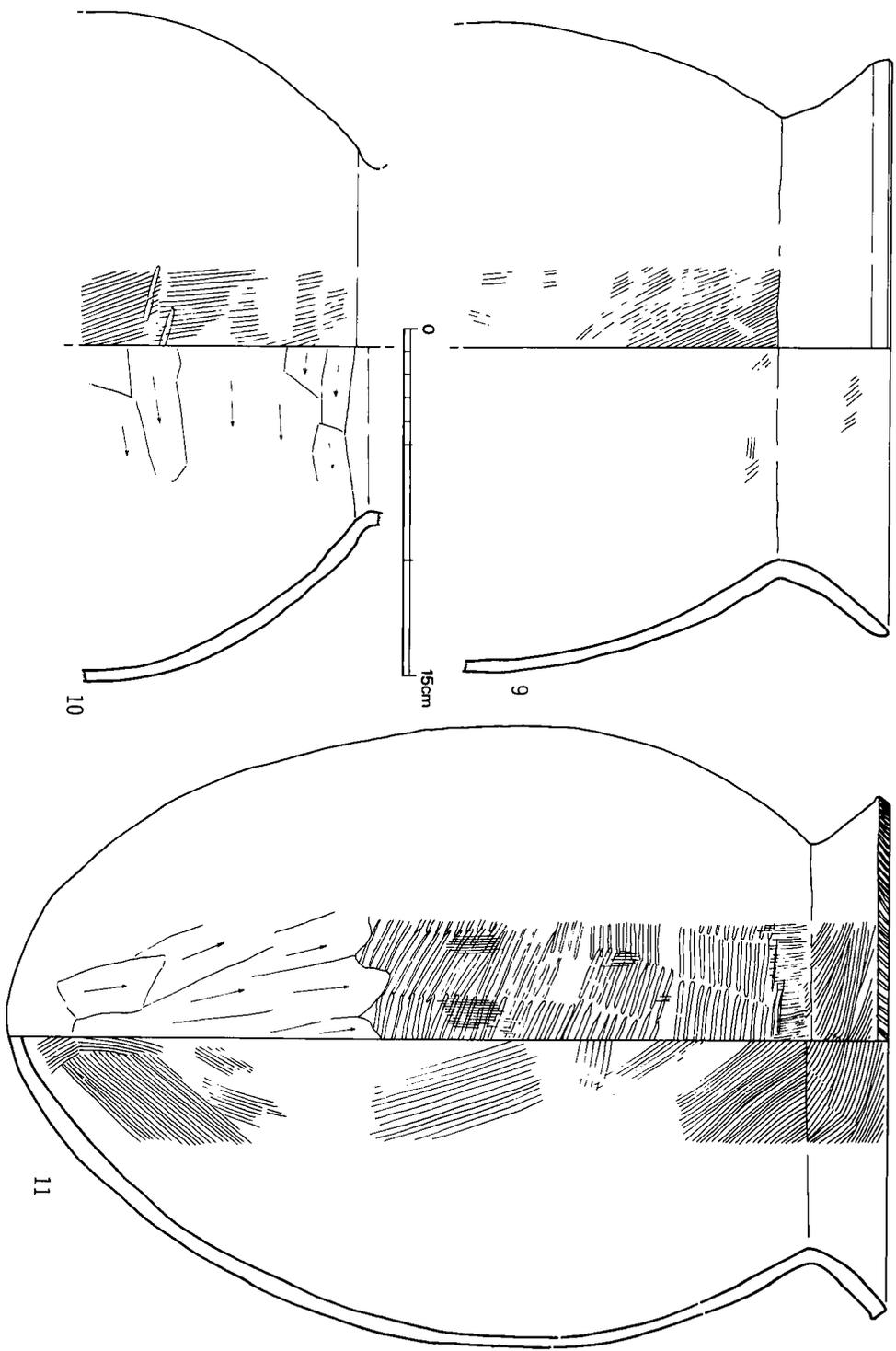
小形壺(6・7) 6はCD畦の第3層下部から出土した胴下半を欠失する小形壺で、扁球形の体部に、直線的な若干外開きになる口縁がつく。胴部ハケ調整、口縁から肩部は丁寧なヨコナデで、口縁内面は板状工具によるヨコ方向ナデ、胴部内面はナデ仕上げで、精良な胎土を用いて淡茶褐色に焼成される。7も同様な小形壺であろう。EF畦の第3層出土。

甕(9~13) 9は胴下半を欠くが長胴の甕で、EF畦第3層出土。頸部内面に稜をもって屈折する口縁部が、外半して端部で丸くおさまるもの。口縁部外面ヨコナデ、口縁内面・胴外面にハセメが残る他は磨滅して不明。復原口径24.6cm、現存長18.3cmを測る。砂粒をかなり含みくすんだ淡黄灰色に焼成される。

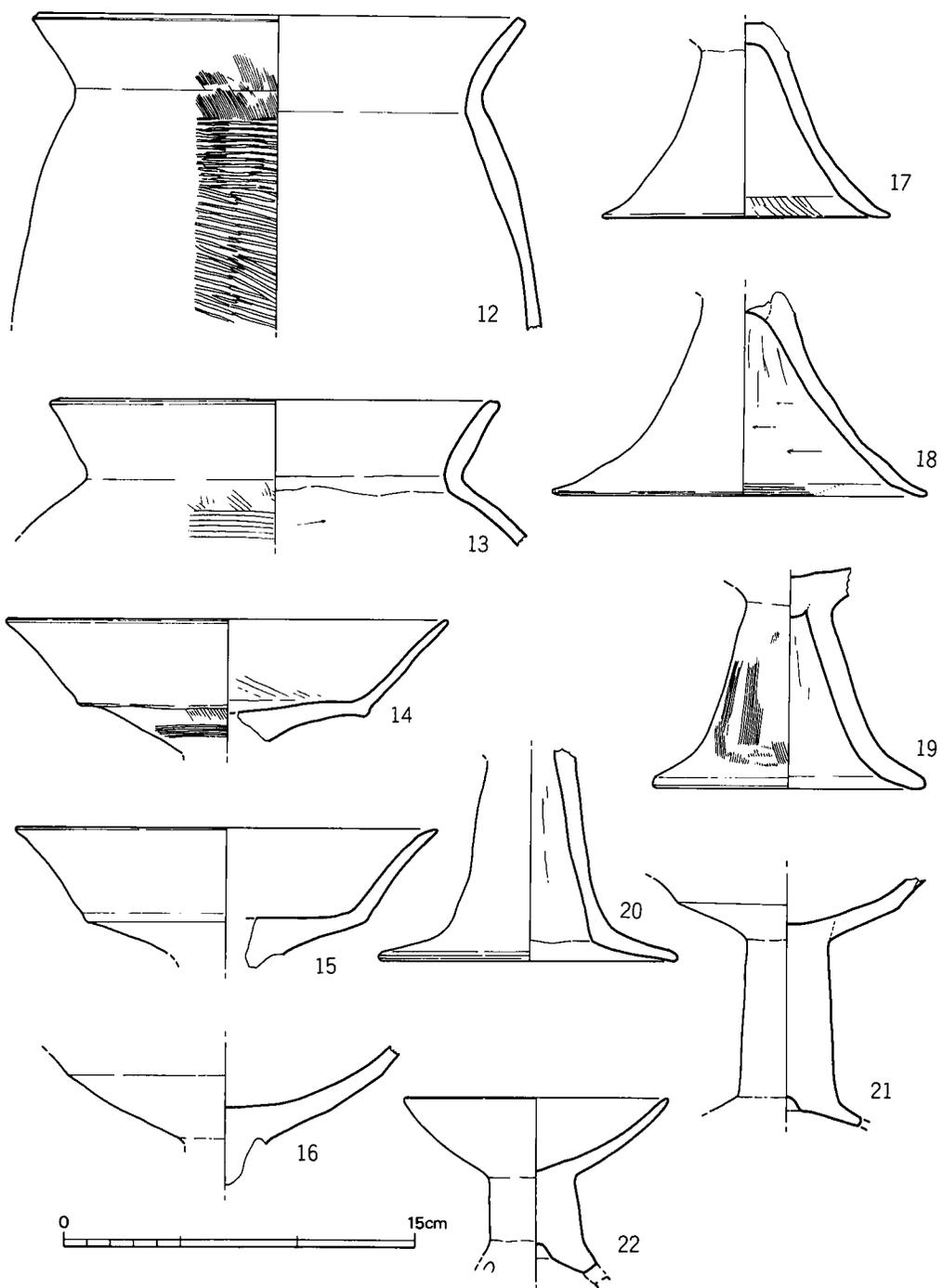
11は完形の長胴甕で口径21.6cm・胴最大径26.8cm・器高38cmを測る。頸部内面に明確な稜を有して短かめの口縁部が外反し、口唇部は極浅いキサミメを配して面取りされる。口縁部内外面と胴内面はハケ調整で、肩部は水平、胴部は右下りのタタキのあと、細かい縦方向ハケメが施されるがタタキ痕が明瞭に残る。胴下半はナデ消しに近いケズリで尖り気味の丸底を呈す。金雲母・赤褐色粒・角閃石を含み茶褐色に焼成される。11・12共にEF畦の第3層出土だが、12の長胴甕は頸部の屈折がやや鈍く、口唇部は凹み気味に面取りされている。胴外面はタタキ痕のまま放置され、口縁部外面のハケは縦方向に近い。内面の口縁部ヨコナデ・胴部ナデ調整。

10はEトレンチの第3層・13はAB畦の第3層上部から出土した内面にケズリのみられる甕で、頸部屈折部のやや下位にケズリとナデの境がある。10は口縁部を欠くが、13では、直線的に短目の口縁部が外反し、口唇部上面が沈線を施したかのようにわずかに凹む。胴外面はタタキ痕が若干残り縦方向のハケを施したあと、肩部はヨコナデあるいはヨコ方向のハケメが施されている。

高杯(14~22) 14・18がE北トレンチ第3層、16が第2層、15がAB畦の第3層、17がE南トレンチの第2層・19・21・22がFトレンチの第3層・20がBC畦の第3層から出土した。杯部の形状では、杯部下半が外反気味に伸びて突出気味の屈折をして上半部が直線的に広がる14、杯部下半が直線的で上半部が短かめに外反する15、内湾気味の杯部下半部から鈍く屈折する16があり、15・16の柱状部との接合部に突起を有す。



第 71 图 大溝出土土器実測图② (1/3)



第 72 图 大溝出土土器実測图③ (1/3)

脚部は裾に向ってラップ状に開く17・18と、脚筒部が直線的で裾は屈折して大きく広がる20、及びその中間的な19があり、中実の脚柱状部をもつタイプの21・22もある。17・18の脚筒部内面はケズリで端部付近にハケメがみられる。19・20では絞りのあとをナデており、20の脚筒部内面の下端にのみケズリの痕跡がみられる。外面は磨滅して不明だが19にはハケメが残る。中実タイプの21は裾部に3ヶ所穿孔の痕跡があり、杯部下半が短く直線的に伸びて外湾する上半部に鈍く屈折するようである。22は浅い椀形の杯部が付く器形で、短い中実の柱状部裾に3ヶ所の穿孔がある。

**台付椀（8）** EF畦第3層出土で、脚の一部を欠失するが口径10.9cm・器高8.9cm・脚部復原径10.3cmを測る。椀部高は5.5cmで、外湾して広がる脚が付く。椀部外面にハケメが残る。

#### **大溝支流1**（図版58～62、第68・69図）

B区東半部にあり、大溝のCトレンチ部分から西南側に延びていることから大溝支流と称した。しかし大溝の下面より下に堆積土が潜ること、Dトレンチ南壁の断面観察（図版62-1、第69図のe-f土層図）・Dトレンチ北壁の断面観察（図版62-1）では、大溝肩部に砂礫を含む黄色粘土・堆積土があり、Eトレンチの東北側にこの粘土部分が広がっていること、前回調査時の溝の一部が黒色土のベルト状に残っていること、更には、黄色粘土の下に大溝第3層よりも暗い黒色土が潜っていることからみて、大溝の下に交差する溝と考える。但し、大溝と大溝支流1の交差する地点の中央部では大溝第3層と支流1の第3層の境界はさほど明瞭でなく、わずかに大溝第3層に砂の混在が多い程度である。またCトレンチでの大溝西肩部については、前述の判断を下す以前に、単に大溝の支流であるとして不用意に掘り下げてしまい、大溝支流1の層序についても第3層までは大溝の第3層と同一として扱っている。しかし大溝2層と3層の間に薄い黄褐色粘質砂の堆積があり、支流1では同様の状況がみられないこと、大溝3層と大溝支流1第2層の土器が接合している例が幾つかあり、層序として若干ズレがあった可能性を否認しない。

Eトレンチ東側の黄色粘土が広がる部分については、大溝支流1の埋没を目的とした整地と考えることができ、大溝流路への変更であったと思われる。

流路の規模はA・Bトレンチで3.5～4m幅・深さ約40cmを有し、D・Eトレンチ東部では幅約5.5m深さ40～50cmとなる。両肩部は比較的しっかりとしており、断面形は逆梯形に近い。流路は南西側から北東側へと向い、塚堂古墳周溝へと向うが、周溝に切られている。周溝部分の調査については(4)その他の遺構と遺物で触れることにする。大溝支流1では、BトレンチからCトレンチにかけての部分に集中して遺物の出土がみられたが、その他の地域での遺物の出土は少ない。図版59はAトレンチ、図版60はBトレンチ、図版61はCトレンチ、図版62-2はEトレンチ東部での遺物出土状況だが、溝のほぼ中央に集中しており、どちらかと言えば左岸側に若干広がる傾向がある。

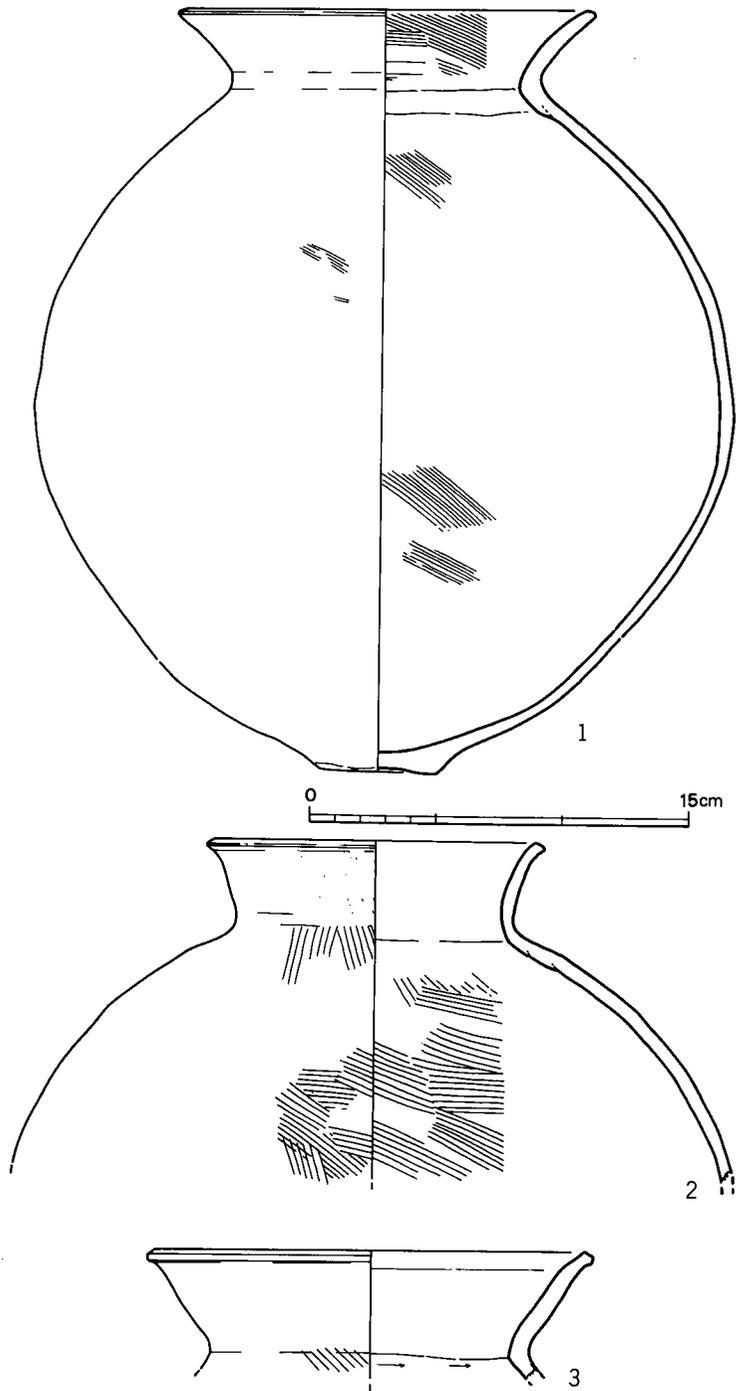
大溝支流1出土土器

(図版65~67,  
第73~78図)

44点を図示する。  
器種としては壺・  
甕・高杯・鉢・甑・  
小形丸底壺・器台・  
支脚などがある。  
このうち36~44は  
東北側の整地層部  
分から出土した資  
料で、壺・甕の器  
種が欠落する。一  
方南西側のA~C  
トレンチ出土資料  
では小形丸底壺・  
支脚などの器種が  
なく、図示しえな  
かった資料中に薄  
手の甕破片がやや  
多い傾向があるも  
のの厚手の甕など  
も少ない。

壺(1・2・4・5・  
7~19) 1はAト  
レンチの第3層か  
ら出土した完形に  
復原できる壺。

口径15.8cm・器高  
30.4cm・胴最大径  
27.8cmで、径4.7  
cmの小さな底部が



第73図 大溝支流1出土土器実測図①(1/3)

付く。球形の胴部をもち口縁は外方に直線的に伸び口唇部が丸味をもっておさまる。器面風化のため調整は不明だが内外面共にハケメが残る。砂粒を多量に含み淡燈色に焼成される。

2は、口唇上面が心もち凹み気味に面取りされるものでCトレンチの第3層から出土した。頸部内面が丸く屈曲する。

4・5は、外湾しながら広がる口縁部をもち、口縁部の内面が凹む。4はCトレンチの第3層下部から出土した完形品で口径16.7cm・器高29.7cm。卵形体部のやや上位に25.7cmの最大径があり、外面胴下半はケズリで尖り気味になるが、それ以外の部分は全てナデ仕上げされている。ただ内面の頸部指圧痕と胴部の板状工具圧痕が痕跡程度に残る。多めの砂粒と赤褐色粒・金雲母・角閃石を胎土に含み、くすんだ淡茶褐色に焼成されている。5はBC畦の第3層出土の胴下半を欠失する資料で、内外面共にハケ調整されるが、胴部ではハケメが顕著でなくタタキ痕が明瞭である。

7はBトレンチ第3層出土の球形体部の壺で、直線的に広がる口縁部を有し口縁端部内面が凹む。胴上半と下半がうまく接合しないが、復原口径16.7cm・胴最大径25.2cm。胎土・色調・調整共に4に似るが、ナデ仕上げがより丁寧に施されている。

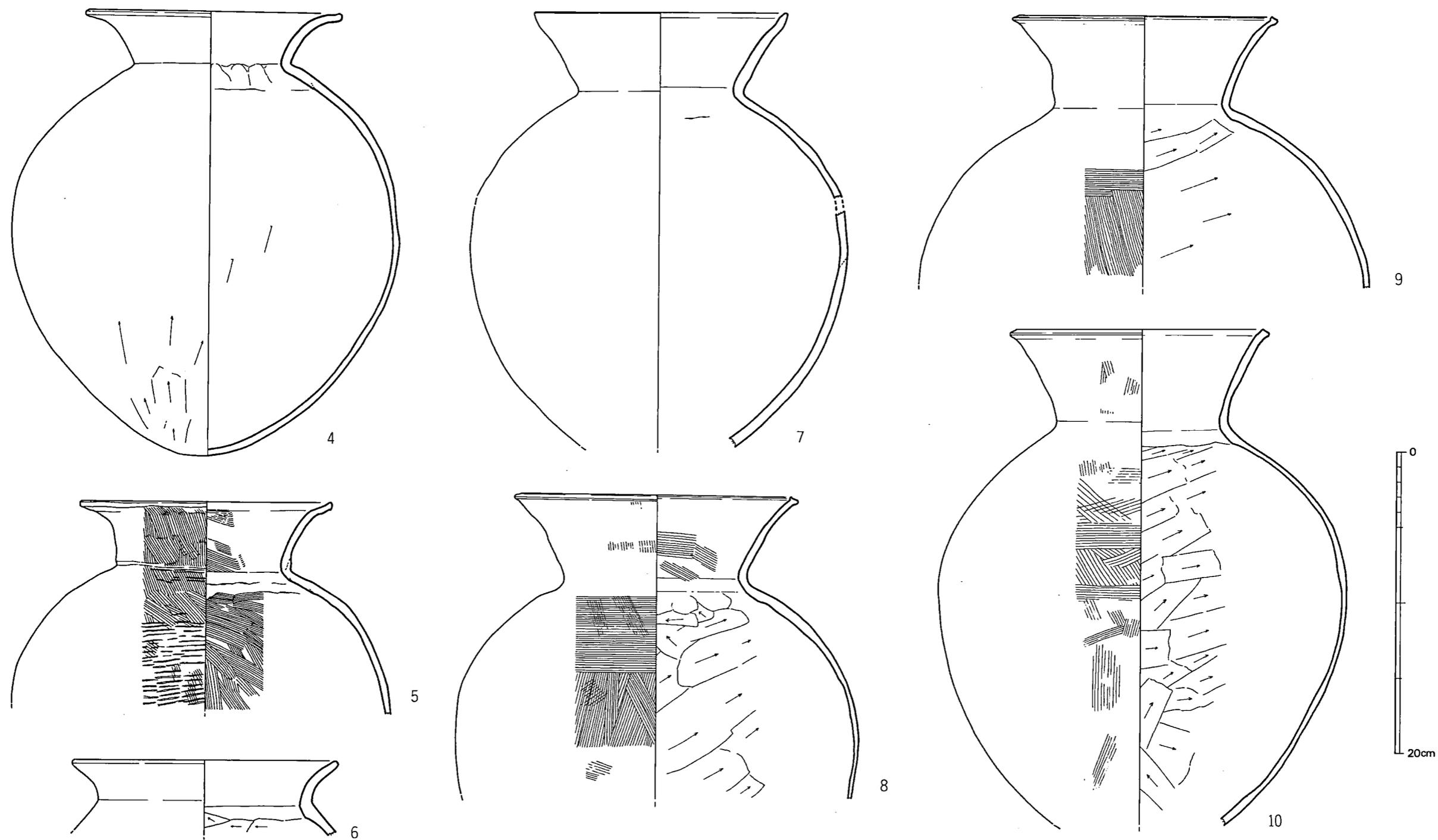
8・9は、BC畦の第3層下部出土の、僅かに外湾しながらも長く直線的に開く口縁部をもち、口唇端部は摘み上げられたように上方に尖る。口径・頸部径の比は、17.9・12.3cmと16.7・11.6cmで、8の開き方が大きい。内面は頸部屈曲位の僅か下までケズリが及び、外面は縦方向ハケメあと肩部に横方向のハケを巡らせている。9では不明だが口縁部は内外面共にハケのあとヨコナデしている。器壁は薄い。

10はCトレンチの第3層出土の底部を欠失する壺で口径16.2cm・頸部径11.4cm・胴最大径27.1cm・現存高32.9cmで、卵形の体部に直線的に伸びる口縁部が付く。口唇端部は軽く摘まれたように凹み気味の面をもち若干肉厚になっている。

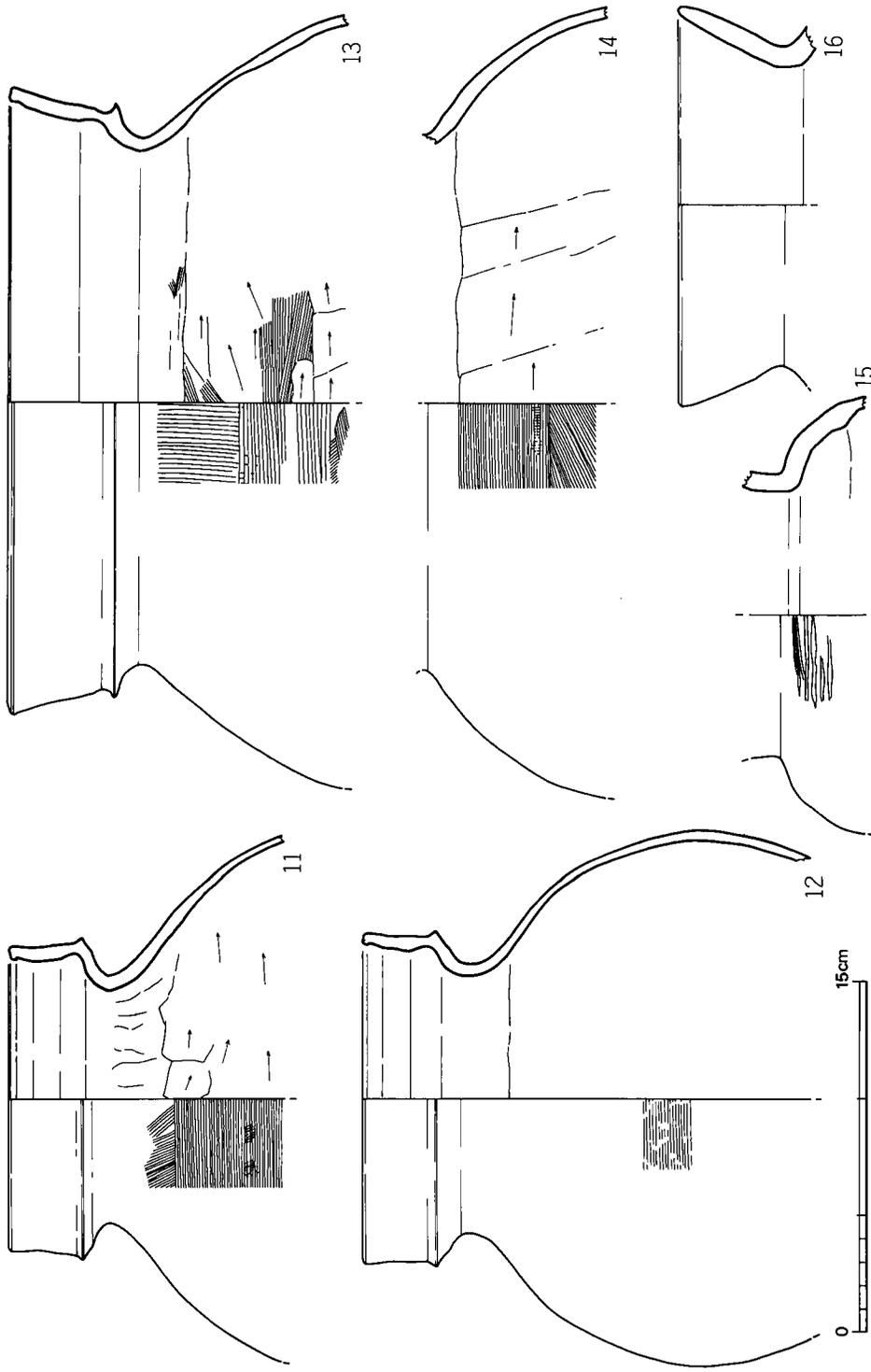
11・12は、くびれた頸部から口縁部が開き更に大きく屈折して上方に伸びる二重口縁壺で、Cトレンチ・Bトレンチの第3層から出土した。口縁部はヨコナデ調整で屈折部はやや稜をなし、口縁部上面は平坦で、内面が若干凹む。体部内面は頸部のやや下位までのケズリで、外面にはヨコ方向のハケメがみられる。器壁は薄い。口径は12cmと14cmで、頸部外径10.6cm・11.5cm。

13・14は、Aトレンチ・Bトレンチの第3層から出土した。13では26cmの口径、22.5cmの頸部外径を有す二重口縁壺で、ヨコナデ調整の口縁部は摘み出したように尖る屈折部を介して更にやや外方に伸びる。口唇端部の上面と内面はわずかに凹む。内面は頸部のやや下までケズリで、ケズリ痕の下にハケメが残り、頸部内面のヨコ方向ナデは板状工具による。肩部外面には縦方向とヨコ方向のハケメがあり、器壁は薄い。

15・16は中形の壺で器壁は厚い。内外面共ナデ調整されるが、15の肩部にはタタキ痕が残る。16の口縁部は直線的に外方へ開がって端部は丸い。



第 74 图 大溝支流 1 出土土器実測図② (1/3)



第 75 图 大溝支流 1 出土土器实测图③ (1/3)

18も中形の壺で、口縁は直に近く内湾気味に伸び、端部が外反する。ヨコナデ口唇上面はやや凹み気味になるが外面と口縁部内面はハケ調整、内面は頸部直下までケズリが及ぶ。

19は体部に比べて大きく広がって伸びる口縁をもつ中形壺で、肩部以下を欠くが口径12.6cm・現存高8.1cmを測る。ナデ調整で仕上げられ器壁は薄目になっている。15・18はBC畦・16・17はCトレンチの第3層上面、19はCトレンチの第3層から出土した。

**甕**（3・6・20～23） 3はBC畦・6はCトレンチの第3層から出土した。3の口縁部は内湾気味ながらも直線的に開き端部は外反する。口唇上面は心もち凹み気味に面取りされ、頸部内面はケズリで稜をもつ。6の口縁部は外湾して広がり端部が丸味をもつ。頸部内面のやや下までケズリが及ぶものの器壁はさほど薄くもない。この土器の特徴は17の壺にも似ており、17は肩部が広がるために壺に含めたものの壺・甕の区別をつけ難い。

20はCトレンチ第4層上面出土。頸部から鋭く外反し、口唇端部上面は摘み上げたように尖る。内面はハケのあとナデしており、外面のハケメは細く交差しており布目の如きで、肩上部はヨコナデが加わって消えている。器壁は薄い。

21は、20に比して湾曲気味に外方に伸び、頸部の屈折もやや鈍い。口唇端部は上方に摘み上げたように尖るが20に比して低平。頸部内面までケズリが及ぶ。器壁は薄い。Bトレンチ第3層出土。

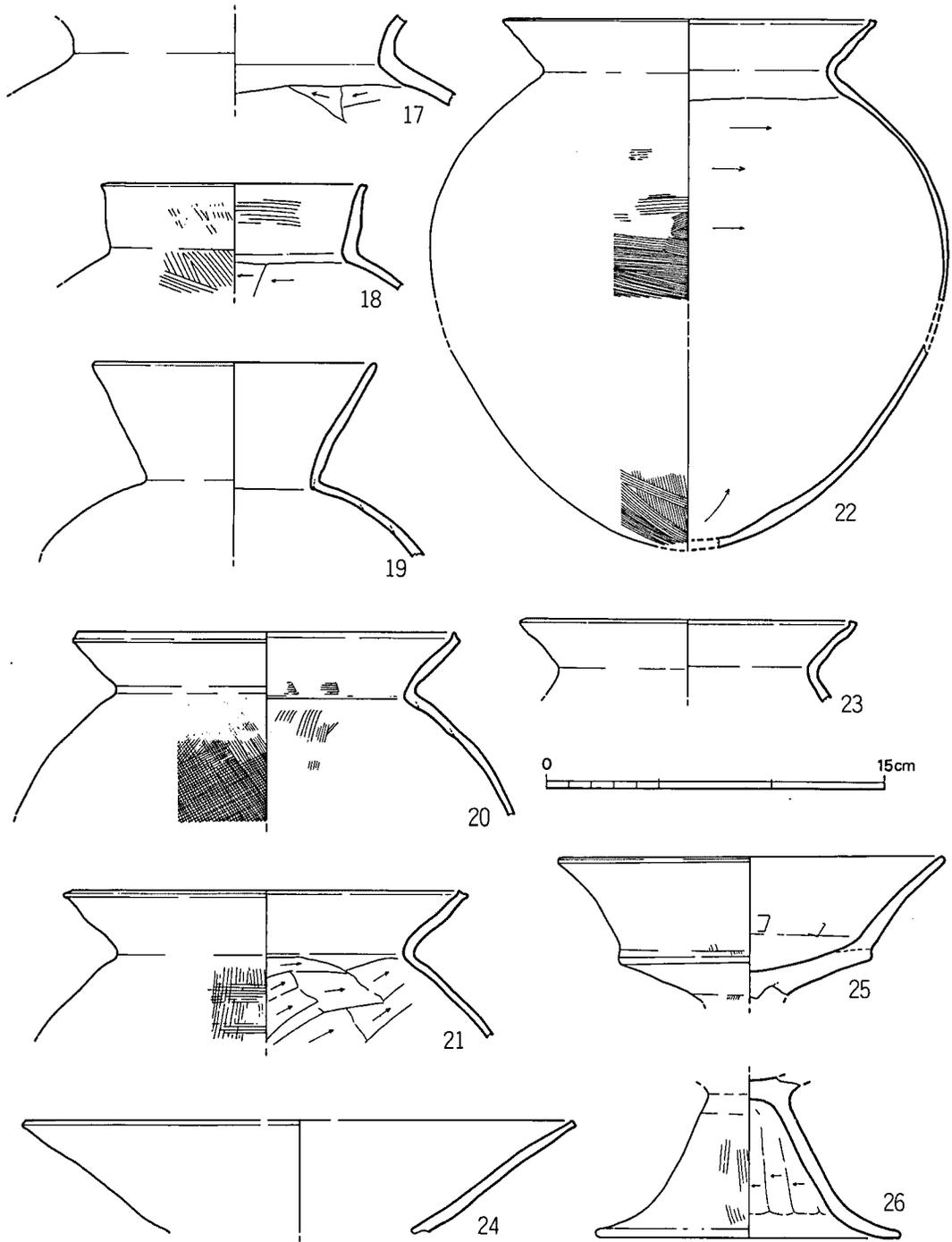
22は胴部上半と下半がうまく接合しないが、口径16cm・復原器高23.8cmの完形になる資料でBトレンチ第3層から出土した。胴部最大径が頸部から $\frac{1}{3}$ の位置にある尖り気味の体部から、丸味をもって口縁部が屈折するが、口縁部は直線的に広がり口唇端部は僅かに内側に軽く摘みあげたように低く突出する。内面は頸部のやや下位までケズリで頸部内面ナデ、口縁部はヨコナデ調整され、胴外面に細かなハケメが施される。肩部は器面風化のため不明。器壁は薄い。

23はBC畦の第3層出土の口縁部破片で、頸部が鈍く屈折し、外反する口縁の端部は内面に段を付けたように突出する。頸部内面はナデ調整である。

32・33は底部破片でBトレンチ・Cトレンチの第3層から出土した。尖り気味の丸底になる32は壺の底部かも知れないが区別をつけ難い。内底面製作時に指で押えた凹みを粘土で充填した痕跡が残る。

**高杯**（24～27・34・36～40） 24・25がBC畦、26・34がCトレンチ、27がABベルトの第3層から出土し、36・37・40がEトレンチ東の黄色粘土下の第3層、38・39がCD畦の黄色粘土下から出土した。

杯部の形状では、直線的に伸びる杯下半部から突出気味に屈折して外湾する短かめの上半部が立ち上がって広がる25の例、内湾気味に伸びる下半部から鈍く屈折した上半部が直線的に広がり端部で少し外反する27・34・39の例・24のように破片資料で径も不確実だが長い直線的な杯上半部をもつ例などがある。もっとも杯部の深さでは、25に比して36が深めで、27・34に比



第 76 图 大溝支流 1 出土土器実測图④ (1/3)

して39は深めになっている。

脚部では、裾に向って大きくラップ状に開き34・37の例、脚筒部がやや直線的で裾が屈折して広がる40・34に近いが裾の屈曲して広がる26のような例がある。また34の裾端部は面取りされている。40の脚筒部内面は上半に絞り込みの痕跡が残り下半はケズリが施される。

**鉢** (28・30・42) 28は手捏ねの略半球形を呈す小形品で口径8.6cm・器高4.9cm。Aトレンチ第3層出土。小さな底部がある。

30・42は、低い半球形体部にくの字口縁がつく鉢でそれぞれBトレンチ・Eトレンチの第3層から出土した。30は復原口径25.5cm・器高13.5cmで、内面はナデ、外面の下半部にタタキ痕を残してケズられ、胴上半から口縁部はハケメが施される。頸部屈折は緩やかで直線的に伸びた口縁部はやや面をもっておさまる。42は頸部から短い口縁部が外に開き、体部外面の下半のみケズりで他の部分はヨコナデ及びナデ調整される。

**台付鉢** (31・41) 31はB・Cトレンチ第3層出土で台部を欠失するが、口径21.7cm・現存長10.6cm。ヨコにナデられる口縁部は頸部から緩やかに外反してくの字口縁を呈し、口唇部上面は凹み気味に面取りされる。半球形の体部は外面の上半と内面に細かいハケメ、胴下半は粗いハケメが施される。

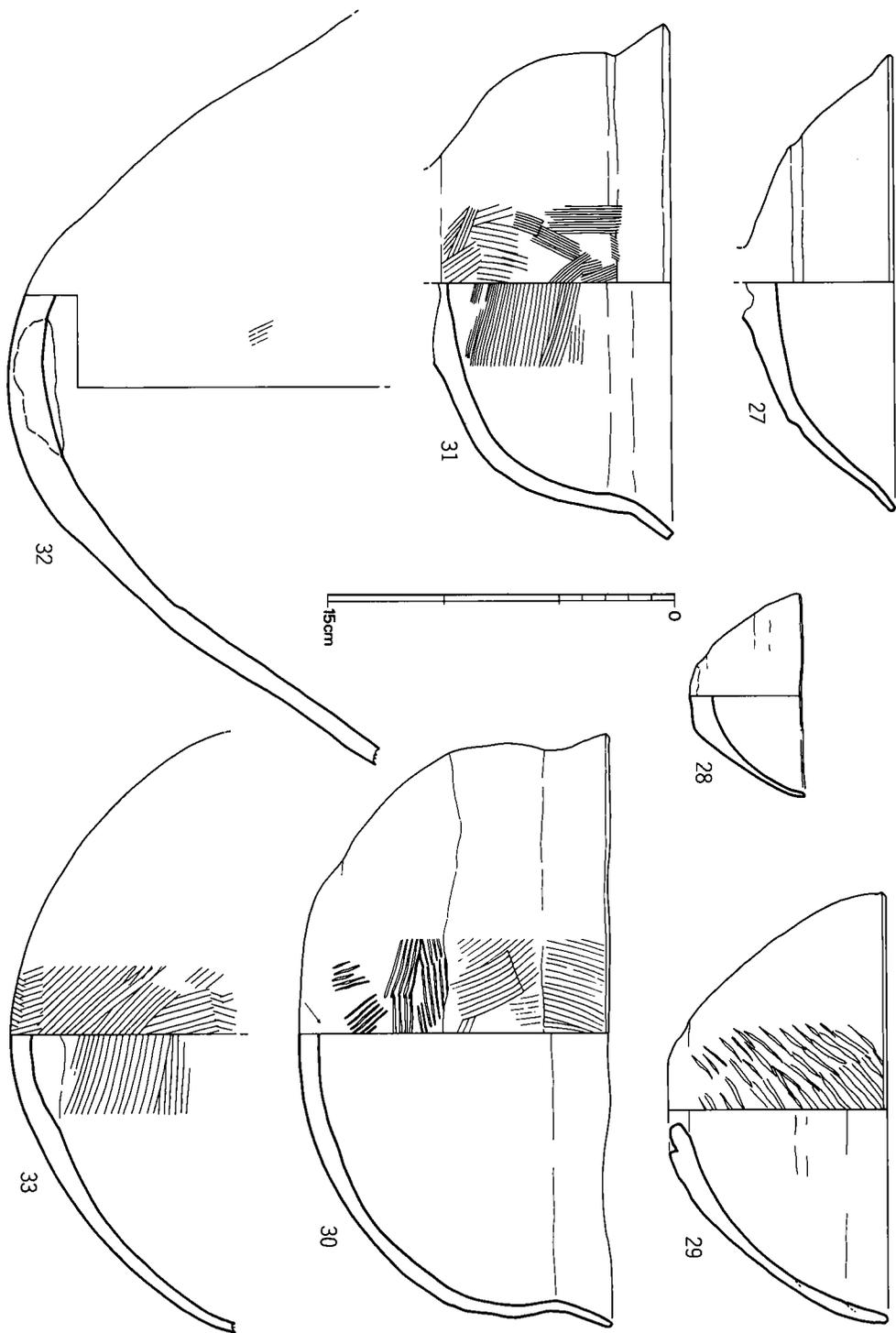
41は扁球形の体部を有し、くびれた頸部から外湾気味の口縁部が伸びて端部は丸味をもっておさまる。体部下半の外面にケズリ痕がある。口径18.5cm・現存高11.3cm。Cトレンチ第3層出土。

**甌** 29は復原口径18.5cm・現存高9.7cmの半球形を呈す鉢で内面はナデ調整だが、外面にはタタキ痕が残る。1孔が穿たれる底外面はケズられ、孔の周囲にへら状工具先端による切り込みがある。Aトレンチ第3層出土。

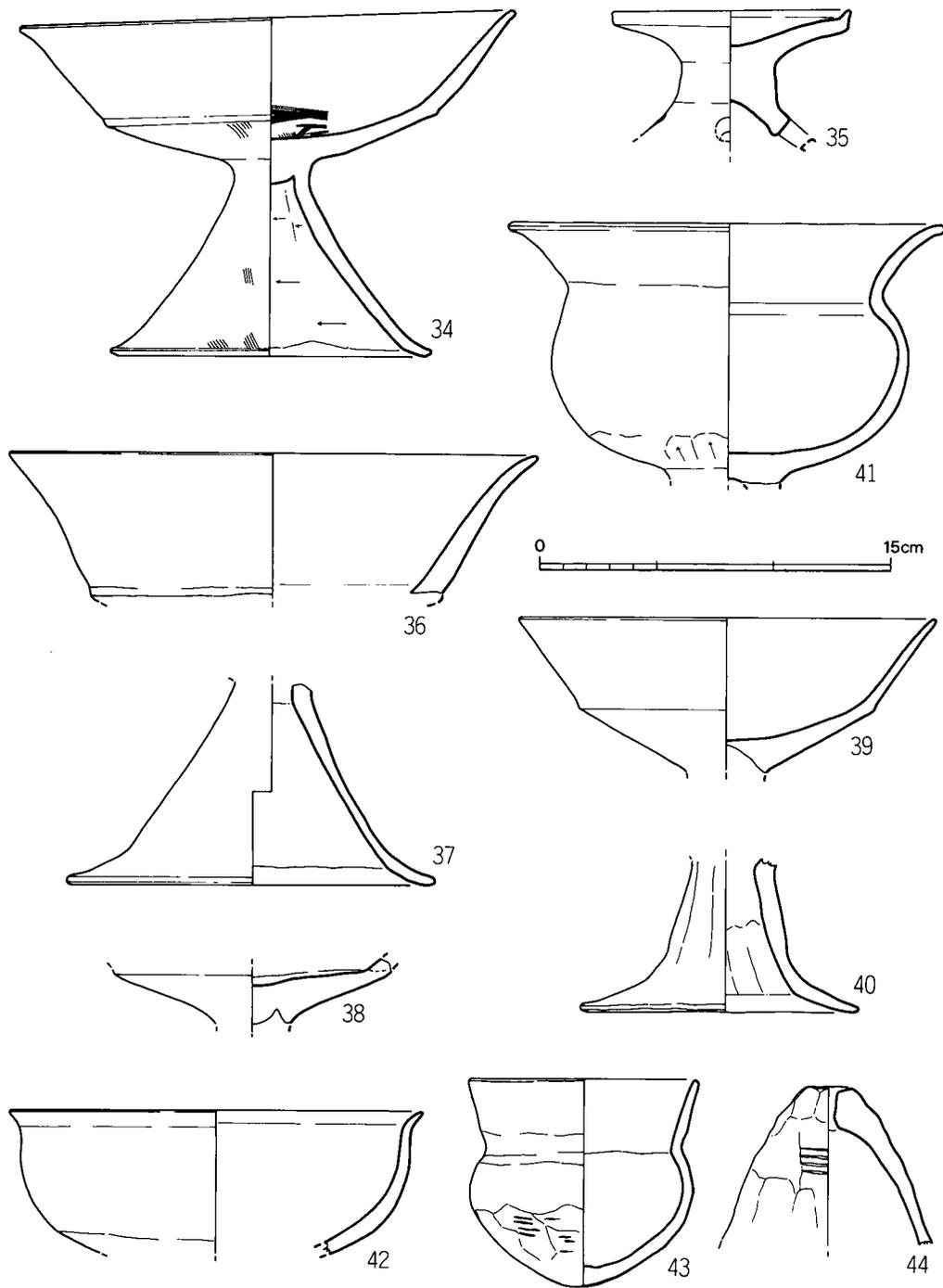
**小形丸底壺** (43) 復原口径9.6cm・器高8.8cmで、尖り気味の丸底の体部下半はタタキのあとケズリ調整され、くびれた頸部内面は稜をもち体部内面はナデ調整、口縁部内外面はハケメをヨコナデで消しているが口唇部は丸くおさまる。

**器台** (35) Cトレンチ第3層から出土した脚裾部を欠失する資料で、中実の短い柱状部を有し扁平な皿状の受部が付く。口縁端は摘み上げたように立ち上がり外面は心もち凹む。脚裾部は稜をもって広がり、円孔が4つ穿たれる。胎土に石英・角閃石・赤色粒などを含み、外面へらナデないしはへらミガキ・内面ナデ調整で淡褐色に焼成される。

**支脚** (44) 黄色粘土層と第3層の接点から出土した。下部を欠失しており全体の形状は不明だが、砲弾形の頂部に1孔が穿たれる。外面はタタキのあとをナデ調整、内面もナデ調整されている。甌底部とも形状が似ており、可能性を否めないが、甌としてはは体部が細すぎるように思われる。



第 77 图 大溝支流 1 出土土器実測图 ⑤ (1/3)



第 78 图 大溝支流 1 出土土器实测图⑥ (1/3)

## 大溝支流 2 (図版 63・64, 第79図)

B区東半の北側にあり、D・E・Fトレンチの西側半分に検出された。当初大溝の支流と考えていたため、大溝支流2と称した。しかしFトレンチの土層観察により、大溝支流1同様、大溝の下層にもぐる堆積土に相当することから大溝よりも先行する溝である。堆積土は大溝支流1と同様だが、南側の支流1とは継らず、CD畦の部分で終る。幅はDトレンチ部分で約3m E南トレンチ部分で約4m、Fトレンチ部分では5m前後まで広がる。深さは南端部で約20cm・北端部で約60cmを測り、低平なU字形断面を呈す。E北トレンチ部分の西肩部には小さな谷が刻まれている。

図版63・64に遺物出土状況を示すが、E北トレンチに集中して検出された。しかし、むしろ西側の谷部を中心として広がっていると考える方が妥当であろう。

## 大溝支流 2 出土土器 (図版 67, 第79図)

出土土器のうち、Fトレンチ出土土器は、大溝と大溝支流2との区別を発掘時になしえていなかったため、支流2出土の可能性のあるものについても大溝出土に含めている。このためE・F畦よりも南側出土資料のみとなっているが、11点図示する。出土地点は1がEF畦第4層下部、2がE南トレンチ第3層、3がE中央畦第4層上部、5・10がE北トレンチ第4層上部、他は全てE北トレンチ第3層出土である。

壺(1～3) 1は細くしまった頸部から口縁部が直立気味に広がりながら伸び、端部が肥厚しながら大きく外反する。口唇部外面には縦方向のキザミが巡らされ、頸部には断面三角形の凸帯が貼り付けられている。内面の調整はハケを施したあとナデ消しているが、頸部以上はハケメがかなり残る。外面は肩部、口縁部共に縦方向のハケが施される。

2は口縁部が外弯しながら開がり、内外面共にハケのあとをヨコナデしており口唇部は丸味をもっておさまるが内面で凹み気味になっている。体部内面もハケ調整され、頸部屈折は稜をもつ。体部外面は縦方向のハケメが施されているが下地のタタキ痕が処々に残っている。

3は口頸部のみだが、僅かに外弯しながらも直線的に外方に広がる口縁部を有し、口唇部に小さな立ち上りの面をもつ。復原口径は18.2cmを測る。胎土に細かな砂粒・赤褐色粒を含み淡褐色に焼成される。

壺(4～5) 4は胴下部を欠失するが、口径21cm・現存高26.6cmを測る長胴タイプの甕で、頸部内面に稜を有して口縁部が外反する。体部内面は磨滅しているがハケメが残り、体部外面には頸部付近水平、胴部右下りのタタキ痕がそのまま残り、胴下半のみナデ消されている。口縁部は内外面共にハケが施され、ヨコナデが加わる口唇部は内外面共に凹み気味で、端部の面取りも心もち凹み気味になっている。角閃石・赤褐色粒・金雲母など細砂粒を胎土に多く含み茶褐色に焼成されている。

5は器壁の薄い甕で、体部下半を欠失する。頸部がやや丸味をもって屈折し、ヨコナデ調整

の口縁部は直線的に外反する。口唇端部の内側が摘み上げられたように突出するがやや低目で内傾気味になっている。体部内面のヘラケズリは頸部の下位までで、屈折部内面に稜をもたない。体部外面では右下りの細目のタタキのあとヨコ方向のハケが施されるがほとんど残らず、完全にナデ消された肩部には2条のコの字断面の凹みをもつ波状文がめぐる。金雲母・角閃石などの細かめの砂粒をかなり含む胎土で淡茶褐色に焼成されている。口径は15cmである。

**高杯（6）** 杯部を欠失するため全体の器形は不明だが椀形に近い杯部であろう。中実の短い柱上部を有し、脚部は大きく開く。脚部に4孔が穿たれる。全体に器面風化が進み調整方法は不明だが、ミガキないしは丁寧なナデであろう。赤褐色粒・細砂を若干含むが精良な胎土で焼成も良好。

**椀（7）** 半球形丸底の体部を有し、口縁部が短く反り気味に立ち上る器形で、短頸壺の器形に似る。口径9.6cm・器高7.7cm・胴最大径11cm・器壁厚4～7mmを測る。金雲母・赤褐色粒・多めの砂粒を胎土に含み淡茶灰色に焼成される。底部には外面から穿った焼成後穿孔がある。

**台付椀（8）** 脚部を欠失するが椀部は完全に残り、口径11.5cm・現存高8.1cmを有す。半球形の体部でそのまま丸味をもった口縁端部に至る。椀底部は厚く、ナデ調整ながら指圧痕が残る。体部内外面共にヘラミガキされるがやや粗雑でヨコナデの痕跡が残る部分もある。底部の厚みからはむしろ台付鉢といった表現が妥当かも知れない。赤色粒・金雲母・石英など砂粒を含み暗黄褐色に焼成される。

9は脚台部破片で脚裾は踏んばるように広がる。復原裾径9cmで黄橙色に焼成されている。

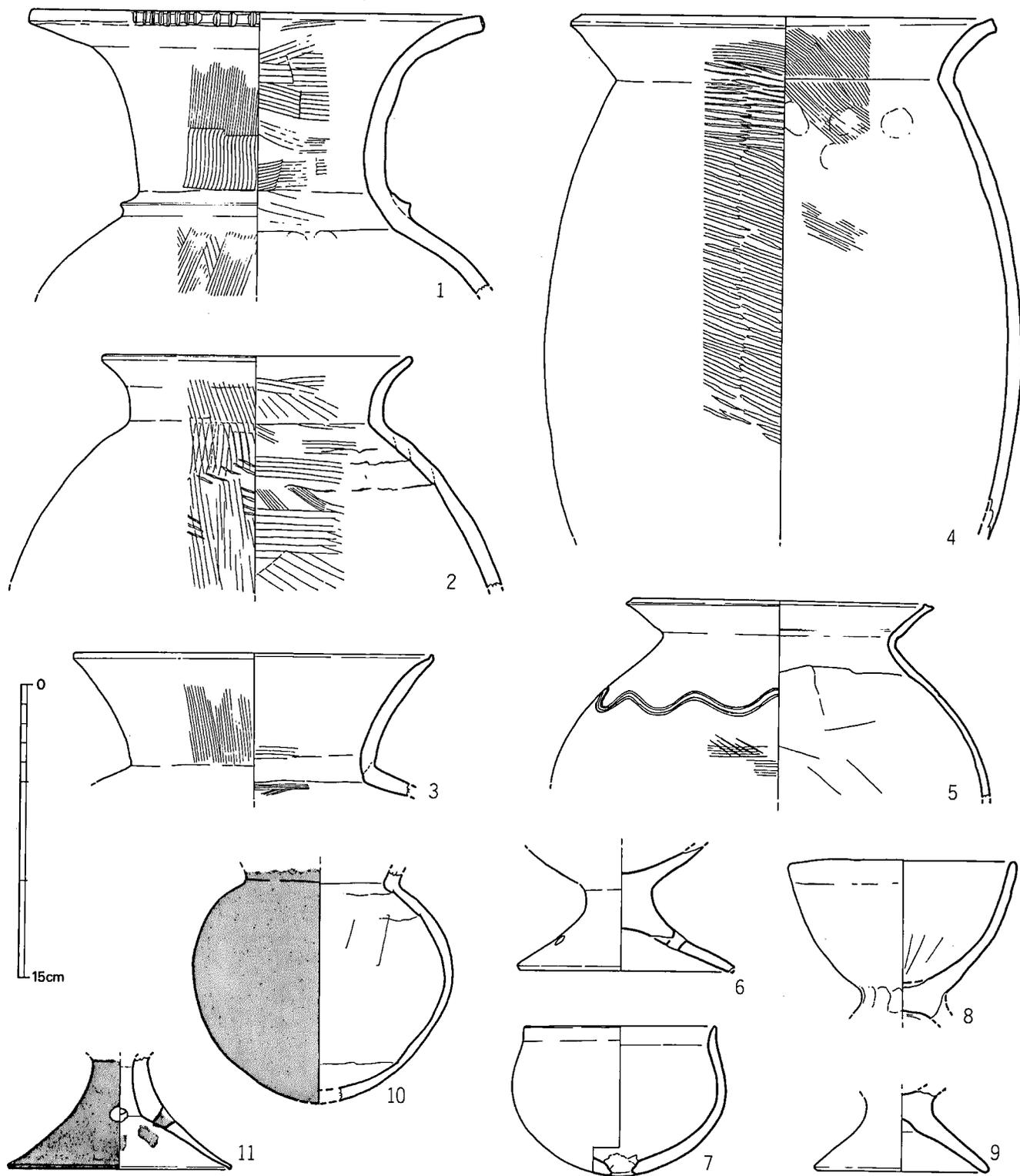
**丹塗丸底壺（10）** 体部のみで口縁部を欠失するが、最大胴径13.3cm・頸部外径7.9cm・現存高12cmを測る。球形の体部を有し、底部は尖り気味の丸底を呈す。内面はナデ調整、外面はヨコ方向にミガかれている。胎土は金雲母・角閃石を含むが精良で、淡黄褐色に焼成されるが、体部外面に赤色顔料が塗布されている。

**丹塗器台（11）** 脚部破片で受部の形状については不明。高さ2.5cm程度の脚筒部を有し、脚裾は大きく広がって薄くなり、端部は僅かに踏んばる。しかし脚筒部・裾の上部の器壁が厚いため、外面では受部との境目から脚裾に向かってラッパ状に開いたような形を呈す。裾上部に穿たれる4孔は、外面から細いヘラ状工具で逆時計廻りにケズられている。また脚筒部内面も絞り込みのあと細いヘラ状工具でケズられた痕跡を残している。若干砂粒・赤色粒を含むが精良な胎土で、淡黄褐色に焼成される。外面全体に赤色顔料が塗布され、内面ではかなり消えかかっているが、ほぼ全面に赤色顔料の痕跡がみられ、筒上部によく残っている。復原裾部径は11cm・現存高5.7cmを測る。

#### 大溝支流2 深層出土土器 （第80図）

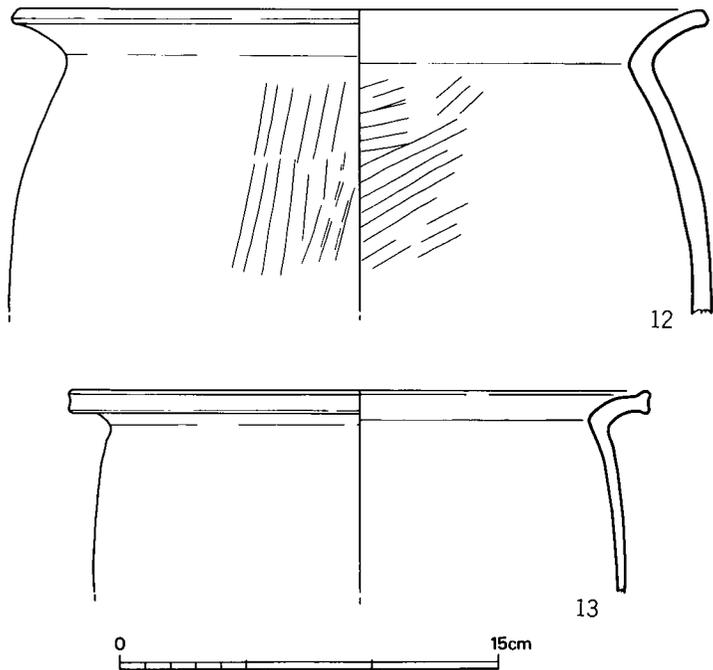
Fトレンチ部分では大溝支流2の床面以下の堆積土の状況を観察したが、この際、4層下部より下の暗黄灰色粘質砂層から数点の土器片が出土し、接合して2個体分にまとまった。

**壺（12・13）** 12は内外面共に粗いハケメ調整の胴部からくの字に屈折して口縁部が外弯して広がるもので、復原口径27.2cm・現存高12cmを有す。



第 79 图 大沟支流 2 出土土器实测图 (1/3)

13は風化のため調整不明だが、頸部がくの字に屈折して口縁部が極端に外反するもので、口縁端部の両面共に凹む。復原口径22.8cmを有すが、金雲母と細かな砂を多めに含み淡茶色に焼成されている。



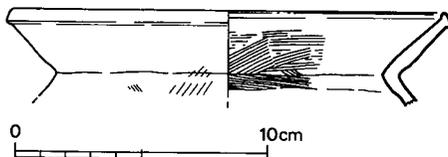
第 80 図 大溝支流 2 深層出土土器実測図 (1/3)

### 小溝 1

B区中央部を南北に走る溝で、真北に対して約34°東の方向に流下する。幅40~70cmだが、深さ8~12cm程度しか残らず、調査区南壁の土層断面で20cmであることから幅はもう少し広かったと思われる。調査区南部で大溝支流1を切っており、大溝、大溝支流1・2を覆う黄色粘土の整地層がこの部分にも乗っている。従って大溝支流1より後出し大溝埋設後の整地よりも古い段階に小溝1が埋没したと考えることができる。埋土は暗茶灰色の砂質粘性土で上部はやや暗い。埋土からは土器小片が30片程度出土したものの図示し得る資料はほとんどない。

### 小溝 1 出土土器 (第81図)

甕口縁部破片で約 $\frac{1}{10}$ 程度残存し、口径17.1cmに復原できるが頸部以下は不明。頸部に稜を有して屈折した口縁部は直線的に伸びて端部で摘み上げたような立ち上がりをもつが、ハケ原体



第 81 図 溝 1 出土土器実測図 (1/3)

によるヨコナデによって口唇部を面取りしているため下方にも若干垂れる。外面はハケ原体によるヨコナデが施されるが体部側では斜方向の粗いハケメが下地に残り内面はハケ調整が残るものの頸部のやや下位はヨコ方向の指ナデが加わっている。

### 小溝 2

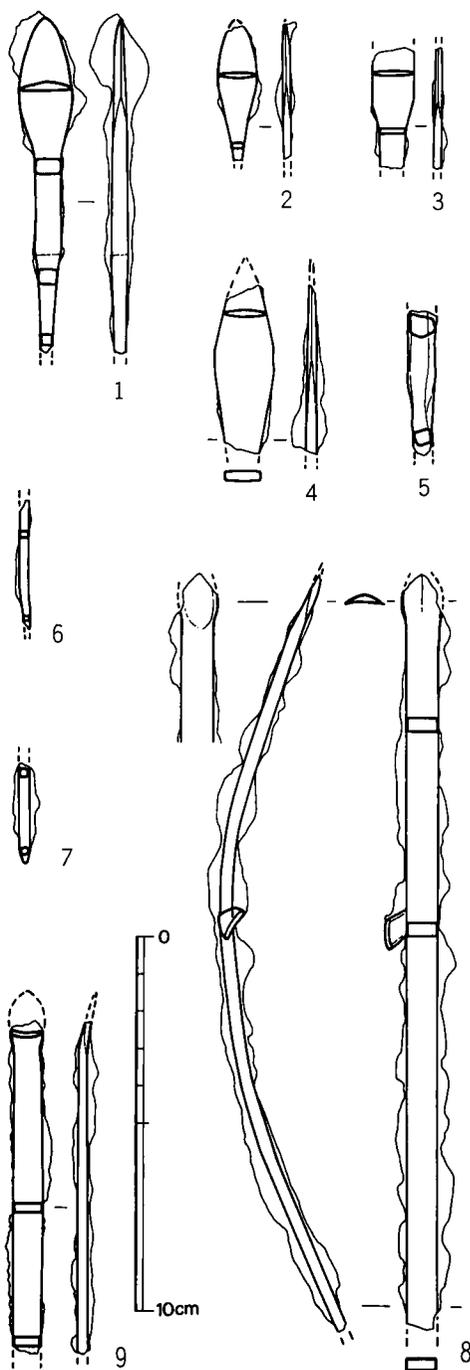
B区東端部を南北に走る溝で、蛇行するもののほぼ真北方向に流下する。幅35～40cmで深さも30～40cmを有す。大溝支流1埋没後の整地面を切り込んでおり、大溝とは切り合い関係がないものの、大溝埋没後の整地層とみられる黄色粘土とほとんど重ならないが一部でこの粘土面を切っており、大溝よりも後出する。後述するB北区のトレンチ壁面では大溝埋土相当層を切っていることも肯首できる。溝内埋土は上部で暗灰色粘性土・下部はやや砂質を帯びる暗茶褐色粘性土で、縄文土器小片・弥生土器小片・土師器小片と、円筒埴輪小片1点が含まれていた。塚堂古墳外溝に大略平行することからみても古墳築造後の溝と思われる。

### 小溝 3

B区西端部を真北に対して大略約50°東に振った方向に検出できたが、弧を描いて北側は西に寄る。幅60cm前後で深さ5～10cmを有すが、底面の高低に顕著な差はない。埋土は暗茶褐色土粒を含む暗黄褐色粘性土で、縄文土器片を混入しているが他は細片ばかりで時期の判定はし得ない。ただ胎土からして弥生土器と思われるもの、土師器の可能性のあるものが若干含まれている。

鉄器（図版70-1，第82図）

大溝・大溝支流1・2から合計6点の鉄器が出土した。内訳は鉄鏃3，その他3である。



第 82 図 B・B 北地区溝状遺構出土鉄器実測図 (1/2)

**鉄鏃** (1・3・4) 1はAトレンチ大溝支流1の第2層から出土した、片丸造篋被柳葉式の鉄鏃。身の部分は長さ3.4cm・幅1.4cm・厚さ2.6mm、篋被部の長さ2.9cm・幅6.6mm・厚さ4.5mm、篋代部端を欠失するが折損部では断面方形に近く幅3.5mm・厚さ3mmを有し、全長の現存長は8.9cmを測る。

3は大溝支流2の第3層から出土した。身の先端と基部側を欠失するが、基部側は幅6mm・厚さ1.5mmで、最大幅の位置から先の両側縁は刃をなす。1に比して細長い感じで両丸造柳葉式に含まれるが、次の4に近いタイプであろうか。

4はCトレンチの大溝第3層から出土した身部破片で先端・基部側共に欠失するが、現存長4.5cm・最大幅15.5mm・先端側の厚さ2mm・基部側の厚さ3mmで、最大幅位から先端側の両側縁は刃になっており両丸造に含まれる。しかし1・2に比べるとより定角式に近くむしろ柳葉変形定角式にすべきであろう。

**不明鉄器** (5~7) いずれも、旧トレンチ再堆積土に混ざって出土しており、本来の出土地点を明確にしえないが、大溝部分出土の可能性もある。5は断面不整方形の棒状を呈す部分で長さ3.85cmを測る。鏃の篋被部かも知れない。6は1.5cm~2.0cm角の断面方形の細い棒状のもので、両端部共に折損するが3.4cmの現存長を有す。7は直径2.5cmの丸棒状を呈す先端部破片で現存長2.6cmを有して先端は尖る。

石器 (図版70-1, 第102図)

石器類の出現率は極めて低く、弥生時代~古墳時代に属すとみられる石器は、砥石片1点のみである。

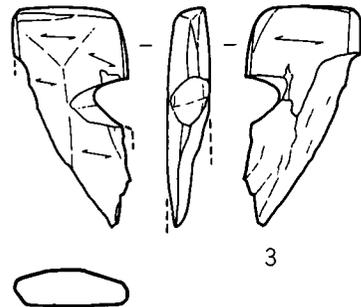
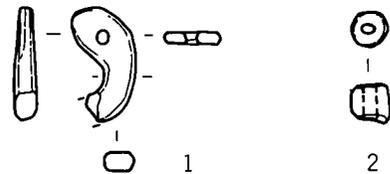
**砥石** (第102図1) 大溝2層 (DE畦) から出土した頁岩製の仕上げ砥石の類で、側面は砥面になっていない。

玉類・石製品 (図版70-1, 第83図)

勾玉1, 用途不明石製品1の3点がある。

**勾玉** (1) は大溝支流2の第4層から出土した。うすにぶ緑色を呈す緑泥片岩を素材にしている。尾の先端を欠失するが、現存長15.0mm、尾部の幅4.3mm・厚さ3mm・頭部の幅6.1mm・厚さ1.7mmと頭部が扁平で、両面から穿たれた孔は直径1.7mmの大きさである。

**用途不明石製品** (3) は大溝支流1の第3層から出土した。光沢のある暗青灰色を呈す蚊紋岩に



第83図 玉類・石製品実測図 (1/1)

近い石墨黒雲母片岩を素材にしている。欠失部が大きく本来の形状は不明だが、幅15mm・厚さ4.3~5.5mmの蒲鉾形に近い形で片側面に斜方向の抉りがある。反対側の側面には、小規模な抉りのあった可能性はなきにしもあらずだが左右対称を考え難い。

#### 4. その他の遺構

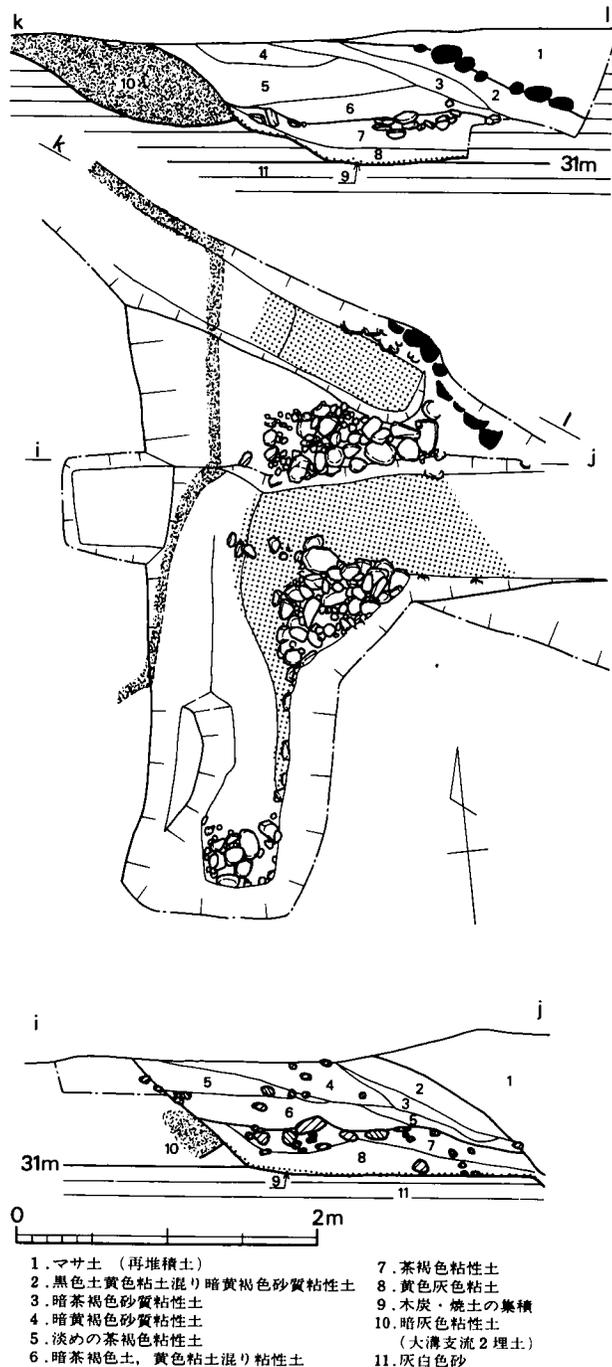
この項では、B地区調査時に実施した塚堂古墳前方部前縁の外濠外縁部の再調査の内容と、B地区及びB北地区・塚堂古墳周辺から出土した縄文土器、縄文時代に属す石器について触れることにする。

##### (1) 塚堂古墳前方部周濠前縁

(図版68-69, 第84図)

大溝及び大溝支流部分の調査において、塚堂古墳周溝との関連を検討する目的で、Fトレンチを延長して既に調査済の部分を調査した結果、前回調査の前方部外濠外縁ラインよりも更に西方にもう一つの外縁の存在することが判明した。

B地区調査において平面での遺構検出作業を行なったところ、塚堂古墳周溝部調査時の外濠に埋め戻されていた真砂土の部分



第84図 B地区検出の塚堂古墳前方部周溝前縁 (1/50)

よりも1～1.5m西側には、黄灰色系の色調をもつ砂質粘性土ないしは粘質砂の部分があり、これとの間に黄色粘土と暗茶褐色粘性土のまじった堆積土がみられることから、周濠外縁との間に何らかの遺構の存在することが予想された。このためCトレンチと、Dトレンチ・Fトレンチをそれぞれ延長して掘り下げることにしたが、Fトレンチの部分では前述の大溝支流1の延長と重なる部分になるため幅を広目にとって掘り下げた。

Cトレンチでは、新たに検出した遺構ラインとさほど大差なく真砂土が堆積しており、トレンチの北側で若干ズレを生じる程度で約20°の傾きで外縁が形成されていた。

Dトレンチでは、外縁の部分より約1.5mの位置に約50°の傾斜を有す掘り込みがあり、50cm程下がった位置から10°前後と緩傾斜になっている。この間の堆積土は色調の濃淡があるもののおおむねマンガンと黄色粘土が混った暗茶褐色の砂質を帯びた粘性土で礫も若干混じる。しかしこの場合の地山は粘質を帯びることがあっても色調の顕著に明るい砂であり、明確に区別しえる。更に肩から2.5m内側に入った床面の直上に黒色土を含む褐色の粘質がみられる。

Fトレンチでは、偶然にも前回調査時の断面観察トレンチと重なる位置に相当し、土層図作成の際の木杭と釘をも検出したが、この旧トレンチを若干掘り下げると共に西側にも広げることにした。この結果、(セクションは第8図CDと第84図ijが重なる) 円礫の集中する部分のあること、礫の上に黒色土と黄色粘土、暗茶褐色粘性土の混在する堆積土がみられること、更に円礫の集中する部分より下にまた黒色土・黄色粘土・暗黄褐色粘性土が堆積していて、下面に木炭・焼土が面をなし、部分的には木炭で黒色になった粘土の堆積や、床面の黄色粘質砂が火を受けてガチガチに焼けた部分のみられることが判明した。このため若干南側も広げて掘り下げたが、円礫の集中する部分は南側にも広がり、水平でやや西側に下り気味ながらも葦石同様の堆積を確認することができ、床面との間に20cm前後の高低差をもっているものの南側ではこの高低差が減少していることが確認できた。

Fトレンチの北側では、再堆積土の真砂土のすぐ下に円礫が並び、前回調査時の外縁葦石であることは容易に判断できたが、その直下に暗茶褐色の砂質粘性土が、更に礫混じりの黄色粘土が斜めに堆積して帯状をなしており、礫混じりの堆積土を挟んで、水平に近い円礫の集中する部分があり葦石と思えること、更にその下層の状況についてもFトレンチの南側部分での状況に全く同じであった。なおこのトレンチでは大溝支流1の延長である溝断面も観察できた。その関係については断面土層図k-1に示す通りだが、上部の整地層は既に削平されているもの下位の葦石とみられる円礫の集中する部分によって約33°の傾斜に切られていること、更に下位にみられる焼土面によっても約43°の傾斜で切られていることが理解しえる。ただ幅の狭いトレンチで床面に木炭の集積がみられたのみで、時期を決定しうる資料の出土もなかった。

D・Eトレンチでの状況からは、塚堂古墳の最終的な外濠外縁の形成までに少なくとも2段階の存在したことが想定される。すなわち、木炭の集積を伴う焼土面の形成される段階(必ら

ずしも周濠外縁形成に係る工程とすることには目下のところ証左がない)と、ほぼ水平に堆積する葺石状の円礫の形成される段階がそれである。大溝埋没後の整地面をも塚堂古墳築造に係る工程の一つとすれば、この2段階よりも工程が増加することになるろう。

## (2) 縄文土器 (図版70-2, 第35・36図)

住居跡や溝内の堆積土から弥生土器、土師器に混じって縄文土器が約150片ほど出土した。これらの土器片は小片が多く図示しうる資料に貧しいが、器形の知れる資料を26点図示する。なおこのうち2・4・9は塚堂古墳周溝調査時の外溝からの出土、1・26は古墳東地区出土資料である。

**西平式土器 (1・2)** 1は古墳東地区の排土から発見された口縁部破片。精製磨研の深鉢形土器で頸部から外反して広がる口縁は大きな山形口縁をなし、口縁端部はく字形に立ち上るが、屈曲に稜を有して断面三角形に近い形状になっている。波頂部上面には浅めのU字形押点が付される。口縁部文様帯では、縄文R $\left\{\frac{1}{2}\right\}$ を施文したあと、1条の沈線を口縁部屈折に沿って下位に、2条の平行沈線を口唇部に沿って上位に巡らせるため波頂部では三角形状の空間を生じている。また上位の平行沈線では沈線間の縄文を磨消しており、波頂部直下で2条共に途切れる。この波頂部直下の空間には3つの刺突押点を配して飾られるが、波状裾部にも刺突押点がある。当該資料ではこの裾部押点が1つ確認できるのだが、波頂部同様の小規模なものと考えたい。なお刺突押点の原体は腹足目貝類の殻頂部と推定できるが、波頂部直下の押点刺突時には右廻りの回転を加えて押点を広げている。

2は、精製磨研の深鉢形土器の頸部から肩部にかけての破片で1と同様の口縁部が続くと思われるが口径はかなり大きくなるだろう。くびれた肩部から胴部に向って広がる肩部に文様帯があり、縄文R $\left\{\frac{1}{2}\right\}$ 施文後頸部に沿った2条の平行沈線と、下位に長三角形の空間を生むように弧を描いた平行沈線を巡らせ、毎々の沈線間の縄文を磨消している。なお下位の沈線の内空間側の1条は浅く細い沈線で縄文の磨消もやや雑である。空間の広がった部分には短沈線による文様で飾られるが折損部のため形状は不明。1・2共に胎土に角閃石、石英粒を含むが2に多く含まれる。焼成は1より2がやや悪く、暗茶褐色を呈す。

**三万田式土器 (3)** 2号住埋土出土の精製磨研土器胴部破片。屈折部の上位に巡ると思われる凹線が2条みられる。胎土に角閃石・金雲母・長石・石英などを含み茶褐色に焼成される。

**御領式土器 (4)** 幅広の口縁部が丸味をもって内穹する精製磨研の深鉢形土器口縁部破片で、口縁部文様帯には3条の太い沈線が平行して巡る。胎土に角閃石・石英・褐色粒など砂粒を含み焼成が甘く、風化も相俟って器面は荒れている。

**広田式土器 (5)** やや幅広な口縁部が稜をもって内傾する深鉢形土器口縁部破片で、口縁部文様帯に3条の太目な沈線が巡る。胎土に角閃石・褐色粒などを含み甘い焼成で黄灰色を呈す。大溝支流2の第4層出土。

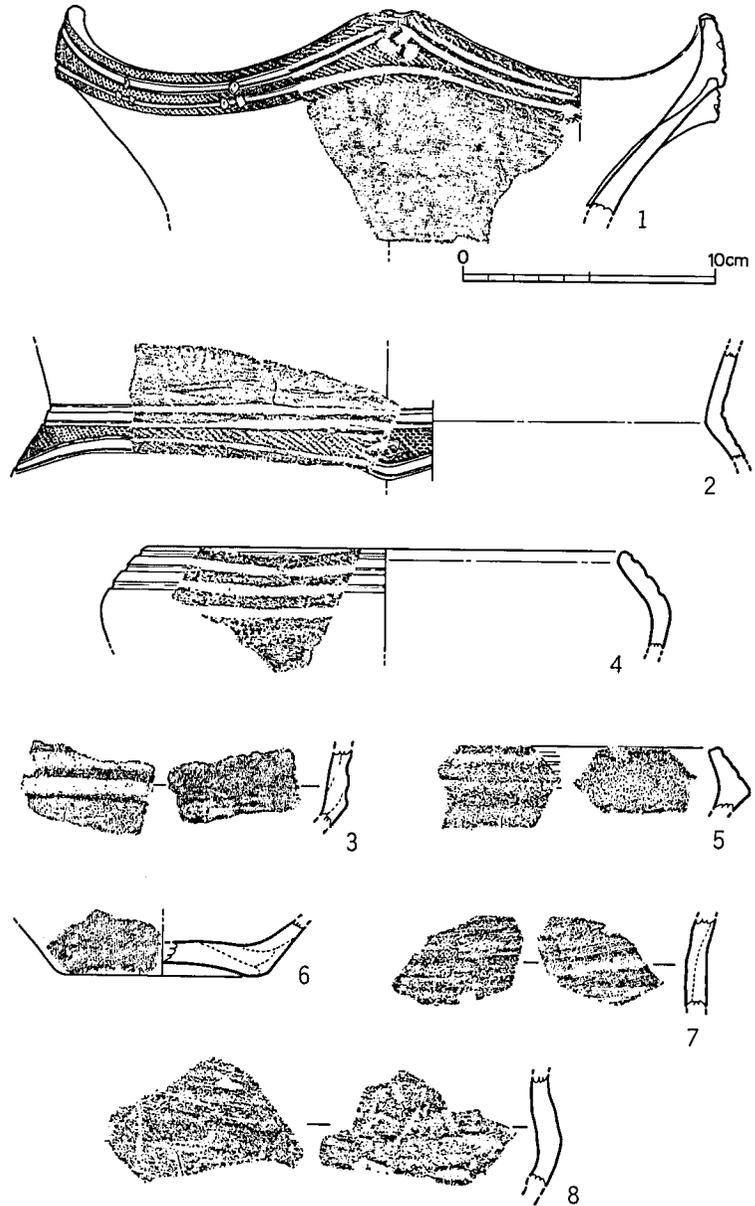
6は、B北地区溝の1トレンチ下層出土資料で精製の深鉢形土器底部破片。後期後半以降広田式迄の時期であろう。

粗製土器(7・8) 2点共大溝支流2の3層から出土した。7は、内外面共板状原体による

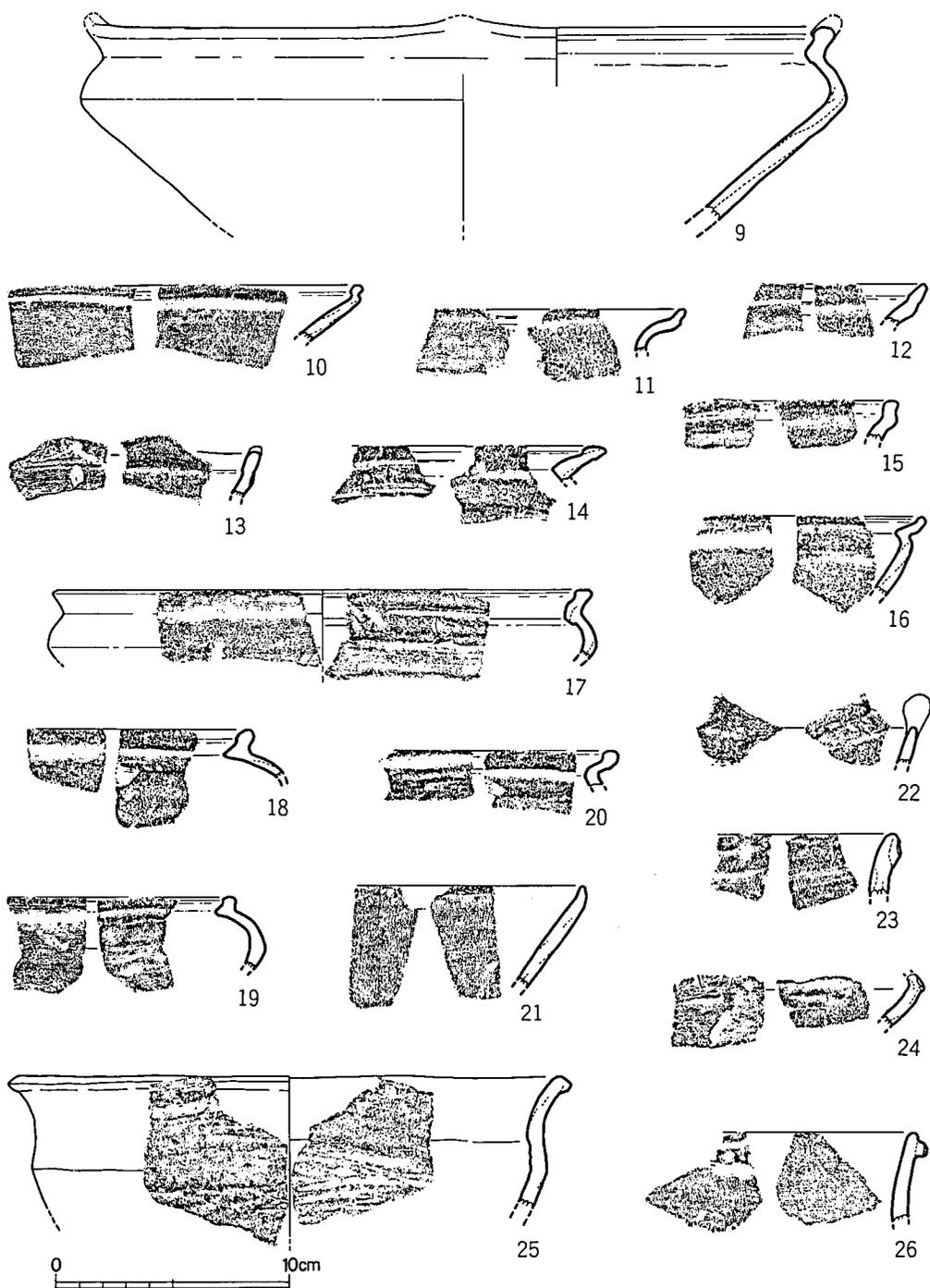
ヨコ方向ナデの条痕をもつ深鉢形土器破片で角閃石・金雲母・砂粒を含み黄灰色へ暗灰色の色調に焼成される。8は、胴部屈曲部破片で外面板状原体によるヨコ方向ナデ条痕、内面は指ナデで凹凸をもつ。胎土に角閃石・砂粒を多めに含み暗茶褐色内面暗灰色に焼成されている。

晩期中頃の土器

(9~25) 晩期前半以降後半にかけての土器を一括したが、精製土器の口縁部外面に沈線を有すものと、有さないものに大別することが可能であり、時期差を示すものと考えたい。外面に沈線を有すものとしては、10~15がある。10は、



第 85 図 B地区地出土縄文土器拓影①(1/3)



第 86 图 B地区地出土繩文土器拓影② (1/3)

B北地区溝の2トレンチ暗褐色土層出土資料で、精製磨研浅鉢の長めに広がる口縁部の上方に端部が屈折して付き外面に沈線が1条巡る。11は、精製磨研浅鉢の胴部から弯曲して広がる口縁部が伸びるように屈曲し、外面に浅い沈線を1条巡らす内面は緩やかである。口縁端部のこのような特徴は12～15にもみられるが、12～14は内面に低平なタガが付いたような形状をなし、13の波状口縁例では波頂部直下に押点が付される。12・14の外面沈線は段に近い。15は深鉢形土器の口縁部破片である。11・12・14は大溝支流2の第3層出土、13・15は1号住居跡埋土から出土した。胎土に精良な細砂のみ使われて焼成が甘いため灰色を呈す14以外は、細かめの砂粒・角閃石・金雲母などを含んでいる。

外面に沈線を有さない例では9・16～22がある。9は胴部が丸味をもって屈曲し、穿まった頸部から短く外反して口縁部に至るが、口縁部内面にわずかな凹みを有して立ち上る口唇部は丸くおさまる。低平な波状口縁をなすが波頂部を欠失しており不明だが低平な山形をなすと思われる。金雲母・角閃石などと若干2mm大の砂粒を含み茶褐色に焼成されている。20は同様の器形で、18・19は胴部の屈曲が誇張されると共に頸部内面の稜が大きい。16・17は短く屈折する頸部から口縁部がさほど広がらず、内面に段を残して口唇部が稜をもっておさまるもので、17はやや9に近い。21は底部から直線的に広がる胴部をもち、直接口縁部が屈折して立ち上る器形だが屈折はごくわずかである。22は椀形土器であろうか、口唇部に鱗状の突起を有す。16は小溝1溝底、17は1号住居跡埋土、18～20・22は大溝支流2の第3層・第4層、21は4号住居跡埋土から出土した。16・17は細かめの砂粒・角閃石・金雲母などを含み暗茶褐色に焼成される。18～22はより胎土が精良で、明るい色調に焼成されている。

23は小破片のための偶然かも知れないが、口縁部外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、やや上位に1条の浅い沈線と、小さな押点を施したもので、突帯状になる部分に刻み目はみられない。外面はナデ仕上げで内面には板状原体によるナデ条痕がみられる。細かめの砂粒・金雲母・角閃石などを含む胎土で暗青灰色に焼成されている。

24は胴部屈折部破片で、肩部を押えた調整が優って下方にはみ出し気味になっており、肩に小さな押点が付されている。23・24共に大溝支流2の第3層出土。

25は、B北地区溝の2トレンチ暗褐色土層出土の粗製深鉢で稜をもつ胴部から緩やかに外反して口縁部が広がる。口唇部上面が平坦に面取りされて断面三角形に外側へ肥厚しており、肥厚の下端に粘土の継ぎ目がみられるので貼り付け突帯を形成しているものといえよう。突帯には刻み目はみられない。外面は板状原体によるヨコ方向のナデ、胴下半は粗雑でヨコ方向にカキナデたような条痕のまま、内面は頸部以上がヨコナデ、以下がヨコ方向と斜め右上りの条痕。胎土に砂粒・角閃石・金雲母・石英を含み良好な焼成で外面暗茶褐色・内面黒色を呈す。

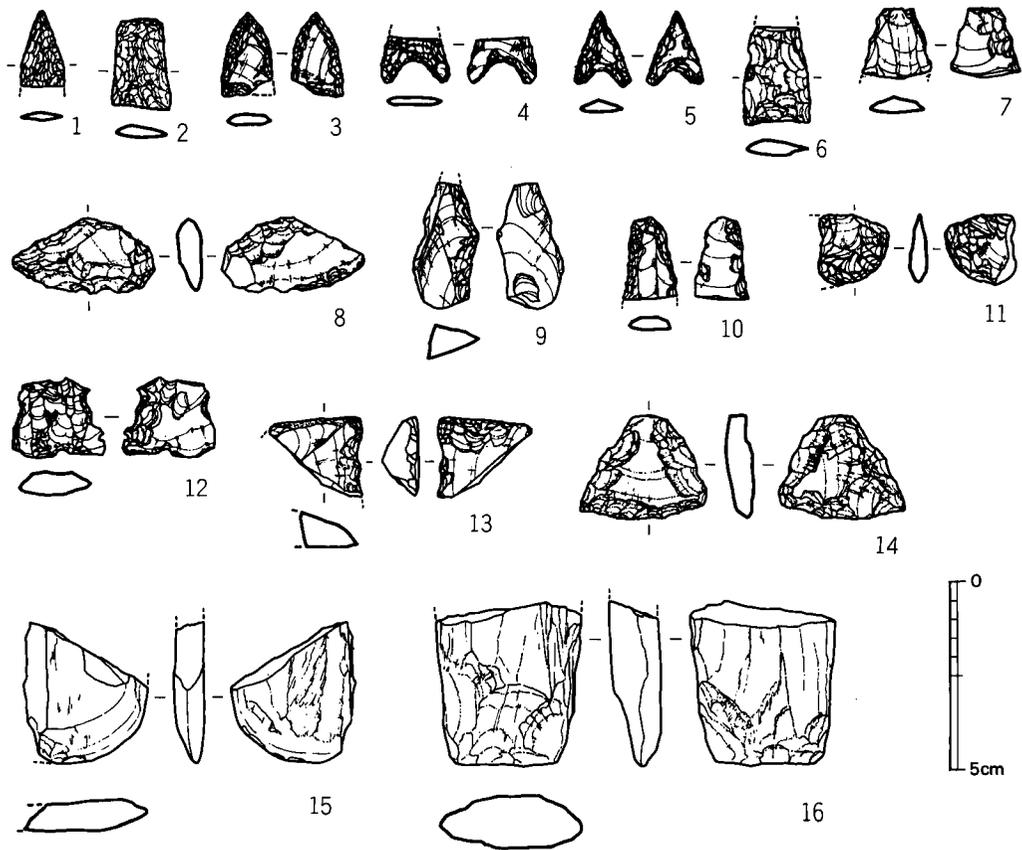
**夜臼式土器** (26) 古墳東地区溝1出土の資料で、口縁部の下に巡る貼り付け突帯に右上りの刻み目が付される。内外面共にヨコナデ調整で刻み目はさほど大きくはなく、左側斜め上か

ら刻まれる。胎土に花崗岩質の砂礫を角閃石・金雲母を含み暗灰色に焼成される。

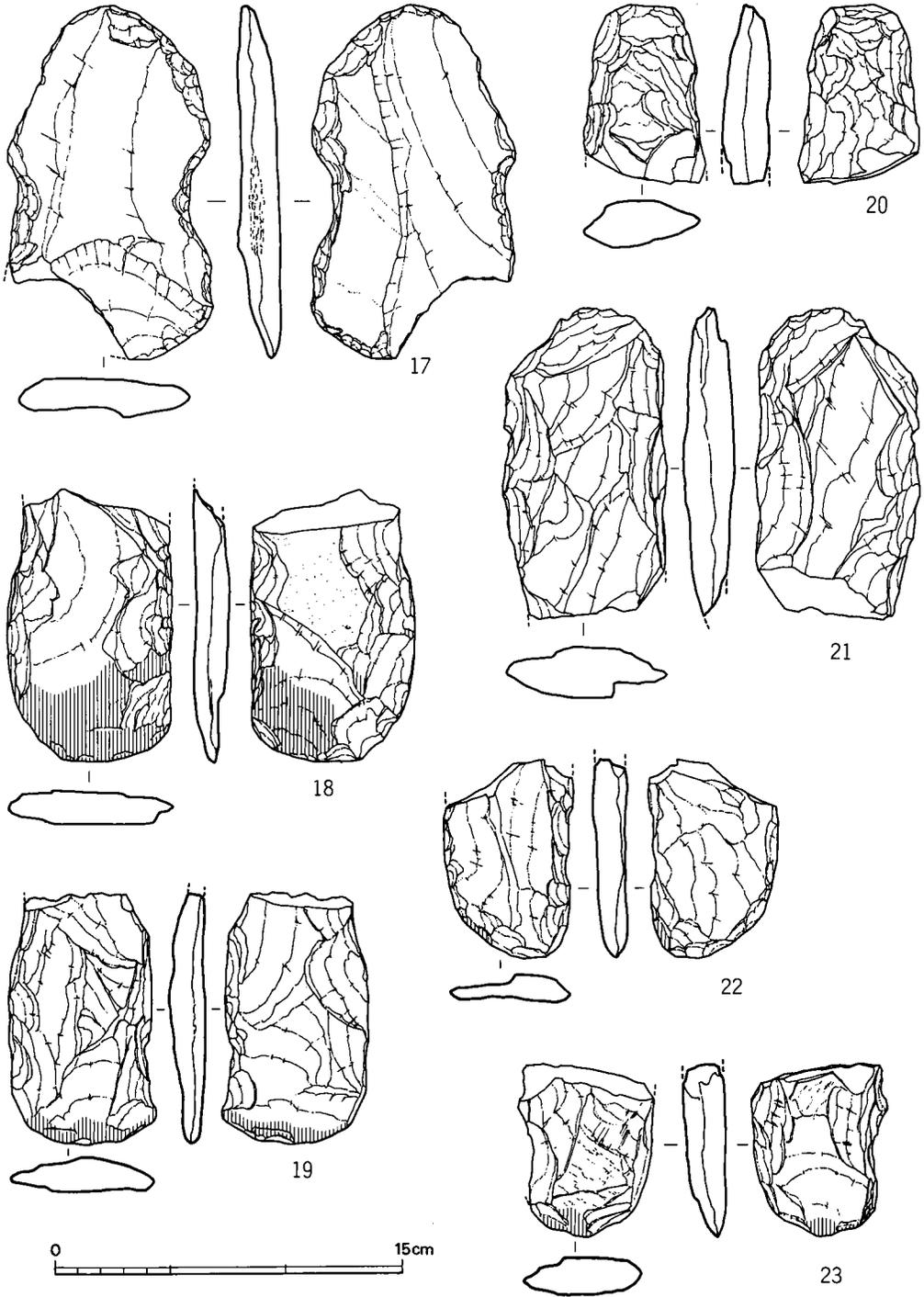
(3) 縄文時代の石器 (図版71, 第87~89図, 表3)

縄文時代に属すと思われる石器を26点図示する。内訳は、打製石鏃6, 削器・搔器類8, 磨製石斧1, 打製石斧10, 打製石庖丁1で、計測値は表に示す。この他に図示しない資料では、削器類片と思われる黒曜石小片若干, 打製石斧片と思われる緑泥片岩などの破片数点と黒曜石石屑多数がある。

打製石鏃 (1~6) 石材別には、安山岩2, 黒色黒曜石2, 姫島産黒曜石1, チャート1が内訳である。形態的には、平基式(B), 凹基式(C)があり凸基式はない。製作方法では、不定形剥片を素材として全面に調整剥離の及ぶもの(1 a類), 主要剥離面を残すもの(1 b類), 石刃状剥片を素材として打面側を鏃の基部に調整するもの(2 b類)がみられる。安山岩, チャート製B 1 a類, 黒曜石製がB 1 b・C 2 b類に集中する傾向がある。



第 87 図 縄文時代の石器実測図① (1/2)



第 88 図 縄文時代の石器実測図② (1/3)

削器・搔器類（7～14） 7・9・10は石刃状剥片の側縁を調整して刃部としたもの、12は短かな剥片の側縁を刃部としているもの、むしろU-freと称した方が適当な例である。8は安山岩横長剥片の打面を調整して握り易くし、先端の主要剥離面側を調整して刃部にしている。11は半欠品だがサイドブレードと称す石器に似ており、13は搔器、14はつまみの不明瞭な石匙であろう。

磨製石斧（15） 刃部破片で全体の形状は不明だが扁平で刃部幅5cm程度になると思われる。

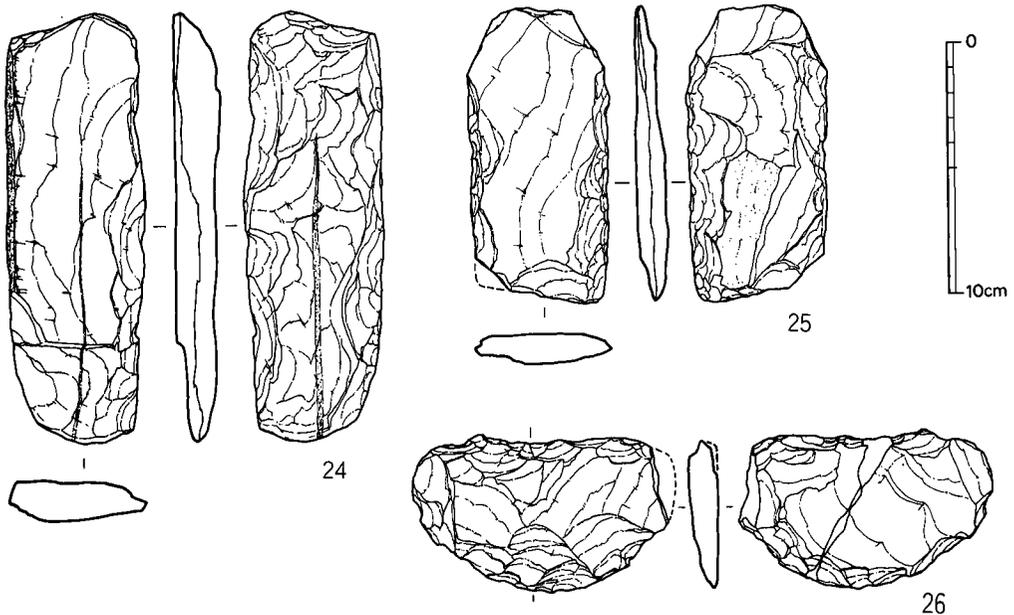
打製石斧（16～25） 16は刃部破片で刃部幅が3cm程度と幅狭の例で、刃部幅が4～5cm程度になる例は22・24・25があり、横剥ぎの素材を用いて扁平である。21は肉厚な体部を有し、23も肉厚気味、18・19は刃部幅6cm以上を有し体部も扁平。これらはいずれも短冊形に含まれる。

17は長さ15.3・幅8.8cmで比較的扁平な体部を有し、胴部両側縁に抉りの入る分銅形に近い形態をもつ。

20は頭部破片だが肉厚で刃部側に向ってやや幅広になるように撥形に近いタイプになるのかも知れない。

打製石庖丁（26） 雲母を多めに含む緑泥片岩の扁平な素材の周縁を調整加工し半月形の刃部を形成しており、重量約90gとやや重味がある。

これらの石器は、1号住居跡・大溝支流2と大溝の交差するEトレンチ、B北地区2トレンチなどに集中して出土している。縄文土器の出土地点でも石器と同様の集中を示しており、時



第 89 図 縄文時代の石器実測図③（1/3）

期的には晩期初頭～後半とりわけ晩期中頃を中心とした時期が多い。溝や住居跡埋土に二次的に堆積した資料とはいえ殊に1号住居跡の例などは、住居跡の建て替えを考慮に入れば、住居跡構築の際の地山に含まれていた可能性もあり、この周辺に遺構・遺物のまとまりを想定することもあながち無理とはいえないであろう。(小池)

表3 B区・B北地区出土の縄文時代石器計測表

(単位cm, g, ( )は現存値)

No	地 点	層 序	石 質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	種 類
1	B 小溝1	埋土	赤色チャート	2.05	1117	0.23	0.5	打製石鏃 B1a
2	B 大溝 Eトレ	3	安山岩	(2.41)	1.55	0.35	(1.65)	" B1a
3	B 支流2	4	黒曜石	2.26	1.36	0.32	(1.0)	" B1b
4	B 南東隅	上層	姫島産黒曜石	(1.23)	1.80	0.22	(0.4)	" C2b
5	B 1号住	カマド袖	黒曜石	(2.02)	(1.51)	0.32	(0.5)	" C2b
6	B 1号住	埋土	安山岩	(2.57)	1.75	0.47	(2.4)	" B1a
7	B 1号住	埋土	黒曜石	(1.85)	(1.86)	0.43	(1.35)	削 器
8	B 1号住	埋土	安山岩	3.75	2.02	0.65	5.0	"
9	B 南東隅	上層	黒曜石	(3.85)	1.72	0.82	(4.2)	"
10	B 支流2	2	黒曜石	(2.20)	(1.41)	0.34	(1.4)	"
11	B 大溝 Eトレ	3	黒曜石	(1.85)	(1.9)	0.46	(1.7)	"
12	B 大溝 Cトレ	1	黒曜石	2.16	2.40	0.63	3.3	"
13	B北 溝 3トレ	黒色土	黒曜石	(2.50)	(2.16)	(1.49)	(3.4)	搔 器
14	B北 溝 2トレ	暗茶褐色土	赤色チャート	3.36	2.75	0.76	6.8	石 匙
15	B 大溝 Eトレ	2	蛇紋岩質	(3.76)	(3.30)	0.8	(12.9)	磨製石斧
16	B 交流1 BC	3	角閃片岩	(4.38)	(3.83)	1.39	(32.9)	打製石斧
17	B 下トレンチ	10'	角閃安山岩	15.3	(8.8)	1.85	(256)	"
18	B 南東隅	上層	輝岩	(1.85)	7.15	1.50	(193)	"
19	B 1号住	埋土	緑簾片岩	(11.0)	6.32	1.60	(140)	"
20	B 支流1 Cトレ	4	緑簾片岩	(7.75)	(5.25)	2.05	(93)	"
21	B 南西部	上層	緑簾片岩	(13.55)	7.1	2.2	(246)	"
22	B 大溝 AB	3	緑簾片岩	(8.5)	5.66	1.55	(76)	"
23	B 小溝1	埋土	緑泥片岩	(7.52)	(5.93)	1.65	(10.5)	"
24	B北 溝 3トレ	黒色土(下)	緑簾片岩	17.1	5.52	1.65	228	"
25	B北 溝 2トレ	黒色土(下)	緑泥片岩	11.85	5.61	1.2	(113)	"
26	B北 溝 2トレ	暗茶褐色土	緑泥片岩	(10.1)	6.3	1.2	(88.4)	打製石庖丁

### 第3節 小 結

ここでは、遺構の切り合い関係をまとめ、大略の時期説明を行う。

住居跡（以下住と略）・掘立構建物跡（同掘立と略）・溝等における切り合い関係を（古）→（新）で示すとつぎのとおりである。

4号住→1号掘立→1号住古→2号住新。2号住古→2号住新。2号住→2号掘立。

支流1を切るものは、大溝・塚堂古墳前方部前縁外濠・小溝1・小溝2。支流2→大溝。

また、各遺構の出土状態を示せばつぎのとおりである。

1号住の支柱穴主軸とカマドの方向が、旧出では南北方向・新出では東西方向と思なるが、出土遺物と張り床の状態から、古い住居を改築したことが明らかである。また、張り床上から出土した完形に近い土器は、甑の出土位置からしても、新出住居供伴資料と言えよう。

2号住は、出土遺物が少ないが、北壁に特異な屋内高床張り出し部を検出し、この張り出し部と東側の旧出住居の床面の高さの特徴から、両者の時期は近接し、おそらく改築が行われたものであろうと考えられる。

3号住は、遺物の出土が少ないが、西壁カマドを検出し、この方向は1号住新のあり方と同様である。しかし、支柱穴による主軸方向は、1号住新がN-80°-W・3号住がN-4°-Eと大きく異なっている。

1号～3号掘立は、いずれも出土土器は細片であるが、タタキ・ヘラケズリ痕を認める破片や陶質土器・須恵器片は認められていない。2号掘立の主軸と3号住の壁の方向は大略等しいが、3号住西壁との間隔から、その共存は無理であろう。

小溝1～3も、同様に遺物の出土は少ないが、小溝3の西側の道路を界したA地区東端で、弥生時代後期の住居跡を検出している。小溝2は、西半部の住居跡・掘立柱建物跡のなかで、2号・3号住、2・3号掘立の方向と大略直方あるいは平行する南北方向に直線的に走っている。

最後に、出土遺物の特徴の大略を示すとつぎのとおりである。なお、大溝・支流1・支流2については、外濠やB北地区トレンチ出土遺物と共に、第4章にて詳しく述べる。

4号住出土の土器は、弥生時代後期前半に近い時期で、底部も平坦であるが、甕にやや新しい口縁部の特徴も認められる。

1号住新出土の完形に近い土器の中に、布留式最終末の影響を残すものが認められる。

## 第5章 B北地区の調査

第1節 はじめに

第2節 遺構と遺物

第3節 小 結

## 第5章 B北地区の調査

### 第1節 はじめに

B北地区は、B地区の北側水田で、圃場整備の範囲ではあるがB地区に検出された溝状遺構などに連続する遺構が検出されたので報告することにする。

B北地区は、B地区調査中の昭和56年9月8日に圃場整備事業に係る工事が実施され、40cm前後削平されたが、この際、南北方向に走る溝があり、土器片が多数散乱して発見された。この溝は、B地区大溝の流路の延長線上に位置するため関係者と協議し、昭和56年9月14日から18日までの間、3ヶ所にトレンチを設定して調査した。

この溝は約33m続いていたが、その先では激しく削平したあとの攪乱がひどく手をつけることができなかつた。なおこの溝の東側に塚堂古墳前方部外濠外縁のラインが、礫の部分とマンガン・黄色粘土まじり暗黄褐色粘性土の部分との境で明瞭に識別できた。この外濠外縁については平面図にその位置を記し、標高を付記するに留めた。B地区の大溝及び大溝支流2に続くと思われる溝と周濠とは北端部で周濠が後出する状況に検出され、標高は31.67m位であった。またB地区大溝の底面が大略31.60m位で、当該地区の溝ではその大半が削平されている可能性もあったので、当該地区では「溝」という名称を付けるに留めたが、以下「B北溝」と呼称することにしたい。

### 第2節 遺構と遺物

B北溝（図版72・73、第68・69図）

標高31.60～31.67m位に削平された円礫面に幅4.5～5.0m、長さ約33mで検出された溝でやや蛇行するもののほぼ真北に対して12°程東に振った方向に走る。全体としては平面では溝の中程2～3m幅に黒っぽい色調の堆積土、その両側に茶褐色を帯びた色調の堆積土が帯状に伸びているが上部にはブルドーザーの移動によって原位置を失った黄灰色味のある堆積土もかなりみられた。

このうち南端の壁面に沿って1トレンチ、南端から約15mの位置に2トレンチ、約30mの位置に3トレンチをそれぞれ1.5m幅で設定して掘り下げた。他の部分では上面に露呈している土器片を採集した。

各トレンチの断面土層図は平面図と共に第69図に含めたが、m-nは1トレンチ南壁、o-pは2トレンチ北壁、q-rが3トレンチ北壁の状況である。40~42の黒色土はB地区の大溝1~3層に相当、43・43'の黒色土は大溝支流2の第3層、44・45の暗茶褐色砂質粘性土は大溝支流2の第4層におおむね相当する。また3トレンチ北壁での37・38は古墳外濠埋土、39は黄褐色粘土の整地層に相当する。

1トレンチでは42・44層からの遺物出土があり、42層出土を黒色土出土、44層出土を暗茶褐色土出土土器として扱った。

2トレンチでは、42・42'層出土を黒色土出土、43・43'層は礫が多く混じっており、この層出土のものを黒色土・暗茶褐色土境出土、44・45層出土を暗茶褐色土出土とした。46層からは遺物の出土はなかった。

3トレンチでは、41・42層出土を黒色土出土、43・44層出土を黒色土下層出土として取り扱った。45・45'・46層からは遺物の出土はなかった。

以下の記述では、移動した可能性のある例を1層、黒色土を2層、黒色土下層と黒色土・暗茶褐色土境を3層、暗茶褐色土を4層と称すことにしたい。

#### (1) 1トレンチ出土土器 (第90図)

1トレンチからの出土土器量は少なく、図示しうる資料も少ない。また暗茶褐色土出土土器も下位出土のもので1点図示しうるのみで、1~12が2層出土、13が4層出土である。

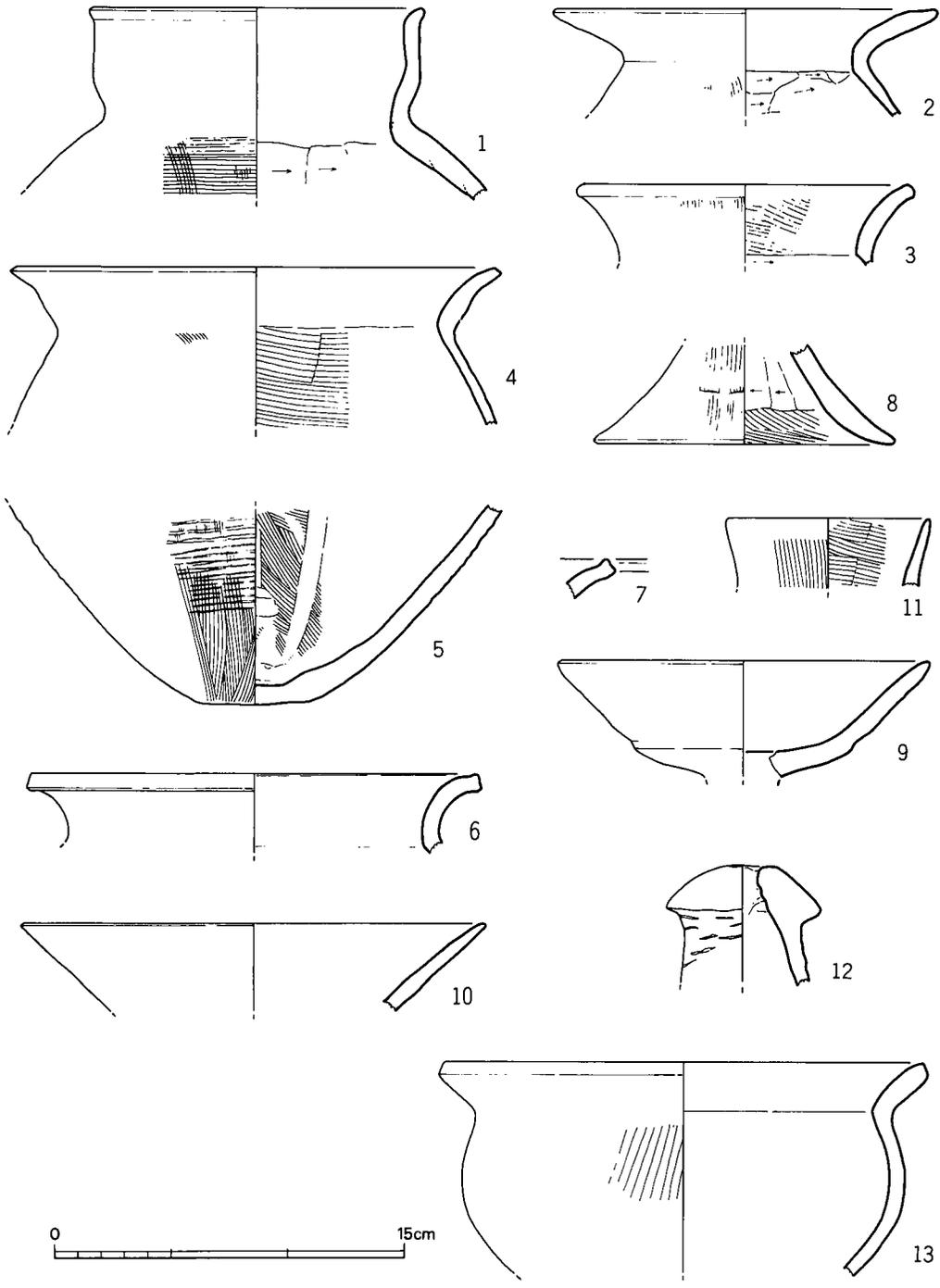
**壺 (1・2)** 1は頸部から若干外反した口縁部がゆるやかに立ち上がって二重口縁を形成するもので、口縁端部は僅かに外反して丸味をもっておさまる。いわゆる二重口縁タイプの中では極めて屈折の鈍いものである。口縁部では外面にハケを施したあと全体にヨコナデ調整をし、肩部外面は縦方向のハケメをまばらに施したあと横方向にハケメを施している。頸部内面直下にまでヘラケズリが及び僅かに稜を有す。器壁は厚い。

2は、ヨコナデ調整される口縁部が著しく外反して開くもので、口縁内面はほぼ完全に上を向くが凹み気味になり、端部は丸くおさまる。肩部外面はヨコナデされるがハケメが若干残り、内面の頸部直下までヘラケズリが及んで器壁はかなり薄くなっている。

**甕 (3~7)** 3は頸部内面までヘラケズリが及び屈折に明瞭な稜を有すが外弯して口縁部が広がり端部に丸味をもつもので肩部以下は不明。内外面共にハケを施したあとヨコナデしているもののハケメが残る。

4はやや稜をもって屈折する頸部から外弯気味の口縁部が広がり、ヨコナデ調整される口唇部の上面及び内面がやや凹み気味になっている。体部の内面はハケ原体でケズったような状態で、外面はタタキのあとハケ調整して更にヨコナデで消している。

5は底部破片で、ナデ調整の小さな底面を有し、胴下半の外面はタタキのあとハケ調整するが上位に至るほどタタキ痕がよく残り、内面はハケ調整のあと部分的にナデ調整を加えている。



第 90 図 溝出土土器実測図①, 1 トレンチ (1/3)

胴部での器壁厚は7mm前後を有す。

6はヨコナデ調整の外弯する口縁部を有し口唇部端部がやや凹み気味になり、頸部内面は風化しているものの明瞭な稜を有しており、ヘラケズリが及んでいると思われる。小破片で径についてはやや不確実。7も小破片で口径を復原しえないが、口唇部上面に摘み上げたような突起を有している。

**高杯**（8～10）8は脚裾部破片で、外面では縦方向のハケ調整でラップ状に広がるが、内面では上部でハケ原体によるケズリを下位は斜方向のハケメを施しており、ヨコナデの加わる端部は丸くおさまる。

9は杯部破片で、僅かに内弯気味の杯下半部を有し、鈍く屈折して直線的に開く杯上半部がつくもの。端部は丸くおさまる。器壁はやや厚い。

10も杯部破片だが、杯上半部のみで直線的に広がるが、内外面共に板状工具によるヨコナデで仕上げられ、器壁は薄めになっている。

**小形壺**（11）口縁部のみの破片で、内外面共ハケメが残り口唇部のみヨコナデされている。若干金雲母・角閃石・褐色粒を含むが精良な胎土で淡褐色に焼成されている。

**支脚**（12）下部を欠失しており全体の形状は不明だが、円錐形の頭部は傘状に張り出しており、体部には一度くびれてから広がる。頭部はナデられ、体部にはタタキ痕が残る。上面から1孔が穿たれる。

**鉢**（13）胴下半以下を欠失しており台付か否かの区別もつかない。扁球形の体部から頸部内面に稜を有して口縁が短く外反する。器面調整は風化のため不明だが、体部外面にハケメが、若干残り、ヨコナデと思われる口縁部はやや肉厚で口縁端部は面をなす。金雲母・角閃石などの細砂と花崗岩質の砂粒を含み淡めの茶褐色に焼成されている。

## (2) 2トレンチ出土土器（図版74～76、第91～96図）

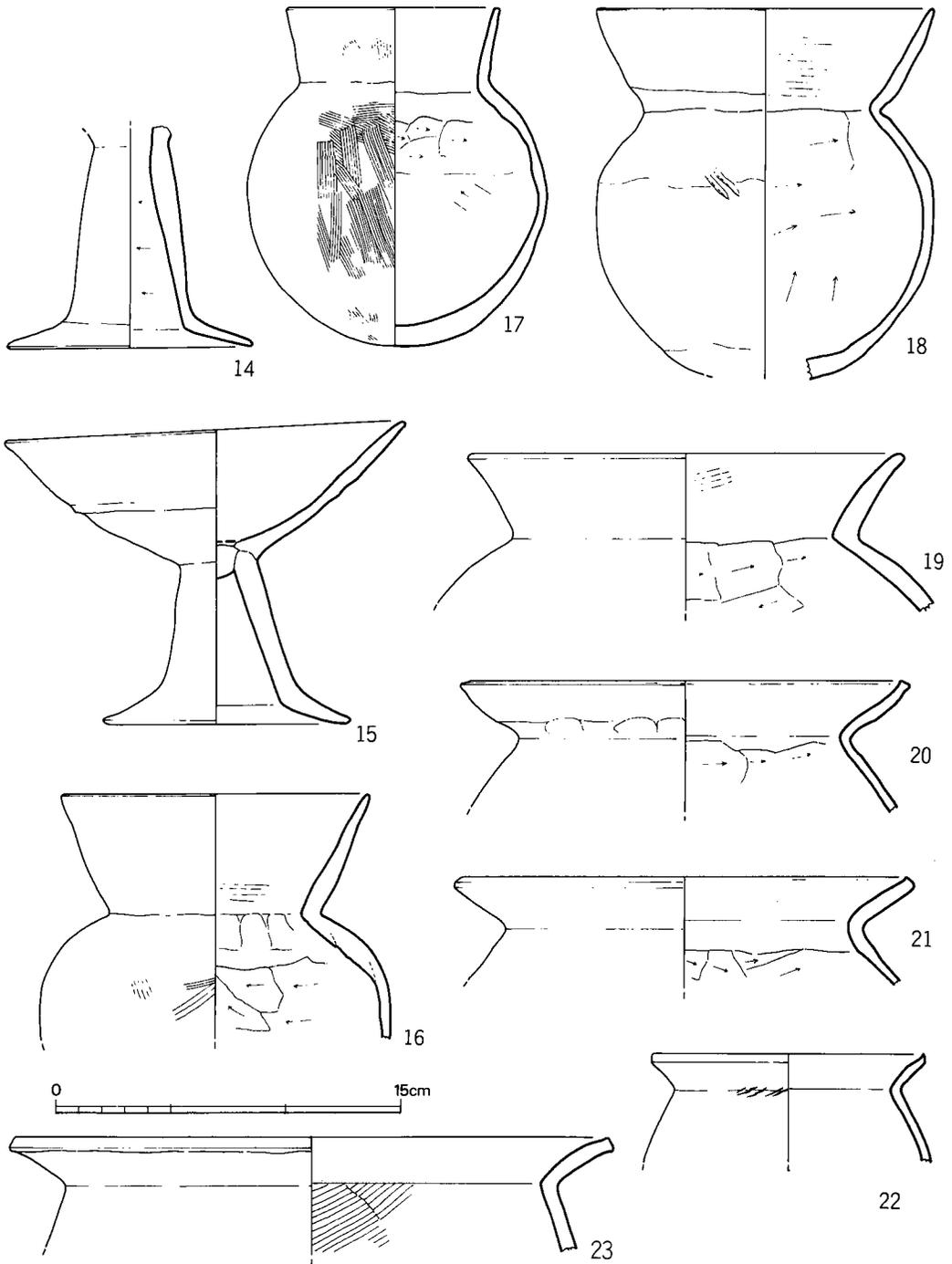
14～16が1層、17～35が2層、36～45が3層、46～68が4層出土資料である。

### 1層出土土器（第91図14～16）

**高杯**（14・15）14は杯部を欠失するが、裾部径10.7cm、現存高9.4cmを測る。脚筒部は細長くややエンタシスになるが裾部で大きく開き端部は踏ん張り気味になる。内面はヘラケズリされ、精良な胎土で堅緻に焼成されて、茶褐色を呈す。

15は、第2層出土の破片と接合して完形になったもので、口径17.2cm・器高12.9cm・裾部外径10.8cmを有す。杯部は底から口縁までほぼ直線的に開き、屈折部に相当する位置に凹凸を有すのみである。脚部とは挿入式に接合され、脚筒部は直線的で裾部が屈折して外反する。脚筒部内面にケズリの痕跡をみとめる他は磨滅して調整手法不明。

**中形壺**（16）胴下半を欠失するが、口径13.5cm・現存高10.6cmを有し、肩の張る球形胴に長めの口縁部が直線的に開く。口縁端部は僅かに外反気味となっており丸くおさまる。内面の体



第 91 図 溝出土土器実測図②, 2 トレンチ 1・2 層 (1/3)

部はヘラケズリ、頸部直下は指圧痕の残るナデ調整だが頸部に明瞭な稜を有す。

#### 2層出土土器（第91図17～第92図35）

壺・甗・高杯・小形丸底壺・椀などの器種があり、このうち24・25の高杯が並んで出土し、すぐ脇に17の壺、19の甗、30の小形丸底壺が伴って出土した。18の壺はやや離れるが同一レベル、26の高杯は幾分深い処から出土した。

**中形壺**（17・18）17は口径8.8cm・器高14.9cm・胴最大径13.1cmの中形壺で、球形胴に直立する口縁が付き、口唇部上面はやや面をなす。外面はハケ調整で、内面の胴上半にヘラケズリ痕の残る他はナデ若しくはヨコナデ調整されている。

18は底部を欠くが復原口径14.5cm・胴最大径14.6cm・現存高16cmの中形壺、やや肩の張る球形胴でくびれた頸部から僅かに内弯気味の口縁部が開く、体部内面にヘラケズリが施され、頸部内面にやや稜を有し、口縁部内面はヨコ方向にハケメ原体によるナデが施される。外面はヨコナデ及びナデ調整されるが一部にタタキ痕が残る。

**甗**（19～23）いずれも口縁部破片で全体の形状は不明。19は頸部がくの字に屈折して口縁部が外反するもので、胴部はかなり脹らむと思われ、壺との明確な区別をし難い例である。頸部内面までヘラケズリが及び明瞭な稜を有す。

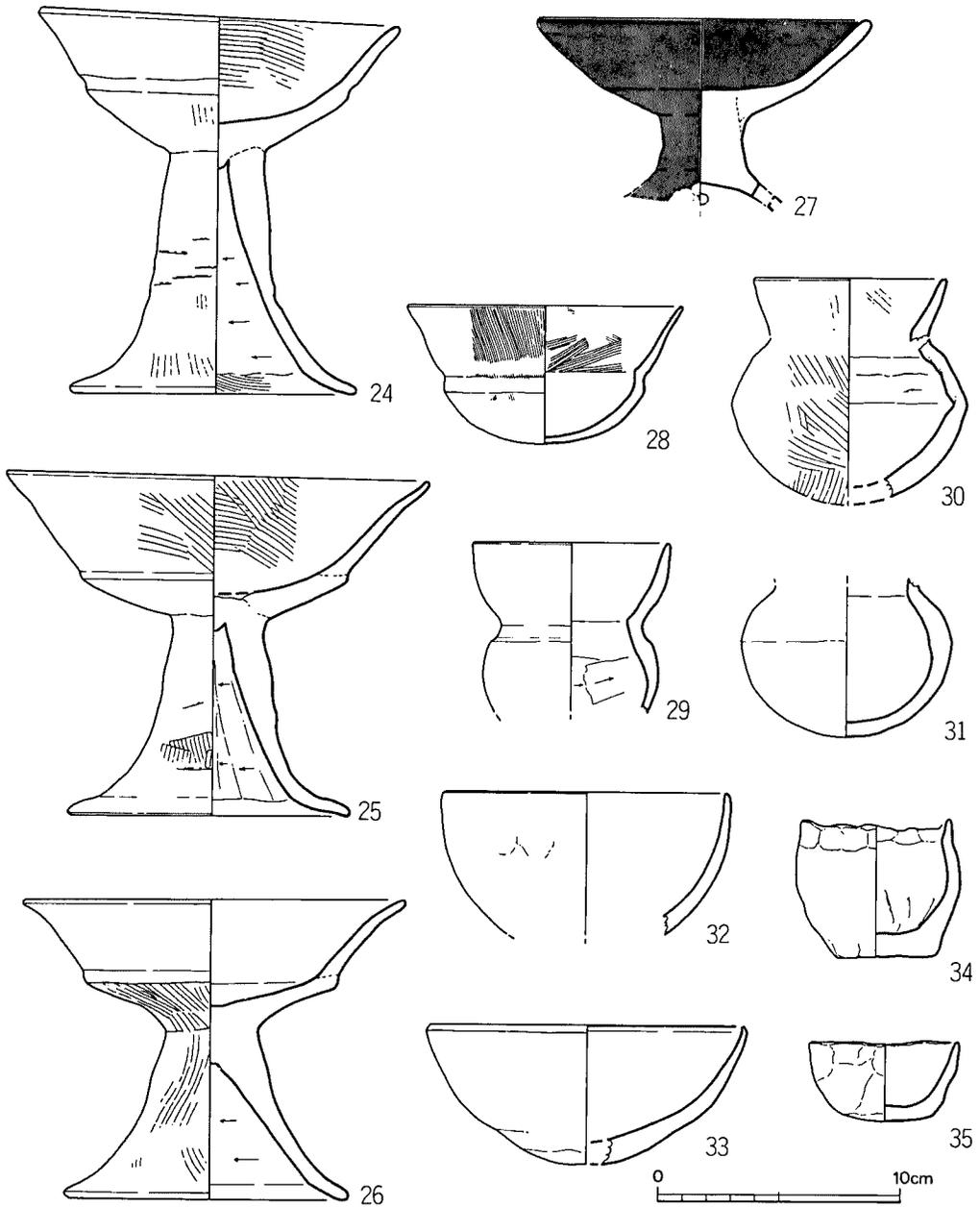
20～22は外来系の甗で器壁は極めて薄い。20は頸部内面の直下までヘラケズリが及び、鋭く屈折して外反する口縁は若干内弯気味で、口唇部上面に低く摘み上げたような突出を有す。21では内面のヘラケズリがやや下位までで、頸部は丸く屈折してヨコナデの口縁部が外反する。口唇部上面の内側を若干摘み上げるがやや鈍い。

22は復原口径11.8cmの小型のものだが、体部内外面共ナデ調整され、ヨコナデで外反する口縁部は頸部に稜を有して屈折している。口縁端部は上方に摘み上げられて内面が若干凹み気味になる。頸部外面にタタキ痕が残る。

23は頸部内面までハケメが及び、頸部がくの字に屈折して口縁部が外反する。口唇端部の上面と内面は僅かに凹む。

**高杯**（24～27）24は器高15.7cm・杯部口径14.6cm・脚裾部外径11.8cmのほぼ完形の高杯で、脚部高が10cmを占める。杯部は下半が内弯気味で上半は外反するが境目の屈折は純く、屈折部の段というよりもむしろ凹線をめぐらせたような形状になっている。脚筒部は細長く伸びて裾部は広がる。脚部の外面にはハケメが施され、ハケ原体と思われる木口圧痕がタタキ痕のように残る。脚筒部内面はヘラケズリ、脚裾部内面はハケメが施され、ヨコナデされる裾端部は丸くおさまる。杯部では杯上半部内面にヨコ方向のハケメが残る他はヨコナデ及びナデ調整で、脚部とは挿入式で接合されている。

25は、口径17.3cm・器高14.1cm・脚裾部外径11.7cm。内弯気味の杯下半部から稜をなして屈折する杯上半部は外反して広がるが端部で内弯気味におさまる。杯部が挿入される脚筒部は細



第 92 図 溝出土土器実測図③, 2 トレンチ 2 層 (1/3)

めに伸びて裾部で開くが端部で踏ん張り気味となる。脚筒部内面へラケズリ、外面ハケ調整で脚裾部は内外面共ヨコナデ、杯部もハケ調整されるが端部のみヨコナデが加わる。

26は口径15.6cm・器高12.5cm・裾部外径11.8cmの高杯で、杯部は直線的に伸びる下半部に外反する上半部が屈折して立ち上り角張る。脚部は短めながらも中実の部分を介して裾部へとラッパ状に開き、ヨコナデの加わる裾部端は更に少し開く。脚筒部内面はへラケズリが施され、杯下半部以下の外面にハケメが残る他は調整手法不明。

27は裾部を欠失するが、口径13.6cm・現存高7.7cmの高杯で全体に赤色顔料が塗布されている。杯部は平らな下半部と鈍く屈折して広がる上半部からなり、短い中実の柱状部を介して脚裾部が広がるが裾部には4つの円孔が穿たれる。全体にへラミガキ調整される。

小形丸底壺（28～31） 28は器壁の薄い小形丸底壺で、半球形の体部よりも口縁部が大きく開き、最大径が口縁部にあるいわゆる柑タイプのもの。口径11.2cm・器高5.8cm、体部外径8.4cm・体部高2.8cmを測る。口縁部の内外面に細かなハケメがみられ、体部はナデ消されている。

29は底部を欠うが、球形の体部に内弯する口縁部が長めに立ち上るもので、復原径ながら、口縁部外径8.4cm・体部外径7.4cm・現存高7.2cmを有し、体部の内面はへラケズリ、外面はナデ調整で口縁部は内外面共板状原体によるヨコナデ調整、31の体部内面も下半にへラケズリ痕がみられる。

30は、球形の体部に最大径があり、短く内弯気味に開く口縁部は低い。体部外面はハケ調整されて胴中程に軽い稜をもつ。口縁部内外面はハケメをヨコナデで消しており、体部内面はナデで仕上げている。

甗（32・33） 32の体部外面の下半はへラナデ状の痕跡が残り、上部では指頭圧痕のような面が残る。33は体部外面の下半にへラケズリ痕が残るが器壁は厚めで、上半は薄めになり口唇部は僅かに摘み上げたような面をもつ。

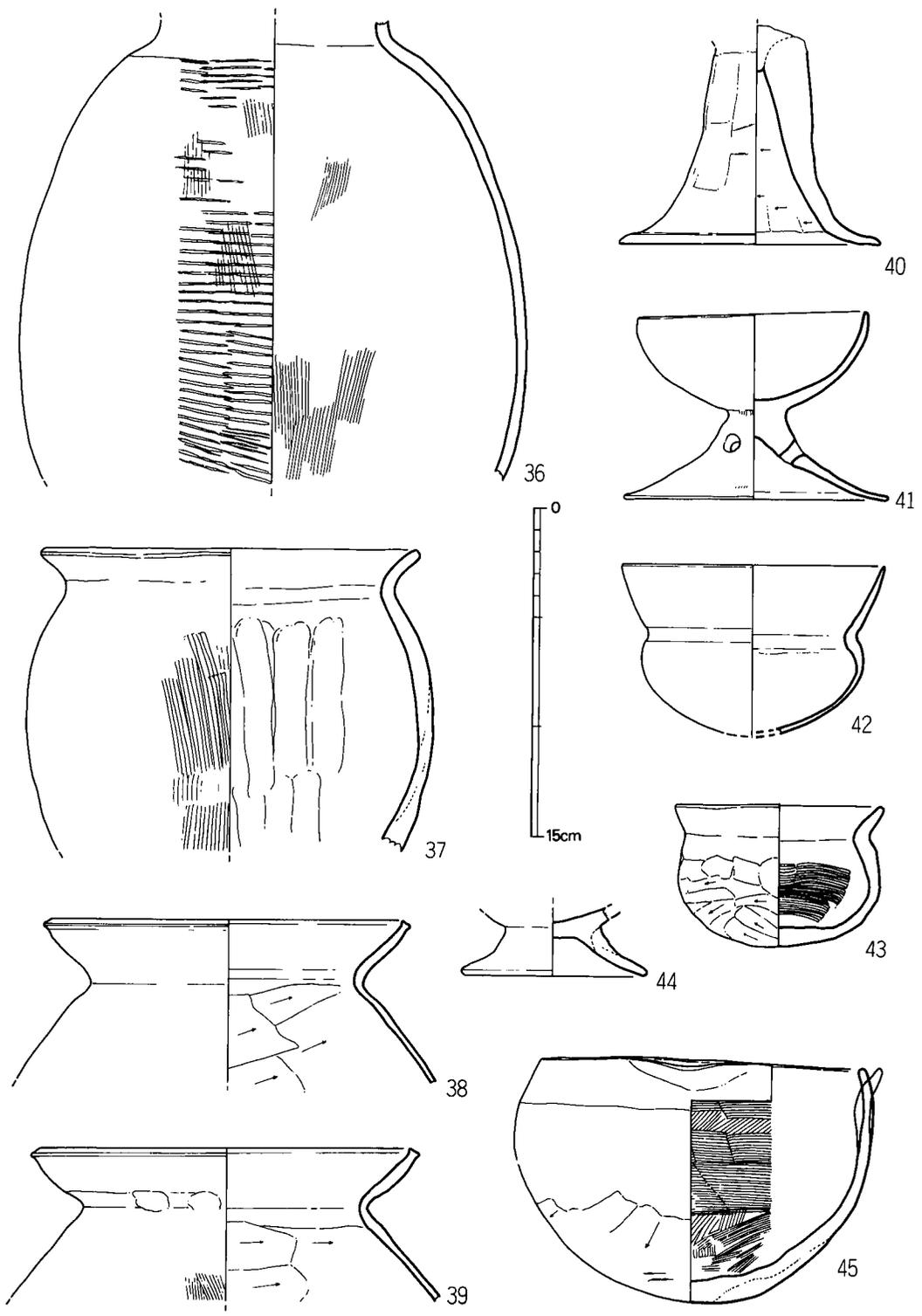
手捏土器（34・35） 34は平らな底部をもち、内面の下半は板状工具によるナデ調整が加わったためか木口圧痕が並ぶ。34に比して35の胎土は精良で全体にやや薄手に仕上げられている。

### 3層出土土器（第93図）

壺・甗・高杯・小形丸底壺・片口などの器種がある。このうち38・41・42・45がほぼ同一レベルで出土し、43のすぐ脇から鉄鉈が出土した。

壺（36） 口縁部・胴下半共に欠失するが長胴で頸部は細くくびれる。体部外面全体に横方向のタタキ整形痕を有し、タタキのあとに施される縦方向のハケメは部分的にのみである。内面には縦方向の細かいハケメがみられる。器壁はやや薄い。

甗（37～39） 37は頸部がゆるやかにくびれて口縁部が外反する甗で、体部外面は縦方向のハケメ、内面は縦方向の指ナデ痕が残り、頸部以上は内外面共、ナデとヨコナデ調整されている。復原口径16.8cm・現存高13.8cmの中形品としては、胴部の器壁が厚い。



第 93 図 溝出土土器実測図④, 2 トレンチ 3 層 (1/3)

38・39は、器壁の薄い甕で、2点共胴部に相当する破片が多数出土しているものの復原し得なかった。内面の頸部直下までへラケズリが及び頸部の屈折にさほど丸味をもたず、口縁部は幾分か内弯気味に伸びて、口唇端部の上面が僅かに摘み上げられて内側上方に低く突出する。外面は磨滅しているが、39の肩部に若干縦方向のハケメが残っており、破片資料ではハケメの交差する部分のものもある。

**高杯**（40・41）40の脚部破片は杯部が挿入されるタイプで、脚筒部が細めに伸びて裾部は外反する。脚筒部内面はへラケズリで下位の器壁が薄くなる。ヨコナデされる裾部は端部が若干踏ん張り気味にまとめられる。脚筒部外面はハケ原体の木口圧痕が残る。

41は杯部に屈折のないもので、器高8.5cm・杯部口径10.3cm・杯部内径3.9cm・裾部径12cmを測る。杯部は浅い半球形を呈し内外面共へラミガキされる。短い柱状部から裾部に向って大きく開き、裾部のやや上位に3孔が穿たれる。脚部内外面共にハケメのあとをナデ消している。

**小形丸底壺**（42・43）42は口縁部に最大径のあるいわゆる「坩」タイプのもので、体部外径10.1cm・口縁部外径12cm、口縁部高と体部高の比は2：3になる。器壁は薄く内外面共へラミガキで仕上げられている。

43は器壁が厚く、扁球形体部に短く外反する口縁部が付くもので、体部外面にへラケズリ、体部内面にハケ調整を施して頸部以上の内外面はヨコナデ調整されている。口径9.2cm・器高6.5cm。比較的精良な胎土で堅緻に焼成されている。

**脚台**（44）体部の形状は不明だが器壁は薄く、脚台は短く広がり裾部は踏ん張り気味にまとまる。

**片口**（45）口径14.6cm・器高11.1cmの、口縁部の内傾する半球形丸底の椀形を呈し、一方に片口が付く。外面は下半にへラケズリ痕が残る、他はナデ調整、内面は全体にハケメが施される。

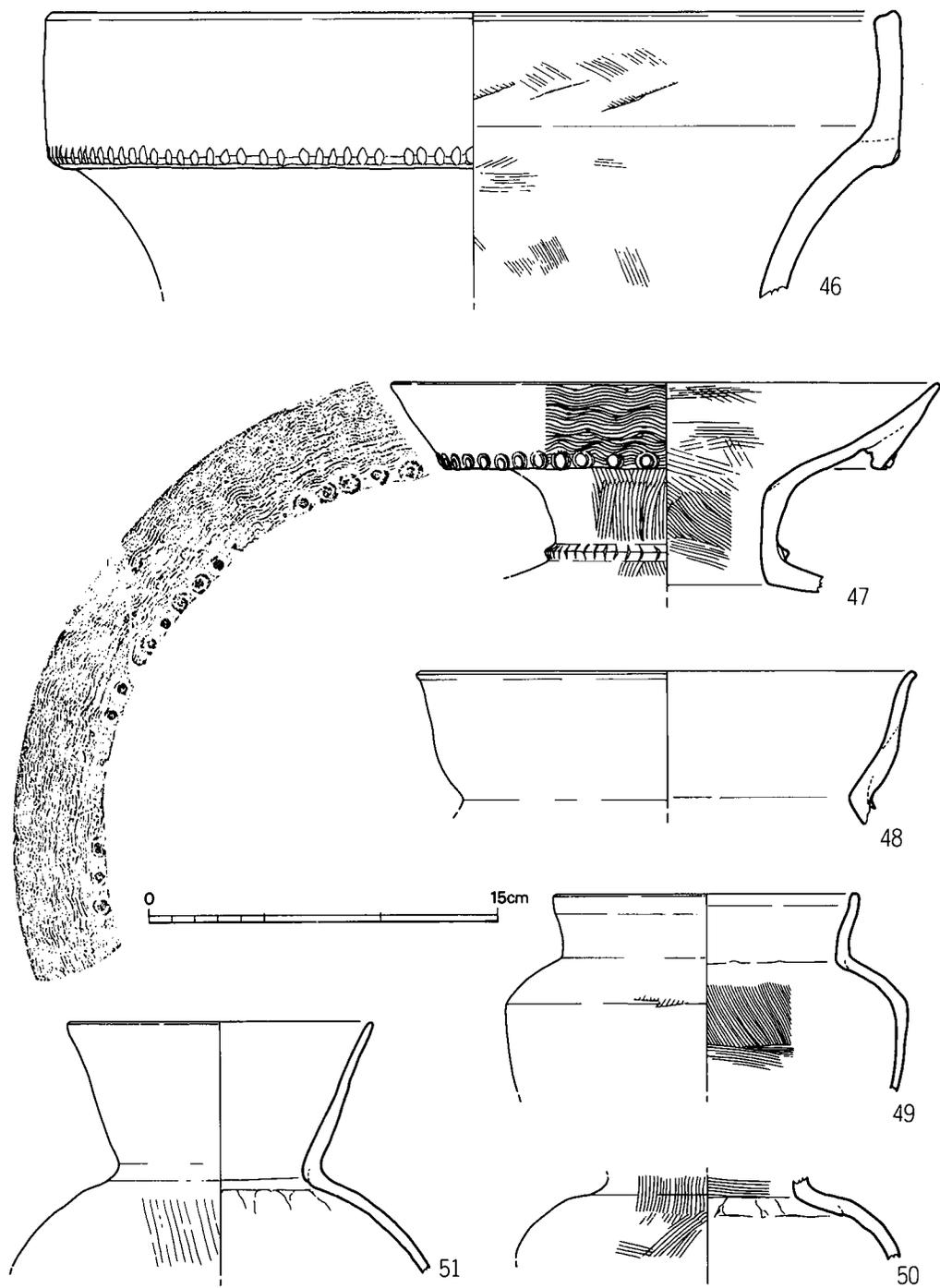
#### 4層出土土器（第94～97図）

壺・甕・高杯・椀・鉢の器種がある。このうち48の壺・52・54の甕、61の高杯はやや上部から出土し、50・51・57の壺、53の甕、60の高杯・65の椀は下部から出土した。

**壺**（46～51・57～59）46は複合口縁壺の破片で外反する疑口縁の上に直立する口縁部が付く。口唇部上面と外面が若干凹み気味で、屈折部にはキザミが施される。内面はハケメを施したあとヨコナデを加えている。

47は二重口縁壺で、頸部で直立した口縁が大きく開き、下方に口縁部拡張をもつ。口縁部文様帯の全面に連続反転による櫛描文を描き、下端に円形浮文を貼り付けて飾る。文様帯以外の外面及び内面はハケメ調整されており、頸部に貼りつけられた三角凸帯にはキザミがある。

48の口縁部は内弯気味に立ち上り端部で僅かに外反して、口唇部上面は面をなす。50は頸部から肩部にかけての破片で、頸部内面に横方向のハケメが施され、肩部内面はナデ、外面はハケメが施される。49は体部が稜をもって張る肩をもち、窄まった頸部から直立する口縁部が端部



第 94 図 溝出土土器実測図⑤, 2 トレンチ 4 層 (1/3)

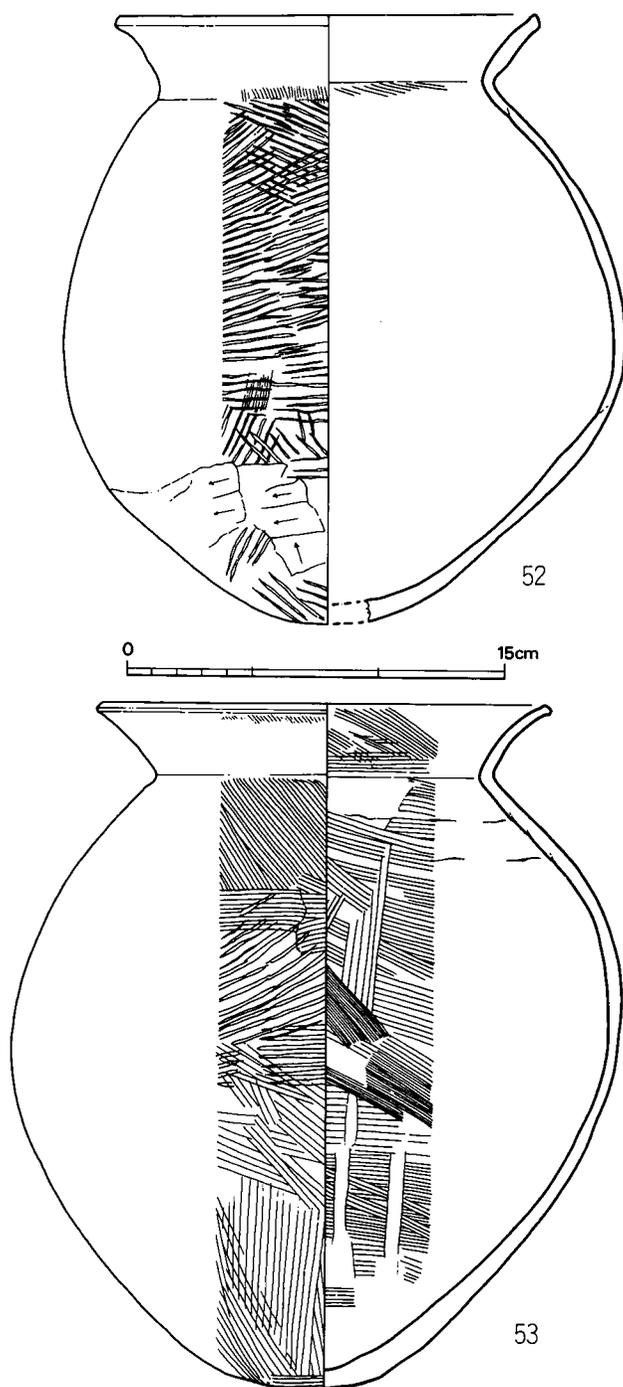
で若干内弯気味に脹らむもので口唇部上面はやや平坦に整えられる。体部内面にハケメを、口縁部外面にミガキを施している。

51は胴部を欠失するがおそらく球形胴になるもので直線的に長めの口縁部が開く。体部外面に粗めのハケメが施される他はナデ及びヨコナデ調整されている。

57は肩部破片で壺と甕の区別をつけ難いが、3層36の例に似るので壺に含める。外面に斜め右上りのタタキ整形痕が巡り、部分的にはハケメの痕跡もある。内面は細かいハケメで調整される。頸部のみ内外面共ヨコナデされるが外面ではタタキ整形痕がまだ残る。

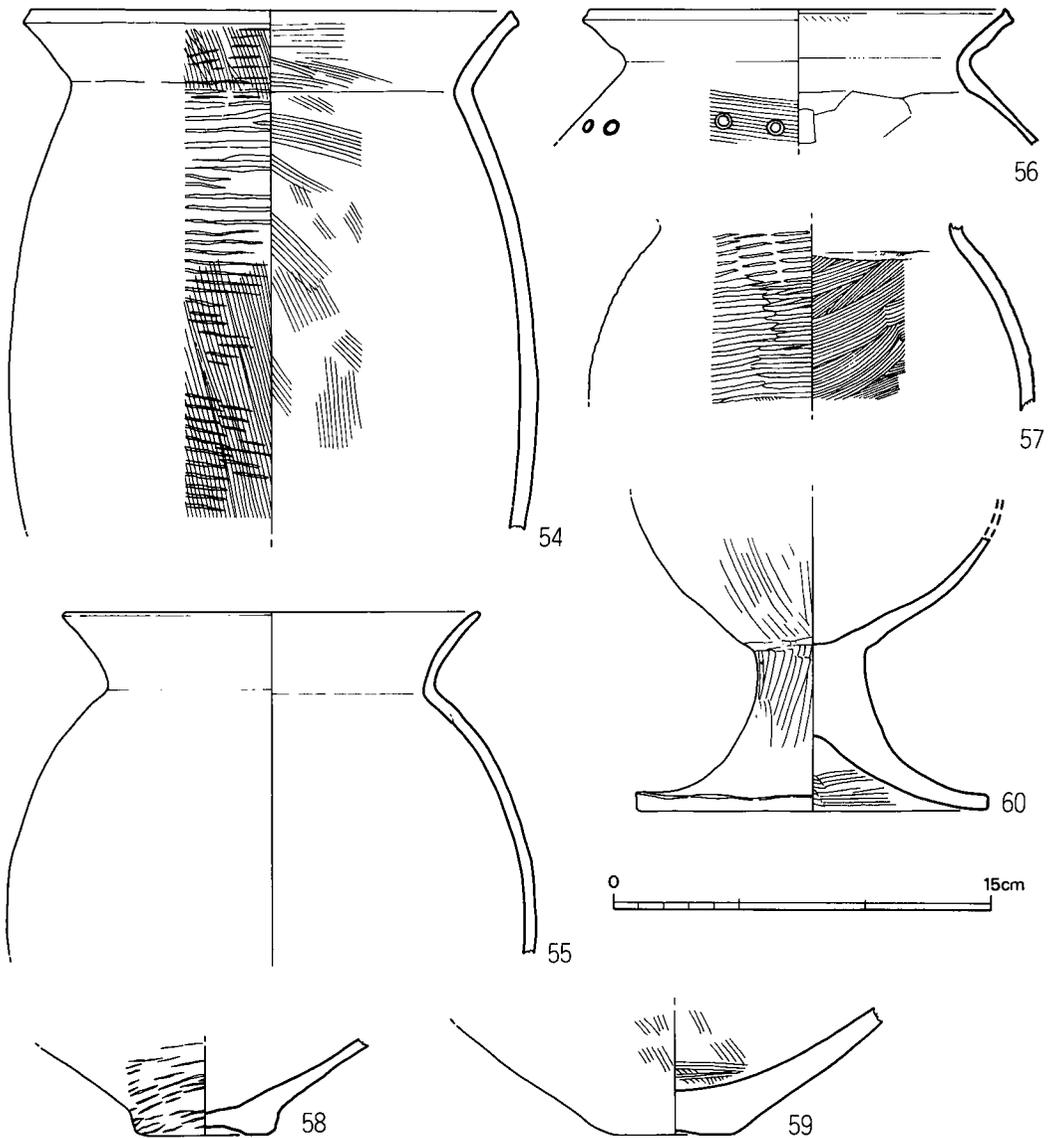
58・59は壺の底部破片であろう。2点共に底外面が指押えて凹む。58の外面にはタタキ整形痕が残り、59ではハケを施したあとナデで消している。

**甕 (52~56)** 52は口径16.4cm・胴最大径22.3cm・復原器高24.4cmの胴の



第 95 図 溝出土土器実測図⑥, 2 トレンチ 4 層 (1/3)

張る甕形土器で、体部外面にやや粗いタタキ痕を巡らせて、胴下半の一部にヘラケズリを加えているが、タタキメが残り、底部は尖り気味の凸レンズ状であろう。内面はハケ調整のあとナデ消しており、口縁部内外面及び口唇部上面もハケ調整をした上からヨコナデを加えてハケメを消し、口縁部は直線的に外反して端部の内側が僅かに凹み気味になる。胎土に小砂粒をかなり含み、金雲母・赤褐色粒も含むが黄褐色～茶褐色に焼成されている。

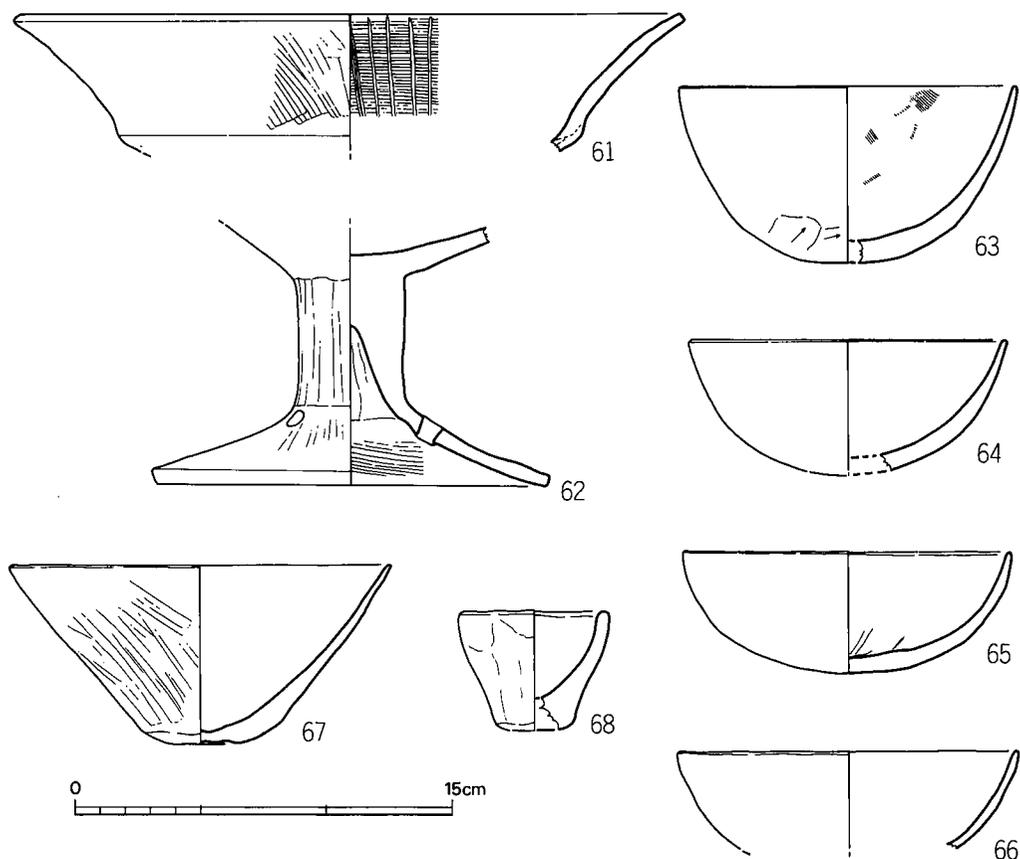


第 96 図 溝出土土器実測図⑦, 2 トレンチ 4 層 (1/3)

53は口径18cm・器高27.4cm・胴最大径24.1cmのやはり胴の張る甕形土器だが、52に比して最大径の位置が高く、底部は小さいが凸レンズ状に残る。体部外面全体に粗いタタキ整形痕を巡らせて底面と胴下半はハケ原体でケズったようなハケメにして、肩部もハケを施すが最大径位に近くなると横方向に軽くハケメを巡らせるのみでタタキ痕が明瞭に残る。内面も全体にハケメ調整され、縦方向の粗いハケやナデで部分的に消す程度。鋭く稜をもって屈折する頸部から外反する口縁部も細かいハケメのまま残る。口縁部外面と口唇部はヨコナデが加わり、口縁端部の内面が若干凹み気味になる。胎土・焼成共に52に似る。

54は、くの字口縁をもつ長胴の甕形土器で、胴下半を欠失する。口縁部を含む外面全体に横方向のタタキメが巡らされそのあとに縦方向のハケメが施されるもののタタキ整形痕が残る。内面は全体にハケ調整され、ヨコナデされる口唇端部は上面と内面が若干凹み気味になる。

55は丸味をもった胴部を有し、口縁部は外弯気味に反る。内外面共ナデ仕上げされており、



第 97 図 溝出土土器実測図⑧, 2トレンチ4層 (1/3)

淡い色調に焼成されている。

56は器壁の薄い甕形土器で、体部内面のヘラケズリが頸部にまで及ばず、頸部が丸く屈折して直線的な口縁部につながる。口縁部内外面と頸部外面はヨコナデされ、口縁端部の内測は摘み上げられてやや尖り、口唇部上面と内面は凹み気味になる。肩部外面はヨコ方向のハケメが巡り、竹管文刺突が2ヶ単位(?)で並ぶ。

**高杯** (60~62) 60は体部の上半を欠失するが、脚部の形状から体部の高さがさほど高くないと思われる。現存高12.3cmで、脚部の高さが6.3cmを占める。残存する体部は半球形を呈し外面ハケメ、内面ナデ調整されている。脚部は中実の柱状部から裾が大きく反って開き面取りされる裾部外径は14cmを有す。脚部の内外共粗いハケメが施されるが裾外面はナデられる。

61の杯部破片は上半部のみだが長めに外反するもので、外面に粗いハケメを施し、内面には横方向の粗いハケメを巡らせたあと縦方向のヘラミガキで暗文を描く。一部残る杯下半部の内面にはヘラミガキがみられる。口唇部はヨコナデで面取りされ、内外面共にやや凹み気味になる。

62は脚部破片で杯部の大半を欠失する。円筒状の柱状部は上部に中実の部分をもち裾部は大きく外反して開く。脚筒部内面には絞り痕とナデがみられ、裾部にハケが施されている。外面は粗いハケメが縦方向に施され、ヨコナデの加わる裾部端は面取りされ上面がやや凹む。裾部上位に外面から穿った3孔がある。現存高10.2cm裾部外径15.8cmを測る。

**椀** (63~66) 63は復原口径13.3cm・器高7cmで深い体部を有す。内面はハケ調整のあとナデられ、外面は下半にヘラナデ痕を残すが上半はナデられる。64~66は浅めの体部を有し、65は底部内外面にヘラナデ痕や木口圧痕を残す以外ナデやヨコナデで仕上げられている。64・66は内外面共にヘラミガキが施され、殊に66の器壁は薄い。

**鉢** (67) 小さな底部から口縁部に向って直線的に開く器形で、外面はヘラナデ、底部・口縁部の内面はナデ調整され、口径15cm・器高7.1cmを有す。

**手捏土器** (68) 厚めの底部を有し内弯気味に口縁部が開き、口径外径6cm・器高4.8cm。

### (3) 3トレンチ出土土器 (図版77, 第98~100図)

2層からは69~78の土器とガラス小玉、3層から79~90の土器と鉄鏃が出土した。

2層出土土器 (第98図)

壺・甕・高杯・鉢・小形丸底壺・器台がある。

**壺** (69・70) いずれも中形の壺の口縁部破片。69は体部内面のケズリが頸部直下まで及び器壁の厚い口縁部は直線的に開いて端部は面取りされる。70は器壁が薄く外弯気味に開くが端部外面に僅かながら面をもつ。

**甕** (71) 復原口径17.7cmの口縁部破片で、体部外面に粗い斜め右上りのタタキ目が巡る。体部内面のヘラケズリは頸部まで及び、頸部に稜を有してヨコナデの口縁部が外反するが、口唇

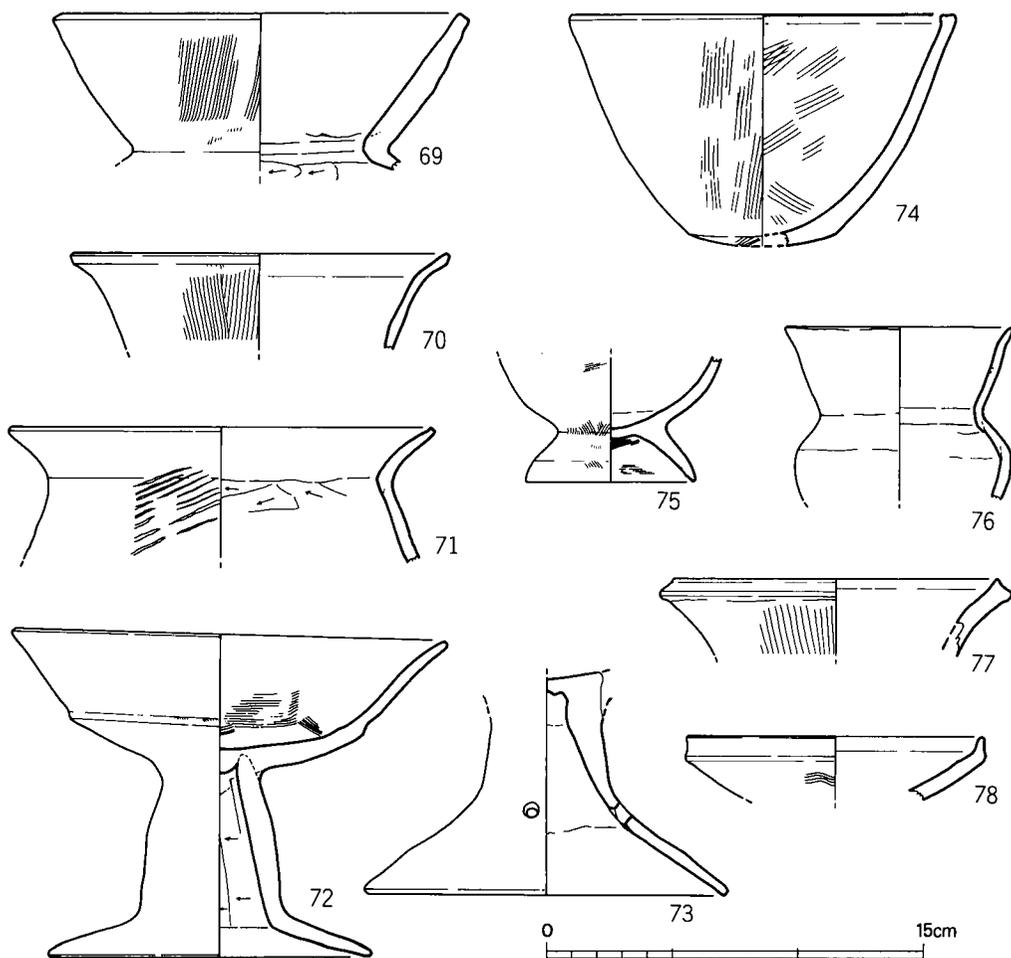
部内面に浅い凹みを生じる。

**高杯 (72・73)** 72の高杯は内面へラケズリ調整のエンタシスを呈す脚筒部を有し、稜をもって大きく外反する脚裾部が端部で踏ん張り気味になる。脚筒部に挿入される杯下半部は内弯気味に広がり、緩やかに屈折した杯上半部は上端で更に外弯する。杯部内面にハケメが残る。

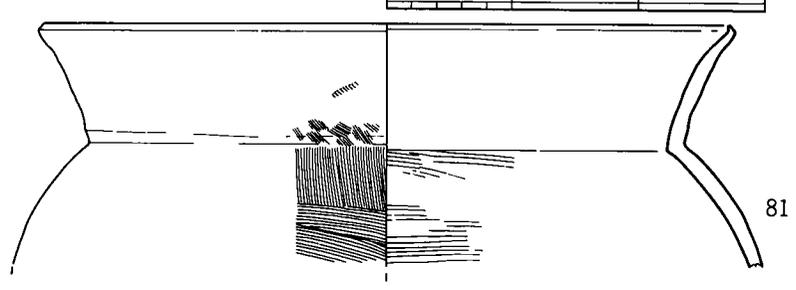
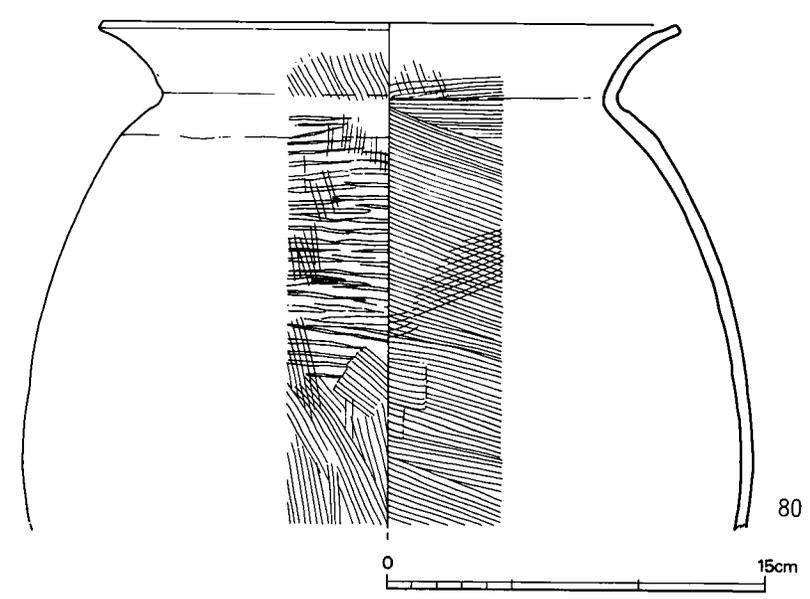
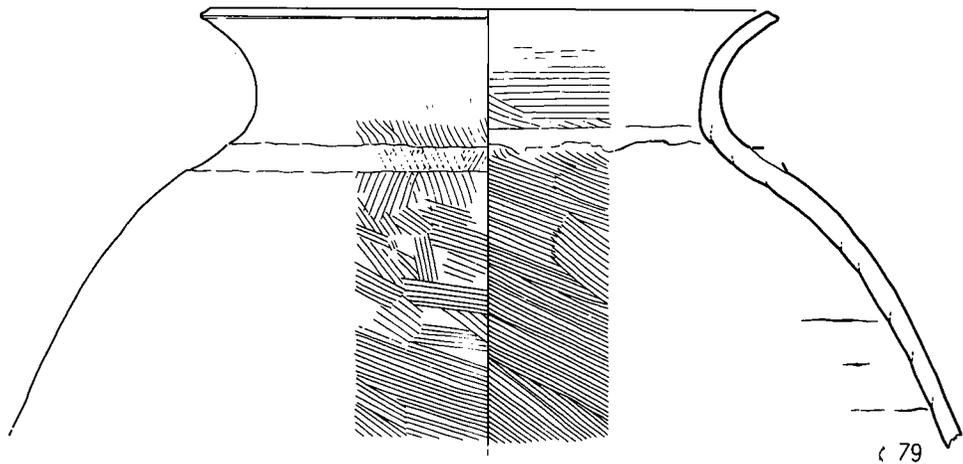
73は脚裾が緩やかに広がり、端部が踏ん張り気味におさまる脚部破片で裾部上半に3ヶ所の円孔が空く。

**鉢 (74)** 凸レンズ状の底部から、丸味を帯びるものの直線的に口縁部が広がる鉢形土器で、器壁はやや厚く口縁端部は上面と内面が凹み気味に面取りされる。内外面共ハケ調整。

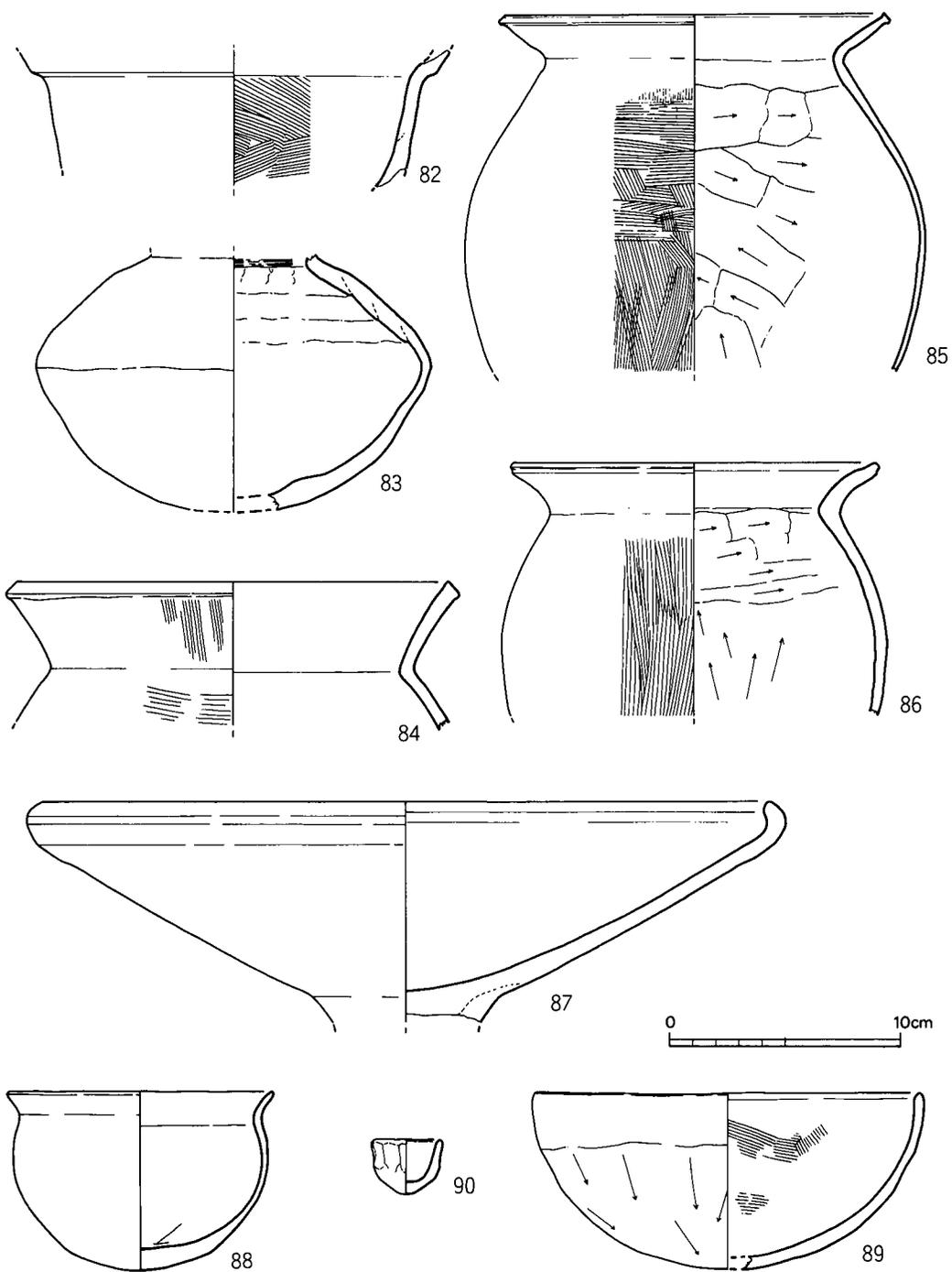
**台付椀 (75)** 上半を欠失するが丸底の体部に短めに踏ん張る脚台が付く。ハケメが残っており器壁は薄い。



第 98 図 溝出土土器実測図⑨, 3 トレンチ 2 層 (1/3)



第 99 図 溝出土土器実測図⑩, 3 トレンチ 3 層 (1/3)



第 100 図 溝出土土器実測図⑪, 3 トレンチ 3 層 (1/3)

小形丸底壺 (76) 体部下半を欠失するが口径と体部最大径がほぼ同じ大きさになる。体部外面の下半にヘラケズリの痕跡が残る他はヨコナデ、ナデ調整される。

器台 (77・78) いずれも受部小破片で全体の形状は不明。77の口縁部は外反し端部の内側が摘み上げられたように突出し、口唇部の上面と内面が僅かに凹む。78の口縁部は内弯気味に広がり端部を上方に摘み上げて外側に凹み加減の面をもつ。外面の一部に波状文がみられる。

3層出土土器 (第99～100図)

器種はあまり揃わず、前代の混入と思われる土器もある。

壺 (79・82・83) 79は胴下半を欠失するが復原口径22.2cm・現存高17.3cmを有す。口縁部は外弯して広がり口縁端部は凹み気味の面をもつ。内外面共にハケメ調整され、外面の頸部以上と口唇部付近はヨコナデが加わる。頸部と肩部の境目に貼付凸帯の剥れた痕がある。

82は二重口縁壺の疑口縁部分で、頸部は更に窄まり、口縁部は上方に広がると思われる。外面はナデ、内面はハケメ調整されているが、口縁部は内外面共にヨコナデされている。

83は口縁部を欠失するが扁球形体部を有し、内面ナデ調整と頸部内面ハケメ調整・外面の下半はヨコ方向のミガキ・上半はタテ方向のミガキが施されて、胴部最大径の位置に稜をもつ。

壺 (80・81・84～86) 80は胴最大径に比してそれほど頸部が窄まらないため甕に含めたが2トレンチ出土土器の壺に分類した例に似ており壺と甕の区別をつけ難い例である。長胴気味の体部にタタキ整形痕が残り口縁部と体部下半は縦方向のハケメで消される。一方内面はハケメ調整で口縁部はヨコナデで消される。外弯気味に広がる口縁部は端部をヨコナデされて口唇部外面と上面が僅かに凹む。

81は頸部内面に稜を有して直線的に伸びる口縁部は、ヨコナデでハケメを消しているが、端部を内側に摘み上げて小さな面を形成している。84はくの字に立ち上る口縁部を有し、端部は肥厚気味になるものの口唇部内面と上面が凹み気味で、器内面はナデ調整されている。

85は器壁の薄い甕形土器・体部内面のヘラケズリが頸部の下方迄で頸部は丸味をもって屈折して外反するヨコナデ調整の口縁部に至る。口縁端部は内側を摘み上げて上方に突出する。体部外面は主に縦方向のハケメで、ナデ肩の肩部のみ横方向に施されている。

86は体部内面をヘラケズリするものの器壁がさほど薄くならない。ヘラケズリは頸部まで及び稜を有してヨコナデの口縁部が外反する。口縁端部の外面に浅い凹みがあり、内面は凹み気味にまとまる。胴部外面は幾分雑な縦方向のハケメが施されている。

高杯 (87) 杯部のみ破片で、長く直線的に広がり口縁部は丸く内弯する。杯部外径32.8cm・現存高9.6cmを測る。

鉢 (88) 復原口径11.6cm・器高7.8cmを有す半球形体部にくの字口縁の付く器形。内底部に木口圧痕が残る他は、ヨコナデ、ナデ調整で仕上げられる。

手捏土器 (90) 外径3.1cm・器高2.4cmの砲弾形を呈す。

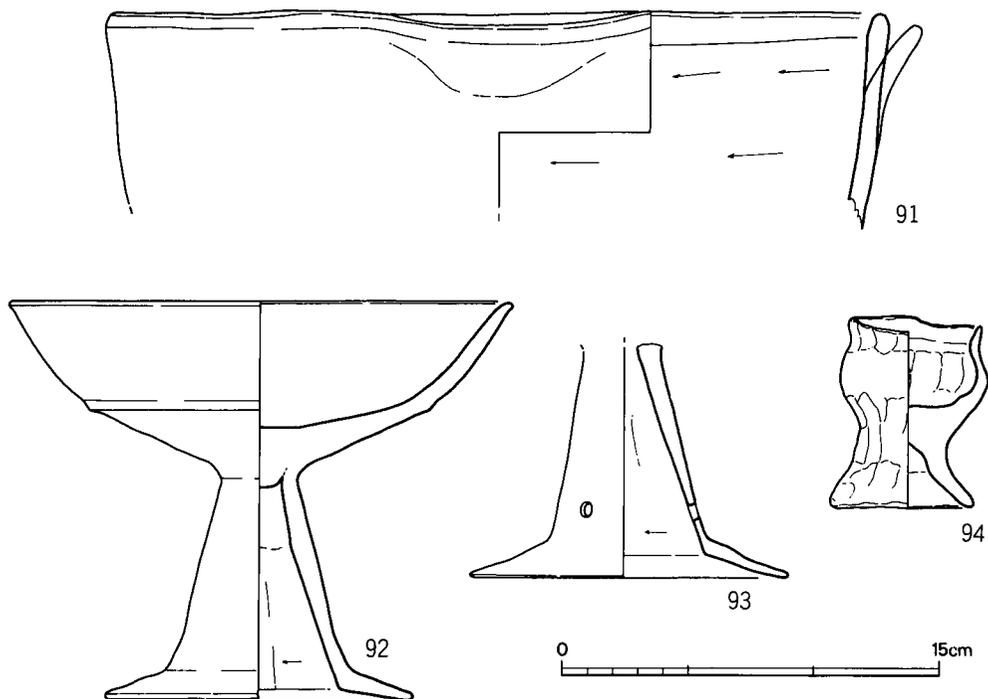
(4) 表採資料 (図版77, 第101図)

工事中に溝を発見した際に採集した土器片のうち、器形に特徴のあるものを図示する。91～93は溝1層に相当する。なお、94はB区南側の水路付替工事中の工事関係者から届けられた土器で、出土位置等を聞いたが、B区大溝支流1の南西約30mの地点あたりから(図版56-1右上方工事中の場所)出土しており、相伴土器等は不明。

91は片口で、復原口径31.1cmの大形の直口縁を有す体部の一方に片口が付く。内面ヘラケズリ、外面ナデ調整され、口縁部のみヨコナデされる。

92の高杯は、復原口径19.8cm・器高15.9cm・裾部外径12.2cmを測る。杯部は杯上半と杯下半が鈍く屈折し、脚筒部は直線的に伸びて裾が折れて広がる。脚筒部内面はヘラケズリで杯部が挿入されている。93の高杯脚部破片は92の脚部に似るが、裾部がやや高めで、脚筒部下位に3孔が穿たれる。

93は手握土器で台付鉢のミニチュアであろう。完形品で器高7.7cm・胴最大径5.9cm・裾部外径5.7cmを測る。



第101図 溝表採土器実測図(1/3)

(5) 鉄器 (図版70-1, 第82図)

B北地区溝からは、鉄鏃1点と鉄鉈2点が出土している。

**鉄鏃** (第82図2) 3トレンチの3層から出土した。先端と茎端部を欠失するが、現存長3.6cmを有す。身は幅1.0cm・厚さ1.6mmと扁平で、基部は厚さ2mmの方形に近い断面を呈し、広根両丸造柳葉式に含まれる。

**鉄鉈** (第82図8・9) 2点共に2トレンチの3層で、黒色土と茶褐色土の境目から出土した。8は先端の一部と柄尻を欠失するが、現存全長21.1cmを有し、大きく反り返る。鋒を欠失するが先端部の現存長12mm・幅約11mmを残しており、この部分では浅いU字形断面を呈し、背に僅かな鑄を留める。先端部側縁に刃部が形成されており、幅9.0mm・厚さ3.0mmのくびれ部に至る。柄は柄尻に向ってわずかに細身になり、くびれ部側の幅8.8mm・厚さ3.8mm、中程の幅8.5mm・厚さ3.5mm、柄尻側の幅8.0mm・厚さ3.0mmで断面形は矩形を呈す。

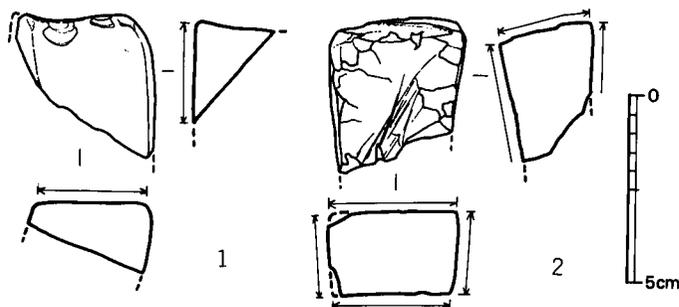
なお、柄の中程に別材の鉄器片が錆着している。断面は浅いU字形を呈し、幅9mm・厚さ1.2mmを測る。長さは8mm程度だが錆着がひどく形状は詳らかでないが、鉈先端部であろう。

9は先端・柄尻を欠失し、現存長8.9cmを測る。中程で最大幅8.0mm・厚さ2.7mmを有し、柄尻側で幅7.5mm・厚さ2.5mmとやや柄尻側に細くなり、先端側にも細まって、刃部とのくびれ部では幅7.2mmである。柄部の断面は矩形を呈す。くびれ部から先は8mm分のみ残存しており、断面U字形を呈し側縁が刃部となっている。8に錆着している鉈先端部の折損面の形状が、当該資料先端の折損面のそれと似ており大略接合する。しかし発掘時に離れて出土しており先端部の錆着が著しいため刃部の形状などは詳らかではない。

(6) 石器 (図版70-1, 第102図)

該期に属すとみられる石器は、砥石片1点のみである。

**砥石** (第102図2) 2トレンチ付近の上層から出土した細粒の凝灰岩製仕上げ砥石で、欠損面以外全て砥面に利用され砥研の際の線條痕が目立つ。



第102図 溝状遺構出土石器実測図(1/2)

(7) 玉類 (図版70-1, 第83図)

3トレンチの2層からガラス小玉1点が出土した。

ガラス小玉 (第83図2) 外径4.9~5.2mm・厚さ5.2mmで長径1.8mm・短径1.4mmの楕円形孔をもつ。やや風化しており青味のある緑色を呈す。

### 第3節 小 結

B北地区の調査は、種々の制約があり幅の狭いトレンチ部分のみであったが、2トレンチ・3トレンチにおいて、まとまった土器の出土をみた。もっと広い範囲を調査すれば溝の性格などを十分に検討しえたかも知れない。各トレンチでは堆積土に円礫が多く含まれていたが、特に第3層に多い傾向があり2トレンチでは多めであったように感じる。

B北溝は、B地区大溝支流2の下流で、その上部に重なって大溝が流下しており、B北溝1・2層が大溝埋土、3・4層が大溝支流2埋土に相当する。溝内から出土した遺物では、土器に須恵器などを全く含まず、塚堂古墳周溝によって切られているので、塚堂古墳の時期を下限におくことができる。また古式の土器としては82・87のような弥生時代後期後半ないしは終末期に属すと思われる例があるものの、そのほとんどが古式土師器の類である。土器以外では僅かに鉄器3点・砥石・ガラス小玉各1点と少ないが、土器と共伴しているのである程度時期を限定できよう。

B北溝は、B地区の溝と一連のものである。B地区の例と共に、溝の性格や、出土遺物の時期的な問題などについては、別に第8章で触れることにしたい。

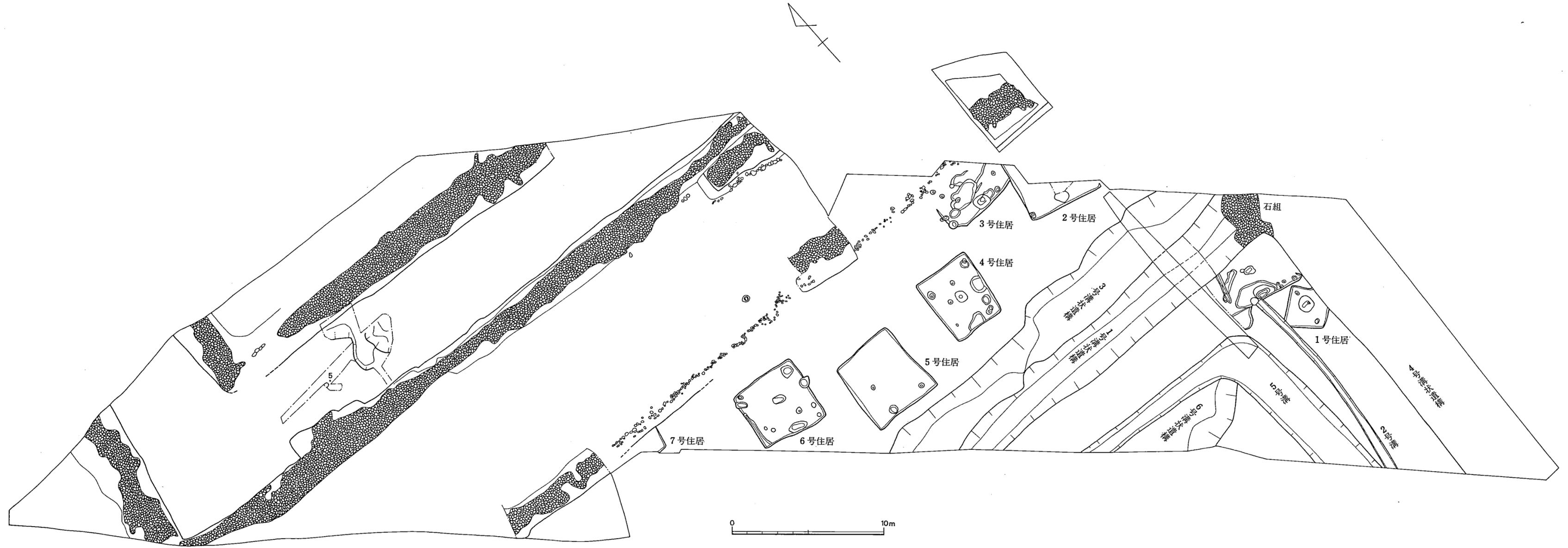
(小池)

## 第6章 C地区の調査

第1節 はじめに

第2節 遺構と遺物

第3節 小 結



第 103 图 C地区遺構配置図 (1/200)

## 第6章 C地区の調査

### 第1節 はじめに

ここに報告するのは、C地区内で1979年度に調査した塚堂古墳前方部南縁（内濠・外濠）を除く、1980年度調査によって出土した遺構と遺物である。79年度の調査では、C地区全体の西半部に位置する内・外濠を調査対象とし、外濠南肩は3ヶ所のトレンチ調査をしている。

80年度調査では、未調査の東半部を調査対象地としたが、前年度調査以降にC地区内南・北側に工事用道路が既設されて農用道路として使用されていた。このため、西半部に比べて調査区が狭くなると共に、道路・排土置き場・畦畔に囲まれ、調査区内の排水ができず頻繁に水没し、作業は困難をきわめた(図版87)。

調査の結果、住居跡8・溝状遺構4（1・3・4・6号）および溝2（2・5号）を検出して調査した。このとき、3・7号住居跡が古墳南縁外濠によって切られていたので、前回トレンチ調査部を含めて外濠南側埋土を15cmだけ掘り下げ、遺存する葺石2～3段目まで検出した。なお、5号溝としたものは、流路を変更後に埋めもどされた現代の農業用水路であるが、完掘の結果、溝底から新たな遺構の検出はなかった。また、外濠からは多くの陶質土器・古式須恵器が出土したので、以下の報告に加える。

### 第2節 遺構と遺物

#### 1. 住居跡

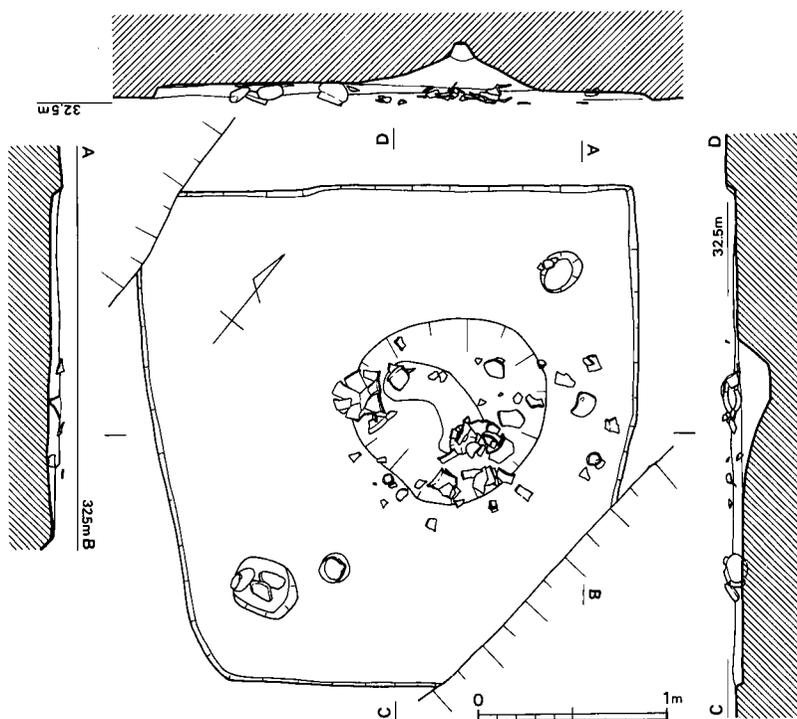
住居は、塚堂古墳前方部の南側周濠外堤に沿うようにして、水田耕作土下の黄褐色粘質土を除去後に8軒が検出された。いずれも、床面からの壁高は10cm以下で、住居の遺存状態は良くないが、1号・4号・6号住居からは多くの一括資料が出土した。なお、調査区は図版87に、示すように頻繁に水没したため、床面からの壁高が下がり、遺物上面の方が若干高い状態を示して図示された例がある。

なお、各住居については、B地区同様の柱穴・土壇名で仮称し、番号を付して説明する。

また、3・4・6号住居跡出土の玉類については一括して、第8章にて説明する。

#### 1号住居跡（図版79-1，第104・157図，表28～30）

調査区の西端で検出した。南西部コーナーを2号溝状遺構によって、北東部コーナーを4



第 104 図 1号住居跡実測図 (1/40)

号溝状遺構によって、それぞれ切られている。床面からの現存壁高は、5～6cmと悪い。出土遺物は、床面に接して第105図5の壺が完形で、D11黒色灰層直上で、第107図26の甕がつぶれた状態で出土するなど、一括して多くの土器が出土した。

なお、復原床面積は6.19㎡と小型で、支柱穴と壁土壌は検出されなかった。D11床面に至って、同様に黒色灰層を埋土とする柱穴が出土した。D11の面積は0.79㎡で、他の住居の各D11に比べて犬きいだけでなく、床面積に占める割合も大きいなどから、この柱穴をP21とした。この時、D11は住居遺棄に伴って規模を大きくしたか、新たに設けられたものであることが考えられよう。

ところで、主軸は以下の方法によった。北壁は直線状をなし、南壁遺存はこれに平行する、ので両壁間の2等分東西方向を主軸とした。主軸の中心OとP42あるいは北東壁コーナーを結ぶ線と、中心OとP44あるいは南西壁コーナーを結ぶ線は、P41とP44を結ぶ線にほぼ一致し、後者は中心Oをほぼ通る線に一致する。また、主軸はP21をも通る。

土器 (図版82・83, 第105～108図, 表6)

壺 (1～12・27) 1はミニチュア土器で、口径6.0cm・器高3.6cmを測る。器内外共に胴部は

指押えナデ、口縁部は丁寧にヨコナデを施す。器形は全体に小型丸底壺に似て、口縁部が内弯しつつ大きく開口する。精製胎土に0.5～1.0mm大の砂粒を若干含み、焼成は良い。色調は、器内外共に65うす橙色（4.0YP 8.5/4.0）を呈し、胴外面の一部に黒斑を有す。浅い丸底の胴部から大きく直立気味な口縁部に至る。2は杯様の器形をなし、器周残1/4強で復原口径10.0cm・器高6.0cmを測る。器内は口頸部を横～斜方向の細かいハケ目の後でヨコナデを施し、胴～底部にかけてはナデを施すが一部に指押え痕を残す。器外は口頸部に斜～縦方向の細かいハケ目の後でヨコナデを施し、胴～底部は丁寧にナデる。精製胎土に微細な金雲母片・0.5mm大の砂粒を少し含み、焼成は良い。色調は器内外共に82にぶい黄橙色（8.0YR 6.0/2.5）を呈し、底部に黒斑を有す。3は器内頸部下胴部までは横方向ナデ・底部はナデを共に丁寧に施し、器外胴部を左廻りへラケズリ・底部をナデで仕上げる。胴部と共に底部が厚手の土器で、胎土に微細な金雲母片・0.5mm大の砂粒を多く含み、焼成は良い。色調は器内57茶褐色（2.5YR 3.5/0.5）・器外63明るい茶色（3.5YR 5.5/7.0）を呈し、底部外面に大きい黒斑を有す。

4は口径5.6cmを測り、丸底をなすと考えられ、器高約8.5cm程の小型の土器で、口縁部は若干内弯し、端部は丸味をなして肥厚する。器内は口縁部を雑に横方向にナデ、頸肩部にはシンリ目痕を残し、胴部は指先で縦方向に強くナデる。器外は、口縁部を横方向に雑にナデ、頸部以下はへラナデを施したままである。精製胎土に赤褐色粒・微細な金雲母片・角閃石を含み、焼成は普通。色調は器内外共に90明るい茶灰色（10.0YR 6.0/2.0）を呈す。

5は広口直口の丸底壺で、口径13.5cm・器高11.8cmを測る。口縁部は器内外共に丁寧なヨコナデを施す。器内は肩部に横方向ハケ目を残すが以下は丁寧にナデ仕上げで、器外は肩を丁寧にヨコナデするが胴以下は荒いハケ目仕上げのままで明瞭な稜を有す。胎土に微細な金雲母片・角閃石を含み、1.0～1.5mm大の砂粒が多い。焼成は良く、色調は器内外共に90明るい茶灰色（10.0YR 6.0/2.0）で、器内は186青味黒色（10.0BG 2.5/1.0）を呈す。6は頸部内面の屈折がシャープで、口縁端部は薄手の丸味を呈す短頸の壺で、器周残1/2弱で復原口径12.4cm・胴部最大径14.0cmを測る。器内は口縁部～屈折部を丁寧にヨコナデし、胴部もへら様工具で丁寧に仕上げる。器外は口縁部をやや内弯気味にヨコナデし、胴部は丁寧にナデるが肩部にタタキ痕を認める。胎土は1.0～1.5mm大の砂粒を多く含み、焼成は良い。色調は器内外共に54明るい茶色（2.5YR 5.0/8.0）を呈し、器外胴下半部に黒斑を有す。

8・9は広口短頸の壺で、8は口径15.5cmを測り、器内はナデるが頸部に胎土接合痕を各所に残し、器外肩部にもハケ目痕を残す。胎土に2mm大の砂粒を多く含み、焼成は普通。色調は65うす橙色（4.0YR 8.5/4.0）を呈す。

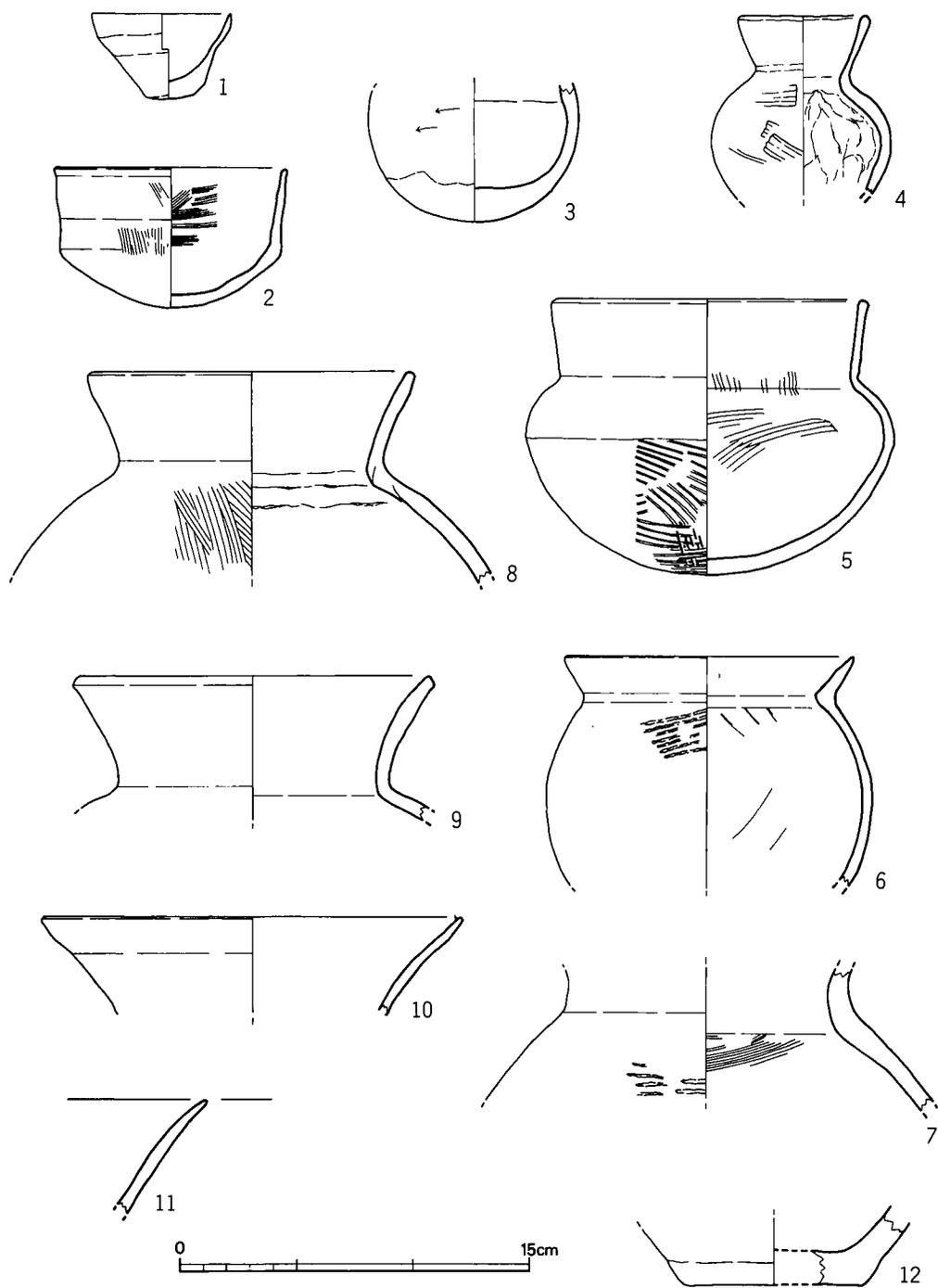
10・11は広口の口縁が大きく外反する壺で、共に薄手に仕上げている。10は器周残1/8で復原口径18.0cmを測り、胎土に微細な金雲母片・0.5mm以下の砂粒を含み、焼成は普通。色調は器内170緑味灰色（10.0G 4.5/0.5）を呈し、器外65うす橙色（4.0YR 8.5/4.0）を呈す。

7は厚手の頸肩部片で、肩部内面はハケ目のままで、外面は太目のタタキ痕を残す。胎土に微細な金雲母片・赤褐色粒・0.5mm以下の砂粒を含み、焼成は普通。色調は器内78にぶい黄橙色(7.5YR 7.0/5.5)・器外85灰味茶色(8.5YR 5.0/0.5)を呈す。12は7とは別個体の底部片である。

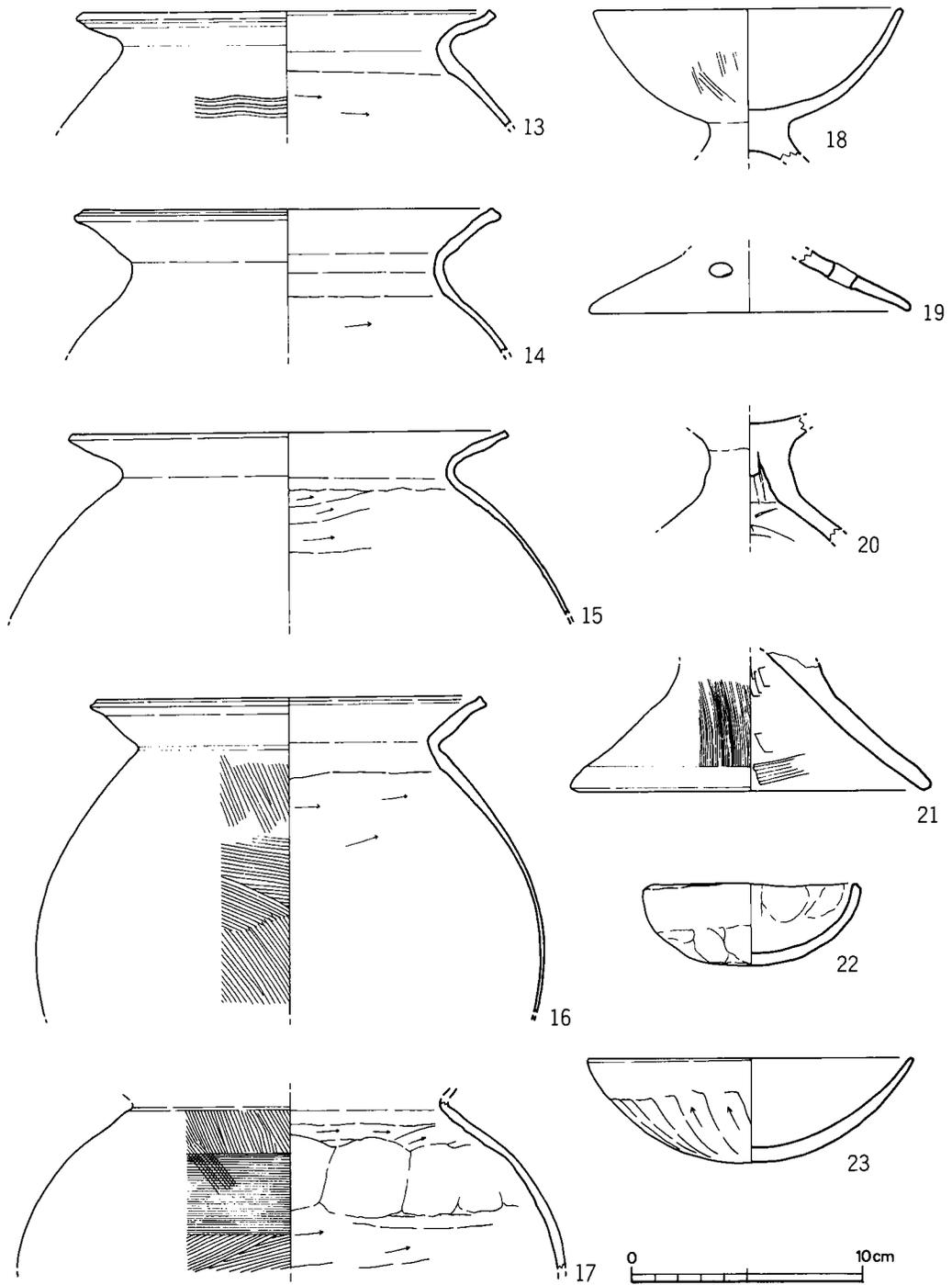
27は、二重口縁壺の頸部破片で、他に胴部・底部破片があるが接合しない。器内は、頸部中位以上に細かいハケ目・以下にやや荒いハケ目を使用し一部をヨコナデし、頸肩部の屈折はシャープな稜を有すが、このときの頸部のヨコナデによって肩部に胎土が垂れ下がっており、頸部は図示したようにやや外反する器形でよいものと思われる。底部近くは荒いハケ目のままで、胎土接合痕を多く残す。器外は頸部に斜方向ハケ目を多く残す、底部近くは磨滅が著しいが荒いハケ目を認める。胎土に金雲母片・赤褐色粒をやや多く含み、製精胎土に1~3mm大の砂粒も多く認め、焼成は普通。色調は器外77にぶ橙色(7.5YR 7.0/7.0)で、器外65うす橙色(4.0YR 8.5/4.0)を呈す。

**壺** (13~17・25・26) 13~17は外来系技法を多くとり入れた甕である。13は、器内肩部を右廻りにへラケズリするが頸部は口縁部同にヨコナデされ、頸部は丸味を有した面をもつ。口縁部はやや内弯気味で、端部は内傾し、端面は沈線を呈さずやや丸味を有す。器外は頸部屈折部のヨコナデが強く、肩部は磨滅してハケ目は不明であるが、3条の櫛描波状文を施す。14は器内頸部以下は13と同じで、口縁部は横方向ハケ目後をヨコナデし、端面は外傾し沈線を認め、外端部が肥厚する。器外は頸部のヨコナデが強く、口縁部は直線的に外反するが、肩部の技法は磨滅が著しくて不明である。15は器内外共に磨滅が著しいが、器内は肩部に凹凸が認められ、直線的に強く外反する口縁内側先端が若干凹み、端部はシャープに仕上げている。16は器内頸部下を若干の稜を有する程度にヨコナデし、肩部以下を右廻りにへラケズリする。口縁部は直線的に外反し、内側先端は若干凹み、端面は沈線を有し、端部はシャープさを残す。器外は頸部の屈折が著しく、肩上位は縦方向・下位は横方向に近く・胴部は斜方向のハケ目で仕上げる。17は器内頸部下をヨコナデし、肩上位は横方向のナデを施すが大きくタタキ痕と当て具痕を残し、下位は右廻りのへラケズリを施す。器外は斜方向ハケ目後に肩部のみヨコハケ目を施す。13は金雲母片・細砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は98うす黄色(2.5Y 8.0/4.0)を呈す。14は13と同様の胎土で、焼成は悪く、色調は97黄味白(2.5Y 9.0/2.0)を呈す。16は金雲母片・細砂粒の多い胎土に3×6mm大の大きめの石英も含み、焼成は良く、器内外共に78にぶ黄橙色(7.5YR 7.0/5.5)を呈し、外面に煤の付着を認め、器周残1/2弱で口径17.1cmを測る。

24・25は共に器内肩胴部が丁寧にナデ仕上げされている。24は口縁部が外弯気味に開き、下位が肥厚し、上位の両側が若干凹む。25は器内をへラ様工具で丁寧にナデ、口縁部はヨコハケ後にヨコナデを雑に施す。直線的に外反する口縁部は厚手で端部は丸味を有す。器外口縁部のヨコナデは雑で、肩部以下は全面に太目のタタキ痕を残す。器周残1/4強の復原口径は16.0cmを



第 105 图 1 号住居迹出土土器实测图① (1/3)

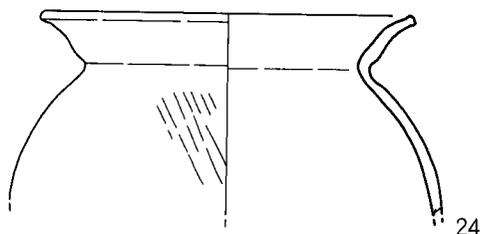


第 106 图 1 号住居跡出土土器実測図② (1/3)

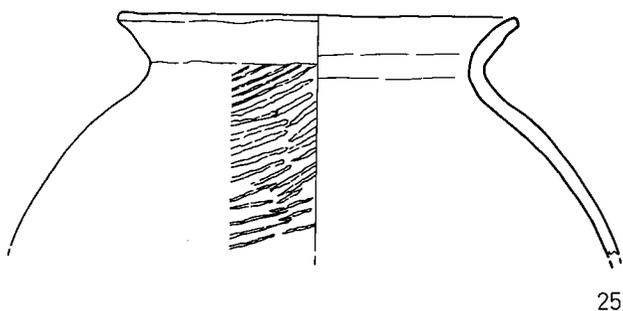
測り，金雲母片・角閃石・1.5mm大の砂粒を少し含み，焼成は良い。色調は器内外共に78にぶい黄橙色（7.5YR 7.0/5.5）を呈す。

26は器内胴中位～下位にかけては左廻りのヘラケズリを施すが，下位から底部にかけては丁寧にヘラナデで仕上げ，頸部は胎土接合部をヨコナデするが段差を残したままである。口縁部は厚手で，端部はシャープにヨコナデし，端面はやや凹んで直立する。器外はらせん状の太目のタタキ痕のままであるが，胴下位に胎土の段差を認め，上位との工程差が器内と共に認められる。底部はヘラケズリである。以上のように26は，在来の太目のタタキ痕で外來のらせん状タタキ技法を用いるが，器内のヘラケズリは厚手のままに終わり，口縁端部は厚手であるがシャープに立ち上がるなど，留意すべき特徴を有している。胎土に0.5～2.0mm大の砂粒を多く認め，角閃石を少量含み，焼成は普通である。色調は器内外共に54明るい茶色（2.5YR 5.0/8.0）を呈し，胴下位以下の外面に黒斑を有する。

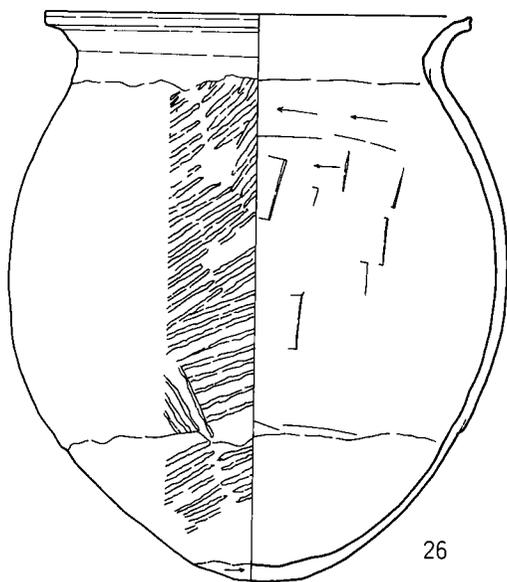
高杯（18～21） 18は杯部



24



25

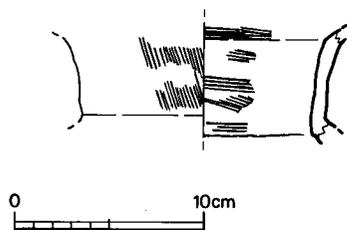


26



第 107 図 1号住居跡出土土器実測図③ (1/3)

上位が直線的に外反し、器内は磨滅するが、器外に縦～斜方向ハケ目を残す。精製胎土に赤褐色粒を多く含み、砂粒は1mm大のものが多く認められるが、4.0mm大のものも若干含む。焼成はやや悪く、色調は器内69うす橙色（5.0YR 7.5/6.5）・器外78にぶ黄橙色（7.5YR 7.0/5.0）を呈す。脚部は欠失するが、20のような短脚ではなく、19のように脚上位から裾部へと大きく広がる器形が考えられる。19は18とは別個体で2孔が現存し、3



第 108 図  
1号住居跡出土土器実測図④(1/4)

個に復原される。20は杯部を欠失する短脚の器形で器内はヘラナデ痕が強く残り、器外は縦方向ハケメ痕が一部に残る。精製胎土に微細な金雲母片を多く含み、1.0mm大の砂粒も多く、焼成は良い。色調は器内外63明るい茶色（3.5YR 5.5/7.0）・器肉67茶色（4.0YR 5.0/4.0）を呈す。21は厚手の脚部で、器内は一部ハケ目後全面を強くヘラナデし、器外は縦方向ハケ後一部をヘラナデし、裾部のみヨコナデを施す。砂粒等をあまり含まず、焼成は普通。色調は器内186青味黒色（10.0BG 2.5/1.0）・器外94うす黄茶色（1.0Y 7.5/2.0）を呈す。

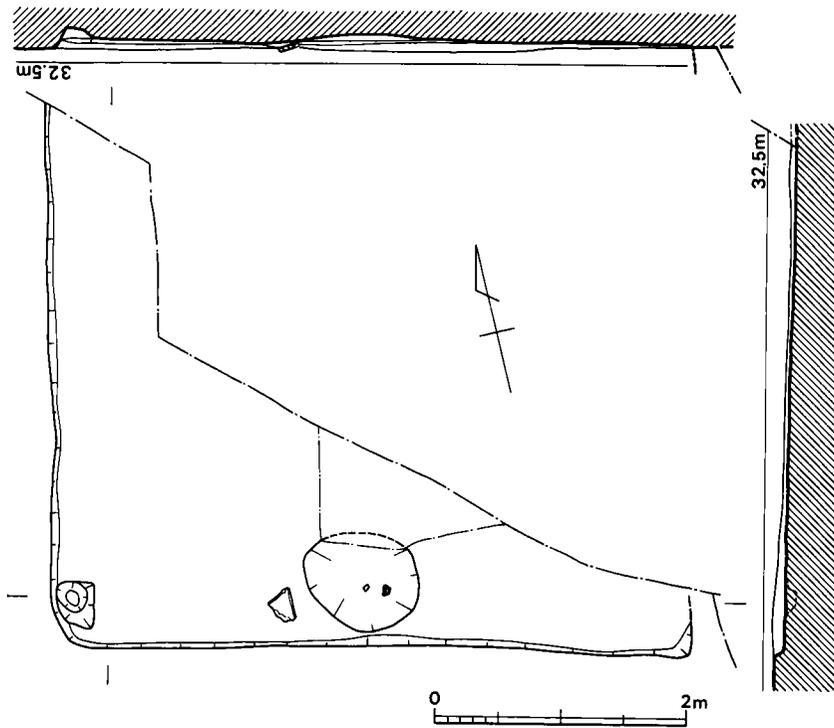
杯（22・23） 22は内外共に丁寧に指ナデした小型のもので、23は器内を丁寧にナデ、器外は口縁部を薄手に仕上げ、体部はヘラケズリを全面に施すが厚手である。23の口径は13.6cm・器高4.6cmを測り、細砂を含む精製胎土で、焼成は良い。色調は器内65うす橙色（4.0YR 8.5/4.0）を呈し、器外は186青味黒色（10.0BG 2.5/1.0）を呈す。

以上の他に甕では図示しなかったものに出土番号33-2と同9-3・28の破片がある。前者は器内左廻りのヘラケズリで肩部厚6mm・胴中位厚3mmを測り、器外肩部に幅1.0cm間に14条を数える微細な横方向ハケ目を施して3～4条の櫛描波状文を付し、胴中部は縦～斜方向の細かいハケ目で仕上げた外来系の技法の強い破片である。後者は器内肩部を荒いハケ目後に一部ナデ、胴下半部はヘラナデを強く施すが、共に器壁厚は4～5mmである。器外は胴中位までは荒い縦方向ハケ目のままで、下位は強く底部から上位方向に向けてヘラナデ後に一部をナデて仕上げた在地系の技法の強い破片である。

## 2号住居跡（図版79-2，第109・158，表31～33）

調査区の北東端で検出した。西壁で3号住居を切る。北半部は、既設の工事用道路下のために未調査で、D21の北側の一部は工事の際に攪乱を受けていた。床面からの現存壁高は、4cmと悪く、遺物の出土量も少なく、いずれも破片である。

なお、床面積は北西部コーナー部が未検出なため、西壁の検出現長までで最小復原すると、21.31㎡である。P44は、P42の確認がされていないことから、壁柱穴とも考えられるが、5号・6号住居例からP44とした。

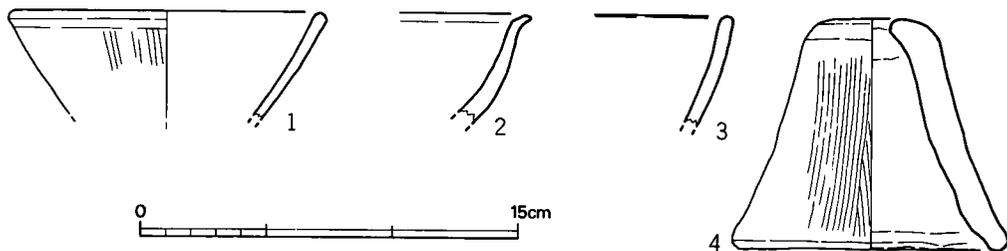


第 109 図 2号住居跡実測図 (1/60)

ところで、主軸は以下の方法によった。西壁と南壁は直交し、南東コーナー部が検出されている。南壁長を1/2して南北〇とすれば、南壁D21のほぼ中心を通る。

土器 (図版84, 第110図)

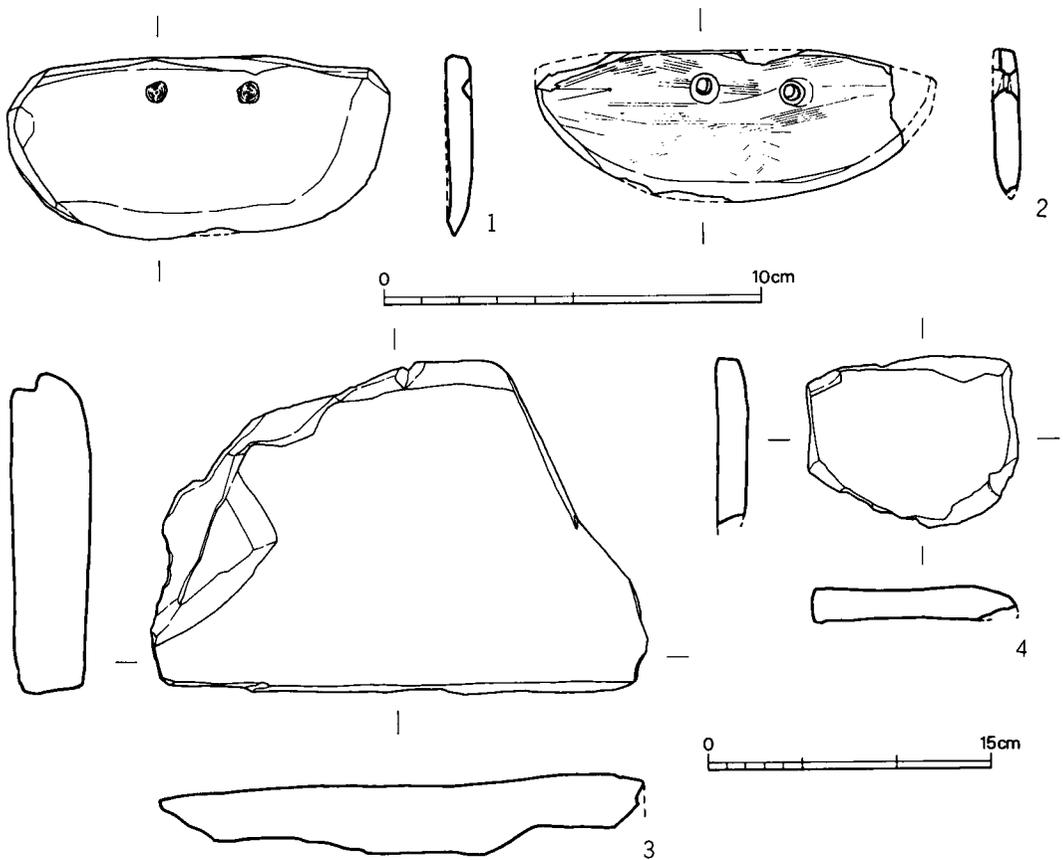
杯 (1~3) 1は器内は磨滅し、器外は縦方向ハケ目後にヨコナデを施し、体部は直線的に大きく外反し、口縁端部は肥厚し丸味を有する。器周残1/8の復原口径は12.6cmを測る。胎土に



第 110 図 2号住居跡出土土器実測図 (1/3)

微細な金雲母片・角閃石を含み、破粒は0.5mm大が多く、焼成は良い。色調は器内70うす茶色、(5.0YR 7.5/2.5)・器外83にぶ橙色(8.0YR 5.5/6.0)を呈す。3も同様の技法をとり、厚手の体部はやや直立気味に内弯する。2は南壁D21内出土で、器内は丁寧にナデ、内弯する体部から口縁部は外傾しヨコナデを丁寧に施す。精製胎土で、焼成は良く、色調は器内83にぶ橙色(8.0YR 5.5/6.0)・器外82にぶ黄橙色(8.0YR 6.0/2.5)を呈す。

**支脚** 4は南壁D11内から出土し、器内はシボリ目を丁寧にナデで消し、孔から上面も丁寧なナデ仕上げである。器外は縦方向ハケ目を施す。器周残1/5強の復原裾部径11.0cm・器高9.2cmを測り、胎土に微細な金雲母片を多く含み、砂粒は0.5mm大のものを多量に認め、焼成は良い。色調は器内外共に34赤味橙色(9.0R 5.5/11.0)を呈す。



第 111 図 2・4・6・8号住居跡出土石庖丁(1/2), 石製品(4/1)実測図

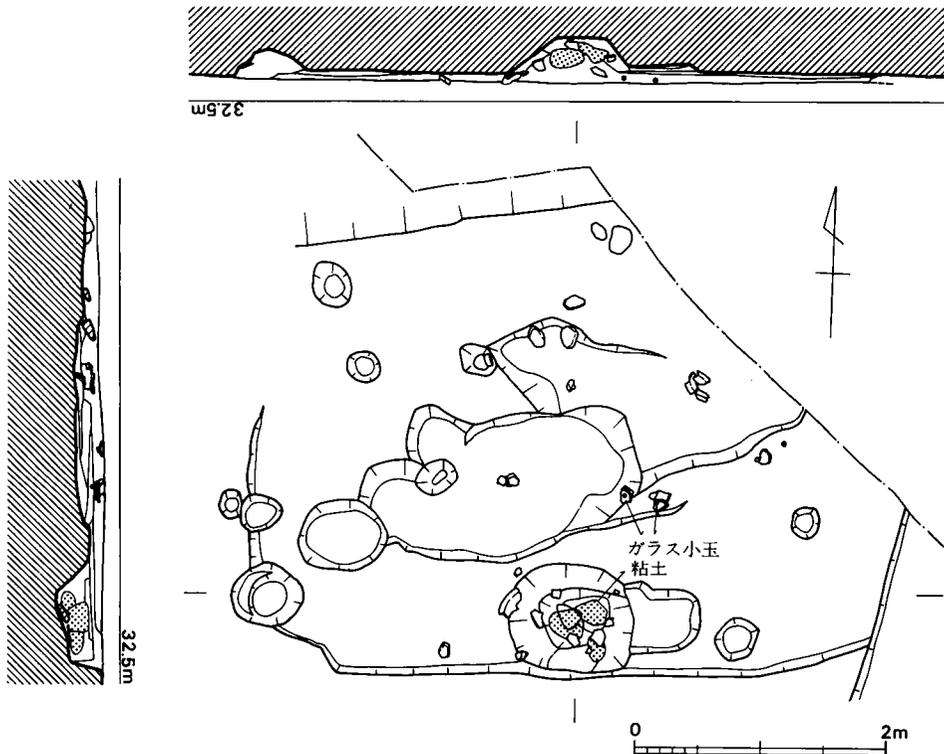
図示し得る破片は以上の4例だけで、他の破片はいずれもヘラケズリを認めない石英砂粒を多く含む弥生後期のものである。しかし、これらは直接住居跡に伴うものでないことは、3の杯部の南壁D11からの出土から明らかである。

石製品（第111図3）

**砥石** 3は南壁寄りの床面から2.0cm上位で出土した。断面図上面が使用により若干凹み。下面は着地床として磨れている。また左・右側面は自然面のままで、当初から節理によって剝離した自然石を砥石として使用したものであろう。石材は結晶片岩で、色調は研面207青味白色（2.5PB 8.011.0）・剝離面193灰味青緑色（7.0B 5.5/13.5）・節理面170緑味灰色（10.0G 4.5/0.5）を呈す。

**3号住居跡**（図版80-1、第112・159図、表34~36）

2号住居によって東壁を、塚堂古墳前方部外周溝によって北半部をそれぞれ切られている。床面からの現存壁高は、5cmと悪く、西壁も一部が遺存するのみで、遺物の出土量は少ない。中央土壌D11内埋土は黒色粘質灰層であった。南壁土壌D21内で、25×27cm×14cm大の黄青灰



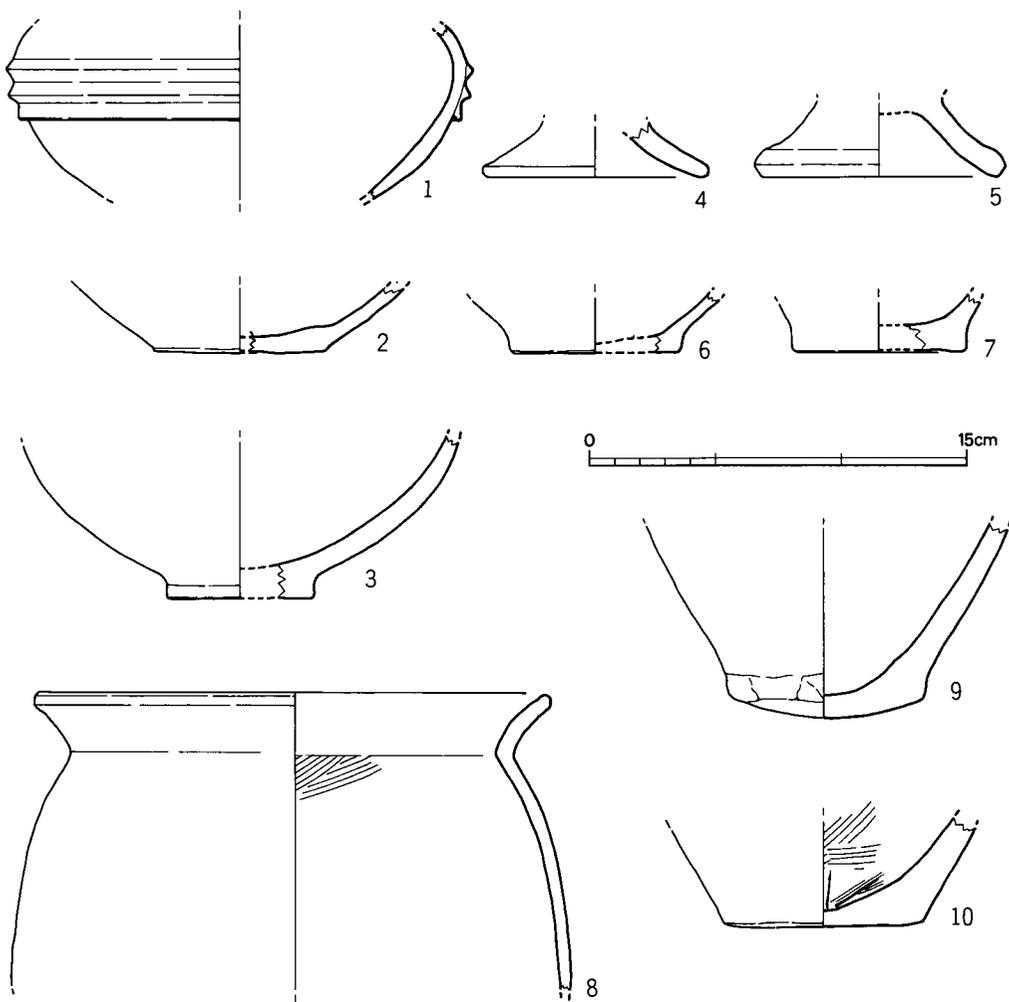
第112図 3号住居跡実測図（1/60）

色砂混り粘土ブロックが出土した。

なお、床面積の復原は以下の方法によった。P13-P14は南壁にはほぼ平行し、その1/2直角等分線は中央土壇D11・南壁土壇D22の中心をほぼ通る。なお、P21が認められることから、その中心を通り、P13-P14と平行するものを主軸とした。復原面積は、主軸南半で南北Oより西部を計測し、4倍して23.25㎡を得た。

土器（図版84，第113・114図，表7）

壺（1～3・6） 1は外来の影響の強い扁平球状の胴部片であるが、胎土は11・14等と同様

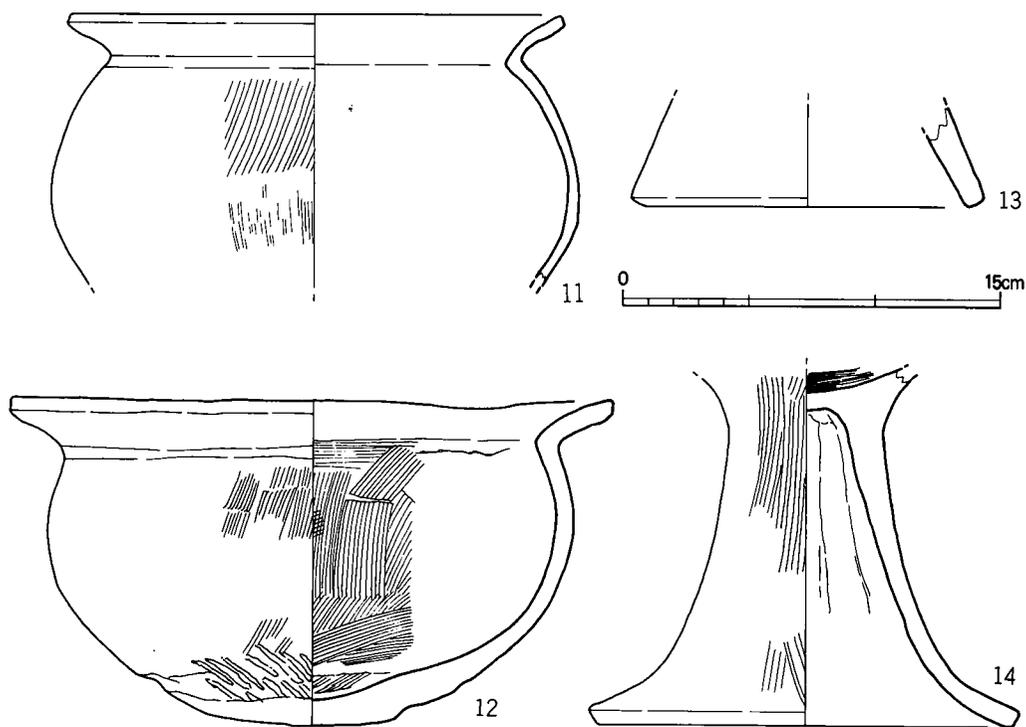


第113図 3号住居跡出土土器実測図①（1/3）

に在地通有のもので、1～3mm大の石英砂粒等を多く含み、焼成はやや悪く、色調は器内154灰味黄緑色（2.0G 6.0/0.5）・器外34赤味橙色（9.0R 5.5/11.0）を呈す。器内外共に磨滅するが、胴部最大径位の3条の凸帯はシャープにヨコナデを施す。器周残1/4弱の復原胴部最大径は、18.0cmを測る。2・3・6は共に底部片で、13は在地系に認めぬ例で、厚手の底部の外表面は平坦であるが、中央部を欠失するので中央部が凹むか否かは不明である。器内外共に磨滅が著しく、胎土中の1mm大の砂粒を多量に角閃石・金雲母片と共に露出し、6mm大の石英をも含むが、器内はナデのようで、色調は1の器外色と同じである。

**甕**（7～10） 8は器内外共に磨滅が著しく、胎土中の赤褐色粒と共に1～2mm大の砂粒の露出が著しい。口縁部は丸味を呈して、ヨコナデで仕上げ、器内肩部に一部ハケ目痕を認める。器周残1/2強の口径は20.4cmを測り、焼成は悪く、色調は器内83にぶ橙色（8.0YR 5.5/6.0）・器外55明るい茶色（2.5YR 5.0/9.0）を呈す。

**高杯** 14は厚手の脚部で、脚部と杯部との境に明瞭な稜を有さない。裾部径は17.0cmを測り、端面は若干凹む。



第 114 図 3号住居跡出土土器実測図②（1/3）

鉢 (11・12) 11は器内外共に磨滅するが、器外胴部最大径位で強く屈折する。12は器内口縁部外は荒いハケ目のままであるが、口縁部のヨコナデは丁寧に施し、端部はシャープである。器外は胴最下位は太目のタタキ痕のままであるが、胴部はハケ目でタタキ痕を消し、一部ナデで仕上げる。口径23.9cm・器高13.1cmを測り、胎土に金雲母片・1～2mm大の砂粒を多く含み焼成は良い。色調は器内外共に78にぶ黄橙色 (7.5YR 7.0/5.5) を呈し、外面全体に煤の付着を認める。

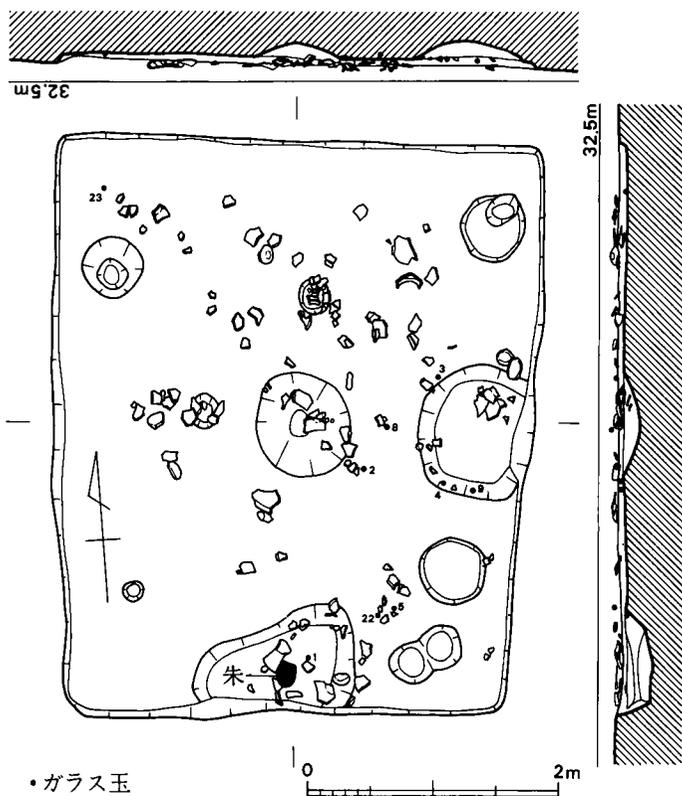
器台 15は器周残1/5の脚裾破片である。

以上の図示した土器以外に次の例がある。南壁D11内から出土した出土番号13の甕胴部片は器内外共に縦方向のハケ目仕上げの例があり、同12を含め他の破片にヘラケズリを認めるものはない。出土番号1 (P21内出土) の甕胴部片は器内磨滅・器外縦方向ハケ目を有し、出土番号7 (床面上) の胴中部片は器内外共に丁寧にナデを施している。

#### 4号住居跡 (図版80—2, 第115・160図, 表40～45)

調査区の中央部で検出した。検出時の壁プランによる切り合い関係は認められず、埋土は単一の暗褐色細砂質土であったが、床面まで掘り下げたところ、南壁土壇D21と東壁土壇D22が検出された。遺物はD21から第 図の器台がほぼ完形で床面から3cm上位で; D22から第119図32の甕片が同2cm上位で出土したが、埋土は住居と同じで出土状態等に差位は認められなかった。中央土壇D11はやや黒褐色を呈していた。P21・P22の埋土の差位も明確には認められなかった。

なお、床面積は検出し



第115図 4号住居跡実測図 (1/60)

たプランに従って、16.54㎡と計測したが、主軸柱がP21・P22、壁土壇がD11・D12とそれぞれ2個検出されており、建て替えが主軸を異にして行われていることが十分に考えられる。ここでは、P21・D11の方が、P22・D22よりも深いので、前者の東西主軸の方が後者の南北主軸よりも新出と考えたい。なお、張り床は検出されず、D22内埋土もブロック状を呈していなかったもので、新出住居は古い床面を若干掘り下げた可能性が強い。この時、前述のようにD11・D12上面での遺物の出土状態が他の床面のものとの差位が認められないことから、D12はD11と共に継続使用されたものと考えられる。

ところで、主軸は以下の方法によった。D21から等距離で南壁に平行する柱穴はP14・P15で、D22から等距離で東壁に平行する柱穴はP13・P15である。このことによって、東西主軸にはP15、南北主軸にはP13が他のP11・P12を共有して主柱穴として使用されたとする時、第Ⅱ図のように模式図形は検出された住居プランと差が著しい。よって、東西主軸N-87°-W・主柱穴P11~15・主軸柱穴P21・壁土壇D21が新出の住居と考えた。

土器（図版84・85、第116~119図、表8）

壺（1~16） 1・2は無頸壺で、1は器周残1/2強で、口径5.9cm・胴部最大径12.5cm・底径5.2cm・器高8.1cmを測る。器内は指押え後丁寧にナデ、口縁端部は平坦でシャープにヨコナデを施すが、器外は風化が著しく研磨は不明である。胎土に1.0mm大の砂粒を多く含み、焼成は悪く、色調は器内外共に30黄味赤（8.0R 4.0/11.0）を呈す。1の底部は平坦で、胴下半は最大径部まで内湾しつつ大きく開き、丸味を呈して強く屈折して胴上半は直線的に内傾し、口縁部近くで一部凹んで口唇部へといたるこの器形は3と共に類例の少ない例である。3は在地外の影響の強い扁平球形の胴部片で、器周残1/8の最大径は16.8cmを測る。器内外共に表面の磨滅を受け、器内は指押え痕が看取され、凸帯部はヨコナデと思われるが、胴肩部の研磨は不明である。胎土に微細な砂粒・金雲母片を多く含み、焼成は普通で、器内86灰味黄茶色（8.5YR 4.5/2.0）・器外64暗い橙色（3.5YR 5.0/9.5）を呈す。

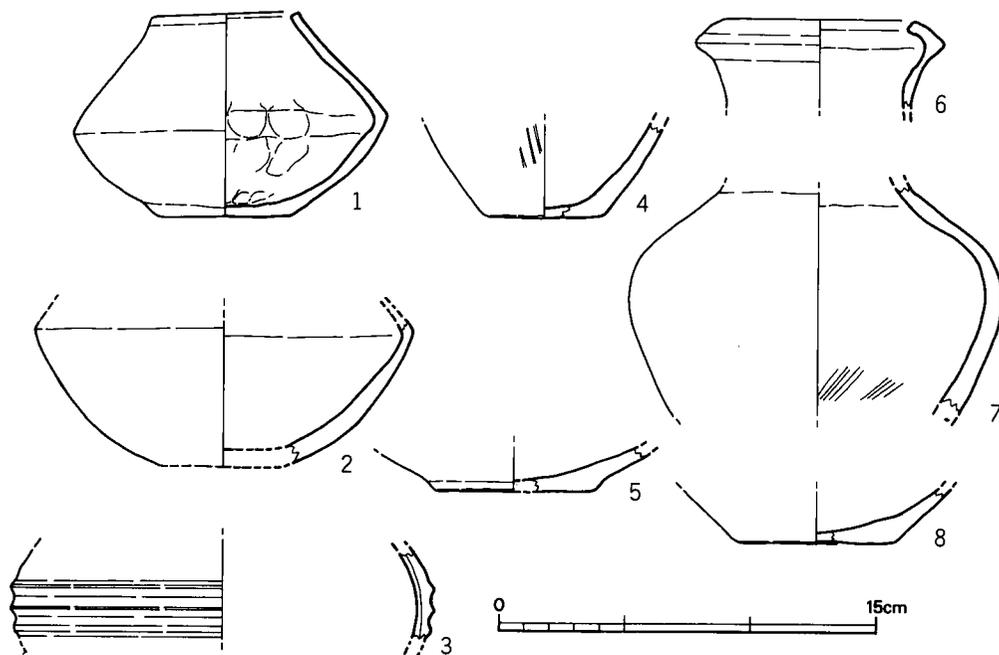
4~8は小型の袋状口縁を呈するものである。6は器周残1/2で口径9.9cmを測り、器壁は薄手に仕上げる。7の器内胴下位は斜方向ハケ目を残し、中位は指先で縦方向ナデ、肩部も指押え後一部をナデる。器外は肩部に細い斜方向ハケ目を一部に残すが、他は丁寧にナデる。器壁は厚手で、胎土は微細な金雲母片・0.5~2.0mm大の砂粒を多く含み、焼成は良い。色調は器内外共に78にぶ黄橙色（7.5YR 7.0/5.5）・器肉57茶灰色（2.5YR 2.5/0.5）を呈す。

9~16は中~大型の袋状口縁を呈するものである。11~13は口縁部片で、11は器内外共に丁寧にヨコナデした後で、外面に2~3条の櫛描文を一周させる。ヨコナデ後に意識して施しており、13の櫛描波状文同様の裝飾効果を意図したのであろう。器周残は1/2弱で、復原口径16.6cmを測り、胎土は微細な金雲母片と共に0.5~2.0mm大の砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は器内外共に78にぶ黄橙色（7.5YR 7.0/5.5）を呈す。13はやや大型の破片で5条の櫛描波状文を

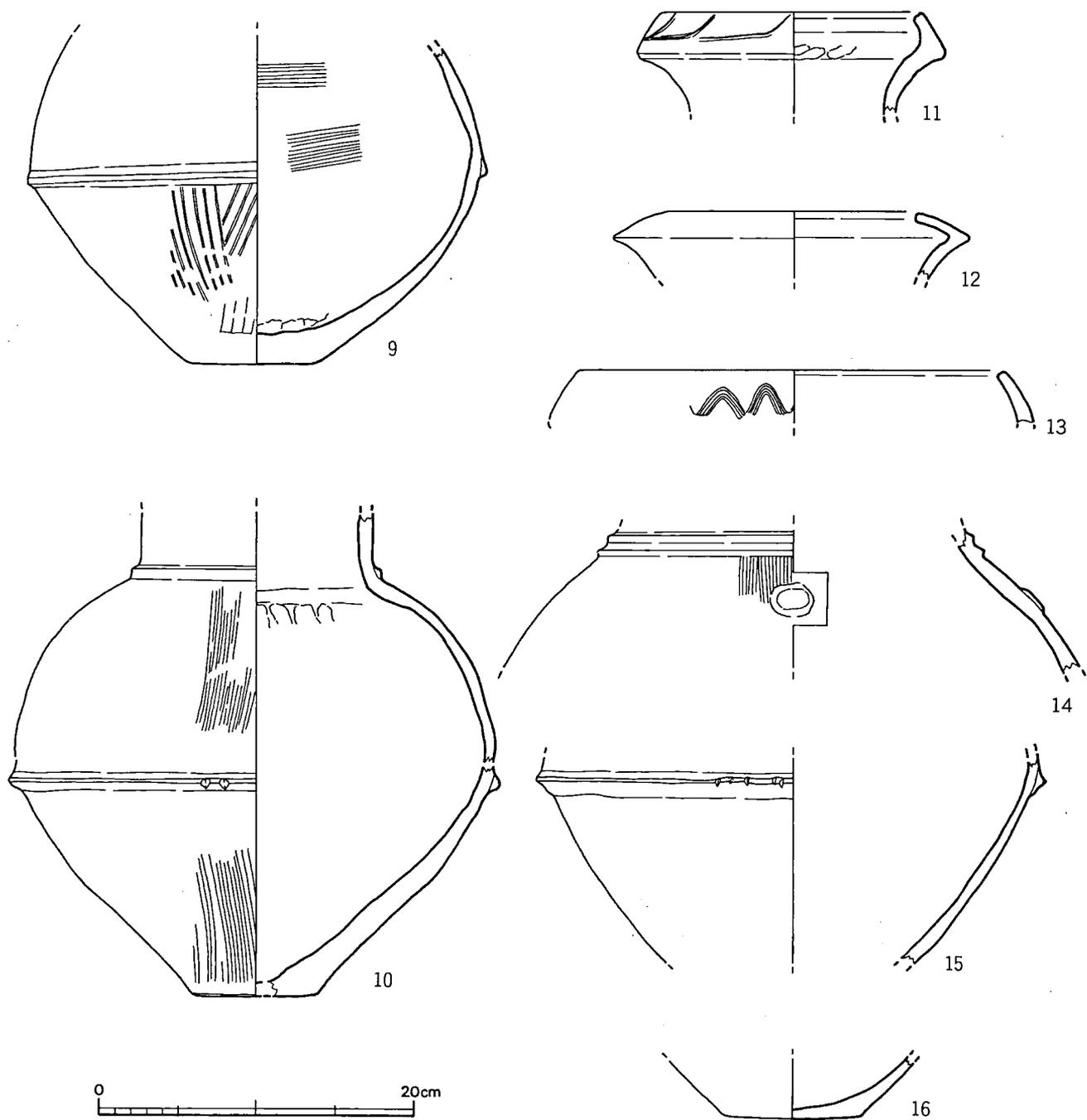
施す。14は器周残1/4の胴上位破片で、2.5cm大の円形貼付浮文が1個遺存するが、周囲を丁寧に指ナデしている。10は器周残5/8で復原胴部最大径28.5cm・底径8.5cmを測り、胴部凸帯はあまり突出せず若干下がり気味で、ほぼ平坦な底部と胴部との器外屈折部は丸味を有している。器内胴上位は横方向に丁寧にナデた後で、更に一部を強く横方向のハケ目を施し、器外胴下部は荒い縦方向ハケ目痕を残す。胎土に若干の赤褐色粒・金雲母片と共に0.5~4.0mm大の砂粒を多く含み、焼成は普通で、器内63明るい茶(3.5YR 5.5/7.0)・器外82にぶ黄橙色(8.0YR 6.0/2.5)を呈す。10は直立する頸部と胴部との屈折部にシャープな凸帯を付すが、胴部の凸帯はシャープさがなく、太い刻み目を施す。底部外面はほぼ平坦である。

■(17~27) 17は器内外共に磨滅が著しいが器壁は厚手で、頸部の屈折部は口縁端部と共に丸味を呈す。18も磨滅が著しいが、器内にヘラケズリを認めない。頸部の屈折は器内外共に稜を有し、口縁部中位のヨコナデが強いために下位が肥厚し、一見19の土器よりも更に新出の様相を呈し、器周残1/5で復原口径22.0cmを測り、胎土に金雲母片1.0~2.0mm大の砂粒を含み、焼成は悪く、色調は器内外共に54明るい茶色(2.5YR 5.0/8.0)・器肉77にぶ橙色(7.5YR 7.0/7.0)を呈す。20は頸部外面に薄手の三角凸帯を付す。

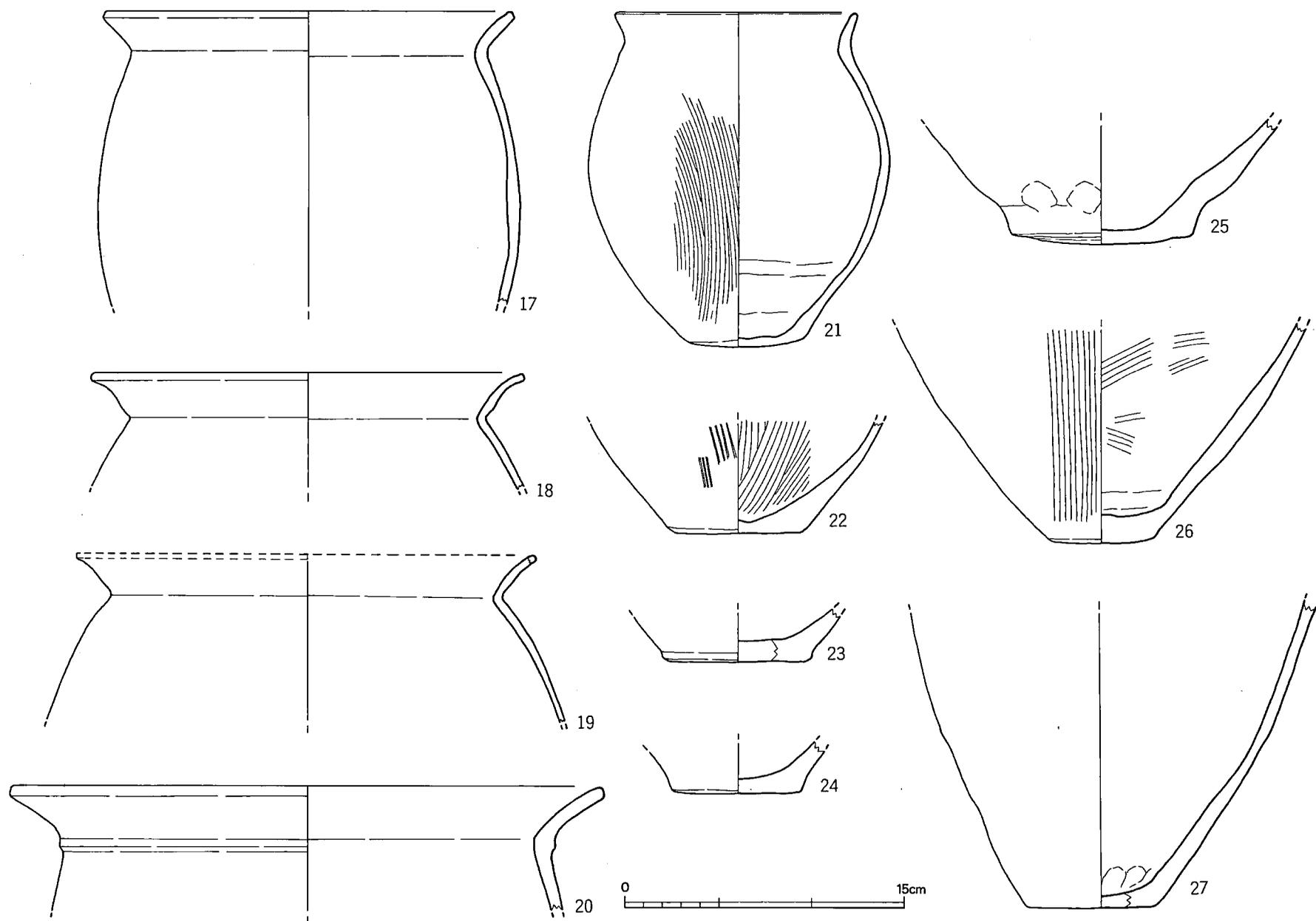
21は器周残1/2で口径13.0cm・胴部最大径16.2cm・底径6.2cm・器高17.9cmを測るやや小型の



第 116 図 4号住居跡出土土器実測図①(1/3)



第 117 图 4 号住居迹出土土器实测图② (1/4)



第 118 图 4 号住居跡出土土器実測図③ (1/3)

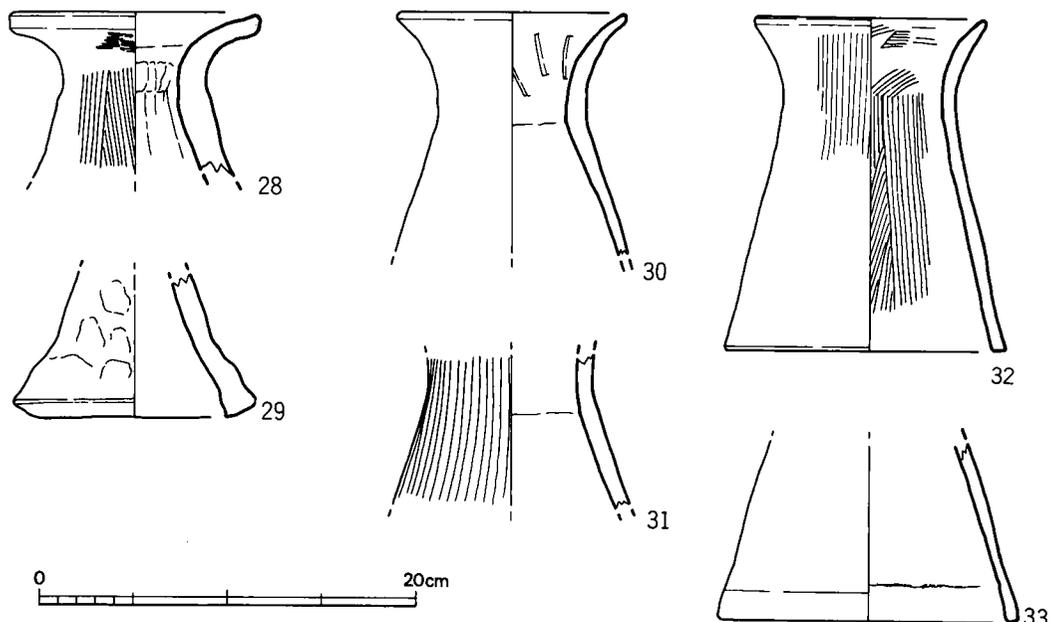
ものである。器内は胴下位～底部は指押えのままで上位～頸部は横方向にナデ、口縁部はヨコナデを施す。器外は胴上位は磨滅のため不明であるが、中位～下位にかけては縦方向のハケ目で仕上げ、底部はやや凸レンズ状に近い。胎土に微細な金雲母片・角閃石を少し含み、0.5～2.0mm大の砂粒が多く、焼成は良い。色調は器内78にぶ黄橙色（7.5YR 7.0/5.5）・器外77にぶ橙色（7.5YR 7.0/7.0）を呈す。

底部の特徴には22・24・27と25・26の二者があり、後者は底部外面の丸味が著しい。

**器台（28～33）** 28・29は厚手で、器内脚部はシボリ目を指先で縦方向にナデて消し、口縁部はヨコナデを施し、器外は最上位は横方向にナデるがタタキ痕を一部に残し、脚部はハケ目仕上げである。29は28と同一個体と考えられるが接合せず、裾下面是タタキ後にナデを施す。胎土に微細な金雲母片を多く含み、砂粒は0.5～2.0mm大のものが多く、焼成は普通。色調は器内外共に73黄茶色（5.0YR 5.0/5.0）を呈す。30～32は薄手で、32は口径10.4cm・脚裾径15.0cm・器高12.6cmを測る。胎土に金雲母片・赤褐色粒を多く含み、砂粒は0.5～1.0mm大のものが多く、焼成は良い。色調は器内外共に59明るい茶色（3.0YR 5.5/4.0）を呈す。

以上の他に、中央土壙D11・中壁土壙D21・東壁土壙D22・出土番号付の土器片には以下のものがある。

D11出土では9図と同様の襷胴部凸帯片に、胴上半部と凸帯に段着がなく、刻み目を施す例



第 119 図 4 号住居跡出土土器実測図④ (1/4)

があり、他の破片でタタキ痕・ヘラケズリが認められるものはない。

D21・D22出土では破片中に、タタキ痕・ヘラケズリが認められるものはなく、器内外共にハケ目あるいはナデを施したもので、10の底部に類似したものがある。

出土番号付の破片は、2・8・22・35が甕、14・15・19・40・47が壺のいずれも胴部片で、18・36・37は器種不明片であるが、いずれも器内外はハケ目又はナデを施し、タタキ痕・ヘラケズリは認めない。

#### 石器（第111図1）

**石庖丁** 1は南壁土壌D21上で床面から6.0cm上位で出土した、出土番号43の石庖丁の未製品である。断面図に示すように右側面の2孔は共に2/3の深さまで丁寧な錐状工具で凹め、刃部等も研磨が終了している。左側面は剝離した状態で工具端痕が0.5mmの深さで2孔認められ、平面図裏左半部だけ刃部が研磨され、右半部では刃部を欠落する。また、断面は右側ほど薄くなっており、裏面の穿孔作業中に剝離したものと考えられる。石材は結晶片岩製で、色調は187明るい青味灰色（1.5B 7.0/2.0）を呈す。

#### 5号住居跡（第120・159図）

調査区の中央部で、周溝から他の住居に比べて5mとよく離れて検出された。しかし、床面からの現存壁高は2～3cmと悪く、遺物は南壁土壌D11内の20cm大の扁平な石下で床面出土の高杯（第121図1・2）と甕（同3）が出土したのみで、床面からは小破片が出土しただけである。

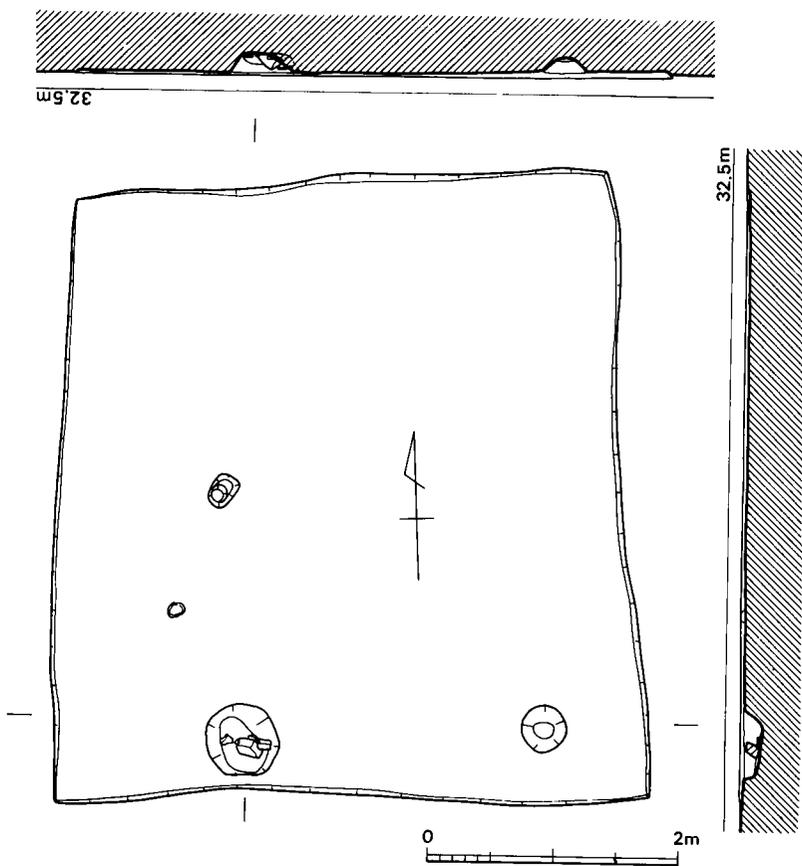
なお、床面積は21.74㎡であるが、壁の遺存状態からして、多少大きくなるものと思われる。

ところで、主軸は以下の方法によった。主柱穴・中央土壌が検出されていないが、それぞれの壁の2等分線は直交し、中軸柱穴P21の中心を通り、P43は北西部と南東部の壁コーナーを結ぶ対角線上に位置する。また、P21とD21の西端は主軸に直交することが指摘される。

#### 土器（図版86、第121図）

**甕（3・4）** 3は直口の広口壺で、器内肩部を左廻りにヘラケズリし、ケズリが深いために頸部はシャープな稜を有すが、壁厚は薄くない。口縁部は直立気味で、端部は丸味を呈し、ヨコナデは丁寧に施す。器外は肩部以下ハケ目を認めるが、一部のみナデる。器周残1/3で復原口径14.0cmを測り、胎土に金雲母片・細砂を多量に含み、焼成は良い。色調は器内57茶灰色（2.5YR 3.5/0.5）を呈す。4はP43から出土した口縁部片で、端面が若干凹む。

**高杯（1・2）** 1・2は3と共にD11床面から出土し、1は器内底部にハケ目を一部に残すが丁寧にナデ、器外も丁寧にナデる。2は器内は横方向のハケ目を多く残し、口縁端部のみ丁寧にヨコナデを施し、器外は斜方向のハケ目を多く残す。器周残1/4で復原口径は19.8cmを測り、胎土に1mm大の赤褐色粒・細砂を含み、焼成は普通。色調は器内外63明るい茶色（3.5YR 5.5/7.0）・器肉186青味黒色（10.0BG 2.5/1.0）を呈す。1は杯部が若干内弯気味で、新しい要素も含むが、器外の杯部と口縁部に明瞭な段を有し、杯部・口縁部が直線的にのびる2と共に

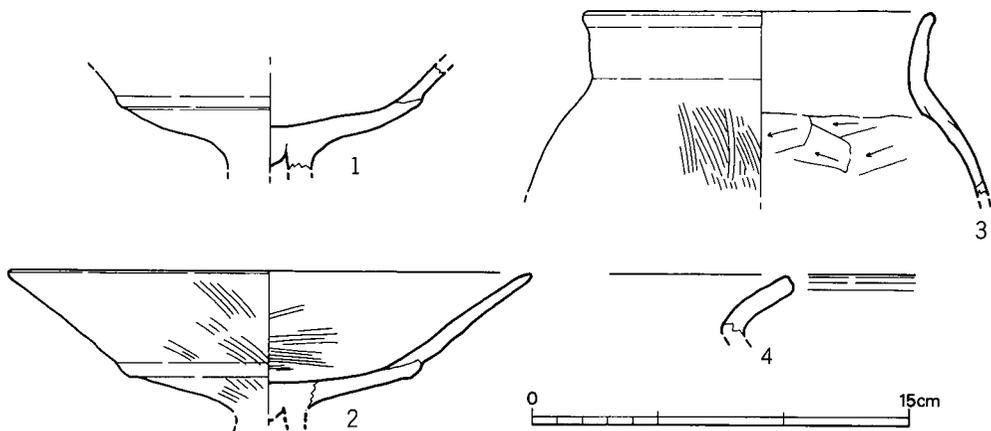


第 120 図 5号住居跡実測図 (1/60)

古い要素を残している。

**6号住居跡** (図版81-1, 第122・161・163図, 表46~51)

調査区の西部で検出した。検出時の壁面プランによる他の住居との切り合い関係は認められず、単一の暗褐色細砂質土であったが、西壁の北側の長円形ピットは暗灰色粘質土で、明らかに新出のもので遺物は出土しなかった。床面まで掘り下げたところ、南壁土壌D21と東壁土壌D22が中央土壌D11と共に検出された。各土壌の埋土は住居土と差異がなく、D11に明確な、灰層・焼土等は認められなかったが、北壁中央部寄りに60×65cm大の焼土塊が床面に接していた。この焼土塊は地山の細砂質土ではなく、粘質土であって、直下の床面は焼けていなかった。遺物は、D11近くの中央部付近では床面にほぼ接した状態で、D21や北東部隅では床面から7~10cm程上位で出土した。西壁に沿って、床面がやや暗茶褐色細砂質土を呈する部分が認められ、3~5cmの深さの周溝状遺構が出土した。



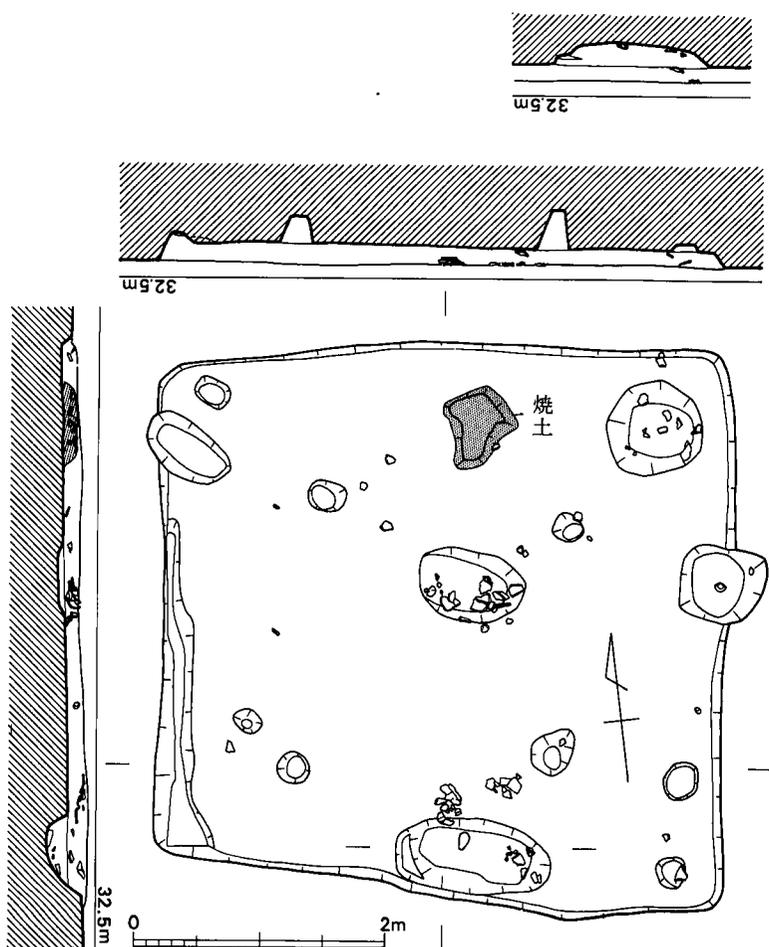
第 121 図 5号住居跡出土土器実測図 (1/3)

なお、床面積は検出したプランに従って18.48㎡と計測したが、主柱穴の位置と壁土壇D21・D22の存在から、住居の建て替えが行われていることが十分に考えられる。D11とD21は、共に長円形で類似形を呈し、両土壇の西側縁を結ぶ線と、P12とP13を通りD21の西側縁に至る線は平行である。また、P11とP12とD22の北側縁は直線で結ばれ、D11・D22は共に住居中央部よりも若干北寄りに位置する。焼土塊は床面に接しており、住居使用時あるいは住居の遺棄に伴うもので、焼土塊・D11・D21は南北方向に一列に並んで検出されている。以上のことから、D22はD21と共に継続して使用された可能性はあるが、焼土塊・D21がD22よりも新で、D11は円形から長円形へと拡幅されたものと考えられる。

ところで、主軸は以下の方法によった。P11～P14を主柱穴として、東西主軸N-81°-Wを得た。P11～13・P15を主柱穴とした場合の換置図形は第 図 に示すように、四壁とのズレが著しい。また、P13～P15を主柱穴として設け、P11～P14・P15～P13の交点の位置に主柱穴P16の代用とした例も十分に考えられる。この時の東西主軸は、換置図形のN-81°-Wと近似する。次に、P14-P11-P12-P15で、南北主軸N-13.5°-Eを得た。P11～13・P15を主柱穴とした場合の南北主軸の換置図形は、第 図 に示すように、4壁とのズレが著しい。なお、P11～15を使用して、P16の位置での場合も考えられる。

弥生土器・土師器 (図版86, 第123～125図, 表9)

壺 (4・5・23・24) 4はミニチュアの手捏土器で、口縁部のみ指押えのみで、体部は器内外共に丁寧にナデる。胎土は細砂を多く含み、焼成は良く、器内199暗い青色 (7.5B 3.0/2.0)・器外82にぶ黄橙色 (8.0YR 6.0/2.5)を呈す。5は小型の壺底部で器内外共に丁寧にナデる。



第 122 図 6号住居跡実測図 (1/60)

23・24は袋状口縁壺で、23は器外胴中部の断面コ字状凸帯は大きく突出し、胴部は斜方向ハケ目のままである。24の器内は磨滅するが荒いハケ目仕上げのままで、器外も同様である。底部の屈折部はやや丸味を呈するが、平底である。胎土は金雲母片・2～4mm大の砂粒を少し含む細砂質土で、焼成は普通で、色調は器内外共に59明るい茶色(3.0YR 5.5/4.0)を呈す。

壺(1～3・6～14・25) 1～3は中型で短頸のものである。1は器周残1/4で復原口径17.0cmを測り、器内は頸部直下からヘラケズリを施し、口縁部は直線的に外反し、上位で若干外弯気味となる。口唇端部は丸味を呈し、器外肩部にはハケ目を残すが、胴部はナデる。胎土に7mm大の金雲母片・9mm大の石英等を多く含む、焼成は良い。色調は器外73黄茶色(5.0YR 5.0/5.0)・器外67茶色(4.0YR 5.0/4.0)を呈す。2は、器周残1/4で復原口径15.8cmを測り、器内は

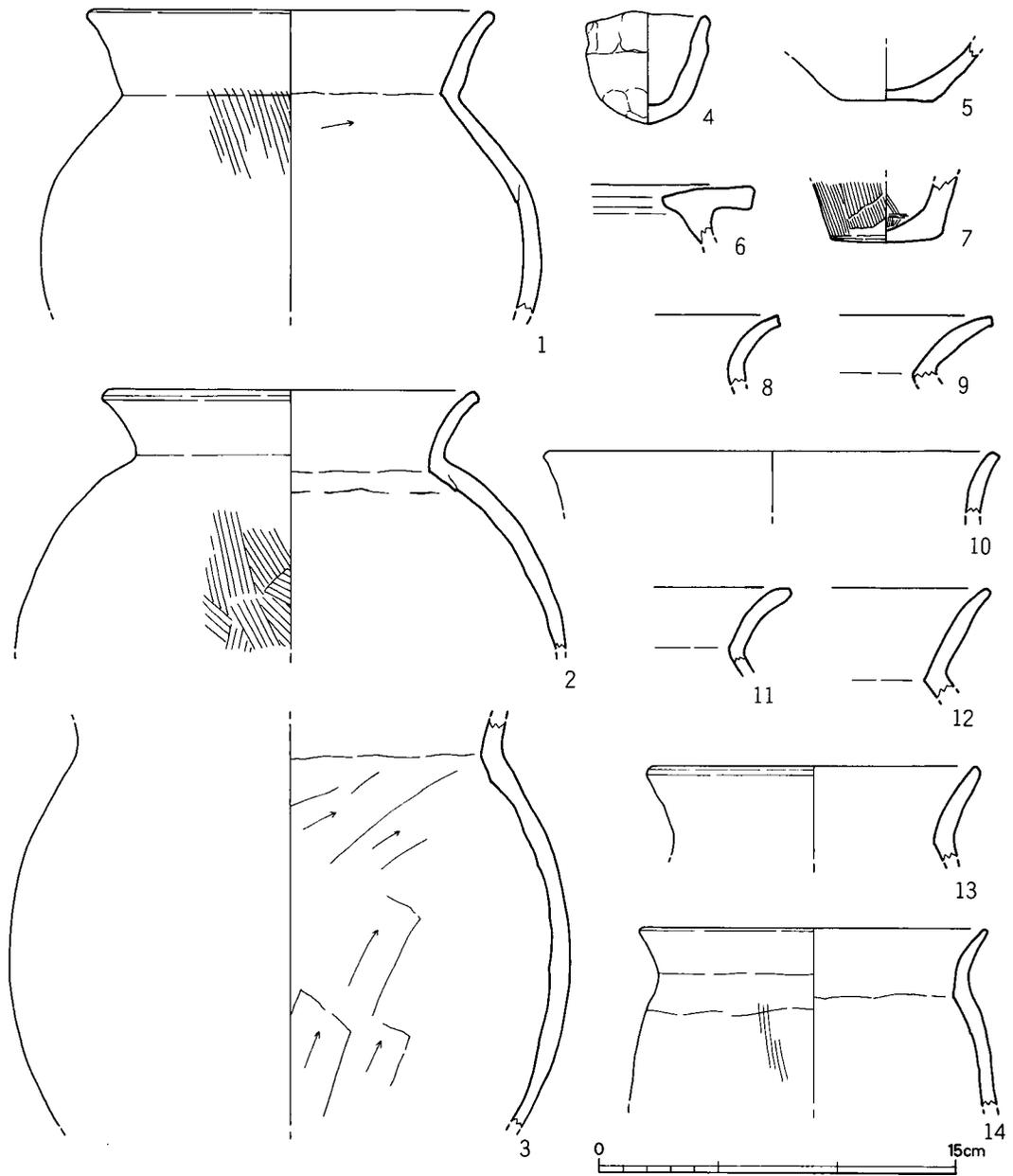
1 同様に頸部直下からへラケズリするが、肩部に胎土接合痕を残す。口縁部は外弯しつつ外反し、器外胴部は縦方向ハケ目のままである。胎土に微細な金雲母片・0.5mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良い。色調は器内86灰味黄茶色（8.5YR 4.5/2.0）・器外78にぶ黄橙色（7.5YR 7.0/5.5）を呈す。3は口縁部上位を欠失するが、やや上立気味に外反する口縁形である。

13・14は小型で短頸のものである。13の器内は頸部直下からへラケズリし、口縁部は直線的に外反するが、器外肩部との屈折はゆるい。14の器内は、頸部直下から縦～斜方向にへラケズリし、口縁部は指押え後に雑にヨコナデする。器外は頸部から肩部へと大きく屈折せずに移行し、胴部は雑に縦方向ハケ目・ナデを施しており器表に凹凸が認められる。器周残1/2弱で復原口径14.6cmを測り、胎土は1と同様で、8mm大の雲母変岩片を含み、焼成は良い。色調は器内82にぶ黄橙色（8.0YR 6.0/2.5）・器外83にぶ橙色（8.0YR 5.5/6.0）を呈す。

7は小型の底部で、25はやや異形である。

高杯（18～21）18は器周残1/4強で復原口径15.0cmを測り、器内外共に磨滅するが、器内に横方向ハケメを認める。杯部上位は直線的に外反し、最上位で外傾する。精製胎土に赤褐色粒・1mm大の砂粒を少し含み、焼成は悪い。色調は器内69うす橙色（5.0YR 7.5/6.5）・器外80暗い黄茶色（7.5YR 3.0/1.0）を呈す。19は器周残1/8で復原口径16.0cmで杯部の深さは約5.2cmである。器内外共に丁寧にナデ・ヨコナデを施す。杯下部は直線的に外反し、器外に丸味を呈する突出部を有して、杯上部は内弯し端部が大きく外傾する。胎土に微細な金雲母片・0.5mm以下の砂粒を多く含み、焼成は普通で、色調は器内36茶色（9.5R 4.5/7.0）・器外83にぶ橙色（8.0YR 5.5/6.0）を呈す。20は杯部の一部を欠失するのみでほぼ一周し、口径17.2cmを測り、深い。器内外共に丁寧にナデ・ヨコナデを施し、器外杯下部と上部の境に段を有するが、上・下部共に直線的に外反する。精製胎土に赤褐色粒を多く含み、焼成は普通で、器内外共に63明るい茶色（3.5YR 5.5/7.0）を呈す。

杯（15～17）15は器周残1/4で復原口径14.2cm・器高7.0cmを測る厚手の土器である。器内は丁寧にナデ、器外体部は一部にハケ目を残すが丁寧にナデ、底部もナデ仕上げでへラケズリを施さない。精製胎土に微細な金雲母片を含み、焼成は普通で、色調は器内外共に83にぶ橙色（8.0YR 5.5/6.0）を呈す。16は器周残1/4弱で復原口径15.0cmを測り、丸底の底部は遺存するが接合しない。器内は杯下半部を丁寧にへラナデし、上半部との屈折部のみ右廻りのへラケズリを施す。口縁部は丁寧にヨコナデし、器外中位は斜方向ハケ後にナデる。底部はへラケズリを施さずに丁寧にナデる。精製胎土に微細な金雲母を含み、焼成は良く、色調は器内外共に78にぶ黄橙色（7.5YR 7.0/5.5）を呈し、大きな黒斑を有す。17は器周残1/4で復原口径14.9cmを測る薄手の土器である。器内は丁寧にナデ・ヨコナデをし、器外中以下は手持ちのへラケズリで壁厚を薄く仕上げる。精製胎土に細砂を多く含み、焼成は良く、色調は器内63明るい黄色（3.5YR 5.5/7.0）・器外95明るい茶灰色（1.0Y 6.5/2.0）を呈す。

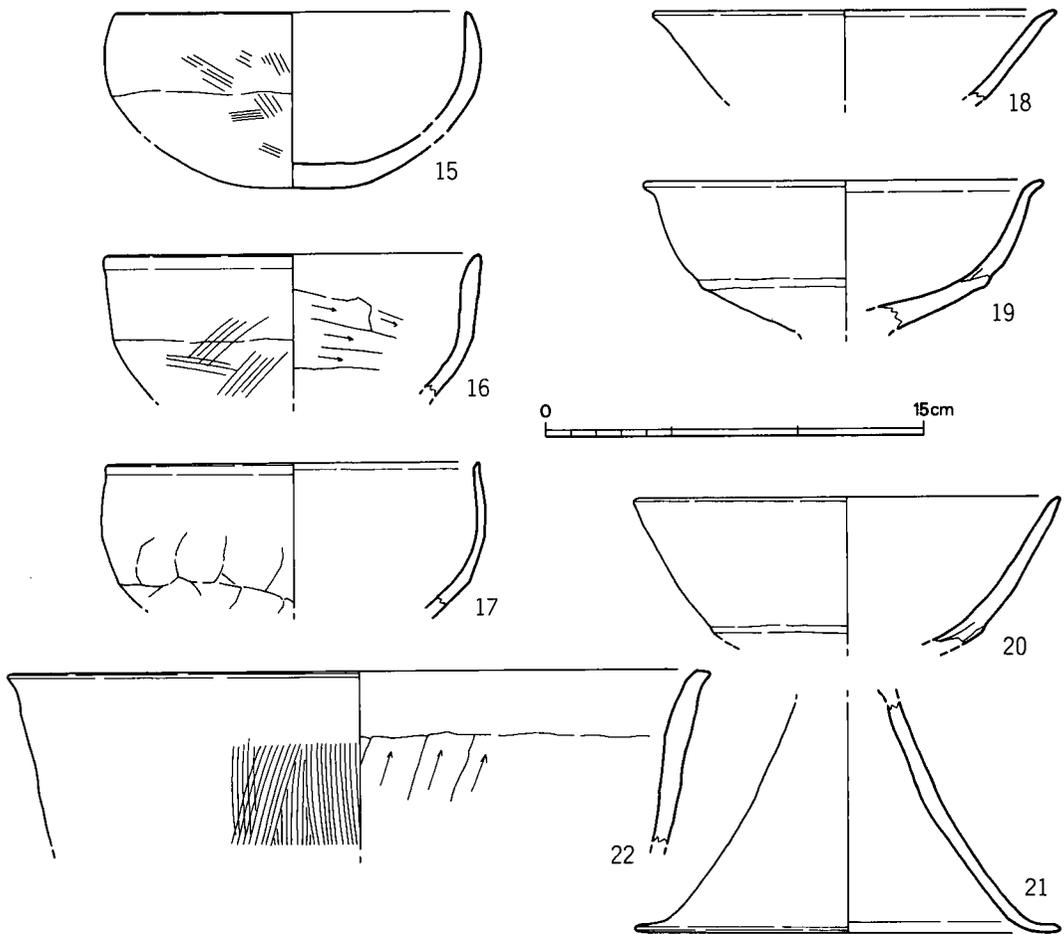


第 123 图 6 号住居跡出土土器实测图① (1/3)

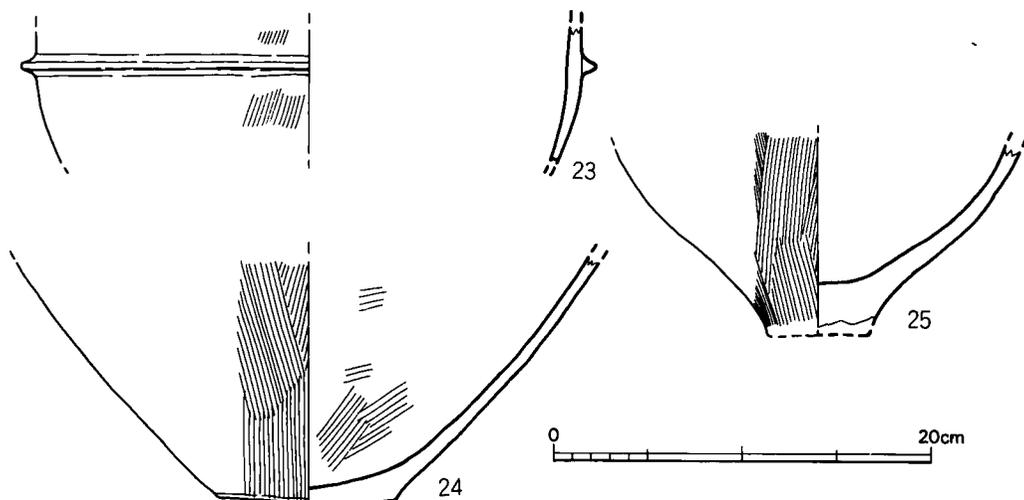
甗 22は器周残1/8で復原口径27.8cmを測り、器内は口縁部下にヘラケズリを加え、口縁部上面は平坦に仕上げ、器外は口縁部のみヨコナデを施して以下は縦方向のハケ目のままである。把手部や底部が遺存せぬが、B地区1号住居出土例から甗と考えられる。微細な金雲母片・角閃石を含む細砂質の胎土に0.5~1.5mm大の砂粒を多く含み、焼成は良い。色調は器内44茶灰色(1.0YR 6.0/0.5)・器外86灰味黄茶色(8.5YR 4.5/2.0)・器肉91暗い黄茶色(10.0YR 3.5/3.0)を呈す。

須恵器(第133・134図, 表10)

甗(8~11・21) 8~11・21はいずれも同部破片で、8・10・11の器外には薄手の自然灰釉が認め



第124図 6号住居跡出土土器実測図②(1/3)



第 125 図 6号住居跡出土土器実測図③ (1/4)

められる。器内はいずれも細い青海波で、断面は非常に浅く、一部をナデ消し、器外は大半のタタキ痕をへラケズリし、断面は非常に浅い。そのため、器内の青海波はツルツルし、器外のタタキ痕は一部が残るのみで直坦面を有す。21の器内は青海波を完全に縦方向ナデで消し、器外は大半のタタキ痕をへラケズリし、焼成は普通である。

8～11は以上の技法と共に、灰釉も含めてこの色調が共通し、いずれも焼成は良く、同一個体と考えられる。なお、11は主柱穴P13内出土で、新・旧いずれの住居に伴うものであるかは不明であるが、住居内出土の土師器との共伴資料といえる。また、他の須恵器の出土位置は、住居プラン確認後、水没による流失を防ぐため発掘前に最上層出土として埋土中から収納したものである。

石製品 (第111図4)

**砥石** 4は中央土壌D11上の床面から2.0cm上位で出土した。平面図に示す表面全体と、側面は上側及び左下部位を若干使用し、他の側面は敲打によって体形を整えている。裏面は剝離面のままであるが、周囲はいずれも着地床としてすれている。粘板岩製の仕上砥で、色調は94うす黄茶色 (1.0Y 7.5/2.0) を呈す。

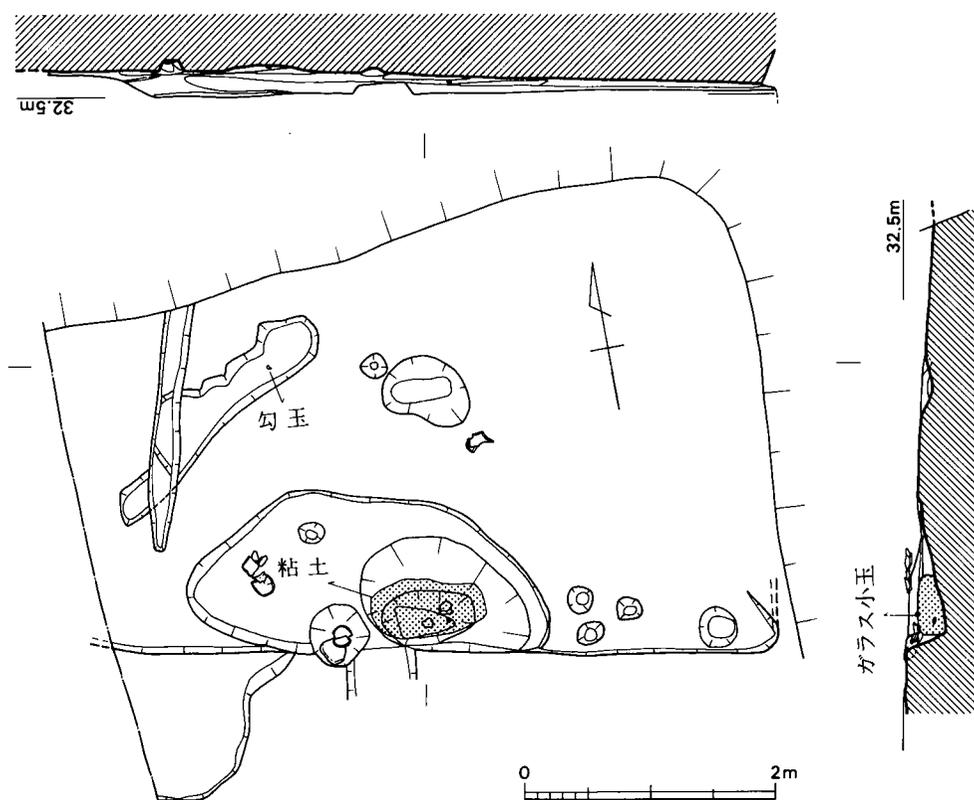
**7号住居跡** (付図)

調査区の西端で検出した。北半部は、古墳前方部外濠南側縁で切られ、南壁は既設の工事用道路下のため、その一部を発掘した。床面からの現存壁高は、南壁部で8cmを測り、床面はほぼ水平である。東壁部での土壌は現存壁部まででは検出されなかった。東西主軸とすれば約N

-80°-Wを測り、床面のレベルは6号住居と同じである。遺存状態が悪く、埋土中からも出土遺物はなかった。

**8号住居跡**（図版81-2，第126・164図，表52～54）

調査区の東端部で検出した。北側を1号・東側を4号溝状遺構で切られている。また、南壁を切って、47×50cmのピットが検出され、中から18×20cmで厚さ10cmの扁平な河原石と共に、杯1個体が出土した。このピット東半部を更に切って、1号溝状遺構へと続く2号溝状遺構が検出され、2号溝状遺構は住居よりも新出である。当初は、西壁が検出されず、6号溝状遺構の続きとも考えたが、南壁南半部が直線状を呈することから、南北方向にトレンチを設け、第 図に示す土層の確認を得た。第 図5 a層は6号溝状遺構の埋土で、一部南壁西半部に及んでおり、5 a層を除去すると、南壁西半部が東半部同様に確認できた。しかし、西壁は前述のとおり確認にまでは至らなかった。床面からの現存壁高は、6cmと悪く、床面は南半部までは



第 126 図 8号住居跡実測図 (1/60)

ほぼ水平であるが、北端部では若干低くなっている。南壁土壙D21内からは、48×93cm大で厚さ40cmの青灰色粘土ブロックを混入する細層が塊状で認められ、中からガラス製小玉が出土した。この青灰色粘土は、D21の周囲に広がる東西×南北で2.9×1.2mの床面からの深さ2～9cmの長円形土壙D22から、小ブロックで多く出土したが、床面に接しても多数認められた。中央土壙D11内の埋土は、黒色灰層であった。北側では、2条の小溝状遺構が検出され、第128図の土製勾玉が床面から出土した。2条の小溝状遺構の埋土は、住居埋土と同様であった。

なお、床面積の復原は以下の方法によった。直線状を呈する南壁と、D11・D21のそれぞれの中心を結ぶ線は直交の位置にある。南東部の壁コーナーが検出されているので、南北Oから東壁面までの距離は2.78mと計測される。また、南壁から距離はD11の中心までで2.02m、P21の中心までで2.26mと計測される。P21までの距離を採れば $(2.78 \times 2.26) \times 4 = 25.13\text{m}^2$ で、D11を採れば $(2.78 \times 2.02) \times 4 = 22.46\text{m}^2$ である。南北西半部はやや内弯気味で、西側の小溝状遺構の方向が西壁と関与することも考えられ、また他の住居跡で単に中心Oから直交壁間の距離を計測して同数の計算を行えば、床面積現況より大きい数字を得る。ここでは、復原床面積を、22.46㎡前後と考えておきたい。

ところで、主軸はP21が存在し、前述のように、南壁とD11・D21の中心を結ぶ線が直交関係に位置することから、東西主軸N-79.5°-Wを得た。P31は、支柱穴P12・13が未検出であるので、P14とせずにP32を欠番とした。

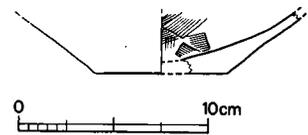
#### 土器（第127図）

**壺** 甕の底部片で、器周残1/2弱で復原底径7.0cmを測り、器内は荒いハケ目のままで、器外は横方向にヘラナデを施し、底部は平坦にナデる。

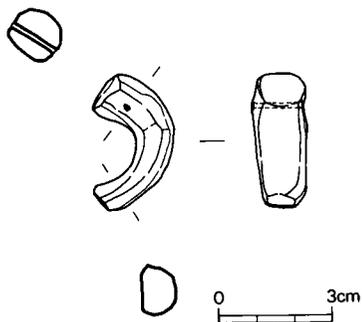
図示し得る破片は1のみであるが、共伴したD21内出土の他のものは、いずれも小破片であるがヘラケズリ・タタキ痕を認めないハケ目あるいはナデ仕上げの胴部片である。なお、西壁近くの小溝出土の破片も同様である。

#### 土製品（第128図）

**勾玉** 西壁寄りから中央土壙D11の方向に走る溝状遺構の床面から出土した。腹部および側面図左側部は丁寧にヨコナデし、頭部上面および尾部下面は丁寧にナデ、右側部および背部は面取り状に指で押えてナデ仕上げをしている。頭部の穿孔は細い針状工具で行い、孔径は約0.8mmを測る。精製胎土に微細な金雲母粒・0.5mm以下の砂粒を含み、焼成は良い。色調は右側部～背部にかけて80暗い黄茶色(7.5YR 3.0/1.0)・左側部～腹部にかけて59明るい茶色(30YR 5.5/4.0)を呈す。



第127図 8号住居跡出土土器実測図(1/3)



石器 (第111図2)

石庖丁 2は南壁寄りで出土した。一部を欠損するが、研磨時の擦痕が多数認められ、断面厚は6.0~7.0mmを測る厚手のもので、刃部もやや丸味を呈す。小型であるが、孔側部に紐による磨滅痕は顕著ではない。輝緑凝灰岩製で、色調は275紫味黒色 (2.5R P 2.5/0.5) を呈す。

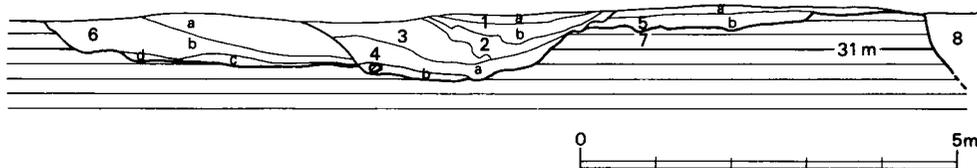
第 128 図 8号住居跡出土土製  
勾玉実測図 (1/2)

## 2. 溝状遺構と溝

プラン検出時に、現代農業用水路を5号溝状遺構としたのをはじめ、1~6号溝状遺構とし、下位で重複する新たな遺構の検出に備えた。発掘時の遺物出土状態により、2・5号を溝とし他を溝状遺構として、番号はそのまま残した。

### 1号溝状遺構 (図版82-2, 第129図, 付図)

断面は梯形状を呈し、上面幅2.2~3.7m・溝底幅1.0~1.2m・深さ0.78~0.94mを測る。溝底は西端部よりも約4~5cm低く、トレンチ部よりも15cm程度低い。溝底には4b層の暗灰色



第 129 図 溝状遺構断面図 (1/100)

土層番号	土 層 名	検 出 遺 構	土層番号	土 層 名	検 出 遺 構
1a層	茶褐色粘質土	1号溝状遺構埋土	6a層	灰褐色砂質土	3号溝状遺構埋土
1b層	暗灰色粘質土		6b層	暗褐色砂質土	
2層	灰色粘質土		6c層	暗茶褐色砂質土	
3層	粘質黄褐色土ブロック混入茶褐色土		6d層	暗褐色砂質土	
4a層	緑黄灰色粘質土	4号溝状遺構埋土	7a層	白灰色砂	地山無遺物土
4b層	暗灰色粘土		7b層	灰緑色細砂	
5a層	マンガン粒含む褐色砂質土	6号溝状遺構埋土	7c層	茶褐色細砂	
5b層	暗褐色粘質土	8号住居埋土	8層	灰色砂混粘質土	5号溝状遺構埋土

粘土が検出され、流路を東→西にとっていたようである。このことは3層上面でも認められ、同数に若干西端へと低くなっていた。なお3層は粘質黄褐色土ブロックを含む茶褐色土で、人為的に埋められており、東端部の4号溝状遺構と接する部分では、この埋土を掘り込んで、1b層の高さまで河原石による石組遺構が検出された。石組中には径5～10cm大の木杭が打たれており、井堰の用をなしたと考えられる。

溝主軸は、N-89°-Eで、4a層から若干の埴輪片・3層から茶器・瓦等が出土し、その他に弥生土器片・土師器および以下の土器も出土した。

出土土器には弥生土器・土師器・陶質土器・須恵器・茶器類があるが層位を無視して出土している。  
弥生土器・土師器（第130図）

壺（1～4・11） 1・3・4は3層出土で、3は器周残1/8で復原口径19.5cmを測る袋状口縁部片である。器内面は指押え痕が著しく、器外は斜方向ハケ目を残す。胎土に金雲母片・赤褐色粒を若干含み、0.5～3.0mm大の砂粒が多く、焼成は良く、器内外共に83にぶ橙色（8.0YR 5.5/6.0）を呈す。4は3と別個体で、器内外の磨滅が著しいが、器外頸部は縦方向ハケ目を認め、肩部は断面三角状凸帯を2条付す。器周残3/8で復原頸部径12.0cmを測り、胎土に赤褐色粒を含み、0.5～1.5mm大の砂粒が多く、焼成は普通、色調は78にぶ黄橙色（7.5YR 7.0/5.5）・器外39にぶ赤味橙色（10.0YR 4.5/4.5）を呈す。11は5層出土のミニチュア土器である。

甕（5～7・10） 5は5a層出土で、口縁部をヨコナデし、上面端部は若干凹み、側端面は外傾し、シャープに仕上げる。10は5-b層出土で、5よりも頸部の屈折がシャープであるが側端面の仕上げは同様である。6・7も5層出土である。

高杯（9・13） 9は5b層出土で、器周残1/4弱で復原口径18.0cmを測り、器内外共に磨滅し、精製胎土である。13は5a層出土の脚下半部片で、器内はシボリ目痕を縦方向に指ナデし、裾端側面は若干凹んでシャープに仕上げる。胎土に微細な金雲母片・角閃石・0.5～1.5mm大の砂粒を多く含む。

杯 12は5b層出土の破片で、器内は斜方向ハケ目のままで、器外は体部上位を丁寧なヨコナデし、下位は密な斜方向ハケ目で仕上げる。

鉢 8は5a層出土で、器周残1/8で復原口径24.5cmを測り、器内体部下位はナデ・上位はい横方向ヘラナデ・口縁部は横方向ハケ目を残し、器外は体部上位は斜方向ハケ・下位はナデを施す。精製胎土で、焼成は悪く、色調は器内外共に66にぶ黄橙色（4.0YR 7.5/7.5）を呈す。  
須恵器・陶質土器

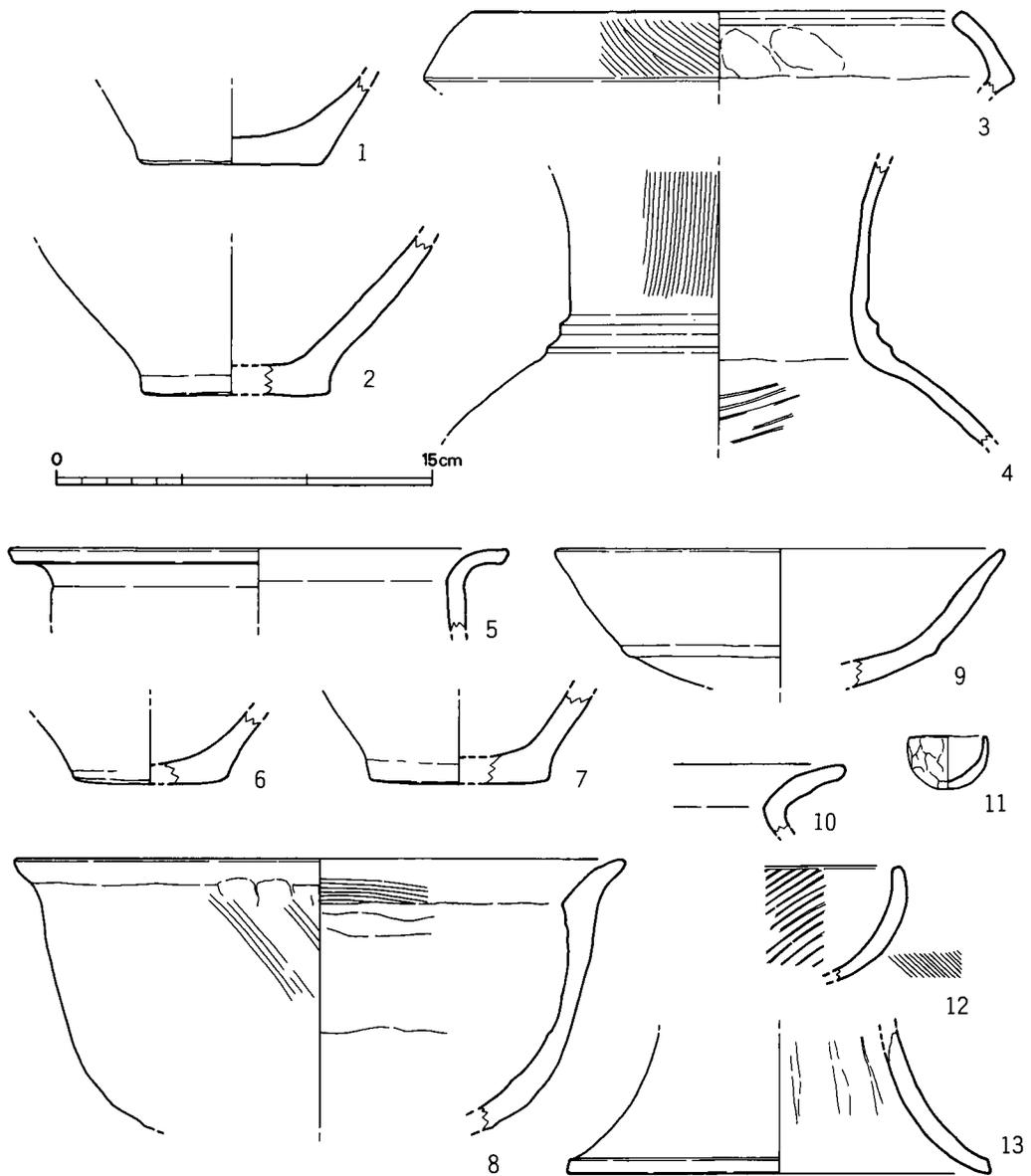
陶質土器（第132図10）

壺 10の器内のタタキ当て具痕は青海波ではなく、凹レンズ状のくぼみを呈するもので、その後を丁寧にヨコナデするが凹みは消えていない。器外は丁寧にヘラケズリ後を横方向にナデ、タタキ痕を認めない。焼成は普通で胎土には黒い微粒子を含む。小型の壺胴下半部片と考

えられる。

須恵器（第135図35，表11）

35は甕胴破片で，器内の色調を除いて6号溝状遺構出土の36と同一個体と言える程類似する。



第130図 1号溝状遺構出土土器実測図

## 2号溝（付図）

4号溝状遺構の西側で検出され、8号住居を切って1号溝状遺構へと続く。断面は梯形状を呈し、上面幅0.55m・深さ0.1mを測り、溝底は北端部が南端部よりも9cm低く、流路を南北にとっている。溝内埋土は、上層が1号溝状遺構1a層と同数の茶褐色粘質土で、下層は灰白色砂層であった。遺物の出土はなく、南端部での5号溝との切り合いも不明であるが、5号溝コーナー部に水口を有する現代用水路と平行して北流することから、新出のものと考えられる。溝主軸は、北半部でN-2°-W・南半部でN-7°-Eである。

## 3号溝状遺構（第129図，付図）

塚堂古墳前方部南側外濠と平行し、検出時の遺物の出土がなかったので全掘した。地山上層は黄褐色細砂質土で、下層は白灰・灰緑・茶褐色砂で土器片を出土しないが、埋土である6層はいずれも砂質土で、若干の土器細片を含んでいた。検出面から溝底までの深さは約35cmで、1号溝状遺構に向けて傾斜する。検出面から18cm下の肩部で埴輪破片を出土した。地山上層および下層の7層はいずれもほぼ水平に堆積しており、6層の堆積状態とは異なっている。1号溝状遺構によって切られているが、6号溝状遺構埋土の5a層が6a層の上層であることも考えられる。溝主軸は、N-87°-Eである。

### 出土遺物

土器の破片が若干出土したが、陶質土器・須恵器の破片はない。

## 4号溝状遺構（図版82-2，付図）

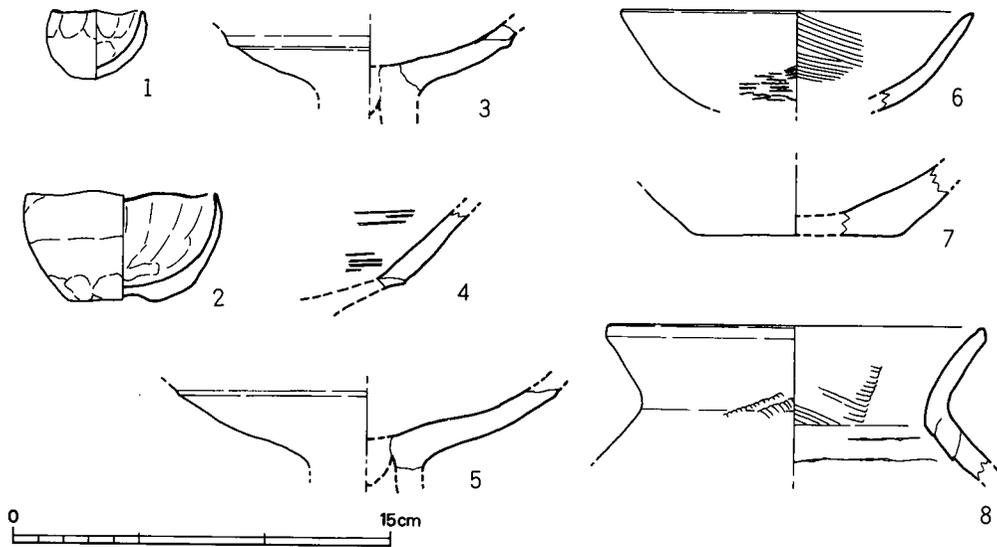
C地区東端で検出され、埋土は1号溝状遺構2層と同数の灰色粘質土の単一土層で、検出面からの深さは65cmである。溝中位以下は20cm大の河原石混りの砂利層中に掘られ、瓦が若干出土した。北端で、1号溝状遺構に接続し、3層を切っているが、井堰は西岸に設けられており、3号溝状遺構と関連するものと考えられる。東接するD地区の調査では、この東岸が出土しておらず、D地区境界を北流する農業用水跡と東側では重複するものであろう。溝主軸は、N-2°-Eである。

## 5号溝（第129図，付図）

前述のとおり、流路変更に埋めもどされた農業用水路で、瓦・茶器等が出土し、それは溝、底にまで至っていた。コーナー部に設けられた水口部から深さ数cmで北流する用水路の西側に平行して、深さ1.2mの1・3・6号溝状遺構を横断するトレンチを設けて、第129図の土層を得た。

## 6号溝状遺構（第129図，付図）

1号溝状遺構と2・5号溝によって切られ、8号住居を切っている。トレンチ設定部での深さは10m程であるが、西側では3~50cmの深さをなし、溝底は1号溝状遺構に向けて10~20cm程深くなっている。埋土上層は5a層の茶褐色粘質土であるが、下層はやや暗褐色砂質気味土



第 131 図 6号溝状遺構出土土器実測図 (1/3)

へと変化していた。出土遺物に埴輪・瓦等を含まず、土師器・陶質土器破片等が出土した。溝底は東側が西側より15cm程低く、溝主軸は大略東西方向である。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・陶質土器が出土している。

弥生土器・土師器 (第131図)

壺 (1・2・7・8) 1・2はミニチュアの手捏土器で、1は精製胎土を使用し、器内外共に指押え・ナデを施す。2は器内は底部から放射状に指先でナデたままで、器外底部は上げ底を呈している。8は器周残1/8で復原口径15.2cmを測り、器内肩部はナデが雑で指押え痕・胎土接合痕を明瞭に残し、口縁先端は若干凹み立ち上がる。器外肩部には斜方向ハケ目を一部に残す。胎土は微細な金雲母片・0.5~1.5mm大の砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は器内76暗い黄茶色 (7.0YR 4.0/2.0)・器外54明るい茶色 (2.5YR 5.5/8.0) を呈す。

高杯 (3~5) いずれも杯部片で、4の杯上半部は直線的に外反する。

杯 6は器周残1/8で復原口径14.0cmを測り、器内は斜方向ハケ目のままで、器外は上位はヨコナデを施すが、下位は細いタタキ仕上げのままである。胎土は精製胎土に微細な金雲母片を含み、焼成は良く、色調は器内外共に63明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) を呈す。

須恵器 (第132・133・135図、表12)

壺 第132図6の器内はヨコナデのみを認め、器外はやや斜方向の平行タタキ痕を一部ナデ消すが、手持ち時の指紋が残り、焼成は良い。やや小型の壺の胴下半部の破片と思われる。

竈 第133図4は口縁部破片で、器内はヨコナデを施すが、自然灰釉部が浅く斑点状に剝離し、器外は丁寧にヨコナデする。

第135図30・33・34・36・38は甕胴部破片である。33の器内は浅い青海波の状態までナデた後で、更に親指を除く指を閉じた状態で、指先で縦方向に近いナデを施し、器外は平行タタキ痕の大半をやや幅広で短い軌跡でへラケズりする。そのため、器内の青灰波と指先ナデは交互に認められる。これらのことから、胴下半部の破片と考えられ、焼成は良い。他の破片の器内は33と異なり、直接青海波の一部あるいは大半を前述同様に指先ナデし、器外は平行タタキ痕の一部をナデるがへラケズりせず、焼成は良い。これらのことから、30・34・36・38は同一個体の破片と考えられるが、器外の色調は他は青味灰色を呈するのに30は青味黒色を呈し、別個体であることも考えられる。

第132図12の器内はタタキ当て具による凹凸が著しく、青海波をナデるが凹部では消えていない。器外は節状の平行タタキ痕を軽くナデ、底面の一部をへラケズりする。

### 3. その他の遺構と遺物

#### (1) 塚堂古墳前方部南縁外濠南肩部（図版78-2、付図）

はじめに述べたように、南半部からの排土の一部を除去し、外濠埋土を15cmの深さまで掘り下げた。隣接する排土崩壊の危険性があるため、それ以上の発掘を断念したが、遺物は6号住居から須恵器破片の出土をみていたので、この住居から以東と以西に分けて取り上げた。

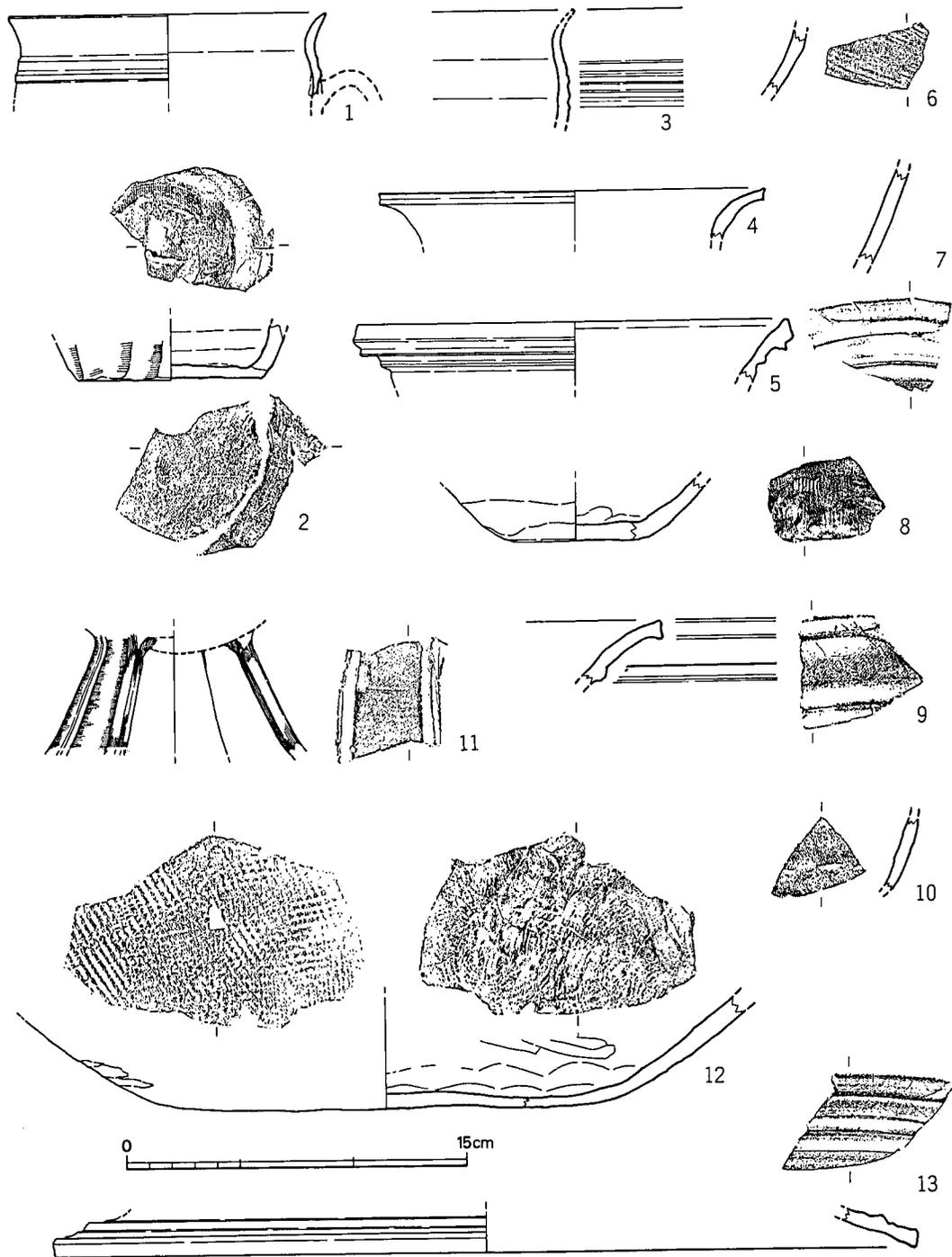
外濠内の遺構は、6号住居北側の埋土上面から掘り込まれた、径50cm・深さ12cmのピットのみであった。床面には30cm大の河原石が出土したが、遺物の出土はなかった。ピット内の埋土は、6号住居西壁を切って掘られたピットのものと同じ砂混灰色粘質土であった。

なお、出土遺物のなかで3号住居北側の葦石上から出土した若干の埴輪類は第3章で報告し、ミニチュアの手捏土器はその他の遺物の項で報告する。陶質土器・須恵器は以下のとおりである。

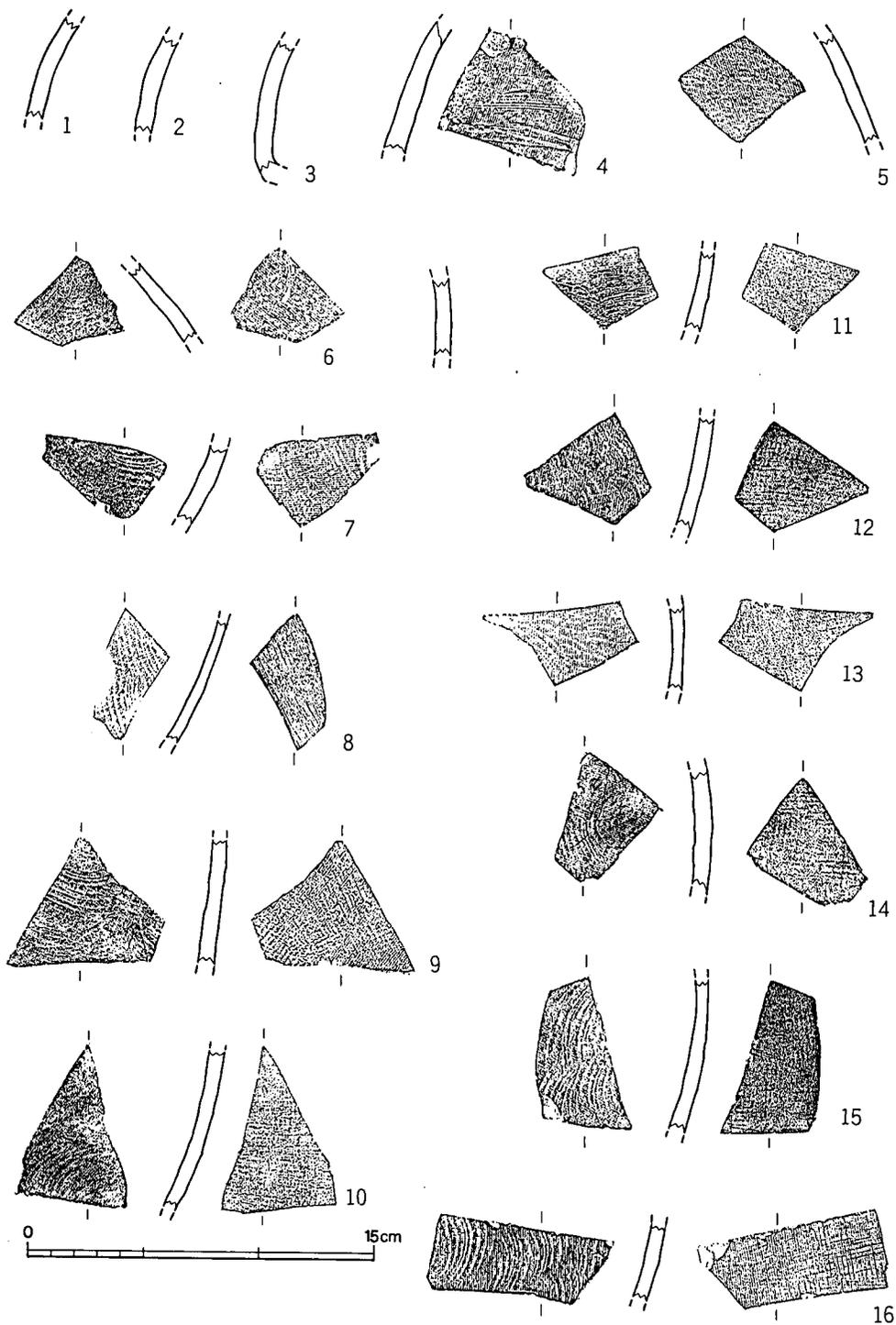
#### 陶質土器（第132図・表13）

壺（4・8） 4は口縁部片で、器内外共にヨコナデし、シャープな稜を有して内傾する端面は凹み、先端は跳ね上がり、内側は若干凹む。焼成は普通である。8は底部片で、器内のタタキ当て具痕は青海波ではなく、凹レンズ状のくぼみを呈するもので、その後を丁寧にナデるが、そのくぼみ中に拓本に示すような楕状条痕が一部に認められる。器外は丁寧にへラケズり後、一部を横方向にナデたようで、タタキ痕を残さず、焼成は良い。

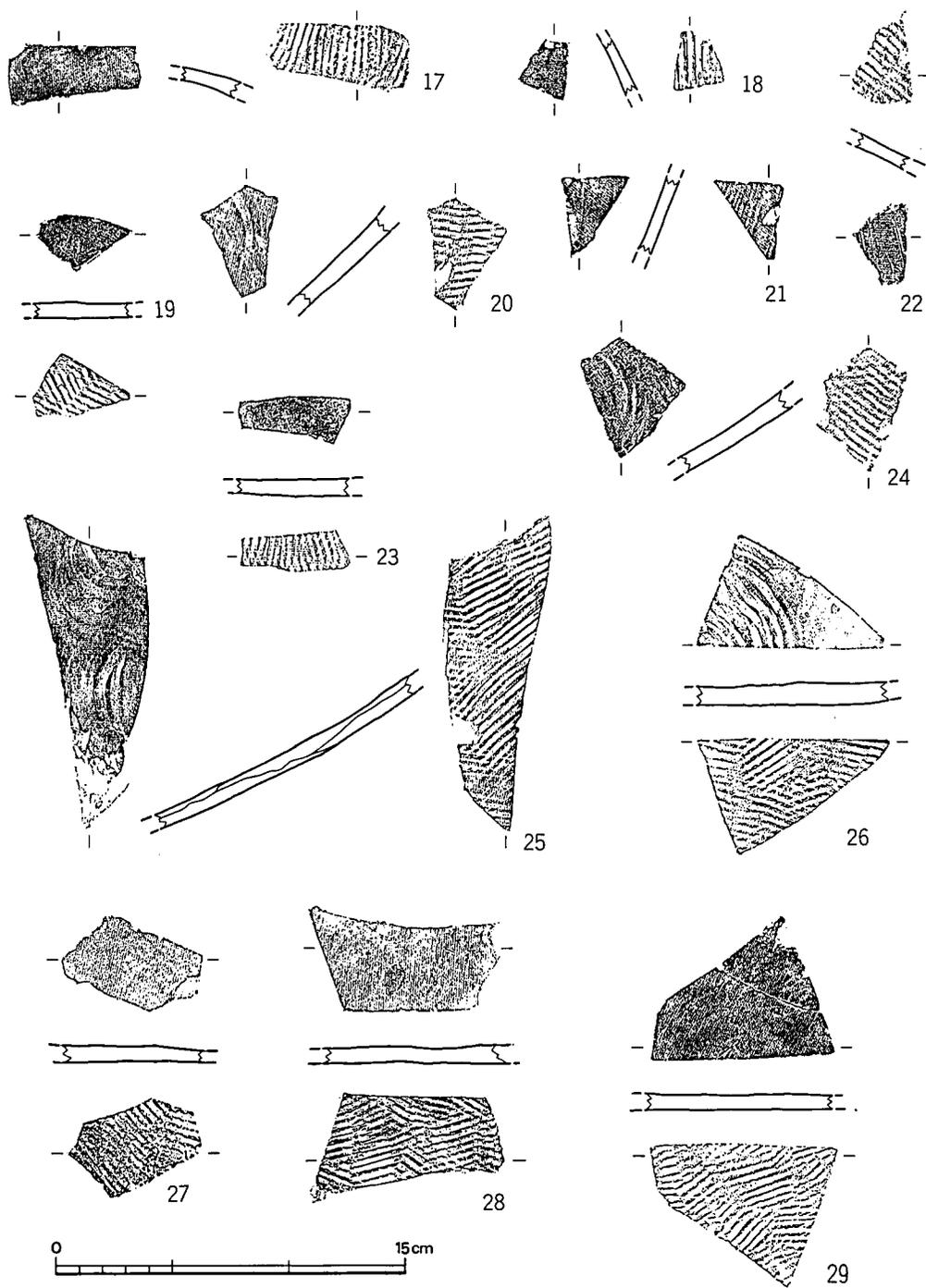
高杯 11は復原すると4透しとなり、脚部よりの透し部が若干大きい。器内外共に丁寧にヨコナデを施す。透し部の切り込みはシャープで、その後で稜を親指と人差し指でつまむようにし



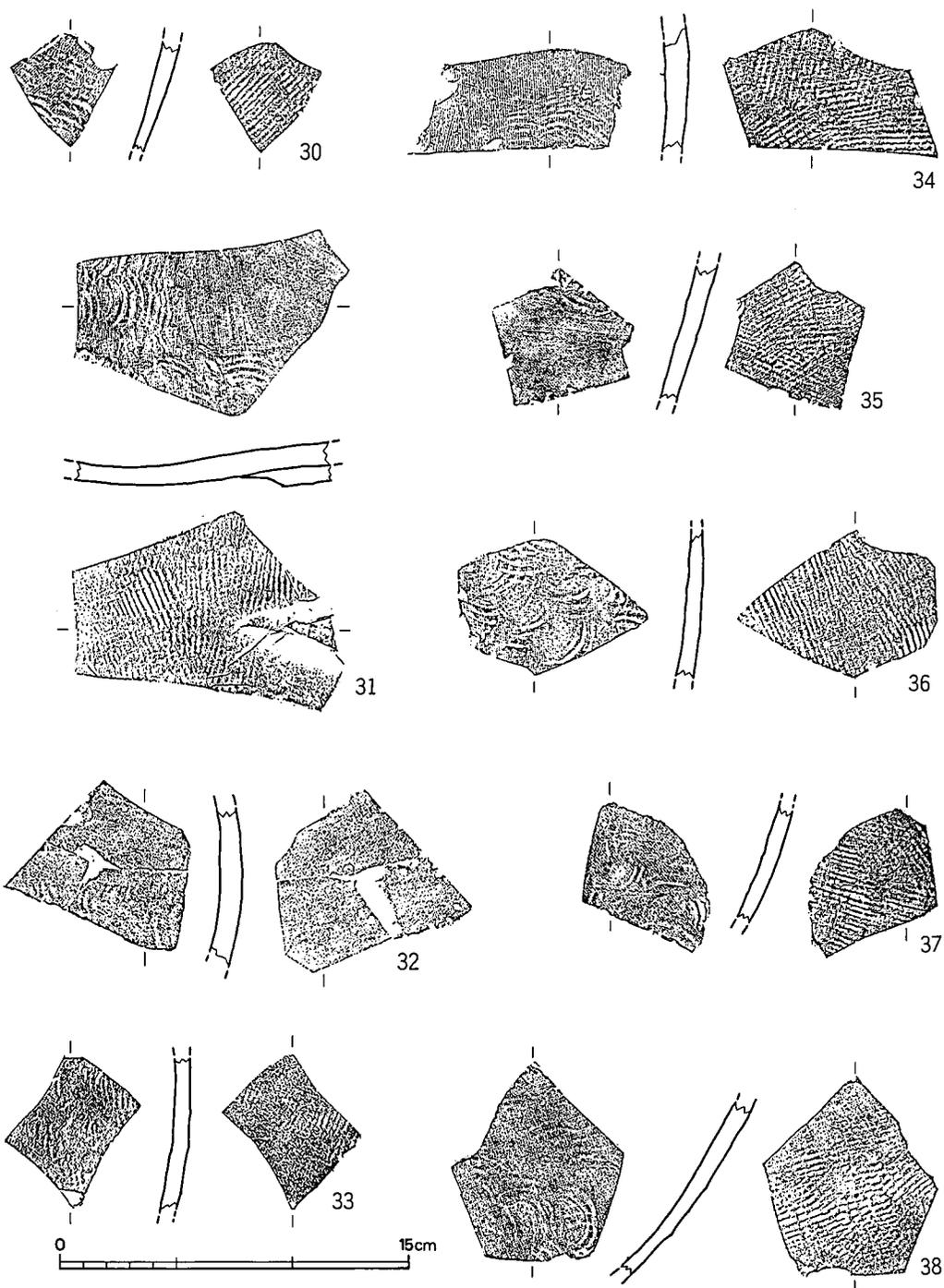
第 132 图 C地区出土陶質土器・須惠器実測図 (1/3)



第 133 图 C地区出土須惠器实测图① (1/3)



第 134 图 C地区出土須惠器实测图② (1/3)



第 135 图 C地区出土須恵器实测图③ (1/3)

て縦方向にナデ、杯部と接する最上位では指先でナデて仕上げる。焼成は良く、胎土には黒い微粒子を若干含む。

**把手付鉢（1～3）** 1の器内は丁寧にヨコナデし、器外把手部の器内へと穿孔取り付け部では、断面が内側に肥厚し、残余の胎土のみナデるがその痕跡は明瞭に認められる。器外も丁寧なヨコナデを施すが、肩部に1条現認される凸帯はシャープな断面三角形を呈さず、低い梯形で、凸帯直下に付された肥手は剥離欠損する。焼成は良い。2は1より口縁部が長く、下位の凸帯は低く、断面三角形突帯から大きく退化したものである。共に最大径は口縁にあり、体部径が若干小さく、高杯ではないと考えられる。3は底部で、器内底部中心部は強いナデ、体部との屈折部は横方向にナデを一周させる。器外体部は右廻りにヘラで削り、底部もヘラケズリする。

須恵器（第132～135図・表13）

**壺 第132図5**は器内外共にヨコナデで、端部・凸帯いずれもシャープな稜を有す。端側面は幅広に凹み、焼成は良い。

**甕（第133～135図）** 3は口頸部片で、器内外共に丁寧にヨコナデし、器内上半部と器外肩部に薄手の自然灰釉を認める。12・15は胴下半部片で、器内は細い青海波で、断面は浅いが丁寧にナデた後も全面に残し、器外は格子状タタキ痕をナデあるいはヘラで削る。このため格子の形状は16ほど明瞭ではないが、15では0.9～1.0cmの正方形に近い大格子中を更に5×5=25の格子に細分した形状で認められる。以上の3・12・15は同一個体とも考えられる。

19・23・29の器内は共に同一個体で丁寧なナデでタタキ当て具痕を消し、器外に平行タタキ痕を放射状に残すが一部ナデを施す。焼成も良く、陶質土器の底部と充分に考えられるが破片であるため一応須恵器として報告する。

17も胴下半部片で、器内外共に技法は19・23・29と同様であるが、色調が若干異なり、器外に自然灰釉を認める。

26は底部・25は胴下位の破片で、共に器内は青灰波の一部をナデ消し、器外も平行タタキ痕をナデる。焼成は良く、19・23・29に類似するタタキ目である。22も胴部片であるが、器内はナデのみを認め、器外は平行タタキ目のままである。

31・37は33と器内外の技法・焼成・色調共に類似し、ほぼ同一個体と考えられる。32は器内の技法は31・37と同様で、器外はヘラケズリ・ナデでタタキ痕は認めない。

**器台（第132図13）** 13は器内外共に丁寧にヨコナデし、断面三角状凸帯はシャープな稜を有し、焼成は良い。

なお、表13に示した出土位置は、外濠埋土を約5cm掘り下げて最上段の葺石を検出するまでに出土したものを最上層、10～15cmまで掘り下げる間に出土したものを上層、外濠肩プラン検出時から15cm掘り下げる間に出土したものを上層までとして示したものである。

**鉄鏃** 第136図は、塚堂古墳前方部南縁外濠南肩部出土で、現存長5.4cmで、鋒を1.0cmほど欠損し、茎は1.5cmを残す。身はシャープな鑄を有す。形態や肉眼によるヒビの観察などから、おそらく鑄造品と考えられるが、刃部に若干の差異が認められるのは研ぎによるものか。

## (2) C地区出土土器

以上の他に、塚堂古墳南側縁外濠埋土中・5号～8号住居検出時水田耕作土床土下の最上層・床土中等から出土した弥生土器・土師器・陶質土器・須恵器に以下のものがある。

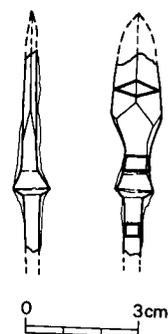
弥生土器・土師器（第137図）

1～4・7・8・10は4号～8号住居間、6は1号溝上遺構上面、9は外濠埋土中（15cm下）から出土したもので、5は表採資料である。

**壺（1～4・9）** 1は器周残1/8強で復原口径10.9cmを測る小型の短頸広口の壺で、器内頸部直下からヘラケズリを施したのか否かは磨滅にて不明である。精製胎土に金雲母粒・赤褐色粒・細砂を多く含み、焼成は普通で、色調は器内外共に39にふい赤味橙色（10.0R 4.5/4.5）・器肉54明るい茶色（2.5YR 5.0/8.0）を呈す。2も器周残1/4強で復原口径13.0cmを測る小型の短頸壺で、器内肩部はヘラケズリ・口頸部はヨコナデを施し、口縁部外端面は若干凹む。器外は縦方向ハケ目後にヨコナデを施す。胎土に金雲母粒・0.5～1.0mm大の砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は器内外共に59明るい茶（3.0YR 5.5/4.0）を呈す。3は器周残1/8で復原口径20.3cmを測る袋状口縁壺で、器内頸部は荒い横方向ハケ目のままである。口縁部はヨコナデを施すが、指押え痕を残す。器外は口縁部を横方向の、頸部を縦方向のハケ目で仕上げたままである。胎土に微細な金雲母片を少し含み、0.5mm大の砂粒を多く含み、焼成は良く、器内外共に59明るい茶（3.0YR 5.5/4.0）を呈す。4は器周残1/8強で復原口径20.0cmを測る中型の広口壺で、器内頸部は磨滅し、口縁部は横方向ハケ目のままで、端部のみヨコナデを施し、端面はシャープに凹む。胎土に金雲母粒・1.0～2.0mm大の砂粒を多く含み、焼成は良く、器内外共に83にふ橙色（8.0YR 55/6.0）を呈す。9はミニチュアの手捏土器で、器内外共に磨滅する。

**壺（5・6）** 5は器周残1/4弱で復原口径22.0cmを測り、頸部の屈折は器内外共に稜を有す。器内は口縁部の斜方向ハケ目を上位のみ横方向ヘラナデし、端部のみシャープなヨコナデによって側端面は凹む。器外肩部は太目のタタキ後を一部のみ縦方向のハケ目を施す。胎土に0.5mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は82にふ黄橙色（8.0YR 6.0/2.5）を呈す。

**高杯** 10は器周残1/4弱で復原裾部径10.0cmを測り、同一個体であるが2つの破片となり部位に重複するところがあるが接合できない。器内下半部は丁寧にヨコナデを施すが、上半部は指ナデで若干の凹凸を認める。器外下半部は丁寧にヨコナデを施すが、上半部は多角面を有し、ナデを施す。下位のみでは口縁部片とすべきであろうが、上位の技法と内弯気味な体部形状か

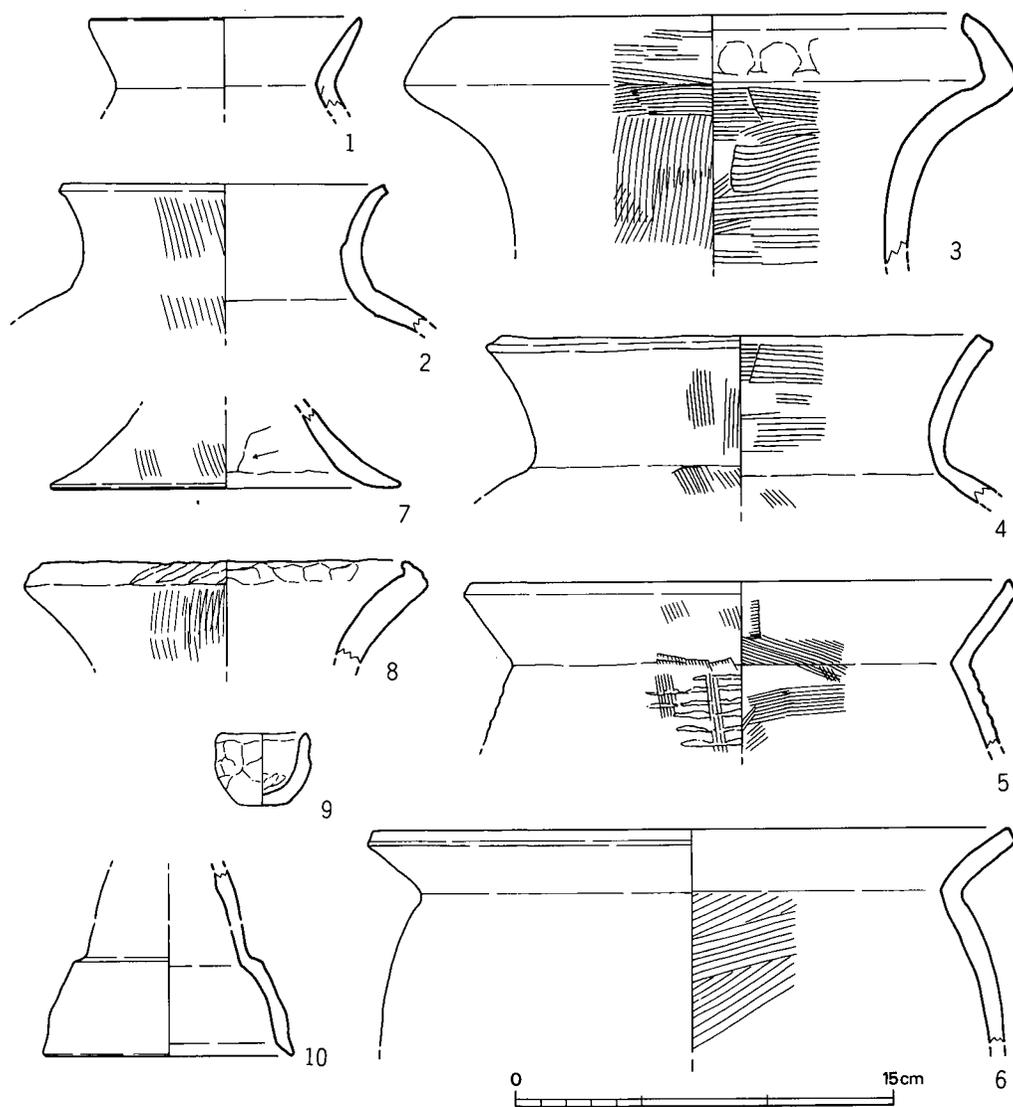


第136図 塚堂古墳前方部南縁外濠出土鉄鏃実測図（1/2）

ら一応高杯の脚部片としたが、外来系の器台とも考えられる。精製胎土で、焼成は良く、器内外共に78にぶ黄橙色（7.5YR 7.0/5.5）・器肉90明るい茶灰色（10.0YR 6.0/2.0）を呈す。

須恵器（第133～135図，表14）

壺 7の器内はタタキ当て具痕をナデるが青海波を認め、器外はへラで削った後で丁寧にナ



第 137 図 C地区出土土器実測図（1/3）

デを施しツルツルである。焼成は良い。

甕 9は器内外共にヨコナデし、口縁端部はシャープな稜を有し、側端面は凹み、凸帯は断面梯形状に近く、焼成は良い。

1・2は口縁部片で、5～7・13～16と共に他の第133図に示した破片と同一個体と考えられるものである。16の器外に認める格子状タタキ痕は、タタキ板に9.5×10.5mmの正方形に近い大格子を造作し、次に大格子を4あるいは5分割して小格子を造作したことが観察され、大格子痕は正確に直交するが、小格子痕に連続しない部位が確認される。口縁端部等の破片の出土がなく、器形全体の特徴が不明であるのが措まれるが、第A図5とは別個体である。

20・24は同一個体と考えられ、器内の青海波はナデるが大半を残し、器外は平行タタキ痕のままである。22の器内は丁寧な横方向ナデで青海波を認めず、器外は平行タタキ痕のままである。27・28は共に25と同一破片である。

なお、表14に示した出土位置は、床土の黄褐色粘質土中から出土したものを床土（下層）、水田耕作土中のもを表採として示したものである。

### 第3節 小 結

ここでは、遺構の切り合い関係をまとめ、大略の時期説明を行う。

住居跡（以下住と略す）・溝遺構（同溝と略す）・塚堂古墳前方部南縁外濠（同外濠）等における切り合い関係を、（古）→（新）で示すとつぎのとおりである。

1号住→4号溝。3号住→2号住。4号住古→4号住新。6号住古→6号住新。

3号住→外濠。7号住→外濠。8号住→6号溝→1号・4号溝。3号・6号溝→1号溝。

また、各遺構の出土状態を示せばつぎのとおりである。

1号住は他の住居跡と比べて、主軸・主柱穴のあり方と床・中央土壇面積が著しく異っている。多くの完形やそれに近い土器が床面から出土しており、良好な一括土器の資料と言えよう。

2号住と3号住は、所属時期が明らかに異っている。

4号住は、主軸柱・壁土壇のあり方から、新・古の重複が明らかである。また、出土した遺物にも明らかに新・古の差位が認められる。しかし、主軸柱・壁土壇の方向は大きく異なるが、壁面プランはほぼ同じであることから、改築が行われたことが考えられる。

5号住は、出土遺物は少ないが、土壇内の甕・高杯は住居に伴う一括土器と考えてよい。

6号住居は、主柱と壁土壇の位置のあり方から、明らかに新・古が重複する。しかし、出土遺物の特徴に著しい特徴はなく、改築が行われたことが考えられる。

7号住は、出土遺物がなく、床面プランも不明である。

5号溝は、溝底にまで瓦類を含む現代の農業用水路で、溝底から古い遺構は検出されていない。

い。1号溝は、一部人為的に埋められ、4号溝と交流する東端部に井堰が設けられている。2号溝は、1号溝に北流して流入した状態を示していた。また、それぞれの出土地番は、1号溝が556-1番地水田の北端部に沿って、2号溝が557-1番地水田の西端部に沿って、4号溝が557-1番地水田の東半部に沿ってそれぞれ位置し、主軸はそれぞれの水田畦畔と平行ないし直交の関係にある。これらのことから、1・2・4号溝としたものは、5号溝とした現代農業用水路以前の、水田区画に伴う近時の流水路と考えられる。

6号溝は、埋土の状態が3号溝と共に、他の溝と異なり、出土遺物は6号住に類似し、8号住を切ることから、所属する時期の上限・下限を限定し得る。

外濠は、手掘りで埋土を15cmほど掘り下げただけで、多くの陶質土器・古式須恵器片を得た。もちろん、この資料によって、塚堂古墳築造の時期を直接決定し得るものではない。しかし、古式須恵器は外濠に近接する6号住・6号溝出土のものと同じ特徴を呈している。少なくとも、B地区大溝支流の外濠との切り合い関係を含めて、6号住の時期以降の新出住居をC地区で認めないことの理由を考える資料とはなるであろう。

最後に、出土遺物の特徴の大略を示すとつぎのとおりである。

1号住出土の土器は、二重口縁の壺をはじめ多くの甕に強く庄内式の残影を認め、また高杯に外来の要素を含むものもあるが、小型丸底壺の一部類似するミニチュア土器も出土している。詳細は後述するが、一応庄内式新～布留式古に併行する時期のものと考えられる。

3号・4号・8号住はいずれも弥生時代後期中頃を前後する時期のものと考えられる。

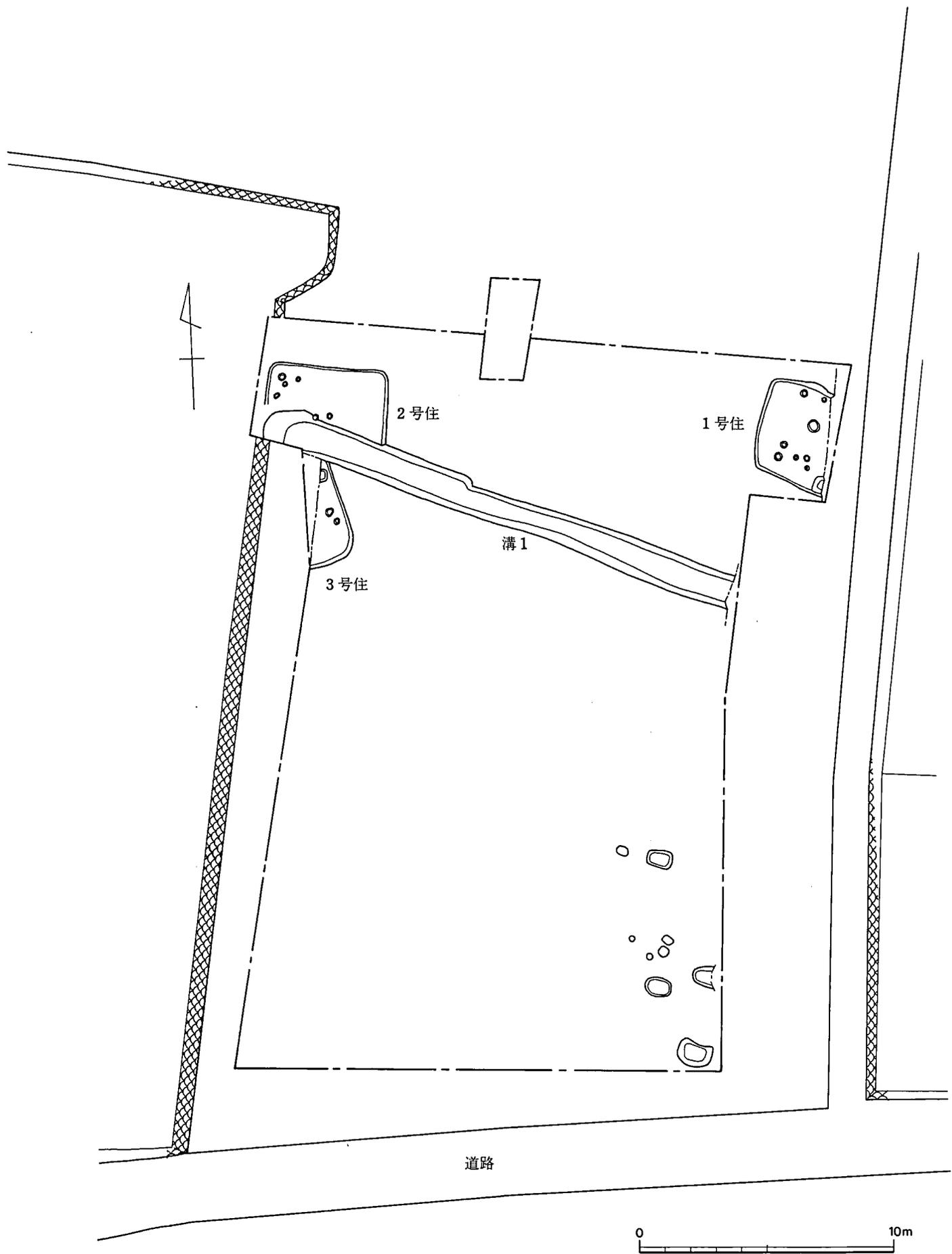
2号・5号・6号住は、5世紀前半頃で、5号住は古い要素を残す時期のものの一応考えた  
い。 (馬田)

## 第7章 塚堂古墳東地区の調査

第1節 はじめに

第2節 遺構と遺物

第3節 小 結



第 138 図 塚堂古墳東地区遺構配置図 (1/200)

## 第7章 塚堂古墳東地区の調査

### 第1節 はじめに

塚堂古墳東地区は、塚堂前方後円墳の後円部端よりほぼ真東に50mほど離れた、標高33.2～33.6mの台地上に所在し、地番は大字徳丸字西である。この台地は周囲の水田面より一段高くなっており、畑地と墓地と3面に分けて利用されている。

調査は圃場整備に伴うもので、前方後円墳の周溝の調査と併せて行ない、昭和54年8月7日から8月30日までの期間を要した。なお、調査は、新原正典が担当し、石山勲・川述昭人の応援を得た。

発掘調査は、南北2面の畑地に重機によるトレンチ掘りを行い、遺構の確認された南側の畑地については全面発掘を行った。調査の結果、検出された遺構は、弥生時代後期の住居跡3軒、古墳時代前期の溝1、それに調査区の南端において4基の土壇が検出され、そのうち一基からは土師器壺の口縁部片が出土しており、古墳時代のもと思われる。その他に根石を持った柱穴やピットも検出されている。また北側の畑地はトレンチ発掘による調査だけであったが、明確な遺構は検出されず、ただ第6トレンチにおいて黒灰色土中より古墳時代前期の土器と共に手捏土器が出土している。

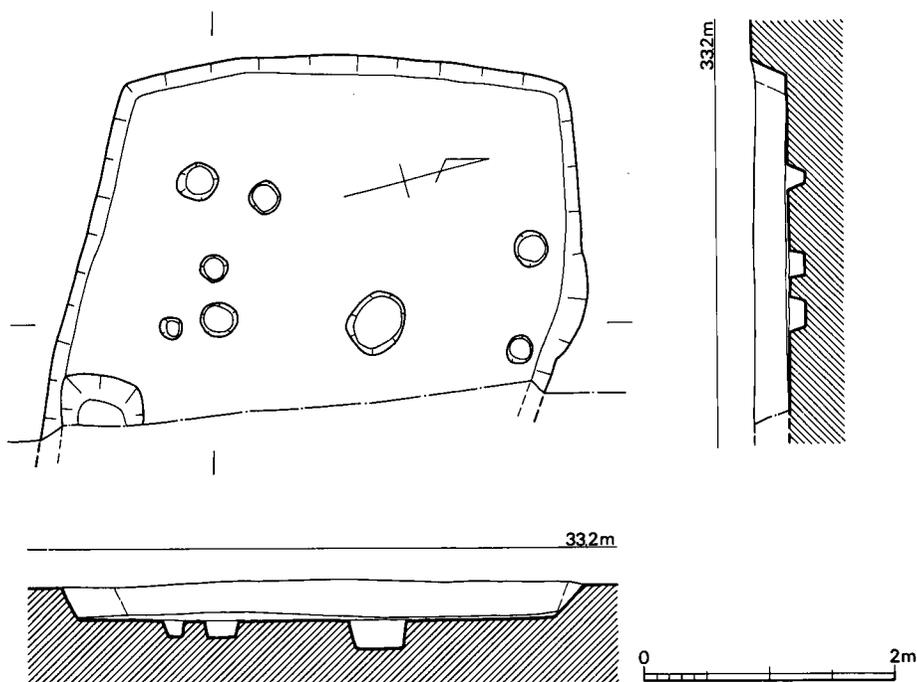
なお、調査当時は発掘地点の名称を塚堂遺跡北台地々区と仮称していたが、報告書作成に伴ない正式名を塚堂古墳東地区と変更したことを付記しておく。

### 第2節 遺構と遺物

#### 1. 住居跡

##### 1号住居跡（図版88—1・89、第139図）

発掘区の北東端にて検出した住居跡で、住居跡の東壁側は道路敷にかかるため2/3ほどの調査しかできなかった。全体の規模は不明であるが、西壁は3.6m、南壁は現存長2.9mを測り、北及び南壁は南東側へとたわんでいるため、平面プランは菱形に近い方形を呈している。壁高は最も深い西壁中央付近で30cmを測る。床面には柱穴や土壇がみられ、柱穴は径20～30cm、深さ20cm前後のものが多いが主柱としてまとまるものはない。土壇は円形のものと同方形のものがあり、円形土壇は住居跡中央部に位置し16cmの深さを測る。炉跡とも考えられるが焼痕などは



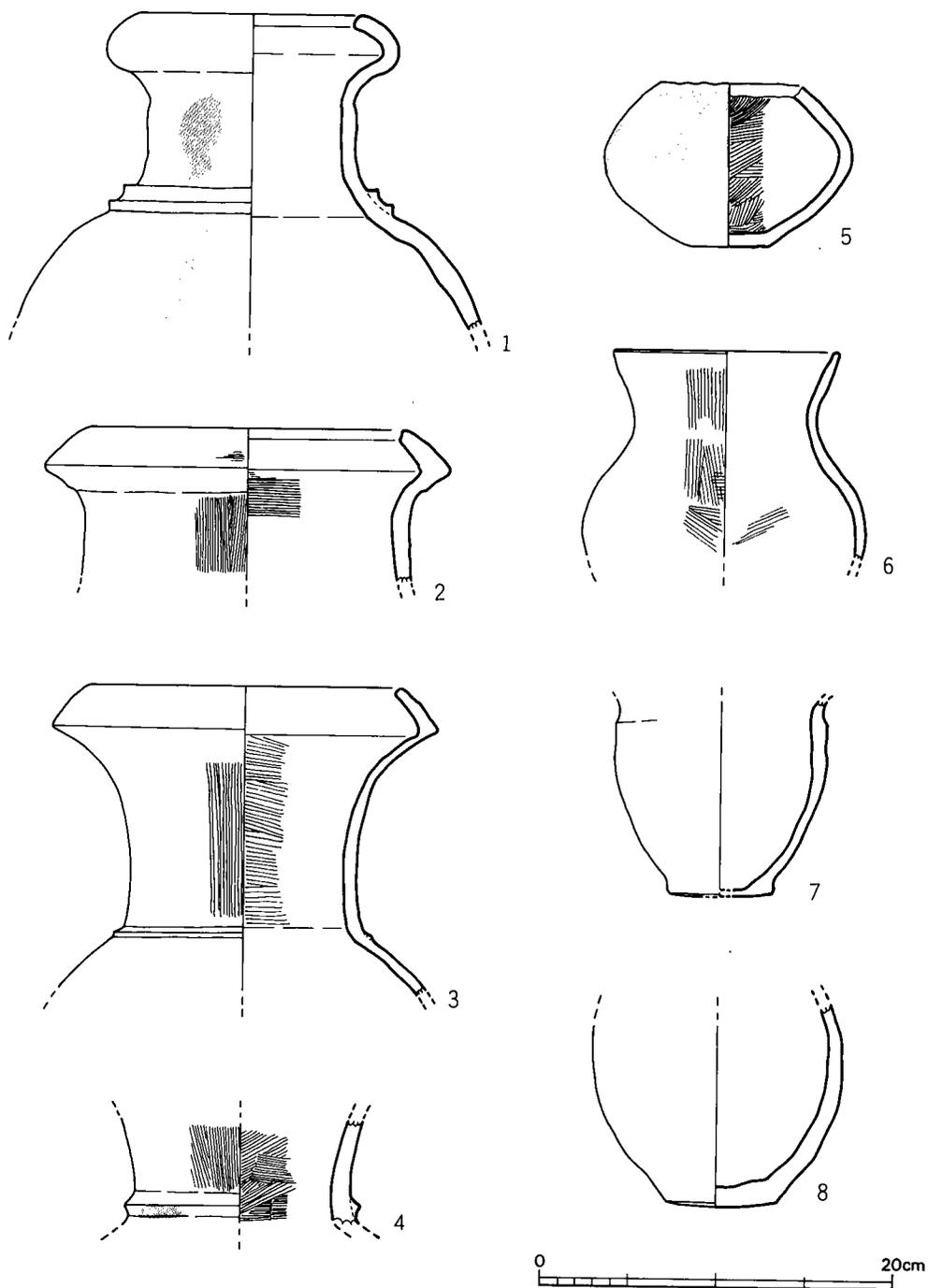
第 139 図 1号住居跡実測図 (1/60)

認められなかった。方形土壇は南壁に接して掘られており、屋内土壇と考えられる。土壇内からの出土遺物はない。炉跡や焼土面はみられなかった。

住居跡内からの出土遺物として、多量の弥生時代後期後半頃の土器が一括出土している。ただし、これら土器群は住居跡床面より10~15cm浮いた状態で出土しており、住居廃絶後、そう長くない時期に土器を一括投棄して土器溜としたものである。土器はパンコンテナに4箱分ほどの量である。器種からいえば、甕・壺・器台の順に多いが、いずれも破片が多く完形に復原できるものは少ない。

出土遺物 (図版90~95, 第140~147図)

**壺 (1~15)** 1~4は袋状口縁壺である。1は復原口径16.6cmを測り、胴下半部を欠損している。口縁部は最も袋状口縁部に近いもので、丸味を持ち稜は入らない。頸部下半肩との境には三角凸帯を二本口唇状に貼りつけている。肩部はやや張る。調整は不明であるが、外面には丹塗が一部残っている。胎土には大粒の砂粒を含むが精選されている。2は口縁部が「く」の字状に屈折し、稜がはいる。復原口径23cmを測り、頸部は直立する。口縁部外面はナデであるが、上面にはハケ目が残っている。頸部外面は細かいハケ、内面は荒いハケ目調整である。3も口縁部が屈折するが、頸部がすばまるため強い感じの「く」の字状になる。頸部は長く、肩との境



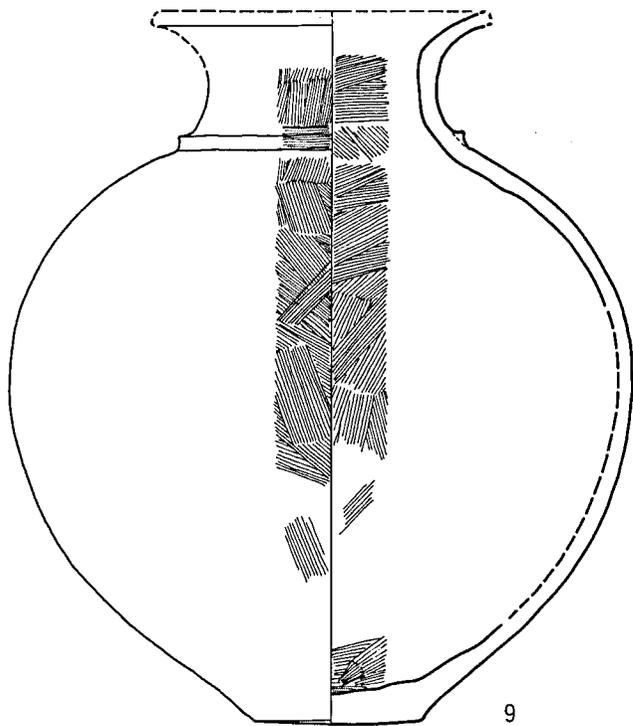
第 140 图 1 号住居迹出土土器实测图① (1/4)

に低い三角凸帯を一本巡らしている。肩部はナデ肩である。復原口径22cmで口縁部内外面はナデ、頸部内外面は荒いハケ目調整で、口縁部内面と肩部内面には指圧痕がみられる。4は頸部のみで、肩部との境に三角凸帯を巡らし、一部丹塗がみられる。内外面ハケ目仕上げであるが、内面は上下2段に使い分けられている。1～4のうち1はこれらの壺のうちでも前出のもので弥生後期前半頃のものであろう。

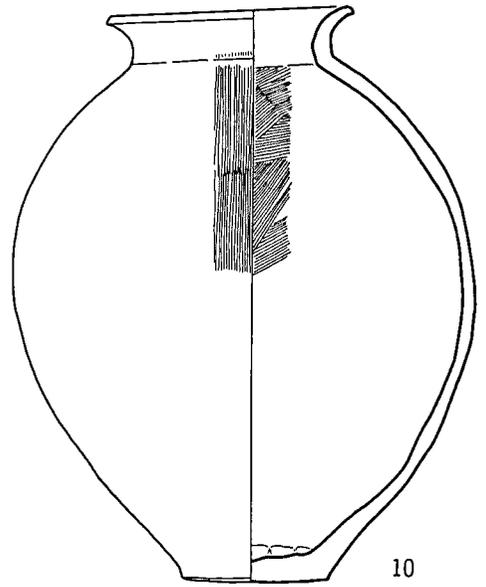
5は小形壺で、口縁部は打ち欠いている。胴は端正な扁球形で丹壁りであるが、下半部には丹はみられない。胴径14.1cmを測る。底部はわずかに上げ底となり不安定である。調整は外面肩部は縦へら磨き、胴部は横へら磨き、下半部は指による整形で器面は荒れている。内面は荒いハケ目である。6は小形の長頸壺で復原口径13cm、胴径16cm、現在高12cmを測る。口縁部はやや直線的に外反し、「S」字状にゆるやかに頸部から胴部へと続く。口縁端部は内外面ともナデ、それ以下の外面は肩部まで縦方向の荒いハケ目で、胴部は横方向の荒いハケ目である。内面頸部はナデである。あまり作りのよくない壺である。7・8は小形甕かもしれないがここでは壺として取扱う。7は口縁部を欠くが頸部からゆるく外反するものである。胴部最大径は頸部直下であり12cmを測る。現存高11.2cmの長胴の壺である。底部はやや膨らむ。調整は口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は縦方向のへら状のナデで、底部は強く押えられている。内面はナデ仕上げである。胎土は砂粒多く、色調も暗褐色を呈していて、全体的に手捏土器風の作りである。8は7に比して胴が球形状になるもので、口縁部を欠き、現存高11.7cm、胴径14.2cmを測る。底部はレンズ状に膨らむ。器形の割には厚手の土器で、体部外面は縦方向のへら状のナデ仕上げである。

9～12は口縁部が外反し、器高も31cmを超える大形の壺である。9は復原ではあるがほぼ完形品となる。口径17.2cm、器高38.2cm、胴径33cmを測る。口縁部は端部を欠損するが、内弯気味に立ち上る頸部よりやや強く、長く外反する。頸と肩との境には鋭い三角凸帯を巡らす。胴部はほぼ球形で、最大径はほぼ中位にくる。底部はわずかに膨らむ平底である。口縁部は内外面とも横ナデ、頸から肩部にかけては一連の縦方向のハケ目であるが、凸帯付近は横ナデされて消えている。胴部上半は丁寧なハケ目が施されているが、下半にはハケ目がわずかに残る程度のナデである。内面頸から肩部にかけては横方向のハケ目で、それ以下は縦方向の荒いハケ目であるが、下半部にはハケ目は少ない。胎土は精選され黄灰色を呈する。焼成も良好。

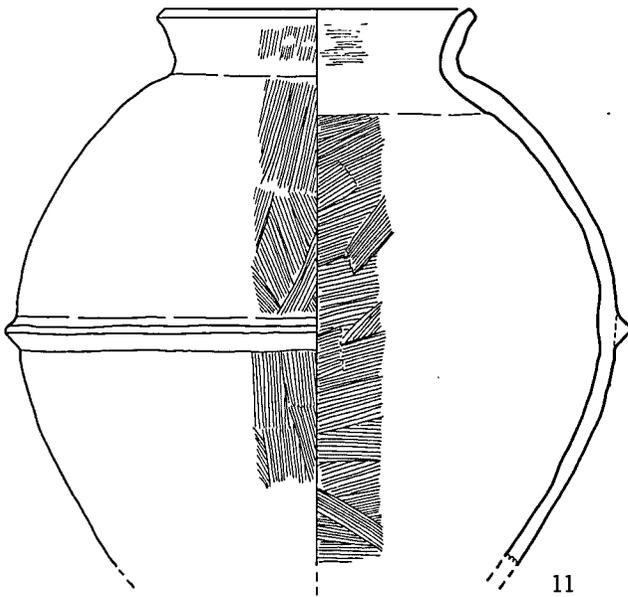
10～12は同様な口縁部を有する長胴の壺であるが、10の口縁部が最も強く外反する。10は器高30.7cm、口径13.1cm、胴径24.5cmを測る。口縁部と頸部とは一体で外反し、口唇部下端は下へ張る。なだらかな肩部に長球状の胴がつき、底部付近にて急にすばまる。底部はレンズ状に膨らむ。口縁部内外面は横ナデしてハケ目が消され、体部上半は荒いハケ目、それ以下は不明である。内面の頸部付近はへらケズリされ、体部上半は細かいハケ目仕上げである。内底部は指圧痕が残されている。砂粒多く、焼きも軟質である。11・12は胴中位に鈍い三角凸帯を巡らす



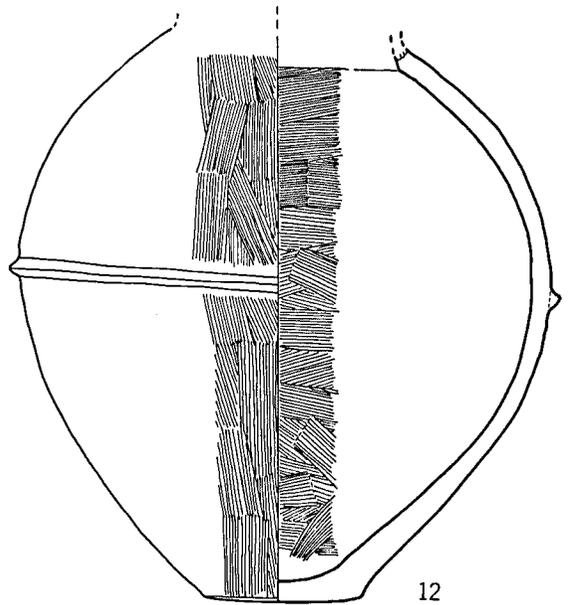
9



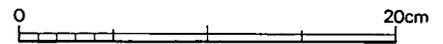
10



11

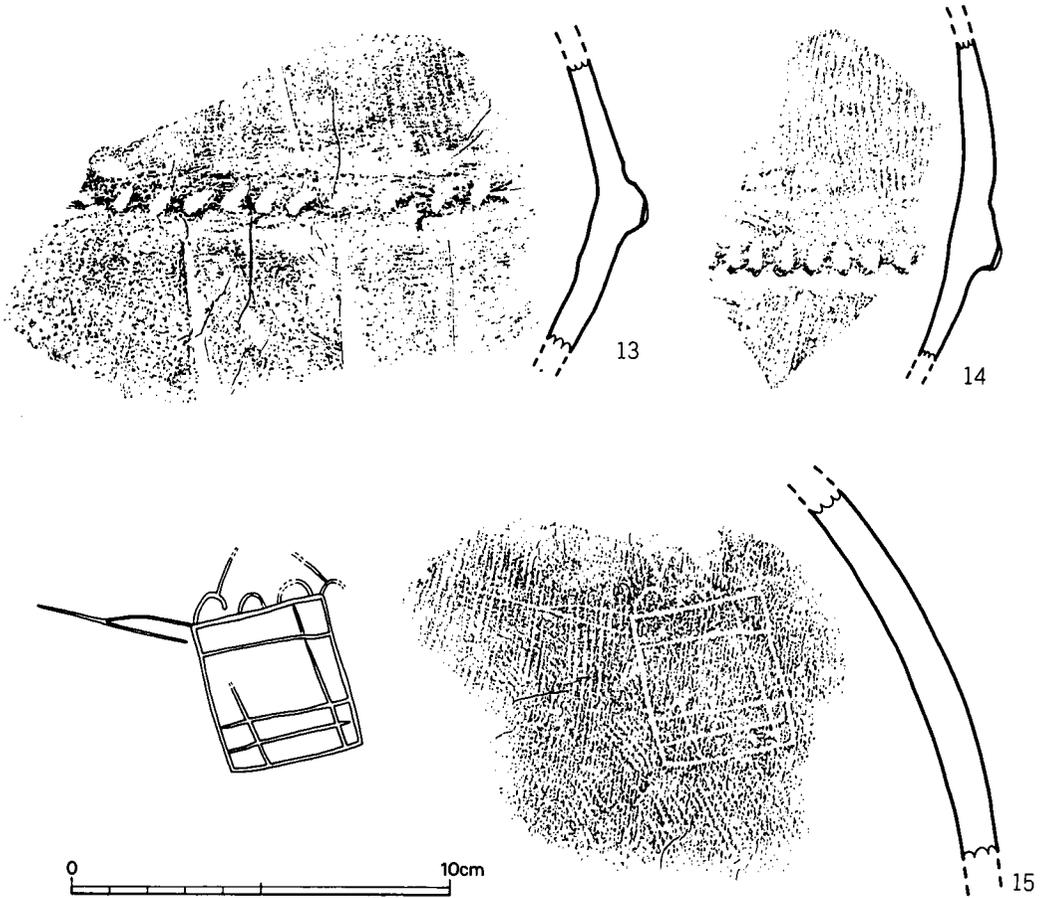


12



第 141 图 1号住居跡出土土器实测图② (1/4)

ものである。11は現存高29.5cm，復原口径17cm，胴径31.9cmを測る。口縁部は10に比しほぼ直に外反し，端部でわずかに屈曲する。胴部は長球形で，最大径部に凸帯を巡らしている。底部は欠損するが10・12にみられるようなややレンズ状に膨らむ底部がつくものと考えられる。口縁部外面から頸部内面まではハケ目の上からナデであり，ハケ目が消されている。体部外面は荒いハケ目で凸帯の剥落した部分にもハケ目がみられ，ハケ目の後凸帯をつけたことがわかる。内面は荒くて強いハケ目仕上げである。12は口縁部は欠損するが11と同様な口縁部がつくものと思われる。現存高30.4cm，胴最大径28.3cmを測る。胴中位に三角凸帯を巡らす11とともに刻目は入らない。底部はレンズ状に膨らむ。体部外面は縦方向の，内面は横方向の荒くて強いハケ目仕上げである。以上9～12の大形壺のうち9は他より前出のもので，壺1と同時期の後



第 142 図 1号住居跡出土土器実測図(上)③, 排土出土ヘラ描き土器実測図(下)(1/2)

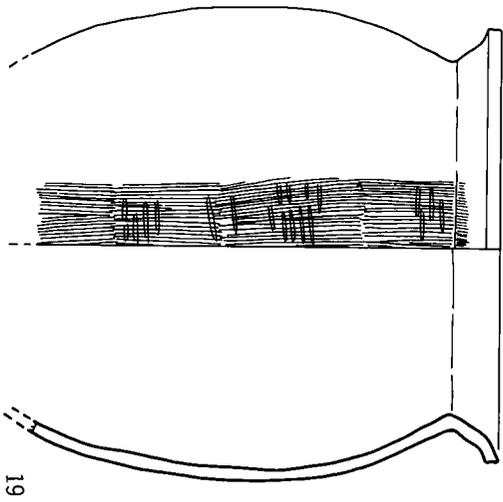
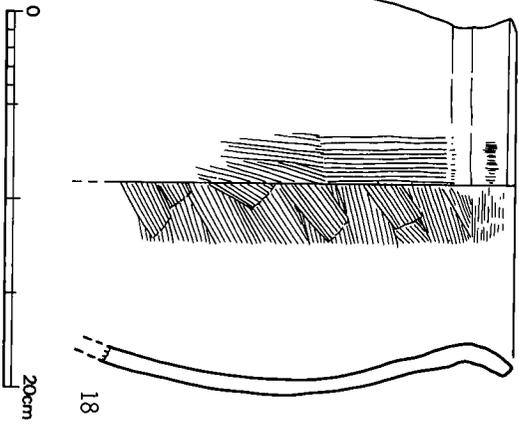
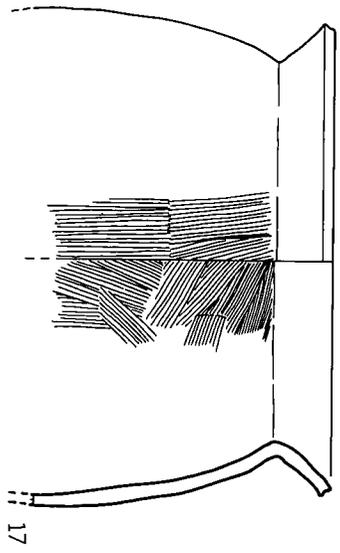
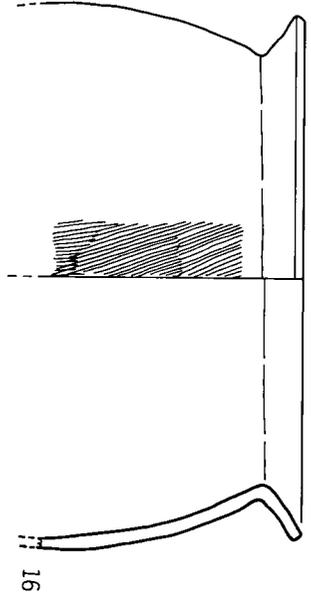
期前半頃のものであろう。

13・14は袋状口縁壺の凸帯刻目の拓影である。13は断面丸味をおびた凸帯に斜方向の刻目を入れる。内外面ハケ目仕上げである。14は断面角張ったやや下向きの凸帯に縦方向の刻目を入れたもので内外面ともハケ目仕上げである。

甕（16～25） 16～25は甕形土器で、24・25は器高1 m近い大形の甕であるが、他は50cm前後の器高を測るものである。1号住居跡出土でも最も多い器種であるが、破片が多く接合できるものはあまりない。

16～19は「く」字状に屈折して外反する口縁部を有する甕で、16・17の口唇部は丸味をおびる。16は復原口径28cmを測る。口縁部はやや外弯気味に外反し、口唇上端部はわずかにつまみ上げられている。口縁部内外面は横ナデ、胴外面は荒いハケ目、肩部内面付近にはへら状の押えがみられる。17は口径19cm、胴最大径は21.6cmを測る。口縁部は16のように強く屈折せず、ゆるく外反し、胴部はつよく張らない。口縁部内外面はハケ目の上から横ナデ、胴部内外面は荒いハケ目である。18・19は口唇部に凹線状のくぼみを有するものである。18は復原口径25cmを測り外弯気味に屈折して口縁部をつくり、胴部は張らない。口縁部内外面は横ナデ、胴内外面は荒いハケを施す。19は口径23.1cm、胴最大径は中位にあり25.3cmを測る。口縁部は先端近くでも更にゆるく屈折し、張り気味の胴部がつく甕である。口縁部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目を横ナデで消している。胴外面はタタキの上からハケが施され、タタキ痕が消されている。内面上部には指圧痕が残され、その上をナデ仕上げしている。

20～25は頸部に三角凸帯を巡らす甕である。20は復原口径39cmを測る。口縁部は外弯気味に屈折し、先端へゆく程肉厚となる。口唇部は凹む。口縁部内外面は横ナデであるが、内面にはハケ目が残る。胴は内外面とも荒いハケ仕上げであるが、外面にはタタキ痕がみられる。21は復原口径36cmを測る。口唇部は凹み、上端はつまみ上げられている。口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦方向のへら状のナデが走る。内面は荒いハケ目である。22はこの手の甕では唯一の完形品となり、底部の様相が判る。器高53.2cm、口径37cm、胴最大径38.3cmを測る。屈折して外反する口縁部は上端近くで更にわずかに屈折し、口唇部は凹む。胴部はあまり張らず、最大径は器高の1/3程の高い位置にあり、そのまま底部へと続き長胴となる。底部はややレンズ状に膨らむ。口縁内外面は横ナデで、内面はハケ目が消されている。胴外面はタタキの上から荒いハケで仕上げられている。内面もハケ仕上げであるが、下半部はハケ目が消されている。外面は黄褐色を呈すが、一部加熱を受けて赤褐色に変色している。23は図上復原した甕で、口径36cm、胴最大径42cmを測り、胴下半にも凸帯を有する。口縁部は「く」字状に屈折し、先端部は肉厚となり、口唇部はわずかに凹む。頸部に三角凸帯を付け、やや張り気味の胴部をつくる。胴最大径は中位にあり、下半には断面台形の凸帯を2本巡らし、浅い刻目を入れる。口縁部外面はへら状の強いナデが加飾的に付けられている。胴外面上半は細かいハケ、中位ではタタキ

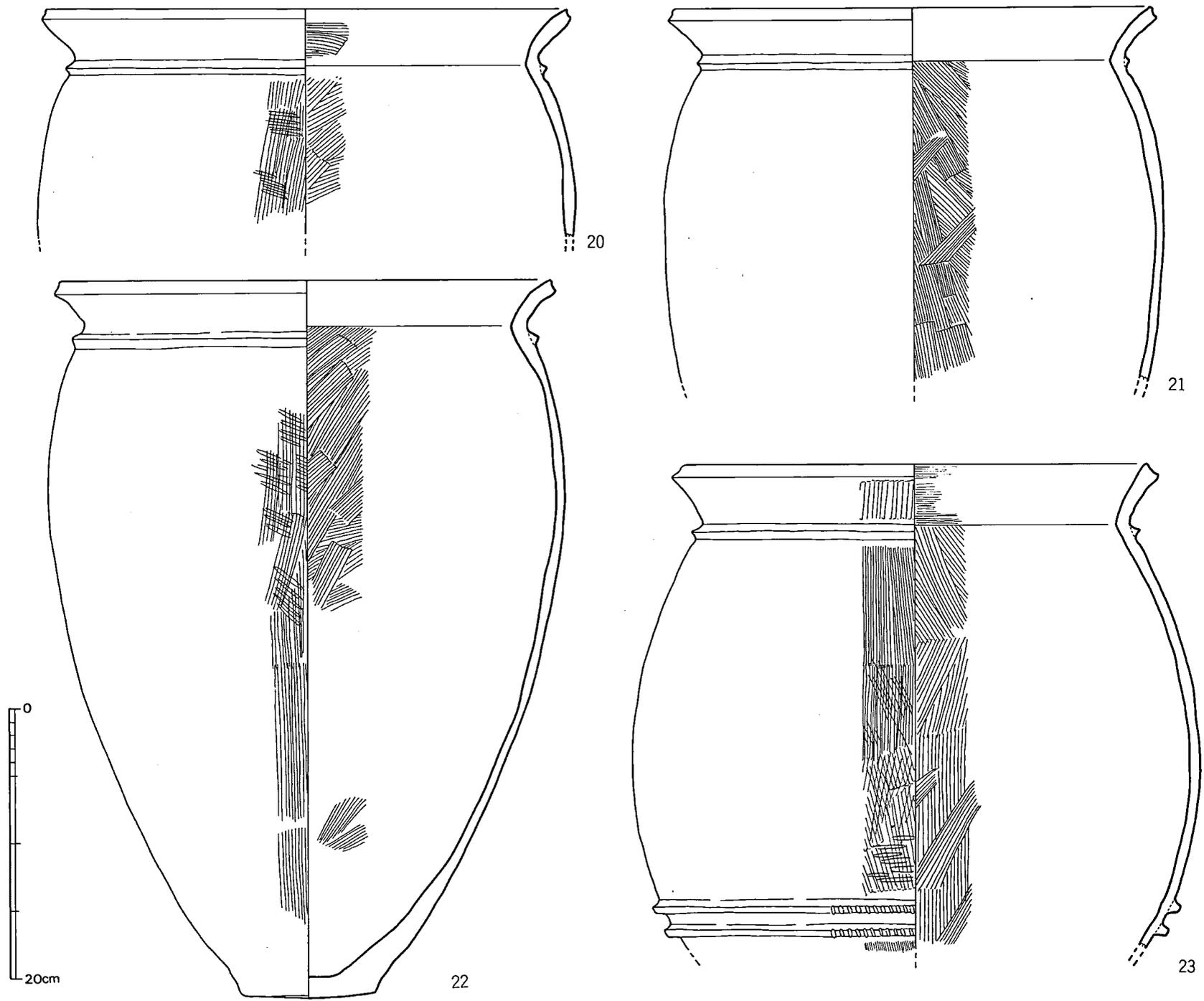


第 143 图 1号住居跡出土土器実測图④ (1/4)

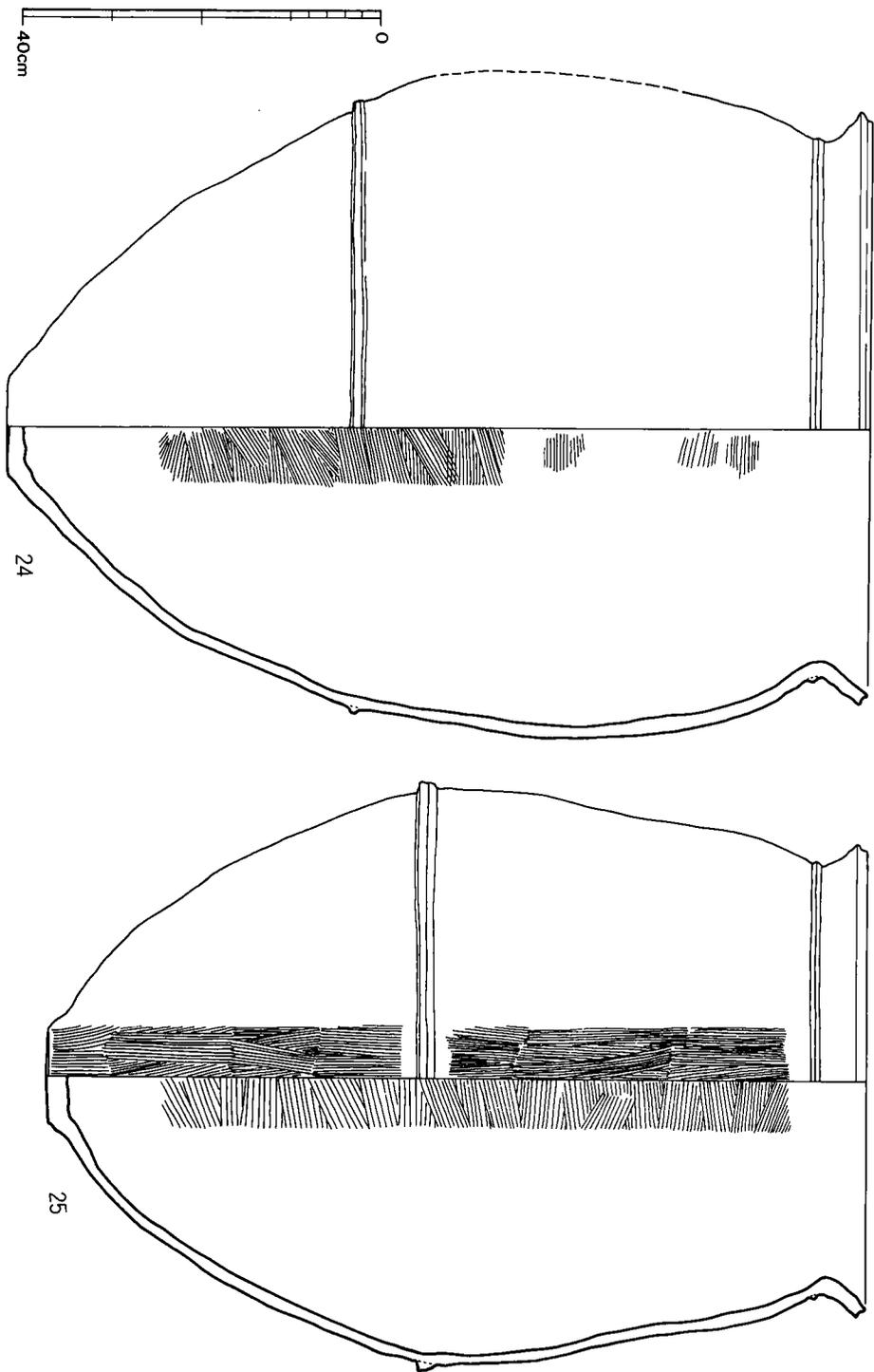
の上からへら状の強いナデが施される。凸帯部分は横ナデである。口縁部内面は横方向の細かいハケ、胴内面は荒いハケで仕上げている。以上みてきた甕で、頸部に凸帯を有するものは無いものに比して大形で、凸帯の無いものを小形甕とすればこれらは中形甕といえよう。24・25は器高が90cmを越す大形のものである。24は、器高97cm、口径66cm、胴最大径74cmを測り、口縁部は「く」字状に屈折して立上がるがやや内弯する。強くしまった頸部には華奢な三角凸帯を巡らす。卵形をなす胴部はあまり張らず、最大径はやや上位にある。胴下半部にはだれた感じの断面台形の凸帯を下方へ弱く張り出させて貼りつけている。底部はやや上げ底気味の平底である。口縁・頸部内外面は丁寧な横ナデ仕上げ、体部外面は荒れているがハケ目はみられない。胴部内面上半は横ハケ目の上からナデ、胴中位は荒いハケ目が横方向につけられ、内底面はハケ目が消されている。頸部・胴部の凸帯には刻目などの装飾は施されていない。大粒の砂粒や金雲母を含み、黄灰色を呈している。やや軟質の焼で全体的に雑な作りである。25は胴部凸帯付近を境に上下を図上復原したものであるため、器形に少々歪みがでているかもしれないが、復原器高91.4cm、復原口径53cm、復原胴最大径64.8cmを測る。24の甕より一回り小さい大甕である。口縁部は肉厚で短かく、「く」の字状に屈折し、やや外反する。口唇部は浅く凹む。頸部には小さい三角凸帯を貼付け、肩は張らずにほとんどストレートに胴部へと続き、下脹れの体部をつくる。胴部凸帯は中位にある最大径の所にややだれ気味の断面台形のを貼付けている。凸帯下端は下方へ張り出し、頂部はわずかに凹む。2本の凸帯に刻目等は見られない。底部はわずかにレンズ状に膨らみ、端部は少し張り出し、底部中心より3mm上で稜をつくる。口縁・頸部は内外面とも横ナデ、体部外面は内面のハケ目より細かい縦方向のハケ目仕上げである。体部内面は上半部と下半部とはハケ目が異なっており、上半は荒い（1cmあたり3～4本）、下半はやや荒い（1cmあたり2～3本）のハケ目で、しかも上半は横方向、下半は斜方向の仕上げである。底部付近はナデで、内底面には強い指圧痕が残されている。金雲母を含むが胎土は精選され、灰褐色をなす。焼成もよい。これら24・25の大甕は甕棺に転用されてもよいものであるが、他の1号住居跡出土の土器とほぼ同様に一括廃棄された状態で出土している。

**高杯**（26・27）26・27は高杯で住居跡内出土ではわずかである。ともに杯と脚の接合部分のみで、26の脚柱部は円筒形をなし、外面ハケ目がみられる。27の脚は下方へ強く開き、両面から穿孔しかけの孔が1個みられ、外面ハケ目仕上げである。ともに黄褐色を呈し、軟質である。

**鉢**（28・29）28・29は鉢で、28は器高18.5cm、復原口径26cm、復原胴径23.4cmを測る。口縁部は短く屈折して内面には明瞭な稜をもち、口唇部は丸味をもつ、肩はほとんど張らずに胴部をつくり、底部はレンズ状にわずかに膨らむ。外面口縁部は横ナデ、体部外面は斜方向の荒いハケ目仕上げで、胴下半ではへらケズリの痕跡がみられる。口縁部内面はハケ目の上からナデしており、体部内面は斜方向の荒いハケ目、内底面はナデ仕上げである。暗褐色を呈し、胎土・焼成とも良好。29の口縁部はやや外弯しながら屈折し、内面には稜をつくる。28に比して口縁



第 144 图 1 号住居迹出土土器实测图⑤ (1/4)



第 145 图 1 号住居跡出土土器実測图⑤ (1/8)

部が長い。口唇部は角を帯びる。器高22.3cm、口径28.7cm、胴最大径26.5cmを測る。胴部は28の鉢に比してよく張る。底部はレンズ状に膨らむ。口縁部は横ナデされているが、内面は細かいハケ目が残る。体部外面は風化しているが、荒いハケ目がみられる。体部内面上半と下半とはハケ目の方向を異にしている。28は暗褐色、29は黄褐色を呈し、胎土・焼成も良好である。30は脚台付甕の底部であろう。厚手の作りで、体部外面下半は荒いハケ目であり、脚部はナデによりハケ目が消されている。体部内面には連続ハケ目がみられる。脚部内面はナデである。胎土も悪く暗茶灰色をなす。

**器台** (31・32) 口径は31が13.6cm、32が14.2cm、底径は31が16cm、32が16.5cmと、共に底径が口径を上回る。器高は両者とも20cmで、くびれ部は中位よりやや上に位置するが、31の方がくびれが強い。31の体部外面はタタキにより調整され、上・下端にその痕跡を残している。上半は荒いハケ、下半は細かいハケによる仕上げである。体部裾はやや内弯気味である。内面上端はタタキの上からハケ目調整し、下半は荒いハケ、下端は細かいハケで仕上げている。32はタタキ痕は見られず、外面は荒いハケ、両端部から内面はナデである。内面中位は絞り痕がみられる。口縁部付近に二次的加熱により赤褐色に変じた個所が認められる。

**支脚** (33・32) 器高の低い肉質の体部に、内傾した口縁部をつくるもので、頂部平面は一方にやや尖る楕円形をなしている。33は器高9.9cm、口径8.6cm、底径11.5cm、頂部孔径も楕円形で2.9×3.5cmを測る。体部外面と口縁部外面はタタキにより成形され、タタキ目が装飾的に残されている。34は器高10.5cm、口径9.5cm、底径13cmを測り、頂部孔径は3.9cm×4.7cmと楕円形をなし、一方に強く尖がる。これにはタタキ目はみられず、内外面とも指圧の跡が明瞭に残されている。33は暗褐色、34は明褐色を呈するが、いずれも砂粒を多く含んだ胎土である。

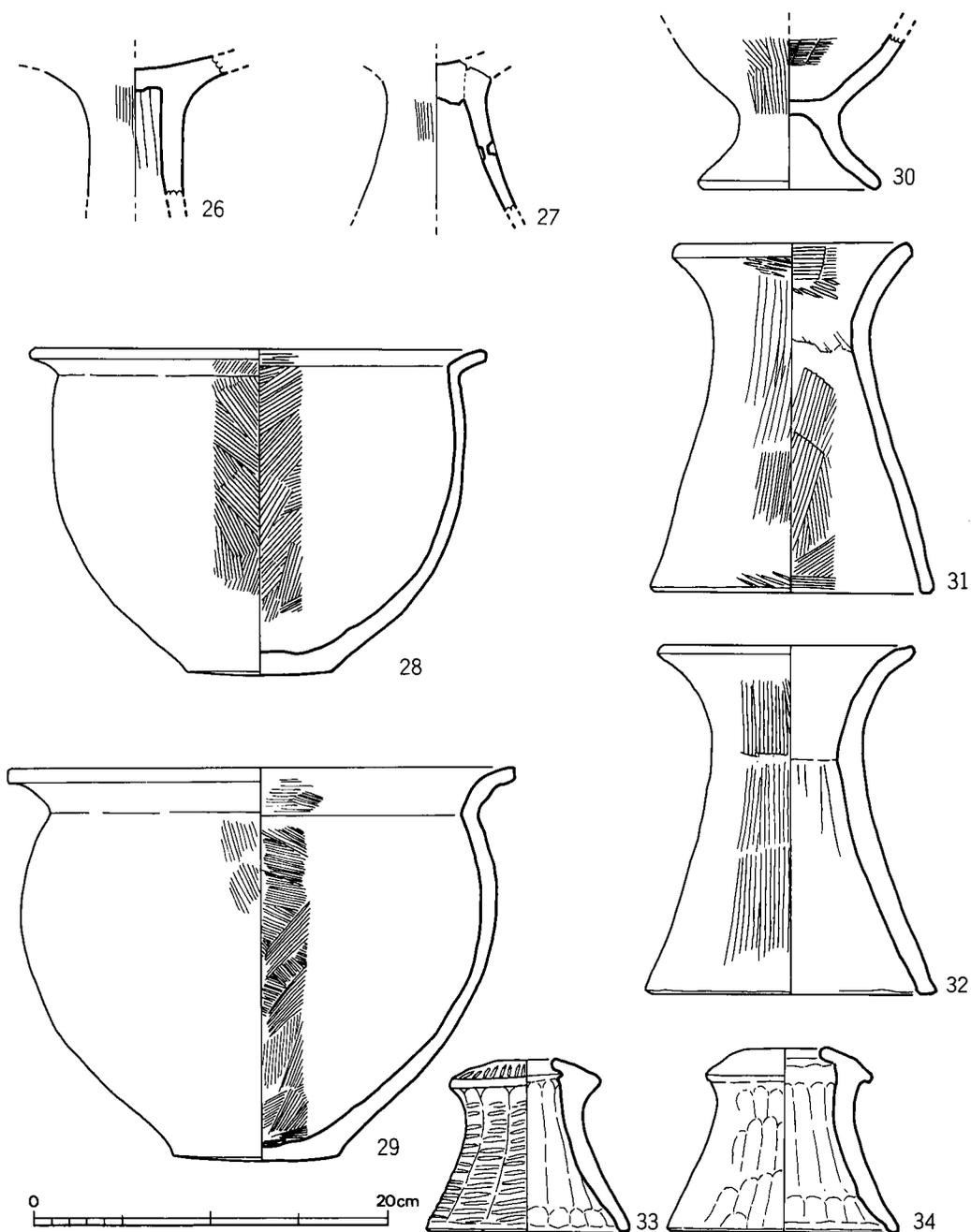
35は小形の鉢で器高7.8cm、口径13.3cmを測る。ほぼ半球形の体部にレンズ状に突出した底部がつく。内外面ともナデ仕上げでハケ目が消されている。胎土・焼成も良いが厚手の作りの土器である。36は丹塗土器の底部破片で、小片のため器形は不明であるが壺と思われる。復原底径7.6cmを測る小品で、現存高は6cmある。外面は縦方向のハケの上から丹塗りがなされ、端部が張る平底の底部にまで及んでいる。内面上半は横の、下半は縦方向のハケ目がみられる。胎土も精選されていて焼成も良好な土器である。

37～41は壺または甕の底部である。37・38は壺底部と思われ、37の平底端は角張り、38は丸底状になるが、体部との境には稜が残る。39～41は甕と思われるが判然としない。いずれも平底であるが両端部は1mmほど上がる。40・41の内面下半にはへら削りがみられる。

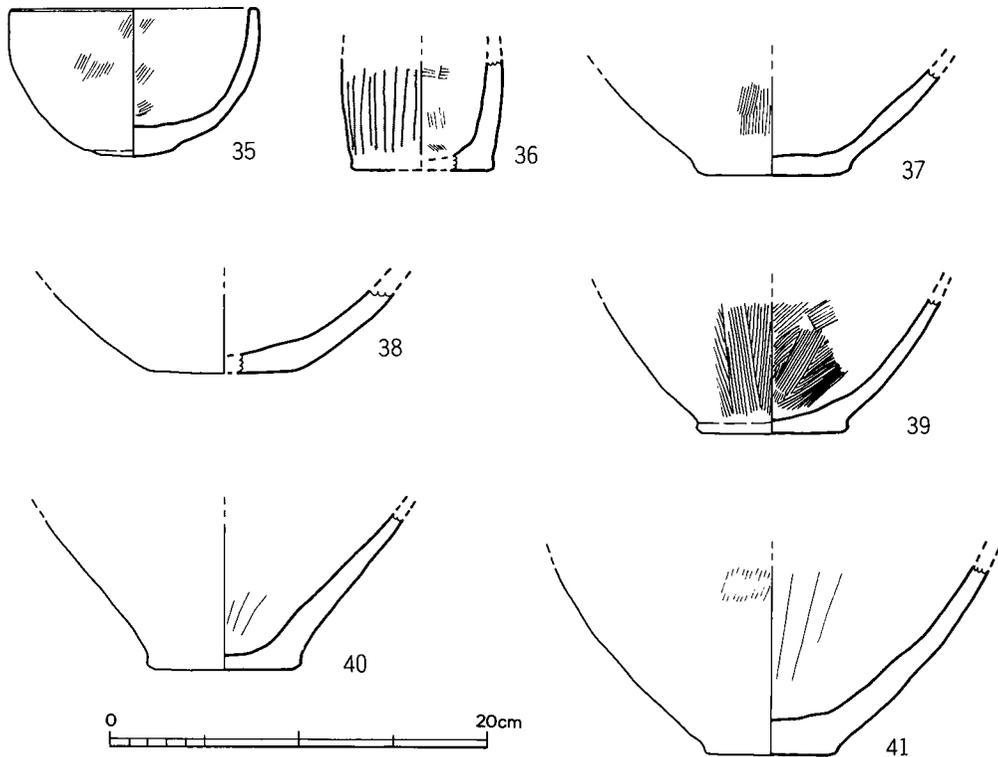
なお、他にも壺または甕の底部片が出土しているが、丸底となるものは見られない。

## 2号住居跡 (図版88—2, 第148図)

2号住居跡は3号住居跡とともに発掘区の西端にて検出したもので、南半は古墳時代前期の溝に切られ、半分ほどしか残っていない。平面プランは方形を呈する住居跡で、北壁長4.76m



第 146 图 1 号住居迹出土土器实测图⑦ (1/4)



第 147 図 1号住居跡出土土器実測図⑧ (1/4)

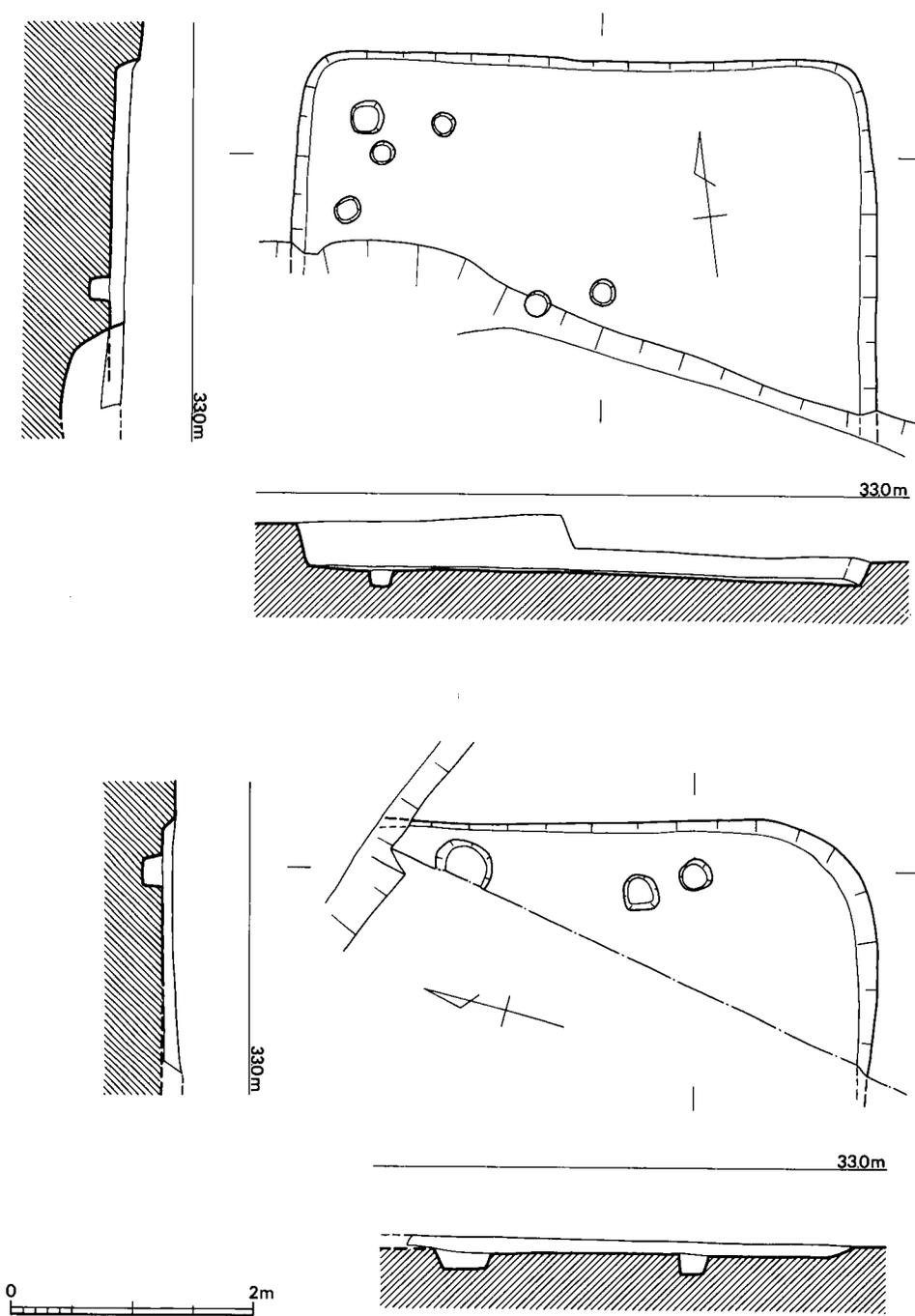
東壁現存長2.84mを測り、壁高は北壁中央付近で45cmの深さを有している。東壁は溝1に切られているが溝の南岸には延びておらず、方形プランよりもむしろ長方形になるものと思われる。床面には柱穴が西壁寄りに集中して認められ、いずれも径20cm、深さ15cm前後のものであるが主柱としてまとまるものはない。炉跡、屋内土壌などは検出されなかった。

出土遺物は皆無であるが、古墳時代前期の溝に切られていることからして、住居跡の時期はそれ以前の弥生時代後期頃のものと思われる。

### 3号住居跡 (図版88-2, 第148図)

3号住居跡は2号住居跡とともに古墳時代前期の溝に切られ、しかも大半は発掘区外に延びているため、東南部コーナーの一角のみを検出できた住居跡である。東壁の現存長3.8mを測り、壁高は15cmの深さを有する。柱穴は3個みられ、径20~50cm、深さ18cm前後のものである。

出土遺物もなく、2号住居跡との切り合い関係もはっきりしないが、ともに古墳時代前期の溝に切られているため2号住居跡と相前後する弥生時代後期頃のものであろう。



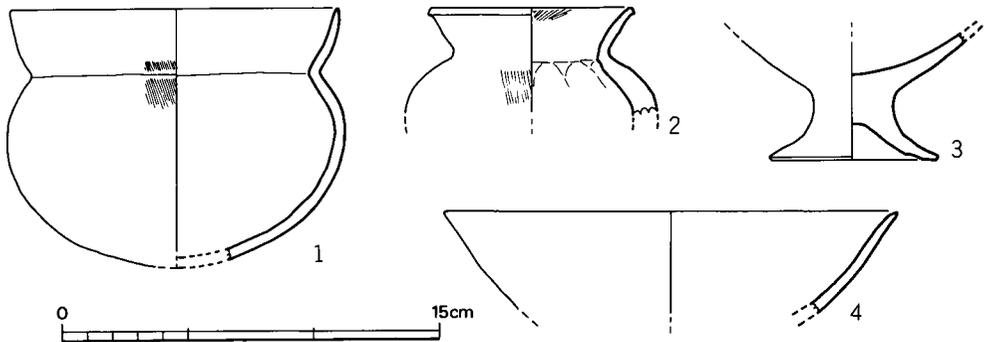
第 148 图 2号(上)·3号(下)住居跡実測图 (1/60)

## 2. 溝 (図版88-2, 第138図)

発掘区の北半において北西から南東へと流れる溝で、溝1とした。溝の規模は上幅で1.4m、下幅0.8m、深さ35~40cmで、横断面はU字状をなす浅い溝で、発掘区内での全長は19.5mを測る。溝底面は東端の方が西端より低いが、その差はわずかに4cm前後でほぼ水平と考えてよい。この溝は調査区の西側において、2・3号住居跡を切っており、しかもそこにおいて溝はほぼ直角に屈折して南流している。溝の両端は更に発掘区外へと延びているが、その性格についてはよく分からない。ただ溝内には水が流れていた形跡があり、下層からは弥生後期の、上層からは古墳時代前期の土器片が出土しており、かなり長期間使用されていたことがうかがわれる。

### 出土遺物 (図版96, 第149図)

溝1からの出土遺物は前述したように下層より弥生後期の土器少片が、上層から古墳時代前期の土師器が出土しており、他に縄文時代晩期末の夜臼式土器片も1点みられた(縄文土器は第4章4節の項にて説明)。弥生後期土器片、土師器はともに少量の出土である。土師器は壺・高杯・脚台付土器などがある。1は小形丸底土器で、口径13.1cm、胴最大径13.4cm、復原器高10.3cmを測り、器壁は4mmと全体的に薄手で丁寧な作りである。口縁部はやや内弯気味に外反し、扁平な球形の胴部へと続く。口縁部内外面は横ナデ、肩部外面はハケ目の上からナデしており、胴下半はヘラケズリ、胴内面はナデ仕上げである。胎土・焼成ともによい。2は小形壺で、胴下半を欠損するが、復原口径8.2cmを測る。口縁部の器壁は薄いが胴部付近では厚くなる。口縁端部は下方へ尖り、横ナデ仕上げである。口縁部内面と肩部外面はハケ目がナデにより消されている。3は脚台付土器で上部には壺か鉢がのるものと思われる。底径6.7cmを測る小形品で、整形は手捏ね風である。4は高杯の杯上半のみで復原口径18cmを測る。以上溝1の出土遺物は古墳時代前期の布留式土器併行期のものであろう。



第149図 溝1出土土器実測図(1/3)

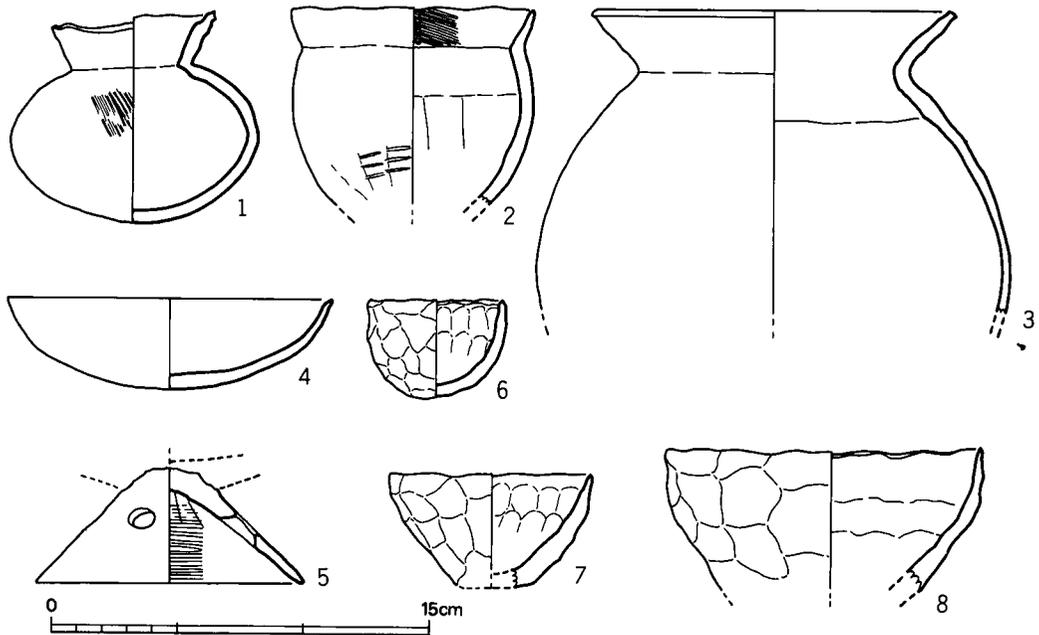
### 3. その他の遺物

遺構に伴わない遺物として、第6トレンチ黒灰色土層出土の一括土器と、重機による掘削のため掘り上げられた排土から出土した土器とがある。排土中から出土した土器には縄文土器・弥生土器・古式土師器等があるが、大部分は弥生後期のもので、ついで古式土師器、弥生中期の順で出土している。縄文土器は後期中頃～後半の西平式の深鉢片1点のみである（縄文土器は第4章4節の項にて説明）。

#### 第6トレンチ出土土器（図版96、第150図）

1は短頸丸底壺で、口縁部は打ち欠かれており、胴径9.7cmを測る。扁球形の胴部に外反する口縁部がのび、口縁部上部で段をつくる。端部は強く張り出す。底部は丸底で不安定である。口縁部内面有段のところから体部外面底部付近まではへら磨きであるが、胴下半のそれは雑であり、肩部にはハケ目の跡が残っている。内面はナデ仕上げである。作りは整美で胎土・焼成も良好である。2は小形壺で復原口径9.8cmを測る。胴の張らない体部に短く外反する口縁部がつき、頂部は波打つ。外面は胴部付近まで横ナデ、胴下半はタタキの後縦へラケズリをしている。口縁部内面は連続ハケ目を施し、胴部内面上部は横へラケズリの後ナデ、下半は縦へラケズリしている。暗灰色を呈し、手捏土器風の作りである。

3は復原口径14.4cmとやや小さい甕である。ナデ肩の肩部に直すぐ外反する口縁部がつき、



第150図 6トレンチ出土土器実測図(1/3)

口唇部は肥厚する。内外面とも風化が著しいが、口縁部外面は横ナデ、胴内面はヘラケズリである。

4は杯で復原口径12.8cm、器高3.6cmを測る。口唇部はわずかに外反する。体部外面は口縁部付近までヘラケズリし、そのあと磨いている。内面もヘラ磨きと思われる。

5は小形器台で浅い受部がつくものであるが受け部を欠損する。底部径10.6cmを測り、脚高は4.6cmである。脚部は円錐形で、ほぼ直線的に広がり、3ヶ所に透孔を有する。器面は荒れているが外面はナデ、内面は丁寧なハケ目が残されている。赤褐色を呈し、砂粒多い。

6～8は手捏土器で、いずれも暗褐色ないし暗灰色を呈す。6は口径5.5cmで、底部は丸底状になる。7は口径8.1cmで底部は平底状となる。8は口径12.6cmと大形品である。いずれも器壁は厚い。

以上第6トレンチ黒灰色土層出土の土器は一括品と考えられ、5の小形器台などの存在から古墳時代前期のものである。

#### 排土出土土器（図版97、第151図）

1は下半部を欠損するが高杯か、あるいは鉢であろう。復原口径21cmを測る。口縁部は直に立ち上り、外面口唇部下に段を有し、口縁上面は平坦面をつくる。口縁中に二条の貼り付け凸帯を巡らす。器壁は8mmと厚手である。口縁部上半は内外面とも横ナデ、下半の外面は横ハケの上からナデであり、内面にもハケ目がみられる。胎土は大粒の砂粒を含み、暗褐色を呈す。

2は高杯の杯部で、復原口径16.8cmを測る。直立する口縁部に端部は両側へ強く張り、口縁上面はやや丸味を帯びる。器壁は5mmと薄手で、胎土は微砂粒少量含むが精選されており、黄灰色を呈す、やや軟質である。

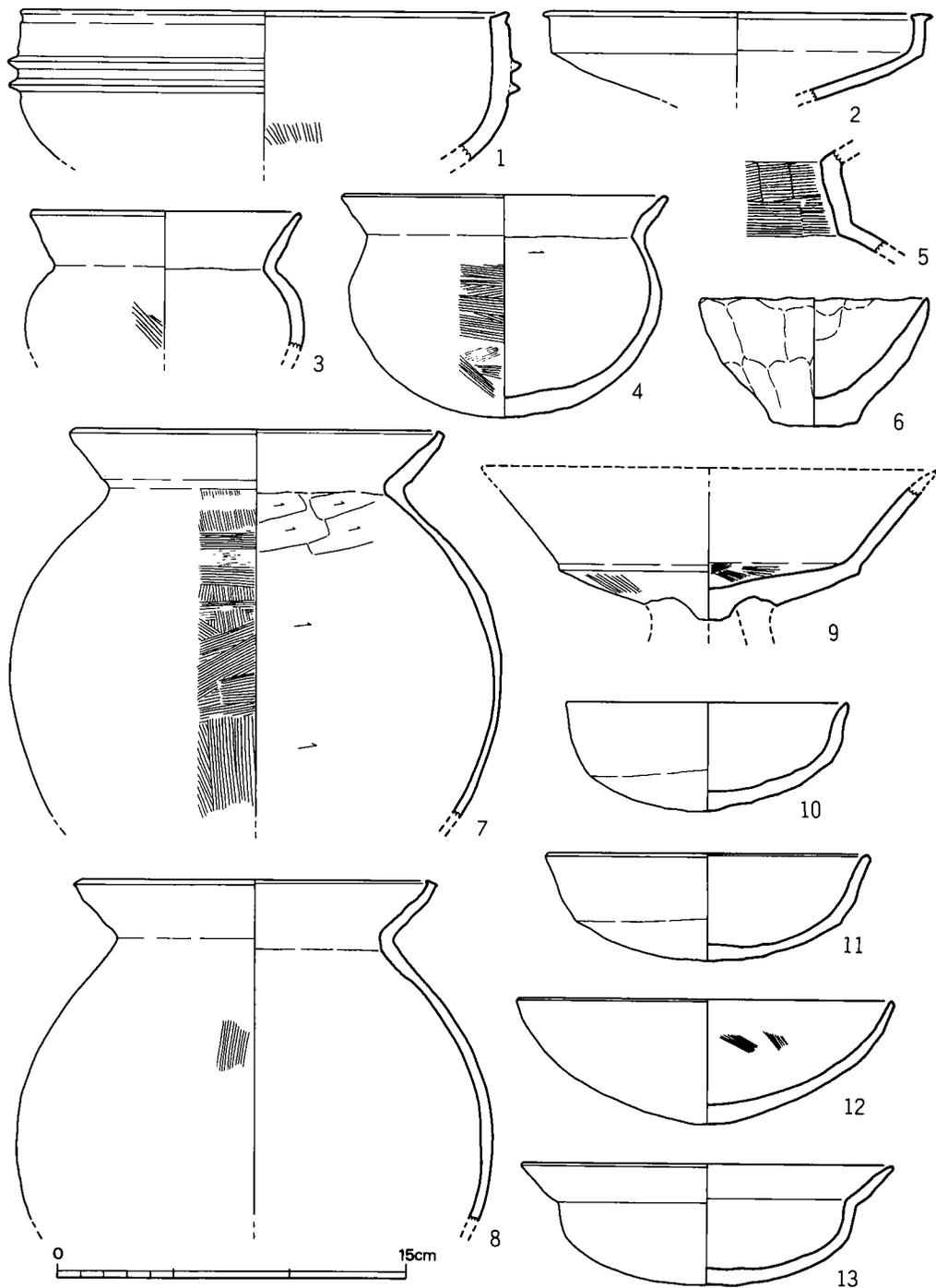
3・4は小形丸底壺で、3は復原口径11.6cmで口縁部は直に外反し、端部はわずかに角張る。口縁部内外面は横ナデ、肩部外面はハケ目の上からナデである。胴内面はヘラケズリである。

4は復原口径14cm、器高9.6cmを測る。器壁は肩部付近が最も薄く3mm弱で、底部は厚手である。口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は細かいハケ仕上げ、内面は横方向のヘラケズリである。

5は複合口縁壺の頸部で外面は荒れているが、内面は上半が細かい連続ハケ目、下半はハケ目仕上げである。肩部内面ヘラケズリされている。胎土は大粒の砂粒を含むが精選されており、黄灰色を呈す。やや軟質。

6は手捏土器で、復原口径10cm、器高4.5cmを測る。器壁は内外面とも強い指圧痕が残され、口縁部は波打っている。体部上半には煮沸した痕跡がみられる。

7・8は甕で、7は復原口径15.8cm、胴最大径は中にあり21cmを測る。器壁は体部3～5mmと薄いが口縁部は厚い。口縁部は内弯気味に外反し、端部は内へ張り出すが角張らない。頸部は明瞭な段がつき、ほぼ球形の胴部へと続く。口縁部内外面は横ナデ、胴外面はハケ目が4段にわたって使い分けられている。胴内面は右方向のヘラケズリである。外面胴下半にはススの



第 151 图 排土出土土器实测图 (1/3)

付着がみられる。8は復原口径15.6cm、胴最大径20.4cmを測る。やや内弯気味に立ち上がる口縁部にナデ肩の胴部がつく。口縁端部は両端へ張り出し、上面は平坦面を作る。器壁は薄手で、風化が著しいが内面はへラケズリである。この他に図示しなかったが、同器形・同手法の甕で肩部に7条1組の波状文を巡らせた破片も出土している。

9は高杯で、口縁部端と脚部を欠損している。杯部復原口径19.6cmを測り、大形の高杯である。杯部は深い。口縁部は直にするとく外反し、屈折部は明瞭な段をつくる。口縁部内外面は横ナデ、杯下半内外面にはハケ目がみられる。褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

10～12は杯で、10は口径12.1cm、器高4.7cmを測り、口縁部は直立気味に立ち上がり中位でゆるく屈曲する。口縁部内外面は横ナデ、外底面は手持ちへラケズリで、内底面は指によるおさえの後ナデている。11は復原口径14cm、器高4.6cmを測る。口縁部はゆるく外反する。口縁部内外面は横ナデ、外底面は手持ちへラケズリの後ナデており、内底面は押えの上からナデている。12は口径16.2cm、器高5.4cmを測るやや大きめの杯である。底部からゆるやかにのびた体部はそのまま口縁部へと続く。外面上半部は横へラ磨き、下半部は指によるおさえの上から不定方向のへラ磨き、内面は細かいハケの上から横ナデしている。

13は浅鉢で復原口径16cm、器高5.1cmを測る。浅い杯に短かい「く」の字状の口縁部がつく。杯上半から口縁部内外面にかけては横ナデ、外底面はへラケズリの後ナデ、内底面はナデであるが指圧痕が残されている。

排土中から出土した土器は上記の他にもあるが、図示できるものと、特徴的なものに限って抽出してみた。1と2はその手法などからして弥生時代後期頃のものであろう。特に2の高杯は瀬戸内の吉備地方において見られる弥生中期末から後期初め頃の高杯に類似しており、三雲遺跡番上地区の土器溜からも同種のものが出土していて後期中葉頃に比定されている(註1)。3～13の土器はいわゆる古式土師器に含まれるもので、一括出土ではないため多少のばらつきは見られるが古墳時代前期の布留式土器併行期のものと考えられる。

#### へラ描き文土器(図版98, 第142図)

第142図15は壺形土器の破片で、へラ描きの線刻画が肩部外面に飾られているものである。壺片は14×11cmの長方形状をなし、厚さは9mmと肉厚であるが器形は不明である。外面は縦の、内面は横方向の荒いハケ目仕上げで、胎土は金雲母・砂粒を含むが精選されている。色調は褐色を呈し、焼成も良好である。この壺片は排土よりの採集品であるため確実な時期の決定はできないが、同じ排土中にみられる土器片は弥生後期と古式土師器のみであり、しかもこの壺片にみられる手法等は1号住居跡出土の一括遺物に似かよっていて、ほぼ1号住居跡の土器と同じ弥生時代後期後半頃のものと考えてよからう。土器に描かれた線刻は、ハケ目仕上げの後、

へら状工具の先端にて描かれており、線刻の幅は広い個所で1mm弱で、深さはもっと浅い。線刻画は図示した面が正立と思われるが、逆転する可態性もあり、また土器片は線刻画を中心に4分割したように割れていて、線刻の微細な点については不明な所もある。へら描きによる線刻は長辺4.2cm、短辺3.2cmの長方形枠を中心として描かれている。長方形枠の内をさらに上下に2本、左右に3本の線刻を入れて「罎」字状に区画し、上辺には4ヶ所に半環状の釣手を配している。左上辺角からは、棒のようなものを持った手状の線刻が描かれ、両端の半環状の釣手からも更に線刻が延びている。以上が壺の肩部に描かれたへら描線刻画の構図であるが、何を意匠したものかは判然としない。想像を逞しくして考えると、柵のような罎の中に入った戦士達が武器を持って戦っている戦闘の場面を表現しているようにもみえる。特に左上辺角から延びている線刻は手に持った槍を表わし、戦闘の図を象徴しているかの如くである。あるいは左上角の線刻を罎の出入口の扉と考えると、動物捕獲の為の仕掛けを表現したもののようにも見受けられる。いずれにしろ左上角の線刻がこの線刻画の意匠を決めるポイントとなるものと思われる。

こうした弥生時代の土器に絵画や記号を表わしたものは、主として畿内地方の第Ⅳ様式の段階には即ち出現しており、それ以前の第Ⅲ様式にまで遡る可能性もある資料も増加しつつあるという(註2)。一方、福岡県内においても近年数例が知られるようになった。古くは鞍手郡宮田町上大隈出土の後期終り頃の壺胴部に、山形文と鳥形文を線刻で描いたものが知られており(註3)、近年では、福岡市小葎遺跡から後期中頃から後半にかけての複合口縁壺に動物像をへら描きしたものが出土し(註4)、小郡市でも表採資料ではあるが後期中頃の袋状口縁壺片の口縁部付近にへら描きした文様のあるものが採集されているという(註5)。県外では、長崎県壱岐のカラカミ遺跡でも、後期の壺胴部に舟の絵を描いたものがあり(註6)、宮崎県でも後期土器に絵や記号を線刻した例が多数報告されている(註7)。また時代は下るが、古式土師器にも絵画や記号が描かれたものがあり、福岡県三雲遺跡では5世紀前半の土師器壺肩部にも意匠不明のへら描き線刻がみられ(註8)、同じ三雲遺跡・八龍地区においても、弥生終末から古式土師器にかけてのものと思われる大形甕の口縁部外面に鋭く線刻された記号が2個描かれている(註9)。また小郡市の津古2号墳(前方後円墳で4世紀後半代に比定されている)出土の土師器壺にも舟形文と波を思わせるような線刻文様が描かれていて(註10)、弥生後期から古墳時代前期における資料が増加しつつある。塚堂古墳東地区出土のへら描き文土器片はその意匠は不明であるが、明らかに何かを意図した絵画であることは間違いなく、今後、類例の増加をまって更に細かい検討を加えてみたい。

### 第3節 小 結

塚堂古墳東地区の調査は、圃場整備に伴う短期間の調査であったにもかかわらず多大な成果を収めることができた。遺構としては弥生時代後期の住居跡3、古墳時代前期の溝1と少ないが、出土遺物にはみるべきものがある。

1号住居跡出土土器は、住居廃絶後一括して投棄されたもので、若干の新旧はあるが、ほぼ弥生時代後期後半頃のものである。器種は高杯がみられないほかはほとんど揃っており、一括資料として今後の弥生土器編年に資する所は大であろう。特に器高が90cmを超える大甕は、甕棺かと思ふもので、甕棺へ転用されてもよいものである。しかし、他の土器類とともに一括出土であるところから日常容器として使用されたものと考えられるが、逆に甕棺との併行関係を知る上では貴重な資料になるといえよう。日常容器と甕棺との併行関係を論じたものに橋口達也氏の考察があるが(註11)、この1号住居跡出土の大甕を甕棺編年に照らし合せると、住居跡出土の大甕は、底部はだれた平底かレンズ状にやや膨らんで丸底化の徴候がみられ、頸・胴の凸帯も華奢でやや下向きであり、刻目等も施されていない。橋口氏がKIVc式とされた後期前半末の甕は、底部はやや上げ底で凸帯もしっかりしている。また、後期後半初めのKVa式の甕は、丸底化の傾向が生じ、凸帯には後期後半に特徴的な刻目を施している。これらの特徴から住居跡出土の大甕はKIVc式からKVa式の過渡期にあたるものと考えられよう。とすると大甕共伴出土の日常容器は、後期後半とするよりもむしろ後期中頃に近い時期に位置づけられるものとする。

また、1号住居跡出土土器のうち、やや古手の土器には丹塗り土器や口縁部を打ち欠いた土器など祭祀を物語る遺物もある(手捏土器も数点出土したが、その後紛失)。これら土器群は何が原因で投棄されたものかは明らかではないが、土器投棄と祭祀との関連性を窺わせるものがある。

遺構は伴わなかったが祭祀遺物を出土した第6トレンチ黒灰色土層がある。これは古墳時代前期布留式土器併行期のもので、手捏土器や口縁部打ち欠き壺などが出土しており、溝1もほぼこの時期に比定できよう。排土出土土器は、弥生後期と布留式土器併行期のものであり、図示したものは布留式土器でも典型的なものであろう。弥生後期の土器の中には中部瀬戸内の吉備地方にみられる高杯と類似したものがあり、筑後地方と吉備地方との交流をうかがわせる貴重な資料である。

また、排土よりの出土であるがへう描き文土器片が1点採集された。その意匠はよく理解できないが、県内でも数少ない絵画土器の資料に新たに1点を加えることとなった。(新原)

- 註1 柳田康雄編 「三雲遺跡 III」 (『福岡県文化財調査報告書』第63集, 1982)
- 註2 佐原真 「弥生時代の絵画」 (『考古学雑誌』第66巻・第1号, 1980)
- 註3 九州考古学会 (『北九州古文化図鑑』第一輯, 1950)
- 註4 小葎遺跡発掘調査会 「動物絵画のある壺形土器について」 (『考古学雑誌』第66巻・第1号, 1980)
- 註5 小郡市教育委員会 片岡宏二氏教示
- 註6 森山恭次 『邪馬台国への道展』 (図録, 朝日新聞社, 1980)
- 註7 面高哲郎 「宮崎県下出土の線刻ある弥生土器」 (『考古学雑誌』第66巻・第1号, 1980)
- 註8 柳田康雄編 「三雲遺跡 I」 (『福岡県文化財調査報告書』第58集, 1980)
- 註9 小池史哲編 「三雲遺跡 ,IV」 (『福岡県文化財調査報告書』第65集, 1983) に所収される予定。
- 註10 波多野皖三 「津古遺跡群」 (『筑紫史論』第三輯, 1975)
- 註11 橋口達也 「甕棺編年と日常容器編年との関係」 (『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI, 福岡県教育員委員会, 1979)



## 第8章 おわりに

第1節 塚堂遺跡(A～E地区)出土の遺構と遺物

第2節 B・C地区出土の遺構と遺物

第3節 B・B北地区出土の溝状遺構と遺物

## 第8章 おわりに

### 第1節 塚堂遺跡(A～E地区)出土の遺構と遺物

「塚堂遺跡」は、調査の経過のなかの表1に示したように、バイパス用地内の道路・水路を境に便宜的に西から東にA～Eの5地区に区分して調査した。しかし、用地買収の関係で同一地区で調査年度を異にしたものもあり、「塚堂遺跡I」とした本報報告書では、B・C地区と両地区にわたる塚堂古墳および東地区を紹介したものである。

このような理由で、本報告中の遺構・遺物の説明は、他の地区の遺物整理を行わず、またE地区は一部の調査に着手したなかでの報告ということで、個別の説明に終わらざるを得なかった。例えばB地区では、弥生時代後期の住居跡は4号の1軒だけが西端で検出されたが、A地区東端で数軒が調査されている。また、1号は5世紀前半のもので、南北主軸の住居とした古出のものは既にカマドを北壁に付設したものであるが、A地区東半部で調査された住居で同様に北壁にカマドをもつものがあり、時期的に併行すると思われる遺物を出土している。このA地区の住居跡は、更に改築が行われ、カマドの位置が南壁に移設され、多くの完形土器の一括資料を出土している。

また、B・B北地区検出の大溝等の溝状遺構からは多くの図示し得る土器・あるいは完形に近く復原された一部の土器を含めた土器群が出土している。これら土器群は確かに庄内式や布留式と言われる土器を含み、層的にその前後関係に問題はなかろうが、あくまでも溝内の堆積でしかない。このことは、層位を無視すると言うものではないが、C地区1号住居跡出土の土器のように、これが庄内式の特徴の一部も未だに残す布留式前半を前後する時期の土器群である場合、住居跡の切り合い関係が確認された住居跡内の一括土器群の検討を待たねばならない。幸い、A地区西半部～中央部にかけて、この時期の、数軒が切り合い状態にある住居跡が出土している。更に、溝状遺構上層出土の土器群を検討するときの好例は、図版50-2に示したD地区南西端部検出の住居跡群である。この住居跡群の切り合いは、7号(古)→7号(新)→20号→5号の順で新しくなり、7号(古)では古式須恵器前段階の外來系土器が、7号(新)では古式須恵器段階(未整理の現時点で)に一部重複する外來系土器が出土している。7号(新)ではカマドが遺存する。20号では石組みのカマドがほぼ旧状を保って出土し(図版99-2)、5号のカマド内では祭祀使用の土製模造鏡・高杯類が一括して出土している。5号と時期を前後する住居跡は他にA地区・D地区合わせて10数軒が検出され、そのなかには切り合い関係にあるものも認められ、甑がカマド両袖間の上面で、あるいは支脚に転用された高杯脚部が原位置で、

出土したり、袖天井を補強するために埋置された高杯杯部の検出例がある。

以上の土器群の検討を待って、同一遺跡内での土器編年は行われねばならず、これに遺構の配置・性格も十分に考慮すべきであろう。また、このことは、調査された遺跡名を冠しての土器編年を遺跡別に提示すべきでないことに帰結する。第2章での第1図に、遺跡の所在地と主要遺跡を示したが、『塚堂遺跡 I』では遺跡紹介を古墳時代と歴史時代に限った。『II』で弥生時代を前後した時期を含めて、新たに説明するつもりである。本報告では、遺跡周辺の地元で、筑後川が千年川の別称で、筑後平野が両筑平野の別称で呼ばれている意味を、第1図の地形から考える必要があり、また遠く北西方向の玄海灘・転じて北東方向の周防灘の所在をも前提とすべきであることの一部を示すことができれば充分である。

遺跡の特徴では、本報告に紹介したように、B・C地区出土遺構と塚堂古墳との関係であろう。A・D・E地区を含めて、古墳築造後の遺構は、E地区の歴史時代の住居跡、溝等だけで、中世と考えられるピットがC地区外濠埋土他で数ヶ所・A地区西半部で溝状遺構が1条検出されただけである。すなわち、古墳築造前は縄文時代後期～弥生時代～古墳時代前期へと生活遺構が認められるのに対して、以後は奈良・平安時代（未整理の現時点での）を待たねば遺構が認められない点であろう。C地区調査中の新聞記者の質問では、築造に際しての現地作業小屋あるいは強制退去の対象となった古代集落との言質をC地区住居群に対して求められたが、本報告では、築造後少なくとも古墳時代の終わりまでは、古墳の所在を意識して周辺に住居等は設けられなかったという指摘だけはできるであろう。

遺構の特徴では、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡の柱穴・土壇の位置と面積に著しいものがある。B・C地区に限ってはカマドも含めて、第2節でふれ、ここではA～E地区全体について紹介する。弥生時代後期後半の住居跡では、壁・土壇は南壁あるいは東壁の中央で検出され、土器は破片で出土し、C地区3号のようにガラス小玉を粘土塊と共に出土する例もある。中央土壇は、住居の中央にあり、古墳時代のものに比べて浅く、土壇壁は著しく焼けた状態状ではなく、赤褐色の焼土塊は伴わず、黒灰色の灰あるいは住居埋土より若干黒い埋土である。出土遺物は土器細片が少量である。主柱穴は中央部に1箇、あるいは4箇で、床面プランは方形に近く、面積はD地区で小さく、C地区で大きい。面積の差位が、時期差を示すものか、出土地区で異なるものであるかは、D地区が未整理であるため、ここでは差位の指摘にとどめる。

古墳時代前期の住居跡は、カマドを設けない前出の例では、壁土壇は南壁あるいは東壁の中央で検出され、土壇の一部が屋外に突出する例も認められる。土器は小形で完形のものが出土する。中央土壇は、弥生時代のものに比べて深く、床面から壇底までの黒色の灰は層をなして堆積した状態を示すが、壁に著しい熱変は認められる。土器は細片でほとんど出土しない。主柱穴は2箇あるいは4箇で、床面プランは長方形を呈し、短壁と長壁の差が著しく、面積は弥生時代後期後半の住居より大きい。

古墳時代前期でも、カマドを付設する新出の例では、壁土壙の位置は前代と変化ないが、やや深くなり、小形の土器で完形の土器出土量の著しいもの・破片のみのものと差位が認められる。中央土壙は、有るものと無いものがあり、面積は弥生時代の例より更に小さいものと、著しく大形のものとの差位が著しく、ミニチュア土器の出土例が増える。

このように、住居の特徴を例にとれば弥生時代後期後半～古墳時代にかけて、継続した変化が認められ、壁土壙・中央土壙・カマドの三者には単にカマドの付設に伴う中央土壙の消滅だけでなく、祭祀行為の変化を強く提示しているようである。中央土壙内の灰は黒色で、藁灰のように観察され、粘質灰色灰ではない。

以上のような遺構の特徴と、前述した切り合い関係によって示された一括土器群の特徴、そして、遺跡の立地を考慮して、塚堂遺跡に立脚した土器編年（1982年度までに約70軒の住居跡を調査済）は、未整理の遺構を多く残す本報造ではあえて行わない方針をとった。したがって、A・D・E地区が未報である『塚堂遺跡Ⅰ』の中で、次節に示された「土器の器種分類」の仕方と「編年的位置付け」は、節名のとおり、「B・B北地区出土の溝状遺構に限ったものと理解すべきである」と考える。

## 第2節 B・C地区出土の遺構と遺物

### 1. 土 器

前節にも述べたように、B・C地区出土の遺物については、各遺構別にその特徴を説明しただけであるが、土器の出土番号・出土位置については土器実測番号・挿図番号と共に、表4～14で示すことにする。

弥生時代後期中頃を前後する時期の住居跡では、B地区4号、C地区3号・4号・8号があり、第113図1～3・6、第116図1～3・5に示した壺は、いずれも在地の特徴を示すものではない。第113図1・第116図1は共に中部瀬戸内でも吉備地方の器制に類似する。第113図3の底部は畿内第Ⅴ様式系の器制と一部類似し、径が小さいが、底部の破片のみで、中央部が凹むかどうかは不明である。このことについては、D地区11号円形周溝内一括出土の土器群の中に大分県内出土土器に類似する多くの良好な資料もあるので、外来の影響の強い土器が出土したとの紹介にとどめたい。なお、第116図1・2の壺は、遠く玄海灘以北の半島にまで留意すべきかも知れない。

古墳時代前期では、C地区1号住居跡出土の一括資料があり、第106図13～17の外来の庄内式新～布留式古の特徴を有す甕の中に、第107図の26の在地和外来の両特徴を有す例が同26と共に出土している。また第106図18・19の高杯も遠く山陰地方の影響を強く認める供伴資料である。

表4 B地区1号住居出土土器一覽表

土器番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
出土番号			4-1	3-2	1				6	3-1	9				2
実測番号	22384	17128	26388	21383	14123	02074	06184	18226	01072	15124	04091	10231	07227	05185	03073
出土位置		K11内				P13西	埋土		P11東	P13西	D11北	埋土	埋土	埋土	P18西
(張床面高cm)	張床内		0	0	2	張床内		張床内	0	0	1				0

土器番号	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26				
出土番号	4-2		4-2		4-3		5-1	5-2			7-2				
実測番号	24386	22385	25387	19381	27389	20382	09229	11230	08228	16127	12131				
出土位置	P18南			埋土		K11内			埋土		K11西				
(張床面高cm)	張床内	張床内	0		0		5	5		張床内	0				

表5 B地区4号住居出土土器一覽表

土器番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
出土番号	8		1		12		6	3・5	2
実測番号	07153 08154	02178	09149	03145	04156	01177	10146	05186	06151
出土位置	南壁寄	埋土		埋土		埋土	集石上		南壁接
(床面高cm)	0		4		0		4	5	4

表6 C地区1号住居出土土器一覽表

土器番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
出土番号	4	26・27	34	7	37	30-2	6	36	20	8	10	1	31	29	16
実測番号	13010	01049	22008	19005	24001	17003	09014	04025	03028	12017	08021	05018	10015	20006	11016
出土位置								D11内							
(床面高cm)	4	5	1	0	0	0	3		2	6	0	2	2	0	3

土器番号	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27			
出土番号	$\frac{9-2}{35-1}$	35-2	11		17	5	33-1	9-1	30-1	35-3	32	$\frac{35-4}{17-18}$	33-2	$\frac{9-3}{28}$	
実測番号	18004	28342	23011	07020	06019	21007	14011	02035	16013	15012	25002	27341			
出土位置	D11内	D11内						D11内		D11内	D11内				
(床面高cm)			1		4	0	4		0			3	4	1	

表7 C地区3号住居出土土器一覽表

土器番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
出土番号		2			10		12	3	6	2		5・8・12			
実測番号	01042	11198	08195	02044	13339	14338	12299	05037	06032	03040	10197	07038	09196	04036	
出土位置	埋土	D21直上	中層	上層	D21内	中層	D21内	D21内直上		D11内	埋土	D11内	中層	中層	
(床面高cm)									0						

表8 C地区4号住居出土土器一覧表

土器番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
出土番号	48		33-1			41	$\frac{16 \cdot 17}{38-1}$		10	4	5	26		20	28	49
実測番号	12022	17221	37315	16217	23207	15216	21203	22208	03050	35213	09026	20204	14220	30214	31215	33182
出土位置			D11内		D21内			D21内				P21				
(床面高cm)	6					0	1		4	5	3	0		9	5	4

土器番号	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
出土番号	29	27	39	44	$\frac{31 \cdot 33}{38-2}$			25-1		42	25-2	9・12	24	13	6	
実測番号	05039	32182	29202	27211	11024	24205	26212	25206	01047	08032	02048	10027	28210	04051	13223	
出土位置		P21	P21	D21	D11		D22内		D22内	D21						
(床面高cm)	6	0	2	1	1			5		1	5	1	8	2	2	

土器番号	32	33														
出土番号	45	32	3	8	14	15	18	19	22	23	35	36	38	40	47	
実測番号	06031	07029														
出土位置	D21	D11														
(床面高cm)	1	2	6	6	5	2	2	7	4	8	1	1	8	2	6	

表9 C地区6号住居出土土器一覧表

土器番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
出土番号		31	12	1					8			15	32	10	
実測番号	18201	22272	19222	21172	12174	11183	15187	08193	24317	20223	23316	10191	16189	03061	07192
出土位置					D22	最上層	D11		D21		上層			D21接	
(床面高cm)		3	8									0	8	8	

土器番号	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25					
出土番号	22	4	28・29		2・6・11	27	25		19-2						
実測番号	09194	06200	05076	17190	01059	14188	25346	13175	04062	02060					
出土位置		D21		焼土塊中	P44		北壁	D22	D11	D11					
(床面高cm)	7	1	0		0	0	2		6	0					

つぎの住居跡では、B地区1号とC地区6号の土器の比較により、後者ではカマドの検出には致らなかったが、B地区1号(古)・C地区2号・5号が併行し、1号(新)が後続し、6号(古)は1号新に一部併行することが考えられる。次に後続して、6号(新)と6号溝を一応考えたい。しかし、既述したように、D地区の7号(古)→7号(新)→20号→5号の各住居の切り合い状態とその出土土器との比較によって、再度B・C地区出土土器の時期を検討する必要があるだろう。

なお、C地区6号溝・塚堂古墳前方部南側縁外濠出土の陶質土器の検討も、A・D地区の住居で土師器と共伴する同様の資料があるので、次集以下で行いたい。

表10 6号住居跡出土須恵器一覧表

挿図番号	出土番号	実測番号	出土位置	色 調
第133図8		30426	最上層	器内 239 暗い青味灰(10.0PB 4.0/1.0) 器外 196 明るい青味灰(7.5B 6.0/2.0) 器肉 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5) 灰釉 142 灰味黄緑 (7.5GY 5.0/4.0)
" 9		28424	"	器内 230 暗い紫味灰 (8.0PB 3.0/2.0) 器外 196 明るい青味灰(7.5B 6.0/2.0) 器肉 273 灰味赤紫 (2.5RP 5.0/4.0)
" 10		29425	"	器内 221 暗い青 (6.5PB 3.0/2.0) 器外 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5) 器肉 270 器外と同じ 灰釉 142 灰味黄緑 (7.5GY 5.0/4.0)
" 11	13	27423	P13内	器内 239 暗い青味灰(10.0PB 4.0/1.0) 器外 209 明るい紫味灰(2.5PB5.5/2.0) 器肉 254 明るい紫味灰 (4.0P 6.0/2.5) 灰釉 142 灰味黄緑 (7.5GY 5.0/4.0)
第134図21		26411	最上層	器内 154 灰味黄緑 (2.0G 6.0/0.5) 器外 154 器内に同じ 器肉 154 器内に同じ 灰釉 142 灰味黄緑 (7.5GY 5.0/4.0)

表11 1号溝出土陶質土器・須恵器一覧表

挿図番号	出土場所	実測番号	出土層位	色 調
第132図10	土層堤	01440	4 b層	器内 207 青味白 (2.5PB 8.0/1.0) 器外 194 明るい青味灰 (7.5B 7.0/1.0) 器肉 207 器内に同じ
第134図35	土層堤	02404	4 層	器内 202 青味灰 (1.0PB 4.5/2.0) 器外 202器内に同じ 器肉 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5)

表12 6号溝状遺構出土陶質土器・須恵器一覧表

挿図番号	出土場所	実測番号	出土位置	色 調
第132図6	8号住居 近く	02401	上 層	器内 196 明るい青味灰 (7.5B 6.0/2.0) 器外 170 緑味灰 (10.0G 4.5/0.5) 器肉 254 明るい紫味灰 (4.0P 6.0/2.5)
" 12		01399	最下層	器内 209 明るい青味灰(2.5PB 5.5/2.0) 器外 196 明るい青味灰(7.5B 6.0/2.0) 灰釉 96 明るい灰味うぐいす (2.0Y 7.5/1.0) 器肉 209 器内に同じ
第133図4	8号住居 近く	08427	上 層	器内 297 暗い灰 (N 4.0) 器外 220 暗い青 (6.5PB 3.0/2.5) 器肉 281 灰味赤紫 (5.0RP 5.0/2.5)
第155図30	"	04407	"	器内 197 青味灰 (7.5B 4.5/2.0) 器外 186 青味黒 (10.0BG 2.5/1.0) 器肉 281 灰味赤紫 (5.0RP 5.0/2.5)
" 33	"	03402	"	器内 197 青味灰 (7.5B 4.5/2.0) 器外 113 青味灰 (7.5B 4.5/2.0) 器肉 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5)
" 34		05408	最下層	器内 209 明るい青味灰(2.5PB 5.5/2.0) 器外 202 青味灰 (1.0PB 4.5/2.0) 器肉 281 灰味赤紫 (5.0RP 5.0/2.5)
" 36		06409	"	器内 197 青味灰 (7.5B 4.5/2.0) 器外 213 青味灰 (7.5B 4.5/2.0) 器肉 270 灰味赤紫 (1.5RP 4.5/2.5)
" 38		07410	"	器内 197 青味灰 (7.5B 4.5/2.0) 器外 213 青味灰 (7.5B 4.5/2.0) 器肉 273 灰味赤紫 (2.5RP 5.0/4.0)

表13 塚堂古墳前方部南縁外濠出土陶質土器・須恵器一覧表

挿図番号	出土場所	実測番号	出土位置	色 調	
第132図1	東部 } 接 西部 } 合	02391	最上層 } 上層 }	器内 197 青味灰 (7.5B 4.5/2.0) 器肉 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5)	器外 213 青味灰 (3.5PB 4.0/2.0)
" 2	西部	03392	上層	器内 212 うす青 (3.0PB 6.5/4.0) 器肉 254 明るい紫味灰 (4.0P 6.0/2.5)	器外 202 青味灰 (1.0PB 4.5/2.0)
" 3	"	01390	"	器内 170 緑味灰 (10.0G 4.5/0.5) 器肉 269 暗い紫味灰 (10.0P 3.5/2.0)	器外 239 暗い青味灰(10.0PB4.0/1.0)
" 4	"	07397	"	器内 209 明るい青味灰(2.5PB 5.5/2.0) 灰彩 98 うす黄 (2.5Y 8.0/4.0)	器外 220 暗い青 (6.5PB 3.0/2.5) 器肉 209 器内と同じ
" 5	東部	04393	最上層	器内 294 明るい灰 (N 6.0) 灰釉 115 うす黄茶 (5.5Y 6.0/5.0)	器外 249 器内と同じ 器肉 297 暗い灰 (N 4.0)
" 8	西部	06396	上層	器内 196 明るい青味灰 (7.5B 6.0/2.5) 器肉 254 明るい紫味灰 (4.0P 6.0/2.5)	器外 237 明るい紫味灰 (10.0PB 6.0/2.0)
" 11	"	08398	"	器内・外・肉共に 196 明るい青味灰 (7.5B 6.0/2.0)	
" 13	"	05395	"		
第133図3	"	18428	上層まで	器内 239 青味灰 (10.0PB 4.0/1.0) 灰釉 127 灰味黄緑 (2.5GY 7.0/4.0)	器外 186 青味黒 (10.0BG 2.5/1.0) 器肉 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5)
" 12	"	19429	"	器内 221 暗い青 (6.5PB 3.0/2.0) 器肉 273 器外と同じ	器外 273 灰味赤紫 (2.5RP 5.0/4.0)
" 15	"	21431	上層	器内 221 暗い青 (6.5PB 3.0/2.0) 器肉 273 器外と同じ	器外 273 灰味赤紫 (2.5RP 5.0/4.0) 灰釉 132 緑味白 (6.0GY 9.0/2.0)
第134図17	"	22442	上層まで	器内・外・肉共に 194 明るい青味灰 (7.5B 7.0/1.0) 灰釉 153 灰味黄緑 (2.0G 5.0/1.0)	
" 19	"	15415	"	器内 194 明るい青味灰 (7.5B 7.0/1.0) 器肉 194 器内と同じ	器外 154 灰味黄緑 (2.0G 6.0/0.5)
" 22	"	12412	上層	器内・外・肉共に 213 青味灰 (3.5PB 4.0/2.0)	
" 23	"	14414	上層まで	器内 194 明るい青味灰 (7.5B 7.0/1.0) 器肉 194 器内と同じ	器外 154 灰味黄緑 (2.0G 6.0/0.5)
" 25	"	17417	"	器内 238 青味灰 (10.0PB 4.5/2.0) 器肉 273 灰味赤紫 (2.5RP 5.0/4.0)	器外 205 青味灰 (2.0PB 4.5/3.5)
" 26	"	16416	上層	器内 190 青味灰 (2.5B 4.5/1.5) 器肉 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5)	器外 199 暗い青 (7.5B 3.0/2.0)
" 29	"	13413	"	器内 194 明るい青味灰 (7.5B 7.0/1.0) 器肉 194 器内と同じ	器外 154 灰味黄緑 (2.0G 6.0/0.5)
第135図31	東部	11406	"	器内 202 青味灰 (1.0PB 4.5/2.0) 器肉 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5)	器外 186 青味黒 (10.0BG 2.5/1.0)
" 32	西部	09403	"	器内 196 明るい青味灰(7.5B 6.0/2.0) 器肉 159 器外と同じ	器外 159 緑味灰 (5.0G 5.0/0.5) 灰釉 154 灰味黄緑 (2.0G 6.0/0.5)
" 37	東部	10405	最上層	器内 197 青味灰 (7.5B 4.5/2.0) 器肉(旧状) 284にぶ赤紫色(7.5RP4.0/4.5)	器外 213 青味灰 (3.5PB 4.0/2.0) 器肉(現状)281 灰味赤紫(5.0RP5.0/2.5)
	西部	20430	上層	器内 221 暗い青 (6.5PB 3.0/2.0) 器肉 273 器外と同じ	器外 273 灰味赤紫 (2.5RP 5.0/4.0)

表14 C地区出土須恵器一覧表

挿図番号	出土場所	実測番号	出土位置	色 調
第132図7	東 部	17443	床土(下層)	器内 202 青味灰 (1.0PB 4.5/2.0) 器外 230 暗い紫味灰 (8.0PB 3.0/2.0) 器肉 243 にぶ青味紫 (1.5 P 4.0/6.0)
" 9		01394	表 採	器内 118 明るい灰味うぐいす色(6.0Y7.5/1.0) 器外 221 暗い青 (6.5PB 3.0/2.0) 器肉 194 明るい青味灰 (7.5B 3.0/2.0)
第133図1	東 部	15440	"	器内 86 青味黒 (10.0BG 2.5/1.0) 器外 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5) 灰釉 127 灰味黄緑 (2.5GY 7.0/4.0)
" 2	"	16441	"	器内 86 青味黒 (10.0BG 2.5/1.0) 器外 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5) 灰釉 127 灰味黄緑 (2.5GY 7.0/4.0)
" 5	"	12437	床土(下層)	器内 239 暗い青味灰 (10.0PB 4.0/1.0) 器外 196 明るい青味灰(7.5B 6.0/2.0) 器肉 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5) 灰釉 142 灰味黄緑 (7.5G 5.4/4.0)
" 6	"	13438	"	器内 239 暗い青味灰 (10.0PB 4.0/1.0) 器外 196 明るい青味灰(7.5B 6.0/2.0) 器肉 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5) 灰釉 灰味黄緑 (7.5G 5.4/4.0)
" 7	"	09434	"	器内 239 暗い青味灰 (10.0PB 4.0/1.0) 器外 ・肉共に270 灰味紫(1.5RP4.5/2.5)
" 13		10435	"	器内 239 暗い青味灰 (10.0PB 4.0/1.0) 器外 209 明るい紫味灰(2.5PB 5.5/2.0) 器肉 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5)
" 14		07432	"	器内 239 暗い青味灰 (10.0PB 4.0/1.0) 器外・肉共に270 灰味紫(1.5RP4.5/2.5)
" 16		11436	"	器内 239 暗い青味灰 器外・肉共に270 灰味紫(1.5RP 4.5/2.5)
第134図18	東 部	02418	"	器内 196 明るい青味灰 (7.5B 6.0/2.0) 器外 213青味灰(3.5PB 4.0/2.0) 器肉 170 緑味灰 (10.0G 4.5/0.5)
" 20	"	03419	"	器内 196 明るい青味灰 (7.5B 6.0/2.0) 器外 239 暗い青味灰(10.0PB 4.0/1.0) 器肉 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5)
" 24		06422	"	器内 258 紫味灰 (5.0P 4.5/2.0) 器外 190 青味灰 (2.5B 4.5/1.5) 器肉 254 明るい紫味灰 (4.0P 6.0/2.5)
" 27	東 部	05421	"	器内 194 明るい青味灰 (7.5B 7.0/1.0) 器外 151 明るい緑味灰(2.0G 7.0/1.0) 器肉 207 青味白 (2.5PB 8.0/1.0) 灰釉 146 明るい緑味灰(10.0GY6.5/3.0)
" 28		04420	"	器内 194 明るい青味灰 (7.5B 7.0/1.0) 器外 154 灰味黄緑(2.0G 6.0/0.5) 器肉 194 器内と同じ
	東 部	08433	床土(下層)	器内 239 暗い青味灰 (10.0PB 4.0/1.0) 器外は灰釉 器肉 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5) 灰釉 165 にぶ緑 (8.5G 4.5/3.0)
	"	14439	"	器内 184 暗い青緑 (10.0BG 4.0/2.0) 器外 270 灰味紫 (1.5RP 4.5/2.5) 器肉 270 器外と同じ 灰釉 154 灰味黄緑 (2.0G 6.0/0.5)

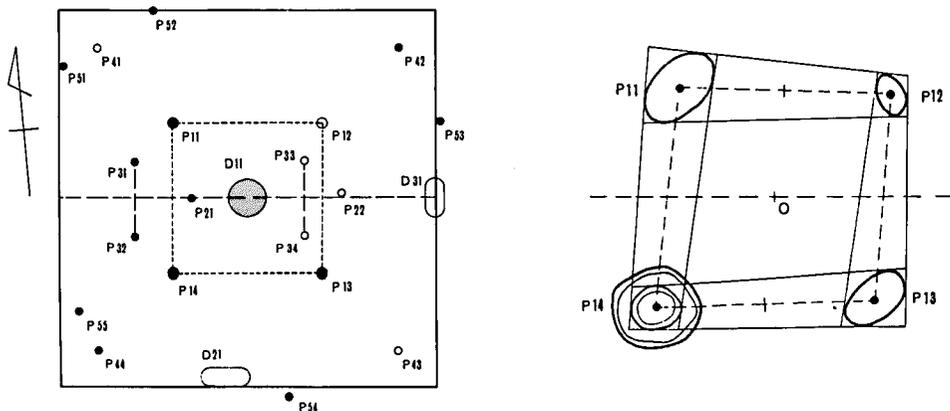
## 2. 住居跡の柱穴・土壇・カマドの位置と面積

本報告以外の地区の住居の特徴の概略は、第1節で時期別に既述したので、ここでは、B・C地区出土の住居跡の計測表・面積計算表・換置図形算出表を表16～54に示し、その計測部位と換置図形を第153～164図で示し、このことについて若干補足する。

計測・算出部位の名称については、第4章-2節(1)住居跡(P73-74)の項で既述のとおり、第151図の住居模式図に示したものを使用し、第161図C地区6号住居(以下単に住と略)面積計測例図のように他の住居跡も計測し、換置図形を得たが、このような方法を用いた理由は下記に示すとおりである。

①住居跡の検出壁上面の平面プランは、弥生時代前半のような円形を呈することはないが、直線で方形あるいは長方形に4壁が巡るものでもなく、各壁中央部が若干外弯する。これは、壁崩壊の結果とは考えられず、壁下端の床面プランでも確認される。

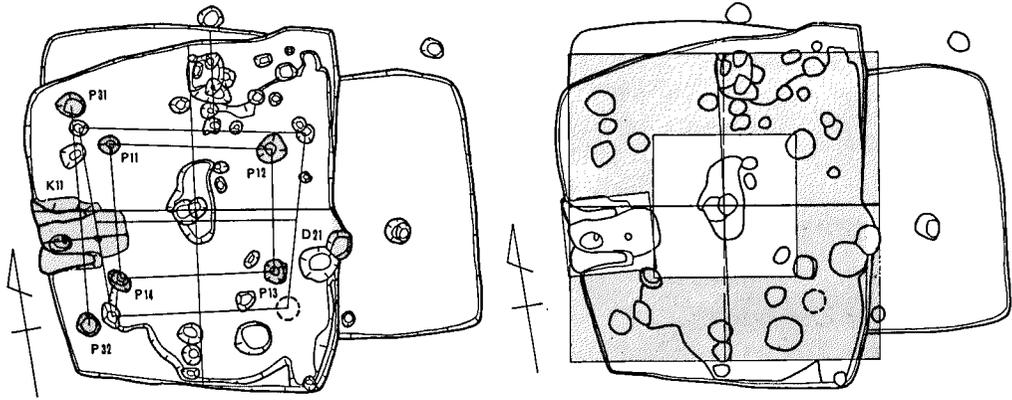
②この床面プラン、したがって掘り込み面プラン(我々が知り得るのは検出上面プラン)は、竪穴住居では家屋構造なかでも、家根の平面プランに規制される。



第 152 図 住居跡模式図

表15 住居跡模式計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	主軸柱間	主軸間柱間	対角柱間	壁柱間
東西	P12・P41	P11-P14	P11-P12	南北O-P21	P31-P32	O-P42	東西O-P51
	P43	?					
		P12-P13	P14-P13			O-P44	南北O-P52
		?					



第 153 図 B 地区 1 号住居跡東西主軸模式図 (1/100)

表 16 B 地区 1 号住居 (東西軸) 計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	主軸間柱間	番号	短径×長径	深さ
東西	D <sub>22</sub>	P <sub>11</sub> -P <sub>14</sub>	P <sub>11</sub> -P <sub>12</sub>	東西O-P <sub>31</sub>	P <sub>11</sub>	0.24×0.28	0.13
N-80°-W	D <sub>11</sub> K <sub>12</sub>	1.78	2.18	1.42	P <sub>12</sub>	0.38×0.40	0.57
		P <sub>12</sub> -P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub> -P <sub>13</sub>	東西O-P <sub>32</sub>	P <sub>13</sub>	0.26×0.30	0.42
		1.64	2.02	1.52	P <sub>14</sub>	0.19×0.23	0.55
カマド主軸		平均 1.71	2.10	1.47	平均	0.28×0.30	0.42
東西		平均 1.91			P <sub>31</sub>	0.32×0.40	0.06
N-86.5°-W					P <sub>32</sub>	0.28×0.32	0.06
					平均	0.30×0.36	0.06
カマド	壁内長	壁外長	上面幅	下面幅	外側間	内側間	最大内径
左袖	0.74	0.09	0.16	0.20	} 0.96	} 0.44	} 0.45
右袖	0.82	0.05	0.11	0.30			
床	1.14	0.03	0.43	カマド位置	西壁.東西Oから0.36南(左)寄り		
					番号	最大袖外間×最長軸	床深さ
					P <sub>11</sub>	1.03×1.15	0.09

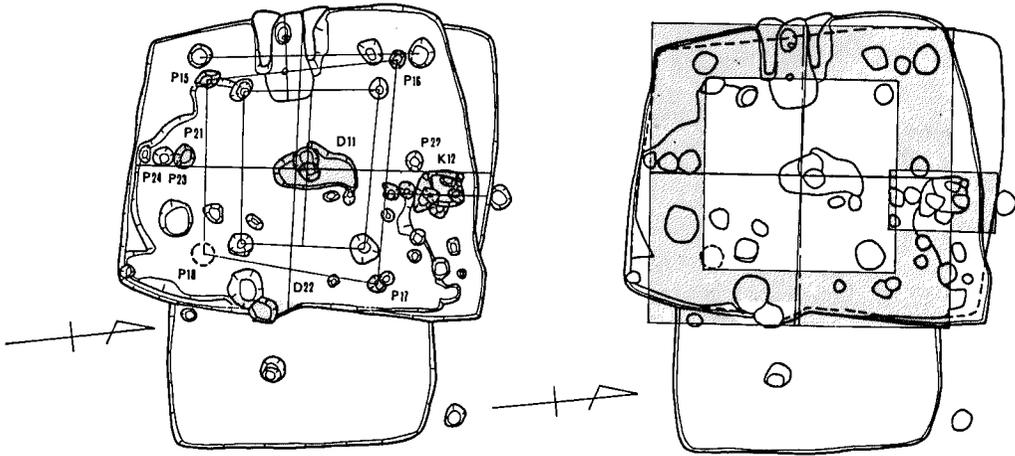
支脚穴中心までの距離	壁上端	壁下端	床前面	左袖内側	右袖内側	支脚穴遺存	深さ	前面幅	奥行
	0.32	0.30	0.84	0.23	0.22		0.03	0.10	0.06

表 17 B 地区 1 号住居 (東西軸) 面積計測表

計測部	内 訳
床 面	$(1^2 \times 11) + (0.2^2 \times 104) + (0.05^2 \times 526) + (0.05^2 \times 242) \div 2 = 16.7775$
P <sub>11</sub> ~ P <sub>14</sub>	$(2.64 \times 1.46) \div 2 + (2.64 \times 1.26) \div 2 = 3.5904$
東 壁 D <sub>21</sub>	$(0.05^2 \times 13) + (0.05^2 \times 30) \div 2 = 0.07$ (張り出し部)
カマド K <sub>11</sub>	$(0.1^2 \times 74) + (0.01^2 \times 1309) + (0.01^2 \times 296) \div 2 = 0.8857$ (住居床内) $(0.01^2 \times 656) + (0.01^2 \times 74) \div 2 + (0.01^2 \times 99) \div 2 = 0.07425$ (住居床外)

表 18 B 地区 1 号住居 (東西軸) 換置図形算出表

算出部	換置図形	内 訳
床 面	正 方 形	$A^2 = 16.7775$ $A = \sqrt{16.7775} \approx 4.0960$
P <sub>11</sub> ~ P <sub>14</sub>	正 方 形	$B^2 = 3.5904$ $B = \sqrt{3.5904} \approx 1.8948$
東 壁 D <sub>21</sub>	正 弦 弧	$a_{21}^2 + a_{21}^2 = R_{21}^2$ $\{ \pi R_{21}^2 - (2a_{21})^2 \} \times \frac{1}{4} = 0.07$ $R_{21} = \sqrt{\frac{0.07 \times 4}{\pi - 2}} \approx 0.4956$ $a_{21} = 0.3504$
カマド K <sub>11</sub>	長 方 形	最大袖外間幅 1.03 奥行 = 1.13 $1.03 \times 1.13 = 1.1639$



第 154 図 B 地区 1 号住居跡南北主軸模式図 (1/100)

表 19 B 地区 1 号住居(東北軸)計測表

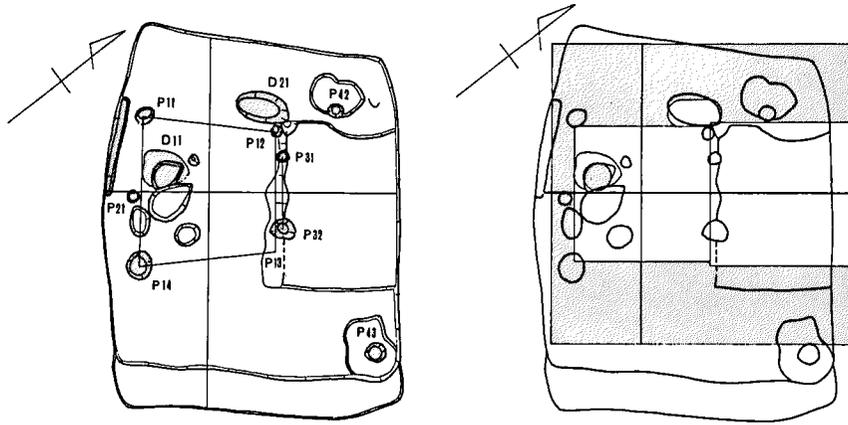
主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	主軸柱間	番号	短径×長径	深さ	
南北 N-8°-E	P <sub>11</sub> ~P <sub>14</sub> P <sub>31</sub> ・D <sub>32</sub> ・D <sub>21</sub> K <sub>11</sub> (P <sub>22</sub> ~23)	P <sub>15</sub> -P <sub>18</sub>	P <sub>15</sub> -P <sub>16</sub>	東西O-P <sub>21</sub>	P <sub>15</sub>	0.20×0.32	0.07	
		(2.08)	2.54	1.48	P <sub>16</sub>	0.22×0.22	0.06	
カマド主軸 南北 N-12.5°-E		P <sub>16</sub> -P <sub>17</sub>	P <sub>18</sub> -P <sub>17</sub>	東西O-P <sub>22</sub>	P <sub>17</sub>	0.20×0.24	0.12	
		3.04	2.36	1.58	(P <sub>18</sub> )			
平均		2.56	2.45	東西O-P <sub>23</sub>	平均	0.21×0.26	0.08	
平均		2.51		1.76	P <sub>21</sub>	0.28×0.28	0.06	
				東西O-P <sub>24</sub>	(P <sub>22</sub> )	0.24×0.26	0.07	
				2.00	(P <sub>23</sub> )	0.24×0.28	0.06	
				平均	1.71	(P <sub>24</sub> )	0.20×0.16	0.10
					平均	0.24×0.25	0.07	
					D <sub>11</sub>	0.57×1.10	0.07	
					D <sub>22</sub>	×0.94	0.09	
					番号	現存最大床幅×最大長	高さ	
					K <sub>22</sub>			

表 20 B 地区 1 号住居(南北軸)面積計測表

計測部	内 訳
床面(復原)	$(1^2 \times 12) + (0.2^2 \times 67) + (0.05^2 \times 482) + (0.05^2 \times 233) \frac{1}{2} = 16.17625$
P <sub>15</sub> ~P <sub>18</sub> 内	$(3.56 \times 1.54) \frac{1}{2} + (3.56 \times 2.12) \frac{1}{2} = 6.5148$
中央 D <sub>11</sub>	$(0.2^2 \times 4) + (0.05^2 \times 98) + (0.05^2 \times 55) \frac{1}{2} = 0.47375$
東壁 D <sub>22</sub>	$(0.05^2 \times 52) + (0.05^2 \times 22) \frac{1}{2} = 0.1575$ (張り出し部)
カマド K <sub>12</sub>	

表 21 B 地区 1 号住居(南北軸)換置図形算出表

算出部	換置図形	内 訳
床面(復原)	正 方 形	$A^2 = 16.17625 \quad A = \sqrt{16.17625} \approx 4.0220$
P <sub>15</sub> ~P <sub>18</sub>	正 方 形	$B^2 = 6.5148 \quad B = \sqrt{6.5148} \approx 2.5524$
中央 D <sub>11</sub>	正方形+正円形	$(2R_{11})^2 + \pi R_{11}^2 = 0.47375 \quad R_{11} = \sqrt{\frac{0.47375}{\pi+4}} \approx 0.2576$
東壁 D <sub>22</sub>		$a_{22}^2 + a_{22}^2 = R_{22}^2 \quad \pi R_{22}^2 - (2a_{22})^2 \frac{1}{4} = 0.1575 \quad R_{22} = \sqrt{\frac{0.1575 \times 4}{\pi-2}} \approx 0.7434 \quad a_{22} = 0.5257$
北カマド K <sub>22</sub>	長 方 形	最大床幅 0.80 復原袖外間幅 壁行 1.20



第 155 図 B 地区 2 号住居跡南北主軸模式図 (1/100)

表 22 B 地区 2 号住居 (南北軸) 計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	主軸柱間	主軸間柱間	対角柱間
南北	P <sub>41</sub>	P <sub>11</sub> -P <sub>14</sub>	P <sub>11</sub> -P <sub>12</sub>	東西 O-P <sub>21</sub>	南北 O-P <sub>31</sub>	P <sub>42</sub> -O
N-40°-E		2.00	1.76	1.06	0.50	1.96
		P <sub>12</sub> -(P <sub>13</sub> )	P <sub>14</sub> -(P <sub>13</sub> )		南北 O-P <sub>32</sub>	P <sub>43</sub> -O
		1.64	1.78		0.50	3.04
	平均	1.82	1.77		平均	2.50
	平均	1.80				

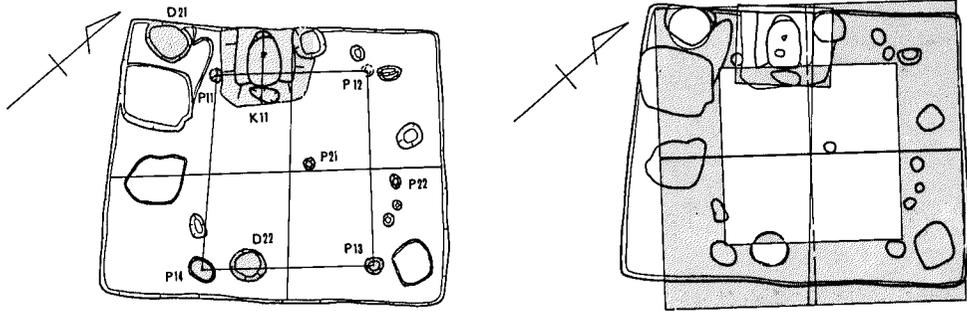
表 23 B 地区 2 号住居 (南北軸) 面積計測表

計測部	内 訳
床 面	$(1^2 \times 7) + (0.2^2 \times 181) + (0.05^2 \times 547) + (0.05^2 \times 339) \frac{1}{2} = 16.0312$
P <sub>11</sub> ~P <sub>14</sub> 内	$(2.52 \times 1.14) \frac{1}{2} + (2.52 \times 1.40) \frac{1}{2} = 3.2004$
高床部	$(0.2^2 \times 68) + (0.05^2 \times 253) + (0.02^2 \times 174) \frac{1}{2} = 3.57$
中央 D <sub>11</sub>	$(0.05^2 \times 32) + (0.05^2 \times 25) \frac{1}{2} = 0.11125$
西側 D <sub>21</sub>	$(0.2^2 \times 2) + (0.05^2 \times 41) + (0.05^2 \times 37) \frac{1}{2} = 0.22875$

番号	短径×長径	深さ
P <sub>11</sub>	0.20×0.26	0.06
P <sub>12</sub>	0.14×0.16	0.08
P <sub>13</sub>	未検出	
P <sub>14</sub>	0.38×0.34	0.10
平均	0.24×0.25	0.08
P <sub>31</sub>	0.16×0.16	0.04
P <sub>32</sub>	0.28×0.34	0.41
平均	0.22×0.25	0.23
P <sub>42</sub>	0.18×0.20	0.10
P <sub>43</sub>	0.26×0.28	0.14
平均	0.22×0.24	0.12
D <sub>11</sub>	0.34×0.47	0.03
D <sub>21</sub>	0.42×0.70	0.10

表 24 B 地区 2 号住居 (南北軸) 換置図形算出表

算出部	換置形	内 訳
床 面	正方形	$A^2 = 16.03125$ $A = \sqrt{16.03125} \approx 4.0040$
P <sub>11</sub> ~P <sub>14</sub>	正方形	$B^2 = 3.2004$ $B = \sqrt{3.2004} \approx 1.7890$
高床部	正方形	$C^2 = 3.57$ $C = \sqrt{3.57} \approx 1.8894$
中央 D <sub>11</sub>	正円形	$\pi R_{11}^2 = 0.11125$ $R_{11} = \sqrt{\frac{0.11125}{\pi}} \approx 0.1882$
西側 D <sub>21</sub>	正方形+正円形	$(2R_{21})^2 + \pi R_{21}^2 = 0.22875$ $R_{21} = \sqrt{\frac{0.22875}{\pi+4}} \approx 0.1790$



第 156 図 B 地区 3 号住居跡東西主軸模式図 (1/100)

表 25 B 地区 3 号住居 (南北軸) 計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	主軸柱間	番号	短径×長径	深さ
南北		P11-P14	P11-P12	東西O-P21	P11	0.16×0.16	0.05
N-38.5°-E		2.60	2.02	0.24	P12	0.14×0.16	0.07
		P12-P13	P14-P13	東西O-P22	P13	0.24×0.24	0.08
		2.60	2.30	1.38	P14	0.30×0.36	0.03
カマド主軸		平均	2.60	2.16	平均	0.21×0.23	0.06
東西		平均	2.38		P21	0.14×0.16	0.09
N-48°-W					P22	0.16×0.18	0.06
					D21	0.48×0.64	0.09
					D22	0.46×0.46	0.17

カマド	壁内長	壁外長	上面幅	下面幅	外側幅	内側幅
左袖	1.04	0.01	0.14	0.38	} 1.15	} 0.40
右袖	0.95	-0.04	0.19	0.47		
床	0.93+	0.05	カマド位置	西壁。東西0から0.32南(左)寄り		

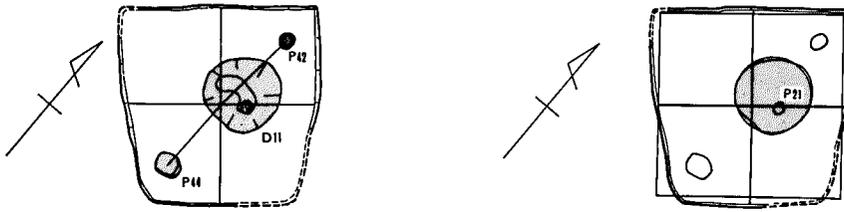
支脚中心までの距離	壁上端	壁下端	床前面	左袖内側	右袖内側	石製支脚	床面下	床面上	前面幅	奥行
	0.33	0.28	0.64+	0.20	0.20		0	0.05	0.04	0.06

表 26 B 地区 3 号住居 (南北軸) 面積計測表

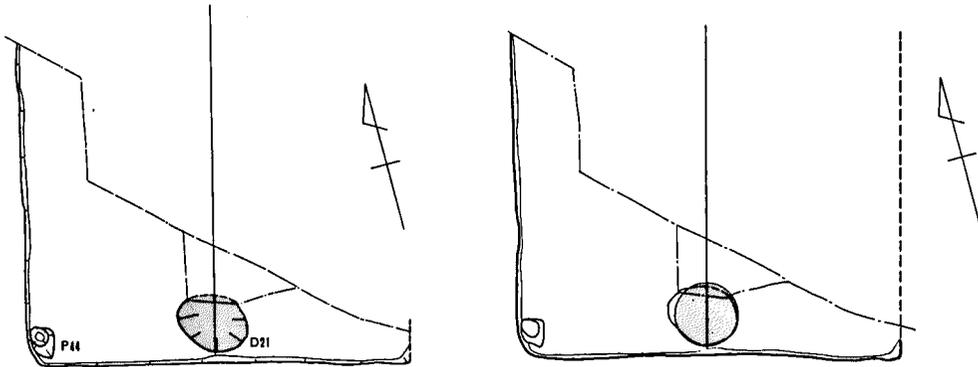
計測部	内 訳
床 面	$(1^2 \times 5) + (0.2^2 \times 131) + (0.05^2 \times 670) + (0.05^2 \times 1593) = 15.8975$
P11~P14内	$(3.30 \times 1.60) \frac{1}{2} + (3.30 \times 1.80) \frac{1}{2} = 5.61$
西壁 D21	$(0.05^2 \times 62) + (0.05^2 \times 35) \frac{1}{2} = 0.19875$
東壁 D22	$(0.05^2 \times 53) + (0.05^2 \times 27) \frac{1}{2} = 0.16625$
カマド K11	$(0.1^2 \times 90) + (0.01^2 \times 1895) + (0.01^2 \times 286) \frac{1}{2} = 1.1038$ (住居床内) $(0.01^2 \times 490) + (0.01^2 \times 179) \frac{1}{2} = 0.05795$ (住居床外)

表 27 B 地区 3 号住居 (南北軸) 換置図形算出表

算出部	換置図形	内 訳	
床 面	正方形	$A^2 = 15.8975$	$A = \sqrt{15.8975} \approx 3.9872$
P11~P14	正方形	$B^2 = 5.61$	$B = \sqrt{5.61} \approx 2.3685$
西壁 D21	正円形	$\pi R_{21}^2 = 0.19875$	$R_{21} = \sqrt{\frac{0.19875}{\pi}} \approx 0.2516$
東壁 D22	正円形	$\pi R_{22}^2 = 0.16625$	$R_{22} = \sqrt{\frac{0.16625}{\pi}} \approx 0.2301$
カマド K11	長方形	1.26 (最大袖外側間)	1.04 (奥行)



第 157 図 C地区 1号住居跡東西主軸模式図 (1/100)



第 158 図 C地区 2号住居跡東西主軸模式図 (1/100)

③家根の平面プランは、主柱穴の配置（家屋構造）に規制される要素が強い。

④また、屋内施設である壁土壇・中央土壇・カマドの位置も、主柱穴の配置に規制される要素がある。

⑤しかし、壁土壇・中央土壇・カマドの位置については、第 1 節の遺構の特徴の指摘で既にふれたように、祭祀行為に関する規制も考える必要がある。

これらのことから、どのような床面プランと主柱穴の配置、土壇等の位置と形状・深さが各住居跡に認められるかを考えるとき、まずその位置関係と面積を知る必要がある。このため、敢えて、現状の実測図に従って、計測・計算を詳細に行った。なお、筆者は既に弥生時代前半の円形住居の平面形と主柱穴・補柱穴の位置に対する若干の意見を、福岡県竹戸遺跡(註1)、三雲遺跡(註2)で紹介することがあったが、建築学専攻で古代家屋の研究をされている山本輝夫氏から、柱穴の位置の計測は特に検出住居において、現地で計測すべきことなどの重要な御教示を受け、実際にD地区の調査では現地での指導を得た。以後の調査では、柱穴内に敷石がいずれも完存する竪穴住居跡では一部この方法で計測したが、柱根・柱痕が遺存しないものが多いため、大半を実測図(1/10・1/20)上で行ったものである。

表28 C地区1号住居(東西軸)計測表

主軸方向	欠番	中軸柱間	対角柱間	番号	短径×長径	深さ
東西 N-50.5°-E	P <sub>41</sub> ・P <sub>43</sub>	南北O-P <sub>21</sub> 0.34	P <sub>42</sub> -O 1.26	P <sub>42</sub>	0.19×0.24	0.15
			P <sub>44</sub> -O 1.04	P <sub>44</sub>	0.30×0.36	0.07
				平均	0.25×0.30	0.11
				P <sub>21</sub>	0.13×0.16	0.26
				D <sub>11</sub>	0.99×1.00	0.19

表29 C地区1号住居(東西軸)面積計測表

計測部	内 訳
床面(復原)	$(0.5^2 \times 16) + (0.1^2 \times 163) + (0.01^2 \times 4295) + (0.01^2 \times 2658) \times \frac{1}{2} = 6.1924$
床面(現存)	$6.1924 - \{(0.19 \times 0.32) \times \frac{1}{2} + (0.01^2 \times 48)\} + (0.27565) \times \frac{1}{2} = 5.8768$
中央 D <sub>11</sub>	$(0.5^2 \times 1) + (0.1^2 \times 36) + (0.01^2 \times 1272) + (0.01^2 \times 1092) \times \frac{1}{2} = 0.7918$

※1 北西部コーナー欠失部      ※2 南東部コーナー欠失部

表30 C地区1号住居(東西軸)換置図形算出表

算出部	換置図形	内 訳
床面(復原)	正方形 A	$A^2 = 6.1924 \quad A = \sqrt{6.1924} \approx 2.4885$
中央 D <sub>11</sub>	正円形 D <sub>11</sub>	$\pi R_{11}^2 = 0.7918 \quad R_{11} = \sqrt{\frac{0.7918}{\pi}} \approx 0.5022$

表31 2地区2号住居(東西軸)計測表

主軸方向	欠番	対角柱間	番号	短径×長径	深さ
東西 N-76°W	P <sub>41</sub> ~P <sub>43</sub> D <sub>11</sub>	P <sub>44</sub> -O 最少2.90	P <sub>44</sub> D <sub>21</sub>	0.22×0.27 0.78×0.96	0.09 0.04

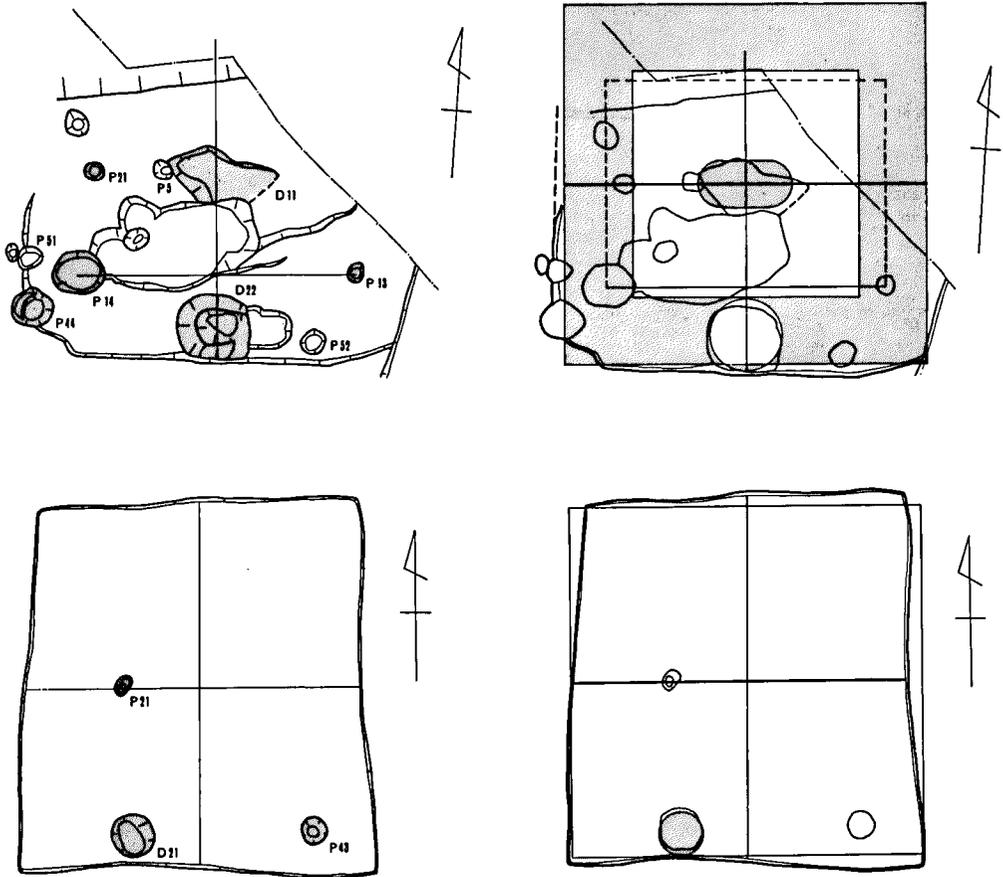
表32 C地区2号住居(東西軸)面積計測表

計測部	内 訳
床面(現状)	$(0.2^2 \times 121) + (0.05^2 \times 504) + (0.05^2 \times 978) + (0.05^2 \times 160) \times \frac{1}{2} = 8.745$
床面(最小復原)	$8.745 + (1^2 \times 7) + (0.2^2 \times 48) + (0.05^2 \times 480) + (0.05^2 \times 1956) \times \frac{1}{2} = 21.31$
南壁D <sub>21</sub> (現状)	$(0.2^2 \times 7) + (0.05^2 \times 58) + (0.05^2 \times 29) = 0.4975$
南壁D <sub>21</sub> (復原)	$0.4975 + (0.05^2 \times 14) + (0.05^2 \times 8) \times \frac{1}{2} = 0.5525$

※1, 2 0.05m方眼を切る面積を0.05mの方眼コマ数に換算したもの

表33 C地区2号住居(東西軸)換置図形算出表

算出部	換置図形	内 訳
南壁D <sub>21</sub> (復原)	正円形R <sub>21</sub>	$\pi R_{21}^2 = 0.5525 \quad R_{21} = \sqrt{\frac{0.5525}{\pi}} \approx 0.4195$



第 159 図 C地区 3号・5号住居跡東西主軸模式図 (1/100)

ところで、つぎに、その位置関係と面積を可視的に把握するためには、主柱間の計測値の平均値を求め、計算された面積と等しい正方形・円形あるいは長円形に換置した図形を作成し、主柱間の平均値で得た住居の中心Oに重ねて換置図形を示し、検出床面プランや土壌等の換置図形との差位の比較を行う方法をとったものである。このことは、再度述べるまでもなく、単絡的にこの換置図形に従って各住居が造作されたということを指摘するものではない。

しかし、この方法で得た換置図形の面積を、すなわちそれだけの床面積の住居の規模を、住居建築に際して、当時の人々が強く意図したことは確かである。また、このための主柱穴が配されたものであり、実際に屋根を葺きおろすとき、若干外弯気味の壁プランに、あるいはB地区1号(新)、C地区1号・6号に認められるような梯形プランに臨機に変形・拡幅が若干行われたものとするものである。ただ、換置図形にほぼ一致するB地区2号・C地区1号は当初

表34 C地区3号住居(東西軸)計測表

主軸方向	欠番
東西 N-88°-E	P <sub>11</sub> ・P <sub>12</sub>

番号	短径×長径	深さ
P <sub>13</sub>	0.22×0.26	0.10
P <sub>14</sub>	0.58×0.71	0.12
平均	0.40×0.49	0.11
P <sub>51</sub>	0.34×0.30	0.08
P <sub>52</sub>	0.30×0.36	0.05
平均	0.32×0.26	0.07
P <sub>21</sub>	0.24×0.26	0.05
P <sub>44</sub>	0.40×0.44	0.15
D <sub>11</sub>	0.70×1.44	0.10
D <sub>21</sub>	0.86×0.98	0.26

表35 C地区3号住居(東西軸)面積計測表

計測部	内 訳
床面(現状)	$(1^2 \times 6) + (0.2^2 \times 147) + (0.05^2 \times 417) + (0.05^2 \times 1340) \frac{1}{2} = 14.5945$
床面(復原)	$\{(1^2 \times 2) + (0.2^2 \times 80) + (0.05^2 \times 178) + (0.05^2 \times 134) \frac{1}{2}\} 4 = 23.25$
P <sub>11</sub> ~P <sub>14</sub> (＼)	$3.36 \times (1.36 \times 2) = 9.1392$
中央D <sub>11</sub> (＼)	$(0.2^2 \times 8) + (0.05^2 \times 120) + (0.05^2 \times 62) \frac{1}{2} = 0.6975$
南壁 D <sub>21</sub>	$(0.2^2 \times 13) + (0.05^2 \times 50) + (0.05^2 \times 335) \frac{1}{2} = 0.72875$

※0.05m方眼を切る面積を、0.05mの方眼コマ数に換算したもの。

表36 C地区3号住居(東西軸)換置図形算出表

算出部	換置図形	内 訳
床面(復原)	正方形	$A^2 = 23.25 \quad A = \sqrt{23.25} \approx 4.8218$
P <sub>11</sub> ~P <sub>14</sub> (＼)	正方形	$B^2 = 9.1392 \quad B = \sqrt{9.1392} \approx 3.0231$
中央 D <sub>11</sub>	正方形+正円形	$(2R_{11})^2 + \pi R_{11}^2 = 0.6975 \quad R_{11} = \sqrt{\frac{0.6975}{\pi + 4}} \approx 0.3126$
南壁 D <sub>21</sub>	正円形	$\pi R_{21}^2 = 0.72875 \quad R_{21} = \sqrt{\frac{0.72875}{\pi}} \approx 0.4818$

表37 C地区5号住居(東西軸)計測表

主軸方向	欠番
東西 N-89.5°-W	D <sub>11</sub> ・P <sub>41</sub> P <sub>42</sub>

主軸柱間	対角柱間
南北O-P <sub>21</sub>	P <sub>43</sub> -O
1.02	2.46

番号	短径×長径	深さ
P <sub>21</sub>	0.15×0.18	0.14
P <sub>43</sub>	0.36×0.38	0.10
D <sub>21</sub>	0.56×0.58	0.15

表38 C地区5号住居(東西軸)面積計測表

計測部	内 訳
床面	$(1^2 \times 13) + (0.2^2 \times 185) + (0.05^2 \times 362) + (0.05^2 \times 1725) = 21.73625$
南壁 D <sub>21</sub>	$(0.2^2 \times 2) + (0.05^2 \times 56) + (0.05^2 \times 37) \frac{1}{2} = 0.26625$ *

※0.05m方眼を切る部分を、0.05mの方眼コマ数に換算したもの

表39 C地区5号住居(東西軸)換置図形算出表

算出部	換置形	内 訳
床面	正方形	$A^2 = 21.73625 \quad A = \sqrt{21.73625} \approx 4.6622$
南壁 D <sub>21</sub>	正円形	$\pi R_{21}^2 = 0.26625 \quad R_{21} = \sqrt{\frac{0.26625}{\pi}} \approx 0.29$

表40 C地区4号住居(東西軸)計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	主軸柱間	番号	短径×長径	深さ
東西 N-87°-W	P15・P22	P11-P14	P11-P12	南北O-P21	P11	0.24×0.24	0.21
	D22	2.56	3.16		P12	0.21×0.30	0.08
		P12-P13	P14-P13		P13	0.34×0.38	0.11
		3.56	2.48		P14	0.16×0.16	0.07
		平均	3.06	2.82	平均	0.24×0.27	0.12
		平均	2.94		P21	0.23×0.26	0.10
					D11	0.75×0.86	0.14
					D21	0.68×1.30	0.22

表41 C地区4号住居(東西軸)面積計測表

計測部	内 訳
床 面	$(1^2 \times 8) + (0.2^2 \times 179) + (0.05^2 \times 406) + (0.05^2 \times 293) \frac{1}{2} = 16.54125$
P11~P14内	$(4.26 \times 1.90) \frac{1}{2} + (4.26 \times 2.06) \frac{1}{2} = 8.4348$
中央 D11	$(0.2^2 \times 7) + (0.05^2 \times 67) + (0.05^2 \times 49) \frac{1}{2} = 0.50875$
南壁 D21	$(0.2^2 \times 10) + (0.05^2 \times 23) + (0.05^2 \times 66) \frac{1}{2} = 0.79$

表42 C地区4号住居(東西軸)換置図形算出表

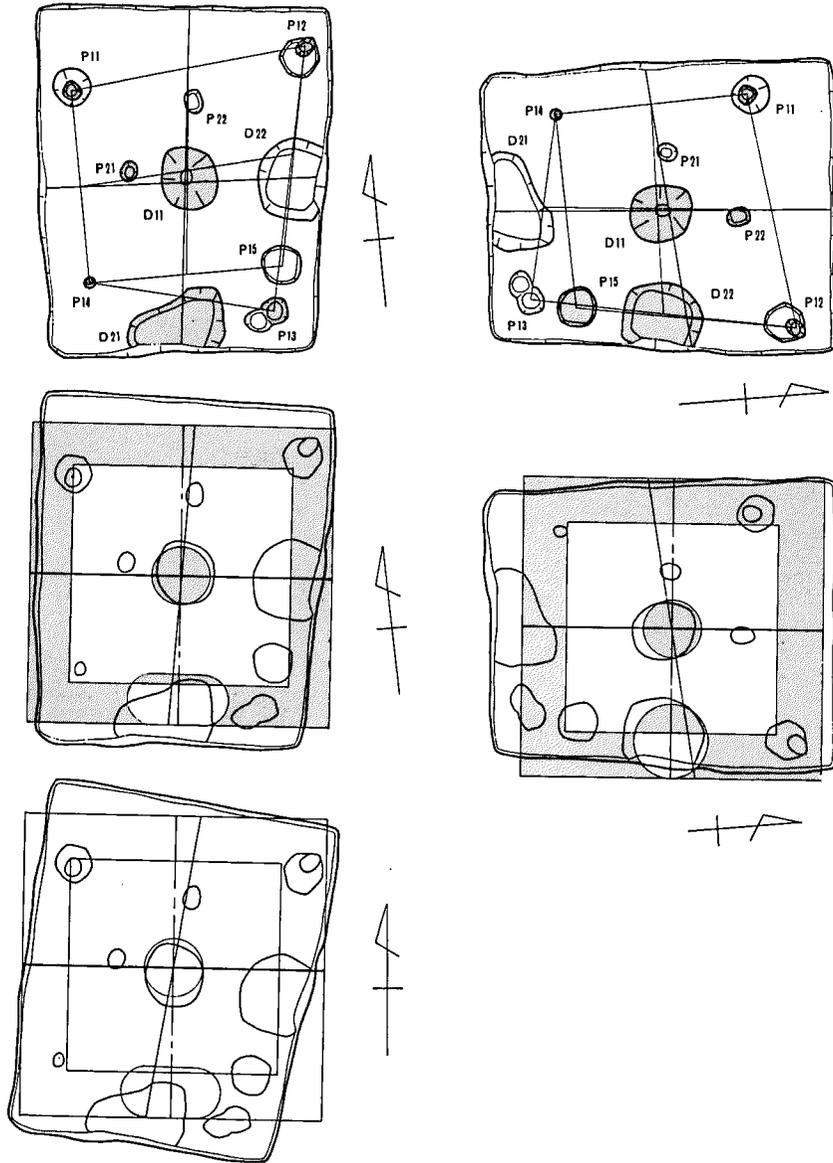
算出部	換置図形	内 訳
床 面	正方形	$A^2 = 16.54125 \quad A = \sqrt{16.54125} \approx 4.0671$
P11~P14内	正方形	$B^2 = 8.4348 \quad B = \sqrt{8.4348} \approx 2.9043$
中央 D11	正円形	$\pi R_{11}^2 = 0.50875 \quad R_{11} = \sqrt{\frac{0.50875}{\pi}} \approx 0.4024$
南壁 D21	正方形+正円形	$(2R_{21})^2 + \pi R_{11}^2 = 0.79 \quad R_{21} = \sqrt{\frac{0.79}{\pi+4}} \approx 0.3326$

表43 C地区4号住居(南北軸)計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	主軸柱間	番号	短径×長径	深さ
南北 N-65°-E	P13・P21	P14-P15	P14-P11	東西O-P22	P14	0.16×0.16	0.07
	D21	2.56	2.56		P11	0.24×0.24	0.21
		P11-P12	P15-P12		P12	0.21×0.30	0.08
		3.16	2.92		P15	0.52×0.52	0.04
		平均	2.86	2.74	平均	0.28×0.31	0.10
		平均	2.8		P22	0.24×0.28	0.03
					D11	0.75×0.86	0.14
					D22	0.92×1.06	0.19

表44 C地区4号住居(南北軸)面積計測表

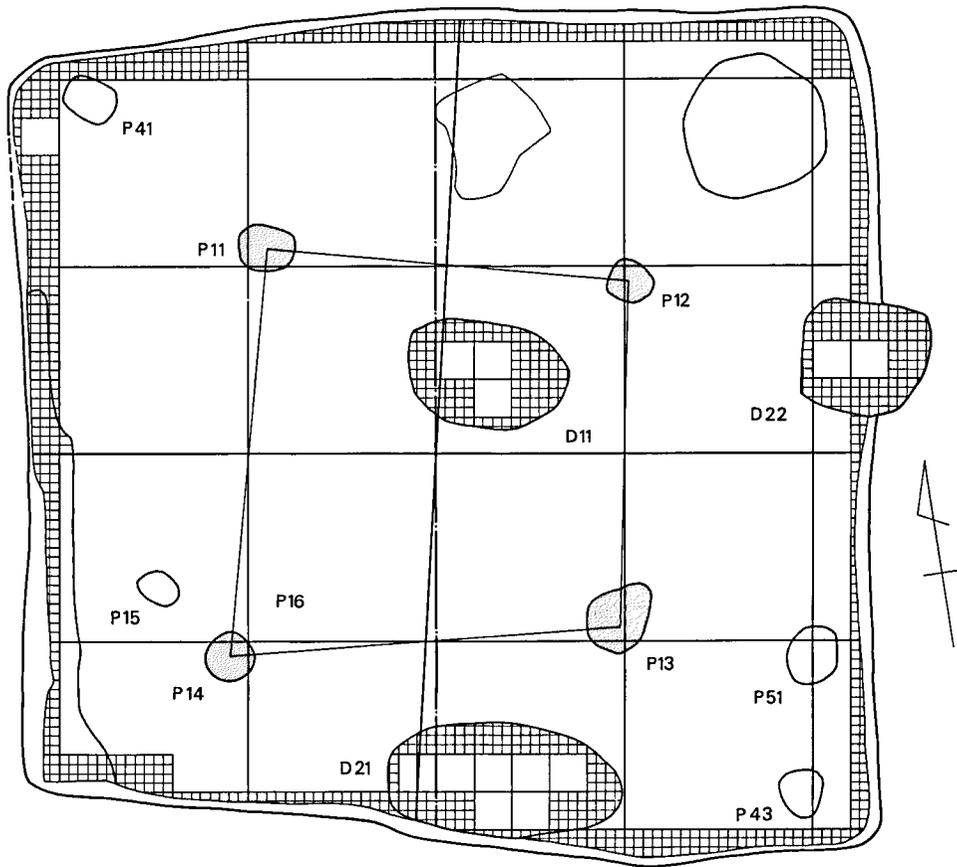
計測部	内 訳
床 面	16.54125
P14-P11-P12-P15内	$(4.26 \times 1.90) \frac{1}{2} + (4.26 \times 1.73) \frac{1}{2} = 7.7319$
中 央 D11	0.50875
東 壁 D22	$(0.2^2 \times 12) + (0.05^2 \times 83) + (0.05^2 \times 64) \frac{1}{2} = 0.7675$



第 160 図 C地区4号住居跡東西・南北主軸模式図 (1/100)

表45 C地区4号住居(南北軸)換置図形算出表

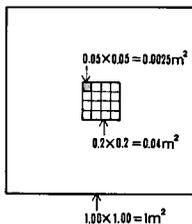
算出部	換置図形	内 訳
床 面	正方形	$A=4.0671$
$P_{14}-P_{11}-P_{12}-P_{15}$ 内	正方形	$B^2=7.7319$ $B=\sqrt{7.7319}\approx 2.7806$
中央D <sub>11</sub>	正円形	0.4024
東壁D <sub>22</sub>	正円形	$\pi R_{21}^2=0.7675$ $R_{21}=\sqrt{\frac{0.7675}{\pi}}\approx 0.4943$



第 161 図 C地区 6号住居跡面積計測図 (1/40)

表47 6号住居跡(東西軸)面積計算表

計測部	内 訳
床 面	$(1^2 \times 13) + (0.2^2 \times 97) + (0.05^2 \times 510) + (0.05^2 \times 259) \frac{1}{2} = 18.47875$
P11~P14内	$(2.92 \times 1.46) \frac{1}{2} + (2.96 \times 1.31) \frac{1}{2} = 4.0704$
中央D11	$(0.2^2 \times 3) + (0.05^2 \times 76) + (0.05^2 \times 46) \frac{1}{2} = 0.3675$
南壁D21	$(0.2^2 \times 7) + (0.05^2 \times 106) + (0.05^2 \times 49) \frac{1}{2} = 0.60625$
P11-P12-P13-P15内	$(2.76 \times 1.30) \frac{1}{2} + (2.76 \times 1.66) \frac{1}{2} = 4.0848$
P11-P12-P13-P16内	$(2.76 \times 1.30) \frac{1}{2} + (2.76 \times 1.38) \frac{1}{2} = 3.6984$



第 162 図  
面積計測方眼図  
(1/100)

表46 C地区6号住居(東西軸)計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	対角柱間	壁柱間	
東西	P22・D22	P11-P14	P11-P12	P41-O	東西O-P51	P11-(P15)
N-81°-W	P42	2.18	1.95	2.66	1.08	1.90
		P12-P13	P14-P13	P43-O		P11-(P16)
		1.84	2.10	2.64		1.86
	平均	2.01	2.03	2.65		(P15)-P13
	平均	2.02				2.48
						(P16)-P13
						2.06

番号	短径×長径	深さ
P11	0.24×0.30	0.05
P12	0.22×0.26	0.23
P13	0.33×0.42	0.34
P14	0.26×0.26	0.22
平均	0.26×0.31	0.21
P41	0.22×0.29	0.05
P43	0.23×0.26	0.12
平均	0.23×0.28	0.09
(P15)	0.18×0.24	0.08
P51	0.28×0.34	0.06
D11	0.56×0.86	0.07
D21	0.61×1.26	0.18

番号	計測部	角度
∠P11	P14-P11-P12	90°
∠P12	P11-P12-P13	94°
∠P13	P12-P13-P14	96°
∠P14	P13-P14-P11	80°
∠P16	P13-P16-P11	90°

表48 C地区6号住居(東西軸)換置図形算出表

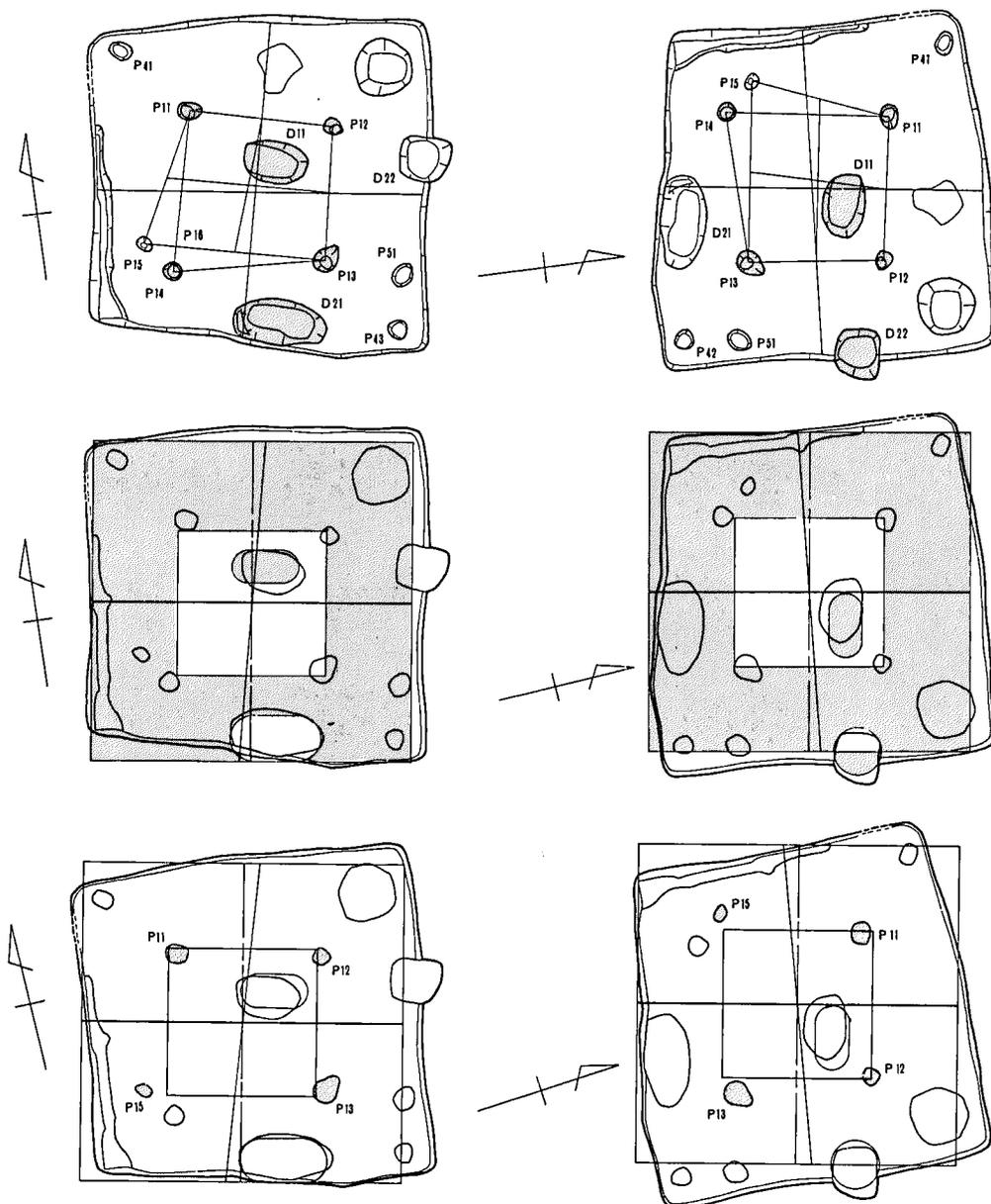
算出部	換置図形	内 訳
床 面	正方形	$A^2=18.47875$ $A=\sqrt{18.47875}\doteq 4.2987$
P11~P14	正方形	$B^2=4.0704$ $B=\sqrt{4.0704}\doteq 2.0175$
中央D11	正方形+正円形	$(2R_{11})^2+\pi R_{11}^2=0.3675$ $R_{11}=\sqrt{\frac{0.3675}{\pi+4}}\doteq 0.2269$
南壁D21	正方形+正円形	$(2R_{21})^2+\pi R_{21}^2=0.60625$ $R_{21}=\sqrt{\frac{0.60625}{\pi+4}}\doteq 0.2914$

表49 C地区6号住居(南北軸)計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	壁柱間	番号	短径×長径	深さ
南北	P21・D21	P14-P13	P14-P11	南北O-P51	P14		
N-13.5°-E	P42	2.10	2.18	2.08	P11	略	略
		P11-P12	P13-P12		P12		
		1.95	1.84		P13		
	平均	2.03	2.01		平均	0.26×0.31	0.21
	平均	2.02			P41	略	略
					P43		
					平均	0.23×0.28	0.09
					P51	0.28×0.34	0.06
					D11	0.56×0.86	0.07
					D22		

表50 C地区6号住居(南北軸)面積計算表

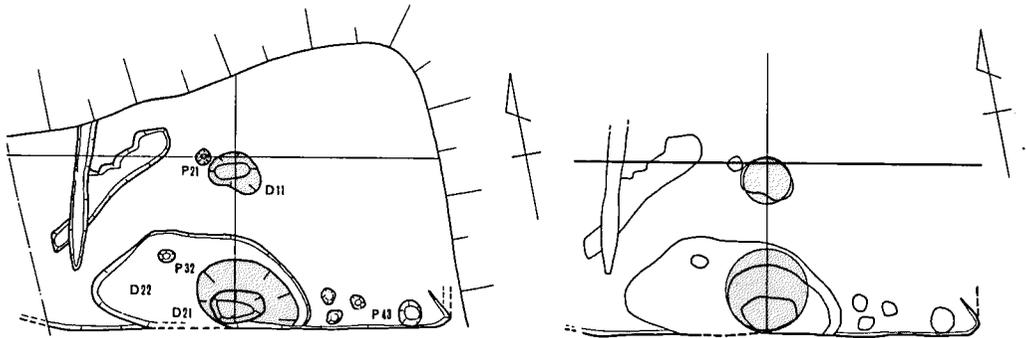
計測部	内 訳
床 面	18.47875
P11~P14内	4.0704
中央D11	0.3675
東壁D22	$(0.2^2 \times 2) + (0.05^2 \times 88) + (0.05^2 \times 44) \frac{1}{2} = 0.355$



第163図 C地区6号住居跡東西・南北主軸模式図(1/100)

表51 C地区6号住居(南北軸)換置図形算出表

算出部	換置図形	内 訳
床 面	正方形	$A \approx 4.2987$
P <sub>11</sub> ~P <sub>14</sub> 内	正方形	$B \approx 2.0175$
中央D <sub>11</sub>	正方形+正円形	$R_{11} \approx 0.2269$
東壁D <sub>22</sub>	正円形	$\pi R_{22}^2 = 0.355$
		$R_{22} = \sqrt{\frac{0.355}{\pi}} \approx 0.3362$



第 164 図 C 地区 8 号住居跡東西主軸模式図 (1/100)

表52 C 地区 8 号住居 (東西軸) 計測表

主軸方向	欠 番	主軸柱間	主軸間柱間	隅柱間	番号	短径×長径	深さ
東 西	P <sub>31</sub> ・P <sub>41</sub>	南北O-P <sub>21</sub>	東西O-P <sub>32</sub>	P <sub>43</sub> -O	P <sub>21</sub>	0.19×0.21	0.06
N-79.5°-W	P <sub>42</sub>	0.44	1.32	3.14	P <sub>32</sub>	0.18×0.21	0.08
					P <sub>43</sub>	0.33×0.33	0.07
					P <sub>81</sub>	0.20×0.22	0.09
					P <sub>82</sub>	0.18×0.20	0.05
					P <sub>83</sub>	0.18×0.24	0.09
					D <sub>11</sub>	0.48×0.72	0.07
					D <sub>21</sub>	0.91×1.43	0.22

表53 C 地区 8 号住居 (東西軸) 面積計算表

計測部	内 訳
床面(復原)	南北O-東壁下端=2.78 D <sub>11</sub> -南壁下端=2.02 (2.78×2.02)×4=22.4642
中央D <sub>11</sub>	(0.2 <sup>2</sup> ×2)+(0.05 <sup>2</sup> ×64)+(0.05 <sup>2</sup> ×43)½=0.29375
南壁D <sub>21</sub>	(0.2 <sup>2</sup> ×13)+(0.05 <sup>2</sup> ×124)+(0.05 <sup>2</sup> ×76)½=0.925

表54 C 地区 8 号住居 (東西軸)換置図形算出表

算出部	換置図形	内 訳
床面(復原)	正方形	A <sup>2</sup> =22.4642 A=√22.4642≒4.7396
中央D <sub>11</sub>	正円形	πR <sub>11</sub> <sup>2</sup> =0.29375 R <sub>11</sub> =√ $\frac{0.29375}{\pi}$ ≒0.3059
南壁D <sub>21</sub>	正円形	πR <sub>21</sub> <sup>2</sup> =0.925 R <sub>21</sub> =√ $\frac{0.925}{\pi}$ ≒0.5428

から、換置図形に似た竪穴を造作すること、またそのための支柱穴等の配置を行ったことは充分に考えられる。また、庄内式～布留式併行期のA・E地区住居は、正方換置図形を重複させると床面プラン形が著しく長方形を呈することなどから、支柱穴2個に規制された当初から長方形に造作された壁面プランと言えよう。なお、当時の建築部材は直ではないことは、先学以来の指摘があるが、第151図で示した方法で計測し、計算した面積から求められた床面積・壁土塙・中央土塙・支柱穴間形の換置図形と実際の遺構プラン（1/20実測図）とが一致するC地区4号・6号例などは、配置に計画性のあったことが明らかで、これには住居を居住空間とするだけでなく、祭祀空間としての意図のもとに造作したことを考慮することが必要であろう。住居内の土塙・カマド等の位置関係等については、A・D地区などの住居跡との比較を待って検討したい。

### 3. C地区住居跡出土のガラス小玉

C地区出土の3号住居跡は著しい削平をうけ、また塚堂古墳前方部南縁外濠に切られて、その遺存状態はよくなかったが、多くのガラス小玉が出土し、第165図に示すような、7個が隔着した例も認められた。この例も含めて、以下にその観察結果を示す。

**出土数** 各住居跡の出土数は、3号から2個融着1例・7個融着1例の他に49個、4号から24個、6号から滑石製白玉2個と共に1個、8号から10個が出土し、表採が2個である。

**出土状態** 各住居跡の出土状態は、3号では南壁土塙D21内で検出した粘土塊中・中央土塙D11内・D11北側からのものが大半である。4号では東壁土塙D22内・出土状態に示した土器の下・床面から多くが出土した。8号では、南壁土塙D21内・D21を囲む浅い長円形土塙内から大半が出土し、両土塙には粘土小ブロックが多く認められた。3・8号は共通して粘土が認められ、4号も含めて6号のような滑石製白玉を出土していないことや、4号で床面や出土状態を図示した土器の下から検出したことなどにより、3・4・8号出土の小玉は共に各住居跡に伴うものと考えられる。また、6号の滑石製白玉は、出土土器から、時期的には問題はないと考えられる。

なお、調査時に検出したものから順に各住居跡別に出土番号を付し、検出し得なかったものについては、埋土をパンケース200箱弱に収納し、後日水洗をしたものである。

小玉の出土数と出土状態は以上のとおりであるが、柳田康雄氏は福岡県春日市門田遺跡・辻田地区出土ガラス玉類についての詳細な観察を行なう中で、13号土塙墓出土の2個が胴部で直交してゆ着した例に注目し、福岡市宝満尾15号土塙墓出土で2個が上下に重なっている例もあることを指適し、その他の所見も含めて、小玉製作時の切り離し処理等について詳細に言及されている。（註3）このことに留意しつつ、出土玉類の観察を若干次の方法で行なってみたが、

表55 玉類表記凡例一覧表

色調	182 明るい青緑 (10.0 BG 6.0/6.0)	183 にぶ青緑 (10.0 BG 5.5/5.5)	215 青 (1.0 PB 3.5/8.0)	214 こい青 (3.5 PB 2.5/5.0)	
	98 うす黄 (2.5 Y 8.0/4.0)	141 灰味黄緑 (7.5 GY 6.5/2.0)			
側面形	薄 (薄板状)	扁 (扁平状)	柱 (柱状)	整(整形)	梯(梯形)
仕上り	稜 (裁断稜)	胴 (胴部)	丸 (丸い)	番号1~	個数①~
ガラス玉 標本色調	182 (3号住居跡出土 番号18)		183 (3号住居跡出土 番号9)		
	215 ( " " 16)		214 ( " " 12)		

材質の科学的分析を今回の報告で行っていない。

観察は色調・側面形状・仕上りについて下記のとおりに行ない、胴径・孔径・長さについて計測した。

**色調観察** 自然光でも緑系と青系の二者の区別は簡単であるが、特に青系のもは胴径・孔径・長さの差位によって濃淡に著しい差位が生じる。そこで昼光色透写光を使用し、透写台上にすべてを集めて、緑系は 182明るい青緑色 (10.0 B G 6.0/6.0) と 183にぶ青緑色 (10.0 B G 5.5/5.5) の二者に、青系も 215青 (1.0 P B 3.5/8.0) と 214こい青 (3.5 P B /5.0) の二者にそれぞれ細分し、その標本として3号住居跡の出土番号18・9・16・12の4個を選んだ。16は胴径が大きく、自然光での胴部は12と同様に 214こい青に観察されるが、透写光では明らかに 215青にどの部位でも観察される。これに対し、12は透写光でも 214こい青にどの部位でも観察されたからである。これら4個と観察しようとする小玉の5個を集めて透写光で観察したものである。

**側面形状** 薄板状 (長さが胴径の $\frac{1}{2}$ 以下、あるいは $\frac{1}{2}$ 前後の差位が長さの $\frac{1}{10}$ 内のもの) と柱状 (長さが胴径より大きいもの) と柱状に近いものおよびその他の扁平状のものに分けた。また、それぞれの長さに、部位によって差があまりないものを整形とし、著しいものを梯形として観察した。

**仕上り** 製作時の切り離し後の稜の有無と胴部が丸く仕上げられているかどうかを観察した。まず、表65で各住居跡別の小玉の特徴の大略をみる。

色調を無視した計測値の平均は、各住居共に胴径・孔径・長さそれぞれほぼ等しく、孔径はいずれも1.00mm未満と看取される。ただ、3住の長さの平均が1.96mmと他より0.6.mm程低いが、これは仕上げの状態の観察で胴丸のものが他の住居よりも高く90.1%を示すことと関与するものと考えられる。孔径は胴径の25%前後・長さの35%前後で、長さは胴径の70%前後と3住以外では看取される。また、出土率Aでは、3住が58.8%と高く、2個や7個の融着例を含めると60%以上が出土し、3住が他の住居を圧倒しているように看取される。

色調についてみると、出土率Bでは 215青色が前述の融着例を含めると60%以上と高く、次

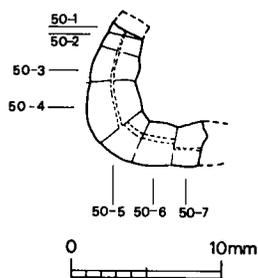
に 182 明るい青緑色が約 20% で、133 にぶ青緑色と 214 こい青が共に 10% 前後と低く、この順序は各住居別に出土率でも同様に看取される。

側面形についてみると、扁平状のものが 3 住で 55.3%、4 住で柱状に近いものを含めて 62.5%、8 住で 66.6% といずれも 60% 前後で看取される。しかし、薄板状のものは、3 住で 44.6%、4 住で 33.3%、8 住で 11.1% と著しい差位が認められるが、これは表 62・63・64 に示すとおり、稜が有るものや、稜のみが丸くて胴部が丸く仕上げてないものが 1 例もなく、すべて胴が丸く仕上げた状態のものであることに帰因するものと考えられる。

以上のことから、孔径は 1.00mm 未満と微小に、胴径は 3.40mm 前後と小さく、扁平に造作され、色調では 215 青が大半を占め、丁寧に丸く仕上げられた小玉が、C 地区の弥生時代後期後半を前後する頃の住居跡出土の特徴と看取される。そして、出土小玉のなかには、薄板状のものや柱状のもの、稜の有るものや稜のみが丸いもの、183 にぶ青緑色や 214 こい青色のものが小数ながら混在すると看取することもできる。

しかし、ここで 3 住出土の融着例についての観察結果についてふれ、上記のように必ずしも看取されないことを以下にのべる。

3 住出土の No.28・29 の融着の仕方は、孔面で重なり、孔外をのぞくことができ、細いメジャーピンを差し込むと先端が若干つき出すが、その中途および融着部付近で先端では明確な孔径の段差は感じない。側面形状は、胴丸・稜丸に丁寧に研磨されたような状態で、融着による変形は観察されない。また、No.28 の融着部でない孔面の体部表面で、孔を中心に螺線状を呈するが、これは融着による変形ではなく、明らかに螺線状の部分には稜が認められ、体部器表とは段差が観察される。同様に No.50-1~7 の融着の仕方は、第 165 図に示すように、各小玉はくびれることなく、若干の凹凸が前後に認められるだけで、稜が有るか稜が丸い状態で、特に No.50-2・6 は胴丸ではなく、管状のもの切り離したままの扁平梯形状に観察され、後者に融着による変形は認められない。これらのことから融着 2 例の孔径が、No.28・29 では 0.50mm、No.50



第 165 図  
C 地区 3 号住居跡出土  
ガラス小玉実測図 (2 倍)

- 2・6・7 の平均では 0.35mm (No.50-6 の孔径は検出時に折損したので計測できた。他の小玉にも孔は認められるが、計測できなかった。胴部外面での観察では、計測できたものと同大に近い) と極小であることを、融着によって著しく小さい孔径に変化したものであるとするよりも、当初から 0.35mm あるいは 0.50mm に近いものであったと考える方が妥当であろう。

また、融着例の色調は、No.28・29 が共に 215 青色で、No.50 では 214 こい青色が 4 個で 215 青色が 3 個である。後者は 214 と 215 の色調が同一色調 2 個が連続し、この 2 単位が交互に

融着しているようで、No.28・29の同一色調による融着例と共に、紐をこの配列で小玉に通していた状態と看取されないこともないが、紐の径が0.35以下の微細なものが、実用の小玉製装飾具に使用されるかどうかを、多くの資料には接していないが、前述した柳田康雄氏による弥生後期中頃とされる1号石蓋土壙墓出土のガラス小玉 206個の計測値と比較する。1号石蓋土壙墓例では、平均値は胴径3.47mm、孔径1.15mm、長さ1.15mmで、孔径が1.00mm以下のものは31個(0.7mm 2個・0.8mm 10個・0.9mm 16個・0.95mm 3個)を数えることができ、胴径で最大値を示すものが、孔径でも最大値を示し、胴径5.35mm・孔径2.05mm・長さ2.60mmを測るものがある。

上述の1号石蓋土壙墓出土の小玉は、原位置に近い状態で出土していることから、首飾と考えられている。0.7mmの小玉が2個認められることから、これも含めて紐を通して連結状態で使用されたことは明らかである。このことから短絡的に帰結することには危惧もあろうが、一応0.50mm以下の孔径の小玉は実用に供されたと考えるよりも製作不良品と考える方が妥当であろう。

つぎには、このことを考慮して、再度の観察所見についてふれるが、ガラス小玉の製作法の一つに管状のものを小さく切り離してするものがあり、稜を取去し、胴丸に仕上げるために、熱処理と研磨を行なうという先学の指適に従い、更に最良のガラス小玉製品を得る為に、次のように切り離し後の工程を考えた。大略であるが、管の中で孔径が1.51mm以上のものは扁平状に、同1.00～1.50mmまでのものは薄板状に、同1.00mm以下のものは柱状に切り離す。その後①熱処理 aを行なって、切り離し時の稜を取り、押えて梯形を整形にし、若干の丸味を呈させ研磨 aでの労力を軽減し、②研磨 aで胴丸にほぼ仕上げ、③熱処理 bで扁平球状に仕上げ調整し、④研磨 bで最良に仕上げる。もちろん紐を通せるだけの孔径を有しているものであれば、①前に使用することができる。

色調が 214の小玉は、表65に示すように出土比率が 183の次に低いという特徴の他に、次のことが考えられる。孔径・胴径の平均は、4色中で最小であるが、長さは他と大差はない。3住ではいずれも胴丸まで仕上げられているが、孔径は0.48mmで、孔に稜が有り使用されたかは不明である。4住では5例中の3例が稜が丸いだけ(①工程)で、胴丸ではなく、特にNo.5は長さが最大の3.60mmで、これは熱処理で扁平状にする以前の、柱状に近い形のままであることの好例である。

色調 183の小玉は、表65に示すように、出土比率が4色中で最も低いという特徴の他に、つぎのことが考えられる。4色中で、胴径・孔径は3・4住で最大を示すが、8住では逆に胴径では最小・孔径では色調 214で3住出土の平均値の次に小さいという大きなバラツキが看取される。そこで、各住居別にこれを見ることにする。3住ではNo.52は孔径は0.55mmと極小で、稜丸で胴丸には仕上げられていない。長さは2.90mmと最大のNo.6の3.00mmの次に大きく、胴丸にまで熱処理で押さえて調成はされていない(工程①)小玉であるとも考えられる。No.9は扁平・

表56 3号住居跡出土ガラス小玉一覧表①

番号	胴径mm	孔径mm	長さmm	色調	側面形	仕上り	出土場所	床面からcm
1	3.50	0.85	2.15	182 明るい青緑	扁梯	胴丸	埋土	2
2	3.00	0.65	2.30	182 "	"	"	"	
3	3.45	0.80	2.35	215 青	"	"	"	
4	3.35	1.10	1.75	215 "	薄正	"	"	
5	3.80	1.30	2.45	215 "	扁正	"	"	
6	4.35	1.05	3.00	215 "	扁梯	"	"	
7	3.85	1.15	2.00	182 明るい青緑	薄梯	"	"	
8	3.00	0.90	1.40	215 青	薄正	"	"	
9	3.50	1.25	2.65	183 にぶ青緑	扁正	"	"	
10	3.25	0.75	1.65	215 青	薄梯	"	"	
11	3.50	0.80	2.85	215 "	扁正	"	"	
12	2.85	0.45	2.00	214 こい青	薄正	"	"	
13	2.75	0.95	2.35	182 明るい青緑	扁正	稜丸	"	
14	2.95	0.65	2.20	215 青	"	"	"	
15	3.40	0.95	2.40	215 "	扁梯	胴丸	"	
16	3.95	1.20	2.10	215 "	薄正	"	D11北側	
17	3.60	1.20	1.65	215 "	"	"	P13	
18	3.10	0.60	1.35	182 明るい青緑	扁正	"	埋土	2
19	2.90	0.80	1.40	215 青	薄正	"	"	"
20	3.20	0.45	2.40	214 こい青	扁梯	"	"	"
21	2.65	1.00	2.45	215 青	扁正	"	D北側	中層
22	2.90	0.95	2.00	215 "	扁梯	"	"	"
23	3.65	1.40	1.60	215 "	薄正	"	"	下層
24				182 "			"	中層
25	2.55	0.75	1.30	215 "	薄正	胴丸	埋土	
26				215 "			D11北側	下層
27	3.10	0.95	1.45	215 "	薄正	胴丸	"	"
28	表58			215 "			"	"
29				215 "			"	"
30		4.60	1.65	2.10	215 "	薄梯	胴丸	D11~D21間
31	3.20	1.20	2.85	215 "	扁正	"	D11	
32	3.55	0.80	1.55	215 "	薄梯	"	"	
33	3.90	1.20	1.65	215 "	薄正	"	"	
34	3.35	0.95	2.50	182 明るい青緑	扁正	"	D21	
35	3.30	1.05	1.95	182 "	"	稜有	"	
36	3.00	1.20	1.40	215 青	薄正	胴丸	"	
37	3.45	1.00	2.55	182 明るい青緑	扁正	"	D11	
38	2.85	0.90	1.70	215 青	扁梯	"	"	
39	2.55	0.55	1.60	214 こい青	"	"	埋土	
40	2.40	0.80	1.80	215 青	扁正	稜丸	"	

番号	胴径mm	孔径mm	長さmm	色 調	側 面 形	仕 上 り	出土場所	床面からcm
41	3.50	0.75	2.35	215 青	扁梯	胴丸	埋土	
42	2.80	0.90	1.00	215 "	薄正	"	"	
43	2.65	1.10	1.00	215 "	"	"	"	
44	3.00	0.95	1.35	215 "	薄梯	"	"	
45	4.30	1.55	1.80	183 にぶ青緑	薄正	"		0
46	2.35	1.25	1.80	182 明るい青緑	扁正	"		0
47	3.20	0.70	2.25	215 青	"	胴丸	D11	
48	2.85	0.95	1.50	215 "	薄梯	"	"	
49	4.00	1.30	2.55	182 明るい青緑	扁正	"	"	
50(表57)								
51	3.20	1.45	1.25	215 青	薄整	胴丸		0
52	3.50	0.55	2.90	183 にぶ青緑	扁整	稜丸		0
平均④	3.28	0.96	1.96	215 青 ③	扁⑤ 梯③	胴丸④	番号28・29・50を除く	

表57 3号住居跡出土ガラス小玉一覧表②

番号	胴径mm	孔径mm	長さmm	色 調	側 面 形	仕 上 り	出土場所	現 状
50-1				215 青		稜有	D21	一部残
50-2	2.80	0.30	1.70	215 "	扁 整	稜有	"	
50-3	3.00	孔有	2.70	214 こい青	扁 梯	稜有 胴丸	"	
50-4	3.50	"	4.30	214 "	柱 梯	稜有 胴丸	"	
50-5	3.35	"	2.70	215 青	扁 梯	稜有 胴丸	"	
50-6	3.15	0.45	1.90	215 "	扁 梯	稜有	"	
50-7	3.35	0.30	2.90 $\alpha$	214 こい青	扁 ?	稜有 胴丸	"	
平均	3.19	0.35	2.7 $\alpha$	215 青 ④	扁梯③?	稜有⑦ 胴丸④	D21 ⑦	融 着

表58 3号住居跡出土ガラス小玉一覧表③

番号	胴径mm	孔径mm	長さmm	色 調	側 面 形	仕 上 り	出土場所	現 状
28	3.55	0.50	2.05	215 青	扁 梯	胴丸	D11 北側	螺旋状
29	3.15	0.50	2.20	215 "	扁 整	胴丸	"	未使用
平均	3.35	0.50	2.13	215 青 ②	扁 平②	胴丸②	D北側②	融着

表59 4号住居跡出土ガラス小玉一覧表

番号	胴径mm	孔径mm	長さmm	色 調	側 面 形	仕 上 り	出土場所	床面高cm
1	4.45	2.40	2.05	183 にぶ青緑	薄整	胴丸	埋土	10
2	3.85	1.20	2.80	214 こい青	扁整	"	"	
3	5.10	1.50	2.95	215 青	"	"	"	
4	3.45	1.20	1.55	215 "	薄整	"	"	
5	3.90	0.55	3.60	214 こい青	柱近整	稜丸	"	
6	3.40	0.90	1.45	214 "	薄整	胴丸	"	
7	4.70	0.70	2.35	215 青	"	"	"	
8	4.05	0.80	2.40	215 "	扁整	"	"	
9	3.75	1.10	2.75	215 "	扁梯	"	"	
10	2.90	0.85	2.25	182 明るい青緑	"	稜丸	"	
11	2.70	0.75	2.10	214 こい青	"	"	"	
12	3.20	0.95	3.10	182 明るい青緑	柱近梯	稜有	"	
13	2.55	0.80	1.20	215 青	薄 梯	胴丸	土器の下	中層
14	3.75	0.60	2.70	215 "	扁 整	"	"	"
15	2.70	0.65	1.45	182 明るい青緑	薄 梯	"	"	"
16	2.85	0.75	1.45	215 青	薄 整	"	"	"
17	2.85	0.85	1.50	215 "	"	"	"	"
18	3.15	1.30	3.30	183 にぶい青緑	柱近整	"	現場	"
19	2.85	0.55	3.00	215 青	"	稜丸	"	"
20	4.10	0.90	2.70	215 "	扁 梯	胴丸	土器下	"
21	2.55	0.65	1.45	182 明るい青緑	"	"	"	0
22	3.00	0.60	2.60	214 こい青	扁 整	稜丸	"	0
23	4.10	1.60	3.60	182 明るい青緑	柱 梯	"	"	
24	5.60	1.55	3.40	183 にぶい青緑	扁 整	孔稜有 胴丸	東壁D	
平均⑭	3.56	0.99	2.40	215 青⑮	扁⑯ 梯⑰	胴丸⑱		

表60 8号住居跡出土ガラス小玉一覧表

番号	胴径mm	孔径mm	長さmm	色 調	側 面 形	仕 上 げ	出土場所	床面高cm
1	2.90	1.00	3.20	182 明るい青緑	柱梯	稜丸	D21	
2	3.70	0.75	2.15	182 "	扁梯	胴丸	D21周辺	
3				215		"	"	
4	3.20	0.60	1.90	215 青	扁整	"	D21	
5	2.70	0.65	3.55	183 にぶ青緑	柱梯	稜丸	"	
6	3.10	0.70	1.85	182 明るい青緑	薄梯	胴丸	"	
7	2.70	0.35	2.20	215 青	扁整	稜丸	"	床面近
8	3.20	0.95	2.90	215 "	扁梯	"	"	"
9	4.80	1.45	2.60	215 "	"	"	D21周辺	
10	3.05	0.65	2.50	215 "	扁整	"	"	
平均⑲	3.26	0.79	2.54	215 青	扁⑳ 梯㉑	稜丸㉒	※番号3を除く	

表61 6号住居跡出土玉類一覧表

番号	胴径mm	孔径mm	長さmm	色調	側面形	仕上げ	出土場所	材質
1	2.75	0.65	1.25	215 青	薄梯	孔稜有 胴稜有	D22	ガラス小玉
2	3.80	0.90	1.25	98 うす黄	薄整	孔稜有 胴稜有	D21	滑石製白玉
3	4.20	1.20	1.40	141 灰味黄緑	薄梯	孔稜有 胴稜有	"	"

表62 3号住居跡出土ガラス小玉特徴一覧表

特徴	個数	胴径mm	孔径mm	長さmm	色調	側面形	仕上り
平均	④7	3.28	0.96	1.96	215 青 ③①	扁②⑤ 梯③①	胴丸④②
胴径	30	(最大) 4.60	1.65	2.10	215 青	薄梯	胴丸
	46	(最小) 2.35	1.25	1.80	182 明るい青緑	扁整	"
孔径	30	4.60	(最大) 1.65	2.10	215 青	薄梯	"
	12	2.85	(最小) 0.45	2.00	114 こい青	薄整	"
	20	3.20	(最小) 0.45	2.40	214 "	扁梯	"
長さ	6	4.35	1.05	(最大) 3.00	215 青	"	"
	42	2.80	0.90	(最小) 1.00	215 "	薄整	"
	43	2.65	1.10	(最小) 1.00	215 "	"	"
側面形別平均	⑮	3.25	1.80	1.52	215 ⑬ 214 ①	"	胴丸⑮
	⑥	3.52	1.04	1.69	182 ① 215 ⑤	薄梯	胴丸⑥
	⑯	3.19	0.96	2.34	182 ⑦ 215 ⑦ 183 ②	扁整	稜有① 稜丸④ 胴丸⑪
	⑩	3.27	0.79	2.23	182 ⑦ 215 ⑥ 214 ②	扁梯	胴丸⑩
色調別平均	⑩	2.94	0.98	2.15	182 明るい青緑	扁整⑦ 薄梯① 扁梯②	稜有① 稜丸① 胴丸⑦
	③	3.77	1.12	2.33	183 にぶ青緑	薄整① 扁整②	稜丸① 胴丸②
	⑳	3.15	0.98	1.81	215 青	薄整⑬ 薄梯⑤ 扁整⑦ 扁梯⑥	稜丸② 胴丸⑨
	③	2.87	0.48	2.00	214 こい青	薄整① 扁梯②	胴丸③
仕上り別平均	①	3.30	1.05	1.95	182 ①	扁整①	稜有
	④	2.90	0.74	2.31	182 ① 215 ② 183 ①	扁整④	稜丸
	④②	3.38	0.99	1.98	182 ⑧ 215 ⑨ 183 ② 214 ③	薄整⑮ 薄梯⑨ 扁整① 扁梯⑦	胴丸

胴丸、No.45は薄整・胴丸にまで調成されており、製作不良品の範中からは確かに除外される。しかし、孔に稜が認められるNo.9の長さは5番目に長い2.65mmを測り、再熱処理(工程㉔)を行わず、当初の研磨のまま(工程㉕)であることも考えられる。4住では、No.24は孔に著しい稜が認められ、胴丸ではあるが、長さがNo.5の3.60mmについて長い3.40mmを測り、再熱処理で押されてはいない状態(工程㉕)と考えられる。No.18も同様である。No.1は薄整胴丸で、製作不

表63 4号住居跡出土ガラス小玉特徴一覧表

特徴	個数	胴径	孔径	長さ	色 調	側面形	仕上り
胴径	24	(最大) 5.60	1.55	3.40	183 にふい青緑	扁整	孔稜有 胴丸
	13	(最小) 2.55	0.80	1.20	215 青	薄梯	胴丸
	21	(最小) 2.55	0.65	1.45	182 明るい青緑	扁梯	〃
孔径	1	4.45	(最大) 2.40	2.05	183 にふい青緑	薄整	〃
	5	3.90	(最小) 0.55	3.60	214 こい青	柱近整	稜丸
	19	2.85	(最小) 0.55	3.00	182 明るい青緑	扁梯	胴丸
長さ	5	3.90	0.55	(最大) 3.60	214 こい青	柱近整	稜丸
	23	4.10	1.60	(最大) 3.60	182 明るい青緑	柱梯	〃
	6	3.40	0.90	(最小) 1.45	214 こい青	薄整	胴丸
	15	2.70	0.65	(最小) 1.45	182 明るい青緑	薄梯	〃
	16	2.85	0.75	(最小) 1.45	215 青	薄整	〃
	21	2.55	0.65	(最小) 1.45	182 明るい青緑	扁梯	〃
平均	24	3.56	0.99	2.40	215 青 ①	扁① 梯⑤	胴丸⑦
側面平均	⑥	3.62	1.13	1.73	183 ① 215 ④ 214 ①	薄整	胴丸⑥
	②	2.63	0.73	1.33	182 ① 215 ①	薄梯	胴丸②
	⑥	4.23	1.04	2.81	183 ① 215 ③ 214 ②	扁整	稜丸① 胴丸⑤
	⑤	3.20	0.85	2.25	182 ② 215 ② 214 ①	扁梯	稜丸② 胴丸③
	③	3.30	0.80	3.30	183 ① 215 ① 214 ①	柱近整	稜丸② 胴丸①
	①	3.20	0.95	3.10	182 ①	柱近梯	稜有①
	①	4.10	1.60	3.50	182 ①	柱梯	稜丸①
色調平均	⑤	3.09	0.94	2.37	182 明るい青緑	薄梯① 柱近梯① 扁梯② 柱梯①	稜有① 稜丸① 胴丸③
	③	4.38	1.43	3.35	183 にふい青緑	薄整① 柱近整① 扁整①	孔稜有 胴丸① 胴丸②
	⑪	3.64	0.87	2.23	215 青	薄整④ 柱近整① 扁整③ 薄梯① 扁梯②	稜丸① 胴丸⑩
	⑤	3.37	0.80	2.51	214 こい青	薄整① 柱近整① 扁整② 扁梯①	稜丸③ 胴丸②
仕上げ平均	①	3.20	0.95	3.10	182 ①	柱近梯	稜有
	⑥	3.24	0.82	2.86	182 ② 215 ① 214 ③	扁整③ 柱近整② 扁整① 柱梯①	稜丸
	⑰	3.70	1.05	2.20	182 ② 215 ⑩ 183 ③ 214 ②	薄整⑥ 柱近整① 扁整⑤ 薄梯② 扁梯③	胴丸

表64 8号住居跡出土ガラス玉特徴一覧表

特徴	個数	胴径	孔径	長さ	色調	側面形	仕上り
平均	⑨	3.26	0.79	2.54	215 青 ⑤	扁⑥ 梯⑥	稜丸⑧
胴径	9	(最大) 4.80	1.45	2.60	215 青	扁梯	稜丸
	5	(最小) 2.70	0.65	3.55	183 にぶ青緑	柱梯	〃
	7	(最小) 2.70	0.35	2.20	215 青	扁梯	〃
孔径	9	4.80	(最大) 1.45	2.60	215 〃	〃	〃
	7	2.70	(最小) 0.35	2.20	215 〃	扁整	〃
長さ	5	2.70	0.65	(最大) 3.55	183 にぶ青緑	柱梯	〃
	6	3.10	0.70	(最小) 1.85	182 明るい青緑	薄梯	胴丸
側面形平均	①	3.10	0.70	1.85	182 ①	〃	胴丸①
	③	2.98	0.53	2.20	215 ③	扁整	稜丸② 胴丸①
	③	3.90	1.05	2.55	182 ① 215 ②	扁梯	稜丸② 胴丸①
	②	2.80	0.83	3.38	182 ① 183 ①	柱梯	稜丸②
色調平均	③	3.23	0.82	2.40	182 明るい青緑	薄梯① 柱梯① 扁梯①	稜丸① 胴丸②
	①	2.70	0.65	3.55	183 にぶ青緑	柱梯①	稜丸①
	⑤	3.39	0.80	2.42	215 青	扁整③ 扁梯②	稜丸④ 胴丸①
仕上げ	⑥	3.23	0.84	2.83	182 ① 183 ① 215 ④	柱梯② 扁整② 扁梯②	稜丸
	③	3.33	0.68	1.97	182 ② 215 ①	薄梯① 扁整① 扁梯①	胴丸

良品の範中からは確かに除外されるが、孔には稜が認められる。8住では、No.5のみであるが胴径よりも長さが大きい柱状稜丸で、孔径が0.65mmと極小なため、胴丸仕上げ（工程⑥）まで至らなかったものと考えられる。

色調が182の小玉は、三者の計測値平均が、4色中で、出土住居を異にしても最も差位が認められず、均一した製品と看取することもできるが、側面形状と仕上げの状態を観察すると、必ずしもそうとは言えない。側面形では4住・8住に柱状あるいは柱状に近い長さの大きいものが、共に1割前後含まれ、仕上げの状態では稜が有るものが認められるのは4色中で色調182のみで、これを稜丸とせぬ段階（工程④以前）とも考えられる。

色調215では、仕上げが稜丸のままに胴丸に至らないもの（工程④）が、44.4%も含まれることが観察される。

以上、3号住居跡出土の融着例を未整品と考えたため、多くは我田引水的な説明に終始したが、各住居出土ガラス小玉の大半は未整品であるとの考えを示したものである。（馬田）

表65 3・4・8号住居跡出土ガラス小玉特徴比較表

全平均		胴径	孔径	長さ	孔径 胴径×100	長さ 胴径×100	孔径 長さ×100	出土率 A	
3号住居		3.28	0.96	1.96	29.3	59.8	49.0	58.8	
4号住居		3.56	0.99	2.40	27.8	67.4	41.3	30.0	
8号住居		3.26	0.79	2.54	24.2	77.9	31.1	11.3	
色調平均		胴径	孔径	長さ	孔径 胴径×100	長さ 胴径×100	孔径 長さ×100	出土率 A	出土率 B
182	3号住居	2.94	0.98	2.15	33.3	73.1	45.6	21.3	22.5
	4号 "	3.09	0.94	2.37	30.4	76.7	39.7	20.8	
	8号 "	3.23	0.82	2.40	25.4	74.3	34.2	33.3	
183	3号住居	3.77	1.12	2.33	29.7	61.8	48.1	6.4	8.8
	4号 "	4.38	1.43	3.35	32.6	76.5	42.7	12.5	
	8号 "	2.70	0.65	3.55	24.1	18.3	18.3	11.1	
215	3号住居	3.15	0.98	1.81	31.1	57.5	54.1	66.0	58.8
	4号 "	3.64	0.87	2.23	24.0	61.3	39.0	45.8	
	8号 "	3.39	0.80	2.42	23.6	71.4	33.1	55.6	
214	3号住居	2.87	0.48	2.00	16.7	69.7	24.0	6.4	10.0
	4号 "	3.37	0.80	2.51	23.7	74.5	31.9	20.8	
	8号 "								
側面形		薄整	薄梯	扁整	扁梯	柱近整	柱近梯	柱梯	
182	3号住居		2.1	14.9	14.9				
	4号 "		4.2	0	8.3		4.2	4.2	
	8号 "		11.1	0	11.1			11.1	
183	3号住居	2.1		4.3					
	4号 "	2.1		2.1		2.1			
	8号 "							11.1	
215	3号住居	27.7	10.6	14.9	12.8				
	4号 "	16.7	4.2	12.5	8.3	4.2			
	8号 "			33.3	22.2				
214	3号住居	2.1			4.3				
	4号 "	4.2		8.3	4.2	4.2			
	8号 "								
仕上げ		稜有	稜丸	胴丸	仕上げ		稜有	稜丸	胴丸
182	3号住居	2.1	2.1	17.0	215	3号住居		4.3	61.7
	4号 "	4.2	8.3	8.3		4号 "		4.2	41.7
	8号 "		11.1	22.2		8号 "		44.4	11.1
183	3号住居		2.1	4.3	214	3号住居			6.4
	4号 "			12.5		4号 "		12.5	8.3
	8号 "		11.1			8号 "			



壺C類 広口壺で、内面がへラケズリされて器壁の薄い、球形ないしは倒卵形の体部を有し口縁部は直線的に広がり、口縁端部に面をもつ。

壺D類 球形ないしは倒卵形の体部を有し、外方へ直線的に伸びる口縁をもち器壁は厚い。

壺F類 直口縁をもつ壺。

壺G 1類 中形の壺で、直口縁をもつもの。

壺G 2類 中形の壺で、外反する口縁部をもつもの。

壺H 1類 小形丸底壺で、厚目の器壁をもつもの。

壺H 2類 小形丸底壺で、薄目の器壁をもつもの。

甕A類 二重口縁をもつ甕で、口縁部は直立し、内面にへラケズリが施されて器壁は薄い。

甕B類 球形若しくは倒卵形の体部をもち、器外面をハケメ調整・内面をへラケズリして、器壁を薄くしたもの。直線的に外反する口縁部がつき、端部は摘み上げられて上方に尖る。

甕C類 球形若しくは倒卵形の体部をもち、器外面にタタキ整形痕・ハケメが残り、内面にはハケないしは板ナデ調整が施される。

甕D類 く字形口縁を有す長胴の甕の器外面にタタキ整形痕・ハケメが残り、内面はハケメか板ナデ調整される。弥生後期土器の伝統をもつ在地型甕。

甕E類 D類に似るが、口縁部に変化をもつもの。内面をへラケズリするものもある。

甕F類 口縁部が外弯気味に伸びるもの。

鉢A類 口縁部が外反する鉢。

鉢B類 口縁部が外反する鉢で脚台のつくもの。

鉢C類 平底かそれに近い底部をもち、直線的に口縁部が開くもの。

片口・甑 鉢ないしは碗形の器形を有して、口縁部の一部が拡張される片口、底部に穿孔を施した甑などがあり、一括した。

碗A類 器高に対して口径の広い碗。

碗B類 器高と口径が1：2の比率に近い碗で体部は深い。

碗C類 碗B類に脚台のつくもの。

高杯A類 杯部が屈曲して広がる高杯。杯部と脚部の接合しない例がかなりある。このため杯部の形状を1～4類、脚部の形状をa～d類に細分する。

1. 杯下半部と上半部の屈曲に明瞭な稜をもち、上半部が直線的か外反気味に開くもの。
2. 杯下半部と上半部の屈曲に明瞭な稜をもち、上半部が内弯気味に開くもの。
3. 杯下半部・上半部共に内弯気味に伸びて、屈曲に稜を有さないもの。ないしは下半部と上半部の区別のつかなくなるもの。
4. 杯下半部に相当する部分が平らになり、内面では杯上半部の深さだけになるもの。
  - a 脚筒部が長めで大きく広がる脚裾部は薄めに伸び、内面をケズリ調整しないもの。柱状部

が中実になる例もある。

b 脚筒部が長めで緩やかに広がって脚裾部に至るが、脚筒部内面にヘラケズリが施され、裾部との境には僅かな稜がみられる。

c 脚筒部が、杯部つけねからそのまま大きく広がり、ラッパ状を呈すもの。内面はケズられるが裾部内面の稜は軽い。

d 脚筒部は細めに伸び、脚裾部は屈折して外方に広がる。脚筒部内面がケズられて、裾部との境に明瞭な稜を有す。脚筒部がエンタシス状に中脹らみになる例もある。

高杯B類 椀形の杯部をもつ高杯。椀C類と器形は似るが、脚部が高めで柱状部を有すものを高杯とした。

器台A類 体部の上半で窄まり上下に開く円筒形のもの。

器台B1類 浅い皿状の受部をもつ器台。受部の広がりには直線的で端部が上方に摘み上げられる。

器台B2類 浅い皿状の受部をもつ器台。受部は内弯して広がり、端部が反り気味に摘み上げられる。

その他、支脚・手捏土器などもある。

各器種を、各土器群（溝内出土資料のため一括資料とはいえないが、溝内のごく一部に集中していたので土器群の名称を使用した。新旧の土器が混在する可能性も否めない。）別に示せば表66のようになる。

#### 器種別にみた変化とその編年的位置

各土器群とも欠落する器種が多く、一つの器種が各土器群にわたって出現するような好都合な例はないが、各器種別にその形状を比較検討し、併せてその編年的位置についても触れたい。

北部九州の古式土師器編年作業は、古墳発生の問題にかかわることもあって活発に進められてきているが、開発の盛んな福岡・早良平野を中心とした地域での編年作業が多い（註4）筑後地域では、小田富士雄氏による狐塚遺跡での編年（註5）と、武末純一氏による室岡遺跡群での編年（註6）が行なわれており、朝倉地域では、池の上墳墓群における古式土師器の位置づけ（註7）、副島邦弘氏による小田道Ⅰ～Ⅲ期の設定（註8）、と、柳田康雄氏の各平野単位編年への試み（註9）に朝倉・筑後両地域が含まれている。

各編年との十分な検討をする余裕をもたないが、種々の文化要素伝播では、北ないしは東方からの例が多いこともあり、ここでは主に朝倉地域側に目を向けて検討を加えることにする。

壺A1類・甕A類は山陰系の土器で、藤田憲司氏によればⅣ期古段階に位置づけられ（註10）山陽地方の酒津式・畿内の庄内式期に相当する。北部九州では、三雲遺跡（註11）・西新町遺跡（註12）などで庄内式甕を伴ったりしている。壺A2類は畿内系の土器で、奈良県纏向遺跡（註13）・大阪府馬場川遺跡（註14）・東奈良遺跡（註15）・兵庫県長越遺跡（註16）・広島県神辺御領遺跡

表66 溝出土土器の器種分類

		支流1南	支流1北	支流2	大溝	2T4層	2T3層	2T2層	3T3層	3T2層
壺	A 1 類	[11][12]								
	2 類					47				
	3 類	[18]				48・49			○	
	B 1 類	[4][7]								
	2 類	[2][5]		①・②						
	C 類	[8][9][10]		③						
	D 類	[1]								
	E 類							○		69
	F 類				(2)	57	36			
G 1 類								17		
	2 類	[19]				51		16・18		
	H 1 類		[43]	⑩	(6)			30・31	○	
2 類			⑦				28・29	○	76	
甕	A 類	[13]								
	B 類	[20][21][22]		⑤		56	38・39	20・21	85	
	C 類				(11)	52・53				
	D 類					54				
	E 類	[3]		④				19		
	F 類					55	37			
鉢	A 類	[30]	[42]							
	B 類	[31]	[41]							
	C 類	[28]				67				74
片口・甌	[29]						45	91		
椀	A 類					63		32・33	○	
	B 類					64・65・66				
	C 類			⑧・⑨	(8)		44			75
高杯	A 1 類	[24][25]	[36][39]			61		25・26		○
	2 類	[27][34]						92		
	3 類							15		
	4 類				(15)			27		
	a 類				(21)	62		27		
	b 類		[40]							
	c 類	[26][34]	[37]					26		
d 類							14・15・92・93			
B 類			⑥	(22)	60		72	41		
器台	A 類									77
	B 1 類	[35]		⑪						
	2 類									78
支脚	[44]									
手捏土器						68		34・35		

番号の〔 〕は大溝支流1、○は大溝支流2、( )は大溝、無印はB北溝出土土器を、番号以外の○は存在を示す。

(註17)などから出土し、類似した土器では県内の今光遺跡(註18)・小田道遺跡からの例がある。いずれも庄内式期にしているが、神辺御領遺跡のS D09溝では、塚堂遺跡溝の壺A 1・B 1・C類、甕A・B類の口縁部にみられる特徴が似ており、注目に値するが、報告者は「一応庄内式最新相に仕置づけておく」としている。

壺A 3類では、48・[18]が上面から出土し、体部を欠くために比較し難いものの、内面ハケメ調整で肩の張る49は先行する可能性がある。一方B北溝2層出土の1はそれよりも退化した口縁部であろう。

壺B類では、口縁部の反りが大きく端部の内面が凹む〔4〕・〔5〕と、口縁部が短く立ち上り端部が面をなし頸部屈折に丸味をもつ〔2〕との間に形態的な前後関係を求める必要はあろう。また壺C類では、下部出土の〔8〕・〔9〕から、口縁部反りの直線化・口唇端部の摘み上げを失う〔10〕との間に一線を画す必要があり、③は古い方になろう。壺Dは古式の底部を残している。

甕B類は庄内式の甕で、特有の細かいタタキメが残らず、何れもハケメ調整されているので庄内式としては新しい段階になろう。層序の上下からすれば56と38・39の間に先後関係を求めなければならない。分離し難い面もあるが敢て分けるならば、直線的な外反をする口縁部に内弯化の傾向のあることと、端部の摘み上げが低くなることをあげるぐらいであろう。

甕C類は、古式の庄内式甕に似た形状をもつが、内面をへラケズリせず、甕B類に比べると器壁は厚い。甕B類でも〔20〕は内面へラケズリでなく外面格子状の細かいハケメ調整だが、C類52の肩部外面に右上り→左上りと細かめのタタキメが交差していることに共通要素を求めることができよう。いずれにせよ倒卵形体部の、外面にタタキ整形痕を残し胴下半をハケ・へラケズリ調整、内面にへラケズリ痕のみられない手法の特徴があり。壺B類にもあてはまる。壺B類にみられた外反する口縁部の端部内面を僅かに凹ませる特徴も看取できる。52は底部を欠くが、53の例では凸レンズ状を呈す底面をもっており、庄内式の古段階に影響を受けて成立した在地土器とするのが妥当であろう(註19)。

壺D類は在地の甕で、54の口縁部と〔11〕の口縁部を比較すると、端部の摘み上げと面取りの差があり、54に底部がないため比較しえないが〔11〕では丸底になっており新しい要素を有することになる。しかし、小田道遺跡・狐塚遺跡では、丸底と凸レンズ底は混在しており、目下のところ明確な基準とはならないようである。甕E類では壺B 2類と同様の現象がみられ、19へと辿ることが可能であろう。

壺G 2類では、〔19〕・⑩・51の体部内面がナデられ、16・18はへラケズリになっており頸部の窄まりが緩い。壺H類でも、G類と同様な変化を示すと考えられるが、〔43〕→30・31は妥当であろう。大溝出土の〔6〕は中間的な形状を呈す。また、内弯口縁で広がる42から直立化して端部が外反する76への変化は器壁が厚くなることと相乗するが、壺A 3類と同様である。42と28については大きな差がないものの一応層位に従って区別する。

これらの壺・甕からみると、大溝支流1南群の中の新相・大溝支流2土器群・B北溝4層がほぼ同一の時期、大溝支流1南群の新相・大溝支流1北群・B北溝3層がほぼ同一の時期で、B北溝2層が続く。仮にⅠ・Ⅱ・Ⅲとして時期差を考えたい。ただ大溝とB北溝との層序の対比では2層に相当しているものの、土器の形状からは3層に近い例が多い。この区分に従って他の器種をも充填することにするが、高杯A類では1・a類→2・c類の出現→3・4・b・d類の出現という傾向が窺える。高杯A1a類は庄内式系統の高杯で、b類脚部は典型布留期のものである。裾部に向かって大きくラッパ状に開く特徴は、大分市守岡遺跡のⅠ区19号住居跡出土土器(註20)にみられ、庄内式甕を伴っているため、b c類脚部の出現にさほど無理を生じないと思われる。

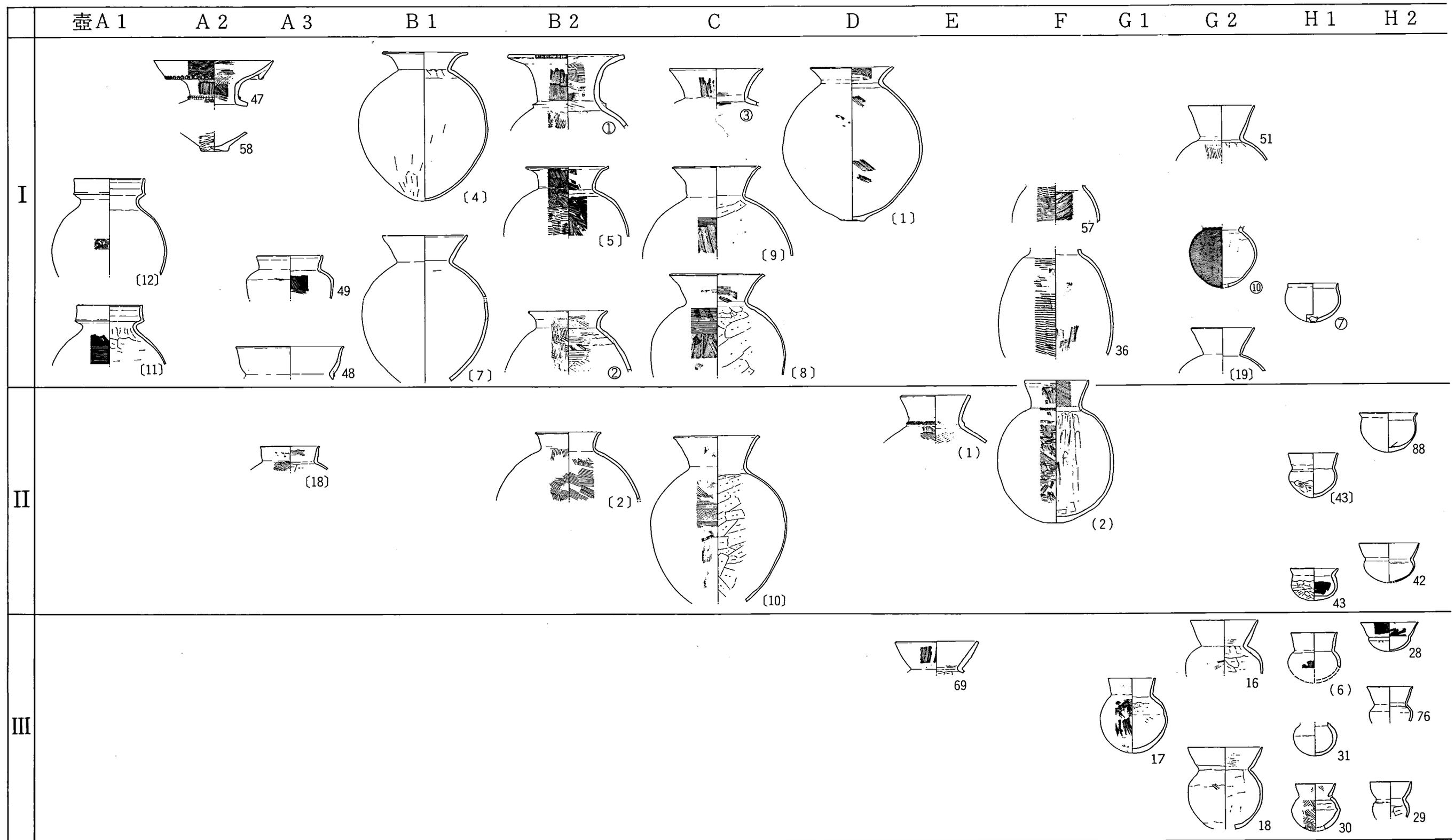
朝倉地域での編年と対比させれば、小田道Ⅲ期がおおむねⅠ期に相当するが、小田道編年の1時期の中に7軒の住居跡重複があるなど複雑な問題がある。次に池の上1～3号墳供献土器(註21)は、井上氏編年(註22)の柏田Ⅲ期に近いとされ、陶質土器を伴わないが、陶質土器で編年されるⅠ式は柏田Ⅲ期に後続する下原遺跡出土土器群に併行して4世紀末まで遡ると考えられている。この土器は、塚堂遺跡溝Ⅱ期に入る壺C類の10に近い器形で口唇端部が低く摘み上げられるのでⅡ期の中でも古い位置を占めることになる。一方Ⅰ期の壺C類は甘木市大願寺古墳出土の例(註23)に近く、共伴出土の土器では壺A 2類・甕B類の例より若干新しい傾向を考えられないこともないので、柳田氏の編年でのⅠb期とⅡa期の接点におくこととの問題はない。八並周溝墓出土土器は典型布留期に考えられている(註24)が、高杯の脚部はエンタシス状を呈して広がる庄内式系のもの高杯A b類の例と大差ないものと思われ、方形周溝墓出土の土器は、壺A 2類・C類・甕B類共に退化したもので、池の上遺跡よりも後出するといえよう。

一方、神蔵古墳(註25)出土の土器は、くびれ部出土とされる土器と住居跡出土土器共にⅠ期に対比できる。神蔵古墳は主体部の竪穴式石室から三角縁神獸鏡を出土させており、京都府椿井大塚山古墳(註26)出土鏡と同範関係にあるので古墳から推定される実年代との関係が問題になる。神蔵古墳の主体部はさておき、報告書では、くびれ部出土土器は供献土器とされているが、むしろ古墳に直接伴わず古墳築造以前の段階のものと考えうる。従って古墳の構造、遺物から与えられる年代よりも遡る年代ということになろう。

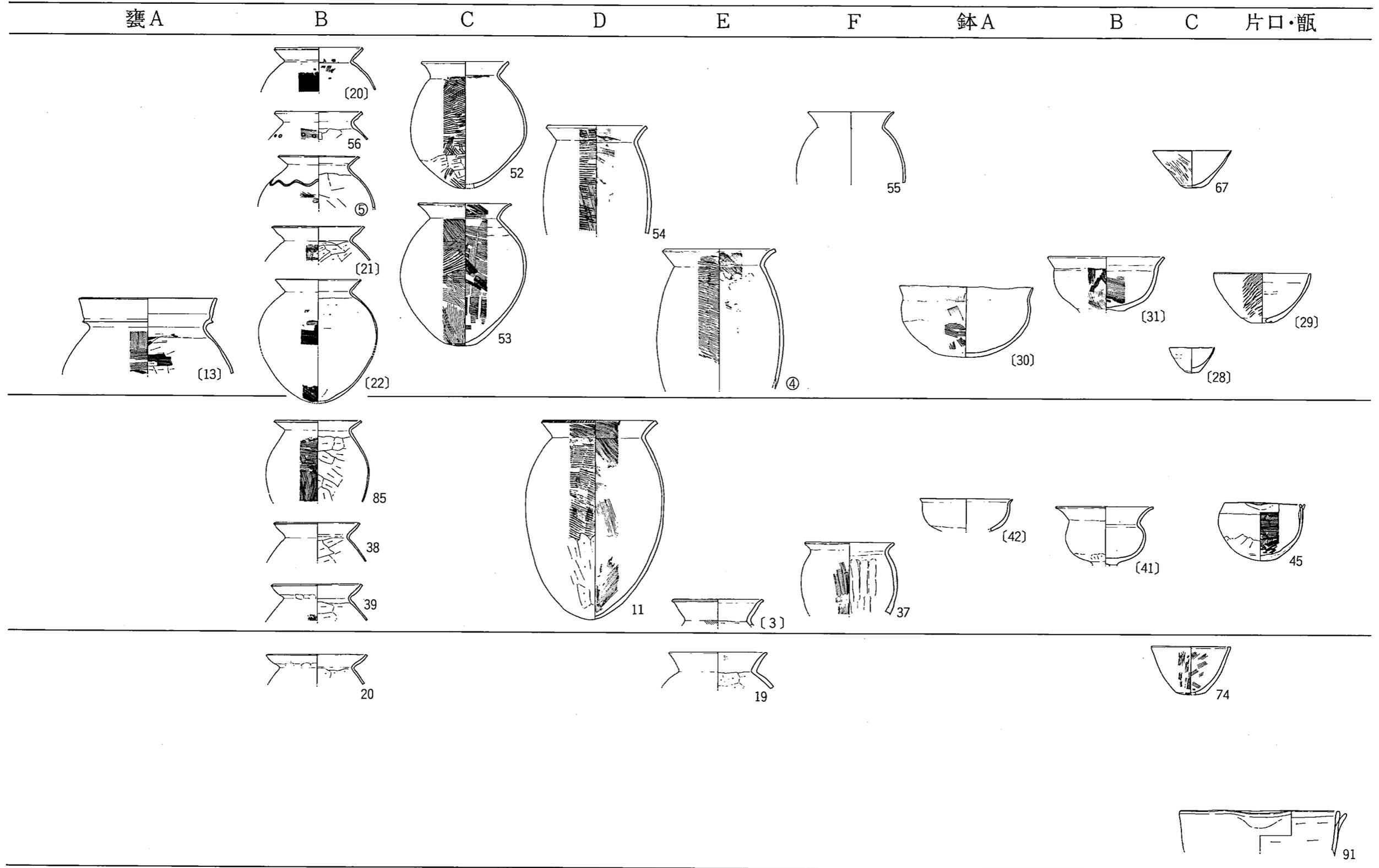
塚堂遺跡溝Ⅲ期は、目下のところ良好な対比資料を朝倉地域に求めないが、溝出土土器中に全く陶質土器を含まないことから、塚堂遺跡の陶質土器を含む住居跡よりも先行する可能性が高い。朝倉・筑後地域での対比を今後に期すとしても目下のところでは、早良平野の湯納遺跡D 5溝出土土器(註27)に近く、典型布留式の段階を考えている。

従って、Ⅰ期を庄内式新段階併行、Ⅱ期を布留式古段階併行、Ⅲ期を典型布留式併行期とするが、溝出土土器という限界のある資料での編年案であり、今後一括資料によって組み替えていくべきであろう。

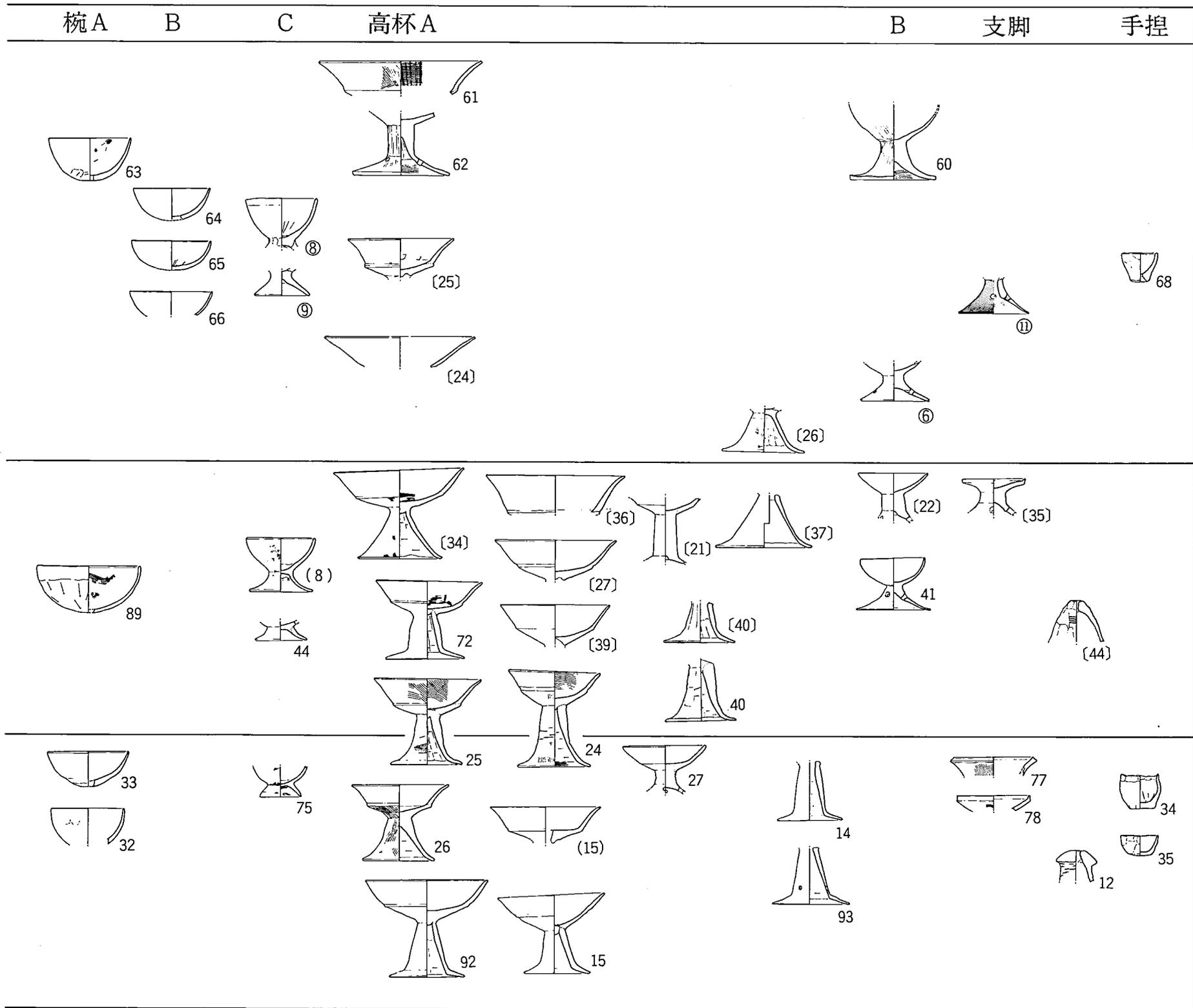
これらの土器の実年代については、神蔵古墳などの年代と併せて検討する余地がある。古墳



第 166 図 B・B北地区溝状遺構出土の土師器① (1/8)



第 167 図 B・B 北地区溝状遺構出土の土師器② (1/8)



第 168 図 B・B北地区溝状遺構出土の土師器③ (1/8)

の年代観としての私見をもち合わせていないのでこの問題について特に触れないが、弥生後期後半を3世紀初頭におく考え方(註28)に賛成し、典型布留式期のあとを5世紀初頭に考えるのでI期を4世紀前半、II期を4世紀中頃、III期を4世紀の後半としておきたい。

## 2. その他の遺物について

前述した古式土師器の編年の位置が正しいとすれば、土器以外の遺物についてもある程度時期の限定が可能になろう。

石器類では2点の砥石共に上層の出土であることから特に限定することに無理がある。

鉄器類では、I期に扁平両丸造の鉄鎌片があり、II期には広根両丸造柳葉式の小さな鉄鎌・2点の鉤が、III期には片丸造篋被柳葉式鉄鎌、柳葉変形定角式鉄鎌がある。鉄鎌の小破片では全体の形状が詳らかでないので、II期の両丸造柳葉式の例と、III期の片丸造篋被柳葉式の例を問題にすれば、前者は弥生時代の銅鎌以来の形を呈していて古い段階にあって問題はないと思われる。これに比して後者は両丸造になることと篋被をもつことに新しさがみられる。後藤守一博士による鉄鎌の年代研究(註29)は半世紀も以前の業績ではあるが、前者の例を古墳時代前期に、後者の例を中期～後期に考えられている。片丸造で短かい篋被をもつ例は5世紀前半代といわれる滋賀県新開古墳(註30)にみられるが、池の上墳墓群では1号墳4号主体部に長い鉤被をもつ鉄鎌が出土しているので、篋被柳葉式がIII期まで遡ると考えたい。

長さが20cmを越し柄部が矩形を呈す鉤は、福岡市若八幡宮古墳(註31)・香川県石清尾山猫塚(註32)・大阪府真名井古墳(註33)・京都府椿井大塚山古墳などにみられ、纏向2式か3式の微妙な奈良県見田大沢4号墳出土例(註34)も可能性がある。若八幡宮古墳からは典型布留式期、猫塚・真名井古墳からは庄内式新段階～布留式古段階と思われる土器が出土している。古墳時代の鉤の変遷を問題にした古瀬清秀氏の研究(註35)でも古いタイプに相当し、本例の所属時期として矛盾はない。

玉類では、扁平小形な勾玉がI期の土器に伴って出土しているものの、周辺には縄文晩期の土器も出土しており、緑泥片岩を素材としているので、縄文時代の可能性がある。

(小池)

- 註1 馬田弘稔 「竹戸遺跡」(中間研志編『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』, 福岡県教育委員会, 1980)
- 2 馬田弘稔 「円形住居跡について」(柳田康雄編『三雲遺跡Ⅰ』, 福岡県文化財調査報告書 第58集, 1980)
- 3 柳田康雄 「ガラス小玉」(井上裕弘編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第9集, 福岡県教育委員会, 1978)
- 4 例えば, 小田富士雄氏による有田Ⅰ～Ⅲの設定(有田遺跡調査団編『有田遺跡』1968)以降の主なものとして次のものがある。
- a) 下條信行編『宮の前遺跡(A～D地点)』(福岡県労働者住宅生活協同組合, 1971)
- b) 高橋 徹也『恵子若山遺跡』(恵子若山遺跡調査団, 1975)
- c) 栗原和彦編『湯納遺跡』(『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第5集, 1977)
- d) 井上裕弘「古墳時代の遺構と遺物」(『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第4集, 福岡県教育委員会, 1977)
- e) 井上裕弘「弥生終末～古墳前期の土器群について」(『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』, 第7集, 1978)
- f) 武末純一「福岡県早良平野の古式土器」(『古文化談叢』, 第5集, 1978)
- g) 柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』, 1982)
- h) 常松幹雄他『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告』第Ⅱ集, 1982
- 5 小田富士雄編『狐塚遺跡』(筑後市教育委員会, 1970)
- 6 武末純一「遺物の検討(2)土師器」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XIX, 福岡県教育委員会, 1977)
- 7 橋口達也編「池の上墳墓群」(『甘木市文化財調査報告』第5集, 1979)
- 8 副島邦弘編「小田道遺跡」(『甘木市文化財調査報告』第8集, 1981)
- 9 註4 g)に同じ
- 10 藤田憲司『山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係』(『考古学雑誌』第64巻・第4号, 1979)
- 11 柳田康雄他「三雲遺跡Ⅲ」(『福岡県文化財調査報告』, 第58集, 1982)
- 12 註4 g)に同じ
- 13 石野博信・関川尚功『纏向』(檀原考古研究所, 1976)
- 14 芋本隆裕他「馬場川遺跡発掘調査報告」(東大阪市遺跡保護調査会, 1977)
- 15 田代克己・興井哲秀編『東奈良発掘調査概報』Ⅰ(東奈良遺跡調査会, 1979)
- 16 松下勝他『播磨長越遺跡』(兵庫県教育委員会, 1978)
- 17 三枝健二他『神辺御領遺跡—国鉄井原線建設に係る発掘調査報告』(広島県教育委員会, 1981)
- 18 佐々木隆彦編『今光・地余遺跡』(東急不動産株式会社, 1980)

- 19 同様な例は、熊本県古閑遺跡出土土器でもみられる。野田拓治「古式土師器の成立と展開」（『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』, 1982）
- 20 羽田野光洋他『守岡遺跡昭和50・51年度発掘調査概報』（大分市教育委員会, 1979）
- 21 註7に同じ
- 22 註4 d）・e）に同じ
- 23 註4 g）に同じ
- 24 酒井仁夫「八並遺跡検出周溝墓について」（『九州考古学』第52号, 1976）
- 25 木下修編「神藏古墳」（『甘木市文化財調査報告』第3集, 1978）
- 26 梅原末治「椿井大塚古墳」（『京都府文化財調査報告』23, 1964）
- 27 註4 c）に同じ
- 28 註4 g）に同じ
- 29 後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」（『人類学雑誌』第54巻・第4号, 1929）なお、鉄鏃の分類はこれに従った。
- 30 西田守夫・鈴木博司・金関恕「新開古墳」（『滋賀県史跡調査報告』12, 1961）
- 31 柳田康雄「若八幡宮古墳」（『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集, 福岡県教育委員会, 1971）
- 32 梅原末治「讃岐高松石清山石塚の研究」（『京都帝国大学文学部研究報告』第12冊, 京都帝国大学, 1933）
- 33 北野耕平「河内における古墳の調査」（『大阪大学文学部国史研究室研究報告』第1冊, 大阪大学, 1964）
- 34 亀田博他「見田・大沢古墳群」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第44冊, 橿原考古学研究所, 1982）
- 35 古瀬清秀「古墳出土の施の形態的変遷とその役割」（『考古論集』, 1977）

# 圖 版



南東側上空から見た塚堂古墳(1)とバイパス建設予定地(2.日の岡古墳, 3.月の岡古墳, 4.筑後川)



1. 西側上空から見た若宮・宮田古墳群（1.塚堂古墳, 2.日の岡古墳, 3.月の岡古墳）



2. 北側上空から見た塚堂古墳（第5次）



1. 南側上空から見た塚堂遺跡群 (第5次)



2. 南西上空から見た塚堂古墳 (第5次)



1. 後円部上空から見た塚堂古墳周濠南西隅角部（第5次）



2. 南西側上空から見た塚堂古墳（第5次）



1. 北側から見た塚堂古墳（右側が前方部、背景は耳納山、第4次）



2. 北側から見た第1トレンチ（第4次）



1. 北側から見た第2トレンチ  
(第4次)



2. 東側から見た第2トレンチ北端の礫群(第4次)



1. 北東側から見た第4トレンチ  
(第4次)



2. 北東側から見た第5トレンチ(内濠, 中央は衣蓋形埴輪2)



1. 東側から見た第6トレンチ (第4次)



2. 南側から見た第5トレンチ東端と第8トレンチ (第4次)



1. 西側から見た北西側周濠隅角部 (第6次)



2. 東側から見た周濠北西側隅角部 (第6次, 左上方の森は月の岡・日の岡古墳)



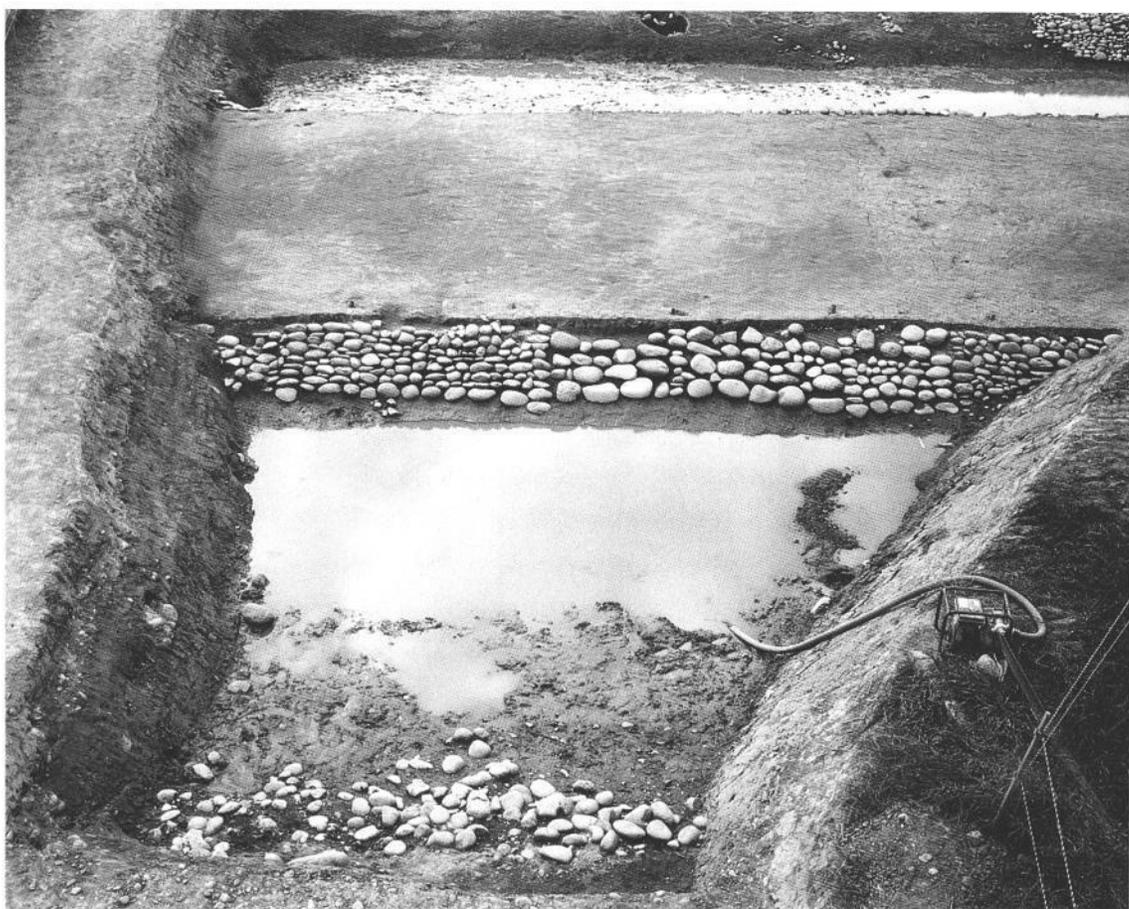
1. 北側から見た北西側内濠隅角部  
(第6次)



2. 南東側から見た北西側内濠隅角部 (第6次)



1. 前方部内濠内縁 (第5次)



2. 同上外縁 (第5次)



1. 前方部外濠内縁 (第5次)



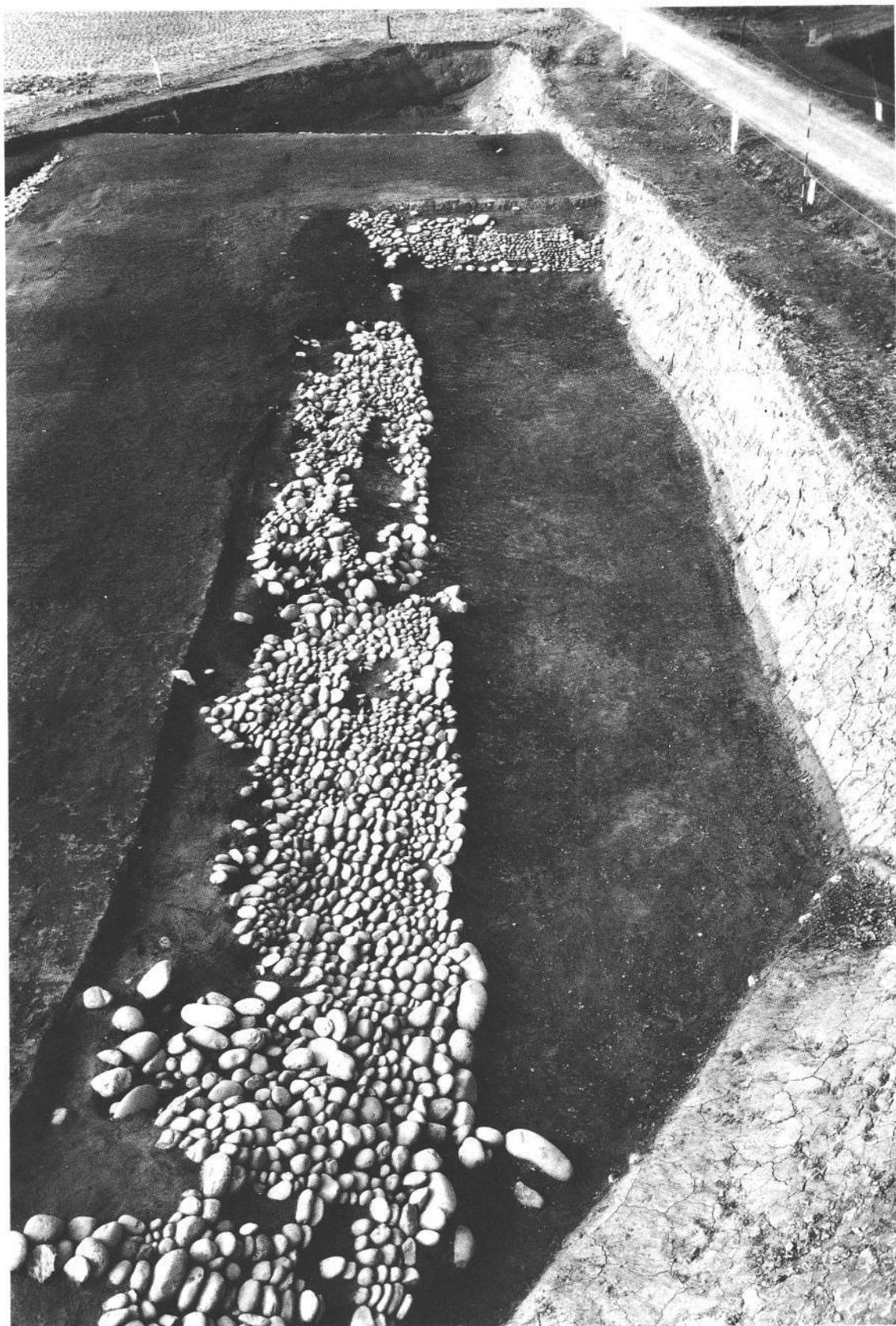
2. 前方部中央部葺石細部 (第5次)



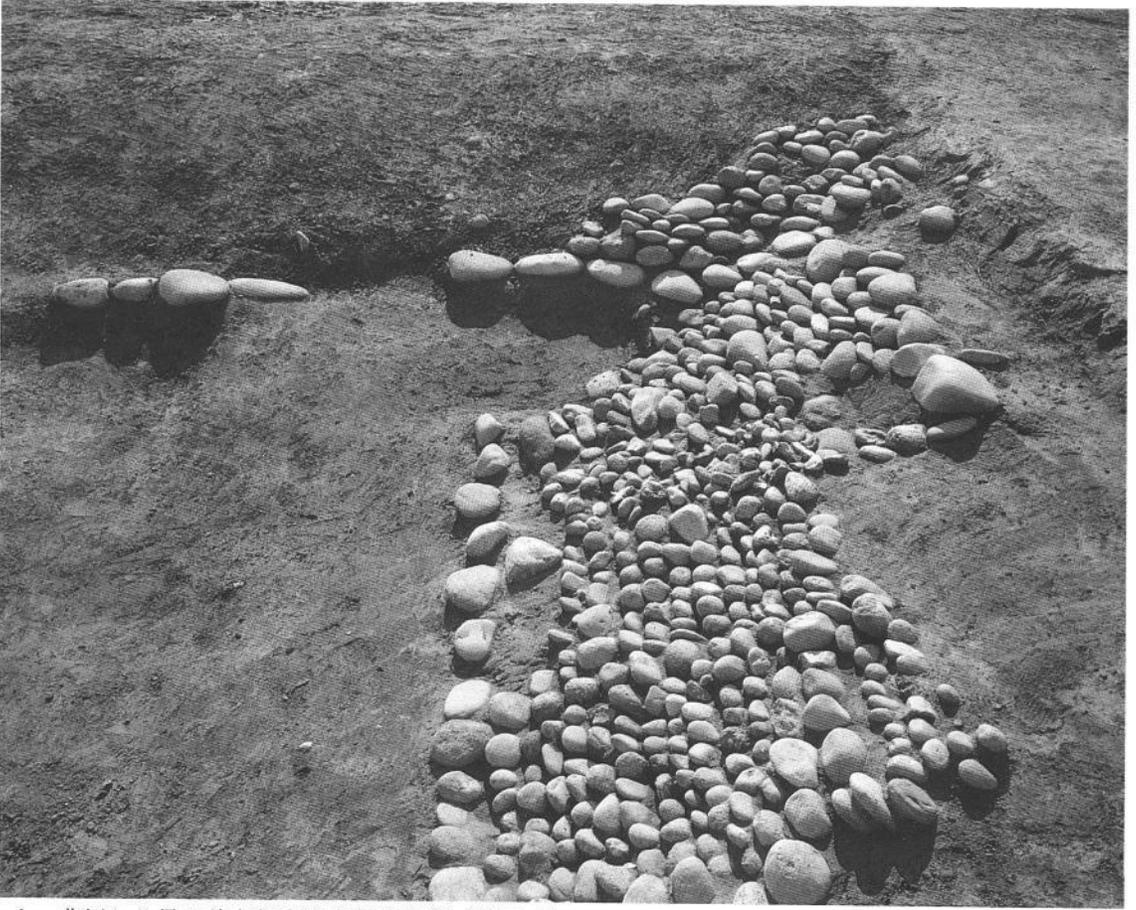
1. 東側から見た前方部外濠外縁（第5次）



2. 南側から見た前方部外濠西方の礫群



前方部内濠南西側隅角部と南側外縁部（第5次）



1. 北側から見た前方部内濠南西隅角部 (第5次)



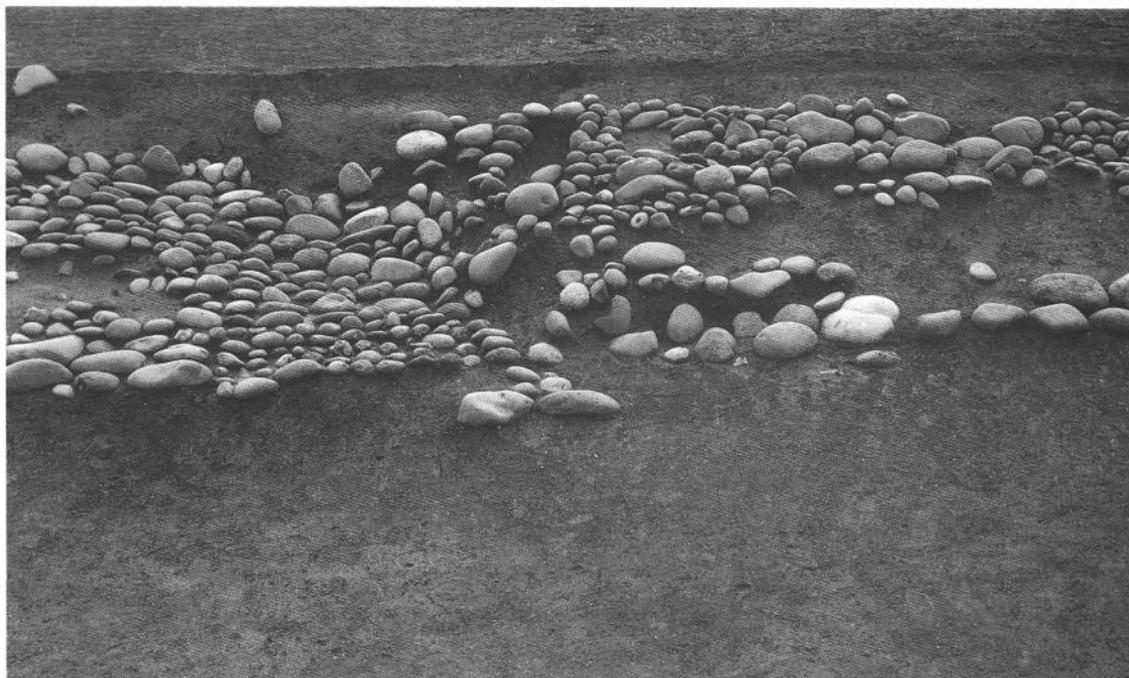
2. 東側から見た前方部内濠南西隅角部 (第5次)



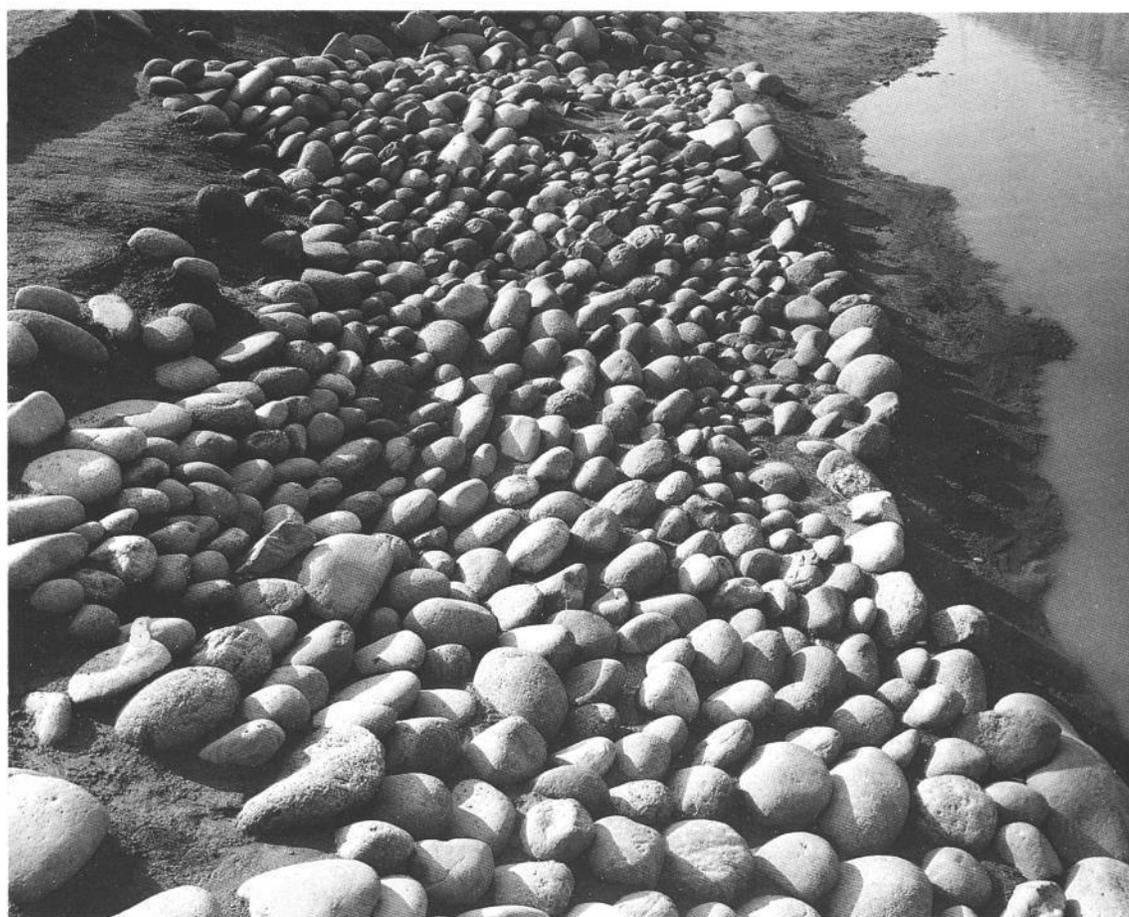
1. 南側から見た前方部内濠南西側外縁（第5次）



2. 南側から見た前方部内濠での作業工程（仕上り直前，第5次）



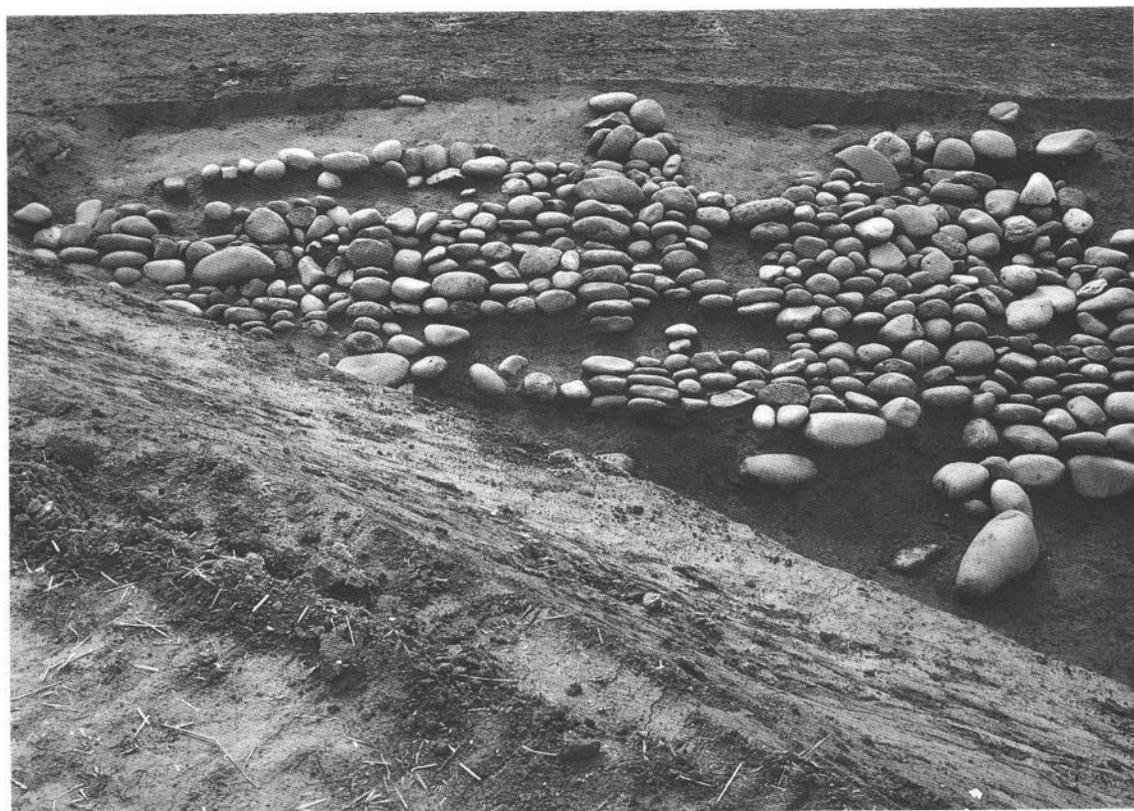
1. 前方部南側縁内濠外縁に見られる葺石間の段差（第5次）



2. 東側から見た前方部南側縁の内濠外縁細部（第5次）



1. 前方部南側縁内濠外縁 (第5次)



2. 前方部南側縁内濠外縁 (上図の東側, 第5次)



1. 北東側から見た前方部南西側の内堤隅角部（第5次）



2. 西側から見た前方部南西側外濠内縁（第5次）



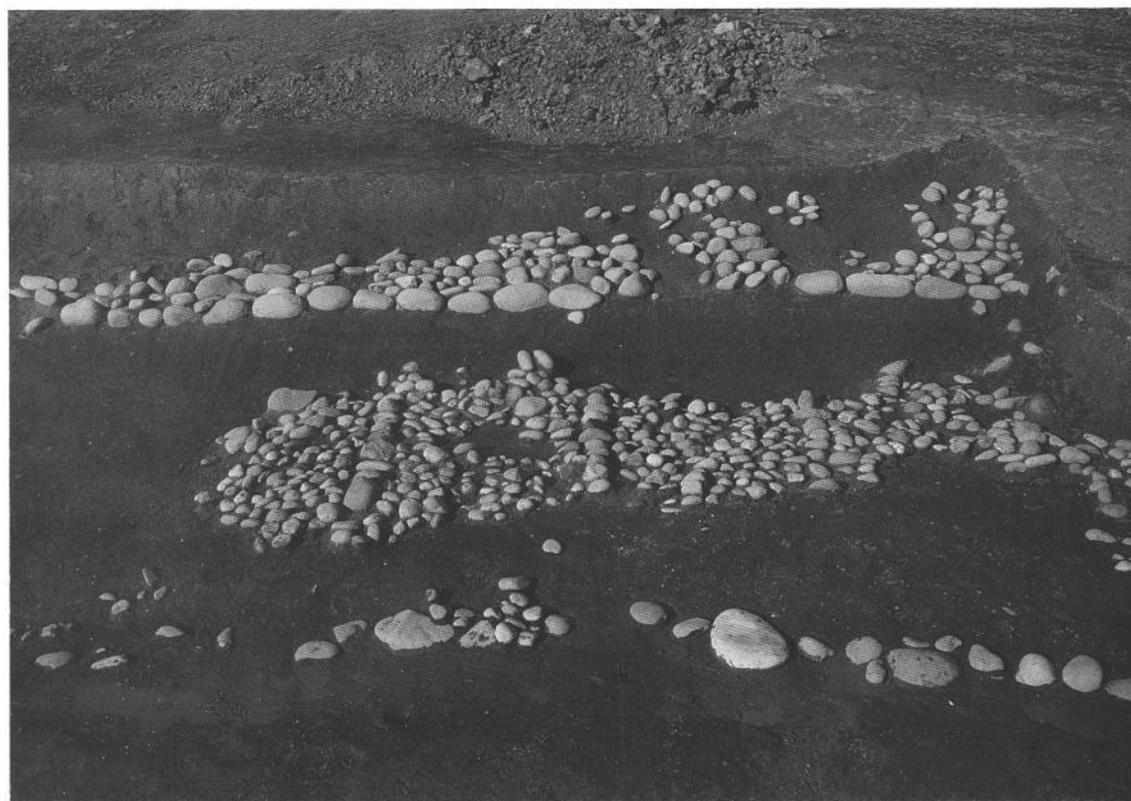
1. 南側から見た前方部南西側隅角部の周濠（第5次）



2. 前方部南側縁外濠内縁の構築状態（第5次）



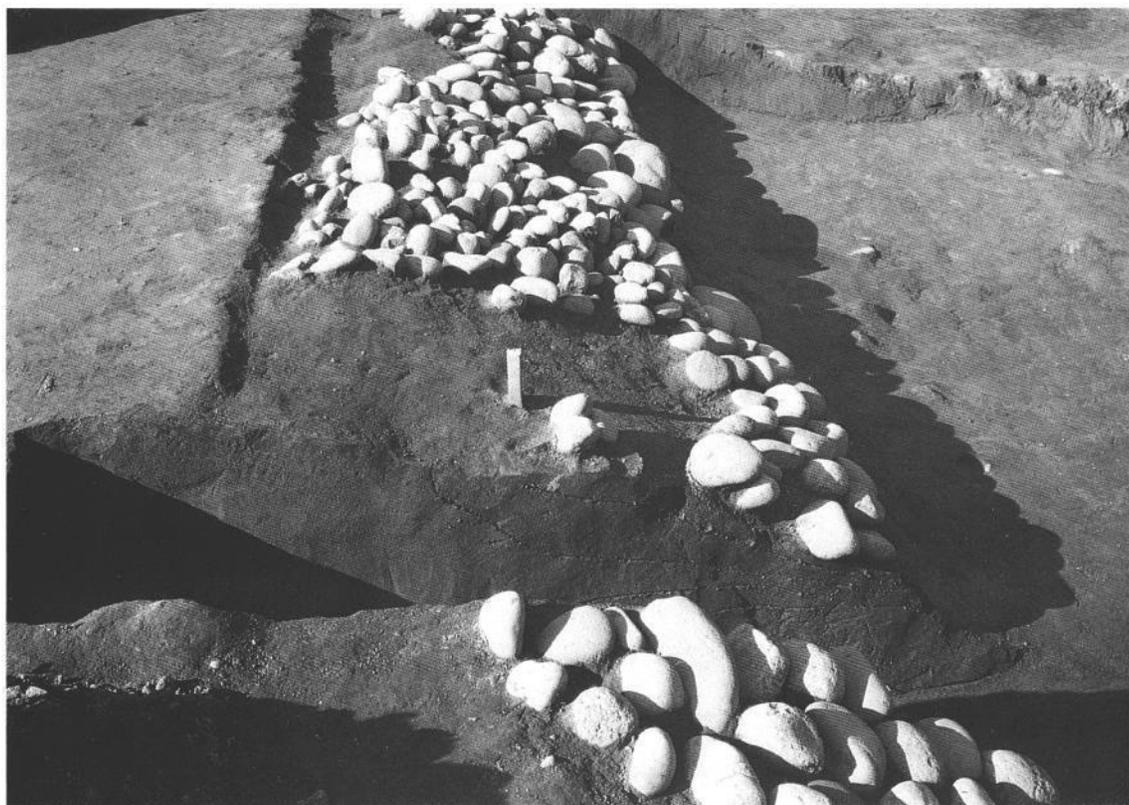
1. 南側から見た前方部南側縁外濠（第5次）



2. 南側から見た前方部南側縁東端（第5次）



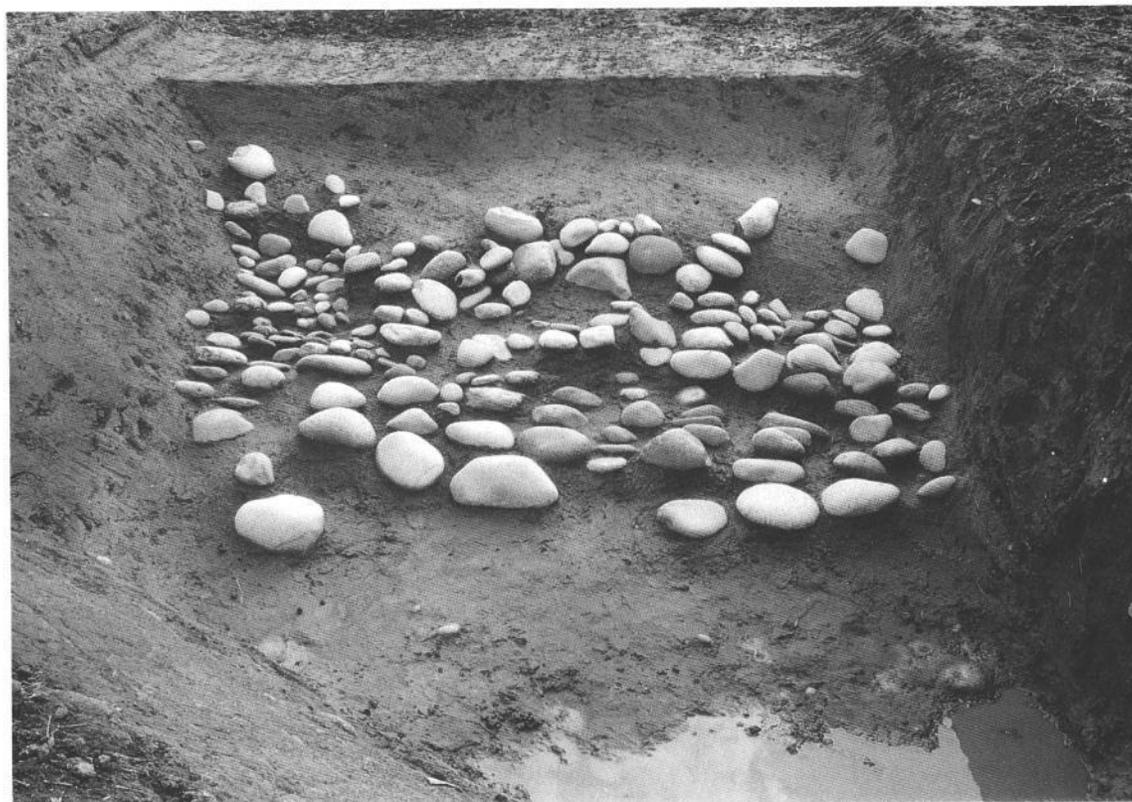
1. 北側から見た前方部南側縁外濠の外縁 (第5次)



2. 東側から見た内濠構築状態 (第5次)



1. 北側から見た南側外濠外縁 (第5次)



2. 北側から見た第10トレンチ (第5次)



1. 西側から見た前方部南側内堤の  
土壇（第5次）



2. 前方部石室横口部前面（第3次，金子文夫氏撮影）



1. 前方部石室の前壁



2. 前方部石室奥壁の石床



1. 後円部石室の現状



2. 西側から見た後円部石室（第2次，森貞次郎氏撮影）



25



57



1



3

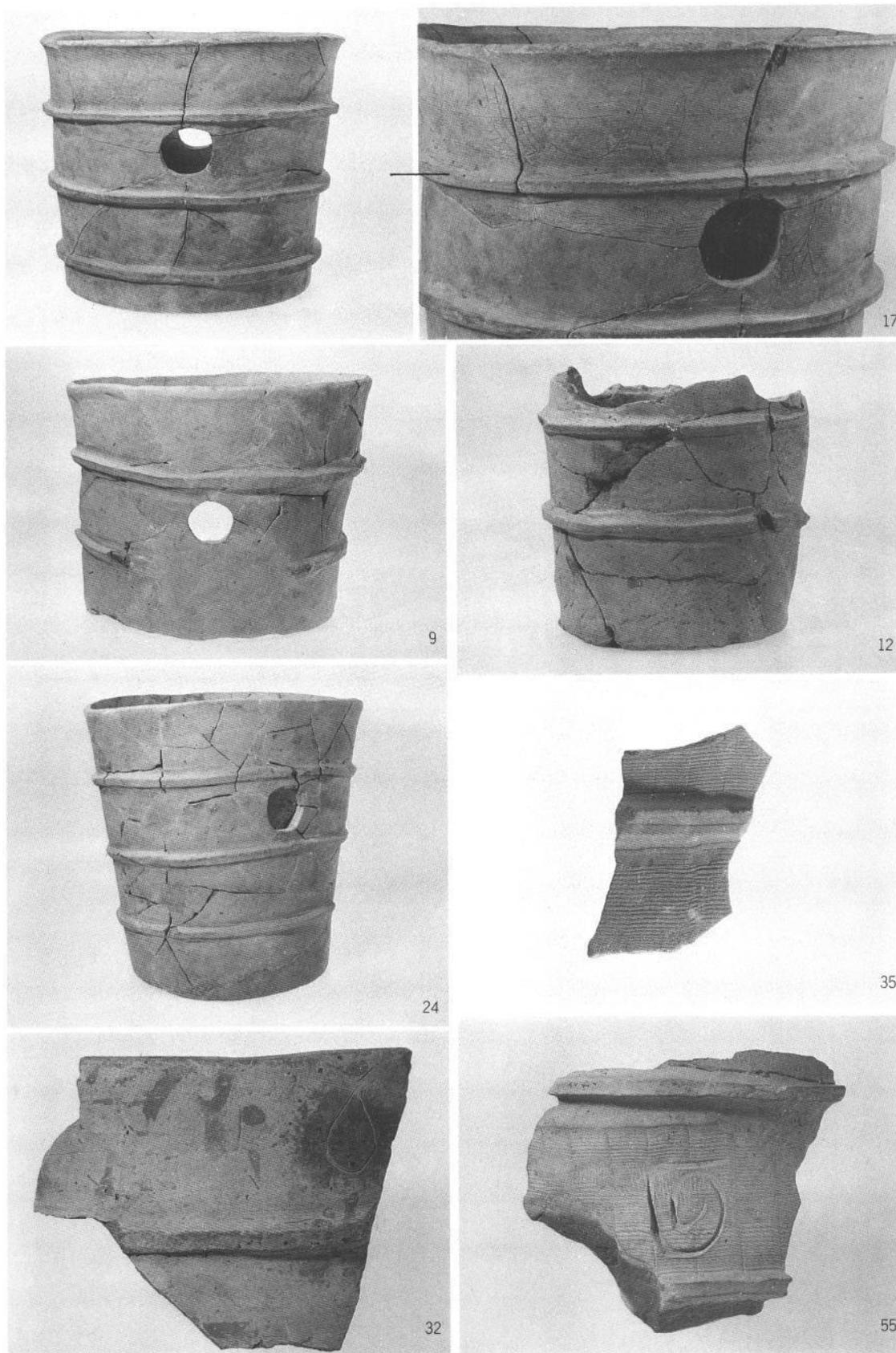


13

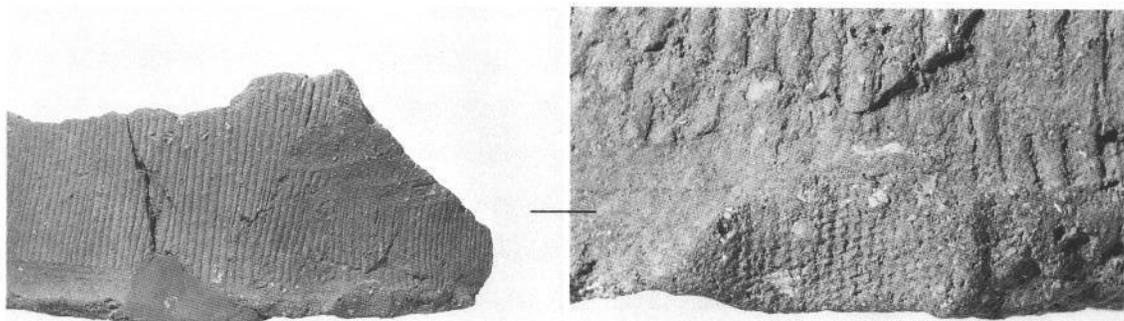


58

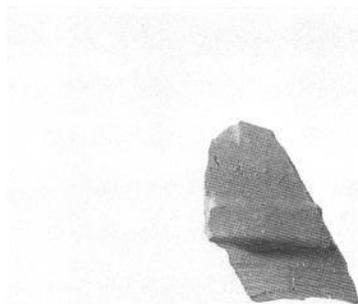
円筒埴輪 ①



円筒埴輪 ②



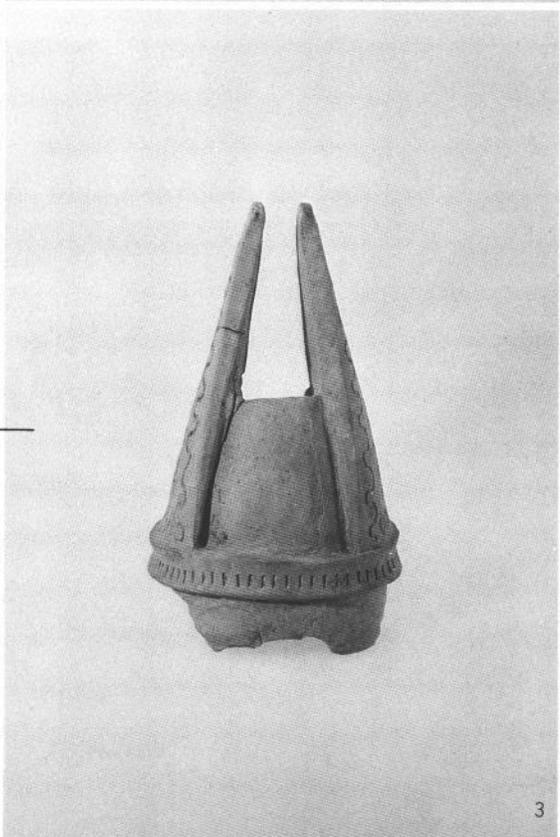
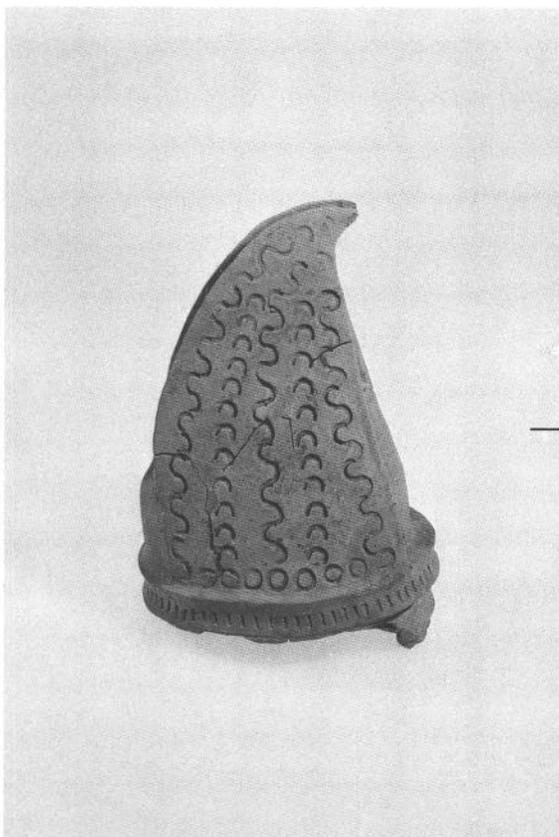
7



6



1

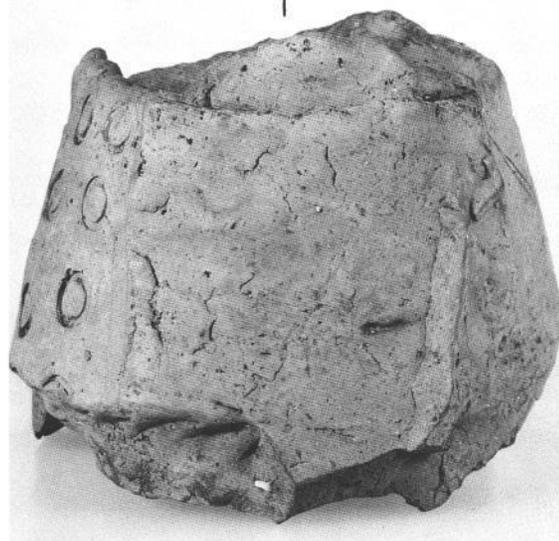


3

朝顔形埴輪・人物埴輪 ①



2



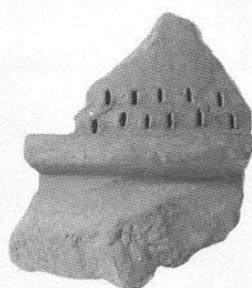
4



7



5



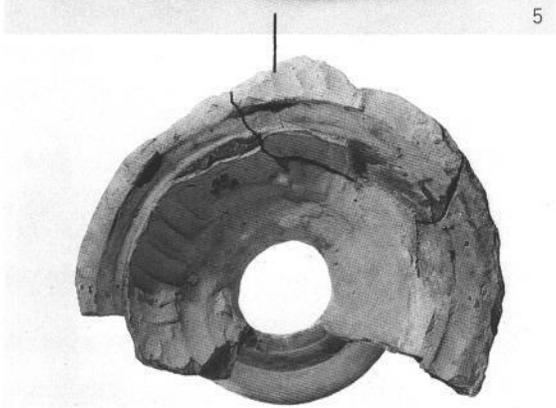
9



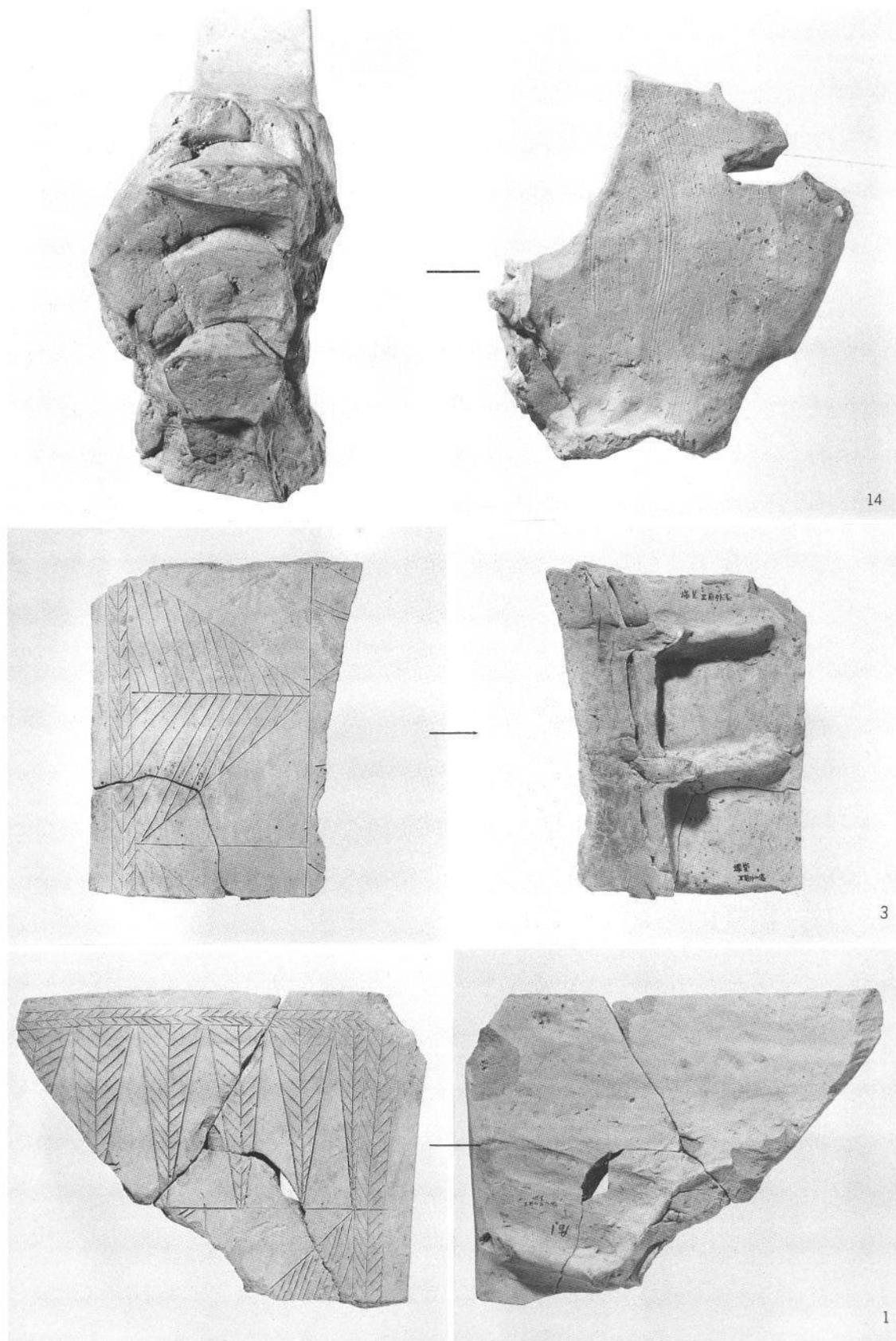
6



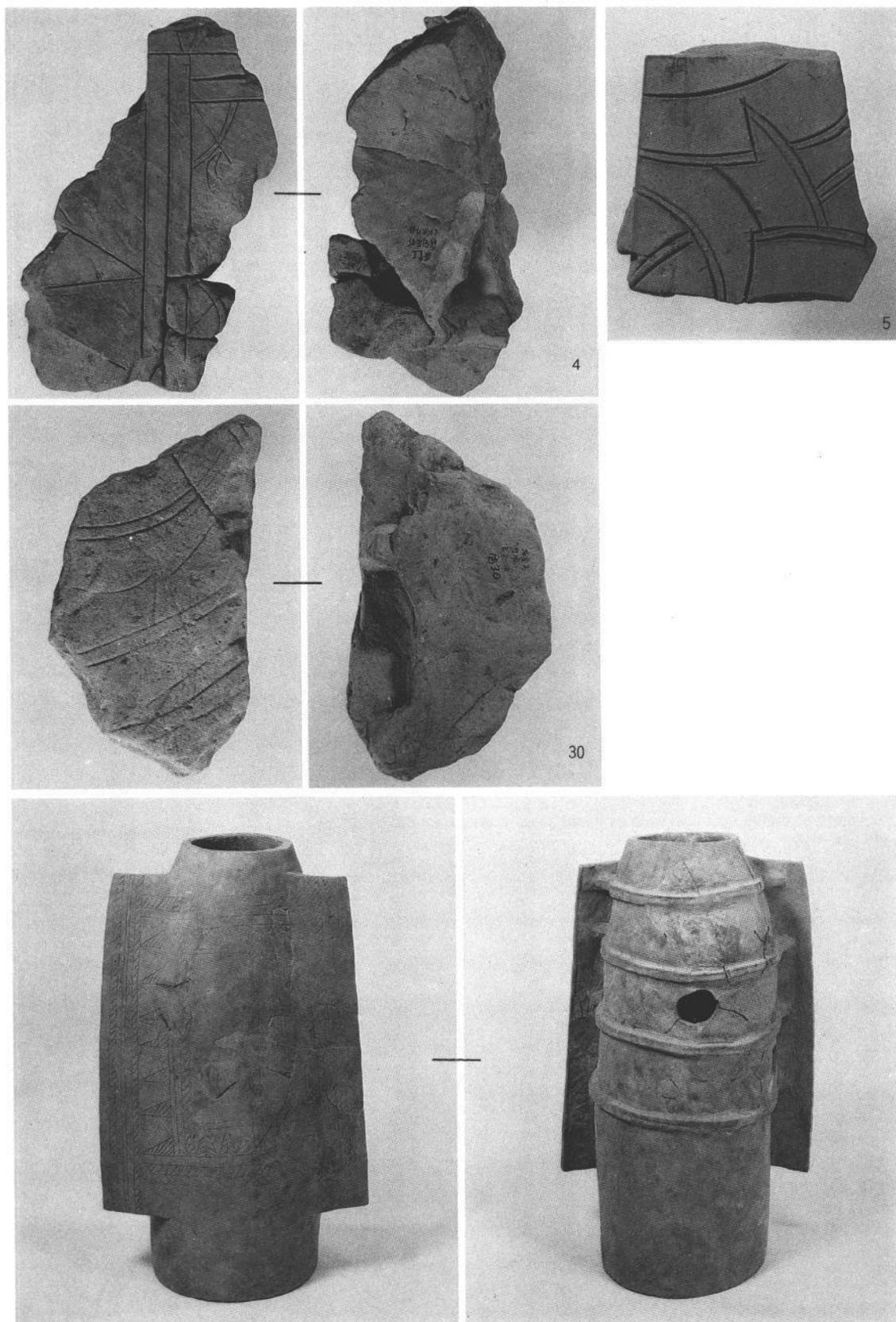
8



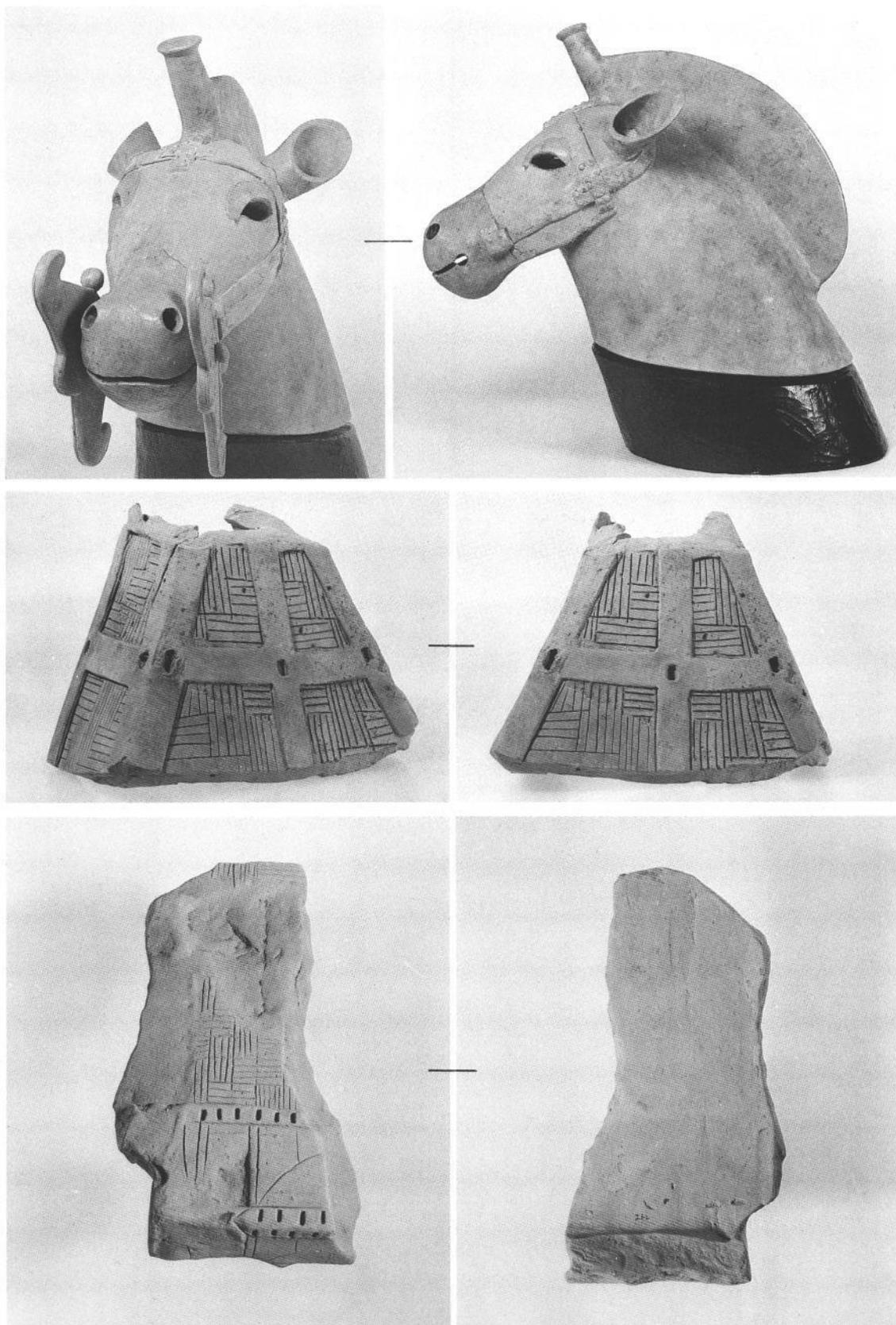
衣蓋形埴輪 ①



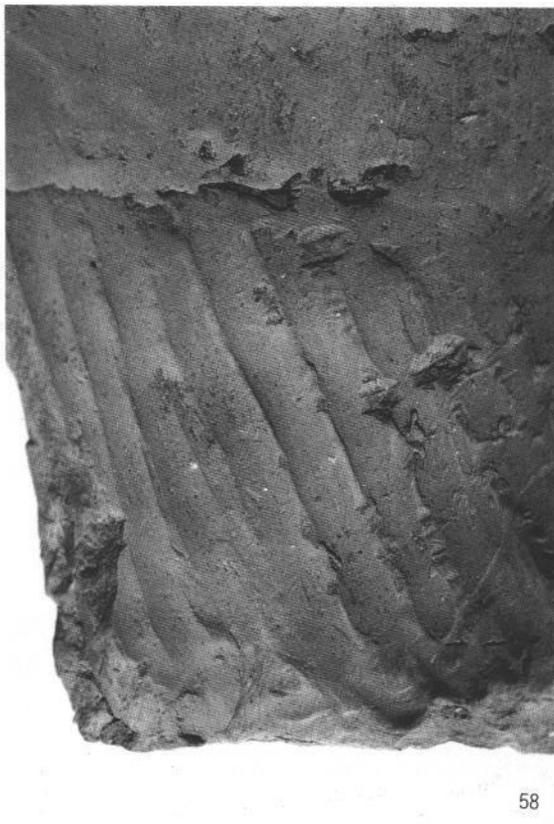
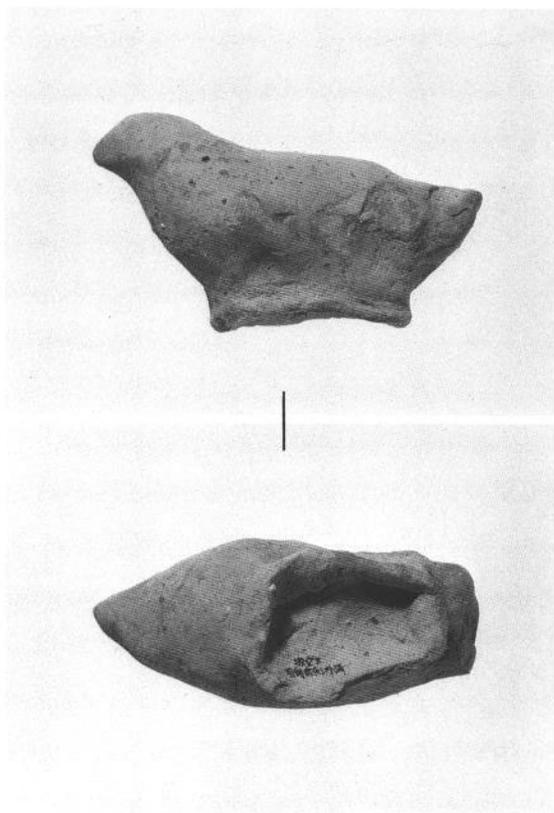
衣蓋形埴輪 ② · 盾形埴輪 ①



盾形埴輪 ②・盾持人形埴輪 (復元)



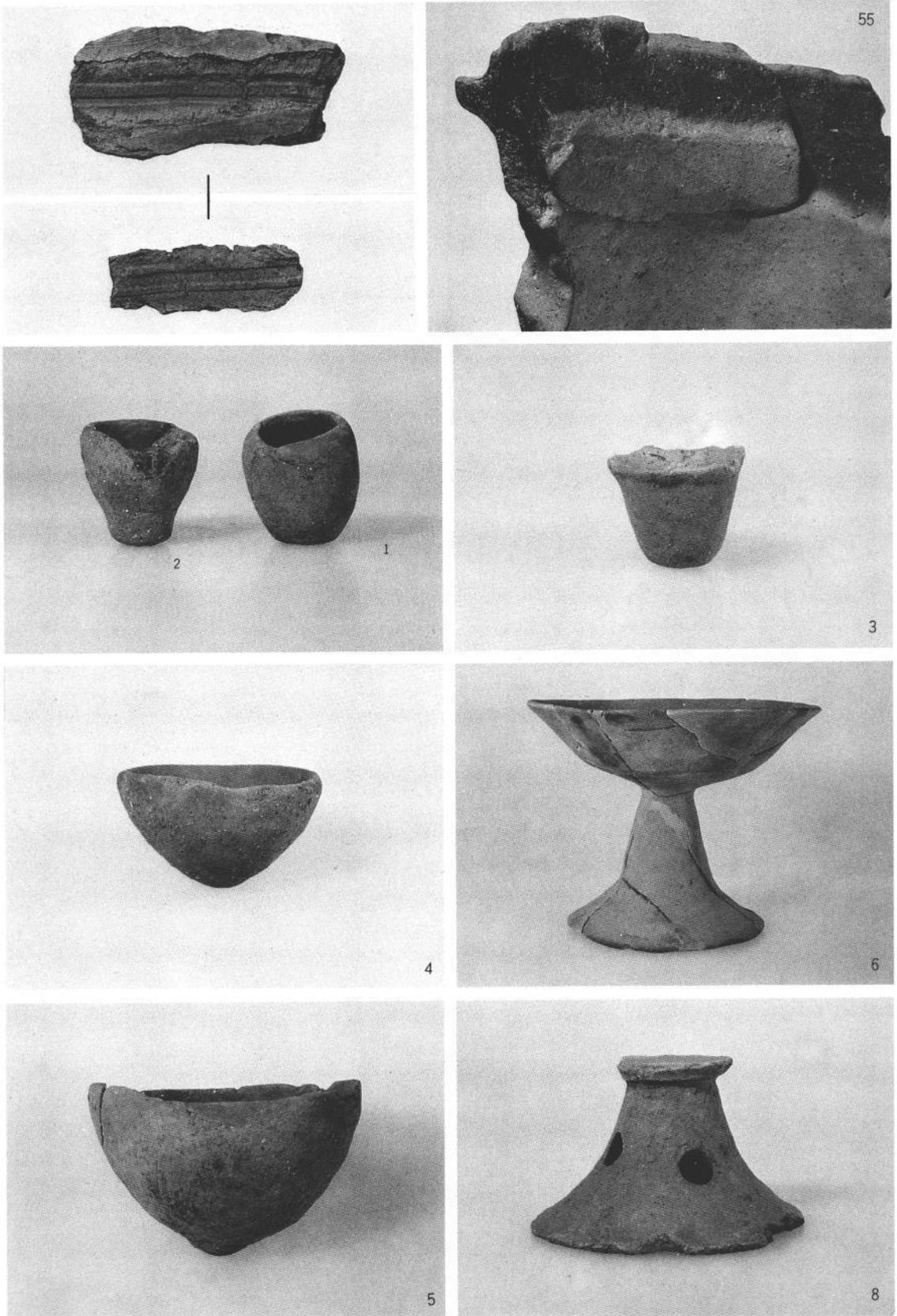
馬形・家形埴輪（復元）



57

58

動物埴輪と円筒埴輪内面



円筒埴輪の成形法と出土土器



1. B地区全景（西から）



2. B地区全景（東から）



1. 1号住居跡遺物出土状態（東から）



2. 1号住居跡カマド検出状態（東から）

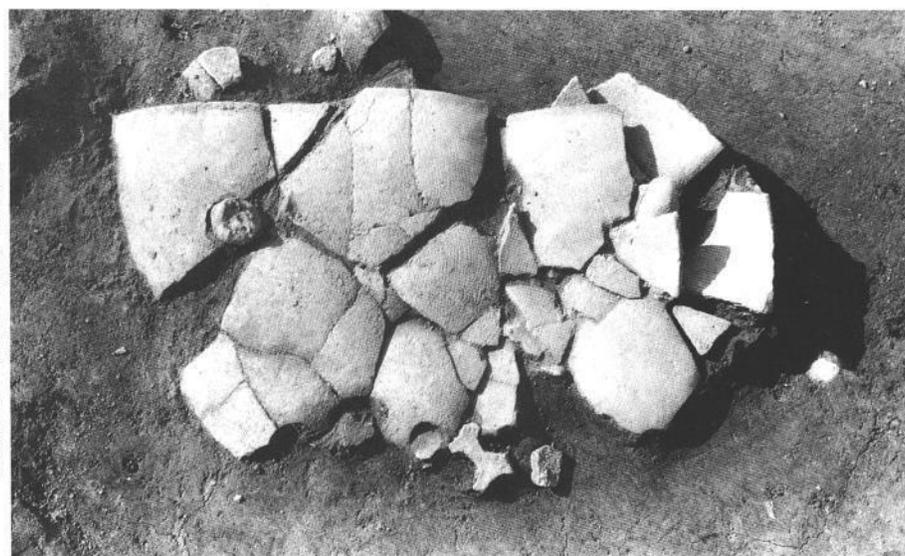
1  
1号住居跡遺物(第54図9) 出土状態



2  
1号住居跡遺物(第55図10) 出土状態



3  
1号住居跡遺物(第57図26) 出土状態

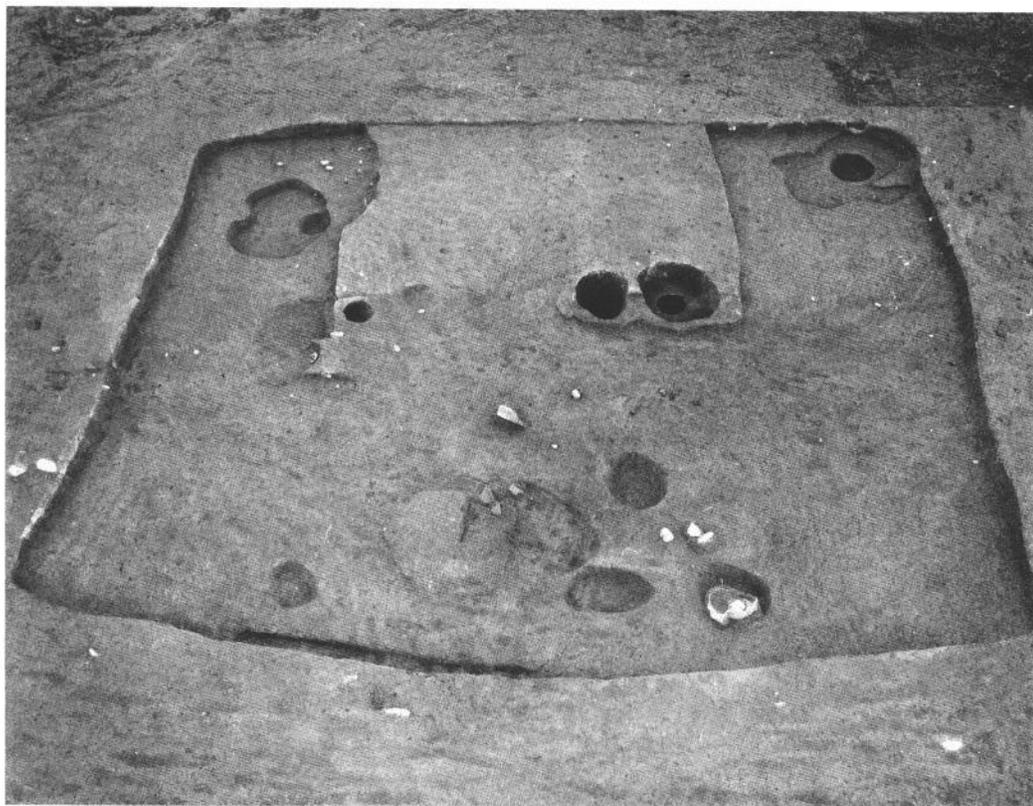




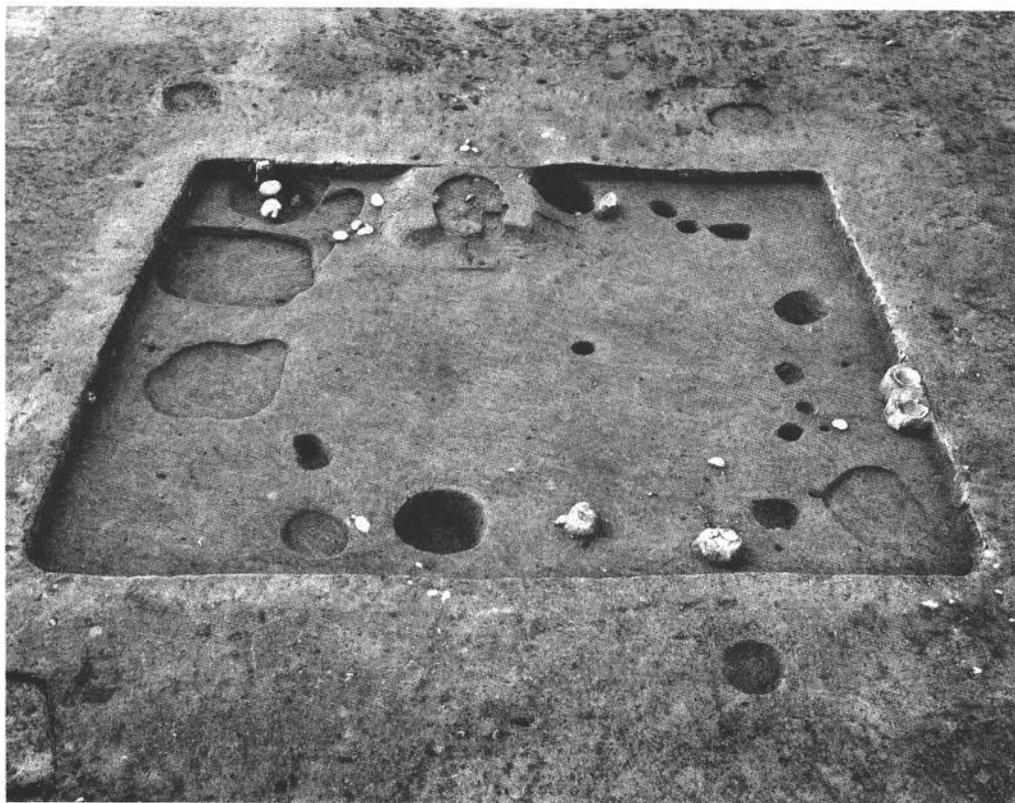
1. 1号住居跡・4号住居跡遺物出土状態（東から）



2. 1号住居跡張床下状態・4号住居跡（東から）



1. 2号住居跡（南から）



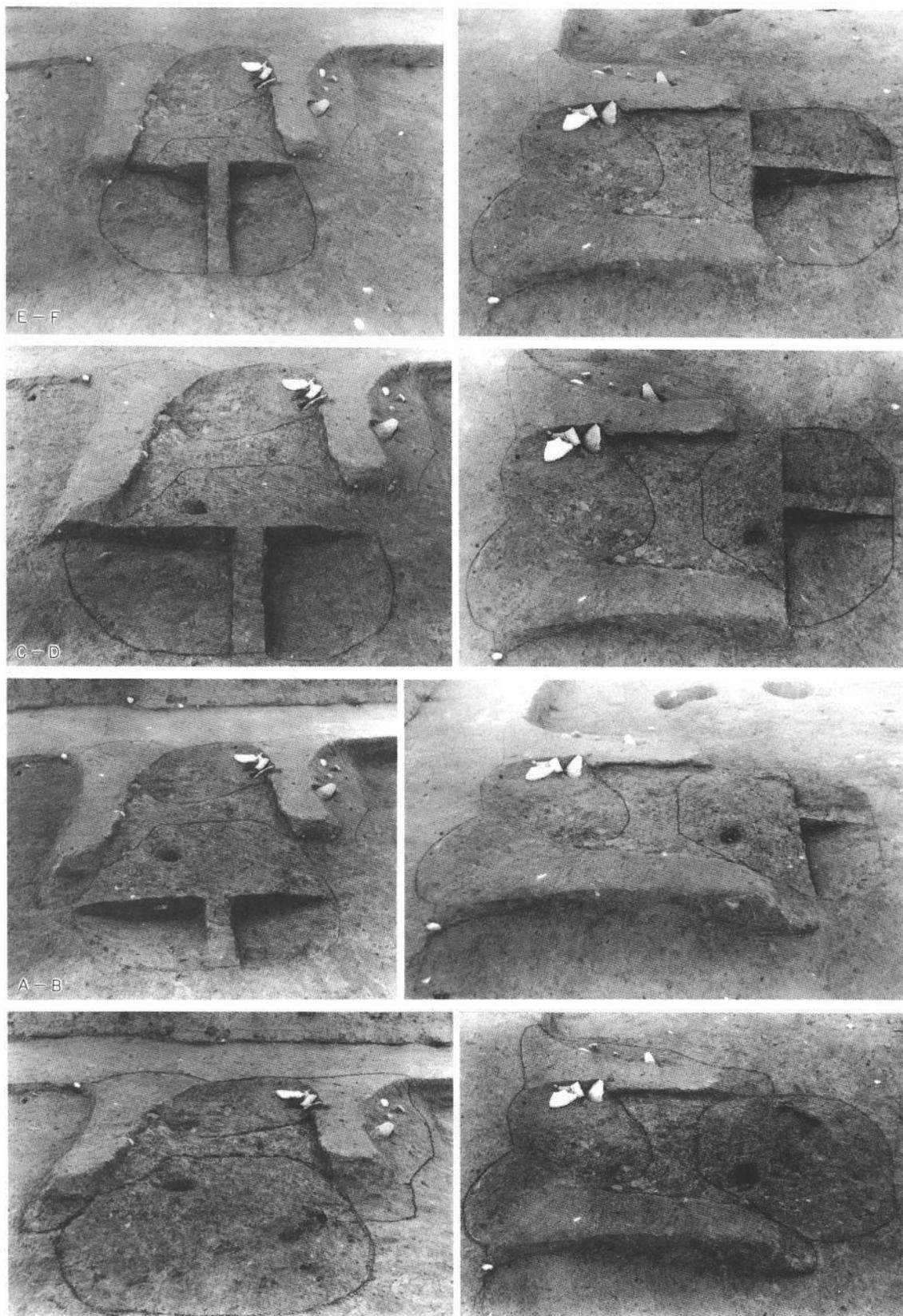
2. 3号住居跡（東から）



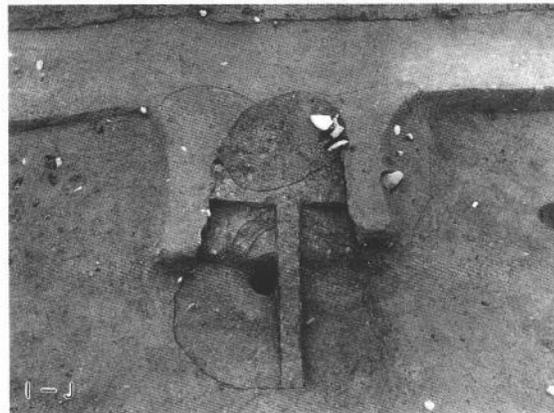
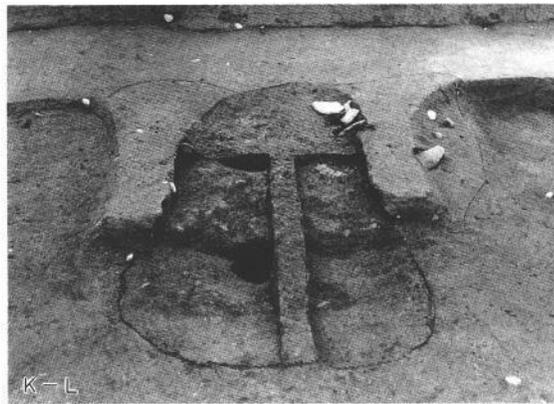
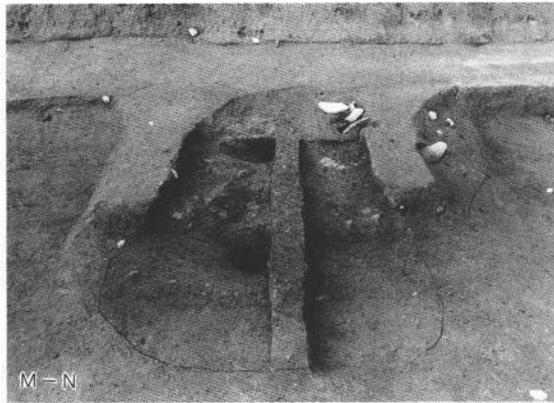
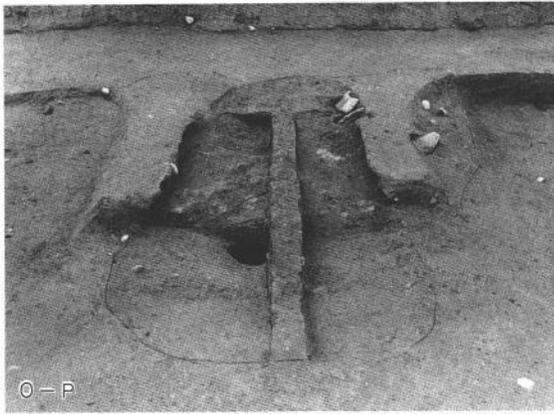
1. 1号住居跡カマド検出状態（東から）



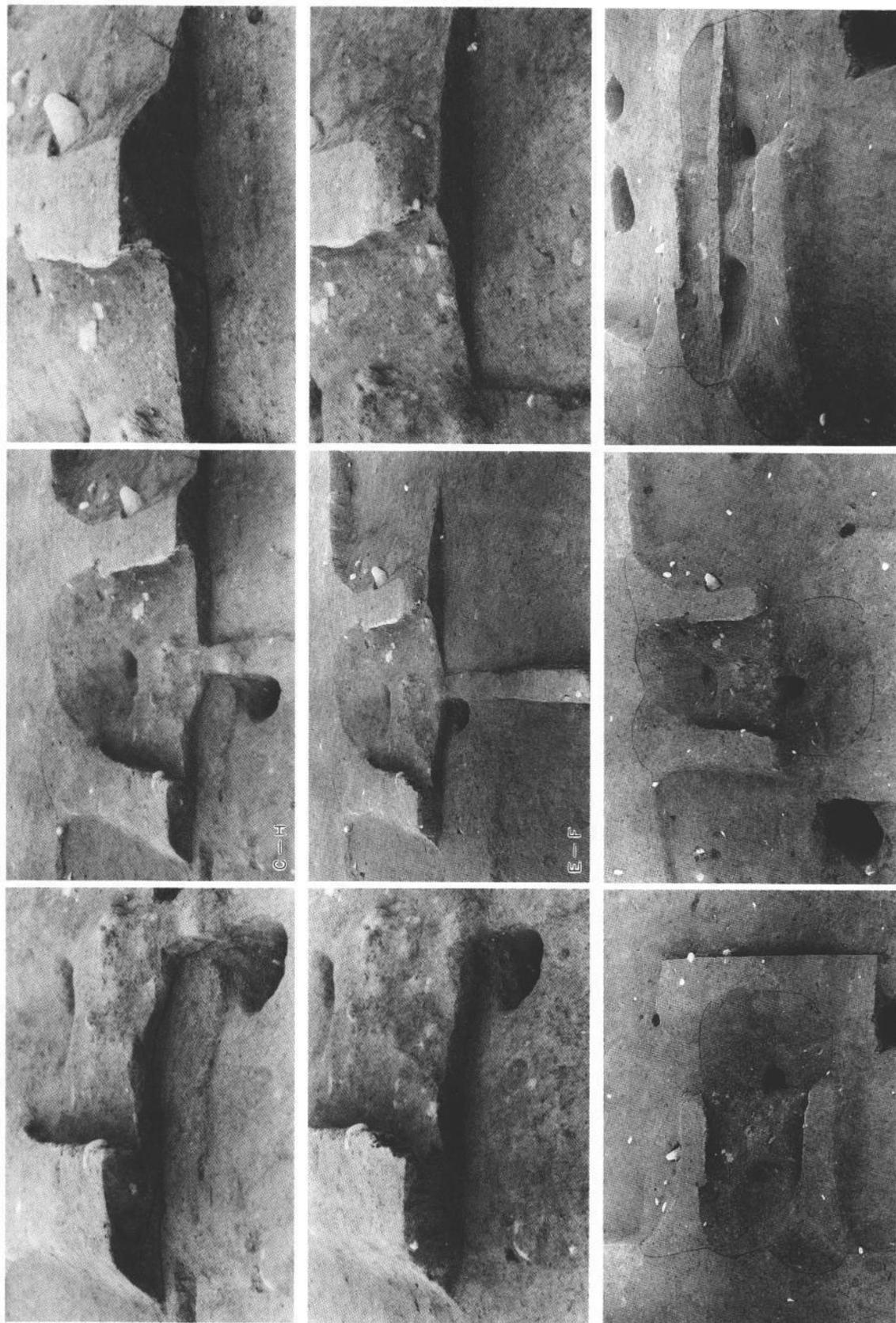
2. 1号住居跡カマド発掘後状態（東から）



1号住居跡カマド発掘状態 ① (アルファベットは第53図に一致)

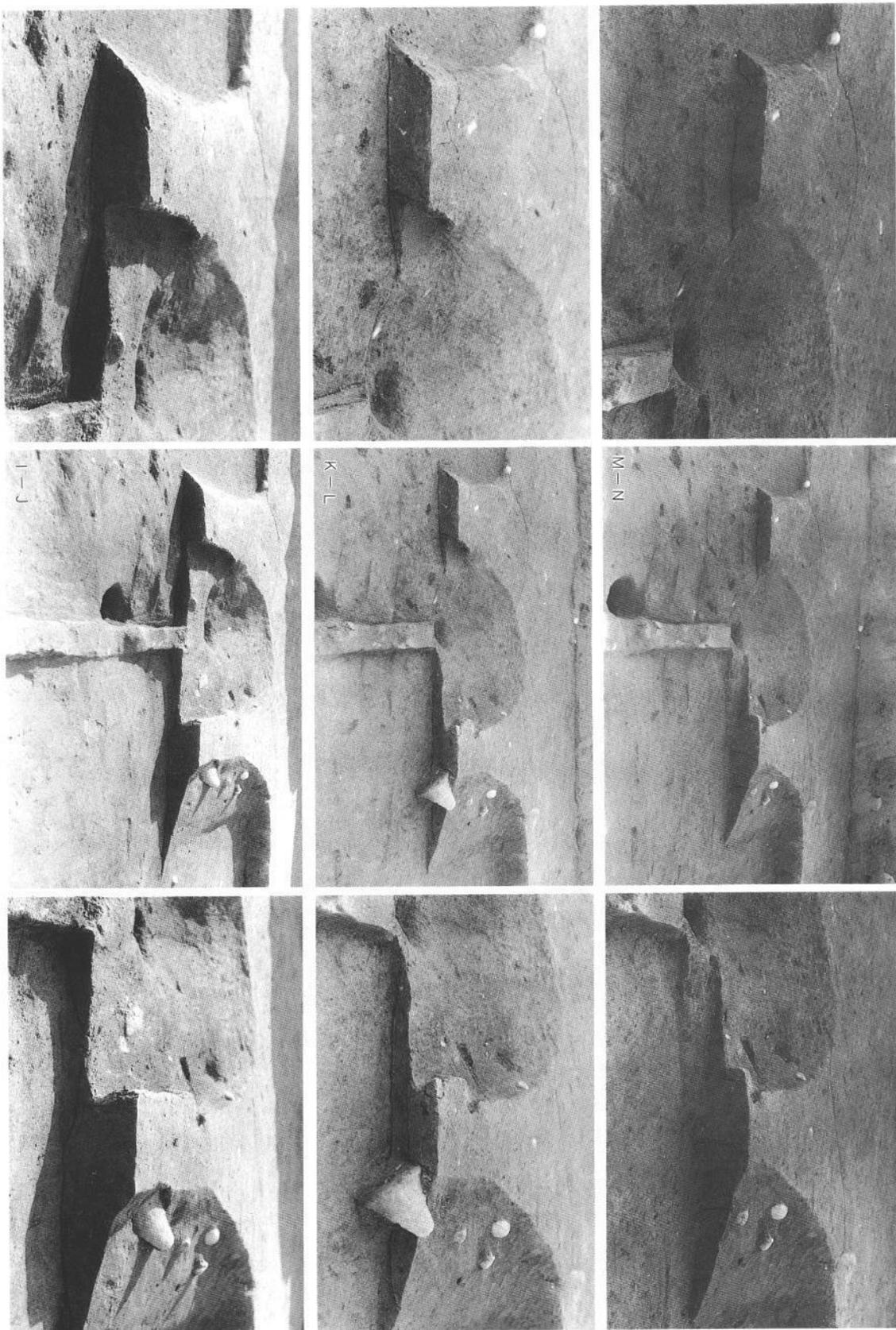


1号住居跡カマド発掘状態 ②

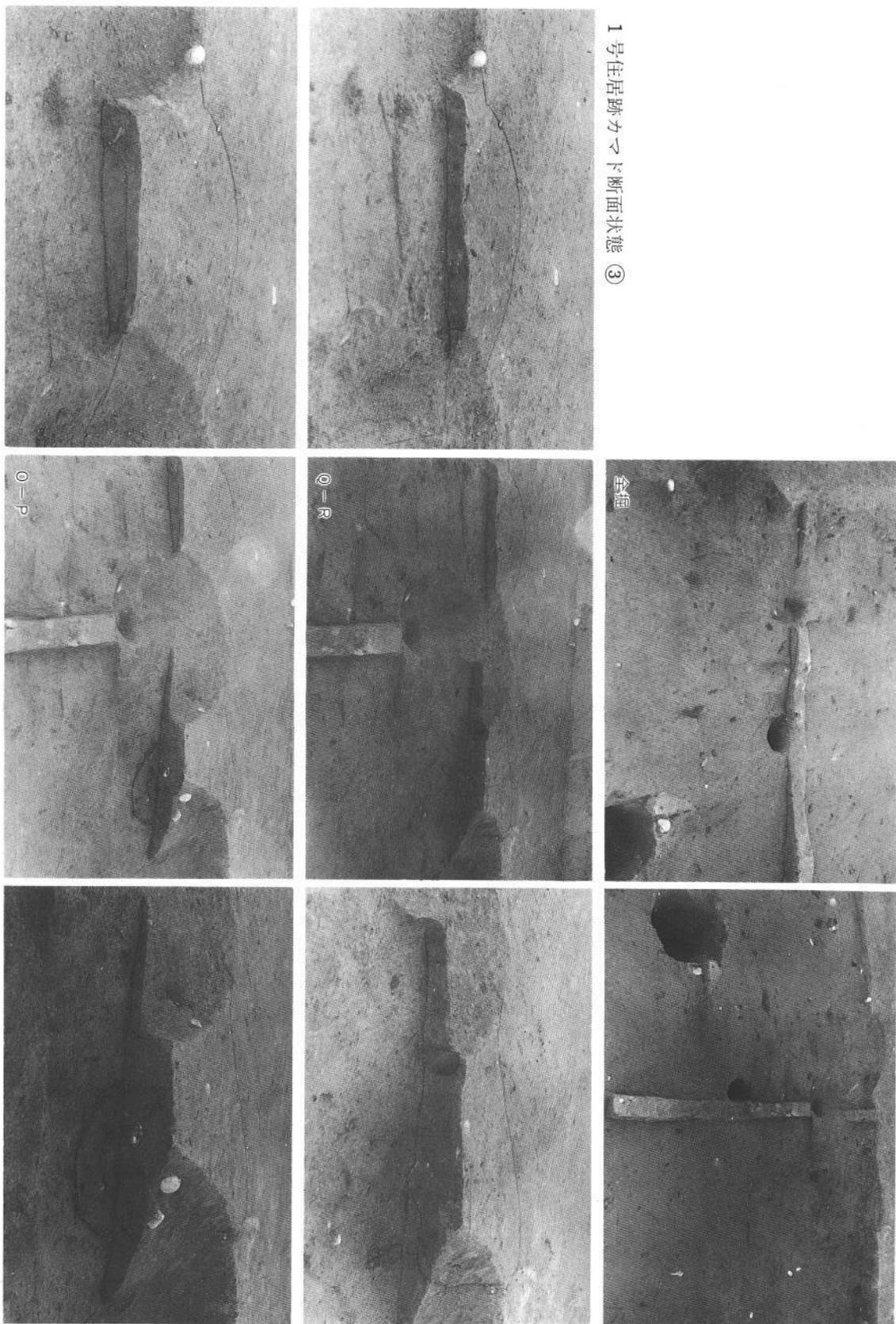


1号住居跡カマド断面状態①（アルファベットは第53図に一致）

1号住居跡カマド断面状態②



1号住居跡カマド断面状態 ③





1. 3号住居跡カマド検出状態（東から）



2. 3号住居跡カマド検出状態（南から）



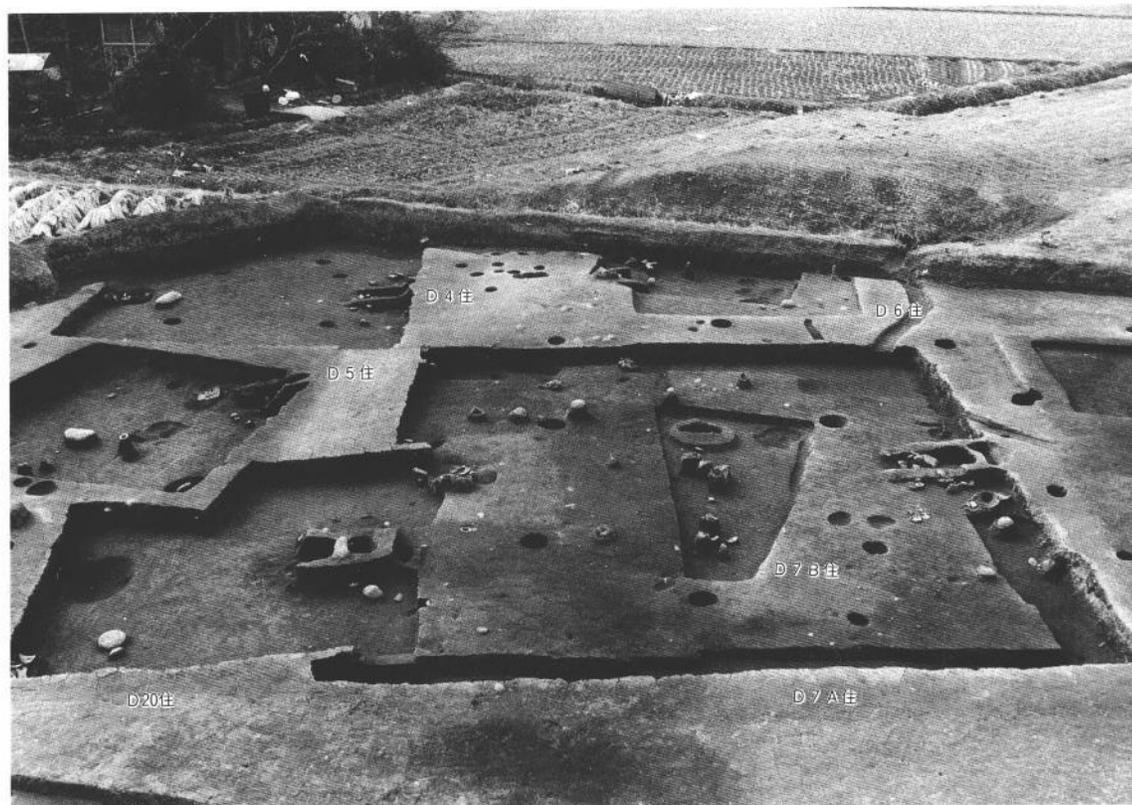
1. 3号住居跡カマド（東から）



2. 3号住居跡カマド（南から）



1. 3号掘立柱建物跡（南から）



2. D地区住居跡出土状態（東から）



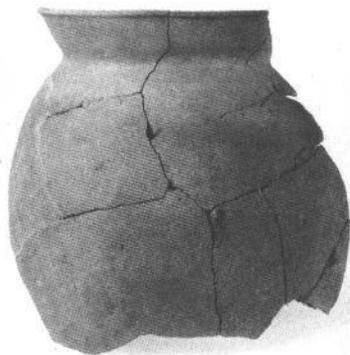
1. B地区発掘作業寸景（降雨対策）



2. B地区情景（大雨水没状態）



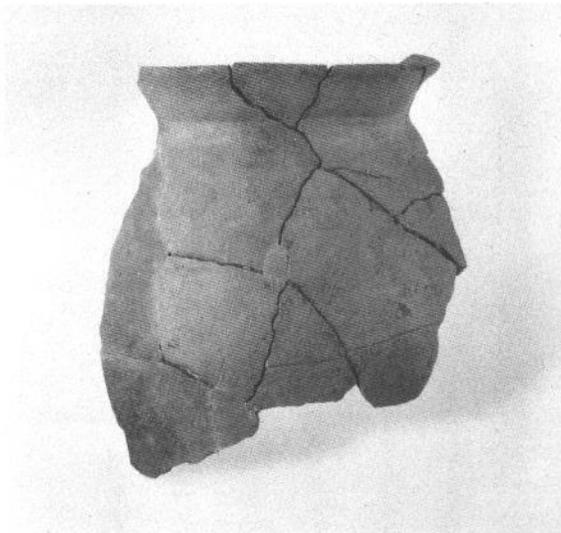
5



10



15

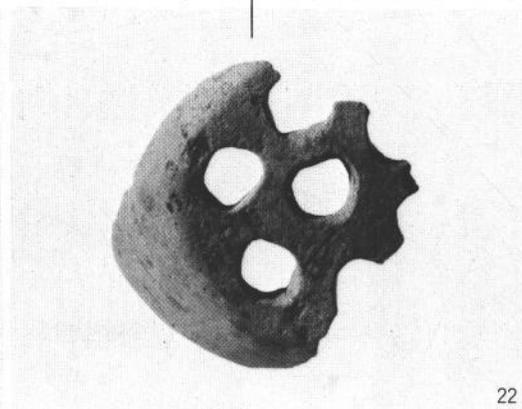
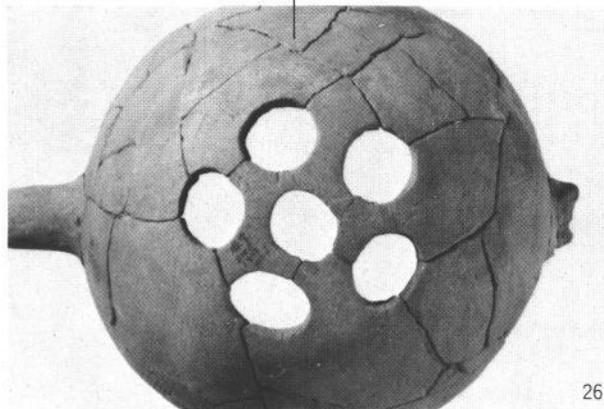
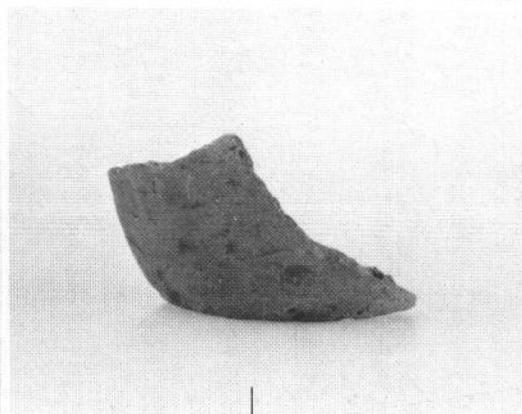
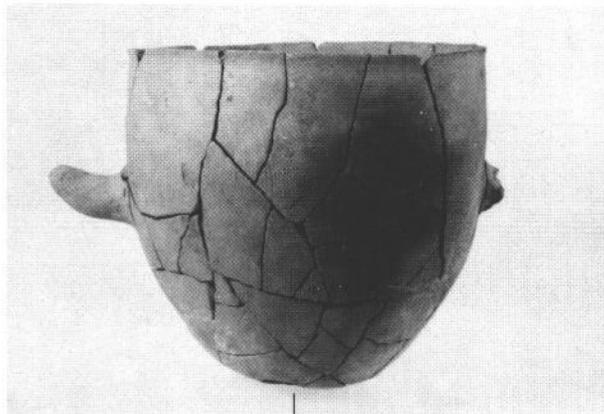
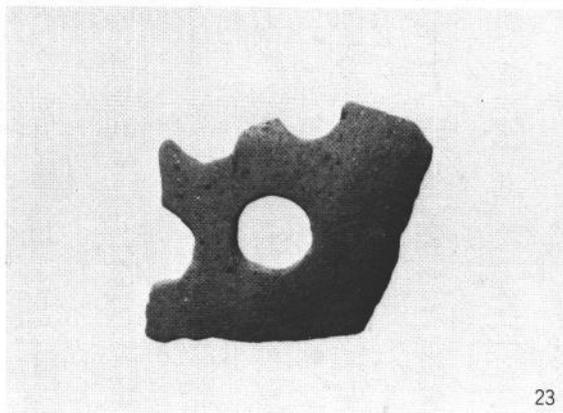
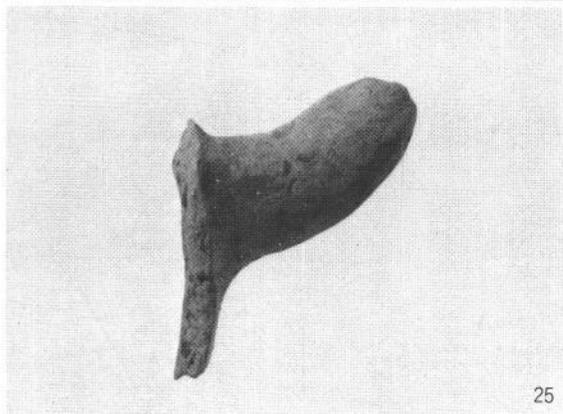
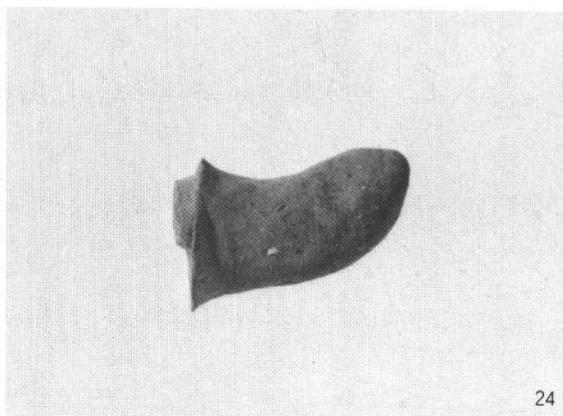


11

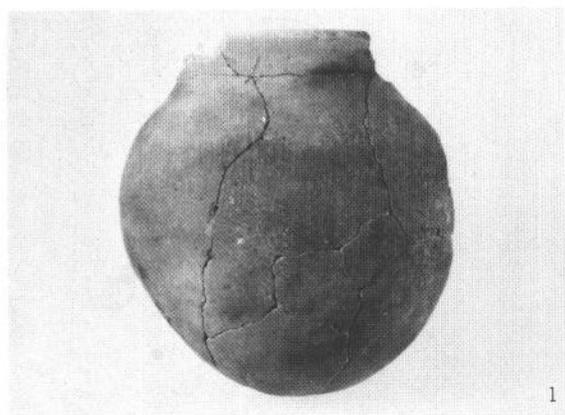


9

1号住居跡出土土器 ①

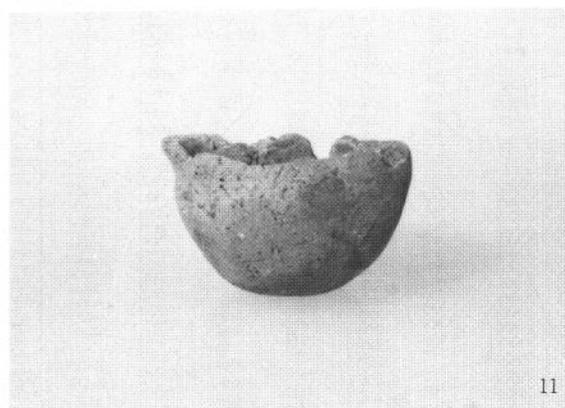


1号住居跡出土土器 ②



1

2号住居跡出土土器（上）



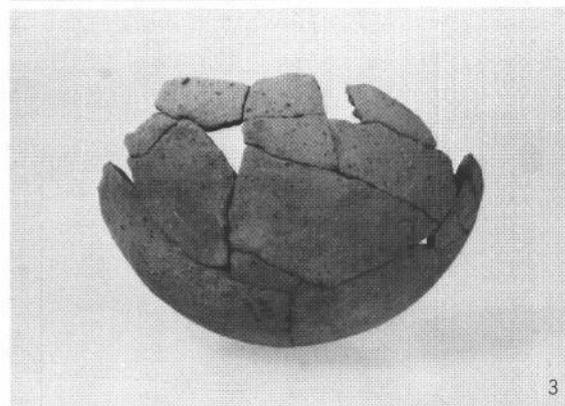
11

3号住居跡出土土器（中）



10

4号住居跡出土土器（下）



3



9



1



8



1. 溝状遺構全景（東から）



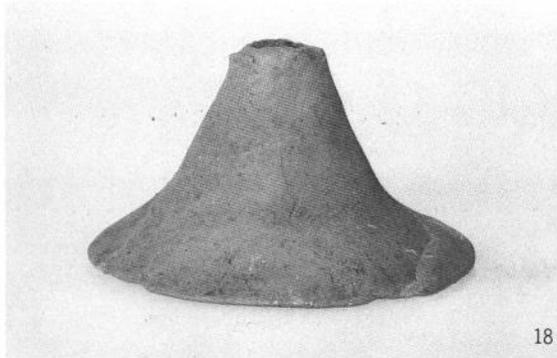
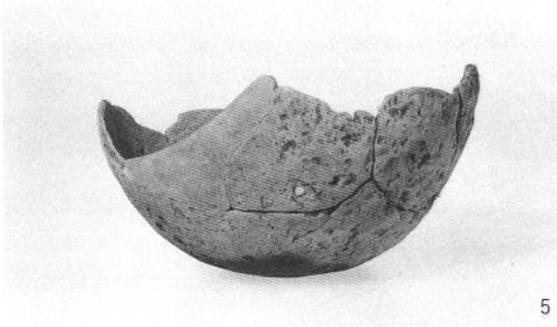
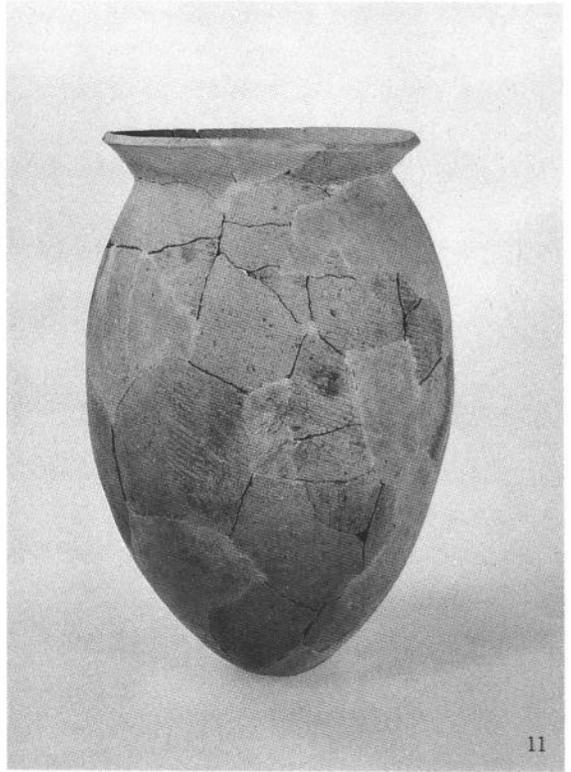
2. 溝状遺構全景（西から）



1. 大溝全景（北から）



2. 大溝と大溝支流1の南部（北から）



大溝出土土器



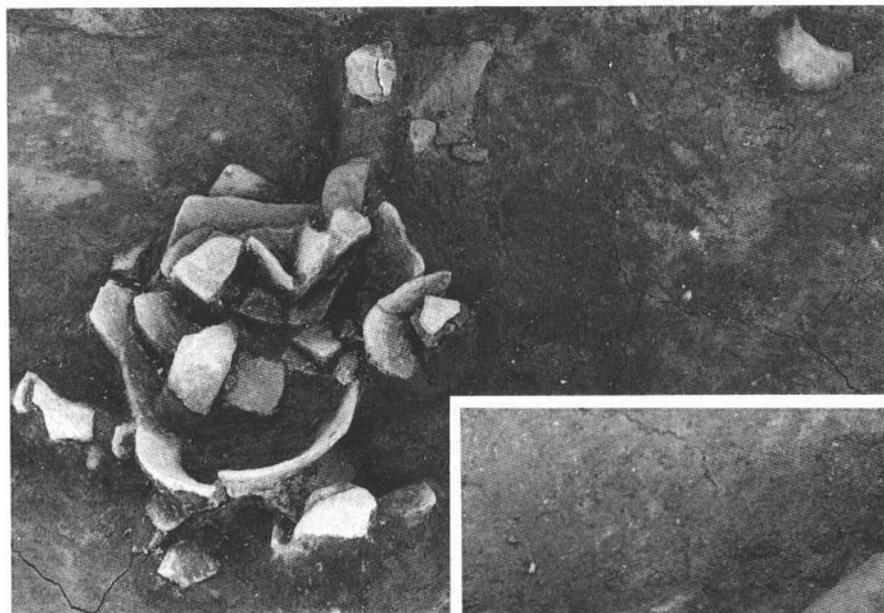
1. 大溝支流1と大溝支流2全景（北から）



2. 大溝支流1 南部の遺物出土状態（北から）



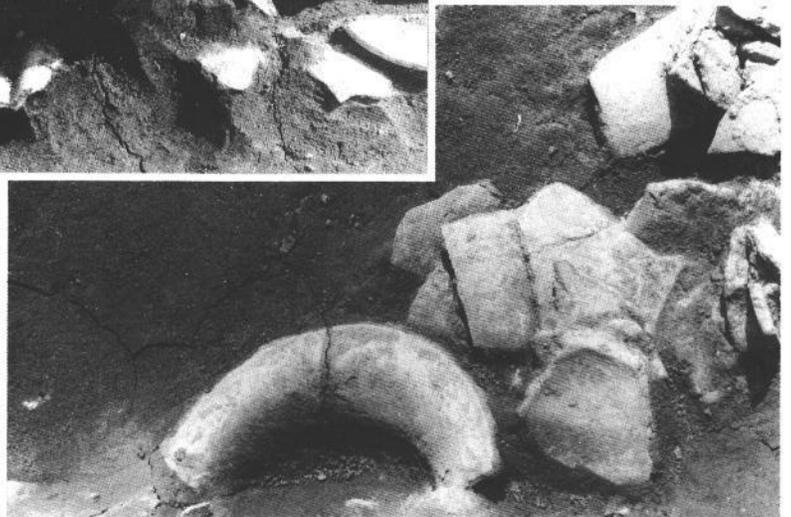
1. Aトレンチ大溝支流1 遺物出土状態（北から）



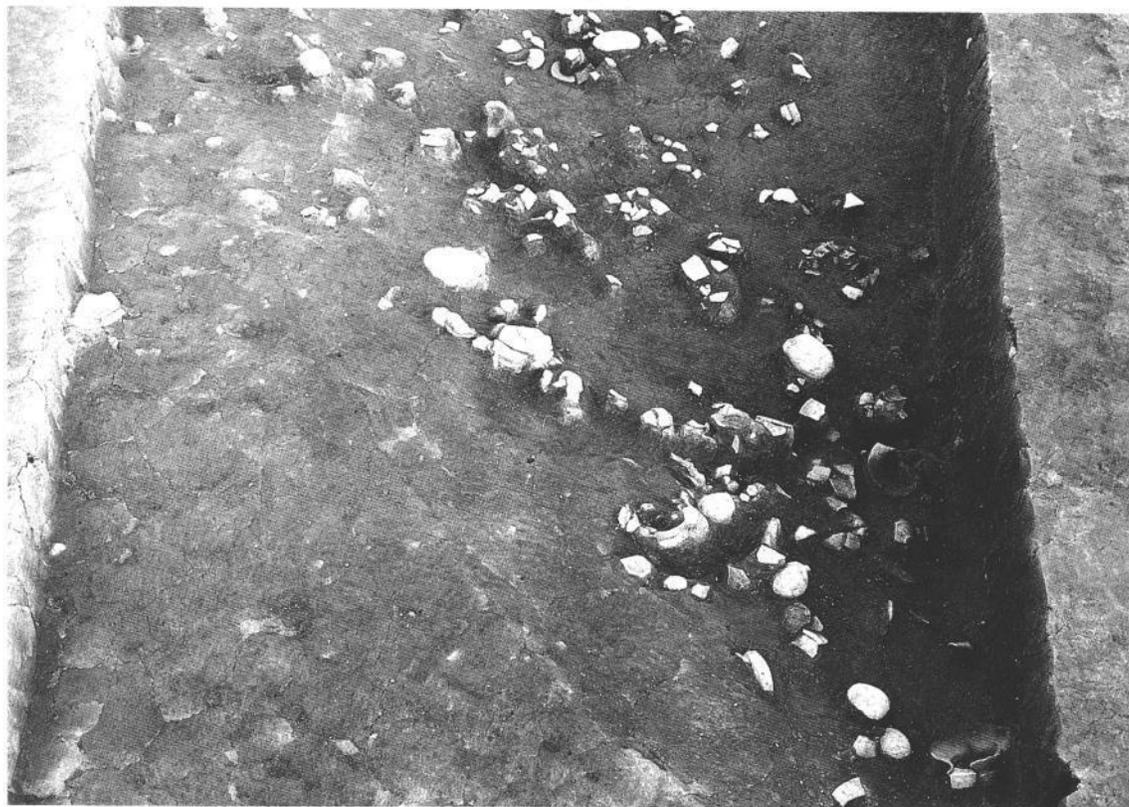
2. Aトレンチ大溝支流1 細部



1. Bトレンチ大溝支流1 遺物出土状態 (西から)



2. Bトレンチ大溝支流1 遺物出土状態細部



1. Cトレンチ大溝支流 1 遺物出土状態 (西から)



2. Cトレンチ大溝支流1 遺物出土状態細部



1. 大溝支流1を埋める整地層（上、Dトレンチ南壁、下、Dトレンチ北壁）



2. 大溝支流1の北部（南から）



1. 大溝と大溝支流2（南から）



2. 大溝支流2（北から）



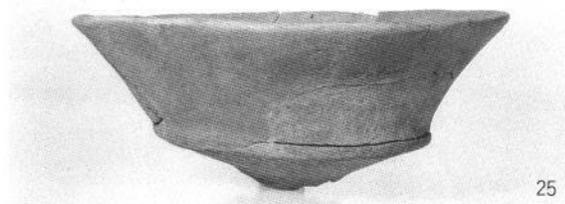
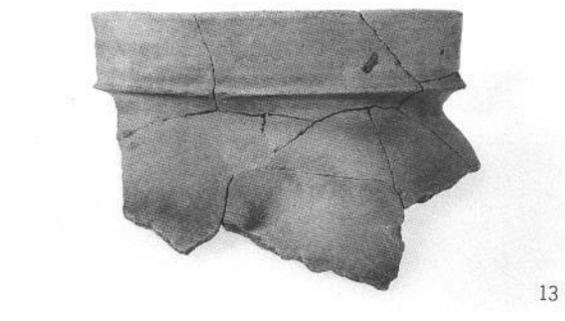
1. 大溝支流 2 遺物出土状況 (西から)



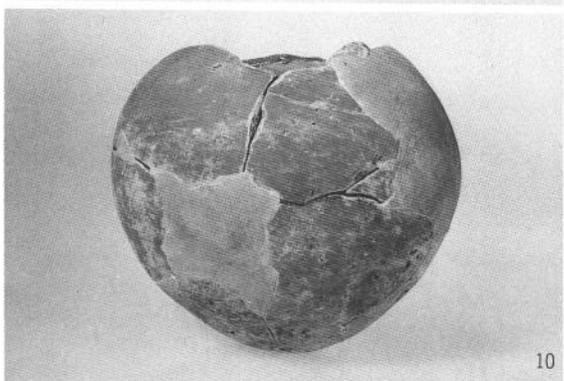
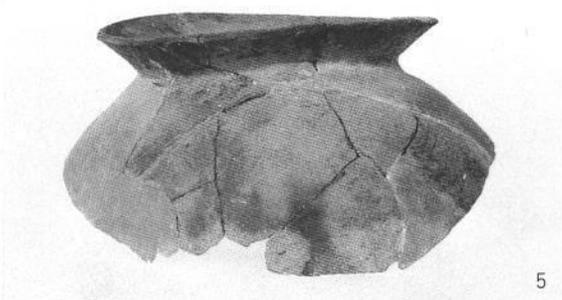
2. 大溝支流 2 遺物出土状態細部



大溝支流1出土土器 ①



大溝支流1 出土土器 ②



大溝支流1・支流2出土土器



1. 塚堂古墳前方部前縁外濠外縁（西から）



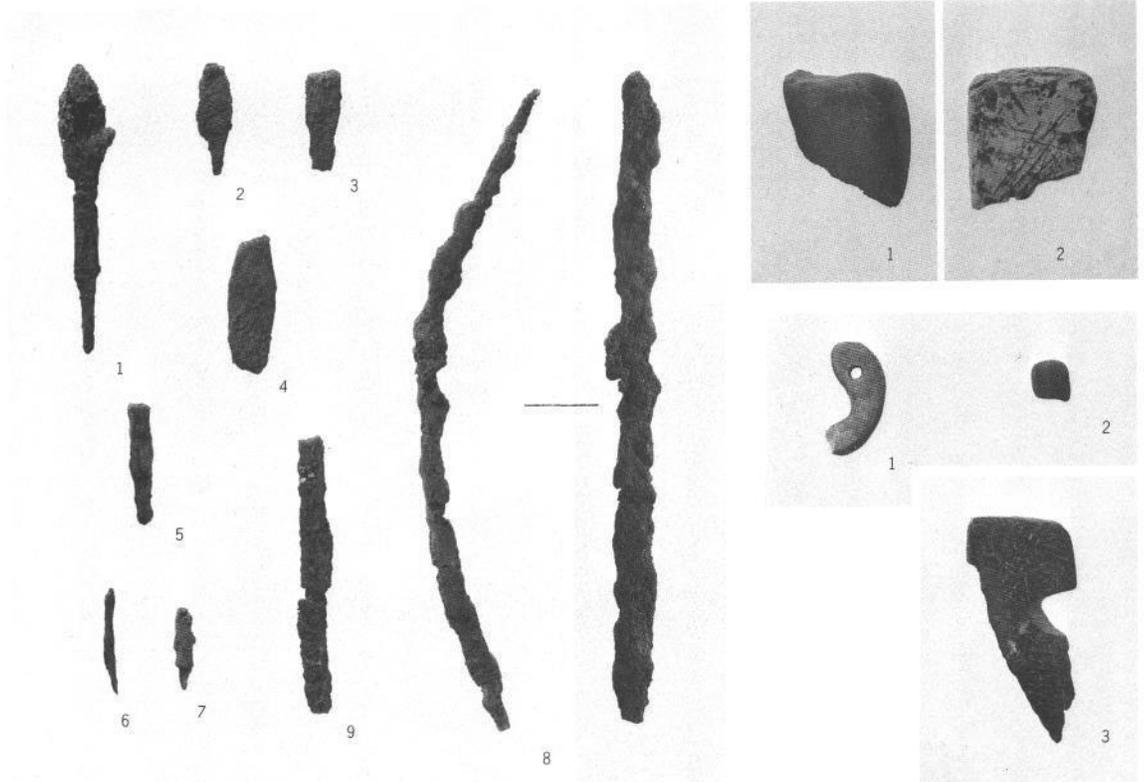
2. 塚堂古墳外濠外縁 2段に現われた葺石



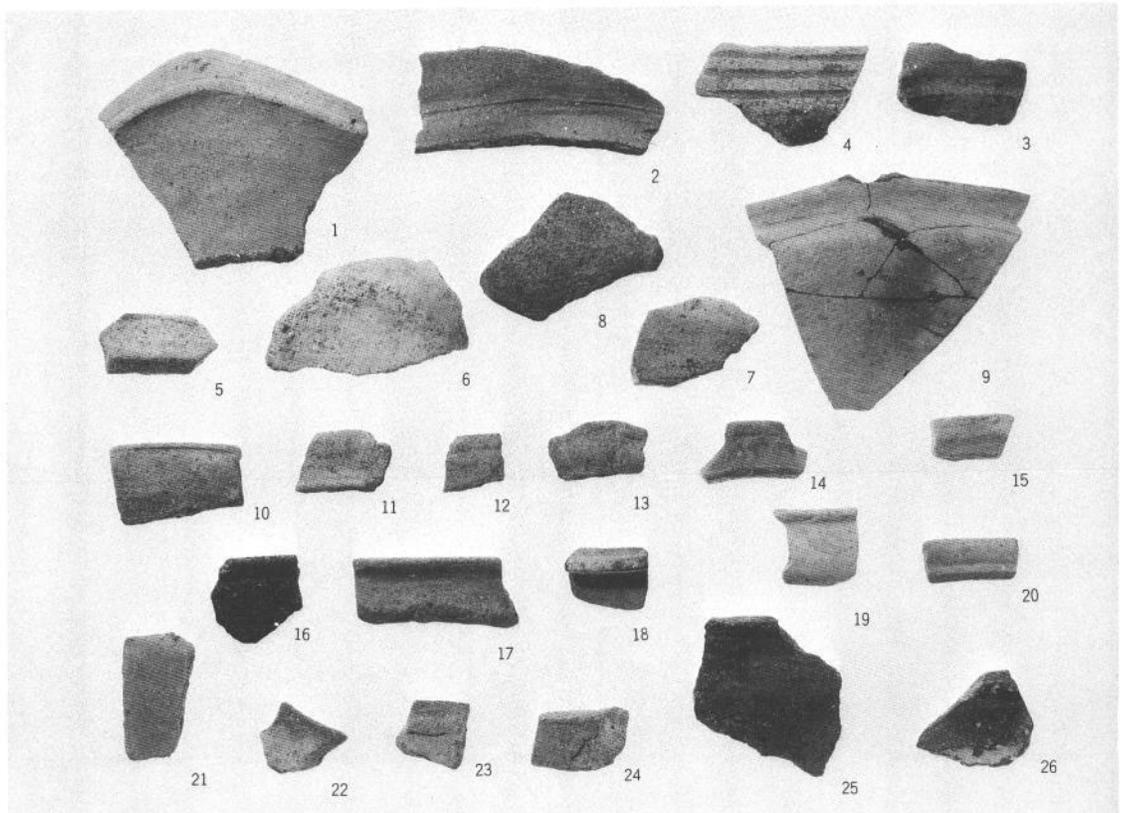
1. Cトレンチ東端での塚堂古墳前方部前縁外濠外縁（北から）



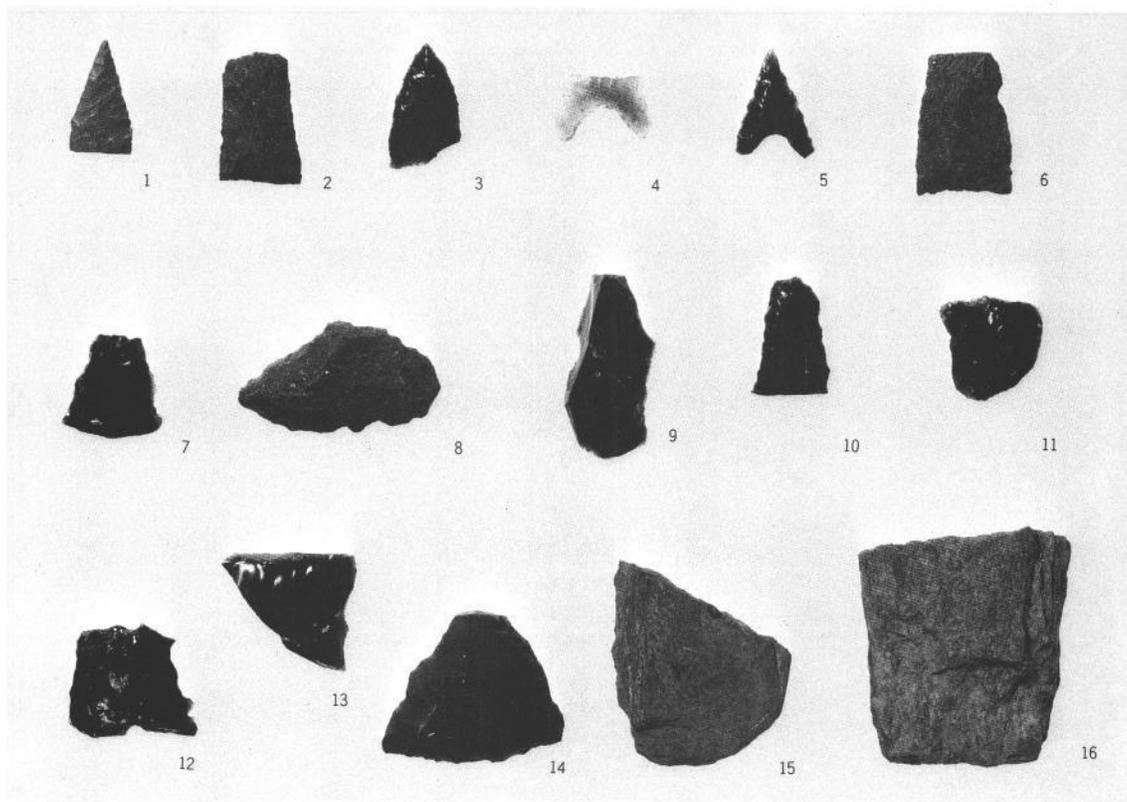
2. Dトレンチ東端での外濠外縁（北西から）



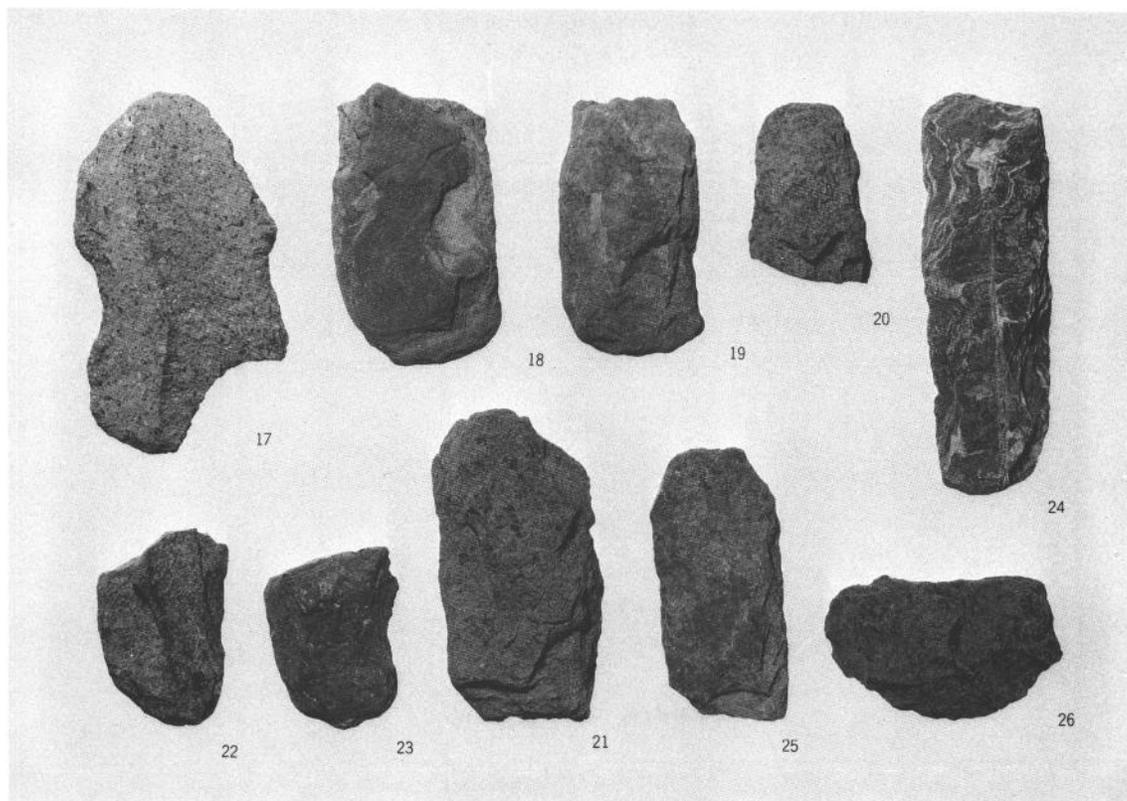
1. 鉄器・石器・玉類・石製品



2. 縄文土器



1. 縄文時代の石器 ①



2. 縄文時代の石器 ②



1. B北地区と塚堂古墳前方部（東から）



2. B北地区溝と塚堂古墳前方部前縁外濠（南から）



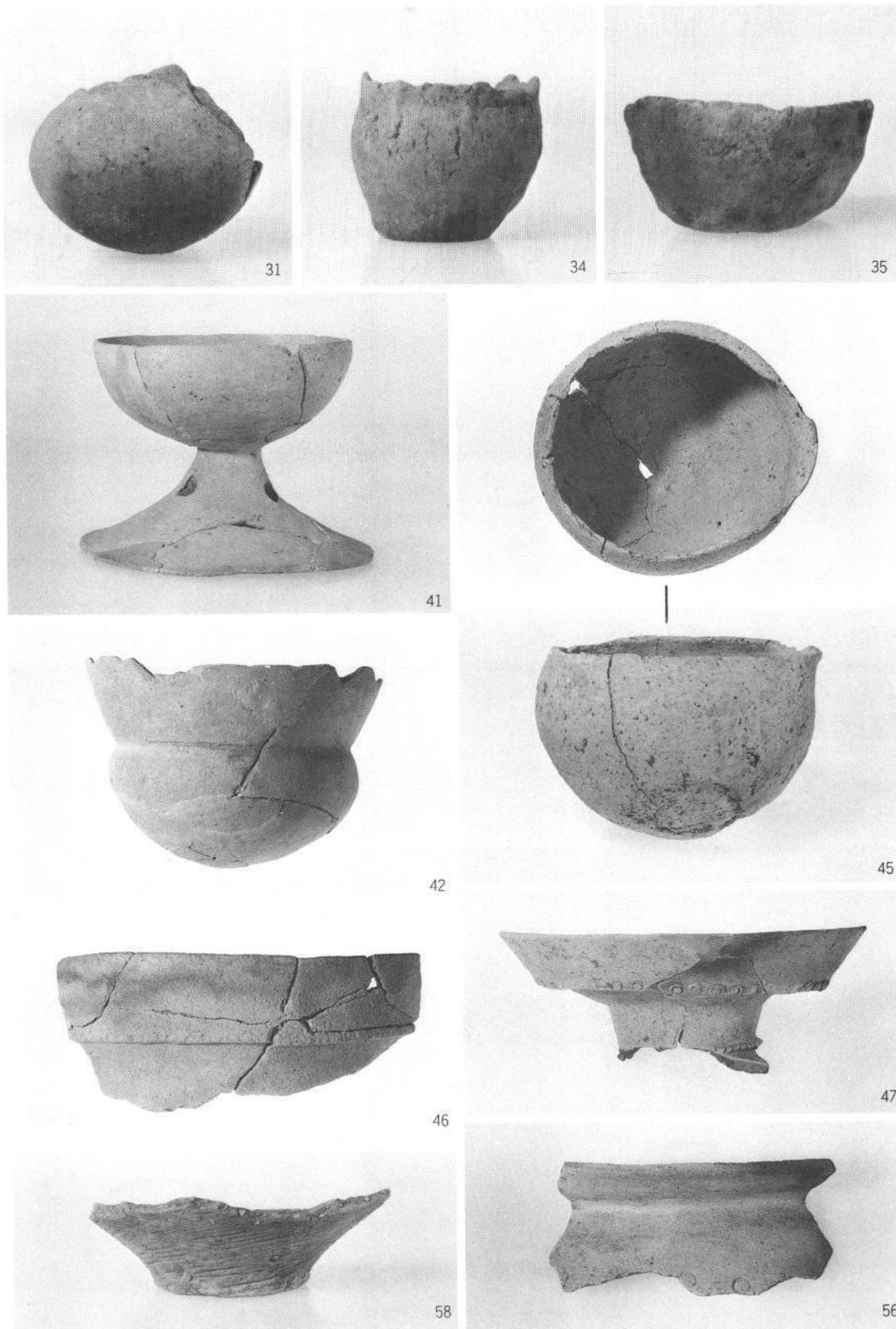
1. B北溝とトレンチ（南から、手前より1・2・3トレンチ）



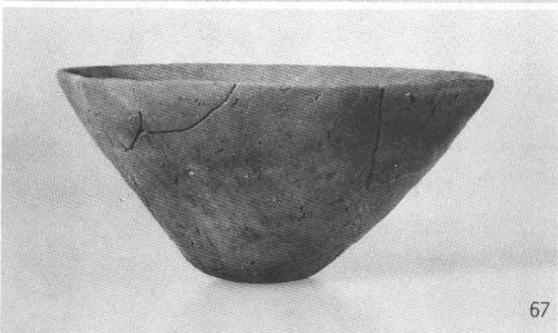
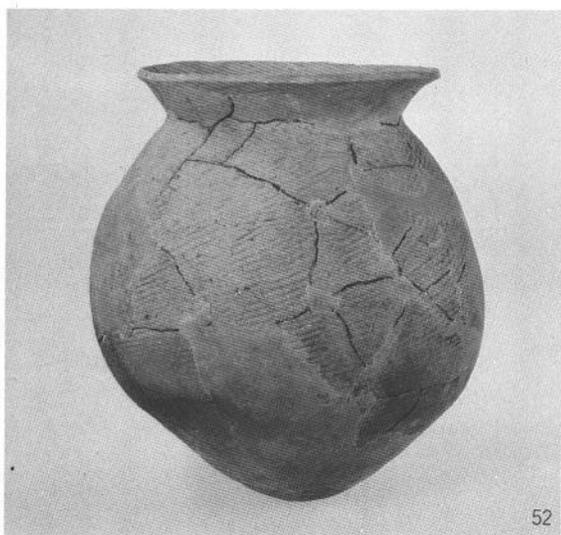
2. 2トレンチ2層での遺物出土状態（南から）



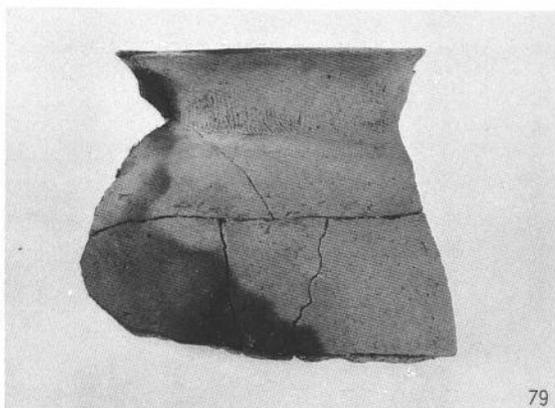
2 トレンチ出土土器 ①



2 トレンチ出土土器 ②



2 トレンチ出土土器 ③



3 トレンチ出土・表採土器



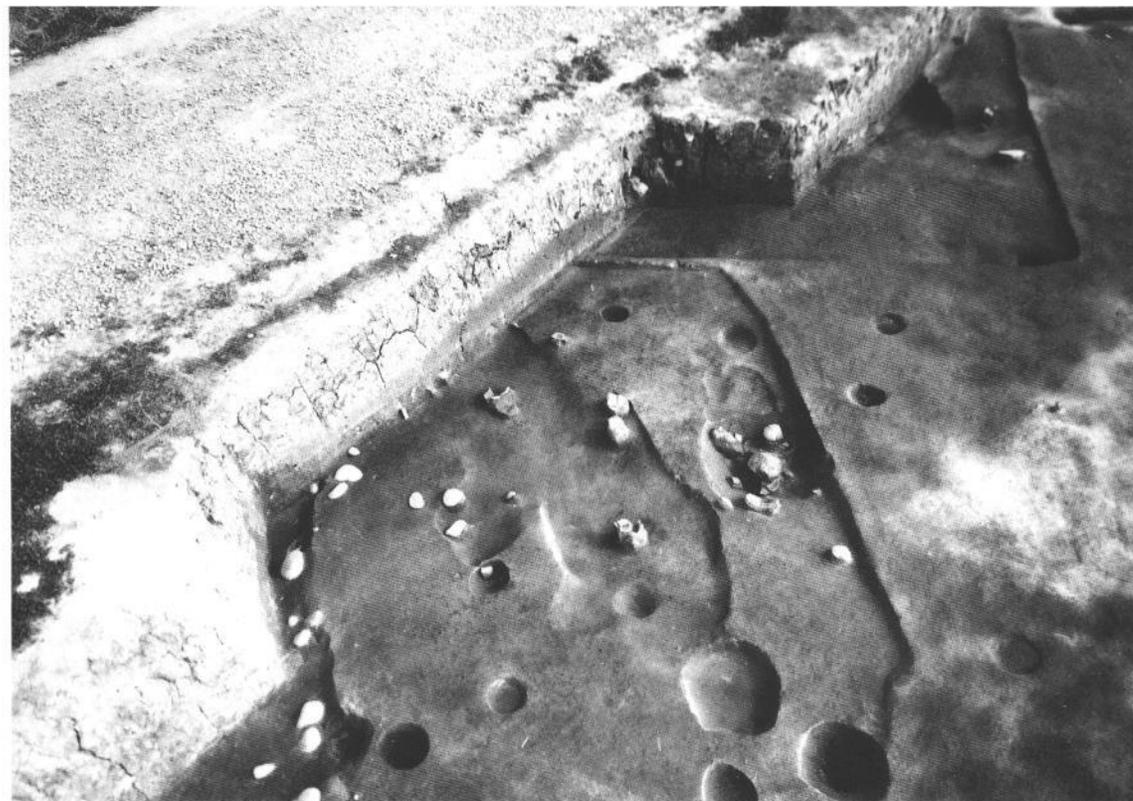
1. C地区全景（東から）



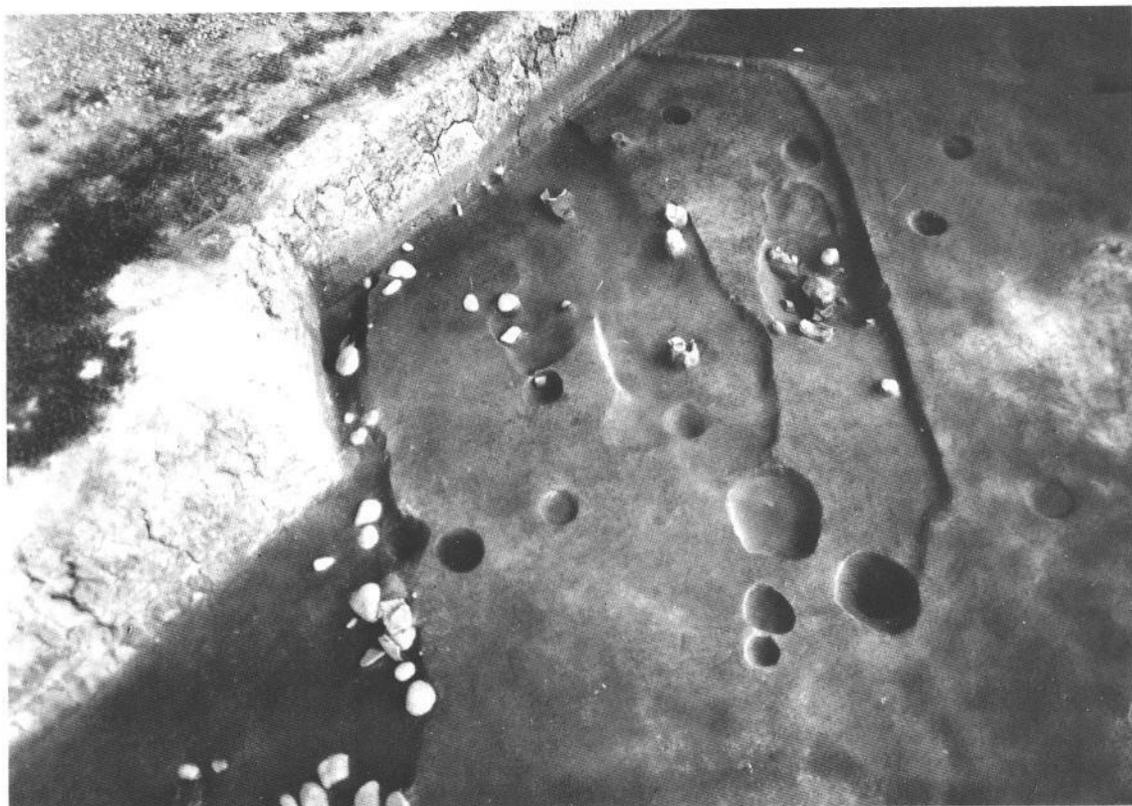
2. C地区塚堂古墳前方部南縁外濠南肩部検出状態（北から）



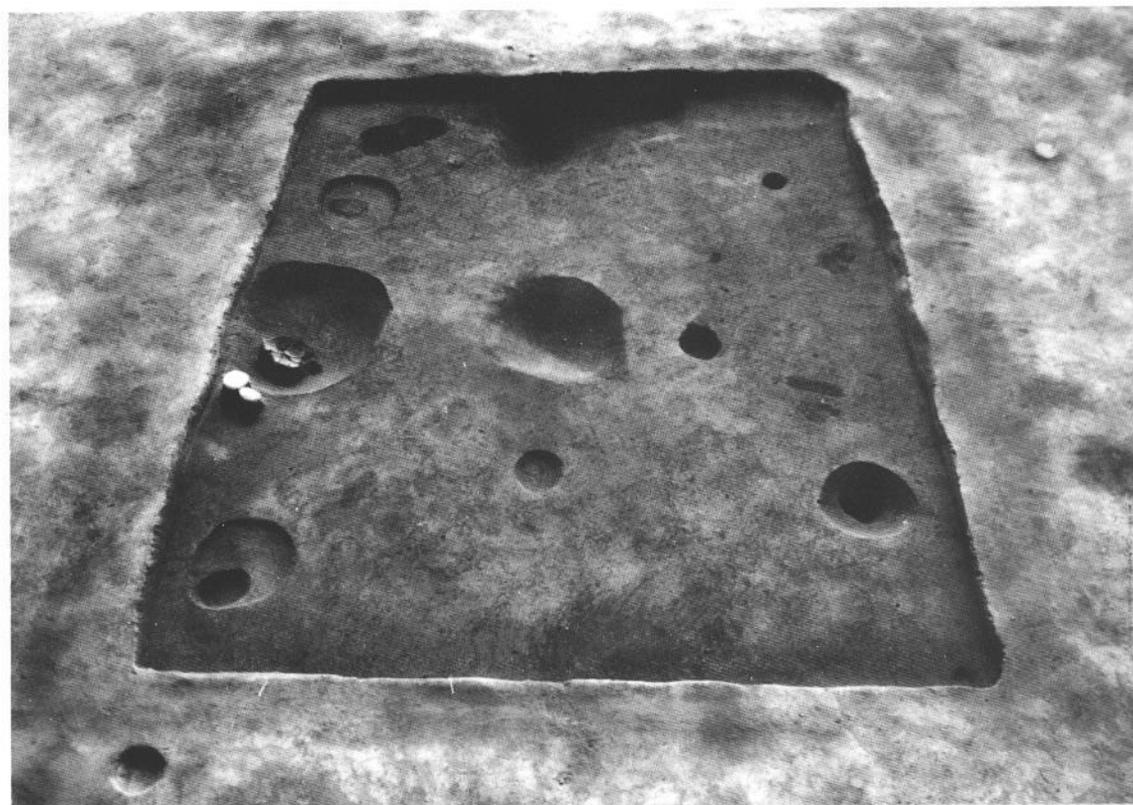
1. 1号住居跡（北から）



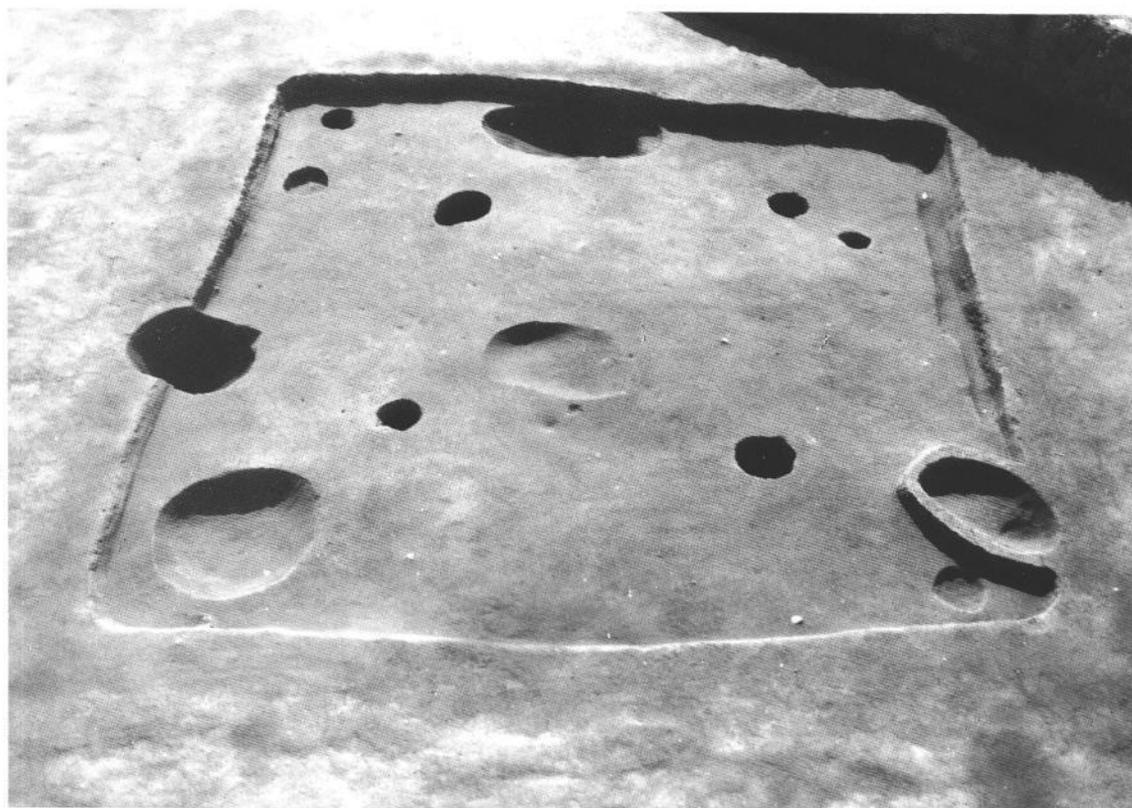
2. 2号住居跡（西から）



1. 3号住居跡（西から）



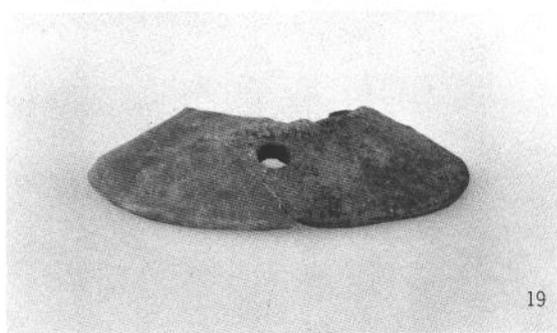
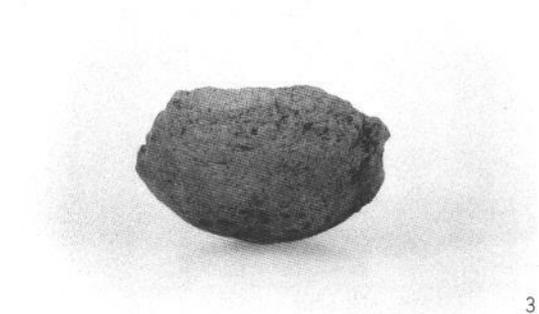
2. 4号住居跡（北から）



1. 6号住居跡（北から）



2. 8号住居跡, 1・4号溝状遺構石組状態（東から）



1号住居跡出土土器 ①



5



9



8



6



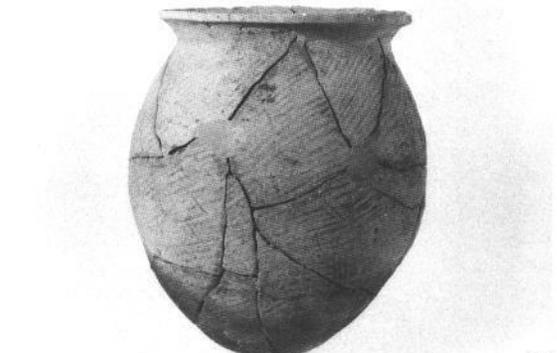
14



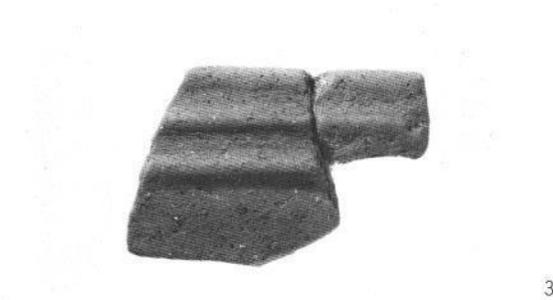
25



16



26



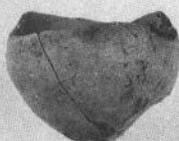
(左上) 2号住居跡・(中) 3号住居跡・(下) 4号住居跡出土土器



4号住居跡出土土器



4



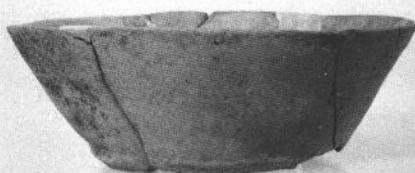
1



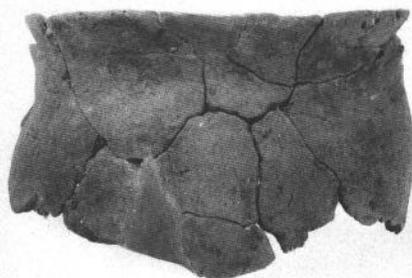
2



1



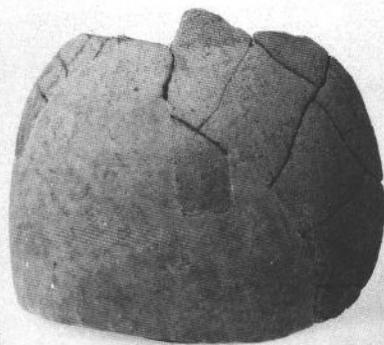
20



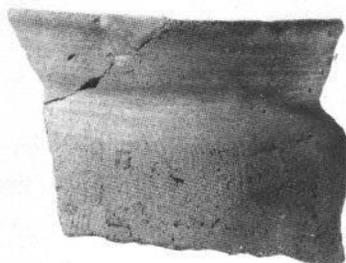
14



24



3

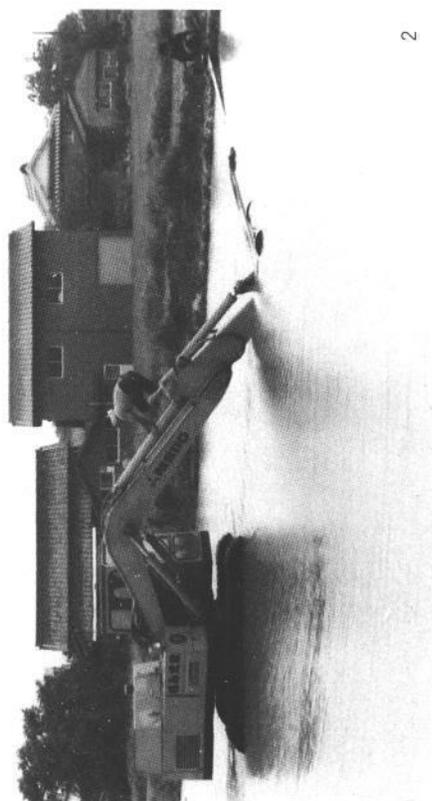


3

(上中) 6号溝状遺構・(上右) 表採・(下右) 5号住居跡出土土器、6号住居跡出土土器



入梅の折り、C地区起承転結

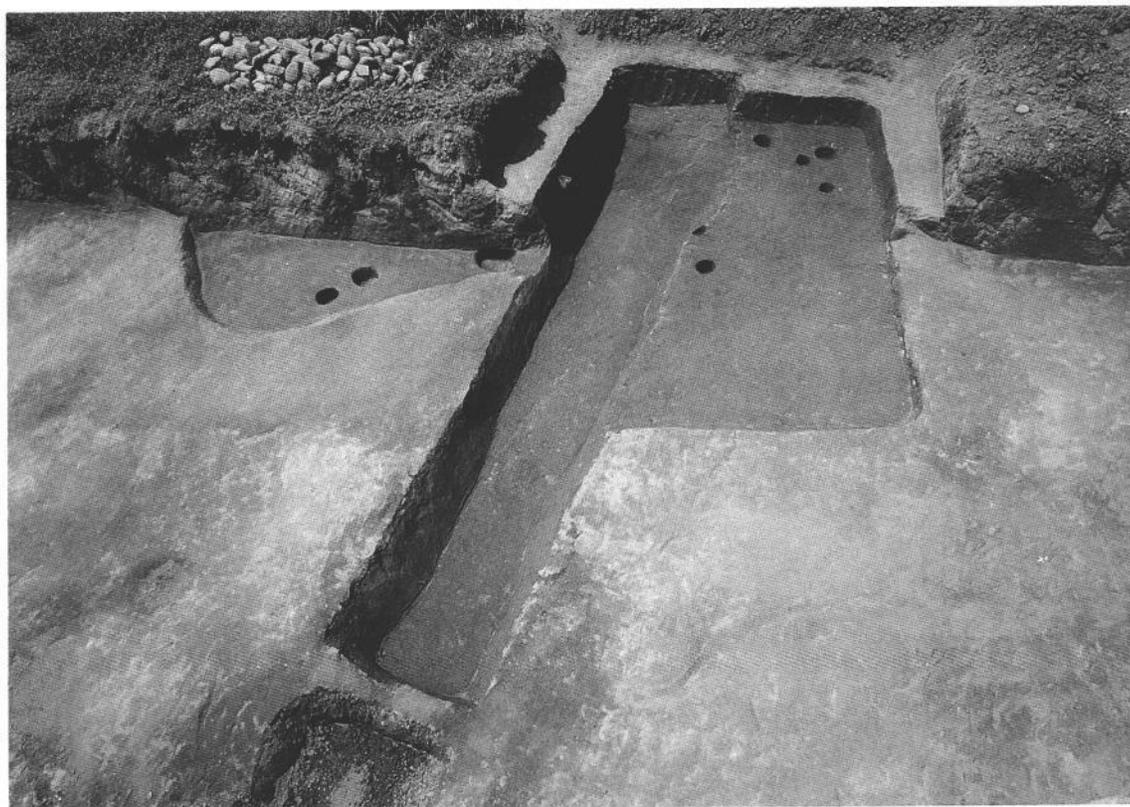


2

4



1. 塚堂古墳東地区1号住居跡（西から）



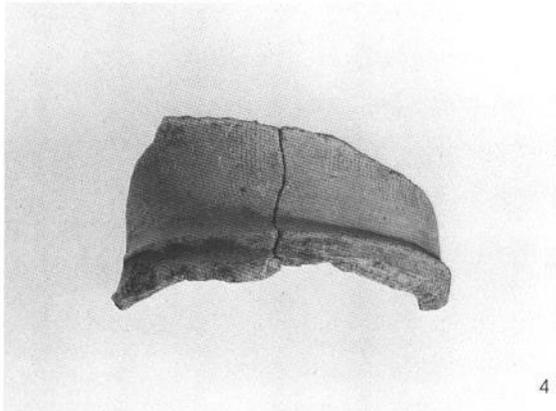
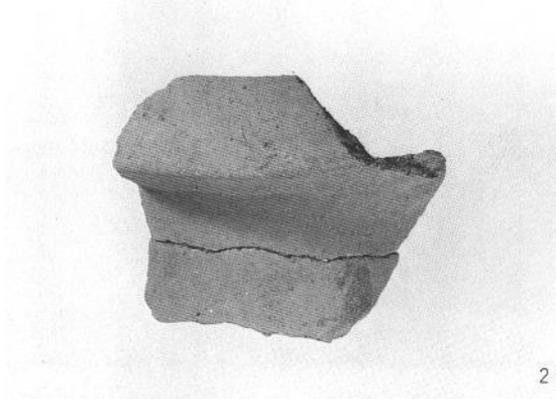
2. 2号(左)・3号(右)住居跡, 溝1 (東から)



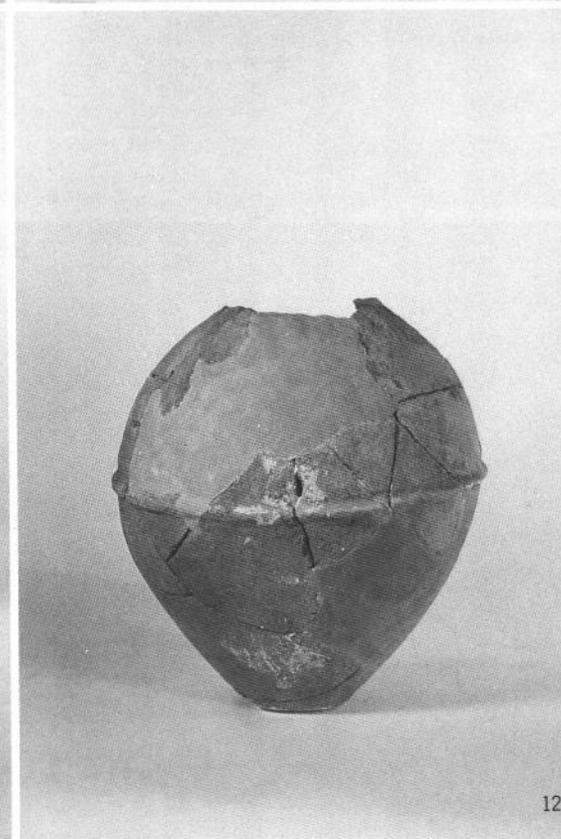
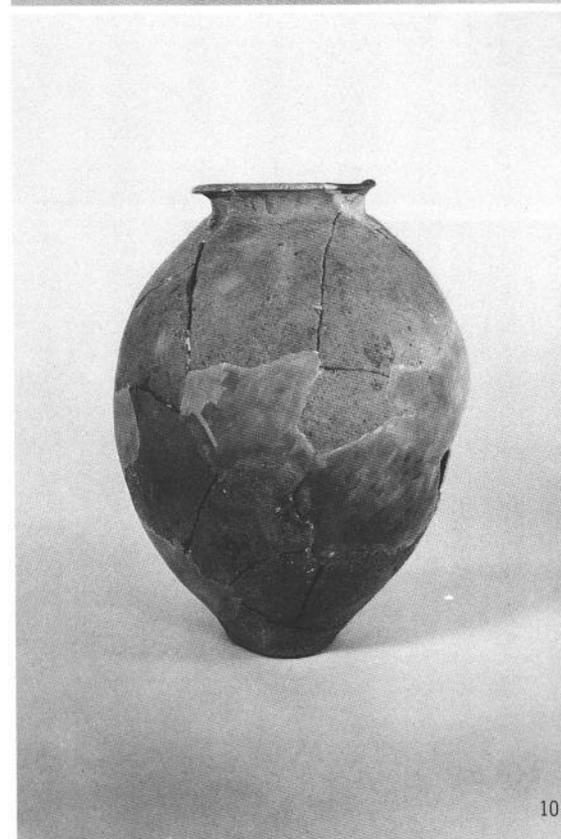
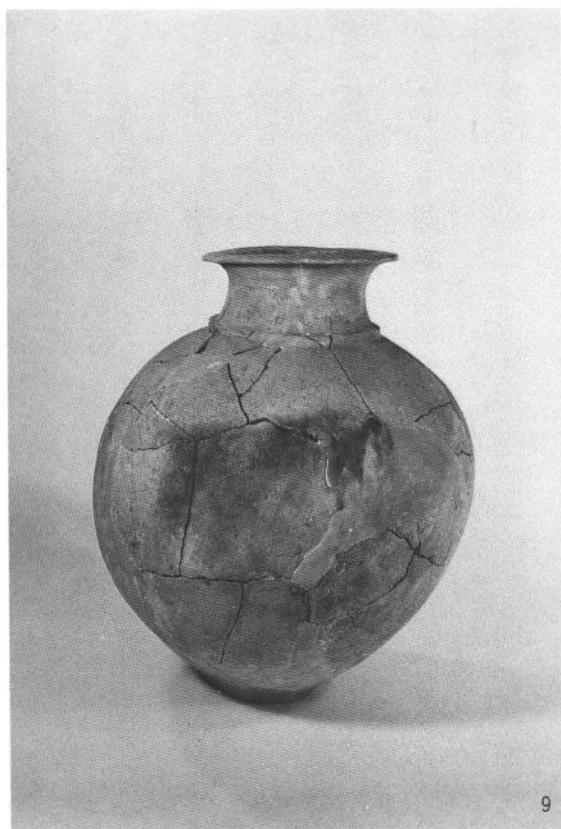
1. 1号住居跡遺物出土状態（西から）



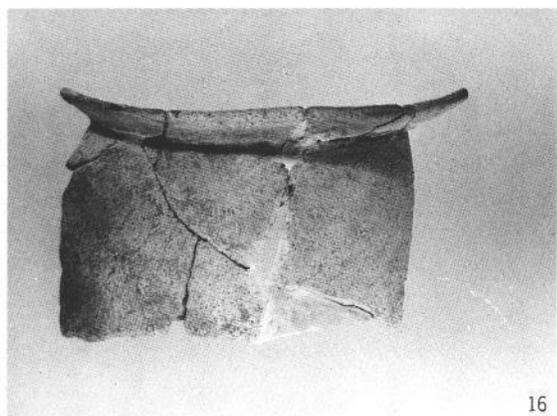
2. 1号住居跡遺物出土状態細部



1号住居跡出土土器 ①



1号住居跡出土土器 ②



16



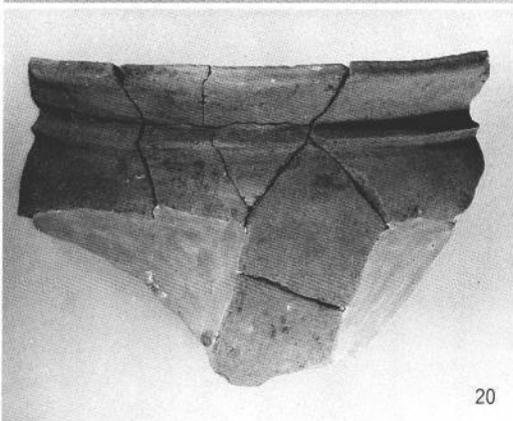
18



17



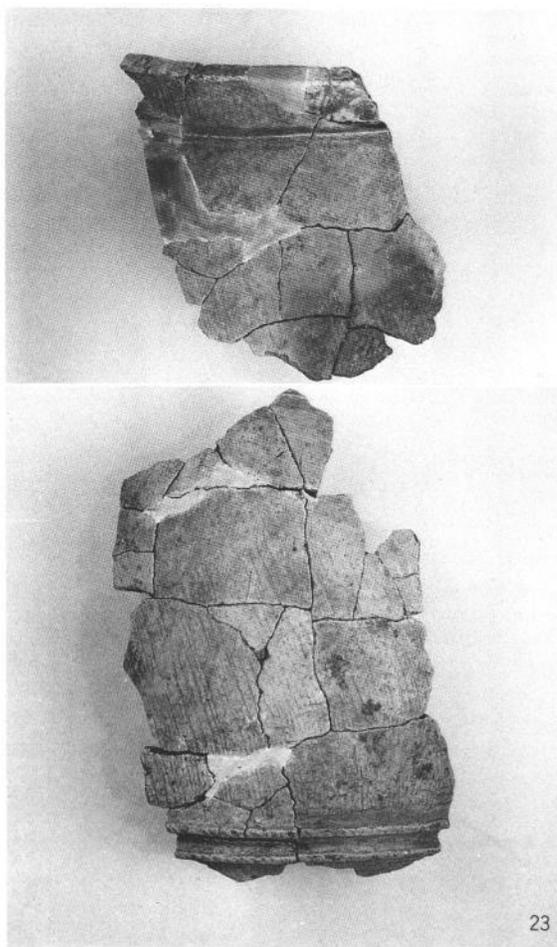
19



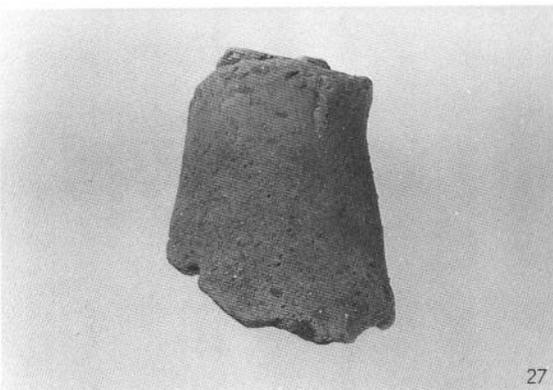
20



21



1号住居跡出土土器 ④



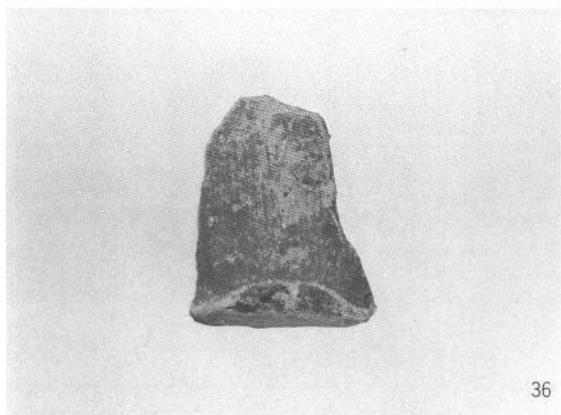
1号住居跡出土土器 ⑤



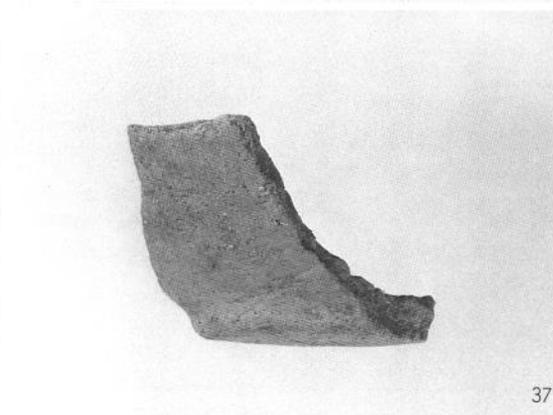
30



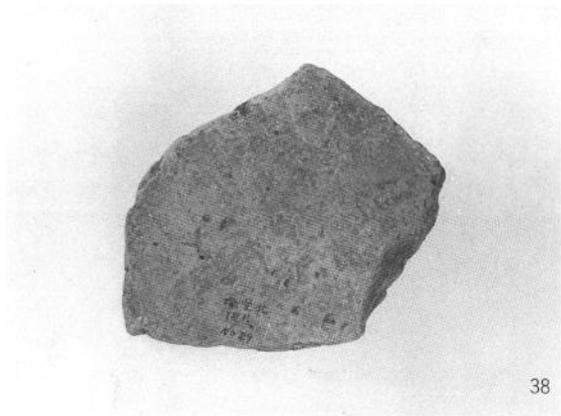
35



36



37



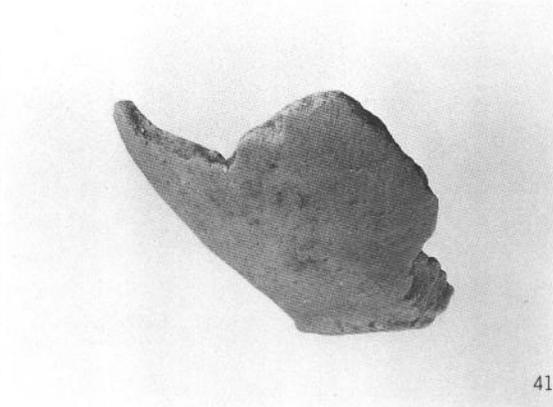
38



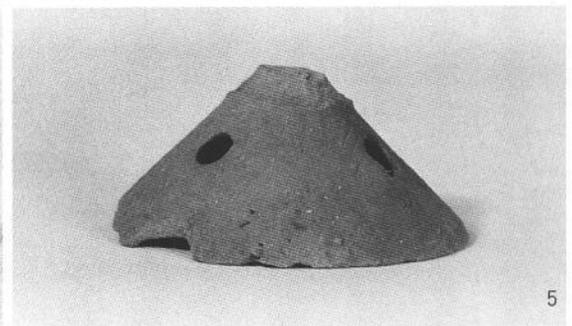
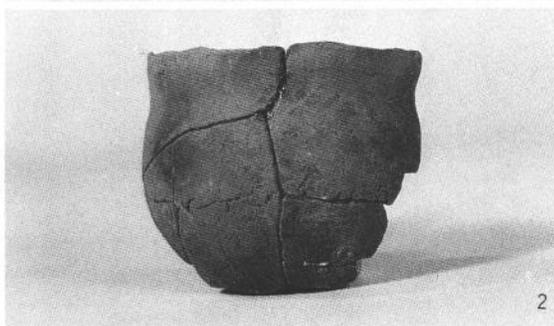
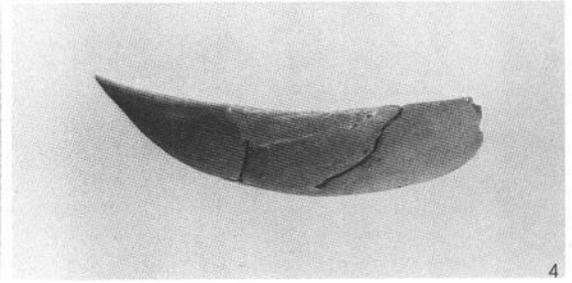
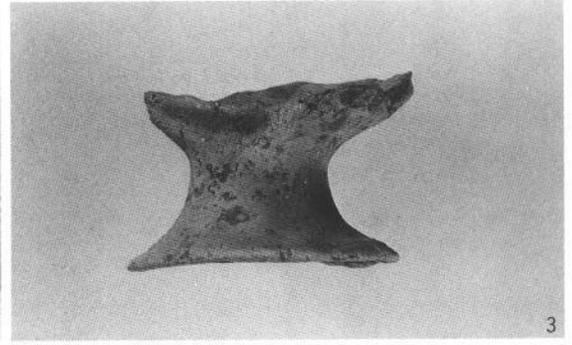
39



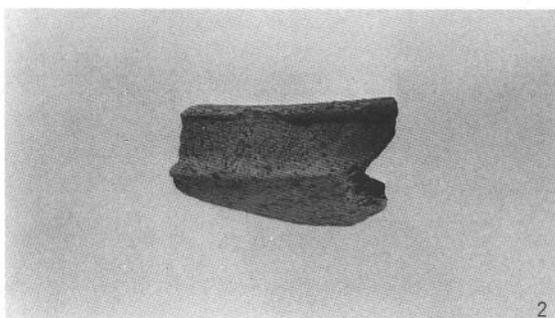
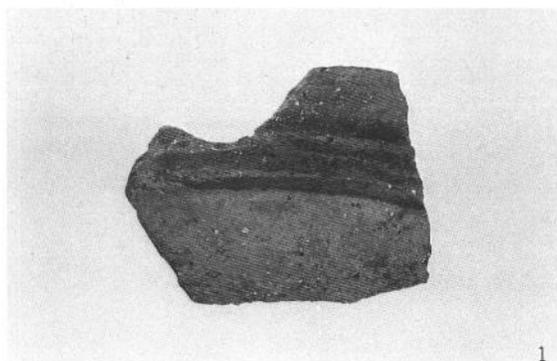
40



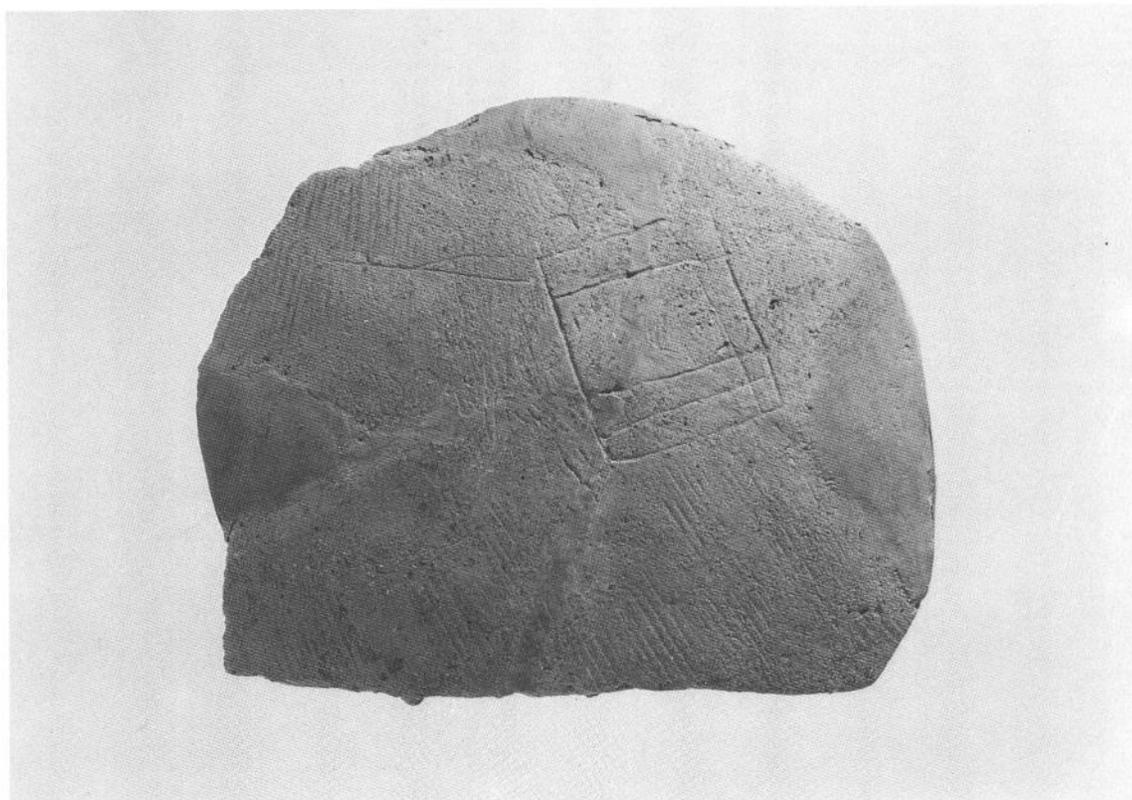
41



溝1(上), 第6トレンチ(下)出土土器



排土出土土器



1. 排土出土へら描き文土器



2. 排土出土へら描き文土器拡大



1. 塚堂古墳墳頂部の月光



2. D地区20号住居跡出土カマドから塚堂古墳を望む



塚堂古墳出土衣蓋形埴輪スケッチ(豊福 画)

浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集

つかんどう  
塚 堂 遺 跡 I

1983年 3 月 31 日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会  
福岡市博多区東公園7番7号

印 刷 西 日 本 新 聞 印 刷 株 式 有 限 公 司  
福岡市中央区天神1丁目4番1号



付図 一般国道210号線浮羽バイパス路線図と各調査地区の位置 (1/1,000)